涙を含めるさまなり。

なみだ-ぐ・む（まみむむめめ）[涙含](自、ま四) 眼に涙を含む。涙をもよほす。なかんとす。

なみだ-ごゑ[涙聲](名) なかんとする聲。なきつゝある聲。なきごゑ。

十なみだ-し・む（まみむむめめ）[涙染](自、ま四) なみだに染む。

十なみだ-たり[承泣](名) 眼の下の灸處。

なみ-た・つ（たちつつてて）[波立](自、た四) 波起こる。波生ず。

なみ-た・つ（たちつつてて）[並立](自、た四) ならびたつ。

〰なみだっぽろい[涙脆](形) 「なみだもろし」に同じ。

なみだ-ばや・し（くしくしきけれ）[涙早](形、一) ㊀涙を流しやすし。なき易し。㊁同情し易し。感動し易し。

十なみだ-もろ[涙脆](名) なみだもろきを。

なみだ-もろ・し（くしくしきけれ）[涙脆](形、一) なみだばやし。

なみ-ぢ[波路](名) ふなぢ。航路。

十なみ-と[波音](名) なみのおと。

十なみ-とう[並等](名) なみの等級。

十なみ-なと[波音](名) なみのおと。

なみ-なみ[波波](名、副) 溢(アフ)れこぼれんとするさまにいふ語。(滿滿)。

なみ-なみ[並並](名) ひととほり。世のつね。つねなみ。つね。通例。尋常。

なみ-の-しわ[波皺](名) 波のあや。波紋。

なみ-の-はな[波花](名) ㊀波の物に衝突して白く見ゆるを花にたとへいふ語。(浪華)。㊁〰食鹽の異稱。(東京の方言)。

なみ-の-ほ[波穗](名) 波のおこりあがる端末。

十なみ-ふる-ひれ[波振比禮](名) 波を起こす功ありきといふ神代の寶物。

なみ-ま[波間](名) ㊀波の間。㊁波の立たぬ間。

なみ-まくら[波枕](名) 船路の旅。

十なみ-やか[並](名) ならびつゞくを。

なみ-よけ[波除](名) ㊀波を避(サ)くるたよりとなるもの。㊁海中に築きて海波をふせぐ堤。(防波)。 ――ぐひ[波除杙](名) 波除に立てつらねたる杙(ヒク)。

十なみ-よ・る（らりるるれれ）[並依](自、ら四) ならび寄る。

なみ-ゐ[並居](名) なみゐるを。

なみ-ゐ・る（ゐゐゐるゐるゐれゐよ）[並居](自、わ上一) ならびて居る。列座す。

十な・む（まみむむめめ）[並](自、ま四) つらなる。ならぶ。

十な・む（めめむむるむれめよ）[並](他、ま下二) ならぶ。つらぬ。

な・む（めめむむるむれめよ）[嘗](他、ま下二) ㊀舌にて撫づ。ねぶる。㊁賞味す。あぢはふ。㊂經驗す。ためす。

なむ(助動) ㊀(過去の助動詞「ぬ」の變化なる「な」に未來の助動詞「む」の加はりたる語)未來を想像する意の助動詞。「行き—」。㊁願ひ望む意を表する助動詞。「行か—」。

ナム[南無](感) (梵語 Namah 又は Namo 歸命、頂禮、又は信賴と譯す)【佛】佛に祈る時冒頭に用ふる語。「—阿彌陀佛」。

なむ(助) 物事を指し示す語、「ぞ」に似て、意すこしゆるし。「かたく—ありける」。

ナム-アミダ-ブツ[南無阿彌陀佛](名) 【佛】淨土宗及一向宗にて唱(トナ)ふる六字の名號。

〰ナム-さん[南無三](名) 次條(二)に同じ。

ナム-さんぼう[南無三寶](名) ㊀【佛】佛法僧の三寶に歸依するを。㊁俄かに失錯を感じたるときにいふ語。しまった。

十な-むぢ[汝](代) 「なんぢ」に同じ。

ナム-めうほふれんげきやう（—ミヨウホウ—ゲキヤウ）[南無妙法蓮華經](名) 【佛】日蓮宗にて唱(トナ)ふる七字の題目。

十なめ[臁脊](名) 馬具「はだつけ」に同じ。

十なめ[白痢](名) 痢病の古稱。

なめ[綬面](名) 錢の裏の文字なくして滑(ナメ)かなる部分。

なめ-くぢ[蛞蝓](名) 【動】腹足類中有肺類に屬する軟體動物、濕陰濕の地に棲息す、介殼無く、灰色にして兩角あり、物に進(ハ)へば粘液の痕跡を殘留す。(括胎蟲、土蝸)。

なめ-くぢら[蛞蝓](名) 【動】前條に同じ。(關西地方の方言)。

なめ-し[菜飯](名) 菜・大根の葉などを刻み入れ、味をつけて炊(タ)きたる飯。

十なめ・し（くしくしきけれ）[無禮](形、一) ぶれいなり。あやなし。

なめし-がは（—ガワ）[革](名) なめしたる皮。つくりがは。(滑革、韋革)。

なめ・す（さしすすせせ）[鞣](他、さ四) 毛皮の毛と脂とを去りて柔かくなす。

なめ-ず・る（らりるるれれ）[舐](他、ら四) 舌にて度々脣をねぶる。

なめ-て[並](副) 「なべて」に同じ。

なめ-もの[嘗物](名) 「ひしほ」の異稱。

なめ-らか[滑](名) ㊀摩擦なくしてよくすべるを。すべ〳〵するを。つる〳〵するを。㊁澁滯せずしてよく通ずるを。よどみなきを。つかへざるを。「辯舌—なり」。

十な-めり(助動) (「なるめり」の略)なんめり。であり。「見れ—」。

なめ・る（らりるるれれ）[滑](自、ら四) すべる。

〰な・める（めめめるめるめれめろ）[嘗](他、ま下一) ㊀「なむ」に同じ。㊁私かに目下の女に通ず。㊂のむ。あなどる。

ナモ[南無](感) 「ナム」に同じ。

十な-も(助) 「なむ」に同じ。「戀しきことのかぎりに—ありける」。

なもみ(名) 【植】蒼耳(ヲナモミ)及豨薟(メナモミ)を合したる稱。

な-や[魚屋](名) さかなや。

な-や[納屋](名) ものおきごや。ものおき。

十なや-らや[諾否](名) いやおうの返辭。

なや・す（さしすすせせ）[萎](他、さ四) なゆるやうにす。

なやま・し（しくしくしきしけれ）[惱](形、二) くるし。つらし。わづらはし。

なやま・す（さしすすせせ）[惱](他、さ四) 思ひわづらはす。痛め苦しむ。なやましむ。

なやみ[惱](名) ㊀思ひわづらふを。思ひみだるゝを。㊁やまひ。病氣。

なや・む（まみむむめめ）[惱](自、ま四) ㊀思ひわづらふ。思ひみだる。㊁いたみ苦しむ。やむ。

〰なやめる(他) 「なやむ」の訛。

十なや-らか(名) なよ〳〵してあるを。

十なやらひ（—ヤライ）[追儺](名) まめまき。つゐな。おにやらひ。

十なやら・ふ（はひふふへへ）[追儺](自、は四) なやらひを行ふ。

な・ゆ（ええゆゆるゆれえよ）[萎](自、や下二) ㊀しをる。しなゆ。㊁力失(ウ)せて利(キ)かず。はたらき衰へてすたる。(痿)。

十な-ゆ-たけ[萎竹](名) 「なよたけ」に同じ。

十な-ゆみ[細弓](名) 古昔、鼠を射るに用ひし一種の裝置。(檻弓)。

な-よし[名吉](名) 【動】「いな」に同じ。

な-よせ[名寄](名) 名所の名を寄せあつめたるもの。

なよ-たけ[弱竹](名) なよやかなる竹。又、わかさ竹、

なよ-なよ(名、副) ㊀なえてよわ〳〵しきさまにいふ語。㊁しなやかなるさまにいふ語。

十なよび-か(名) なよびたるさま。 ――すがた(名) なよびたるすがた。

十なよ・ぶ（びびぶぶるぶれびよ）(自、は上二) ㊀なえたるさまなり。㊁しなやかなり。

十なよ-めか・し（しくしくしきしけれ）(形、二) なよ〳〵としてあり。なよやかなり。

十なよ-やか(名) なよめかしきを。

十なよ・る（らりるるれれ）[馴寄](自、ら四) なじみよる。

なら[楢](名) 【植】殼斗科に屬する木、葉は長倒卵形にして長さ四五寸、緣邊に鋸齒を有し下面に灰白色の細毛密生す、種子は食用に樹皮は染料に供せられ、木材は薪炭又は香蕈を作る料に用ひらる。こばうそ。なが〴〵し。(柞、枹)。

十なら[屁](名) へ。おなら。

ナラク[奈落](名) ㊀【佛】(梵語 Naraka)地獄。㊁芝居の舞臺の下に設けたる穴、舞臺の足音をよく響かすためのもの。 ――のそこ[奈落底](名) ㊀地獄のそこ。㊁そこひの知れぬふかき所。九地の下。㊂浮ぶ瀨のなき所。

十なら-く(助動) 「なり」の延言、副詞の如く用ふ。「聞く—」。「言ふ—」。

なら-ざらし[奈良晒](名) 麻布の上品なるものにして、大和國奈良地方より產出す、苧(カラムシ)の纖維にて織り、灰にて煮(ニ)て晒(サラ)したるもの。

十ならし[鏟](名) 木を削りて平かにする具。せん。

ならし[馴](名) なれしむるを。なるゝやうにするを。ならすを。

ならし[平](名) ならすを。平均にするを。

ならし[平](副) すべてを平均して。ならして。

十なら-し(助動) 「なるらし」の約言。

十なら-しば-どり[楢芝鳥](名) 【動】鷹の異稱。

なら・す（さしすすせせ）[平](他、さ四) ㊀高低凸凹のなきやうにす。たひらかにす。㊁多少大小を合して其中を取る。

なら・す（さしすすせせ）[馴](他、さ四) なるゝやうにす。なれしむ。

なら・す（さしすすせせ）[鳴](他、さ四) ㊀音聲を發せしむ。鳴るやうにす。「笛を—」。㊁弘く知らしむ。あまねく聞こえさす。「罪を—」。㊂評判を取る。はゞを利(キ)かす。「一時はならしたもの」。㊃說く。語る。「不平を—」。

なら・す（さしすすせせ）[生](他、さ四) 果實を結ばしむ。

なら-ず-もの(名) ㊀一定の職業なく、常に放浪して惡行をなすもの。ごろつき。無賴漢。(破落戸)。㊁よく惡事をたくらむもの。わるもの。

なら-ちやがゆ[奈良茶粥](名) 次條に同じ。

なら-ちやめし[奈良茶飯](名) (大和國奈良の東大寺・興福寺等にて炊(ク)き初めたるよりいふ)大豆・小豆・栗などを加へたる茶飯。

なら-づけ[奈良漬](名) (大和國奈良より製し出だせるより此名あり)一種の食品、酒糟になほしの燒酎を加へて瓜又は大根などを漬(ツ)けたるもの。

なら-てう（—チヨウ）[奈良朝](名) 和銅三年に元明天皇が大和國平城(現今の奈良は其一隅なり)に遷都したまひしより、延曆十三年に桓武天皇が山城國平安城(今の京都)に遷都したまひたる迄の稱、當時韓・唐との交通又は佛法の興隆等につれて、我國の文化・藝術は大いに進捗したり。

ならにんぎやう（ヨウギ）[奈良人形]（名） 大和國奈良にて作り出す人形、春日の社の舊材を用ひて彫刻し、種々の彩色を施せるもの、緒を通はす穴ありて、多くは根附とす。

なら-の-しち-だい-じ [奈良七大寺]（名） 大和國奈良地方にある七個の大寺、即ち東大寺・西大寺・法隆寺・藥師寺・大安寺・元興寺・興福寺の稱。

卄**なら-の-は-がしは**（ガシハ） [楢葉柏]（名） 楢の木の葉。

⌒**ならはかす**（ナラハカス） 〔さしすすせせ〕 [習]（他、さ四） 「ならはす」に同じ。

ならはし（ナラワシ） [習]（名） ㊀ならはすこと。なれしむること。㊁しきたり。ならひ。ふうぎ。風習。卄——**もの** [習物]（名） ならはしによりてかはるもの。「心をば——といふなれど」。

ならは-す（ナラハス） 〔さしすすせせ〕 [習]（他、さ四） ㊀くりかへして修め行はしむ。㊁學ばしむ。㊂馴れしむ。

⌒**ならはせる**（他） 「ならはす」の訛。

卄**ならば-ふ**（ナラバウ） 〔はひふふへへ〕 [並]（自、は四） 「ならぶ」の延言。

ならひ（ナライ） [習]（名） ㊀ならふこと。㊁ならはし。しきたり。風習。習慣。㊂世の常態。つね。きまり。——**せい と なる** [習與性成] ならひは遂に其人の性質をも變化す。ならひつゝ行けば、遂に性質となる。

⌒**ならひ**（ナライ）（名） 東北の風。（關東の方言）。

ならび [並]（名） ㊀ならぶこと。又、ならびたるさま。なみ。つら。れつ。㊁たぐひ。比類。

ならび-おこ-る 〔らりるるれれ〕 [並起]（自、ら四） きそひておこる。つゞきておこる。（併起）。

ならび-かた [並方]（名） ならびたるさま。

ならび-こま-す（ナラヒ） 〔さしすすせせ〕 [習込]（他、さ四） ならひこむやうにしつく。

ならひ-こ-む（ナラヒ） 〔まみむむめめ〕 [習込]（他、ま四） 十分にならひ覺ゆ。ならひてよく熟練す。

ならび-な-し（くしきけれ） [並無]（形、二） ならぶべきものなし。たぐひなし。比類なし。（無雙）。

ならび-に [並、併]（接） 相ならぶ上下の物事を連接する語。および。かつ。また。

ならび-やう（ヤウ） [並樣]（名） ならびかた。

なら-ふ（ナラウ） 〔はひふふへへ〕 [倣]（自、は四） 從ひて行ふ。まねてなす。

なら-ふ（ナラウ） 〔はひふふへへ〕 [習]（他、は四） ㊀くりかへして修め行ふ。しば〳〵なす。㊁敎へを受く。まなぶ。

なら-ぶ 〔ばびぶぶべべ〕 [並]（自、ば四） ㊀つゞく。つらなる。列をなす。列を作る。なむ。（列）。㊁匹敵す。比類す。たぐふ。（比）。

なら-ぶ 〔べべぶぶるぶれべよ〕 [並]（他、は下二） ㊀ならばしむ。なむ。つらぬ。ついづ。（併）。㊁たくらぶ。くらぶ。（比）。㊂のぶ。いふ。「ごたくを——」。

ならべ [並]（名） ならぶること。又、ならぶるさま。——**かた** [並方]（名） ならぶる仕方。ならべたるさま。——**やう**（ヤウ） [並樣]（名） 前條に同じ。

⌒——**る**（他） 「ならぶ」の訛。

なら-ほふし（ホーシ） [奈良法師]（名） 古昔、奈良の興福寺・東大寺などにやしなひおきし僧兵。

なら-ぼり [奈良彫]（名） 彫刻の一派、最も花鳥などに巧（タク）なるもの、奈良宗貞を祖とす。

なり [形]（名） ㊀さま。かたち。狀態。㊁みえ。よそほひ。服裝。

卄**なり** [業]（名） なりはひ。仕事。

なり [鳴]（名） ㊀なること。㊁こゑ。おと。

⌒**なり** [爲]（名） 將棊にて、金以外の駒が敵の陣地に入りて金の資格を得たること。又、其駒。

⌒**なり** [生]（名） 果實のなること。

⌒**なり**（名） かたゐ。癩病。

なり 〔らりりるれれ〕 [也]（助動） （「にあり」の約） 事物を指定し又は解說する語。である。「これ——」「命の親——」。

なり [也]（助動） 動作をいひ終（ヲ）はりて物を摘へ詠歎の意を表する語。「笛の音聞こゆ——」。

なり [也]（助） にても。でも。「首——命——御隨意に」。

なり-あがり [成上]（名） ㊀なりあがること。（立身、出世）。㊁なりあがりたるもの。——**もの** [成上者]（名） なりあがりたる人。なりあがり。

なり-あが-る 〔らりるるれれ〕 [成上]（自、ら四） 貧賤より富貴となる。出世す。立身す。なりさがるの對。

卄**なり-あ-ふ**（アウ） 〔はひふふへへ〕 [成合]（自、は四） 成りとゝのふ。

なり-い-づ 〔でづづるづれでよ〕 [成出]（自、だ下二） ㊀出世す。立身す。昇進す。㊁うまれ出づ。生出す。

卄**なり-お-と-る** 〔らりるるれれ〕 [成劣]（自、ら四） 漸次に劣り行く。

なり-かかり [爲掛]（名） なりかゝること。又、其物。

なり-かか-る 〔らりるるれれ〕 [爲掛]（自、ら四） 化して其物とならんとす。

卄**なり-かか-る** 〔らりるるれれ〕 [鳴掛]（自、ら四） 呼びかけていひさわぐ。

なり-かたち [形姿]（名） みえ。ふり。みなり。

なり-かは-る（ワル） 〔らりるるれれ〕 [成代]（自、ら四） 其人に代はる。代理す。「親に——」。

なり-かぶら [鳴鏑]（名） 「かぶらや」に同じ。

⌒**なり-くだもの** [生果物]（名） 「くだもの」に同じ。（東京の方言）。

なり-さがり [成下]（名） ㊀なりさがること。（零落、墮落）。㊁なりさがりたるもの。

なり-さが-る 〔らりるるれれ〕 [成下]（自、ら四） 富貴より貧賤となる。零落す。墮落す。なりあがるの對。

なり-すがた [形姿]（名） なりかたち。

卄**なり-そ-ふ**（ソウ） 〔はひふふへへ〕 [成添]（自、は四） 他より物事そひ加はる。

なり-たち [成立]（名） ㊀なりたつこと。㊁なりたちたる過程。㊂成分。要素。

なり-た-つ 〔たちつつてて〕 [成立]（自、た四） ㊀成就す。できあがる。なる。㊁生出す。なりいづ。いづ。

なり-つまど [鳴妻戸]（名） あけたてに音のする妻戸。

卄**なり-どころ**（名） ㊀財物の產出する所。㊁しもやしき。別莊。

なり-とゝの-ふ（トトノウ） 〔はひふふへへ〕 [成調]（自、は四） できあがる。なる。

なり-なん-と-す 〔せしすするすれせよ〕 [亟]（自、さ變） 將にならんとす。將に及ばんとす。なんなんとす。（向）。

なり-のぼ-る 〔らりるるれれ〕 [成上]（自、ら四） 「なりあがる」に同じ。

なり-はず [鳴弭]（名） 弓射るとき鳴るやうにしたる弭。

なり-はため-く 〔かきくくけけ〕（自、か四） なりひゞく。なりわたる。

なり-は-つ 〔てつつるつれてよ〕 [成果]（自、た下二） うつりゆきてをはりとなる。なりゆきてはてとなる。

⌒**なり-はてる**（自） 「なりはつ」の訛。

なり-はひ（ワイ） [生業]（名） ㊀よすぎ。渡世。生活。㊁すぎはひ。家業。職業。

卄**なり-ひさご** [生瓠]（名） 【植】「ひさご」に同じ。

なり-ひゞ-く 〔かきくくけけ〕 [鳴響]（自、か四） ㊀鳴る聲あまねく聞こゆ。ひゞき諸方に聞こゆ。㊁名聲あまねく聞こゆ。名高くあり。

なり-ふり [形振]（名） ㊀みなり。みえ。すがた。㊁世間のもやう。他のふりあひ。

なり-まさ-る 〔らりるるれれ〕 [成優]（自、ら四） 次第に盛るやうになりゆく。まさりゆく。

なり-もの [鳴物]（名） 音樂に用ふる鐘・太鼓・弦器などの總稱、即ち、樂器。——**いり** [鳴物入]（名） 歌舞などに、鳴物をならして調子をとり又はにぎはすこと。——**ちやうし**（チヤウシ） [鳴物停止]（名） 「ちやうじ（停止）（二）」に同じ。

なり-もの [生物]（名） ㊀田畠の收穫。㊁食用となる果實。——**のき** [生物樹]（名） 果實を結ぶ樹木。果樹。

卄**なり-や** [鳴矢]（名） かぶらや。

なり-ゆき [成行]（名） なりゆく過程。又、なりゆく結果。

なり-ゆ-く 〔かきくくけけ〕 [成行]（自、か四） 次第に移り行く。漸次に進み行く。

⌒**なりん-ぼう**（ボー）（名） 癩病やみの人をあざけりていふ語。

なり-わた-る 〔らりるるれれ〕 [鳴渡]（自、ら四） ㊀鳴る聲あまねく聞こゆ。㊁名聲あまねく聞こゆ。

な-る 〔らりるるれれ〕 [生]（自、ら四） ㊀實を結ぶ。みのる。「蜜柑が——」。㊁おひ出づ。生出す。

な-る 〔らりるるれれ〕 [成]（自、ら四） ㊀できあがる。しあがる。（就）。㊁をはる。すむ。（濟）。㊂さだまる。きまる。㊃とゝのふ。そろふ。（調）。㊄あらはる。生ず。㊅御出あらせらる。㊆堪（タ）ふるを得。「奴等に振き廻されて——ものか」。㊇志を遂ぐるを得。「——とならぬとはさておいて」。

な-る 〔らりるるれれ〕 [爲]（自、ら四） ㊀變化す。あらたまる。かはる。うつる。「善く——」。㊁將棊にて、金以外の駒が敵の陣地に入りて金の資格となる。

な-る 〔らりるるれれ〕 [鳴]（自、ら四） ㊀音たつ。音發す。㊁聞こゆ。知らる。「世に——」。㊂しやべる。いふ。「よく——口」。

な-る 〔れれるるるれれよ〕 [馴]（自、ら下二） ㊀親しみなつく。なじみ從ふ。㊁使用に適す。もちひに堪（タ）ふ。㊂久しく使用してふるぶ。

な-る 〔れれるるるれれよ〕 [狎]（自、ら下二） ㊀なじみたはむる。したしみあざる。㊁あなどる。かろんず。㊂けがる。よごる。（汚）。

な-る 〔れれるるるれれよ〕 [慣]（自、ら下二） ㊀常態となる。習慣となる。くせになる。㊁しば〳〵其物事に接す。たび〳〵其境遇に會す。

な-る 〔れれるるるれれよ〕 [熟]（自、ら下二） よく熟す。㊁熟練す。上達す。

なる-いた [鳴板]（名） 「きりつまいた」（切妻板）に同じ。

なる-かみ [鳴神]（名） 「かみなり」に同じ。——**づき** [鳴神月]（名） 陰曆六月の異稱。

なる-こ [鳴子]（名） 小なる竹筒を數多く板に並べて結び下げ、これにつけたる繩を引きて鳴らすもの、田畠に設けて鳥を追ひ、又は門扉などに備へて警戒に用ふ。——**ゆり** [鳴子百合]（名） 【植】百合（ユリ）科に屬する草、地上莖は枝なくして多數の葉を有し、葉は百合に似て互生す、花は葉腋に生じ筒狀にして帶白色を呈す、根莖は食用又は藥用に供せらる。ゑみぐさ。（黃精）。

なる-さを [鳴竿]（名） 鳴子をつけたる竿。

なる-たき-ど [鳴瀧砥]（名） 山城國葛野郡鳴瀧山より產出する砥石。

なる-たけ [成丈]（副） 力の及ぶかぎり。出來得るかぎり。なるべく。およぶだけ。（可及的）。

卄**なる-はじかみ**（名） 【植】朝倉山椒の古稱。

なる-ほど [成程]（副） ㊀まことに。げに。もっとも。㊁「なるたけ」に同じ。

なる-み-しぼり [鳴海絞]（名） 「ありまつしぼり」（有松絞）に同じ、尾張國鳴海より賣出すが故に此名

あり。

なれ［慣］（名）なるゝこと。習慣。

‡なれ［汝］（代）なんぢ。

なれ‐あひ（‐アイ）［馴合］（名）なれあふこと。――まをとこ［馴合間夫］（名）夫妻なれあひの上にて、妻をして他の男子と姦通せしめ、其男子を強迫して財貨を取ること。つゝもたせ。

なれ‐あ・ふ（‐アウ）（はひふふへへ）［馴合］（自、は四）㊀互になれ親しむ。相親しむ。㊁姦通す。密通す。㊂竊かに約し置きて他を欺く。ぐるになる。

‡なれ‐がほ（‐ガオ）［馴顏］（名）なれたるさまをなすこと。

‡なれ‐ぎぬ［褻衣］（名）ふだんぎ。又、ふどし。（狎衣）。

‡なれ‐ごろも［褻衣］（名）前條に同じ。

なれ‐つ・く（かきくくけけ）［馴附］（自、か四）なれてつきしたがふ。なつく。

なれ‐ども［然］（接）しかれども。されども。

なれ‐なれ・し（しくしくしきしけれ）［馴馴］（形、二）さもなれしたしみてあるさまなり。いと心易きさまなり。

なれ‐の‐はて（名）おちぶれはてたる極度。らくはくの結果。

なれる（自）「なる」の訛。

‡なゐ（名）地震。――ふ・る（らりるるれれ）（自、ら四）地震ふるひうごく。地震す。「―」。

なを‐り［名折］（名）名譽をそこなふこと。名聲のきず。なをれ。

‡なを‐る（らりるるれれ）［名折］（自、ら四）名譽をきずつく。名聲をそこなふ。

なを‐れ［名折］（名）「なをり」に同じ。

（なん［難］（名）㊀わざはひ。災難。㊁きず。缺點。㊂そしり。非難。㊃くるしみ。患苦。㊄とひ。詰問。㊅かたきこと。むづかしきこと。

（なん［軟］（名）㊀やはらか。㊁おだやか。㊂よわきこと。

（なん［男］（名）「だん」に同じ。

なん［何］（代）「なに」の音便。「―のため」。

なん―［何］（接頭）いくら。いくばく。「―度」。

なん（助動）「なむ」に同じ。

なん（助）「なむ」に同じ。

なん‐か［何］（副）何事か。何ものか。「―あらん」。

（なん‐い［難易］（名）むづかしきとやすきこと。

〔―なんか（接尾）など。等。「私―」。

（なん‐かい［難解］（名）解釋しがたきこと。わかりにくきこと。

（なん‐かい［南海］（名）㊀南方のうみ。㊁「なんかいだう」の略言。――だう（‐ドウ）［南海道］（名）紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐の六個國の總稱。

なん‐か‐の‐ゆめ［南柯夢］（名）「くわいむ」（槐夢）に同じ。

（なん‐かん［難艱］（名）㊀かたきこと。むづかしきこと。㊁くるしみ。なやみ。㊂あらくして手にあはぬこと。亂暴。――もの［難艱者］（名）なんかんなる人。亂暴者。

（なん‐ぎ［難義］（名）解しがたき義理。わかりにくき議論。

（なん‐ぎ［難儀］（名）くるしみ。なやみ。

（なん‐ぎやう（‐ギョウ）［難行］（名）極めてつらき修行。難儀なる修行。「―苦行」。

（なん‐ぎやう‐だう（‐ギョウドウ）［難行道］（名）【佛】自力により、修行の功を積みて證果を得んとする教法。

（なん‐きよく［難局］（名）處理のむづかしき事局。むづかしき場合。

（なん‐きよく［南極］（名）㊀【地】地軸の南端。㊁【理】磁針の南に向へる端。㊂【天】天球の軸の南端。――きより［南極距離］（名）【天】天球上、南極より天體に至る角距離。――けん［南極圈］（名）【地】地球の南極より二十三度半の地を通過して地軸に直角なる小圈。――せい［南極星］（名）支那の昔時の天文にて、天の南極にありて人の壽命をつかさどるといふ星。（老人星）。――らうじん（‐ロウ‐）［南極老人］（名）壽老人の一名。

（なん‐きるゐ［軟鰭類］（名）【動】硬骨類の一、鰭（ヒレ）軟（ヤハ）かくして胸鰭の前方に腹鰭のあるもの、たら・さより等これに屬す。

ナン‐キン［南京］（名）（支那江蘇省の揚子江南岸にある江寧の一名）㊀支那より渡來せるものにつけていふ語。㊁「ナンキンまめ」の略言。㊂【植】「たうなす」の一名。（大阪地方の方言）。――うさぎ［南京兎］（名）【動】兎の一種、稍や小形にして毛色種々あり、家に飼（カ）ふ。かひうさぎ。――かいだう（‐ドウ）［南京海棠］（名）【植】海棠の一種、花の濃赤色なるもの。――ざくろ［南京石榴］（名）【植】石榴の一種、樹幹長大ならずして花の深紅色なるもの。――しゆす［南京繻子］（名）繻子の一種、支那より渡來するもの。――じん［南京人］（名）支那人の稱。――だけ［南京竹］（名）【植】竹の一種、幹細くして低きもの。――だま［南京珠］（名）硝子製の小さき珠、中に孔あるもの、其孔に絲を通しつゝげあはせて種々の裝飾となす。――はぜ［南京黄櫨］（名）【植】大戟科に屬する木、葉は圓形にして互生し、秋に至りて紅葉す、夏の頃、帶白色の花開く、果實は圓形にして熟すれば黑褐色となる、中に數個の種子あり、種子を包める白粉より蠟を採取すべく、種子より澁油を製すべし、もと支那種を移植したるものなり。たうはぜ。（鳥臼木）。――はと［南京鳩］（名）【動】鳩の一種、羽毛美麗にして多く人家に飼養せらる。――まい［南京米］（名）「インド」及支那等より我國に輸入する一種の米、味我國のものより劣（オト）る。――まめ［南京豆］（名）【植】荳科に屬する草本、葉は羽狀複葉にして通常四個の小葉より成る、花は黃色小形なり、莢は地中にありて成熟し、種子は食用に供せらる、もと南「アメリカ」產のものなり。（落花生）。――むし［南京蟲］（名）【動】昆蟲類に屬する小蟲、扁平にして楕圓形をなし赤褐色を呈す、床又は壁などに棲み、人の皮膚を刺（サ）して赤色の疹を生ぜしむ。

（なん‐く［難句］（名）むづかしき句。わかりにくき句。

なん‐くせ［難癖］（名）非難すべき點。きず。

（なん‐くわ［南瓜］（名）【植】「たうなす」に同じ。

（なん‐くわ［軟化］（名）㊀やはらかくなること。やはくなること。㊁強硬なる意見を唱へざるやうになること。反對の主張をやむること。

（なん‐ぐわ［南畫］（名）南宗畫に同じ。北畫の對。

（なん‐くわん［難關］（名）通過し易からざる所。

（なん‐けん［難險］（名）㊀いとむづかしきこと。㊁いとけはしきこと。

（なん‐けん［難件］（名）處置のむづかしき事件。

なん‐こ（名）一種の遊戲、數人ものゝ竊（ヒソ）かに物を握りて差出だし、互に其總數を言ひ中（ア）てゝ勝負するもの。（藏鉤、倩拳）。

（なん‐ご［喃語］（名）ぺちや〳〵かたること。

（なん‐ご［難語］（名）むづかしき語。わかりにくき語。

（なん‐こうがい［軟口蓋］（名）口蓋のやはらかなる部分、硬口蓋とつゞく、北端に懸壅垂（ケンヨウスイ）あり。

（なん‐こつ［軟骨］（名）㊀有機質より成り柔軟にして彈力ある骨、人類の關節の兩硬骨の接合面には必ずこれありて、其劇しき衝突を防ぎ、又、鼻頭・外耳などの部を成す。やはらかきほね。㊁強硬に主義を守り得ざること。意思の弱きこと。――かん［軟骨漢］（名）節操なきもの。意思弱きもの。――るゐ［軟骨類］（名）【動】魚類の一、骨骼はすべて軟骨より成り、口は頭部の腹面に開き、鰓は普通五個あり、卵生又は胎生なり、さめ・えひ等これに屬す。

（なん‐こん［男根］（名）陰莖。

（なん‐ざん［難產］（名）胎兒のやす〳〵とうまれ出ぬ產。

（なん‐ざん［南山］（名）（南山壽より轉ず）ことぶき。いはふこと。「壽―」「―候」。（書牘文に用ふ）。――のじゆ［南山壽］（名）（詩經に出づ）いのちながきことをいはひていふ語。

（なん‐し［男子］（名）㊀せがれ。むすこ。㊁をとこ。をのこ。

（なん‐じ［難事］（名）むづかしき事。かたき事。

（なん‐じ［難字］（名）むづかしき文字。

（なん‐じふ（‐ジウ）［難澁］（名）㊀すら〳〵と通ぜざること。なやみしぶること。㊁なんぎ。くるしみ。（困難）。

（なん‐じやく［軟弱］（名）よわくして事に堪（タ）へざること。柔弱。

（なん‐しやう（‐ショウ）［難症］（名）なほりにくき病氣。

（なん‐しゆう［南宗］（名）【佛】禪宗にて、慧能の流派の稱、形式よりも精神を主とするもの。北宗の對。――ぐわ［南宗畫］（名）我國及支那の在來の畫風にて、形式よりも精神を主とする流派の稱。北宗畫の對。

（なん‐しよ［難所］（名）險阻なる所。けはしき所。

（なん‐しよく［男色］（名）男子間の姦通。（鷄姦）。

なん・ず（ずぜじずずるずれぜよ）［難］（他、さ變）㊀せむ。なじる。㊁非難す。そしる。

なん‐すれ‐ぞ［何爲］（副）（「なにすれぞ」の音便）如何してか。どうしてか。

（なん‐すゐ［軟水］（名）【化】石灰質又は石膏などを含有せずして飲料に適せる水。

（なん‐せい［軟性］（名）やはらかき性質。

（なん‐せん［難戰］（名）くるしきたゝかひ。

（なん‐せん［難船］（名）船舶が海上にて風波に遭（ア）ひ、破損又は覆沒などすること。又、其船。

（なん‐せん‐ぶ‐しう（‐シュウ）［南瞻部州］（名）【佛】「エンブダイ」（閻浮提）に同じ。

（なん‐せん‐ほく‐ば［南船北馬］（名）（南の方へは船にて行き又北の方へ馬を馳する義）方々へ絶えず旅行するをいふ語。

なん‐ぞ［何］（副）（「なにぞ」の音便）㊀何として。いかで。㊁如何なる物事か。何にか。〔――といふと（副）やゝもすれば。ともすれば。よく。

（なん‐たい［男體］（名）をとこの體。

（なん‐だい［難題］（名）㊀むづかしき問題。（難問）。㊁詩歌文章の題の作るにむづかしきもの。㊂應じがたきいひがゝり。承諾しにくきいひかけ。

（なん‐たい‐どうぶつ［軟體動物］（名）【動】體內に骨骼を有せずして體質の柔軟なる動物、體軀は外套膜の中に包まれ、其外面に石灰質の介殼を具ふるを常とす、かひ・かたつむり・いか等これに屬す。

（なん‐ち［難地］（名）困難なる場所。

（なん‐ち［難治］（名）をさまりがたきこと。又、なほりにくきこと。

なん‐ぢ［汝、爾］（代）（「なむぢ」の轉）同輩若しくは其以下に用ふる對稱の人代名詞。

（なん‐ちゆう［南中］（名）【天】天體の天頂より南方に於ける子午線經過の稱。

〔なん‐で［何］（副）㊀何事にて。㊁何故に。

なんつ・く（けけくくるくれけよ）[難附]（他、か下二）難儀をつく。「つゆ—べくもあらず」。

（なんてい[南庭]（名）古昔、禁中の殿上の南の廣場。

（なんてう[南朝]（名）㊀延元元年後醍醐天皇が京師より吉野に遷幸したまひてより、元中九年後龜山天皇が神器を北朝の後小松天皇に傳へたまひしまで、三代五十六年間の吉野の朝廷の稱。㊁支那にて我紀元九百七十七年東晉の興りてより、宋・齊・梁・陳と傳へ同紀元千二百四十八年に陳の隋に亡さるゝまで、五朝二百七十一年間の稱。

なんでふ（副）如何にして。どうして。なでふ。

（なんてつ[軟鐵]（名）純粹の鐵の約百分の一の炭素を含有するもの。

〔なんでも[何]（副）㊀如何なる物事にても。どのやうな物事にても。㊁如何にあるとも。どうあらうとも。

（なんてん[南天]（名）【植】「なんてんしよく」（南天燭）の略言。

（なんでん[南殿]（名）紫宸殿の一名。なでん。

（なんてんしよく[南天燭]（名）【植】小蘗科に屬する木。葉は二三回の羽狀複葉をなし、花は五瓣白色にして圓錐花序に排列す。果實は小形球狀にして簇生し、熟すれば赤色となる。觀賞用として栽培せられ、木材もまた種々の用に供せらる。

[なんてんしよく]

（なんてんちく[南天竹]（名）【植】前條に同じ。

なんど[納戸]（名）㊀衣服・調度を納（ヲサ）め置く部屋。（套房）。㊁轉じて、其家の財物の供給所。

—なんど[抔]（接尾）「など」の轉。

〔なんとなく[何無]（副）これと擧げていふべからざれど。どことなく。

なんとなれば[何者]（接）上を受けて、其理由を下に說きおこすときにいふ語。何故といへば。なぜといへば。（何則）。

（なんとぶぎやう[南都奉行]（名）南都（奈良）の東大寺・興福寺等の事を掌りし武家の職名。

（なんとも[何]（副）何事とも。如何にとも。

〔なんなく[難無]（副）格別の事なく。たやすく。

（なんなん[喃喃]（名、副）ぺちやくちやとはなしあふさまにいふ語。

なんなんとす（せしすするすれせよ）[垂]（自、さ變）「なりなんとす」の音便。

〔なんにも[何]（副）㊀何事にも。何物にも。㊁何事も。何物も。

（なんによ[男女]（名）をとことをんなと。—どうけん[男女同權]（名）「だんぢよどうけん」に同じ。

なんの[何]（副）如何てか。なんてふ。—かのと[何彼]（副）かれこれと。とやかくと。—その[何其]（副）何程の事のあるべきや。意となすに足らず。

なんば[難場]（名）あやふき場所。（難所）。

（なんぱ[軟派]（名）㊀軟弱なる意見の黨派。㊁手強き主張をなし得ざるもの。㊂新聞又は雜誌にて、文學又は艶物を擔當せるもの。

（なんぱ[難破]（名）難風にあひて、破船すること。—せん[難破船]（名）難破したるふね。

（なんぱう[南方]（名）みなみのかた。

なんばに[難波煮]（名）一種の料理。小鯛とずゐきとを合せ煮（ニ）たるもの。

（なんばん[南蠻]（名）㊀南方のえびす。㊁昔時、「シャム」・「ルソン」其他南洋諸島を指しての稱。

又、其地を經（ヘ）て來航せし西洋人殊に「ポルトガル」人・「スペイン」人等を指しての稱。㊂南蠻より舶來したる物事。㊃【植】「なんばんがらし」の略言。㊄「なんばんに」の略言。「鴨—」、「葱—」。—がらし[南蠻辛]（名）【植】「たうがらし」の一名。—きび[南蠻黍]（名）【植】「たうもろこし」の一名。—ずな[南蠻砂]（名）硼砂の異稱。—てつ[南蠻鐵]（名）昔時、舶來の精鍊したる鐵の稱。鍔・兜などに用ひたり。—に[南蠻煮]（名）一種の料理。一寸五分許に切りてたちわりたる葱に味をつけ、魚又は鳥など、合せ煮たるもの。

（なんびやう[難病]（名）なほりにくき病氣。

（なんぶ[南部]（名）㊀南方の所。㊁「なんぶつむぎ」の略言。

（なんぷう[難風]（名）船舶をなやます暴風。

（なんぷう[軟風]（名）㊀靜かに吹く風。わづかに感ぜらるゝほどの風。㊁【地】海邊にて、晝夜溫度の差高きときに吹く風。晝間は陸上の土砂高熱を受けて空氣上騰するが故に海より陸に向って吹き、夜間は土砂早く熱を放散するにより、陸より海に向って吹く。前者を海軟風といひ後者を陸軟風といふ。

（なんぷう[南風]（名）㊀南より吹く風。㊁夏季の風。（薰風）。㊂南方の歌謠。—きそはず[南風不競]（左傳に出づ）南方の勢の劣るにいふ。

なんぶしま[南部縞]（名）陸中國南部地方より産出する精好なる縞織の紬。

（なんぶつ[難物]（名）手にあまるもの。取扱ひにくきもの。

なんぶつむぎ[南部紬]（名）「なんぶしま」に同じ。

（なんぶん[難文]（名）むづかしき文辭。

なんぶん[何分]（副）「なにぶん」に同じ。

なんべん[何遍]（名、副）いくたび。いくど。

（なんぼ（名、副）なにほど。いくら。「此品—ぢや」。

（なんぼく[南北]（名）みなみときた。—てう[南北朝]（名）南朝と北朝と。又、其相對立せる時代。（南朝・北朝の條を見よ）。

〔ナンマミダ（名）【佛】「ナムアミダブツ」に同じ。

〔ナンマミダブ（名）【佛】前條に同じ。

廿なんめり（助動）「なるめり」の音便。

（なんめん[南面]（名）（支那にて、王者は南に面して坐する定なりしよりいふ）君主となり國内ををさむること。君主の位につくこと。

（なんもん[難問]（名）答へ難きとひ。なんだい。

（なんやう[南洋]（名）我國より「マレイ」群島及大洋洲一帶を指していふ稱。

なんら[何等]（代）なにらの音便。

（なんりよ[南呂]（名）「なんろ」に同じ。

（なんれう[南鐐]（名）㊀美（クハツ）しき銀。質のよき銀。㊁銀の異稱。㊂昔時の貨幣、銀一兩の八分の一、即ち二朱銀の稱。

（なんろ[南呂]（名）㊀十二律の一。㊁陰曆八月の異稱。

（なんろ[難路]（名）けはしきみち。

に

に　齒的鼻音N即ち舌端を硬口蓋の前部に觸れしめて發する鼻音と、母音「イ」との綴音。

廿に[瓊]（名）たま。

廿に[土]（名）つち。「赤—」。「白—」。

廿に[丹]（名）㊀赤色の土。㊁赤き染色。あか。「—塗」。

に[荷]（名）㊀になひもち又はたづさへもつ物品。㊁おくりやり又はうけをさむべく包裝したる物品。㊂厄介になるもの。もてあましもの。

（に[貳]（名）太宰府の次官。

（に[二・貳]（名）㊀三絃の中の絲。㊁つぎ。あと。（次）。㊂ならび。たぐひ。㊃そむくこと。たがふこと。㊄ふたごゝろ。あだごゝろ。

ニ[尼]（名）アマ。

（に[二・貳]（數）一に一を加へたる數。ふた。ふたつ。

に（助動）㊀過去の助動詞「ぬ」の變化。「來—けり」。㊁廿打消の助動詞「ず」の變化。「見もしくは知ら—」。

に（助）㊀動作の歸着する地位を示す語。「山—登る」。㊁附き添ふ意を示す語。「月—叢雲」。㊂「にて」の意の語。「途—說く」。㊃「のために」の意の語。「犬—嚙まる」。㊄重ねたる動詞の間におきて、勢を強むる語。「ふり—ふる」。㊅比較の意を示す語。「人—優る」。㊆「然るに」の意を表する語。「月は待たぬ—出でぬれど」。

に・あがり[二上]（名）三味線のひき方。本調子に比して二の絲の調子を高くすること。

に・あげ[荷揚]（名）積荷を船より陸に揚（ア）ぐること。—ば[荷揚場]（名）荷揚する所。あげば。

にあげ・ざる[煮揚笊]（名）煮たるものを揚げおきて液をたらす笊。

に・あは・し（しくしくしきしけれ）[似合]（形、二）ふさはし。似つかはし。

に・あ・ふ（はひふふへへ）[似合]（自、は四）よくつりあふ。よくうつる。相應す。相當す。ふさふ。

に・あへ[煮蘸]（名）一種の料理。鯡皮・梅干・田作・椎茸・銀杏・椎・黑豆などの甘煮（ウマニ）に玉子をかけたるもの。

〔にい[兄]（名）「あに」に同じ。（子供の語）。

（にいう[二酉]（名）（支那の大酉小酉の二山の石穴内に書千卷ありきといふ故事に出づ）書籍の集積してある所。

廿に・いし[丹石]（名）㊀赭土。㊁代赭石。

〔にいちてんさくのご[二一天作五]（名）（珠算にて、割算の割聲、一を二にて割るとき、桁（ケタ）の上の珠を一つおろす義）勘定。算用。

（にう[乳]（名）「にゆう」に同じ。

（にうじやく[柔弱]（名）氣力弱く物事に堪（タ）へざること。進取の氣象の缺（カ）げたること。若う若やく。

にうけ[荷受]（名）送り來りたる荷を受取ること。—にん[荷受人]（名）荷受する本人。

ニウトン・くわん[—環 Newton's ring]（名）【理】一面は平面にして他面は彎曲の甚だ小なる凸面より成れる「レンズ」の凸面の方を下にして、平面の「ガラス」上に載（ノ）するとき、光の干渉によりて見ゆる美麗なる縞の環。

にうま[荷馬]（名）荷物を負ひはこぶ馬。におひうま。

にうめ[煮梅]（名）砂糖煮にしたる梅の實。

にうめん[煮麪]（名）一種の料理。中にいろ〱の具を入れてさうめんを煮たるもの。（入麪）。

にうり[煮賣]（名）菜又は肴などを煮て賣ること。—や[煮賣屋]（名）にうりする店。—さかや[煮賣酒屋]（名）居酒屋兼業の煮賣屋。下等なる飲食店。

（にうわ[柔和]（名）やさしくおだやかなること。ものやはらかなること。（溫和）。

にえ[錵]（名）刀の燒きにあやの現はれたるもの。

にえ[煮]（名）にえたること。にえたる度合。

にえ・あが・る（らりるるれれ）［煮騰］（自、ら四）煮えて沸き立つ。にえたつ。

〜にえ・かへ・る（エル）（らりるるれれ）［煮返］（自、ら四）前條に同じ。

にえ・こぼ・る（れれるるれよ）［煮溢］（自、ら下二）にえあがりて外にこぼる。

〜にえこぼれる（自）前條の訛。

にえ・たぎ・る（らりるるれれ）［煮滾］（自、ら四）「にえあがる」に同じ。

にえ・た・つ（たちつつてて）［煮立］（自、た四）「にえあがる」に同じ。

廿にえ・ぶ（ばびぶぶべべ）［呻吟］（自、は四）によぶ。うなる。「大なる聲してにえびけり」。

にえ・ゆ［煮湯］（名）煮立ちたる湯。ねったう。

〜にえる［煮］（自）「にゆ」の訛。

に・おくり［荷送］（名）先方へ荷を送出すヿ。――にん［荷送人］（名）荷送する本人。

にお・ひ・うま（イ―オ）［荷負馬］（名）にうま。

廿に・おもひ（モイ―オ）［煮御水］（名）つくりみづ。

にが―［苦］（接頭）或語に添へて、にがき意を表する語。

（に・かい［二階］（名）㊀厨子の中に設けたる棚。㊁平家の上に一層かさねたる家づくり。――だて［二階建］（名）二階を設けたる建築。又、其家。――づくり［二階造］（名）前條に同じ。――ばしご［二階梯子］（名）二階に上るためにかけたる梯子。〜――まはし（ワシ―マ）［二階廻］（名）遊女屋にて、遊客の事を取扱ふ使男。

〜にがい・がほ（オ―カ）［苦顔］（名）しぶづら。

にが・いろ［苦色］（名）かさねの色目、表は濃き香色にして、裏の二藍なるもの、若しくは表の黒色を帯びて裏の二藍なるもの。

（に・かう（ウ―コ）［二更］（名）初更と三更との間、卽ち今の午後十時・十一時。

（にかう・しき（ウ―コ）［二項式］（名）【數】二つの項より成る整式。

（にかう・ていり（ウ―コ）［二項定理］（名）【數】二項式の羃を展開する方法に關する定理。

にが・うり［苦瓜］（名）【植】「つるれいし」（蔓荔枝）に同じ。

にが・き［苦木］（名）【植】苦木科に屬する木、葉は羽狀複葉にして小葉は鋸齒を具ず、苦味に富み藥用に供せらる。

〜にが・くち［苦口］（名）氣に入らぬ言。にくまれぐち。

にが・し（くしきけれ）［苦］（形、二）㊀舌に不快の味を感ず。㊁いとはし。きらはし。㊂つらし。くるし。

にが・しほ（オ―シ）［苦鹽］（名）食鹽の潮解し液體となりて滴（シタタ）るもの、卽ち不純なる硫酸「マグネシウム」。（鹽鹵、鹵汁）。

にが・す（さしすすせせ）［逃］（他、さ四）㊀にげしむ。のがれしむ。㊁とりにがす。にげらる。

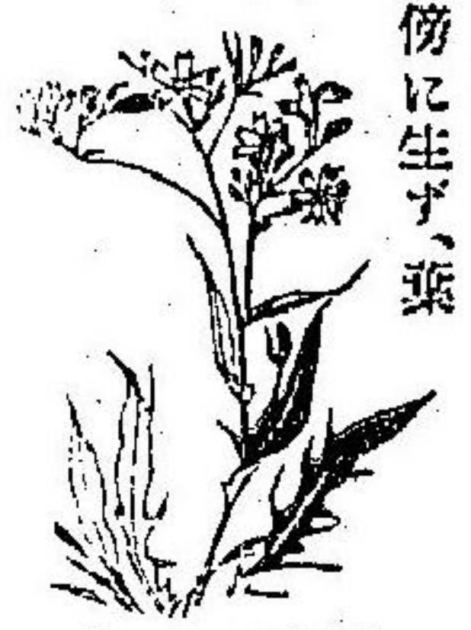
に・かた［煮方］（名）㊀ものを煮る方法。㊁煮ることにあたる料理人。

にが・だけ［苦竹］（名）【植】「まだけ」（眞竹）に同じ。

にが・て［苦手］（名）㊀其人の弱點に乘ずる方法又は敵手。㊁互に氣性相合はずして忌み嫌ふもの。

にが・つち［苦土］（名）耕鋤の達せざる下部の土。

にが・な［苦菜］（名）【植】（い）「リンダウ」の一名。（ろ）菊科に屬する草、路傍に生ず、葉二三寸許にして其基部は廣がりて莖を抱く、春に芽を出だして黄色の頭狀花を開く。（黄瓜菜）。


［（ろ）にがな］

にが・にが・し（しくしくしきしけれ）［苦苦］（形、二）いと嫌はし。いといとはし。

にが・にし［苦螺］（名）【動】螺の一種、殼は長大にして黄赤色なり、肉甚だ苦し。

にかは（ワ―ニカ）［膠］（名）（煮皮の義）牛の皮又は魚の鰾（フエ）などを煮たる液を乾して固（カタ）めたるもの、物を粘著せしむるに用ふ。

に・がはせ（セワ―カ）［荷爲替］（名）荷送人が荷物を送り出すとき、其荷物が先方に到著して後其代金を受取る代はりに、荷物を擔保品として、其地の銀行などより代金相當の金額を受取り、該銀行などを受取人とし荷受人を支拂人として振出したる爲替手形、若し支拂人より支拂はざるときは、手形所持人は其荷物を處分するヿを得。――てがた［荷爲替手形］（名）前條に同じ。

〜にが・はだ［苦膚］（名）鼠などの生ぜぬ膚。

にかは・づけ（ワ―ニカ）［膠附］（名）膠にて物をつぎあはすヿ。又、膠にてつぎあはしたる物。

に・がふ（ウ―ゴ）［二合］（名）昔時、二字の名乘の上の一字を普通の字體に書き下の一字を花押にて書きたるもの。――のはん［二合判］（名）前條に同じ。

に・かへし（エシ―カ）［煮返］（名）にかへすヿ。又、にかへしたるもの。――ず［煮返酢］（名）少しく鹽を入れて煮立てたる酢、漬物などに使用す。

に・かへ・す（エス―カ）（さしすすせせ）［煮返］（他、さ四）一旦煮たるものを更に再び煮る。

に・がほ（オ―ガ）［似顔］（名）其人のかほをうつし似せたるもの。

にが・み［苦味］（名）㊀にがき味。にがき度合。㊁容貌の凛としたるさま。――き・る（らりるるれれ）［苦味切］（自、ら四）いとにがにがしきさまをなす。――ばし・る（らりるるれれ）［苦味走］（自、ら四）容貌に凛然たる所あり。

にが・む（まみむむめめ）［苦］（自、ま四）心中に快からず思ふ。にがにがしく思ふ。

にが・む（めめむむむるむれめよ）［苦］（他、ま下二）にがにがしきさまをあらはす。しかむ。

にが・にが［苦苦］（副）にがにがしく思ひながち。

にが・むし［苦蟲］（名）つねににがにがしきさまをなす人。又、つねににがにがしきヿをいふ人。――をかみつぶしたやうな　いとにがにがしき容貌をなすにいふ語。

に・かよ・ふ（ヨウ―カ）（はひふふへへ）［似通］（自、は四）彼と此と互によく似てあり。

〜にがり［苦鹽］（名）「にがしほ」に同じ。

にがり・き・る（らりるるれれ）［苦切］（自、ら四）きはめてにがにがしきさまをなす。

にが・る（らりるるれれ）［苦］（自、ら四）にがむ。

にが・わらひ（イ―ワラ）［苦笑］（名）にがりながら笑ふヿ。

にが・わら・ふ（ウ―ワラ）（はひふふへへ）［苦笑］（自、は四）にがわらひをなす。

廿にき［日記］（名）「にっき」に同じ。

（に・き［二氣］（名）陰と陽との氣。（兩儀、二儀）。

（に・き［二季］（名）春と秋と、又は夏と冬と、若しくは盆と暮と。

に・き（助動）過去の助動詞「ぬ」の變化なる「に」に過去の助動詞「き」の添はりたる語。「行き――」。

（に・ぎ［二儀］（名）天と地と。又、陰と陽と。

廿にぎ―［和］（接頭）或語に冠して、精しき又は柔かき若しくはとゝのひたる等の意を表する語。「――布」「――魂」。

廿にぎ・しね［和稻］（名）米にしたる稻。

廿にぎ・たへ（エ―タ）［和栲］（名）穀（カヂ）の木の皮にて織れる布。あらたへの對。

にぎて［幣］（名）和栲にてつくりたる幣。みてぐら。へいそく。ごへい。

廿にき・どり［二季鳥］（名）【動】雁の異稱。

〜にぎ・にぎ［握握］（名）㊀手をひろげつにぎりつするヿ。（小兒の語）。㊁にぎりめしをこしらふるヿ。又、にぎりめし。（小兒の語）。

にぎ・にぎ・し（しくしくしきしけれ）［賑賑］（形、二）にぎはし。

にぎ・にぎ［賑賑］（副）にぎはしく。

にぎは・し［賑］（名）にぎはすヿ。

にぎは・し（シ―ニギ）（しくしくしきしけれ）［賑］（形、二）盛んなり。ゆたかなり。繁昌す。

にぎは・す（ス―ニギ）（さしすすせせ）［賑］（他、さ四）㊀ゆたかにす。盛んにす。にぎやかにす。㊁ほどこす。めぐむ。たすく。（救助）。

廿にぎは・はし（シ―ニギ）（しくしくしきしけれ）［賑］（形、二）にぎやかなり。にぎはしくあり。

にぎは・ひ（イ―ニギ）［賑］（名）にぎはふヿ。にぎはふさま。

にぎは・ふ（ウ―ニギ）（はひふふへへ）［賑］（自、は四）㊀富みてあり。足りてあり。豐かにてあり。㊁さかゆ。さかる。はんじやうす。

にきび［面皰］（名）面部に生ずる小さき瘡、白色にして化膿せざるもの。（面瘡、粉刺）。

廿にぎ・ぶ（ばびぶぶべべ）［和］（自、は上二）にぎはふ。やはらぐ。「にぎびにし家ゆもいでゝ」。

（にきふ・せんきよ（ウ―キ）［二級選擧］（名）議員の選擧者を納稅額によりて、二の階級に分け、其各級によりて選擧せしむる制度。

廿にぎ・ほ・ふ（オ―ニギ）（へへふふれへよ）［賑］（他、は下二）にぎはす。

にきみ［面皰］（名）「にきび」に同じ。

廿にぎ・みたま［和魂］（名）にぎびさきはふみたま。あらみたまの對。

廿にきみ・はな［皰瘡］（名）さくらばな。

廿にぎ・む（まみむむめめ）［和］（自、ま四）「にぎぶ」に同じ。

廿にぎ・め［和布］（名）【植】「わかめ」に同じ。

にぎ・やか［賑］（名）盛んなるヿ、繁昌するヿ。にぎはしきヿ。

にぎり［握］（名）㊀にぎるヿ。㊁にぎる長さ。にぎる丈。「二―半」。㊂にぎりかは。ゆづか。㊃すべて物のにぎりもつ所の稱。㊄「にぎりずし」又、「にぎりめし」の略言。――かた・む（めめむむむるむれめよ）［握固］（他、か下二）にぎりてかためかたむ。〜――かためる（他）「にぎりかたむ」の訛。――かは（ワ―カ）［握革］（名）ゆづかにまきたる皮。――かみ［握上］（名）弓のにぎりより上の方。〜――きんだま［握睾丸］（名）手を袖にして何事をもなさゞるヿ。――こぶし［握拳］（名）㊀こぶしをにぎるヿ。こぶし。（握手、拳）。㊁てぶら。からて。――しも［握下］（名）弓のにぎりより下の方。――しめ・む（めめむむむるむれめよ）［握緊］（他、ま下二）㊀力を入れて握る。かたくにぎる。㊁持ちて離さず。とりこみて出さず。〜――しめる（他）「にぎりしむ」の訛。――ずし［握鮓］（名）すしの一種、にぎり固めて、こしらふるもの。――つぶし［握潰］（名）にぎりつぶすヿ。――つぶ・す（さしすすせせ）［握潰］（他、さ四）㊀握り締めてつぶす。㊁手許にとゞめおきて他に傳へず、遂に其まゝになしおく。〜――べ［握屁］（名）屁を手に受けて漏れぬやうににぎりたるもの。――めし［握飯］（名）握りかためたる飯。むすび。

にぎ・る（らりるるれれ）［握］（他、ら四）㊀手の指を内へかゞむ。㊁手の指を内へかゞめて物を持つ。㊂占有す。領有す。「政權を―」。㊃「にぎりずし」をこしらふ。

又、にぎりめしをこしらふ。

（にく［肉］(名) ㊀筋と共に動物體の筋肉を形成し、皮膚に被はれて骨骼を包みたる柔軟質のもの。み。しし。㊁鳥獸特に獸類のししむら。「—を好む」。㊂果實又は菜蔬の柔軟質の部分。㊃からだ。肉體。身體。㊄ちつゞき。血統。血筋。㊅あつみ。あつさ。「紙の—」。㊆にくづき。にくあひ。㊇印肉。

（にく［褥］(名) ㊀しとね。しきもの。㊁【動】「かもしか」の異稱。

に·ぐ［遁、逃］(自、か下二) ㊀のがれ去る。まぬかれ去る。㊁去りてあとをくらます。逃亡す。㊂敗れて走り去る。敗北す。

にく·あひ［肉合］(名) にくつき。

にく·いれ［肉入］(名) 印肉を入るゝ器。肉池。

にく·いろ［肉色］(名) 黄色を帶びたる淡紅色。「—のシャツ」。

（に·ぐう［二宮］(名) ㊀皇族御二方の稱。㊁特に東宮と中宮との稱。

（にく·えん［肉緣］(名) 血のつゞきたる間柄。ちつゞき。

（にく·かい［肉界］(名) 身體及身體の作用の範圍。「靈界の對」。

（にく·かう［肉交］(名) 男女の交合。

（にく·かう［肉羹］(名) 鳥獸の肉を入れたるあつもの。

にく·が·る［憎］(他、ら四) 憎く思ふ。にくむ。

（にく·かん［肉感］(名) 身體の感覺。

（にく·がん［肉眼］(名) ㊀眼鏡に對して、人類の具有するつねの眼の稱。㊁心眼に對して、眼球によりて見わくるもの稱。

にく·きり［肉切］(名) ㊀肉をきるもの、又、肉をきる人。㊁「にくきりばうちやう」の略言。—ばうちやう［肉切庖丁］(名) 牛肉などを料理する庖丁。

（にく·くわい［肉塊］(名) ㊀にくのきれ。にくのかたまり。ししむら。㊁人類の身體の賤稱。

（にく·くわん［肉冠］(名) とさか。

（にく·けい［肉刑］(名) 身體の一局部を毀傷する刑罰。即ちいれずみ・みゝきり等の類。

（にく·けい［肉桂］(名)【植】樟科に屬する香木。葉は革質にして三大脈を有し常緑なり。緑黄色の花開く。根皮は稍や辛味を帶びたる甘味と一種の香氣とを有し藥用に供せらる。熱帶地方に產するものは、其樹皮を桂枝と稱し、また藥用に供せらる。

（にく·さ［肉叉］(名)「ホーク」に同じ。

にく·さう［憎相］(名) にくさげなるさまをなすこと。—もの［憎相者］(名) にくさげなるもの。

にく·さ·げ［憎氣］(名) にくらしきさま。

（にく·さし［肉叉］(名)「ホーク」に同じ。

卄にく·さび (名) 船の舷を藁にて包み、波のあたりを和ぐること。

（にく·し［肉肆］(名) 鳥獸の肉をうるみせ。

にく·し［憎］(形、一) ㊀にくむべし。いまはし。きらはし。㊁爲し難し。むづかし。「讀み—」。

（にく·じき［肉食］(名) 動物體を食用となすこと。にくしよく。「—妻帶」。

（にく·じふ［肉汁］(名)「にくかう」(肉羹)に同じ。

にく·しみ［憎］(名) にくむこと。にくみ。

（にく·しやう［肉漿］(名) ししびしほ。

（にく·しやう［肉障］(名) 多くの美人などを周圍にならべたゝすること。

（にく·じやう［肉情］(名) 男女間の戀情。色情。

（にく·じゆばん［肉襦袢］(名) 肉色の「シャツ」。

（にく·しよく［肉色］(名) ㊀肉のいろ。㊁皮膚のいろつや。

（にく·しよく［肉食］(名) ㊀動物體を食物となすこと。殊に鳥獸の肉を食物となすこと。㊁美味のものを食すること。美食。—じう［肉食獸］(名) 肉食類に屬する動物。—のと［肉食徒］(名) 常に肉食するともがら。轉じて、富貴なるともがら。—るゐ［肉食類］(名)【動】動物性のものを食とする哺乳動物。爪牙鋭利にして且つ感覺鋭く行動敏捷なり、性兇暴にして通常猛獸と稱せらるゝものこれに屬す。

（にく·しん［肉身］(名) 肉體。色身。

（にく·しん［肉親］(名) 血族の關係ある人。

（にく·たい［肉體］(名) 靈魂又は精神に對して、物質的身體の稱。からだ。—てき［肉體的］(形) 肉體に關するにいふ語。

卄にく·たい (名) にくらしきこと。

（にく·たん［肉袒］(名) はだぬぎて身體をあらはすこと。

（にく·ち［肉池］(名) 印肉を入れ置く器。にくいれ。

（にく·ちゆう［肉柱］(名) 貝のはしら。

（にく·ぢん［肉陣］(名)「にくしやう」(肉障)に同じ。

にく·つき［肉附］(名) からだの肉の肥え又は痩せたるほど。肉のつきぐあひ。

にく·づき［肉月］(名) 漢字の偏の名、即ち肥・肌等の字の左方にある月の字、即ち肉と同字にして月の字に似たればいふ。字書にて肉部に屬す。

（にく·づく［肉豆蔲］(名)【植】肉豆蔲科に屬する木、熱帶地方に產す、葉は桃の如く花は薔薇に似て雌雄異株なり、果實は大さアンズの如く黄色にして香氣つよく蜜などに漬けて食品とす、仁は藥用に供せらる。

にく·づ·く［肉附］(自、か四) 身體肥えふとる。

にく·てい［憎體］(名) にくらしきさま。

（にく·てき［肉笛］(名) くちぶえ。

にく·て·ぐち (名) にくまれぐち。

（にく·てん［肉店］(名) にくみせ。にくや。

にく·にく·し［憎憎］(形、二) きはめて憎むべし。さもにくらし。いとにくし。

にく·にく·と［憎憎］(副) さもにくらしきさまに。いとにくげに。

（にく·はく［肉薄］(名) 城塞にしやにむに突擊すること。

（にく·ひつ［肉筆］(名) 其人の直にかきたる筆蹟。

（にく·びやうぶ［肉屏風］(名)「にくしやう」(肉障)に同じ。

（にく·ブトン［肉蒲團］(名) 同衾する女を賤しみていふ語。

（にく·べい［肉餅］(名) (肉類にて製したるもちの義) かまぼこ又は鯛せんべいなどの如きもの。

（にく·へん［肉片］(名) 肉のきれはし。

卄にく·まれ·ぐち［被憎口］(名) 人のにくしみを受くることば。人に快からず思はすることば。

卄にく·まれ·ご［被憎子］(名) 人ににくまるゝこども。

（にく·み［肉味］(名) 肉のあぢ。

にく·み［憎］(名) にくむこと。又、にくむ念。

にく·む［憎、惡］(他、ま四) ㊀いむ。きらふ。㊁ねたむ。そねむ。㊂己に害あるものと思ふ。仇とおもふ。

（にく·や［肉屋］(名) 鳥獸の肉を販賣する家。

（にく·よく［肉慾］(名) ㊀肉體上より來る慾。㊁色慾。情慾。

に·ぐら［荷鞍］(名) 荷馬に置く鞍。

卄にくらか［憎］(名) 憎むべきさまなること。

にく·ら·し［憎］(形、二) にくむべし。にくし。

（にく·りう［肉瘤］(名) 身體に生ずるこぶ。

（にく·りん［肉林］(名) 大宴會などの酒の肴の澤山あること。

に·ぐるま［荷車］(名) 荷物を運送する車。

⌒に·ぐろみ［煮黑］(名)「にくろめ」に同じ。

卄に·ぐろ［土黑］(名) ㊀土のくろきこと。㊁土の色の如くくろきこと。

卄に·ぐろ·し［土黑］(形、一) ㊀土の色くろし。㊁土の色の如くくろし。

に·ぐろめ［煮黑］(名) しろめ三十匁と銅百匁との合金、其色黑し。にぐろみ。(烏銅)。

（に·ぐわつ［二月］(名) 年の第二の月。

にげ［逃］(名) にぐること。

にげ·あし［逃足］(名) 逃れ走るあしどり。にげ走るさま。

にげ·う·す［逃亡］(自、さ下二) にげて行くへ知れずなる。

にげ·かく·る［逃隱］(自、ら下二) のがれてひそむ。さけてかくる。

にげ·かくれ［逃隱］(名) にげかくるゝこと。⌒—る(自)「にげかくる」の訛。

卄にげ·が·む［齝］(自、ま四)「にれがむ」に同じ。

にげ·こうじやう［逃口上］(名) 返答又は責任若しくは關係をのがれさけんためにいふことば。

にげ·ことば［逃辭］(名) 前條に同じ。

にげ·こ·む［逃込］(自、ま四) にげて其中にはいる。のがれて其中にかくる。

にげ·じたく［逃支度］(名) にげ去らんとする用意。

にげ·ち·る［逃散］(自、ら四) ちり〴〵になりてにげうす。

にげ·な·し［似氣無］(形、一) 似つかはしからず。ふさはしからず。つりあはず。

にげ·の·うま［二毛馬］(名) あしげの馬、即ち白と黑との毛のまじりたる馬。

⌒にげのびる(自)「にげのぶ」の訛。

にげ·の·ぶ［逃延］(自、は上二) にげ去りて遂にまぬかる。

にげ·まは·る［逃廻］(自、ら四) にげてあちらこちらへ行く。

にげ·みち［逃路］(名) ㊀逃げ得べき路。(血路)。㊁のがれ得べき手段。

卄にげ·め［逃目］(名) にげんとするめつき。「—をつかふ」。

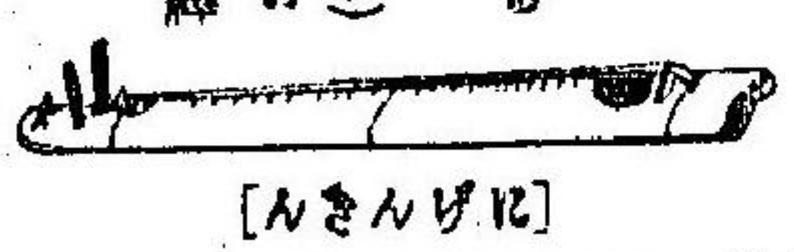
卄にげ·みづ［逃水］(名) 古昔、春より夏にかけて、武藏野におひ茂れる若草の葉末の遠くよりは水の流るゝが如く見え近づけば見えずなりぬる狀をいひし語。

にげ·ゆ·く［逃行］(自、か四) にげておちゆく。にげ走る。

⌒にげる(自)「にぐ」の訛。

（に·げん［二言］(名)「にごん」に同じ。

（に·げん·きん［二絃琴］(名) 絃の二條ある琴。やくもごとに類す。



［にげんきん］

（に·げん·ろん［二元論＝Dualism］(名)【哲】宇宙の現象は二個の本體に歸すといふ論。又、二個の原理を立てゝ一切を演繹する說。

卄にこ—［和］(接頭)「にぎ」に同じ。

（ニ·こう［尼公］(名) 尼となれる貴婦人の敬稱。

卄にこ·ぐさ［和草］(名) わかくさ。

卄にこ·げ［和毛］(名) ㊀鳥獸のやはらかなる毛。むくげ。(毳)。㊁やはらかき毛髮。

にこごり[煮凝](名) ㊀魚などを煮たる汁の寒氣にてこほりたるもの。㊁一種の料理、魚(多くは鮫)を煮たる汁の中に、いろ〳〵の具を入れてこほらせたるもの。

にご・す[濁](他、さ四) にごるやうにす。にごらす。

に・ごしらへ[荷拵](名) 荷づくり。

卄にこ・ずみ[和炭](名) 消炭の類。

ニコチン[Nicotine](名) 煙草の葉に含有せらるゝ「アルカロイド」、無色油狀の毒物にして、空氣中にては直に褐色に變ず。

卄にこ・つ・く(自、か四) にこ〳〵してあり。

卄にこ・にこ[莞爾](名) ㊀少しく笑ふさまにいふ語。㊁さもうれしさうなる顏つきにいふ語。—**がほ**[莞爾顏](名) ㊀にこ〳〵してある顏。㊁さもうれしさうなる顏つき。

にこ・み[煮込](名) にこむと、又、其もの。

にこ・む[煮込](他、ま四) ㊀種々の物をまぜて煮る。㊁よく煮る。

卄にこ・む(自、ま四) 「なごむ」に同じ。

卄にこ・もの[和物](名) やはらかきもの。

にこ・やか(名) ㊀顏つきのものやはらかにして、愛相よきさまなると。(和)。㊁笑みを含みにこ〳〵してあると。(莞爾)。

卄にこ・よか(名) 「にこやか」に同じ。

卄にこ・よ・す[煮凍](他、さ四) にこゞらしむ。

〜にごらか・す[濁](他、さ四) 次條に同じ。

にごら・す[濁](他、さ四) ㊀にごるやうにす。㊁まぎらす。ごまかす。

にこり[莞爾](名、副) 「にっこり」に同じ。

にごり[濁](名) ㊀にごると、すみてあらざると。㊁けがれ。よごれ。㊂煩惱。悔恨。㊃すゑ。澆季。「—の世」。㊄なまり。だみごゑ。㊅返辭のはっきりせざると。應對の曖昧なると。㊆濁音の符號、濁音の假名の右肩に記するもの即ち「゛」をいふ。㊇「にごりざけ」の略言。—**え**[濁江](名) 水のにごれる江。—**ごゑ**[濁聲](名) さわやかならぬ聲。だみごゑ。—**ざけ**[濁酒](名) 糟を漉(コ)さずして飲用する酒、即ち、どぶろく。—**みづ**[濁水](名) 濁りたる水。—**ゐ**[濁井](名) 水のにごりたる井。

にごり・ぐち[艙口](名) 船に荷を積み込む口。

ニコル[Nichols](名)【理】方解石を其鈍角の部に沿(ソ)ひて切り、其二つを透明なる「セメント」にて附着せしめたるもの、偏光を得るにも又は偏光を檢するにも用ふ、前者を偏光「ニコル」といひ、後者を分析「ニコル」といふ。

にご・る[濁](自、ら四) ㊀まじりものありて澄まず。汚れて清からず。㊁鮮明ならず。あざやかならず。㊂混亂す。みだる。㊃汚染す。けがる。㊄音聲さわやかならず。だむ。㊅濁音にてあり。㊆返辭はっきりせず。言語あぶや。

に・ごろ[煮頃](名) ㊀煮て食するに適當なると。㊁【動】「にごろぶな」の略言。—**ぶな**[煮頃鮒](名) 琵琶湖產の鮒、源五郎鮒に次ぎて大なるもの。

に・ころ・す[煮殺](他、さ四) 極罪の囚人などを釜に入れ、煮てころす。

〜に・ころばし[煮轉](名) 芋の子又は慈姑などの根莖を煮たるもの。

(に・ごん)[二言](名) ㊀ふたことば。いつはり、「武士に—はない」。㊁いひなほし。いひかへし。

(に・さい)[二歲](名) ㊀生まれて二年を經過せるもの。㊁少年をのゝしりていふ語。「青—」。

〜(に・さい)(名) 重複すると。かさなると。

(に・ざう)[二藏](名)【佛】大乘と小乘との經。

に・ざかな[煮肴](名) 醬油又は味噌などにて煮(ニ)たる魚。

に・ざまし[煮冷](名) ㊀にさますと、又、にさましたるもの。㊁煮冷したる湯の特稱。

に・ざま・す[煮冷](他、さ四) にたる後さます。

(にさんくわけいそ)[二酸化硅素](名)【化】硅素の化合物、石英・水晶等すべてこれなり。

(にさんくわたんそ)[二酸化炭素](名)【化】無水炭酸に同じ。

(にさんくわちっそ)[二酸化窒素](名)【化】赤褐色の氣體、硝酸鹽を熱すれば生ず、冷却すれば液體となり、更に強く冷却すれば無色の結晶體となる。

にさんくわマンガン[二酸化滿俺＝Manganese dioxide](名)【化】天然に多量に存する灰黑色若しくは黑色の固體、酸化劑として種々の用に供せらる。

(にさんくわいわう)[二酸化雄黃](名)【化】無色の氣體、雄黃を空氣中にて燃燒するとき惡臭を發するはこれが發生するによる、漂白用又は防腐用に供せらる。

に・ざんせう[煮山椒](名) 山椒の實の煮しめ。

にし[西](名) ㊀日の入る方角、東に反對せる方向。㊁西より吹き來る風。西の風。㊂西方淨土。

にし[螺](名)【動】「あかにし」・「ながにし」等の總稱。

にし(助動) 過去の助動詞「ぬ」の變化なる「に」に過去の助動詞「き」の變化なる「し」の添はりたる語。「去

り—人」。

にじ[虹](名) 細雨の霽(ハ)れんとするとき、太陽と反對の空に見ゆる麗(ウル)はしき弓形のもの、日光の水粒内に入りて屈折反射の際分散するがために生ずる「スペクトル」の排列なり、内部紫にして外圍の赤なるを普通とす、これを第一の虹といふ、又、内部赤く外圍紫にして色稍や薄く第一虹を圍むものあり、これを第二の虹といふ。(蜺)。

(に・じ)[二字](名) 實名。名乘。

(に・じ)[二時](名) 一時の次にして、三時の前なる時刻。

にし・あかり[西明](名) 日沒後西天のあかるきと。

にし・うけ[西受](名) にしむき。

にし・おもて[西面](名) 西の方面。

にし・かぜ[西風](名) 西の方角より吹きくる風。

にしき[錦](名) ㊀數種の色に染めたる絲にて、種々の紋樣を織り出だしたる地質厚き絹織物。(錦)。㊁紋樣の麗(ウル)はしきもの。あやの美なるもの。「都は春の—なりけり」。—**がは**[錦革](名) 紫地に白く文(アヤ)を染め出だしたる革。—**がひ**[錦貝](名) 介殼にうつくしきあやある貝。—**ぎ**[錦木](名) ㊀【植】衞矛科に屬する木、葉は楕圓狀尖頭にして緣邊に細かき鋸齒を有し對生す、初冬の頃紅又は紫に染むが故に此名あり、花は綠黃色にして、果實は熟すれば微紅色を呈し裂開す、觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。まゆみ。(衞矛)。㊁卄一尺ばかりの木を彩色したるもの、古昔、奧州地方にて、男の女に逢はんとするとき、これをその戸口にたてゝおき女逢はんと思へばとり入れたりといふ。—**ぐさ**[錦草](名)【植】(い)大戟科に屬する草、莖は平臥す、葉は小形にして緣邊に細かき鋸齒を有す、花は五瓣黃色にして小形なり、夏の頃開く、種子は平滑なり。(ろ)卄「もみぢ」の異稱。—**だひ**[錦鯛](名)【動】硬鱗類中たひ科に屬する魚、形鯛に似て大きく錦の如き斑あるもの。—**づた**[錦蔦](名)【植】きづたの葉の邊の紅白になりたるもの。—**で**[錦手](名) 五彩の模樣を描(エガ)きたる染附の磁器。—**どり**[錦鳥](名)【動】「あかきじ」に同じ。—**のみはた**[錦御旗](名) 「きんき」(錦旗)に同じ。—**へび**[錦蛇]【動】「にしきへみ」に同じ。—**へみ**[錦蛇](名)【動】(い)熱帶地方に棲む一種の蛇、長さ二三丈、全身に錦の斑文あり、人畜を害す、其膽は藥用とすべし。(蚺蛇、南蛇)。(ろ)すべてうつくしき模樣ある蛇の稱。—**めがね**[錦眼鏡](名) 小兒の玩具、筒の一端に種々の色に染めたる玻璃片を裝置したるもの、これを廻轉して他端の小孔より望めば、うつくしき模樣見ゆ。—**ゑ**[錦繪](名) 美麗なる彩色繪、古來東京の名產なり。えどゑ。—**をかざる** 美しき衣服を着る。又、功名を成して故鄕にかへる。—**をきてよるゆく**[衣錦夜行] 立身出世したれども故鄕にかへらずして、其さまを故舊に知らしめ得ざるにいふ。

(に・じき)[二食](名) 一日の食事を二度に制限すると。

にし・きた[西北](名) 西と北との間。いぬゐ。

にしぢん・おり[西陣織](名) 京都市西陣より織り出だす織物の總稱。又、其精巧なる錦・綾・絹布等の特稱。

にし・どち[復蛹](名)【動】蛾類の幼蟲の蛹となれるもの。

卄にし・の・あるじ[西主](名) 西方淨土の主、即ち、阿彌陀佛の稱。

にし・の・うち[西內](名) 「にしのうちがみ」の略言、—**がみ**[西內紙](名) 縱一尺五分幅一尺五寸にして、美濃紙より稍や厚く且つ強靭なる紙、楮の皮に小量の米粉を加へて製するもの、もと常陸國西內より產出せしが故に此名あり。

卄にし・の・ひかり[西光](名) 西方淨土の光明。

ニシパ(代)(「アイヌ」語 Nishpa) 對稱の代名詞。

(にじはってい・しき)[二次方程式](名)【數】未知數の最高乘が二次なる項を有する方程式。

にし・び[西日](名) 西天にかたむきたる日。夕日。

(にじふ)[二十](數) 十の倍。はたち。

(にじふいちだい・しふ)[二十一代集](名) 八代集と十三代集とを合はせての稱。

(にじふいっ・し)[二十一史](名) 支那の上古より元に至るまでの二十一部の歷史、即ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史・宋史・遼史・金史・元史の稱。

にじふご・ボサツ[二十五菩薩](名)【佛】二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上・普賢・法自在・獅子吼・陀羅尼・虛空藏・德藏・寶藏・山海慧・金藏・金剛藏・光明王・華嚴王・衆寶王・日照王・月光王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威德王・無邊身の稱。

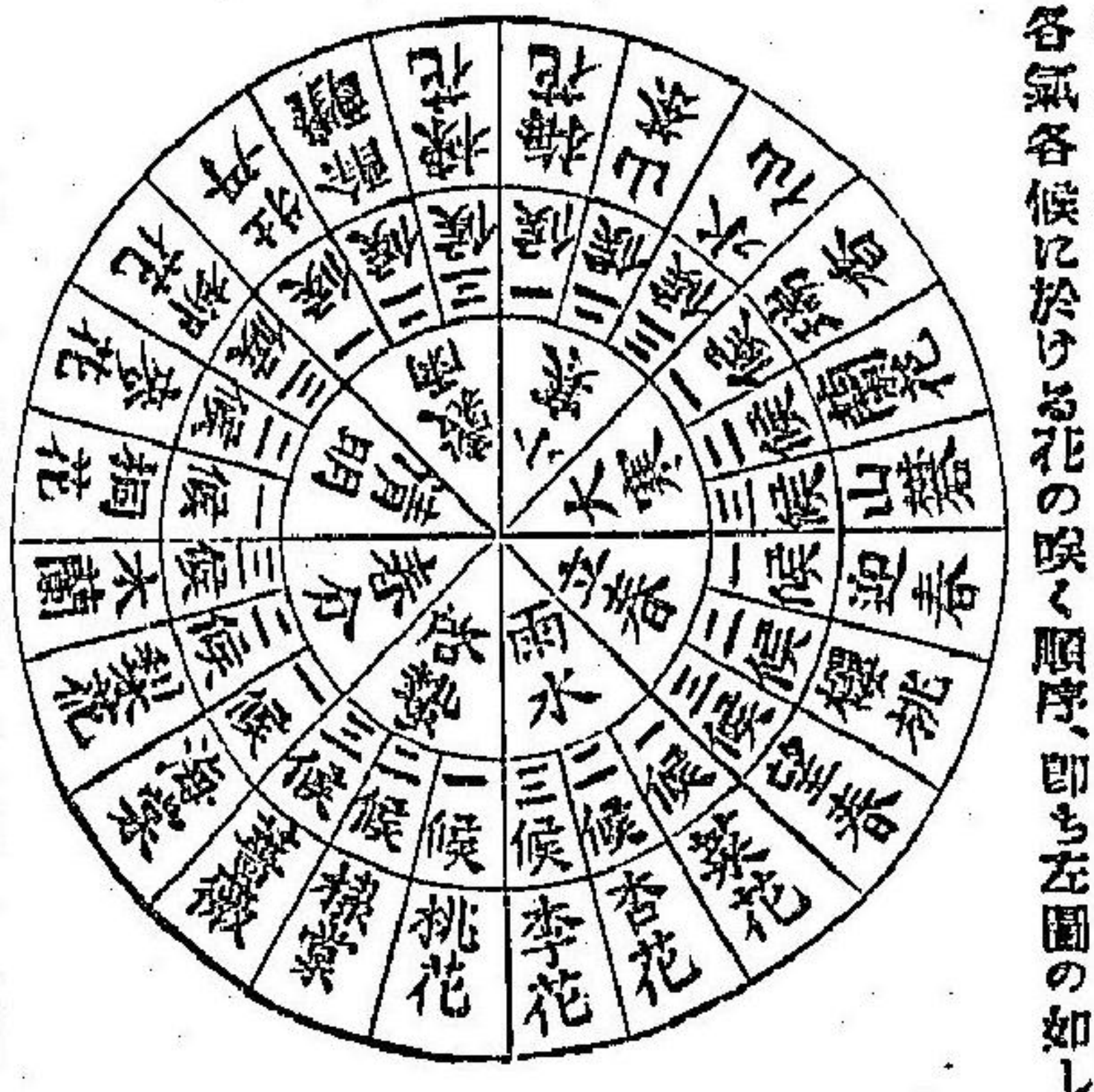
(にじふし・かう)[二十四孝](名) 支那にて、孝行を以て著名なりし二十四人、即ち舜・漢文帝・曾參・閔損・仲由・董永・剡子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒・丁蘭・孟宗・黃山谷の稱。

(にじふし・き)[二十四氣](名) 曆にて、五日を一候とし、三候を一氣としたるもの、一年間の總數の稱、即ち春は立春(二月三日)・雨水(二月十八日)・

啓蟄(三月五日)・春分(三月二十日)・淸明(四月五日)・穀雨(四月二十日)、夏は立夏(五月五日)・小滿(五月二十一日)・芒種(六月五日)・夏至(六月二十一日)・小暑(七月七日)・大暑(七月二十三日)、秋は立秋(八月七日)・處暑(八月二十三日)・白露(九月七日)・秋分(九月二十三日)・寒露(十月八日)・霜降(十月二十三日)、冬は立冬(十一月七日)・小雪(十一月二十二日)・大雪(十二月七日)・冬至(十二月二十二日)・小寒(一月五日)・大寒(一月二十日)なり。(月日は陽曆)。

(にじふし-せつ)（ジウ）「二十四節」(名) 前條に同じ。

(にじふしばん-くわしんふう)（ジウ）「二十四番花信風」(名) 二十四氣の小寒より穀雨までの間各氣各候に於ける花の咲く順序、即ち左圖の如し。



(にし-ふどう)「二四不同」(名) 漢詩にて、七言の近體の句法、二字目と四字目との平仄必ず相異なるべきもの。

(にじふに-し)（ジウ）「二十二史」(名) 二十一史に明史を加へての稱。

(にじふに-しや)（ジウ）「二十二社」(名) 京都の宮城の守護神と定められ、圓融天皇以後、時々幣帛を奉られし二十二個所の神社、即ち、伊勢・石淸水・加茂・松尾・平野・稻荷・春日・大原野・石上・大神・大和・廣瀨・龍田・住吉・日吉・梅宮・吉田・廣田・祇園・北野・丹生・貴船の稱。

(にじふはつ-しやう)（ジウ シヨウ）「二十八將」(名) ㊀徳川家康の功臣にして日光東照廟に配祀せられたる二十八人、即ち松平康忠・酒井忠次・井伊直政・榊原康政・大須賀康高・大久保忠教・伊奈忠俊・內藤家長・伊奈忠政・大久保忠世・內藤信成・酒井正親・大久保忠佐・米津淨忠・平岩親吉・奧平信昌・本多忠勝・鳥居元忠・菅沼定盈・渡邊守綱・岡部長成・高木性順・蜂屋貞次・服部正綱・安藤直次・本多康高・松平伊忠・水野勝成の稱。㊁後漢の光武帝の功臣にして、其像を雲臺に描かれたる二十八人、即ち鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐔・馮異・王覇・朱祜・任光・祭遵・李忠・景丹・萬脩・蓋延・邳彤・銚期・劉植・耿純・臧宮・馬武・劉隆の稱。

(にじふはつ-しゆく)（ジウ）「二十八宿」(名) 支那古昔の星學にて、星宿を二十八に區分したるもの、稱、東方は、角(スボシ)・亢(アミボシ)・氐(トモ)・房(ソヒ)・心(ナカゴ)・尾(アシタレ)・箕(ミ)、北方は斗(ヒツキ)・牛(イナミ)・女(ウルキ)・虛(トミテ)・危(ウミヤメ)・室(ハツイ)・壁(ナマメ)、西方は、奎(トカキ)・婁(タタラ)・胃(コキヘ)・昴(スバル)・畢(アメフリ)・觜(トロキ)・參(カラスキ)、南方は、井(チチリ)・鬼(タマホメ)・柳(ヌリコ)・星(ホトホリ)・張(チリコ)・翼(タスキ)・軫(ミツカケ)をいふ。

(にじふ-れう)（ジウ リヨウ）「二十寮」(名) 古昔の官制にて、省に附屬せる二十の寮、即ち大舍人・圖書・內藏・縫殿・內匠・大學・雅樂・玄蕃・諸陵・主計・主稅・木工・左右馬・兵庫・陰陽・主殿・典藥・大炊・掃部・齋宮の稱。

にじふろく-や（ジウ）「二十六夜」(名) 「にじふろくやまち」の略言。**——まち**「二十六夜待」(名) 陰曆正月及七月の二十六日の夜半に、月の出を待ちて拜するを、其月の出は三尊の彌陀の像を現ずといひ傳ふ。

にし-みなみ「西南」(名) 西と南との間。ひつじさる。

に-し・む（め・め・む・むる・むれ・めよ）「煮染」(他、ま下二) 煮汁の滲(シ)み入るまで煮る。

にじ・む（ま・み・む・む・め・め）(自、ま四) 色染みて亂れ散る。

に-しめ「煮染」(名) 肉又は菜などを醬油にて煮染めたるもの。**——もの**「煮染物」(名) 前條に同じ。**——る**(他) 「にしむ」の訛。

(に-しやう)（シヤウ サウ）「二障」(名) 【佛】無明の妄染が正見を障(サ)ふると即ち理障と、無明の蔽障が證果を障ふると即ち事障との稱。又、煩惱の心神を亂すを即ち煩惱障と、惡知覺の眞智性を蔽(オホ)ふを即ち所知障との稱。

にしや-どつち「復蛸」(名) 【動】「にしどち」に同じ。

(に-しゆ)「二豎」(名) (晉の景公が病にかゝりしとき、病の神が二人の豎子(コドモ)となりてあらはれたる夢を見たりといふ故事に出づ)やまひ。病氣。

(に-しゆう)「二衆」(名) 【佛】比丘と比丘尼との稱。

(に-しゆ-きん)「二朱金」(名) 昔時の金貨、金一兩の八分の一にあたりたるもの。

(に-しゆ-ぎん)「二朱銀」(名) 昔時の銀貨、銀一分の二分の一にあたりたるもの。

(に-じよう)「二乘」(名) ㊀【數】「じじよう」(自乘)に同じ。㊁【佛】聲聞と緣覺と。**——ひ**「二乘比」(名) 【數】相等しき二つの比の相乘比。

卄**にしよ-そうべう**（ヨウ ビヨウ）「二所宗廟」(名) 伊勢大神宮と石淸水八幡宮との稱。

にじり-がき「躪書」(名) 躪(ニジ)るがごとくに筆をおさへつけて運び、辛(カラ)うじて文字を書くと、又、其書きたる筆のあと。

にじり-よ・る（ら・り・る・る・れ・れ）「躪寄」(自、ら四) 座しながらすり寄る。ゐざりよる。

に-じる「煮汁」(名) ものを煮たる汁。

にじ・る（ら・り・る・る・れ・れ）「躪」(他、ら四) ㊀足にてふみしだく。㊁壓へつゝすり動かす。

に-しん「二親」(名) ふたおや。ちゝはゝ。(兩親)。

(に-しん)「貳心」(名) ㊀あだごゝろ。ふたごゝろ。㊁うたがひ。ぎねん。

にしん「鯡」(名) 【動】硬鱗類中にしん科に屬する魚、體は長くして多少側扁なり、背部は藍色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは一尺餘に達す、我國にては北海道殊に東西南の沿岸に產す、多くは脊を開きて乾魚となす。

ニス(名) 「ワニス」に同じ。

に・す（せ・せ・す・する・すれ・せよ）「似」(他、さ下二) ㊀似しむ。似るやうにす。㊁擬作す。贋造す。(贋)。

に-すす「煮煤」(名) 煮たる煤、板などの色附に用ふるもの。

卄**に-ずり**「丹摺」(名) 赤き色の土にてすりたる衣。

(に-すゐ)「二水」(名) 漢字の偏の名、即ち冷・凝等の字の左方にある「冫」の稱。

にせ「贋」(名) 本物にまがふやうにつくると、又、其もの。(僞、擬)。

(に-せ)「二世」(名) 現世と來世と。「——の夫婦」。

にせ-いん「贋印」(名) にせの印形。僞造の印。

にせ-がね「贋金」(名) まことのものにあらざる僞造の貨幣。

にせ-くび「贋首」(名) その人の首級にあらずして、その人の首級と稱せらるゝもの。

にせ-きちがひ（ガイ）「僞狂」(名) いつはりて狂人のさまをよそふと、又、其人。(陽狂)。

にせ-さつ「贋札」(名) 本物にあらざる僞造の紙幣。

にせ-しようもん「贋證文」(名) 僞造せるいつはりの證文。

にせ-の-ちぎり「二世契」(名) 夫婦のちぎり。

にせ-の-やくそく「二世約束」(名) 前條に同じ。

にせ-はん「僞判」(名) にせいん。

にせ-ふだ「贋札」(名) 「にせさつ」に同じ。

にせ-もの「贋物」(名) にせてつくれるもの、いつはりもの。僞造のもの。

にせ・る(他) 「にす」の訛。

にせ-ゑ「似繪」(名) 其容貌に似せて寫したる繪。

卄**にせん-きやう**（ヨウ キ）「二漸經」(名) 【動】「なまづ」の一名(房州地方の方言)。

(に-せん-せき)「二千石」(名) (漢にて刺史の祿が二千石なりしよりいふ)一地方の長官。府縣知事。「良——」。

ニ-ソウ「尼僧」(名) アマ。比丘尼。

(にそく-さんもん)「二束三文」(名) いと價値なきものにいふ語。

に-だ「荷駄」(名) 駄馬にて運送する荷物。

(に-たい)「二諦」(名) 【佛】世間と出世間と又は俗諦と眞諦と。

(に-たう)（ト）「二刀」(名) 左右の手におの〳〵一刀を持つと。㊁菓子をも好み酒をも嗜むと。**——りう**「二刀流」(名) 劍道の一派、左右の手に各一刀を持ちて鬪ふもの、宮本無三四の創始にかゝる。

卄**にたか-よつたか**(名) 「にたりよつたり」に同じ。

に-たき「煮焚」(名) 食物を煮又は焚きて、調理すると。(薪炊)。

に-だし「煮出」(名) 「にだしじる」の略言。**——じる**「煮出汁」(名) 削りたる鰹節の細片を湯に煮出して漉(コ)したるもの、味をつけて吸物などとす。(煎汁)。

に-だ・す（さ・し・す・す・せ・せ）「煮出」(他、さ四) 湯にて煮て味を出だす。

にた-つ・く（か・き・く・く・け・け）(自、か四) にた〳〵す。

にた-にた(名、副) うれしげに笑ふさまにいふ語。

にた-もの「似者」(名) ㊀互に似てあるもの。㊁優劣なきもの。**——ふうふ**「似者夫婦」行跡・性質・趣味等の相同じきもの、夫婦となると。

にた-やま「仁田山」(名) ㊀「にたやまおり」の略言。㊁似て非なるもの、仁田山紬の外形のみ紬に似て質の劣りたるよりいふとぞ。**——おり**「仁田山織」(名) 上野國仁田山地方より產出する織物。**——きぬ**「仁田山絹」(名) 仁田山織の絹。**——つむぎ**「仁田山紬」(名) 仁田山織の紬。

に-たり「荷足」(名) 河上の運漕に使用する小船。**——ぶね**「荷足船」(名) 前條に同じ。

に-たり(名) 牛の角を玳瑁に擬(ニ)せてつくりたるもの。

卄**に-たり**(助動) 過去の助動詞「ぬ」の變化なる「に」に「たり」の添はりたる語。

にたり-がき「似柿」(名) 柿の一種、御所柿に似て稍や大く、味劣る。

にたり-よつたり(名) (似寄りてある義)互に優劣高下なきと。

(に-ち)「日」(名) ㊀ひ。「——限」。㊁時間の單位、平太陽日の稱。㊂ひる、ひるま。

(——にち)「日」(接尾) 日を數ふるにいふ語。

(にち-えう)（ヨウ）「日曜」(名) ㊀七曜の第一日、普通休日となす日。㊁轉じて、休日の稱。**——じつ**「日曜日」(名) 前條に同じ。**——び**「日曜日」(名) 前條に同じ。

(にち-げん)「日限」(名) 限り定めたる日數、ひぎり。期日。

(にち-にち［日日］(名,副) 日ごと。ひゞ。毎日。――くわ［日日花］(名) 【植】「はげいとう」の異稱。

(にち-ぼ［日暮］(名) ひぐれ。ゆふかた。

(にち-ぼつ［日沒］(名) 太陽の地平面以下に沒するを、光線屈折のため、夜となる時刻はこれより遲し。日のいり。

(にち-や［日夜］(名,副) ㊀ひるとよると。よるひる。㊁つね。始終。

にちや-つ・く（自,か四） にちやくす。

〜にちや-にちや(名,副) ものゝねばりつくさまにいふ語。

(に-ぢゆう［二重］(名) ㊀ふたかさね。ふたへ。㊁ちようふく。にざい。――ぞこ［二重底］(名) 器物の底の上に更に一つの底あるつくり。又、其つくりの底。――ていたう［二重抵當］(名) 已に抵當となりたるものを更に抵當となすを。――ぶた［二重蓋］(名) 器物の蓋の内に更に蓋あるつくり。又、其つくりの蓋。――まはし［二重廻］(名) 蔽合羽の一名。

(にち-よう［日用］(名) 日々用ふるを。又、其もの。――ひん［日用品］(名) 日用の品物。――ぶん［日用文］(名) 書牘文。往復文。

(にち-りん［日輪］(名) 太陽の稱。――さう［日輪草］(名) 【植】「ひまはり」の一名。

(にちれん-しゆう［日蓮宗］(名) 【佛】佛教の一派、法華經二十八品を所依とし、草木國土悉皆成佛の義を取り、七字の題目即ち南無妙法蓮華經を唱ふるもの、僧日蓮の創始にかゝる。法華宗。

(にち-ろく［日錄］(名) ひゞの事を記るすを。又、其記るしたるもの。

(にち-ゐき［日域］(名) 支那より日本國を指していふ稱呼。

に-つかは・し［似附］(形,二) 似合はし。似合ひてあり。

(にっ-かん［日間］(名) ひるま。ひる。

(にっ-かん［日刊］(名) 日々刊行するを。「―新聞」。

(にっ-き［日晷］(名) ひかげ。

(にっ-き［日記］(名) 日毎の事を書きのするを。又、其記錄。にっし。(日錄)。――ちやう［日記帳］(名) 日毎の事を書きのする帳面。

(にっ-きふ［日給］(名) 一日若干と定めたる給料。

(にっ-きん［日勤］(名) 日毎に出でゝ勤務に服するを。日々出勤するを。

に-つ・く［煮附］(他,か下二) 汁のしみこむまで煮る。にしむ。

に-つ・く［似附］(自,か四) につかはしくあり。にあふ。

に-づくり［荷作］(名) 物を束ね又は包みて荷物をつくるを。にごしらへ。

(にっ-くわ［日課］(名) 毎日きめてする仕事。

(にっ-くわう［日光］(名) ㊀太陽の光線。ひのひかり。㊁「にっくわうぬり」の略言。――たうがらし［日光唐辛］(名) 下野國日光町より初めて製し出だしたる紫蘇卷のたうがらし。――ぬり［日光塗］(名) 下野國日光町より產出する一種の塗物。――ヤウカン［日光羊羹］(名) 下野國日光町にて製する羊羹、細長き箱に入れたるもの。――らふせき［日光蠟石］(名) 下野國日光山足尾邊より出だす蠟石。――らん［日光蘭］(名) 【植】「ぎゆうさう」に同じ。

に-つけ［煮附］(名) につけたるもの。――る(他)「につく」の訛。

(にっけい-へう［日計表］(名) 日々の計算の表。

ニッケル［Nickel］(名) 【化】灰白色の金屬、少しく

磁性を有す、通常の溫度にては空氣中にて光輝を失はず、銅・眞鍮・鐵などの鍍金に用ひられ、又、種々の合金を製するに用ひらる。

にっ-と［莞爾］(副) にこ〳〵と。にこやかに。

につこら・し［莞爾］(形,二) 「につかはし」に同じ。

にっこり-と［莞爾］(副) 「にっこと」に同じ。

(にっ-さん［日參］(名) 毎日神社又は佛閣などへ參詣するを。

(にっ-し［日誌］(名) 「にっき」(日記)に同じ。

(にっ-し［日子］(名) ひかず。日數。

(につ-じ［日次］(名) 日どり。

(にっ-しや［日者］(名) ㊀さきごろ。先日。㊁曆數を推算するもの。曆博士。

(にっ-しやう［入聲］(名) 漢字の四聲の一、屋・沃・覺・質・勿・月・曷・黠・屑・藥・陌・錫・職・緝・合・葉・洽の十七に分つ、これに屬する字はすべて仄字なり。

(にっ-しやう［日章］(名) 日の丸のしるし。――き［日章旗］(名) 日章のはた、即ち我國の國旗。

(にっしや-びやう［日射病］(名) 日光の熱にあたりて、腦充血を起し卒倒するを。

(にっ-しゆつ［日出］(名) 太陽の地平面に出づるを、光線屈折のため夜明は此時刻より早し。ひので。――のくに［日出國］(名) 日本國の異稱。

(にっ-しよく［日蝕］(名) 【天】太陰が太陽と地球との間に來りて太陽を蔽(おほ)ふを、地上の位置によりて皆既蝕・分蝕・金環蝕等見ゆ。

(にっ-しよく［日色］(名) 太陽のいろ。

(にっ-しん［日新］(名) 日々に新になりゆくを。

(にっ-しん［日進］(名) 日々に進步するを。――げっぽ［日進月步］(名) 間斷なく急速に進步するを。

(につ-すう［日數］(名) ひかず。

(にっ-そく［日蝕］(名) 【天】「にっしよく」に同じ。

(にったい-そく［日帶蝕］(名) 【天】日蝕。に同じ。

(にっ-たう［日當］(名) 一日若干と定めて給する手當。

卄(にっ-たう［入唐］(名) 古昔、唐國へ行くをいひし語。

に-つち［丹土］(名) 赤色のつち。

〜にっち-も-さっち-も［二進三進］(副) 如何にも。どうにも。

(にっ-ちゆう［日中］(名) ㊀まひる。正午。㊁ひるま。ひる。

(にっ-てい［日程］(名) 其日になす仕事のほど。

(にってん-し［日天子］(名) 【佛】日輪。

(にっ-とう［日東］(名) 日本國の別稱。

(にっ-ぱい［日牌］(名) 日々佛前に物を供(そな)へて禮拜するを。

(にっぽん-いち［日本一］(名) 我國にて他に比すべきもののなきを。「―の黍團子」。

にっぽん-がた［日本形］(名) 「にほんがた」に同じ。――せんぱく［日本形船舶］(名) 「にほんがたせんぱく」に同じ。

(にっぽん-ぎんかう［日本銀行］(名) 「にほんぎんかう」に同じ。

(にっぽん-たう［日本刀］(名) 我國固有の法によりてきたひつくりたる刀劍。

にっぽん-だましひ［日本魂］(名) やまとだましひ。

にっぽん-ばれ［日本晴］(名) ㊀空に一點の雲だになき好天氣。㊁疑念などの全く霽るゝを。

(にっぽん-ふう［日本風］(名) 「にほんふう」に同じ。

(にっぽん-まい［日本米］(名) 「にほんまい」に同じ。

(に-づみ［荷積］(名) 荷を積むを。

に-つ・む［煮詰］(他,ま下二) 煮汁のつくるまで煮る。

〜につめる(他) 前條の訛。

〜に-つら［似面］(名) にがほ。

に-て(助) 助詞の「に」と「て」との間に或語の略せられたる語、即ち「において」「によりて」「にありて」になして等の意を表するもの。

にて-ひ［似而非］ よく似てあれど、まことのものにあらざるを。

(にとう-しん［二等親］(名) 五等親の條を見よ。

にとう-だて［二頭立］(名) 馬車などの二頭びきなるを。

にとう-びき［二頭挽］(名) 馬車などを馬二頭にて挽(ひ)かするを。

(にとうへん-さんかくけい［二等邊三角形］(名) 【數】二つの邊の相等(ひと)しき三角形。

にど-がり［二度刈］(名) 一年の中に二度刈(か)りとるを。

にど-ざき［二度咲］(名) かへりざき。

(にど-さんど［二度三度］(名,副) たびたび。數回。

にどの-つとめ［二度勤］(名) ㊀一旦廢業したる遊女が、再び遊女となるを。㊁一旦新聞又は雜誌などに掲載せしものを、更に一の冊子として刊行するを。

〜にど-びっくり［二度喫驚］(名) ㊀初に見て感歎したるにひきかへて、其物の意想外に醜惡なるを。㊁婦人の後姿の好くして面貌の醜きを。又、男女に拘はらず音聲の甚だ麗はしくして面貌の醜きを。

に-どり［煮取］(名) 「いろり」に同じ。

に-とろか・す［煮蕩］(他,さ四) 煮てぐたぐたにとろけしむ。

ニトロ-グリセリン［Nitro-glycerin］(名) 【化】「グリセリン」と硝酸及硫酸の混合物との反應によりて生ずる硝酸「エステル」、無色の液體にして甘味を有す、速かに熱するか又は打擊すれば爆發す。

ニトロ-セルローズ［Nitro-cellulose］(名) 【化】綿の如き「セルローズ」を強硫酸及強硝酸の混合液にて處理するときに生ずる硝酸「エステル」。

ニトロ-ベンゼン［Nitro-benzene］(名) 【化】淡黃色の液體、一種の香氣を有す、「ベンゼン」を強硝酸にて處理すれば得。

にな［蜷］(名) 【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、形は田螺に似、介殼黑色にして細長なり、川・溝などに棲む。(河貝子)。――いろ［蜷色］(名) ㊀かさねの色目、表は黃色にして、裏の青色なるもの。㊁青黑き染色。

卄に-なし［二無］(形,一) 他に比なし。無類なり。

に-なは［荷繩］(名) 荷にかくる繩。

に-なひ［擔］(名) ㊀になふを。㊁「になひをけ」の略言。――かご［擔籠］(名) 物を入れてになふ籠。――つむじ［擔旋毛］(名) 二つならびてある旋毛。――ぼう［擔棒］(名) 物をになふ棒。てんびんぼう。あふこ。――をけ［擔桶］(名) 水をいれて擔ふ桶。

に-な・ふ［擔］(他,は四) ㊀肩にかけてかつぐ。かたぐ。㊁負擔す。おふ。

ににん-のり［二人乘］(名) 二人共に乘らるゝ人力車などの稱。

卄に-ぬ［布］(名) 「ぬの」に同じ。「―はさるかも」。

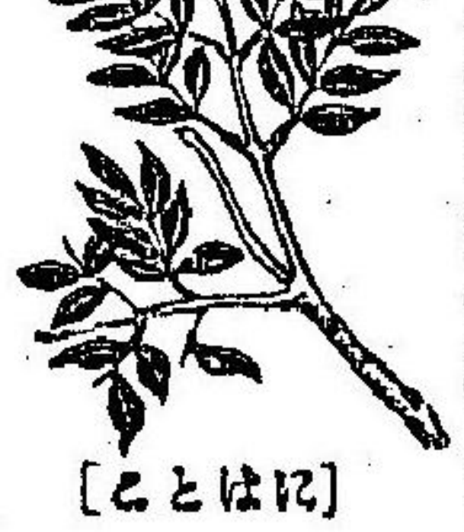
卄――ぐも［布雲］(名) 布を延(の)べたるが如くにたなびきたる雲。

に-ぬき［煮拔］(名) ㊀水を多くして炊(た)きたる飯の粘液を取りたるもの。おねば。㊁「にぬきたまご」の略言。――たまご［煮拔玉子］(名) ゆでたまご。

にぬ-く（かきくくけけ）[煮拔]（他、か四）よく煮る。につむ。
にぬし[荷主]（名）荷物の所有者。荷物の差出人。
╫に-ぬり[丹塗]（名）赤き土にて塗りたるもの。又赤き色に塗りたるもの。「—の矢」。
（に-ねん[二念]（名）㊀二心。㊁餘念。
（に-ねん-こん[二年根]（名）【植】二年生の根。
（に-ねん-せい[二年生]（名）【植】㊀二年間生長して枯死するもの。㊁學校の第二年級に屬する生徒。
に-の-あし[二足]（名）ためらふこと。躊躇すること。
—-をふむ ためらふ。
に-の-うで[二腕]（名）肩（カタ）と肘（ヒヂ）との間。
に-の-く[二句]（名）つぎのことば。「—も出でず」。
╫に-の-ひと[二人]（名）攝政・關白に亞（ツ）ぐ人。
╫に-の-ほ[丹穗]（名）稻穗の成熟して赤色を帶びたるもの。
に-の-まち[二町]（名）㊀局町にて、一の町につぎたる町。㊁轉じて、第二位。
に-の-まひ イ-マ[二舞]（名）㊀安摩といふ舞樂の次に舞ふ滑稽の舞曲。㊁人の失敗にならふこと。人の惡しき振舞を眞似ぬること。
に-の-まる[二丸]（名）本丸の外をかこむ郭。
に-の-みや[二宮]（名）一の宮のつぎの宮。
に-の-や[二矢]（名）二度目に射（イ）る矢。
には ワニ[庭]（名）㊀邸內又は階前の空地。㊁邸內に樹木を栽（ウ）ゑ又は泉石を設けなどしてある所。㊂物事を行ふ地。場所。「合戰の—」。（場）。㊃波靜かなるときの海上。
には-いし ニワ[庭石]（名）庭のかざりにすゑおく石。又、庭に設けたる飛石。—-づたひ タツイ[庭石傳]（名）庭の飛石の上をつたひ行くこと。

にはい-ず[二杯酢]（名）酢又は醬油をまぜたる酢、食物の調理に用ふ。
には-うめ ニワ[庭梅]（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は廣披針形をなし、花は小形にして五瓣白色なり、春の頃開く、果實は小形球狀にして熟すれば食ふべし、こうめ。（郁李）。
にはか ニワカ[俄]（名）㊀だしぬけ。突然。㊁きふ。急。
—-あめ[俄雨]（名）俄に降り出だしたる雨。
—-かぜ[俄風]（名）俄に吹き起りたる風。
—-しばゐ[俄芝居]（名）座興のためにする道化芝居。
—-だうしん ダウ-ド[俄道心]（名）急に發心して出家すること。又、其人。
—-びより[俄日和]（名）俄かに晴天となること。
—-ぶげん[俄分限]（名）僅かの間に富有となること。又、其人。
—-をどり[俄踊]（名）坐興のためにする滑稽なる踊。
には-き ニワ[庭木]（名）庭園に植（ウ）うる樹木。
には-きど ニワ[庭木戸]（名）庭園に設けたる木戸。
には-くさ ニワ[庭草]（名）庭に生じたる草。
╫には-くなぶり ニワ[鶺鴒]（名）【動】「せきれい」の古稱。
には-げた ニワ[庭下駄]（名）庭園を歩むための下駄、齒厚く低くして粗末なるもの。
には-こ ニワ[庭子]（名）農家の奴婢が夫婦となりて生みたる子の、兩親につゞきてまた其家に仕ふるもの。
には-ごけ ニワ[庭苔]（名）庭の面に生ずる苔。
には-こぶ ニワ[庭瘤]（名）土間などの自然に凸凹を生じたるもの。
には-さき ニワ[庭前]（名）室の前に近き庭の部分。「えんさき」。

には-ざくら ニワ[庭櫻]（名）【植】（い）庭前に植ゑたる櫻。いへざくら。（ろ）にはうめの一種、五瓣白色の花開くもの。（櫻桃、桃含）。
には-ぞ ニワソ[甘遂]（名）【植】大戟科に屬する草、莖は短小にして、葉は莖端に叢生す。
╫には-たたき ニワ[鶺鴒]（名）【動】「にはくなぶり」に同じ。
╫には-だち ニワ[庭立]（名）㊀庭におりたつこと。㊁「かへりだち」に同じ。
には-たづみ ニワ[行潦]（名）雨などふりて地上に溜（タマ）り流るゝ水。（潦、潢）。
には-たづみ ニワ[行潦]（枕）にはたづみはながるゝものなれば「ながる」に冠らする詞。
╫には-ちやう ニワチヤウ[庭帳]（名）年貢を記載する帳簿。
には-つくり ニワ[庭作]（名）庭の樹木泉石などをつくること。又、其業の人。
には-づたひ ニワヅタイ[庭傳]（名）庭より庭とつたひ行くこと。
╫には-つつ ニワ[地膽]（名）【動】「はんめう」に同じ。
╫には-つ-どり ニワ[庭津鳥]（名）（庭の鳥の義）【動】「にはとり」の古稱。
╫には-つ-どり ニワ[庭津鳥]（枕）「かけ」に冠らする詞。
には-とこ ニワ[接骨木]（名）（庭常の義）【植】忍冬科に屬する木、枝條繁茂し樹幹彎曲す、葉は羽狀複葉にして緣邊に鋸齒を有し對生す、花は小形白色にして、果實は赤豆に似る、觀賞用として栽培せられ、花は藥用に供せらる。


［にはとこ］

には-とり ニワ[鷄]（名）（庭津鳥の轉）【動】鶉雞類に屬する鳥、雄は美麗且つ大形にして、頭に肉冠（トサカ）あり、雌は矮小にして文彩に乏し、時をつげて

鳴く、現時これを飼養せざる地なし、種類太だ多けれどすべて「ジャバ」及「インド」に產する野雞を原產とす、肉及卵は廣く食用に供せらる。かけ。（稱音、司晨鳥、德禽）。
—-をさくにぎうたうをもちふ[割雞用牛刀]雞の肉を料理するに牛をほふる刀を用ふる義にして、小事を處理するに、大器量の人物又は大仕掛の手段を使用するにいふ。
に-ばな[煮花]（名）茶のでばな。
╫には-なへ ニワナエ[新嘗]（名）「にひなめ」に同じ。
には-のり ニワ[庭騎]（名）庭さきなどにて馬を乘り馴（ナ）らすこと。
には-の-をしへ ニワノオシエ[庭訓]（名）家庭の敎訓。
には-はき ニワ[庭掃]（名）庭を掃除すること。又、其人。
には-び ニワ[庭火]（名）庭上にて焚（タ）く火。庭燎。
には-ふぢ ニワ[庭藤]（名）【植】「いはふぢ」の一名。
には-まはり ニワマワリ[庭回]（名）庭の周圍。
には-みぐさ ニワ[庭見草]（名）【植】萩の異稱。
╫にば-む（まみむむめめ）[鈍]（自、ま四）にびいろとなる。
╫には-もせ ニワモ[庭狹]（名）㊀庭も狹くなるほどなること。㊁誤りて、庭の面。
には-やなぎ ニワ[庭柳]（名）【植】蓼科に屬する草、多く路傍などに生ず、莖の高さ數寸、葉はうき草に似て互生す、花は小形にして赤白色を呈し、夏の頃葉間に生ず。いはやなど。
には-ゐど ニワ[庭井戸]（名）庭園のかざりに設けたる井戸。
にばん-どり[二番鳥]（名）夜明に一番鳥よりもやゝ後れて鳴く雞。
にひ- ニイ[新]（接頭）或語に冠して新しき意を表する語。
╫にひ-いと ニイ[新絲]（名）今年とりたる絲。
╫にび-いろ[鈍色]（名）薄黑き染色、古昔、喪服に

用ひしもの。
╫にひ-くさ ニイ[新草]（名）今年生ひたる草。
╫にひ-くはまゆ ニイクワ[新桑繭]（名）今年の蠶のつくりたる繭。
╫にひ-ごろも ニイ[新衣]（名）あたらしく仕立たる衣。
╫にひ-さきもり ニイ[新防守]（名）新に派遣せられたる防人。
╫にひ-しぼり ニイ[新搾]（名）新に釀造せる酒。
に-びたし[煮浸]（名）一種の料理、鮒・鮎などを燒き、更にこれを醬油と味醂とにて柔く煮たるもの。
╫にひ-たまづさ ニイ[新玉章]（名）始めて其人におくりやる書狀。
╫にひ-なへ ニイナエ[新嘗]（名）「にひなめ」に同じ。
にひ-なめ ニイ[新嘗]（名）昔時は陰曆十一月中の卯の日に行はれ、現今は十一月二十三日に行はるゝ祭事、天皇親ら民間より獻納せし新穀を諸神に供せられ且つ親らも聞こしめしたまふこと。—-さい[新嘗祭]（名）前條に同じ。—-まつり[新嘗祭]（名）前條に同じ。
╫にひ-ばり ニイ[新治]（名）新に開墾すること。又、新に開墾したる田。—-みち[新治道]（名）あらたにひらきたる道路。
╫にひ-まくら ニイ[新枕]（名）男女始めて同衾すること。
╫にひ-まゐり ニイ[新參]（名）いまゝゐり。しんざん。又、其もの。
╫にひ-むすび ニイ[新結]（名）始めてむすぶこと。
╫にひ-むろ ニイ[新室]（名）新につくりたる室。新築の室。—-いはひ ワイイ[新室祝]（名）ざしきびらき。—-うたげ[新室宴]（名）前條に同じ。
╫にひ-も ニイ[新喪]（名）あたらしき喪。
にひ-もの ニイ[新物]（名）あたらしきもの。

にひやく-とを-か ウ-ト[二百十日]（名）立春より二百十日目に當たる日、其頃は、早稻花ざかりなれば、農家にて當日の風雨を大に忌む。
にひやく-はつ-か[二百二十日]（名）二百十日より十日目に當たる日、其頃はなかての花ざかりなれば、二百十日と同じく農家にて當日の風雨を大に忌む。
にひ-よね ニイ[新米]（名）しんまい。
にひ-わかぐさ ニイ[新若草]（名）わかぐさ。
╫に-ふ[二府]（名）左近衞府と右近衞府との稱。
にぶ-いろ[鈍色]（名）「にびいろ」に同じ。
（にふ-えい ニウ[入營]（名）軍隊の營所に入りて兵士となること。入隊。
（にふ-かう ニウコウ[入校]（名）學校に入りて生徒となること。入學。
（にふ-かう ニウコウ[入港]（名）船舶の港に入り來ること。—-ぜい[入港税]（名）入港せる船舶に賦課する税金。
（にふ-かく ニウ[入格]（名）一定のかたにはまること。
（にふ-かく ニウ[入閣]（名）國務大臣に任ぜられ內閣に列すること。
（にふ-がく ニウ[入學]（名）㊀入校に同じ。㊁先生の許に弟子入りすること。にふもん。
（にふ-かん ニウ[入監]（名）囚徒の監獄に入れらるること。
（にふ-きやう ニウキヤウ[入京]（名）京地に入り來ること。
（にふ-ぎよ ニウ[入御]（名）大內へ入らせたまふこと。
（にふ-きん ニウ[入金]（名）㊀內金を拂ひ入るゝこと。㊁金錢を收入せること。
（にふ-ぎん ニウ[入銀]（名）前條（一）に同じ。（德川時代の語）。
（にぶ-きん[貮分金]（名）昔時の金貨、金貮分に當たれり。

（にふ-くわ（ニウ）［入花］（名）俳諧などの添削料。

（にふ-くわい（ニウ）［入會］（名）會に加はりいること。會員となること。

（にふ-くわん（ニウ）［入棺］（名）死者のむくろを棺にをさめいるゝこと。

（にふ-こう（ニウ）［入貢］（名）外國より入朝して貢物（ミツギモノ）を奉ること。

（にふ-こう（ニウ）［入寇］（名）攻め入ること。侵（ヲカ）し入ること。あだすること。

（にふ-こく（ニウ）［入國］（名）領主の其領地に入ること。

（にふ-ごく（ニウ）［入獄］（名）獄につながるゝこと。

（にふ-さつ（ニウ）［入札］（名）賃借・賣買乃至請負等に關し、最も利益多き價格の申出をなしたるものと契約すべき條件にて、多人數のものに各見込の價格を札に書きして申出をなさしむること。いれふだ。——**ばらひ**（バライ）［入札拂］（名）入札によりて賣拂ふこと。

にぶ-し（く し き けれ）［鈍］（形、二）㊀鋭利ならず。するどからず。㊁敏捷ならず。のろし。

（にふ-しぜい（ニウ）［入市税］（名）市に輸入する貨物に對して、其輸入者に賦課する租税。

（にふ-しつ（ニウ）［入室］（名）㊀古昔、貴顯の門跡となりて寺院に入らせらるゝこと。㊁其道の奧儀に達すること。

（にふ-しや（ニウ）［入社］（名）社員となること。社に加はり入ること。

（にふ-じやう（ニウヂヤウ）［入城］（名）城中にはいること。

（にふ-じやく（ニウ）［入寂］（名）【佛】死ぬること。

（にふ-しゆ（ニウ）［入手］（名）㊀我物として手に入ること。㊁深く造詣すること。よく會得すること。

（にふ-じゆく（ニウ）［入塾］（名）塾に入りて寄宿すること。塾生となること。

（にふ-しん（ニウ）［入津］（名）「にふかう」（入港）に同じ。

（にふ-せき（ニウ）［入籍］（名）或家の戸籍に屬するもの、轉じて他家の戸籍に加はり入ること。

（にふ-せん（ニウ）［入船］（名）いりふね。

にふ-だ［荷札］（名）荷主の名を記して、荷につくる札。

（にふ-たい（ニウ）［入隊］（名）軍隊に入ること。兵士となること。

（にふ-たう（ニウトウ）［入湯］（名）湯に入ること。入浴。

（にふ-だう（ニウドウ）［入道］（名）㊀佛道に入ること。佛門に入ること。㊁古昔、佛道に入りたる三位以上の人の稱。㊂坊主頭の妖怪。㊃坊主頭のものをのゝしりていふ詞。——**しんわう**（ノウ）［入道親王］（名）昔時、入道し給ひし親王の稱。（法親王）。——**むし**［入道蟲］（名）【動】「ぢむし」及「にしどち」の一名。

（にふ-ぢやう（ニウヂヤウ）［入定］（名）【佛】（い）禪定に入ること。（ろ）轉じて、死ぬること。

（にふ-ぢやう（ニウヂヤウ）［入場］（名）其場にはいること。——**きつぷ**［入場切符］（名）入場せさする切符。——**けん**［入場券］（名）前條に同じ。

にふ-つ（ニウ）［入津］（名）船舶の港に入ること。

（にふ-てう（ニウチヨウ）［入朝］（名）外國の使臣などの來りて、朝廷に參内すること。

（にふ-ない（ニウ）［入内］（名）㊀「じゆだい」に同じ。㊁古昔、外位より進みて内位に入りしこと。——**すずめ**［入内雀］（名）【動】雀の一種、甚だ小形にして嘴脚灰色なり、雄は頭背共に赤く、雌は頭背共に黄色なり。（黄雀）。

にぶ-にぶ-し（しく しき しけれ）［鈍鈍］（形、二）いとにぶし。

にふ-ね［荷船］（名）荷物の運送船。

（にふ-ねん（ニウ）［入念］（名）念の入ること。ねんいり。

（にふ-ばい（ニウ）［入梅］（名）梅雨の節に入ること。又、梅雨の節。（「つゆ」の條を見よ）。

にふばく-の-ひん（ニウ）［入幕賓］（名）（晉の謝安の語に出づ）特別に懇意にする客。

（にふ-ひ（ニウ）［入費］（名）金錢をつひやすこと。いりめ。かゝり。

（にふ-ふ（ニウ）［入府］（名）㊀みやこに入ること。㊁入國。

（にふ-ふ（ニウ）［入夫］（名）戸主たる女子と結婚して其家に入りたる男子。いりむこ。——**こんいん**［入夫婚姻］（名）戸主たる女子がなす結婚。

（にふ-ぶ（ニウ）［入部］（名）入國。

（にふ-ぶ（ニウ）［入峰］（名）山伏が修行のため高山などにのぼること。

（にふ-ふぜい（ニウ）［入府税］（名）「にふしぜい」（入市税）に同じ。

（にふ-ブツ（ニウ）［入佛］（名）佛像を寺院に迎へ入ること。——**くやう**（クヨウ）［入佛供養］（名）入佛のために營む法會。

（にふ-ぼく-だう（ニウボクドウ）［入木道］（名）「じゆぼくだう」に同じ。

（にふ-ぼつ（ニウ）［入沒］（名）はいりおつること。

‡にぶ-む（ま み む む め め）［鈍］（自、ま四）「にばむ」に同じ。

（にふ-めつ（ニウ）［入滅］（名）【佛】死ぬること。

（にふ-めん（ニウ）［入麪］（名）「にうめん」（煮麪）に同じ。

（にふ-もん（ニウ）［入門］（名）學校又は塾などに入りて、其生徒となること。——**きん**［入門金］（名）入門のあるしとして差出す金。

（にふ-よう（ニウ）［入用］（名）㊀いりよう。もちひ。㊁いりめ。つひえ。

（にふ-らい（ニウ）［入來］（名）いりくること。いりきたること。じゆらい。

（にふ-らう（ニウロウ）［入牢］（名）牢に入ること。じゆらう。にふごく。

にぶ-る（ら り る る れ れ）［鈍］（自、ら四）にぶくなる。

（にふ-ゐん（ニウ）［入院］（名）㊀僧侶などが寺院に入りて其主となること。㊁療治を受くるため、病院に入ること。

‡にへ（ニエ）［新嘗］（名）（「にひあへ」の約）新しき物を神にそなへ又は人に饗すること。

にへ（ニエ）［贄］（名）㊀朝廷又は神明などに奉る土産物。㊁おくりもの。つかひもの。禮物。

にべ［鮸］（名）【動】硬鰭類中いしもち科に屬する魚、體は側扁、銀灰色にして黒點を有し、腹部は淡黄色なり、灰色の脊鰭を有す、體長一尺餘、深海の泥底に棲息し、其鰾大にして且つ良好なるを以て鰾膠（ニベ）を取る料に供せらる。

にべ［鰾膠］（名）おもにべのふえより製する膠、又、鯉・はも等の皮よりも製す、粘着力甚だ強し。

‡にへ-がり（ニエ）［贄狩］（名）にへにする魚鳥などを捕ふるかり。

‡にへ-さ-に（ニエサニ）［多］（副）澤山に。多く。

‡にへ-どの（ニエ）［贄殿］（名）古昔、禁中にて諸國より奉れる魚鳥を料理せし所。

‡にへ-のはつかり（ニエ）［贄初刈］（名）新穀を朝廷又は神に奉らんため、はじめてかりとること。

‡にへ-びと（ニエ）［贄人］（名）にへかりをなす人。

（に-べん［二便］（名）大便と小便と。

にほ（ニオ）［鳰］（名）【動】「かいつむり」の一名。

にほ-どり-の（ニオ）［鳰鳥］（枕）鳰は水を潜（クグ）るものなるより「かづく」に冠らする詞。

‡にほ-の-うきす（ニオ）［鳰浮巣］（名）鳰の巣、其巣[illegible]などにつくり、うきて見ゆるよりいふ。

にほは-し（ニオ しく しき しけれ）［匂］（形、二）にほやかなり。

にほは-す（ニオサス　さ し す せ せ）［臭］（他、さ四）くさきかをりを發す。

にほは-す（ニオサス　さ し す せ せ）［匂］（他、さ四）㊀つやゝかにす。はえあらしむ。㊁香を發す。かをらす。㊂ほのめかす。諷示す。

‡にほはせる（他）「にほはす」の訛。

にほひ（ニオイ）［臭］（名）あしきかをり。くさき氣。

にほひ（ニオイ）［匂］（名）㊀つや。いろ。（艷）。㊁かをり。か。（香）。㊂おもむき。氣韻。㊃いきほひ。威勢。㊄研（ト）ぎあげたる刀の刃のおもてに生ずる文理。㊅染色又はかさねの色合などに、色のほんのりとくまどれるやうなること。ぼかし。——**あぶら**［匂油］（名）よきかをりのある裝飾用の油。かうゆ。（香油）。——**が**［匂香］（名）にほひ。かをり。か。——**どり**［匂鳥］（名）【動】鶯の異稱。——**ぶくろ**［匂袋］（名）香料を包みて携帶する袋、惡臭をけすためのもの。——**もの**［匂物］（名）にほひよきもの。香料。——**やか**［匂］（名）つやゝか。にほやか。

にほ-ふ（ニオウ　は ひ ふ ふ へ へ）［臭］（自、は四）くさき氣發す。

にほ-ふ（ニオウ　は ひ ふ ふ へ へ）［匂］（自、は四）㊀つやゝかにあり。つやめく。㊁あざやかにあり。はゆ。㊂香發す。かをる。㊃風韻あり。おもむきあり。㊄いきほふ。ひかる。

‡にほ-やか［匂］（名）にほひ高きこと。にほひ多きこと。にほひあらはるゝこと。

（に-ほん［二品］（名）㊀昔時、親王に賜はりし位階の一。㊁二位。

にほん-いち［日本一］（名）「にっぽんいち」に同じ。

にほん-がた［日本形］（名）ものゝ形の日本風なること。西洋形の對。——**せんぱく**［日本形船舶］（名）我國在來の構造による船舶、帆艫によりて航走するもの。和船。

にほん-ぎんかう（ギンコウ）［日本銀行］（名）我國の金融機關の中心たる中央銀行、資本の供給を潤澤にし、兌換の基礎を鞏固にし、金利を按排し、金融を調理する等の責務を有し、普通の銀行業務の外、國庫金の取扱・兌換券の發行等をなす。

にほん-ざし［二本差］（名）㊀昔時、武士の稱、刀と脇差とを差し、よりいふ。㊁燒豆腐又は豆腐田樂等の稱、其二本の串を差すよりいふ。

にほん-し［日本紙］（名）我國在來の製法による紙。

にほん-しゆ［日本酒］（名）我國在來の釀造法による酒。

にほん-たう（トウ）［日本刀］（名）「にっぽんたう」に同じ。

にほん-だましひ（ダマシイ）［日本魂］（名）やまとだましひ。

にほん-ふう［日本風］（名）我國在來のならはし又はかたち。

⌒にほん-ばう（ボウ）［二本棒］（名）㊀昔時、二本差即ち武士をあざけりていひし語。㊁洟（ハナ）をたらしゐる小供をあざけりていふ語。㊂女房にあまき亭主をあざけりていふ語。㊃まぬけたる人をあざけりていふ語。

にほん-まい［日本米］（名）我國より產出する米。南京米などの對。

にまい-じた［二枚舌］（名）㊀虛言を吐くこと。うそをつくこと。㊁中間に立ちて、彼此に矛盾したる言を吐くこと。

に-まめ［煮豆］（名）大豆・黒豆などを砂糖と醤油とにて煮染めたるもの。

（に-めん-かく［二面角］（名）【數】相會する二つの平面のなす角。

に-もち［荷持］（名）荷物をもち行く人。

にもつ〔荷物〕（名）持ちはこぶ物品。運送する貨物、に。——ぐるま〔荷物車〕（名）荷物をのせてはこぶ車。（にぐるま）。——れっしゃ〔荷物列車〕（名）「くわぶつれっしゃ」（貨物列車）に同じ。

にもの〔煮物〕（名）食物をにること。又、にたる食物。

〔に-やき〔煮燒〕（名）にたき。（東京の方言）。

に-やく〔荷役〕（名）㊀船の荷の揚卸しをなすこと。㊁自己の負擔とし持ちあつかふこと。

（にやく-だう〔若道〕（名）男色。鷄姦。

〔にや-ける（けけるけるけれけよ）（自、か下一）柔弱にして色めかしくあり。（纎弱、輕佻）。

〔にやけ-をとこ（名）にやけたる男。（輕薄兒）。

〔に-やっこ〔煮奴〕（名）奴にきりたる豆腐をにしめたるもの。

〔にや-にや（名、副）冷かに且つ絶えず笑ひをふくむさまにいふ語。

に-ゆ（ゆえゆるゆれえよ）〔煮〕（自、や下二）㊀にられて熟となり熟す。㊁水沸騰して湯となる。

（にゆう〔乳〕（名）㊀ち。ちゝ。㊁「くわんにゆう」（貫乳）に同じ。

（にゆう-かう〔乳香〕（名）薰陸（クンロク）の一種、形の乳首に似たるもの。

（にゆう-がん〔乳癌〕（名）乳房に癌の發生する病氣。

（にゆう-こ〔乳虎〕（名）兒をうみこれにちゝのますときの虎、最も猛烈なりといふ。

（にゆう-さん〔乳酸〕（名）【化】砂糖・澱粉等より醱酵のために生ずる一種の酸、牛乳の腐敗して酸味を帶ぶるは、乳汁中の糖分よりこれが發生するによる、桐・飯・餅等の腐敗する際にも生ず。

（にゆう-し〔乳齒〕（名）小兒の出生後六七個月の頃より生じ始め十歳前後に至りて脱（ヌ）け去る齒。

（にゆう-じ〔乳兒〕（名）ちのみご。

（にゆう-しう〔乳臭〕（名）㊀ちゝのにほひあること。ちくさきこと。㊁經驗の足らざること、又は未熟なることをのゝしりていふ語。——じ〔乳臭兒〕（名）未熟なるものをあざけりていふ語。

（にゆう-じふ〔乳汁〕（名）ちしる。ちゝ。

（にゆう-しやう〔乳漿〕（名）乳汁中の一成分、即ち蛋白質及脂肪を除きたる他は皆なこれなり。

（にゆう-しゆ〔乳首〕（名）ちくび。

（にゆう-せきえい〔乳石英〕（名）【鑛】乳白色の石英。

（にゆう-せん〔乳腺〕（名）乳房内にありて乳汁を分泌する腺。

（にゆう-たう〔乳糖〕（名）【化】哺乳動物の乳汁の中に存在する一種の砂糖、蔗糖に比すれば水に溶（ト）け難く又甘味少し、乳汁の主成分なり。

（にゆう-なん〔乳難〕（名）ちゝの十分に出でざること。

（にゆう-ばう〔乳房〕（名）ちぶさ。——くわざん〔乳房火山〕（名）【地】乳房の狀をなす側火山。

にゆう-はくしよく〔乳白色〕（名）ちゝの如き白き色。

にゆう-ハチ〔乳鉢〕（名）藥をすりて細末となすに用ふる陶器又は硝子製の鉢。

（にゆう-び〔乳糜〕（名）【生】食物の消化せられてなりたる營養液、乳狀をなし帶黄白色にして少しく鹹味あり。——えき〔乳糜液〕（名）前條に同じ。

（にゆう-ぼ〔乳母〕（名）めのと。うば。

（にゆう-ぼう〔乳棒〕（名）乳鉢にて藥をする棒。

（にゆう-ぼく〔乳木〕（名）護摩にたく木。

（にゆう-めい〔乳名〕（名）乳のみ兒のときの名。

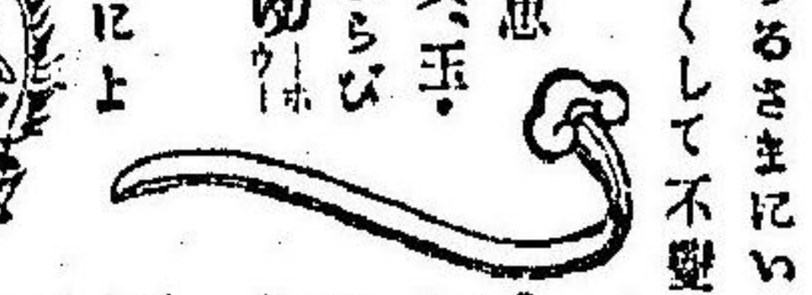
（にゆう-やう〔乳養〕（名）ちゝをのませそだてやしなふこと。

（にゆう-らく〔乳酪〕（名）「ぎうらく」（牛酪）に同じ。

〔にゆっ-と（副）突然にあらはれいづるさまにいふ語。

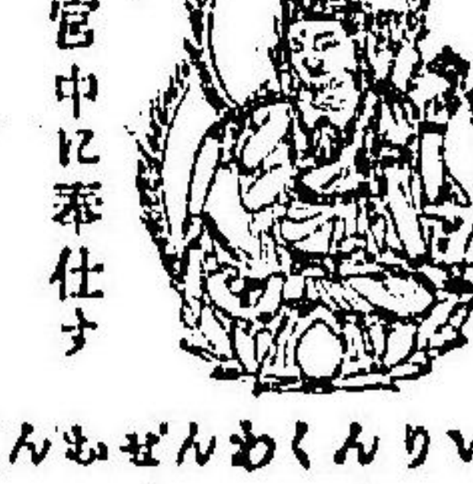
（によ〔如〕（名）【佛】一切處にあまねくして不變なること、即ち、眞如。

（によ-い〔如意〕（名）㊀物事の我が思の如くなること。㊁佛家にて用ふる具、玉・鐵・竹などにてつくり、長さ一尺許、わらびのごとき形をなす。——はうしゆ〔如意寶珠〕（名）靈妙なる珠。



［によい（二）］

（によい-りん〔如意輪〕（名）【佛】「によいりんくわんぜおん」の略言。——くわんぜおん〔如意輪觀世音〕（名）【佛】觀世音の一、六臂にして、如意寶珠を持ちたるもの。



［によいりんくわんぜおん］

艹によう-くわん〔女官〕（名）宮中に奉仕する婦人の總稱。官女。

艹によう-ご〔女御〕（名）㊀親王・三公の女より入内ありて未だ皇后の宣下あらせたまはぬ程の御稱號。㊁中宮に次ぐ女官の稱。——だい〔女御代〕（名）女御の代として奉仕する女官。——や〔女御屋〕（名）女御のつぼね。

艹によう-じゆ〔女孺〕（名）古昔、内侍司に屬したる女官、掃除・點燈などの事をつかさどるもの。

（によう-ばう〔女房〕（名）㊀古昔、禁中の官女の稱。㊁貴族の家の侍女の稱。㊂現今は、平人の妻の稱。内儀。細君。内室。——ことば〔女房詞〕（名）禁中の女房などの用ひし一種の言語、後土御門帝の頃より起り、もと下ざまのものを供御に調じたるに始まるといふ、團子を「いしいし」といひ豆腐を「おかべ」といふ類。

〔にようぼ〔女房〕（名）「にようばう」の音便。

艹によう-ゐん〔女院〕（名）皇太后の佛門に入りたまひて門院の號ある御方の稱、一條天皇の皇太后藤原の詮子の東三條院と號せられ、後一條天皇の母后藤原の彰子の上東門院と號せられしより起る。

（によ-がくせい〔女學生〕（名）「ぢよがくせい」に同じ。

（によ-がくかう〔女學校〕（名）「ぢよがくかう」に同し。

（によ-かん〔女監〕（名）「ぢよかん」に同じ。

艹によ-くらうど〔女藏人〕（名）古昔、地下（ヂゲ）の人の女などの宮仕せしもの、稱。

（によ-くわん〔女官〕（名）「にようくわん」に同じ。

（によ-けい〔女系〕（名）女子の系統。

（によ-ご〔女御〕（名）「にようご」に同じ。

（によ-こう〔女工〕（名）「ぢよこう」に同じ。

によご-の-しま〔女護島〕（名）㊀女子のみ居るといふ想像上の海島。㊁八丈島の異稱。

（によ-さう〔女相〕（名）女のかたち。によたい。

（によ-さう〔女裝〕（名）「ぢよさう」に同じ。

（によ-し〔女子〕（名）「ぢよし」に同じ。

（によ-じ〔女兒〕（名）「ぢよじ」に同じ。

（によ-しう〔女囚〕（名）「ぢよしう」に同じ。

（によ-しよく〔女色〕（名）「ぢよしよく」に同じ。

（によ-じつ〔如實〕（名）【佛】眞理にたがはざること。

（によ-しやう〔女性〕（名）女とうまれたること。をんな。「今のは確かに—の聲」。

（によ-じゆ〔女孺〕（名）「にようじゆ」に同じ。

艹によ-じよゐ〔女敍位〕（名）古昔、女官に位階を賜はりし公事。

（によ-ぜ〔如是〕（名）㊀かくのごときこと。そのとほりなること。㊁【佛】法門。眞理。佛説。㊂ゆるすこと。うべなふこと。——がもん〔如是我聞〕（名）（かく我はきゝたりといふ義）如來の指敎に從ひて阿難これを諸經の佛説の冒頭に冠らせし語。

（によ-せい〔女壻〕（名）「ぢよせい」に同じ。

（によ-せいと〔女生徒〕（名）「ぢよせいと」に同じ。

（によ-ソウ〔女僧〕（名）比丘尼。アマ。

（によ-ぞく〔女賊〕（名）㊀女性の盜賊。㊁【佛】女色の道心を害すること。

（によ-たい〔女體〕（名）女性のからだ。

〔によっ-きり（名、副）高くおこり出づるさまにいふ語。

（によ-てい〔女帝〕（名）女性の皇帝。

艹によ-とうぐう〔女春宮〕（名）春宮に立たせ給へる皇女。

（によ-によ〔如如〕（名）【佛】常住にして平等なる

（によ-にん〔女人〕（名）をんな。女子。婦人。——きんせい〔女人禁制〕（名）寺院などに、婦人の入ることを禁ずること。

艹によ-ぶ（ばびぶぶべべ）〔呻〕（自、は四）うなる。うめく。

艹によ-べつたう〔女別當〕（名）古昔、齋宮に奉仕せし女官。

艹によ-ほうしよ〔女奉書〕（名）古昔、勾當内侍が勅をうけて書きたる文。

（によ-ほふ〔如法〕（名）㊀僧徒の行狀よきこと。㊁篤實なること。

（によ-ほふ〔如法〕（副）㊀かたのごとく。㊁いふまでもなく。

（によほふ-あんや〔如法暗夜〕（名）まっくらやみ。あんのやみ。

によほふ-の-やみ〔如法暗〕（名）前條に同じ。

（によ-ぼん〔女犯〕（名）【佛】僧侶が女人と肉交をなすこと。邪淫戒を犯すこと。

（によ-らい〔如來〕（名）【佛】（法身にては不生不滅にして依りて來る所なく去る所なき義、報身にては第一義を如として正覺を來となす義、應身にては、如實の道に乘じ來りて正覺を成したる義）佛の稱。

に-より〔似寄〕（名）によりてあること。

に-よる（らりるるれれ）〔似寄〕（自、ら四）似て居る。よくにてあり。

〔によろ-によろ（名、副）長きもの、しづかにうごめくさまなどにいふ語。

〔によろり（名、副）前條に同じ。

（によ-わう〔女王〕（名）「ぢよわう」に同じ。

（によ-ゐん〔女院〕（名）「にようゐん」に同じ。

にら〔韮〕（名）【植】百合（ユリ）科に屬する草、形は葱に似、莖は扁平にして臭氣多く、食用に供せらる、夏の頃六瓣白色の花開く。ふたもじ。こみら。（韭）。

艹にらぎ〔菹〕（名）菜を鹽又は酢に漬けたるもの。

にらま-ふ（へへふふへへよ）〔睨〕（他、は下二）「にらむ」の延言。

〔にらま-へる（他）「にらまふ」の訛。

にらみ〔睨〕（名）㊀にらむこと。にらむさま。㊁他をおさへつくる威勢。おし。「—がきく」。——あひ〔睨合〕（名）にらみあふこと。——あ-ふ（はひふふへへ）〔睨合〕（自、は四）㊀互ににらむ。㊁互ににくむ。㊂たゝかふ者互に持重して手を下さず。——くら〔睨競〕（名）小兒の遊戲、にらみあひて、まづ笑ひたる方を負けとするもの。——つ-く（けけくくるくれけよ）〔睨附〕（他、か下二）勢つよくにらむ。

——つける（他）「にらみつく」の訛。

にら-む（まみむむめめ）［睨］（他、ま四）㊀目を怒らして見つむ、目かどを立てゝ見つむ。㊁ながしめに見る。じろりと見る。（睨）。㊂目ぼしをつく。

（**に-りん**［二輪］（名）㊀二つの車輪。㊁二つの花。「——咲」。**——しや**［二輪車］（名）二輪の裝置ある車。

にる（ににるるれによ）［似］（自、な上一）互に同じ樣なり。相類す。

にる（ににるるれによ）［煮］（他、な上一）㊀火にかけて沸かす。㊁沸けるものゝ中に入れて熟をとほす。

にれ［楡］（名）【植】「あきにれ」（秋楡）に同じ。

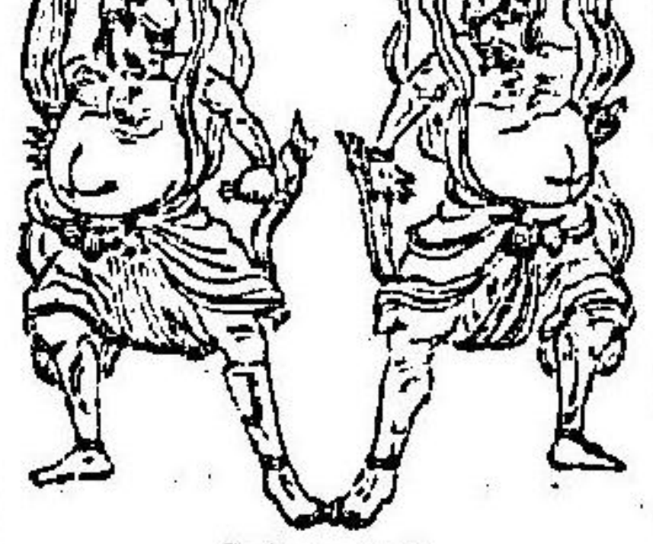
卄**にれ-かむ**（まみむむめめ）［齝］（他、ま四）牛羊などが、もの嚙みて呑みたる後これを吐き出だして再び食ふ。

にれ-もみ［楡樅］（名）【植】「もみ」の一名。

（**にろく-じちゆう**［二六時中］（名）（十二時の間の義）一晝夜、又、終日。

（**にろく-つゐ**［二六對］（名）漢詩にて、近體の七言の句の第二字と第六字との平仄の相對すること。

（**に-わう**［仁王］（名）【佛】「こんがうじん」（金剛神）に同じ。**——もん**［仁王門］（名）仁王の像をおきたる社寺の門。



［にわう］

（**に-ゐん**［二院］（名）上院と下院と。**——せい**［二院制］（名）國會が上院と下院とより組織せらる、制度、我帝國議會は二院制なり。

（**にん**［任］（名）㊀つとめ。せめ。㊁職務を行ふ所。「——に赴く」。

（**にん**［仁］（名）果實の核中にある種子。たね。

（**にん**［忍］（名）㊀しのぶこと。たふること。㊁【佛】自ら僭恣せず、また他人をして僭恣せしめざること。

（**にん**［人］（名）ひと。ひとがら。「——を見て法を說け」。

——にん［人］（接尾）人數を數ふるにいふ語。「百——」。「千——」。

（**にん-い**［任意］（名）其人の思ふまゝにせさすること。其人の自由意思に任ずること。隨意。**——さいむ**［任意債務］（名）【法】債務者が其債務の目的外の物を給付して辨濟することを得る債務。**——しゆつとう**［任意出頭］（名）任意に或所に出頭すること。

（**にん-か**［認可］（名）㊀可なりと認めて許すこと。（許可）。㊁【法】其事の實行を許可する行政處分。**——えいげふ**［認可營業］（名）認可を得るにあらざればなすことを得ざる營業。**——じやう**［認可狀］（名）認可したることの證明書。**——しよう**［認可證］（名）前條に同じ。

（**にん-が**［人我］（名）他人と自己と。

（**にん-がい**［人界］（名）【佛】人間の社會。

（**にん-き**［任期］（名）職務にある一定の年限。

（**にん-き**［人氣］（名）「じんき」に同じ。

（**にん-ぎやう**［人形］（名）㊀人の形に擬して作りたる玩弄物。㊁「にんぎやうじたて」の略言。

——じたて［人形仕立］（名）人形に着する衣服の仕立、即ち腋下をあけて袖をつけたる仕立。

——しばゐ［人形芝居］（名）人形を操（ｱﾔﾂ）りてなどらしむる芝居。

——つかひ［人形遣］（名）人形をあやつりて踊（ﾄﾞ）らしむる人。

——で［人形手］（名）唐子人形を染め出だしたる上品の更紗又は陶器の稱。

——まはし［人形廻］（名）「にんぎやうつかひ」に同じ。

（**にん-きよ**［認許］（名）みとめゆるすこと。

（**にん-ぎよ**［人魚］（名）㊀【動】「さんせうを」の一名。㊁胴以上は人身にして胴以下の魚體なりといふ想像上の動物。

（**にん-ぐわい**［人外］（名）㊀人倫の道にそむきたること。㊁普通人同樣のとりあつかひを受くること能はざる下賤のもの、即ち穢多の類。

（**にん-くわん**［任官］（名）㊀官吏に任ぜらるゝこと。㊁官職に任ぜらるゝこと。（拜命）。

（**にん-けふ**［仁俠］（名）弱きを扶（ﾀｽ）け強きをくじく氣性に富むこと。をとこぎ。をとこだて。（任俠）。

（**にん-げん**［任限］（名）「にんき」（任期）に同じ。

（**にん-げん**［人間］（名）㊀ひと。人類。㊁よのなか。世間。**——かい**［人間界］（名）人類の生息する此世界。**——なみ**［人間並］（名）人類一般の狀態。ひとゝほりのありさま。

（**にん-ごく**［任國］（名）國司の任命せられて、赴任する地方。ずりやう。

（**にん-さう**［人相］（名）㊀ひとの容貌。さうがう。㊁ひとの容貌を見て、其運命吉凶を占ふこと。**——がき**［人相書］（名）人を捜索するため、其容貌の他人と識別するに足るべき特點等を記載して、四方に配布するもの。**——み**［人相見］（名）人相によりて其人の運命吉凶を判斷することを業とする人。（相者、風鑑者）。**——めがね**［人相眼鏡］（名）人相を見るに用ふる眼鏡、即ち天眼鏡。

（**にん-しき**［認識］（名）心が外界及內界の對象を感知又は認知し若しくは斷定すること。知ること。**——ろん**［認識論］＝Epistemology.（名）【哲】認識の起原・本質及範圍等に就て硏究する哲學、古來實在論と觀念論とに分れ、又、經驗論と純理論とに分る。

（**にん-じやう**［刃傷］（名）刃物にて人を傷つくること。

（**にん-じやう**［人情］（名）㊀人類の具有する愛情。いつくしむこゝろ。なさけ。㊁人心自然の情狀。「苦を避け樂に就くは——なり」。**——ぼん**［人情本］（名）男女の痴情を記したる小說。

（**にん-じゆ**［忍受］（名）たへしのびて受くること。「恥辱を——す」。

（**にん-じゆつ**［仁術］（名）「じんじゆつ」に同じ。

（**にん-じゆつ**［忍術］（名）身をかくして敵陣などにしのび入る術。しのびの術。

（**にん-しよ**［任所］（名）赴任する地方。任務を行ふ所。

（**にん-しよう**［認證］（名）其物事をみとめてこれを證明すること。

（**にん-しよう**［認承］（名）みとめうべなふこと。

（**にん-しよう**［人稱］（名）【文法】人代名詞のとなへ、第一人稱・第二人稱・第三人稱に分つ。

（**にん-しよう**［人證］（名）【法】證人を以てする證據方法。

（**にん-しん**［妊娠］（名）はらむこと。みごもること。みもち。（懷妊）。

（**にん-じん**［人參］（名）【植】（い）繖形科に屬する草本、葉は細裂し、花は白色小形にして複繖形花序に排列し、總苞は羽狀葉より成る、根は肥大にして黃赤色を呈す、葉根共に食用に供せられ、廣く各地に栽培せらる。（胡蘿蔔）。（ろ）五加科に屬する草本、葉は掌狀複葉にして、花は小形白色なり、根は藥用に供せられ、其人形をなすものを殊に佳品とす、朝鮮產のもの最も有名なり。**——ざ**［人參座］（名）昔時、藥用の人參を取扱ひし所。**——ぼく**［人參木］（名）【植】十字花科に屬する木、葉は人參に似、花は穗狀花序をなす、枝幹は初め方形綠色なれど後に圓形褐色に變ず、幹を折れば中に方形の心あり、質は胡麻に似て色黑し、小笠原島に產す。

（**にん-ず**［人數］（名）㊀ひとのかず。にんとう。㊁多數の人。

にん-ずる（ぜじずずれぜよ）［任］（自、さ變）つとめとす。せめとす。引受く。「責に——」。

にん-ずる（ぜじずずれぜよ）［任］（他、さ變）㊀役目に就かしむ、官職に就かしむ。㊁擔當せしむ。まかす。

卄**にん-ずる**（ぜじずずれぜよ）［妊］（自、さ變）はらむ。

卄**にんず-だて**［人數立］（名）人數の配列。

（**にん-せん**［人選］（名）人をよりえらぶこと。

（**にん-そく**［人足］（名）㊀荷物の運送などに雇はるゝ勞働者。かるこ。（遞夫、擔夫）。㊁人をあざけりていふ語。

（**にん-たい**［忍耐］（名）たへしのぶこと。こらへたふること。

（**にん-たい**［妊帶］（名）いはたおび。

（**にん-たい**［人體］（名）「にんてい」に同じ。〰**——らし**（しくしくしきしけれ）（形、二）ひとがらし。

（**にん-だく**［認諾］（名）㊀よしとみとめてうべなふこと。（承認）。㊁【法】口頭辯論にて、當事者の一人が相手方の主張を承認すること。

（**にん-ち**［任地］（名）任務を行ふ地。任所。

（**にん-ち**［認知］（名）㊀みとめ知ること。わきまふること。㊁【法】規定の法式により、私生子の父又は母たることを任意に自白すること。

卄**にん-ぢやう**［人長］（名）神樂の舞人の長。

卄**にん-ぢやう**［人定］（名）人の寢しづまる時刻、即ち午後十時。

（**にん-ちゆう**［人中］（名）㊀多人數のなか。㊁はなみぞ。（鼻溝）。**——はく**［人中白］（名）漢法にて、小便の沍（ｵﾘ）を藥用となすときの稱。**——わう**［人中黃］（名）漢法にて、犬便の液を藥用となすときの稱。

（**にん-てい**［認定］（名）みとめてさだむること。

（**にん-てい**［人體］（名）ひとがら。じんぴん。**——らし**（しくしくしきしけれ）（形、二）ひとがららし。

（**にん-とう**［人頭］（名）ひとかず。人數。**——ぜい**［人頭稅］（名）人頭に賦課する租稅。

（**にん-どう**［忍冬］（名）【植】忍冬科に屬する植物、山野に生ず、纏繞莖を有し、葉は楕圓狀をなして對生す、花梗は二花を生じ、苞は大形にして葉狀をなす、花は蕾のとき淡紫色を呈し開けば淡黃色となり終に白色となる、花冠は唇形に分裂す、葉は藥用に供せられ、茶にも代用せらる。（金銀花、老翁鬚）。

（**にん-とく**［人德］（名）其人に自然そなはれる德。

（**にん-とく**［仁德］（名）仁愛深き德。

（**にん-にく**［忍辱］（名）【佛】恥辱を忍びて怨みを報ぜざること。**——がい**［忍辱鎧］（名）【佛】袈裟の異稱。

にん-にく［大蒜］（名）【植】百合科に屬する草本、特異の臭氣を有す、葉は扁平なり、花は繖形花序をなして莖頂に密生す、根は皮赤くして藥用に供せらる。

（**にん-にん**［人人］（名、副）ひとびと。めいめい。

（**にん-のう**［人皇］（名）「にんわう」の轉聲。

（**にん-ば**［人馬］（名）人とうまと。じんば。

（**にん-ぴ-にん**［人非人］（名）（人にして人にあらずとの義）不義非道の人を賤しみていふ語。

（**にん-ぷ**［人夫］（名）㊀公役に使用せらるゝ人民。夫役を課せられたる人民。役夫。㊁荷物の運搬などに使はるゝ勞働者。かるこ。人足。

（**にん-ぷ**［妊婦］（名）懷妊せる婦人。はらみをんな。

な。みもちをんな。（孕婦）。

(にん-べつ［人別］(名) ㊀人毎にわり當つること。人毎にものすること。「―に賦役を充て」。㊁人名。㊂戸籍。㊃人口。――ちやう（ヂヤウ）［人別帳］(名) 人別を記るしたる帳簿。

(にん-べん［人偏］(名) 漢字の偏の名、卽ち仙・供等の字の左方にある「イ」の字。字書にては人部に屬す。

(にん-む［任務］(名) つとめ。やくめ。

(にん-めい［任命］(名) 官職を命ずること。職務を命ずること。

(にん-めん［任免］(名) 官職に任ずることと官職を免ずること。

(にん-めん［人面］(名) ひとのかほ。――さう（ソウ）［人面瘡］(名) 膝頭に生ずる一種の腫物、腐爛して人面の狀をなすといふ。――じう-しん［人面獸心］(名) (面は人にて心は獸のごとき義) 義理をわきまへぬこと。恩義を知らぬこと。

(にん-よう［任用］(名) 職務を授けて使用すること。あげもちふること。

(にん-よう［認容］(名) 可としてゆるすこと。みとめゆるすこと。

(にん-わう［人皇］(名) 神代と區別して神武天皇以後の天皇を申し奉る語。

†にんわう-ゑ［仁王會］(名) 古昔、毎年三月及七月に大極殿・紫宸殿・淸涼殿等にて行はれし公事、朝家の御祈のため、仁王護國般若經を講釋せしめられたり。

ぬ

ぬ　齒的鼻音Ｎ卽ち舌端を硬口蓋の前部に觸れしめて發する鼻音と、母音「ウ」との綴音。

†ぬ［瓊］(名)「に」に同じ。「―なともゆらに」。

†ぬ［野］(名)「の」に同じ。「―の神」。

†ぬ［沼］(名)「ぬま」に同じ。「こもり―」。「田―」。

ぬ（ねにぬぬるぬれねよ）［寐、寢］(自、な下二) いぬ。「―」。

ぬ（なにぬぬるぬれね）(助動) 過去をあらはす助動詞。「春行き―」。

ぬ［不］(助動) 打消の助動詞「ず」の變化。「思は―」。

ぬえ［鵺］(名) ㊀【動】このはづくの一種、大いさ鳩の如く、嘴は黃色にして羽毛に黑斑あり、晝伏し夜出づ、其聲幼兒の泣聲に類す。とらつぐみ。ぬえつぐみ。（鵺）。㊁近衛帝の時、源賴政が紫宸殿上より射落したりといふ怪獸、首は猴・身は虎・尾は蛇の如く、聲はぬえに似たりといへり。㊂轉じて、種々の形をなして一致せざる異體のもの、稱。「―文章」。

†ぬえ-くさ［萎草］(名) 若をれたる草。若なやかなる草。――の［萎草］(枕) 婦人のたをやかなるさまを萎草にたとへて、「め」に冠らする詞。「―の女にしあれば」。

†ぬえ-こ-どり［鵺子鳥］(名) 【動】「ぬえ」に同じ。

†ぬえ-こ-どり［鵺子鳥］(枕)「なく」「のどよぶ」「かたこひ」に冠らする詞。

†ぬえ-ふ・す（さしすすせせ）(自、さ四)「のえふす」に同じ。

ぬか［糠］(名) もみがらの中に米を包みたる薄き皮、又、其薄皮の砕けて細粉となれるもの。（粗糲、米皮、米粃）。――にくぎ　如何に意見すとも其證なきにいふ。「俚言。

ぬか［額］(名) ㊀ひたひ。「―づく」。㊁「ぬかどり」の略。

ぬか―［糠］［接頭］ 或語に冠して、いと細かき意を表する語。「―雨」「―蚊」。

ぬか-あめ［糠雨］(名) いと細かき雨。きりあめ。

ぬか-えび［糠蝦］(名) 【動】「あみ」の一名。

ぬか-か［糠蚊］(名) 【動】蚊の一種、細小白色にして頭部に絮毛あり、雨前などは道路を擁ぎて群飛す。（浮塵子、蚋子）。

†ぬか-がき［糠額］(名) 馬具の名、馬の額の裝飾に著くるもの。

†ぬか-がみ［額髮］(名) まへがみ。ひたひがみ。

ぬか-くぎ［糠釘］(名) 極めて小さき釘。

†ぬかご［零餘子］(名)「むかご」に同じ。

ぬかご［糠子］(名) 【動】「ぬかが」に同じ。

ぬか・す（さしすすせせ）［拔］(他、さ四) ㊀おとす。もらす。（脫）。㊁言ふ。しやべる。「何を―」。（吐）。

†ぬか-づき［酸漿］(名) 【植】「ほほづき」に同じ。

†ぬか-づき-むし［叩頭蟲］(名) 【動】「こめつきむし」の一名。

†ぬか-づ・く（かきくくけけ）［叩頭］(自、か四) （額突く義）頭を地につけて拜禮す。（頓首、稽首）。

ぬか-づけ［糠漬］(名) 糠に鹽を和し、野菜類を漬けたるもの。

ぬか-どり［額鳥］(名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形ひばに似て小さく、羽毛青灰色にしてよく囀（サヘヅ）る。

†ぬか-ば［板齒］(名)「むかば」に同じ。

ぬか-ばへ（エ―バ）［糠蠅］(名) 【動】「ぬかが」に同じ。

ぬか-ぶくろ［糠袋］(名) 糠を入れてゆあみするとき肌を洗ふ袋。

ぬか-ぶるひ（イ―フル）［糠篩］(名) 糠をふるふに用ふるふるひ。

ぬか-ぼし［糠星］(名) 大空に見ゆる無數の小さき星。

ぬか-ミソ［糠味噌］(名) ㊀糠に[illegible]野菜などを漬（ツ）くるもの。――づけ［糠味噌漬］(名) ぬかミソに漬（ツ）けたる漬物。

ぬかり［泥濘］(名) 路上泥深きこと。ぬかること。――み［泥濘］(名) 泥深き所。ぬかる所。

ぬか・る（らりるるれれ）［泥濘］(自、ら四) 地上泥深くして步み難くあり。

ぬか・る（らりるるれれ）［拔］(自、ら四) 氣附かずして仕損ず。油斷して失策す。（怪、呆）。

ぬかる-み［泥濘］(名)「ぬかりみ」に同じ。

ぬき［拔］(名) ㊀ぬくこと。㊁ぬきて其臟をあけむくこと、㊂どぢやうなどの骨をぬきて料理すること。㊃汁の實を入れざること。㊄昔時、人の佩（オ）びたる小刀などを拔き取りし賊。

ぬき［緯］(名) ㊀織物の橫絲。㊁たてのものと橫に打ち違ひたるもの。

ぬき［貫］(名) 橫に柱を貫く材。

ぬき-あし［拔足］(名) 音を立てぬやうに足をあげて步むこと。「―差足」

ぬき-あつ・む（めむむむるむれめよ）［拔集］(他、ま下二) 拔きとりてよせあつむ。

⌐ぬき-あつめる(他)「ぬきあつむ」の訛。

ぬき-あは・す（せせすするすれせよ）［拔合］(他、さ下二) 相爭ふもの互に刀を拔く。

⌐ぬき-あはせる(他)「ぬきあはす」の訛。

ぬき-いだ・す（さしすすせせ）［拔出］(他、さ四) ㊀ひきぬきて出だす。（抽）。㊁よりいだす。（擢）。

ぬき-い・づ（でづづるづれでよ）［拔出］(自、た下二) ㊀あらはれ出づ。おこり立つ。（抽）。㊁すぐれ出づ。ひいづ。

ぬき-い・づ（でづづるづれでよ）［拔出］(他、た下二)「ぬきいだす」に同じ。

ぬき-いと［拔絲］(名) 古着より拔き取りたる經絲。

ぬき-いと［緯絲］(名) 織物の橫絲。

ぬき-うち［拔擊］(名) 刀を拔くと同時に切りつくること。（拔打）。

ぬき-うつし［拔寫］(名) 書中の處々をぬきてうつしとること。

ぬき-えもん［拔衣紋］(名) 衣紋を後の方へ押しさげて衣服を着てあること。のけくび。

ぬき-がき［拔書］(名) 處々をぬきとりてかきしるすこと。

ぬき-かざ・す（さしすすせせ）［拔翳］(他、さ四) 刀を拔きて頭上にふりかざす。

†ぬき-かぶり［緯車］(名)「いとぐるま」に同じ。

†ぬき-かぶる［緯車］(名) 前條に同じ。

ぬき-さし［拔差］(名) ㊀拔出だすと差込むと。㊁ぬくとさすと。㊂減（ヘ）くと加ふると。㊃とりかへ。やりかへ。

ぬき-しろ［綷白］(名) 白の緯絲の織物。

†ぬき-す［貫簀］(名) 古昔、盥（タラヒ）の上にかけおきたる簀、手洗水などの飛び散らぬためのもの。

ぬき-す・つ（てつつるつれてよ）［脫棄］(他、た下二) ぬぎたるまゝにてすておく。（脫捨）。

⌐ぬき-すてる(他) 前條の訛。

†ぬき-すべ・す（さしすすせせ）［脫滑］(他、さ四) 衣服などをすべらしてぬぐ。

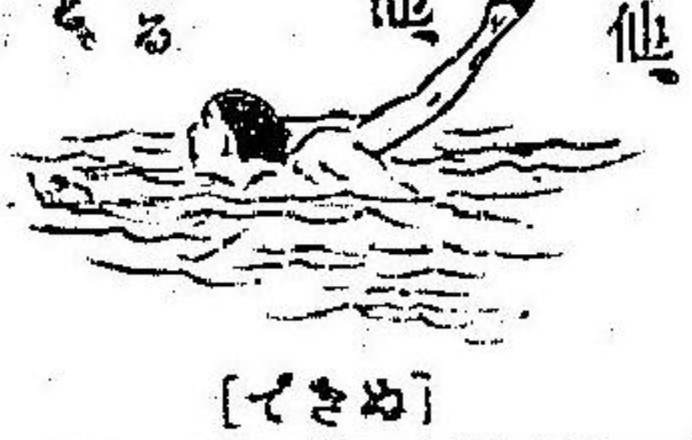
ぬき-つら・ぬ（ねにぬぬるぬれねよ）［貫連］(他、な下二) つらぬきて長くつらぬ。

⌐ぬき-つらねる(他) 前條の訛。

ぬき-つ・る（れれるるるれれよ）［拔連］(他、ら下二) 多人數共に刀を拔く。

⌐ぬき-つれる(他) 前條の訛。

ぬき-で［拔手］(名) 兩手をかはる〴〵水上に拔き出だして泳（オヨ）ぐ[illegible]。「―を切る」。



［ぬきで］

ぬき-で［拔出］(名) ㊀ぬき出だすこと。㊁古昔、相撲（スマフ）の節に於ける選拔の力士の敬稱。――わた［拔出綿］(名) 布團などよりぬき出だしたるわた。ぬきわた。

ぬき-とほ・す（さしすすせせ）［貫通］(他、さ四) つらぬきとほす。つきぬく。

ぬき-と・る（らりるるれれ）［拔取］(他、ら四) ㊀其中より或物だけを取る。㊁彼方より此方にぬきてとる。㊂えらび取る。

ぬき-はな・す（さしすすせせ）［拔放］(他、さ四) 刀を鞘（サヤ）より一氣に拔き出す。

†ぬき-はな・つ（たちつつてて）［拔放］(他、た四) 前條に同じ。

ぬき-ほ［拔穗］(名) 稻の穗をぬきとること、又、ぬきとりたる稻の穗。「―の使」。

ぬき-ほん［拔本］(名) 拔萃したるものを綴りたる冊子。

ぬき-み［拔身］(名) 鞘（サヤ）より拔きあらはしたる刃。白刃。「―の槍」。（露刃）。

†ぬき-れ［貫入］(名) 數珠の稱。

ぬき-わた［拔綿］(名) 布團又は古着等に入れたる綿を拔き取りたるもの。ぬきでわた。

ぬき-をさ［緯筬］(名) 緯絲などをとほすをさ。

ぬきん・づ（でづづるづれでよ）［抽］(自、た下二) （「拔き出づ」の音便）㊀群に秀づ。衆に拔く。すぐる。まさる。ひいづ。「才學衆に―」。㊁すゝみ出でゝものす。先んじてものす。

ぬきん・づ（でづづるづれでよ）［抽擢］(他、た下二) （「拔き出づ」の音便）擢び出す。よりぬく。

⌐ぬきんでる(自)「ぬきんづ」の訛。

ぬ・く（かきくくけけ）［拔］(自、か下二) ㊀はなれ出づ。うごき出づ。㊁離れ落つ。とれ去る。「齒―」、「髮―」、㊂すぐれ出づ。ぬきんづ。（抽）。㊃もる。おつ。（漏）。

㊄すくなくなる。へる。（減）。㊅きゆ。うす。㊆にぐ。のがる。（脫）。㊇攻め落さる。攻め取らる　㊈とはる。つらぬく。㊉智慧足らず。

ぬ・く（かきくくけけ）［拔］（他、か四）㊀ひきて取る。引きて出だす。「刀を―」。㊁えらび取る。えらび出す。（擢、抽）。㊂除去す。のぞく。「去みを―」。㊃省略す。はぶく。「手を―」。㊄間をとばす。㊅だしぬく。あざむく。㊆攻め落す。のり取る。「城を―」。㊇つらぬく。とほす。（貫）。㊈果たす。とぐ。「いひ―」。

ぬ・ぐ（がぎぐぐげげ）［脫］（他、が四）身に着けたるものを解きはなす。「靴を―」。

ぬ・ぐ（げげぐぐるれ）［脫］（自、が下二）身に着けあるものの解けはなる。

ぬく・し（くしきけれ）［溫］（形、一）あたゝかなり。あたゝかし。

［**ぬくさ・し**（くしきけれ）［溫］（形、二）前條に同じ。

［**ぬくさま・る**（らりるるれれ）［溫］（自、ら四）あたゝまる。ぬくまる。

ぬく‐ばひ（バイ）［溫灰］（名）煖かき灰。あつばひ。

ぬぐひ‐いた（ヌグイ）［拭板］（名）ぬりいた。

ぬぐ・ふ（はひふふへへ）［拭］（他、は四）㊀すりて消す。すりて除く。すりて淨（ジヤウ）くす。ふく。㊁きよむ。消す。「千載―へからざる恥辱」。

ぬくまり［溫］（名）ぬくまると。又ぬくまりたる氣。

ぬくま・る（らりるるれれ）［溫］（自、ら四）あたゝまる。ぬくとまる。

ぬくみ［溫］（名）ぬくまりたるどあひ。ぬくまりたる氣。

ぬく・む（めみむむめめ）［溫］（他、ま下二）ぬくとまらしむ。あたゝむ。

ぬくめ‐どり［溫鳥］（名）冬夜、鷹の小鳥を捉（カツ）みて其脚を溫めたる後これを放ち遣ると。

［**ぬくめる**（他）「ぬくむ」の訛。

ぬくもり［溫］（名）ぬくもると。又、ぬくもりたる氣。

ぬくも・る（らりるるれれ）［溫］（自、ら四）ぬくとまる。あたゝまる。

ぬけ［拔］（名）㊀もれ。おち。㊁まぬかれたると。にげたると。㊂智慧の足らぬと。又、其人。

ぬけ‐あきなひ（アキナイ）［拔商］（名）規則をおかし又は仲間をはづれて、ひそかに商賣すると。（脫商）。

ぬけ‐あな［拔穴］（名）㊀通り拔けらるゝ穴。㊁ひそかにのがれ出でらるゝ穴。㊂ものゝ脫漏する場所。

ぬけ‐い・づ（でづづるれよ）［拔出］（自、だ下二）㊀はなれ出づ。ゆるぎ出づ。㊁ぬきんづ。ひいづ。（抽）。㊂のがれいづ。まぬかれいづ。（脫出）。㊃あらはれ出づ。㊄竊に出づ。

［**ぬけいでる**（自）「ぬけいづ」の訛。

ぬけ‐がけ［拔駈］（名）竊に陣屋を拔け出で、先駈すると。他をだしぬきて先駈すると。―**の‐こうみやう**（コウミヨウ）［拔駈功名］（名）拔駈して得たる功名。

ぬけ‐がみ［拔髮］（名）ぬけおちたる髮の毛。（脫髮）。

ぬけ‐がら［拔殼］（名）㊀蛇又は蟬などの脫化したるあとの殼。もぬけのから。（蛻）。㊁のおき人をのゝしりていふ語。

ぬけ‐くび［拔首］（名）時に長く伸び出づといふ首。ろくろくび。

ぬけ‐げ［拔毛］（名）ぬけおちたる毛。（脫毛）。

［**ぬけ‐さく**［拔作］（名）痴鈍なる人。のろま。

ぬけ‐じ［拔字］（名）文句の中にあるべき筈の文字のおちたるもの。脫落したる文字。（脫字）。

ぬけ‐に［拔荷］（名）禁を侵して、竊に輸出する荷物。

［**ぬけ‐ぬけ**（名、副）㊀他に知らさぬやうにするさまにいふ語。㊁むろかめきたるさまにいふ語。

ぬけ‐ば［拔齒］（名）ぬけおちたる齒。（脫齒）。

ぬけ‐まゐり［拔參］（名）父兄又は主人などの許可を得ずに家を拔け出て、伊勢大神宮に參詣すると。

ぬけ‐みち［拔路］（名）㊀うら道。間道。㊁逃（ニ）るべき路。にげみち。㊂逃るべきすべ。

ぬけ‐め［拔目］（名）㊀ぬけ。もれ。おち。㊁手おち。てぬけ。あやまり。㊂ゆだん。

［**ぬける**（自）「ぬく」の訛。

［**ぬげる**（自）「ぬぐ」の訛。

ぬさ［幣］（名）神を祈（イノ）るに奉る物。多くは麻又は木綿若しくは紙などにてつくる。みてぐら。にぎて。

十―**ぶくろ**［幣袋］（名）古昔、旅行するとき、道の神にたむくる幣を入れて携へし袋。

ぬし［主］（名）㊀我が事ふる主人。主ゆう。㊁物を所有する人。もちぬし。㊂其山又は其水などに古くより棲みて靈ありといふ動物の稱。「池の―」。

ぬし［塗師］（名）（「ぬりし」の約）漆細工をなす職人。（漆工、塗匠）。―**ぶろ**［塗師風呂］（名）漆細工の物を入れ置きて乾かす室。―**や**［塗師屋］（名）漆細工を職とする人又は家。

ぬし［主］（代）敬稱の對稱代名詞。きみ。あなた。（後世多く婦人より男子に對していふ）。

十**ぬす‐だ・つ**（たちつつてて）［竊起］（自、た四）鷹狩にて、鳥の叢の陰より竊に逃（ニ）げ去る。

［**ぬすっと**［盜人］（名）「ぬすびと」の訛。

［**ぬすと**［盜人］（名）前條に同じ。

十**ぬす‐ば・む**（まみむむめめ）［盜食］（他、ま四）鷹狩にて、鷹の、おのれの捕（トリ）へたる鳥を其まゝ食ふ。

ぬす‐びと［盜人］（名）他人の所有物を盜みとるもの。竊盜をなすもの。（盜賊）。―**こんじやう**（コンジヨウ）［盜人根性］（名）ぬすみするもの、根性。又、いたく他人のものをほしがる根性。―**の‐あし**［盜人足］（名）【植】蘭科に屬する草。深山に生ず。高さ數尺。莖は藤に似て細長く互生し、花は淡紫色を呈す。果實は人の足の形をなし、熟すれば人の衣服などに粘着す。根は藥用に供せらる。（天麻）。

―**やど**［盜人宿］（名）盜人をかくまふ家。

十**ぬすま・ふ**（はひふふへへ）［盜］［竊］（他、は四）隱してなす。竊になす。「年の八とせをわがぬすまひし」。

ぬすみ［盜］（名）ぬすむと。―**ぎき**［盜聞］（名）ひそかに立聞すると。―**ぐひ**（グイ）［盜食］（名）竊に物を盜みて食ふと。―**だけ**［盜竹］（名）鄰の家の床下にある竹。―**だ・す**（さしすすせせ）［盜出］（他、さ四）ひそかに他人のものを持ち出す。ぬすみて持ち出す。―**と・る**（らりるるれれ）［盜取］（他、ら四）ひそかに取る。十―**に**［盜］（副）ひそかに。ない〳〵で。十―**ばみ**［盜食］（名）ぬすみぐひ。―**もの**［盜物］（名）盜みたる物品。贓品。贓物。

ぬす・む（まみむむめめ）［盜］（他、ま四）㊀竊に他人の財物を奪ひ取る。とる。㊁隱してなす。ひそかになす。「人目を―」。（偸）。㊂ちよっとごまかす。ひそかにやりくりす。「暇を―」。

十**ぬた**［[illegible]］（名）「ぬたはだ」に同じ。

十**ぬた**（名）猪の臥床。

ぬた（名）一種の料理。酢を混じたる味噌に魚肉又は蔬菜を和したるもの。―**あへ**（エーア）（名）前條に同じ。―**なます**（名）前條に同じ。

十**ぬ‐た**［沼田］（名）ぬまた。

ぬた・うつ（たちつつてて）（自、た四）㊀十猪、草の上に轉（ロコ）げて臥る。㊁のたくる。もがく。

ぬたく・る（らりるるれれ）（自、ら四）もがきてうねりこがる。もがきまはる。のたくる。

十**ぬた‐はず**［[illegible]筈］（名）ぬたはだにてつくりたる笛。

十**ぬた‐はだ**［[illegible]］（名）角の皮に波紋のあるもの。

［**ぬっくり**（名、副）㊀あたゝかきさまにいふ語。㊁立ちあがるさまを去らぬふりするさまにいふ語。

［**ぬっさ**（副）前條（三）に同じ。

十**ぬ‐つ‐どり**［野鳥］（名）野にすむ鳥。

［**ぬっぺい**（名）「のっぺい」に同じ。

［**ぬっぺり**（名、副）「のっぺり」に同じ。

十**ぬて**［鐸］（名）「ぬりて」に同じ。

十**ぬで**［白膠木］（名）【植】「ぬるで」に同じ。

十**ぬ‐な‐と**［瓊音］（名）たまのおと。

十**ぬ‐なは**（リスナ）［蓴］（名）【植】「じゆんさい」に同じ。

ぬの［布］（名）麻又は葛などの纖維にて織りたる織物の總稱。―**おび**［布帶］（名）布にて仕立てたる帶。―**ぎぬ**［布衣］（名）布にて仕立てたる衣服。―**こ**［布子］（名）木綿の綿入衣。（縕衣、繦衣）。―**どし**［布漉］（名）布にてこすと。又、布にてこしたるもの。―**ごろも**［布衣］（名）布にて仕立てたる衣。ぬのぎぬ。―**さうじ**（サーツ）［布障子］（名）布を張りたる障子。―**ざらし**［布晒］（名）㊀布を水に洗ひて日に晒すと。㊁一反の布の端を持ち、これを振り動かして波狀をなさしむると。―**はた**［布機］（名）布を織るはた。―**びき**［布引］（名）㊀晒すために麻布を引きはると。㊁【植】菌の一種。ならびて生ふるもの。㊂一種の遊戲。綱引の如くに布を引きあふもの。㊃群集の引きもきらずつゞくさま。―**びきに**［布引］（副）布々引き張りたるが如くに、引きつゞきて。―**ひたたれ**［布直垂］（名）「だいもん（大紋）」の一名。―**びやうぶ**（ビヨー）［布屏風］（名）布を張りたる屏風。―**め**［布目］（名）布の織目のごとき模樣。―**めがみ**［布目紙］（名）ぬの目をつけたる紙。

ぬ‐ばかま［奴袴］（名）「さしぬき」に同じ。

ぬば‐たま［射干玉］（名）からすあふぎの果實。圓くして黑し。―**の**［射干玉］（枕）「黑」「夜」「闇」又は「月」「夢」「寢」「妹」などに冠らする詞。

十**ぬはり‐ぐさ**［王孫］（名）【植】「つくばねさう」に同じ。

（**ぬ‐ひ**［奴婢］（名）下男と下女と。

ぬひ（イヌ）［縫］（名）㊀ぬふと。㊁ぬひめ。㊂ぬひもの。㊃十「ぬひれう」の略言。―**いと**［縫絲］（名）物をぬふに用ふる絲。―**こみ**［縫込］（名）ぬひこむと。又、ぬひこみたる部分。―**し**［縫師］（名）ぬひものを職とする人。―**しろ**［縫代］（名）縫ふべき部分。―**つ・く**（けけくくくるくれけよ）［縫附］（他、か下二）縫ひて附着せさす。―**つ・ぐ**（がぎぐぐげげ）［縫綴］（他、が四）縫ひてつぎあはす。―**つけもん**［縫附紋］（名）他の布帛に描（カ）きたる紋をぬひつけたるもの。十―**つ・ける**（他）「ぬひつく」の訛。―**どの‐つかさ**［縫殿］（名）十「ぬひれう」に同じ。―**どり**［縫取］（名）布帛の上に種々の模樣又は繡畫を、五彩の絲にてぬひつゞると。又、其縫ひつゞりたる模樣又は繡畫。（繡）。―**と・る**（らりるるれれ）［縫取］（他、ら四）縫取をなす。十―**の‐ちめ**［縫綴目］（名）ぬひめ。―**はく**［縫箔］（名）金絲又は銀絲にて縫取すると。又、其ぬひとりしたるもの。―**はり**［縫針］（名）さいはう。針仕事。―

ばり［縫針］（名）ものを縫ふに用ふる針。——べり［縫緣］（名）ぬひとりたるへり。——め［縫目］（名）縫ひ合はせたるさかひ。——もの［縫物］（名）㊀物を縫ふこと。㊁ぬひとり。——もん［縫紋］（名）紋所を絲にて縫ひ出だしたるもの。——もやう（ヨウ）［縫模樣］（名）縫とりたる模樣。十——れうり（ヨウリ）［縫殿寮］（名）古昔、中務省に屬し、衣服裁縫の事を掌りし寮。

十ぬ·びる［野蒜］（名）【植】「のびる」に同じ。

ぬ·ふ（ウ）（はひふふへへ）［縫］（他、は四）㊀絲を通したる針にて布帛などを刺（サ）し綴（ツヅ）る。㊁ぬひものをなす。ぬひとりをなす。㊂ものとものとの間を曲折してとほる。「下界。

⌒ぬ·ぼく［奴僕］（名）しもをとこ。つかひをとこ。

⌒ぬ·ぼこ［瓊矛］（名）たまを以て飾りたる矛。

ぬま［沼］（名）泥土深き湖。——え［沼江］（名）泥土深き江。——えび［沼蝦］（名）【動】沼に産するえび。——かぜ［沼風］（名）沼に吹く風。——がは（ガワ）［沼川］（名）泥土深き川。——た［沼田］（名）泥深き田。——とらのを［沼虎尾］（名）【植】櫻草科に屬する草、水邊に生ず、莖圓し、葉は柳に似細長くして互生す、夏の頃白色の花開く。（猫显葉）。——はぎ［沼萩］（名）【植】前條に同じ。——みづ［沼水］（名）沼にたまれる水。——よもぎ［沼蓬］（名）【植】「いぬよもぎ」の一名。

ぬま·づ·がき［沼津垣］（名）細き割竹にてつくりたる網代垣。「の一名。

十ぬみ·ぐすり（名）【植】「い　枸杞の一名。（ろ苦藥

ぬめ［滑］（名）㊀錢の背面の文字なき方。㊁敷居又は鴨柄などの溝なきもの。㊂すべて表面に模樣又は凹凸なきもの。

ぬめ［絖］（名）一種の絹布、光澤多し、多く書畫の用となすもの。

ぬめ·ごま［滑胡麻］（名）【植】亞麻の一名

ぬめ·らか［滑］（名）「なめらか」に同じ。

ぬめ·らか·す（さしすせ）［滑］（他、さ四）すべらす。

ぬめり［滑］（名）㊀ぬめること。㊁粘液。「蝸牛の—」。

ぬめ·る（らりるるれれ）［滑］（自、ら四）ぬめらかなり。ぬらぬらす。つるつるす。すべる。

⌒ぬら·くら（名、副）㊀滑かにしてとりおさへ難きさまにいふ語。㊁志まりなくなまけたるさまにいふ語。——もの（名）ぬらくらするもの。なまけもの。「ぬれしむ。

ぬら·す（さしすせ）［濡］（他、さ四）ぬるゝやうになす。

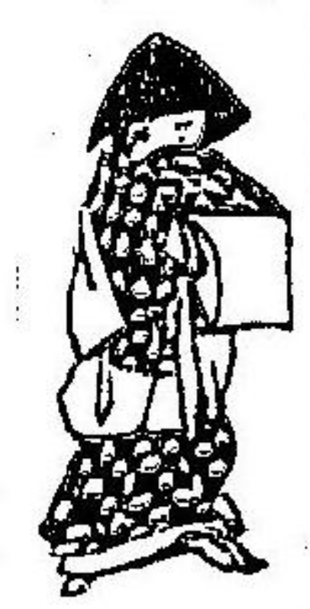
⌒ぬらつ·く（かきくけ）（自、か四）ぬらくらす。

⌒ぬら·ぬら［滑滑］（名、副）「ぬらくら」に同じ。

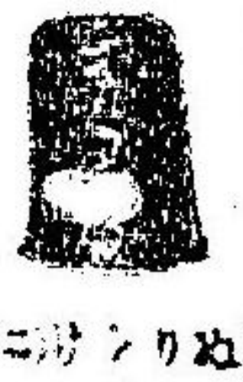
⌒ぬらり（名、副）次條に同じ。

⌒ぬらり·くらり（名、副）「ぬらくら」に同じ。

ぬり［塗］（名）ぬること。又、ぬりたるさま。——あしだ［塗足駄］（名）漆塗のあしだ。——いた［塗板］（名）㊀漆塗の板、これにものを書るし拭ひてはまた書るし、幾度にても書き改むるやうつくりたるもの。ぬぐひいた。（漆簡、粉板）。㊁「こくばん（黒板）」に同じ。——いへ（イエ）［塗家］（名）「ぬりや」に同じ。——がさ［塗笠］（名）漆塗の笠、古昔、婦女子の多くかぶりしもの。——かへ（カエ）［塗替］（名）ぬりかふること。——かべ［塗壁］（名）壁土を塗りたる壁。——ぐすり［塗藥］（名）皮膚に塗りつくる藥劑。（塗抹劑）。


［ぬりがさ］

——ごし［塗輿］（名）古昔、婚禮に用ひたるためぬりの輿。——こ·む（まみむむめめ）［塗籠］（他、ま下二）うちにものをこめて塗る。十——ごめ［塗籠］（名）厚く土を塗りたる室、後世の土藏のごときもの、古く寢所とし、又家財を藏したりといふ。——ごめ·どう［塗籠籐］（名）全體を籐にてまきたる上を漆塗にしたる弓。十——こめる（他）「ぬりこむ」の訛。——し［塗師］（名）塗細工をする工人。——した［塗下］（名）漆塗の下地。——た·つ（てつてて）［塗立］（他、た下二）㊀奇麗にぬり飾る。㊁あつげしやうをなす。——たて［塗立］（名）塗りて未だ間を經（へ）ざること。十——たてる（他）「ぬりたつ」の訛。——だる［塗樽］（名）柄樽の一名。——つ·く（けけくくれ）［塗附］（他、か下二）㊀ぬりてつかす。なすりつく。ぬる。㊁自己の罪過を他人に負はす。かづく。——づくゑ［塗机］（名）漆塗の机。十——つくろ·ふ（ロウ）（はひふふへ）［塗繕］（他、は四）塗物のきずを漆にて塗りてなほす。——つける（他）「ぬりつく」の訛。——づる［塗弦］（名）漆塗の弓づる。——の［塗箆］（名）漆塗にしたる箆。——ばし［塗箸］（名）漆塗の箸。——ぼん［塗盆］（名）漆塗の盆。——もの［塗物］（名）塗細工の器物。（塗器）。——もの·し［塗物師］（名）塗物の細工人。——や［塗屋］（名）外面を土にて塗りたる土藏造の家屋。——ゆみ［塗弓］（名）漆塗の弓。——わん［塗椀］（名）漆塗の椀。——をけ［塗桶］（名）㊀漆塗の桶。㊁上に眞綿などを被せて引きのばす器、漆物にして形桶に似る。


［ぬりをけ］

十ぬりて［鐸］（名）「たく（二）」に同じ。

ぬりで［白膠木］（名）【植】「ぬるで」に同じ。

ぬ·る（らりるるれれ）［塗］（他、ら四）㊀物の面にすりてつく。物の表に延べつく。なすりつく。ぬりつく。㊁自己の罪過を他人に負はす。かづく。㊂あつげしやうをなす。

ぬ·る（れれるるるれよ）［濡］（自、ら下二）㊀水氣染みとほる。うるほふ。しめる。㊁情を通ず。「く。

十ぬ·る（れれるるるれよ）（自、ら下二）髮などおのづから解くる。

ぬる·かね［溫金］（名）熟湯に浸（ひた）してあたゝめたる鍼（ハリ）、鍼法にて眼科齒科などの外科療治に用ふるもの。

ぬる·し（くしきけれ）（形、一）㊀稍やあたゝかし。少しくあつし。ぬくとし。（微溫）。㊁敏捷ならず。のろし。にぶし。（遲鈍）。

十ぬる·たま［寐魂］（名）夢の異稱。

ぬるで［白膠木］（名）【植】漆樹科に屬する木、山野に生じ、高さ丈餘に達す、葉は漆樹に似て廣く粗き鋸齒あり對生す、花は小形白色にして穗狀花序をなす、果實は扁平にして毛あり、仁は藥用に供せらる、蟲のために生じたる葉の贅物を五倍子と稱し、藥用又は染料とす。（鹽膚木）。

⌒ぬる·ぬる（名、副）「ぬらくら」に同じ。

⌒ぬる·び（名）ぬるくび。

⌒ぬる·まこい（形）ぬるし。

ぬる·ま·ゆ［微溫湯］（名）溫度低き湯。ぬるき湯。

ぬるみ［微溫］（名）ぬるき氣味。

ぬる·む（まみむむめめ）［微溫］（自、ま四）ぬるくなる。

十ぬる·む（まみむむめめ）［微溫］（自、ま四）病によりて體溫すゝむ。「ぬるみてなん病みける」。

⌒ぬるり（名、副）「ぬるぬる」に同じ。

⌒ぬ·れい［奴隷］（名）志もべ。やっこ。

ぬれ·いろ［濡色］（名）ぬれたる色。

ぬれ·えん［濡緣］（名）雨戸の敷居の外にある緣側、よく雨にぬるゝよりいふ。

ぬれ·がみ［濡紙］（名）水に濡（ヌ）れたる紙。

ぬれ·がみ［濡髮］（名）洗ひて未だ濕氣の去らぬ毛髮。

ぬれ·ぎぬ［濡衣］（名）㊀濡（ヌ）れたる衣、ぬれごろも。㊁無實の罪過。㊂無根の浮名。

ぬれ·ごと［濡事］（名）芝居にて、男女の痴情を演ずること。——し［濡事師］（名）濡事を演ずる役者。又、濡事に巧（コウ）なる役者。「ぬ

ぬれ·ごろも［濡衣］（名）ぬれたる衣服。ぬれぎぬ。

ぬれ·て［濡手］（名）水に濡（ヌ）れたる手。——であは　ぬれ手にて粟をつかむが如く、骨折らずに利金の得らるゝこと。

十ぬれ·ぬれ［濡濡］（名、副）㊀ぬれながらなすさまにいふ語。㊁いたくぬれたるさまにいふ語。

⌒ぬれ·ねずみ［濡鼠］（名）人の雨などにて全身濡（ヌ）れたるさまにたとへいふ語。

ぬれ·ば·む（まみむむめめ）［濡］（自、ま四）ぬれて見ゆ。

ぬれ·ぶみ［濡文］（名）いろぶみ。

ぬれ·ボトケ［濡佛］（名）屋根無き所に安置せる佛像。（露佛）。

ぬれ·み［濡身］（名）ぬれたる身體。

⌒ぬれる（自）「ぬる」の訛。

ね

ね　齒的鼻音Nの舌端を硬口蓋の前部に觸れしめて發する鼻音と、母音エとの結音。

ね［根］（名）㊀植物の莖の下部にして養分を吸收する所。（「こん」の條參照）。㊁もと。おこり。はじまり。㊂もとどり。「髮の—」。㊃すべて立ち又は生（ハ）えてあるもの、若齒。「齒の—」。㊄凝物の下部の固き部分。「—が張る」。

ね［峯］（名）みね。「筑波—」「富士の高—」。（嶺）。

ね［音］（名）おと。こゑ。「雁が—」。

ね［直］（名）あたひ。ねだん。（價値）。

ね［鼠］（名）【動】「ねずみ」に同じ。

ね［子］（名）㊀十二支の第一。㊁時間の名、即ち夜の十二時。㊂方角の名、即ち正北の方。

ね［寐］（名）ねむり。「—が足らぬ」。（睡）。

十ね［哭］（名）聲を立て、泣くこと。——をなく　聲を出して泣く。——になく　前條に同じ。

十ね［姉］（名）「あね」に同じ。

⌒ね（感）句調を助くるに用ふる感動詞。「仕事を濟まして—それから行きませう」。「の勝負。

ね·あがり［直上］（名）あたひの高くなること。物價

ねあがり·まつ［根上松］（名）根の高く地上に現はれたる松。（根願松、鼓山松）。

⌒ねあきる（自）「ねあく」の訛。「る。

ね·あ·く（かきくけ）［寐脈］（自、か四）あきたる程ねむる。

ね·あげ［直上］（名）あたひを高くすること。物價を騰貴せさすること。

ね·あせ［寐汗］（名）身體の衰弱せる時などに、睡眠中おのづから出づる汗。（盜汗）。

十ね·あはせ（アワセ）［根合］（名）古昔の遊戲、菖蒲の根の上に歌を記し、根の長短を引き合せて勝負せしもの。

ねあはせ（ワーセ）［音合］（名）雉子などの地震に感じて鳴くヿ。

〔**ねい**（感）應答の聲。「はい」に同じ。（近江地方の方言）。

(**ねい-かん**［佞奸］（名）うはべはやさしくして心ねぢけてあるヿ。表面は正直に見えて内心のよこしまなるヿ。又、其人。（佞姦）。

〔**ねい-き**［寐息］（名）睡眠中の呼吸。「―を覗ふ」。

(**ねい-けい-じ**［寧馨兒］（名）斯のやうな男子。「何物老嫗生―」。

(**ねい-さい**［寧歳］（名）安穩なるとし。やすらかなるとし。

〔**ねい-さん**［姉樣］（名）㊀「あね」に同じ。㊁未だ嫁せざる年頃の女子の稱。又、茶屋等に奉公する女子の稱。㊂藝者などが、先輩の女子をさしていふ稱。

――かぶ［姉樣株］（名）「あねえかぶ」に同じ。

――かぶり［姉樣冠］（名）手拭などを額上の左右に角立たせて冠ぶるヿ。あねさんかぶり。

(**ねい-じつ**［寧日］（名）安穩なる日。やすらかなるひ。

(**ねい-しや**［佞者］（名）㊀佞姦なる人。㊁辯才ありて心正しからざる人。「此故惡夫―」。

(**ねい-しん**［佞臣］（名）佞奸なる臣下。

(**ねい-じん**［佞人］（名）佞奸なる人。ねぢけびと。

ねい・す（せしすするすれせよ）［佞］（自、さ變）へつらふ。おもねる。

(**ねい-せい**［寧靜］（名）やすらかなるヿ。志づかなるヿ。

(**ねい-び**［佞媚］（名）へつらひこぶるヿ。

(**ねい-べん**［佞辯］（名）心ねぢけてくちまへよきヿ。佞奸なる辯舌。

ね-いも［根芋］（名）芋の芽ばえたるを食用とするときの稱。

ね-いり［根入］（名）根の地中に入りてある長さ。

ねいり-こ・む（まみむむめめ）［寐入込］（自、ま四）よくねいる。

ねいり-ばな［寐入端］（名）寐入りてまだほどへぬヿ。

ねい・る（らりるるれれ）［寐入］（自、ら四）㊀よく寐る。熟睡す。㊁すたれやむ。㊂志づまりやむ。

ね-いろ［音色］（名）【理】音の調子等しく強さ等しといへどもよく發音體の種類を識別せしむる性質、發音體の音を發するとき原音に伴ふ強さの小さき陪音の配合によりて音色を異にす。

(**ねう**（ニヨウ）［尿］（名）腎臟より分泌し尿道より排出せらるゝ液、一種の臭氣を有し、透明黄色なり。**――くわん**［尿管］（名）「ねうだう」に同じ。**――そ**［尿素］（名）【化】尿中より得る溶(ト)け易き無色針狀の結晶體、其純粹なる水溶液は變化せざれども、尿中にありては、尿の腐敗する際に變化して「アンモニア」等を生ず。**――だう**（ウード）［尿道］（名）尿を膀胱より體外に排泄する管。（尿管）。

卄**ねう・ず**（ニヨウズ）（ぜじずずるずれぜよ）［念］（他、さ變）「ねんず」に同じ。

(**ねう-ぜつ**（ニヨウ）［饒舌］（名）「ぜうぜつ」に同じ。

ね-うち［直打］（名）㊀あたひを定むるヿ。ねだんをさだむるヿ。（評價）。㊁あたひ。ねだん。（估値、評估、估價）。㊂ひん。品格。「―の無い人」。

卄**ねう-ねう**（ニヨウニヨウ）（名）猫のなく聲。

(**ねう-はち**（ニヨウ）［鐃鈸］（名）寺院にて用ふる樂器、響銅(サハリ)にて作り、形銅拍子に似て大なり。

〔**ねえ-さん**［姉樣］（名）「ねいさん」に同じ。

ね-おき［寐起］（名）㊀目覺めて起くるヿ。㊁目覺めて起きてまだ間のなきヿ。㊂寐ると起くるヿ。おきふし。

卄**ね-お・く**（きくくるくれきよ）［寐起］（自、か上二）目さめておく。

卄**ね-おび・る**（れれるるれよ）［寐怯］（自、ら下二）「ねぼく」に同じ。

ね-がけ［根掛］（名）婦人の髻(モトドリ)に掛くる裝飾品。（紋組）。

ね-がし-もの［寐物］（名）商品などの容易に賣れずして久しく貯へ置きたるもの。

ね-か・す（さしすすせせ）［寐］（他、さ四）㊀寐るやうになす。いぬるやうにす。㊁横さまに倒す。たふす。㊂商品又は資金などを活用せずに手もとにおく。「品を―」。㊃物を暖室に入れて黴たゝしむ（殖）。

〔**ねがはくは**（グワン）［願］（副）次條に同じ。

ねがはくは（ネガワクワ）［願］（副）願ふ所は。望む所は。

ねがは・し（しくしきしけれ）［願］（形、二）ねがふ所なり。のぞまし。

ねがひ（イガ）［願］（名）㊀ねがふヿ。ねがふ所。㊁ねがひ志よ。ぐわん志よ。**――い・づ**（でづづるづれでよ）［願出］（他、た下二）官にねがひのすぢを申出づ。ぐわん志よを差出す。**――いで**［願出］（名）ねがひいづるヿ。**――ごと**［願事］（名）ねがふ事柄。**――さげ**［願下］（名）㊀願出たる事の取消を願ふヿ。㊁一旦のぞみたる事を廢止にするヿ。**――志よ**［願書］（名）「ぐわん志よ」に同じ。**――で**［願出］（名）ねがひでるヿ。**――でる**（でてでるでれでよ）［願出］（他、た下二）「ねがひいづ」に同じ。**――て**［願手］（名）願ふ人。**――にん**［願人］（名）前條に同じ。**――ぬし**［願主］（名）前條に同じ。**――のいと**［願絲］（名）七月七日に織女星を祭るに供する絲。**――ぶみ**［願文］（名）ぐわんもん。

ねが・ふ（ウチガ）（はひふふへへ）［願］（他、は四）㊀こひ望む。こひ求む。こふ。㊁願を掛く。祈請す。いのる。㊂目的とす。期す。㊃うらやむ。ほしがる。㊄官に要求す。ぐわん書を差出す。

ね-がへり（エリ）［寐返］（名）㊀寐ねたる體の向きをかふるヿ。㊁敵につくヿ。㊂約を破るヿ。**――を・うつ**　ねがへりをなす。

ね-がへ・る（エル）（らりるるれれ）［寐返］（自、ら四）ねがへりをなす。

ね-から（副）㊀もとより。はじめより。㊁更に。一向に。

ね-ぎ［葱］（名）【植】百合(ユリ)科に屬する草、葉は圓形中空にして長く、末端尖りて臭氣あり、夏の頃、花梗を抽出して小形白色の花開く、廣く各所に栽培せられ食用に供せらる。（香葱）。

ね-ぎ［禰宜］（名）㊀神主の下役。神官。（現、廟祝）。㊁判任官待遇の神官、宮司の命を受けて祭事及事務に從事するもの。

卄**ねぎ-ごと**［祈事］（名）ねがひごと。ぐわんがけ。

ね-ぎし［根岸］（名）㊀山の麓の土地。㊁砂質の上品なる壁土。

ね-ぎたな・し（くしきけれ）（形、二）いぎたなし。

ね-ぎは（ワギ）［寐際］（名）眠につくきは。ねえな。

〔**ねぎ-ま**（名）一種の料理。葱と、まぐろの肉とを合はせて煮たるもの。（東京地方の方言）。

ねぎら・ふ（ラウ）（はひふふへへ）［慰勞］（他、は四）勞を謝す。勞を慰む。

〔**ねぎり-とぎり**（名、副）いろ〳〵といひなしてねぎるさまにいふ語。

〔**ねぎり-はぎり**［根切葉切］（副）あるかぎり。ありたけ。悉皆。「―これきり」。

ねきり-むし［根切蟲］（名）【動】甲蟲類の仔蟲

ぢむし。（蟊賊、蚜蚄、[illegible]）。

〔**ね-ぎ・る**（らりるるれれ）［直切］（他、ら四）價を減ぜしむ。ねだんをひかす。（折價）。

卄**ね・ぐ**（がぎぐぐげげ）［祈］（他、か四）祈願す。ねがふ。

卄**ね・ぐ**（がぎぐぐげげ）（他、か四）慰勞す。ねぎらふ。

ね-ぐさ・し（くしきけれ）［寐臭］（形、二）㊀卄ねたる樣子なり。ねたらし。㊁寐たるによりて生ずる臭あり。

〔**ね-くさ・る**（らりるるれれ）［寐腐］（自、ら四）㊀久しくいねて程をすごす。㊁寐るをのゝしりていふ語。

卄**ね-くた・る**（れれるるれよ）［寐腐］（自、ら下二）寐たるによりてしどけなくなる。

卄**ね-くたれ**［寐腐］（名）ねくたるゝヿ。卄**――れ起**［寐腐起］（名）ねくたれ姿にておき出づるヿ。

卄**――がみ**［寐腐髮］（名）寐たるによりて亂れたる髮、ねみだれがみ。**――すがた**［寐腐姿］（名）ねくたれたるすがた。⌒**――る**（自）「ねくたる」の訛。

ね-くび［寐首］（名）睡(ネム)れる人の首を斬るヿ。「―を掻く」。

〔**ね-ぐら**［塒］（名）鳥の寢る處。とや。**――どり**［塒鳥］（名）とやにある鳥。ねとり。

ね-くら・す（さしすすせせ）［寐暮］（他、さ四）一日をねてくらす。

ね-ぐる・し（しくしきしけれ）［寐苦］（形、二）眠に就(ツ)きにくし。いぬるに苦し。（寢難）。

ね-ぐわん［寐棺］（名）死骸を横臥せしめているゝ、長き造りの棺。（寢棺）。

ね-こ［猫］（名）㊀【動】食肉類中猫科に屬する小獸、多く人家に飼養せらる、頭圓く尾長し、體軀は狹長にして屈伸自在なり、毛色種々あり、夜間は瞳圓大なれども日中には竪針狀となる、よく鼠を捕ふ。㊁〔藝者の異稱。㊂知りて知らぬさまをなすヿ。又、其人。㊃本性をつゝみかくして平凡をよそほふ

ヿ。又、其人。㊄〔土製のアンくわの稱。（東京地方の方言）。**――を かぶる**　知りて知らぬふりをなす。又、本性をつゝみかくして平凡なるさまをなす。

〔**ね-こ**［寐粉］（名）ふるびて役に立たぬ粉。

ね-こ-あし［猫脚］（名）㊀膳などの脚の上膨(フク)れ中窄(サセ)くして下圓きもの。㊁脚力強靭にして容易に倒れざるヿ。

卄**ね-こ-おもて**［猫面］（名）ねこの如き短かきかほ。（[illegible]）。

〔**ね-こ-かす**（さしすすせせ）［寐轆］（他、さ四）㊀横にしてころがす。㊁ねたるまゝにすておく。

ね-こぎ［根扱］（名）樹木を根より引き拔くヿ。

ね-こ・ぐ（がぎぐぐげげ）［根扱］（他、か四）ねこぎにす。

ね-こ-ぐさ［猫草］（名）【植】「ぜがいさう」に同じ。

ね-こ-ぐるま［猫車］（名）坂路にて荷物を運ぶ車。

ね-こ-ご［猫兒］（名）猫の兒。

ね-ごこち［寐心地］（名）ねごゝろ。

ね-ごころ［寐心］（名）睡眠のこゝろもち。ねたるこゝろもち。

ね-ござ［寐蓙］（名）敷きて寐るござ。（臥蓆、涼蓆）。

ね-こ-ざめ［猫鮫］（名）【動】「さゞえわり」に同じ。

ね-こじ［根掘］（名）ねこずるヿ。

卄**ね-こ・ず**（ぢじずずれぢよ）［根掘］（他、さ上二）根のまゝ掘り取る。

ね-こ-ぜ［猫脊］（名）頸の前に出で、背の高く後に彎えたるヿ。又其人。

〔**ね-こそげ**（副）こと〴〵く。のこらず。

ね-こ-だ（名）藁にてつくりたる席、つかなみ。

ね-ごと［寐言］（名）㊀睡眠中に無意識に發する言語。（寐語、囈語）。㊁つまらぬ言。役にたゝぬ言。

ね-こ-なで-ごゑ［猫撫聲］（名）やさしく媚(コ)ぶるごとき聲。やさしくあまゆる如き聲。

〔ねとのめ［猫目］（名）猫の目の如くきはどく物事の變ずること。

〔ねとのひたひ(ヒタイ)［猫額］（名）㊀せまきひたひ。㊁せまき場所。

〔ねとばば［猫糞］（名）もの拾ひ取りて、知らぬ顏して居ること。

ねとびたひ(ヒタイ)［猫額］（名）ねこのひたひ。

卄ねとま［猫］（名）「ねこ」の古稱。（野猫）。

ねとま［猫間］（名）國の殺骨のすかしぼりの穴。

ねとまた［猫股］（名）猫の年老いて尾二岐に分かれ、能く化(バ)くと稱せらるゝもの。（風、金花猫）。

ねとみ［寐込］（名）寐て居る最中。「―を襲ふ」。

〔ねとむ(ネコム)［寐込］（自、ま四）ね入る。熟睡す。

ねとめ［根込］（副）根もろともに。

ねところ［直頃］（名）價と物品と相應せること。賤りも高くもやすくもなきこと。

ねどろぬり［根來塗］（名）鎌倉時代に、紀伊國根來寺より塗り出したる漆器。朱漆に黃色を帶びて刷毛目あるもの。

ねとろぶ(ブ)［寐轉］（自、は四）横さまに臥す。

ねとゑ［寐聲］（名）ねむさうなる聲。ねぼけごゑ。

卄ねざう(カウ)［年星］（名）陰陽家にて、人の本命の曜星を祭ること。

ねざう(ウーソ)［寐相］（名）寐たるすがた。ねずまひ。ねざま。（寐樣）。

卄ねざうぞく(ウーソク)［寐裝束］（名）寐るときの裝束。

ねさがり［直下］（名）ねだんのやすくなること、物價の低落。

ねさげ［直下］（名）直段を減じ下ぐること、物價を低落せさすること。ねびき。

ねざけ［寐酒］（名）寐る時に飲む酒。

ねざさ［根笹］（名）㊀【植】笹の一種、根のよく蔓延して繁茂するもの。（千里竹）。㊁紋所の名、根笹のさまを描(ヱガ)きたるもの。

ねざし［音差］（名）音いろ。

ねざし［根差］（名）㊀根ざすこと。㊁そだち、素性。

ねざす(ささ、さし、さす、させ)［根差］（自、さ四）㊀根差し出づ。㊁原因す、もとづく。㊂兆候あり、きざす。

ねざま［寐樣］（名）ねてゐるさま、ねざう。

ねざむ(め、め、む、むる、むれ、めよ)［寐覺］（自、ま下二）睡眠中ふと目覺む。「ねざめて聞けば」。

ねざめ［寐覺］（名）ねざむること。―ぐさ［寐覺草］（名）【植】荻の異稱。―づき［寐覺月］（名）陰曆九月の異稱。―どり［寐覺鳥］（名）【動】雞の異稱。―る（自）「ねざむ」の訛。

ねしづまる(ら、り、る、れ)［寐靜］（自、ら四）ねむりに就(ツ)きて靜かになる。

ねしね（名）ねぎは。

ねしま（名）ねぎは。

ねじめ［音締］（名）琴・三味線などの絃を絲卷に締めて好音を出だすこと。ねいろの締まりてあること。

ねじめ［根締］（名）㊀植ゑたる樹木の根をつきかためること。㊁生花にて、花の根もとに添へて、固めとする草花などの稱。

ねじろ［根白］（名）根の白きこと。―ぐさ［根白草］（名）【植】芹の異稱。

ねじろ［根城］（名）根據となす城。（牙城、本城）。

ねず［杜松］（名）【植】「むろ」に同じ。

ねず［鼠］（名）【動】「ねずみ」の略言。

ねず［不寐］（名）よもすがら寐ざること。

〔ねすぎる（自）「ねすぐ」の訛。

ねすぐ(ぎ、ぎ、ぐ、ぐる、ぐれ、ぎよ)［寐過］（自、か上二）定刻より久しく寐ぬ、久しく寐て時を失す。

ねすごす(さ、し、す、せ)［寐過］（自、さ四）前條に同じ。

ねずなき［鼠啼］（名）「ねずみなき」に同じ。

ねずのばん［不寐番］（名）ねずばん。

ねずばしり［鼠走］（名）「ねずみばしり」に同じ。

ねずばん［不寐番］（名）よもすがら寐ずして番をすること、又、其人。

ねずまひ(マイ)［寐住］（名）ねざう。ねざま。

ねずまひ(イタチ)［首鼠］（名）ためらふこと、去ゆゑ。

ねずみ［鼠］（名）㊀【動】齧齒類中鼠科に屬する小獸、背部毛色は淡黑にして靑色を帶ぶ、尾は細長にして毛なし、犬齒なく、門齒は上下共に二個ありて琺瑯質を被り形狀鑿の如く嚙嚼に適し、よく食物を盜食し器具を損傷す、生殖力極めて大なり、黑死病の媒介をなすことあり。（社君、家鹿）。㊁「ねずみいろ」の略言。―いらず［鼠不入］（名）食物を入れ置く戸棚、鼠の入るを防ぐもの。―いろ［鼠色］（名）靑色を帶びたる淡黑色、にびいろ。灰色。（鈍色、靑黑色）。―おとし［鼠穽］（名）鼠をおとし入れて捕ふる器、ねずみとり。（捕鼠器）。―かべ［鼠壁］（名）鼠色に塗りたる壁。―がへし(セン)［鼠返］（名）板にてつくり土藏の入口などに設けて、鼠の入るを防ぐもの。―がみ［鼠紙］（名）鼠色の漉(ス)きがへし紙。―げ［鼠毛］（名）馬の毛の鼠色なるもの。―ごめ［鼠米］（名）鼠の臭氣を帶びたる米。―ごろし［鼠殺］（名）巣石にて製したる砒藥、鼠を殺すに用ふるもの。（鼠殺、礜石）。―だけ［鼠茸］（名）【植】菌の一種、朽木又は濕樹の下に生ず、菌傘・菌柄共に鼠色をなるもの。―ちや［鼠茶］（名）鼠色を帶びたる茶色。

―とり［鼠捕］（名）㊀「ねずみおとし」に同じ。㊁「ねずみころし」に同じ。㊂【動】青大將の一名、其人家に入りて鼠などを捕り食ふよりいふ。―なき［鼠啼］（名）㊀鼠の啼く聲。㊁口をすぼめて鼠の啼聲に類する音を出すこと、多くは花柳社會などにて、相思の男女が逢瀨をよろこびなどするときになすもの。卄―ばしり［鼠走］（名）障子又は戸などの上の横木。―はなび［鼠花火］（名）小兒の玩弄物、三寸許の蘆(アシ)の莖に火藥を込めたるもの、火をつくれば、鼠の啼き聲に似たる音を發して地上を走り廻る。―ばんきり［鼠半切］（名）鼠色の半切紙。―ばんし［鼠半紙］（名）鼠色の半紙。―もち［鼠梓木］（名）【植】木犀科に屬する木、葉は椿に似たる厚き革質の全邊葉にして常綠なり、花冠は白色にして裂片は外捲す、花梗は少しく毛を生ず、觀賞用として栽培せらる。（女貞、蠟樹）。

卄ねずり［根摺］（名）古昔、紫草の根にて、衣服を染めたること。卄―のころも［根摺衣］（名）紫草の根を摺りて染めたる衣。

卄ねずゑ［音助緒］（名）鷹に鈴を結びつくる緒。

ねせうべん(ウーショウ)［寐小便］（名）睡眠中に床の上に小便すること。いびたり。よつばり。

〔ねせおこし［寐起］（名）㊀ねかし又はおこすこと。㊁介抱。看護。㊂人を巡迴し又は栄枯せさすること。

〔ねせもの［寐物］（名）ねかしもの。

ねせり［根芹］（名）根を食用とする芹。

〔ねせる［寐］（他）「ねかす」の訛。

ねそこなふ(ーソコナウ)［寐損］（自、は四）㊀ねそびれる。㊁寐る時機を失す。

〔ねそびる(れ、れ、るる、るれ、れよ)（自、ら下二）寐んとして寐つかれず、失眠。

ねだ［根太］（名）ゆかの下に亙(ワタ)したる横木。―いた［根太板］（名）根太の上に張る板。

ねだい［寐臺］（名）臥床となす臺、机の如くにして長大なり。（臥榻）。

ねだうぐ(ードウグ)［寐道具］（名）寐る時に用ふる道具、夜具・布團・枕の類。

卄ねたけし(く、し、き、けれ)［妬］（形、一）ねたまし。

ねたし(く、し、き、けれ)［妬］（形、一）㊀ねたむべし、ねたまし。㊁にくし。㊂うらやまし。

ねたば［寐刃］（名）切味の鈍りたる刃。「―を合はす」。

ねだふし(ーダオシ)［根倒］（名）根こめ拔きて倒すこと。

ねたまし(しく、し、しき、しけれ)［妬］（形、二）ねたむべし。―がほ(ーガオ)［妬顏］（名）ねたましげなる顏つき。

卄ねたます(さ、し、す、せ)［妬］（他、さ四）ねたましと思はしむ。

ねたみ［妬］（名）ねたむこと、にくみ、うらみ。―ごころ［妬心］（名）ねたむこゝろ、しっとしん。

ねたむ(ま、み、む、め)［妬］（他、ま四）㊀嫉み憎む。にくむ。㊁憤り恨む。うらむ。

ねだやし［根絶］（名）根本まで悉く刈り盡くすこと、殘りなく絶やすこと。

〔ねだり［強請］（名）ねだること。

〔ねだる(ら、り、る、れ)［強請］（他、ら四）強(シ)ひて請ふ。押して求む。

ねだん［直段］（名）あたひ。ねうち。

ねぢ［捩子、螺旋］（名）【理】圓壔に隆起部を斜に捲(マ)きつけたる形のものとこれが恰も嵌入し得るやうに空筒に斜に凹條を刻み込みたるものとより成る、前者を雄ねぢといひ後者を雌ねぢといふ、重き物體を引上げ或は壓搾し、若しくは二つの物體を連接するに用ひらる。

ねぢあく(け、け、く、くる、くれ、けよ)［捩開］（他、か下二）ねぢてひらく。

ねぢあぐ(げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ)［捩上］（他、か下二）ねぢて上へあぐ。

〔ねぢあける（他）「ねぢあく」の訛。

〔ねぢあげる（他）「ねぢあぐ」の訛。

ねぢあひ(ーアイ)［捩合］（名）ねぢあふこと。

ねぢあふ(は、ひ、ふ、へ)［捩合］（自、は四）㊀互に捩づ。㊁格鬪す。くみうちす。

ねぢき［捩木］（名）【植】石南科に屬する木、山中に生ず、幹捩れて直からず、葉は互生す、花は筒狀白色なり、枝を燒きて炭とし漆器の磨出に用ふ。「つ」。

ねぢきる(ら、り、る、れ)［捩切］（他、ら四）ねぢて切り斷る。

ねぢく(け、け、く、くる、くれ、けよ)［拗］（自、か下二）㊀曲がりくねる。ゆがみまがる。（拗曲）。㊁心ひがむ。心すなほならず。（佞、拗戾）。

ねぢくぎ［捩子釘］（名）脚部の雄ねぢになりたる釘、これをねぢて物に嵌入す。（螺釘）。

ねぢくび［捩首］（名）首をねぢ切ること。（扭拔頭）。

ねぢくる(ら、り、る、れ)［捩］（他、ら四）ねぢまはす。

〔ねぢくるる(れ、れ、るる、るれ、れよ)（自、ら下二）ねぢれまがる。ねぢく。

卄ねぢけがまし(しく、し、しき、しけれ)（形、二）心ひがみたるやうなり。

卄ねぢけびと［佞人］（名）心のねぢけたる人。心のすなほならざる人。

〔ねぢける（自）「ねぢく」の訛。

ねぢこむ(ま、み、む、め)［捩込］（他、ま四）㊀ねぢて中へ入る。㊁無理に押し入る。㊂先方の失言をおさへてせめ詰(ナジ)る。

ねぢぬき［捩子拔］（名）ねぢを拔く道具。

ねぢばな［捩花］（名）【植】「もぢずりぐさ」に同じ。

ね・ぢ・ふ・す（せせすするすれせよ）［捩伏］（他、さ下二）腕を捩ぢて押へ伏す。

〔ねぢ・ふせる（他）前條の訛。

ねぢ・まはし（リシ ーマ）［捩子廻］（名）捩子を動かしまはす道具。

ねぢ・む・く（かきくくけけ）［捩向］（自、か四）體をねぢて其方へ向く。

ねぢ・む・く（けけくくるくれけよ）［捩向］（他、か下二）捩ぢて其方へ向かす。

〔ねぢ・むける（他）前條の訛。

〔ねぢ・る（らりるるれれ）［捩］（他、ら四）「ねづ」に同じ。（拗）。

〔ねぢ・れ［拗］（名）ねぢれたる度合。

〔ねぢ・れる（れれるるるれれよ）［拗］（自、ら下二）くねりまがる。ねぢく。「ねぢれた飴」。

(ねつ［熱］（名）㊀【理】溫暖の感覺を與ふる本源、昔時はこれを一の物質とし、此物質を多量に含むものは溫度高く少なきものは溫度低しとなしたりしが、物體を摩擦するが如く仕事をなして熱を得るの確（タシカ）められしより、熱は物體分子の運動の「エネルギー」なりと定めらる。㊁病氣のため體溫の亢進せるもの。㊂精神の注ぎ向ふこと。意氣のふるひおこること。㊃のぼせ。逆上。㊄あつきこと。暑氣。㊅いきほひ。氣焰。「ーを吹く」。

ね・づ（ちぢづづるづれぢよ）［捩］（他、た上二）くねり曲がらしむ。ゆがめまはす。ねぢる。「鎖なー」。

(ねつ・がく［熱學］（名）【理】熱の本性に就きて研究する科學。

〔ねっ・から（副）㊀「ねから」に同じ。㊁極めて、いと。

(ねつ・き［寢附］（名）ねつくこと。

(ねつ・き［熱氣］（名）㊀あたゝかき氣。あつき氣。㊁ふるひおこる意氣。興起する精神。

ね・つぎ［根繼］（名）柱などの根の朽ちたる部分を取り去りて、他の材にて補ふこと。

ね・つ・く（かきくくけけ）［寢附］（自、か四）ねむりに就く。

ね・づ・く（かきくくけけ）［根附］（自、か四）根生ず。「寢入る」。

ネックタイ［Necktie］（名）えりかざり。

(ねつ・け［熱氣］（名）體溫の平常より高きこと。

ね・つけ［根附］（名）巾着などの緒の端につけて帶に挾みとむるもの。――どけい［根附時計］（名）「たもとどけい」の一名。

(ねっ・けつ［熱血］（名）激昂せる意氣、奮起せる精神。――だんし［熱血男子］（名）よく物事に激昂奮起する男子。

〔ねっ・こ［根子］（名）木の切株。

(ねっ・こく［熱國］（名）熱帶地方の國。

(ねつ・ざう（サウ トウ）［捏造］（名）「でつざう」に同じ。

(ねつ・さまし［熱醒］（名）亢進せる體熱をさますに用ふる藥劑。解熱劑。

〔ねつ・し（くしき けれ）（形、一）㊀綿密に過ぐ。くだくだし。こつこし。㊁丁寧なり。綿密なり。

(ねっ・し［涅齒］（名）「てっし」に同じ。

(ねっ・しゃ［熱砂］（名）あつきすな。やけたるすな。

(ねっ・しん［熱心］（名）㊀其事物に精神をそゝぐこと。㊁こるること。ふけること。

ねっ・す（せしすするすれせよ）［熱］（自、さ變）㊀熱生ず。あつくなる。㊁のぼす。もだゆ。㊂熱心となる。

ねっ・す（せしすするすれせよ）［熱］（他、さ變）熱をおこさしむ。あたゝむ。わかす。やく。むす。

(ねっ・せい［熱性］（名）よく激昂する性質。よく奮起する性質。

(ねっ・せん［熱線］（名）【理】熱の輻射する方向、輻射によりて達する熱、太陽出て、暖を感ずるは、熱線の傳達による。日光の「スペクトル」を鋭敏なる寒暖計にて檢するに、赤端も溫度上り、黃より菫に至るに從ひて溫度次第に低く、紫に至りては殆ど寒暖計に感ぜず、されど赤より以外に、尙よく溫度上り其作用は殆ど光輝部と等しき長さの處に及ぶ、故に熱線は光輝線に比し、屈折率の更に小なる輻射線なり。

(ねっ・たい［熱帶］（名）㊀【地】南北回歸線間の稱、地球上の溫度最も高き部分にして、一年間に太陽を頭上に見ること二回あり、晝夜長短の差なく、四季の變は殆どこれを感ぜず。㊁【植】森林植物帶の一、北緯二十七度以南の稱。――しょくぶつ［熱帶植物］（名）【植】熱帶に生ずる森林植物、椰・椰子・桄榔等これなり。

(ねっ・たう（タウ トウ）［熱湯］（名）にえたつゆ。にえゆ。

(ねっ・たう（タウ トウ）［熱鬧］（名）人のこみあひてさわがしきこと。人のあつまりあひてにぎはしきこと。

(ねっ・ち［熱地］（名）熱帶の地。あつき所。

(ねっ・ちゅう［熱中］（名）㊀心のうれひもだゆること。㊁其物事に心を專らそゝぐこと。

(ねつ・でんき［熱電氣］（名）【理】異種の金屬二つを接合するとき、其二つの接合部の溫度異なるとき生ずる電氣。

(ねつ・でんたい［熱電堆］（名）【理】蒼鉛と「アンチモン」とを交互に數多折り曲げて鑞ぎ合せたるもの、其兩端を電流計に鑞ぎて輪道を作れば、各片の鑞目の一面と他面との溫度異なるとき電流通ずるにより、微小の溫度の差をも計ることを得。

(ねつ・でんりう（リウ ーノ）［熱電流］（名）【理】熱電氣の流動。

(ねつ・ど［熱度］（名）㊀熱の割合。㊁熱心なる度合。㊂のぼせてゐる度合。

(ねつ・なう（ナウ ーノ）［熱惱］（名）くるしみなやむこと。もだゆること。

(ねつ・ば［熱罵］（名）いたくのゝしること。はげしく

(ねつ・ばう（バウ ーボ）［熱望］（名）心一ぱいに思ひのぞむこと。熱心に希望すること。

(ねつ・びゃう（ビヤウ ーヒ ヨウ）［熱病］（名）體溫のはげしき疾病、卽ち、窒扶斯の類。

(ねっ・ぷう［熱風］（名）あつきかぜ。

(ねつ・へん［熱變］（名）【鑛】鑛物が熱のために變化すること。

ね・づもり［値積］（名）値をつくること、評價。

(ねつ・ようりゃう（リヤウ ヨウ）［熱容量］（名）【理】物體の溫度を一度だけのぼすに要する熱量。

ね・づよ・し（くしき けれ）［根強］（形、一）根本固くして動かず。ねもとしっかりしてあり。

(ねつ・りゃう（リヤウ ヨウ）［熱量］（名）【理】熱の多少の稱、熱量は物體の溫度の上昇を以て計る、通常一瓩（キログラム）の水を攝氏一度だけ溫（アタタ）むるに要する熱量を單位とし、これを「カロリー」といふ。――けい［熱量計］（名）熱量を計る器、通常用ふるものは金屬の器にして、これに水を入れたるものなり、溫度高きものを此器中に入れ、其水の溫度の上昇を見て、入れたる物體の放出したる熱量を知る。

(ねつ・りきがく［熱力學］（名）熱と仕事との關係に就いて論ずる科學。

(ねつ・れつ［熱裂］（名）【鑛】熱のために鑛物の裂くること。

(ねつ・れつ［熱烈］（名）精神ふるひおこりて勢はげしきこと。

ね・ていたう（タウ ート）［寢抵當］（名）其商品を利用せずに抵當とすること。

ね・ても・さめ・ても［寢寤］（副）つねに。絕えず。

+ね・ど［寢所］（名）「ねどころ」に同じ。

ね・どこ［寢床］（名）寢る床。（臥床）。

ね・どこ［寢所］（名）寢る所。ねま。ねや。（寢所）。

ね・どころ［寢所］（名）前條に同じ。

ね・どころ［根所］（名）ねもと。ね。

〔ね・どひ（ヒ ード）［根問］（名）根もとを問ひたゞすこと。――はどひ（ヒ ード）［根問葉問］（名、副）根本より枝葉に至るまで問ふさまにいふ語。のこりなく全體を問ひきはむるさまにいふ語。

ね・とぼ・く（けけくくるくれけよ）［寢惚］（自、か下二）「ねぼく」に同じ。

ね・とぼけ［寢惚］（名）「ねぼけ」に同じ。――る（自）「ねとぼく」の訛。

ね・どり［寢鳥］（名）ねぐらに寢て居る鳥。ねぐらどり。（宿鳥、鴉）。

ね・とり［音取］（名）奏樂する以前に、豫め樂器の調子を合はすること。

〔ね・と・る（らりるるれれ）［寢取］（他、ら四）他人の夫又は情夫と通ず。

+ね・な・く（かきくくけけ）［音泣］（自、か四）聲立て、泣く。

ねなし・かづら［根無葛］（名）【植】旋花科に屬する寄生植物、纏繞莖にして葉は綠色なり、夏の末、小形白色の花開く。

ねなし・ぐさ［根無草］（名）㊀【植】萬年草の一名。㊁浮きたること。又、根のなきこと。

ねなし・ごと［根無言］（名）根據のなき言。つくりごと。虛言。（妄語、訛言）。

+ね・ぬなは（ナハ ーヌ）［根蓴］（名）【植】「ぬなは」に同じ、根の長きにつきていふ。

+ね・の・くに［根國］（名）よみのくに。よみぢ。

ね・の・ひ［子日］（名）㊀十二支の子にあたる日、大黑天の緣日とす。㊁「ねのひのあそび」に同じ。+――づき［子日月］（名）正月の異稱。+――のあそび［子日遊］（名）古昔、正月の初めの子の日に、人々野に出て小松を引きて遊び、千代を祝ひしこと。+――の・ころも［子日衣］（名）古昔、子日遊に着せし衣。

ね・のび［寢伸］（名）寢てゐて手足を伸（ノ）ばすこと。

ね・の・ほし［子星］（名）北極星。

ね・ば［粘］（名）㊀「ねばつち」の略言。㊁貝縮の異稱、「ー縮で首をしめる」。（中國地方の方言）。

〔ね・ばう（ウ ーボ）［寢坊］（名）おそくまでよく寢てゐる人。

ねば・し（くしき けれ）［粘］（形、二）ねばりけ多し。ねばりづよし（黏）。

ねば・す（さしすすせせ）［粘］（他、さ四）ねばるやうにす。ねばらしむ。（黏）。

〔ねば・つ・く（かきくくけけ）［粘着］（自、か四）ねばりつく。ねばくす。

ねば・つち［粘土］（名）粘質を有する土。ねんど。

〔ねば・ねば［粘粘］（名、副）よくねばりて物につくさまにいふ語。

ね・ばり［根張］（名）根の張り出づること。

ねばり［粘］（名）ねばること、又、ねばる度合。（黏）。――け［粘氣］（名）ねばる力。ねばりつく力。（粘着力）。――つ・く（かきくくけけ）［粘着］（自、か四）ねばりて物につく。――づよ・し（くしき けれ）［粘強］（形、一）㊀ねばりけ多し。㊁かどかどしからざれど、容易く破りがたし、しなやかにしてつよし。

ねば・る（らりるるれれ）［粘］（自、ら四）滑かにして密着す。やはらかくしてたやすく附着す。（黏）。

+ね・ば・る（れれるるるれれよ）［寢腫］（自、ら下二）寢て頰など腫れふくる。

ね・ばれ［寢腫］（名）ねばるゝこと。――る（自）「ねばる」の訛。

ネハン［涅槃］（名）【佛】（梵語 Nirvana 圓寂・寂滅・入滅・滅度等と譯す）大乘にては、迷妄を脫却し功德を圓成し不生不滅なる法身の眞體に歸するをいひ、小乘にては、三界の煩惱を斷滅して灰身無爲に歸するをいふ。――にしかぜ［涅槃西風］（名）陰曆、二月十五日前後に一七日の間吹く軟風。（伊豆又は伊勢邊の船頭の語）。――ゑ［涅

槃會」(名)【佛】釋迦牟尼入滅の當日に行ふ法會、我國にては古來二月十五日を其日と定む。

＋ねび[老成](名) ねぶるを。

ねびえ[寐冷](名) 眠りたる間に、身體の冷氣に侵(カオ)さるゝを。

ねびき[直引](名) 直段を減じてやすくするを。

ねびき[根引](名) ㊀樹木などを根こぎにするを。ねこじ。ねこぎ。㊁遊女又は藝者などの身代を出して落籍せさするを。みうけ。

＋ねびとゝの・ふ[老成調](自、は四) ねびて物事よくとゝのふ。

＋ねびびと[老成人](名) ねびたる人。

ねびまさ・る[老成優](自、ら四) ねぶるに從ひて物事まさり行く。

＋ねびる[澤蒜](名)【植】「のびる」に同じ。

＋ねび・る(自、下二)「ねぶ」に同じ。

ねぶ[合歡木](名)【植】「ねぶのき」に同じ。

＋ね・ぶ[老成](自、は上二) ㊀年ふりてあり。齡長けてあり。㊁年よりもませて見ゆ。おとなぶ。㊂年長けて物事に習ふ。經驗を積みて熟す。

ねぶか[根深](名)【植】(根の土中に深く入る義)「ねぎ」の一名。

⌒ねぶかいし(名)「ねぶかはいし」の訛。

ねぶかはいし[根府川石](名) 相模國、根府川村より多く産出する石、翡翠色若しくは赤色にして面滑かなり、多く石碑・飛石などに用ふ。

ねぶた・し(形、二) ねむくあり。ねむげ催せり。

ねぶち[根鞭](名) 細き竹の地下莖卽ち俗にいふ根の節の多き部分を鞭としたるもの。

ねブチ[念佛](名) 次條に同じ。

ねブツ[念佛](名)「ねんブツ」の約言。

ねぶと[根太](名) 癤に似て輕き腫物。

ねぶのき[合歡木](名)【植】荳科に屬する木、葉は二回羽狀複葉にして對生し、夕に至れば萎(ボシ)み朝に至れば伸ぶ、花は夏の頃開く、雄蘂多數にして下部に至り一體をなす、果實は莢をなし種子は米粒の如し、觀賞用として栽培せられ、木材もまた種々の用に供せらる。

ねぶみ[直踏](名) 直段を附くるを。價を定むるを。(評價)。

ねぶり[眠](名) ねぶるを。ねむり。(睡)。 ――ぐさ[眠草](名)【植】荳科に屬する草、高さ一尺許、葉は刺激によりて運動し、指などを觸るれば萎み暫くして伸ぶ。 ――ごゑ[眠聲](名) ねぼけごゑ。 ――ざまし[眠覺](名) ねむりざまし。 ＋――びと[眠人](名) よくねる人。 ＋――め[眠目](名) ねぶたげなる目。

＋ねぶりのき[合歡木](名)【植】「ねぶのき」に同じ。

ねぶ・る[眠、睡](自、ら四)「ねむる」に同じ。

ねぶ・る[舐](他、ら四) 舌のさきにて物を撫で取る。なむ。しやぶる。

⌒ねべや[寐部屋](名) ねるへや。

ねぼ・く[寐惚](自、か下二) 起きたれど尚は睡眠中の如く無意識にてあり。目覺めて尚ほ茫然としてあり。

ねぼけ[寐惚](名) ㊀ねぼくるを。㊁ぼんやりするを。 ――いろ[寐惚色](名) ぼんやりしたる色合。 ――がほ[寐惚顏](名) ㊀ねぼけたる顏つき。㊁ぼんやりしたる顏つき。 ――づら[寐惚面](名) 前條に同じ。 ――め[寐惚目](名) 次條に同じ。 ――まなこ[寐惚眼](名) ㊀ねぼけたる眼。㊁ぼんやりしたる目。 ⌒――る(自)「ねぼく」の訛。

⌒ねほりはほり[根掘葉掘](副) 根底より枝葉にわたりて。殘りなく。「―問ふ」。

＋ねほ・る[寐惚](自、ら下二)「ねぼく」に同じ。

ねま[寐間](名) ねどころ。寢室。 ――き[寐間着](名) 寐に就くとき着る衣服。(寐卷、寢衣)。

⌒ねまぐるしい(形)「ねぐるし」に同じ。

ねまし[直増](名) 直段を增すを。

ねまち[寐待](名) ㊀寐て居て其到來を待つを。㊁寐待の月の夜、卽ち陰曆十九日の夜の稱。 ――のつき[寐待月](名)(其出づるを遲くして寐て待つといふ義) ㊀陰曆十九日の夜の月の稱、立待月・居待月の對。ふしまちのつき。㊁陰曆二十日以後の月の稱にもいふ。 ――のよひ[寐待宵](名)「ねまち」(二)に同じ。

ねまつり[子祭](名) 陰曆十月甲子の日に行ふ大黑天の祭事。

ねまどひ[寐惑](名) 寐ぼけてまどふを。とまどひ。

ねまど・ふ[寐惑](自、は四) ねまどひす。

ねまはし[根廻](名) 樹木などのうゑかへに、其周圍をかねて掘りおくを。

ねまはり[根周](名) 木の根の周圍。

ねみだれがみ[寐亂髮](名) 寐て亂れたる髮。ねくたれがみ。

ねみづ[寐水](名) 汲み置きて一夜を經(へ)たる水。

＋ねみづぐさ[根水草](名)【植】柳の古稱。

ねみみ[寐耳](名) 睡眠中の耳。又、睡眠中に聞くを。「―に聞く」。 ――にみづ 意外の事起りてびつくりするにいふ。

ねむ[合歡木](名)【植】「ねぶのき」に同じ。

ね・む[睨](他、ま下二)「にらむ」に同じ。

ねむけ[睡氣](名) ねむりの催すを、ねむくなるを。 ――ざまし[睡氣覺](名) 睡氣をさますを。又、其わざ。

ねむ・し[睡](形、二) ねむけきざす。ねむたし。ねむくあり。ねむらまほし。

ねむた・し[思睡](形、二) 前條に同じ。

ねむのき[合歡木](名)【植】「ねぶのき」に同じ。

ねむり[眠、睡](名) ねむるを。すゐみん。 ――ぎ[眠木](名)【植】「ねむのき」に同じ。 ――ぐさ[眠草](名)【植】「ねぶりぐさ」に同じ。 ――ぐすり[眠藥](名) しびれぐすり。痲醉劑。 ――げ[眠氣](名)「ねむけ」に同じ。 ――ざまし[眠覺](名)「ねむけざまし」に同じ。 ――め[眠目](名) ねむたげなる目。

ねむ・る[眠、睡](自、ら四)(「ねぶる」の轉) ㊀暫時心身の活動止みて無意識の境に入る。㊁草木の蕊などの暫時萎(シボ)み[illegible]すにいふ。

＋ねめか・く[睨掛](他、か下二) 次條に同じ。

＋ねめつ・く[睨附](他、か下二) 強くにらむ。睨(ネ)む。

⌒ねめつける(他)「ねめつく」の訛。

⌒ねめる[睨](他)「ねむ」の訛。

＋ねもころ[懇](名)「ねんごろ」に同じ。

ねものがたり[寐物語](名) 寐ながらのはなし。

ねや[閨](名)(寐屋の義) 夜間に入りて寐る室。ねま。よどの。 ――ごと[閨事](名)「ばうじ」(房事)に同じ。

＋ねやしぎぬ[粘絹](名) ねりてやはらかにしたる絹。

ねやす[直安](名) 直段の安きを。

＋ねや・す[粘、黏](他、さ四) ㊀練りて粘氣あるやうにす。㊁練りてやはらかにす。

＋ねやど[寐宿](名) ねや。

＋ねやま[根山](名) 近き山。

＋ねゆ・る[粘](自、や下二) ねばる。

ねよげ[寐好氣](名) 寐るに心地よきさま。

＋ねらはり[狙](名)「ねらひ」に同じ。

ねらひ[狙](名) ㊀狙ふを。㊁狙ふまと。 ――い[狙射](名) ねらひすまして弓を射るを。 ――うち[狙擊](名) ねらひすまして擊つを。 ――すま・す[狙澄](他、さ四) 十分に狙ふ。きつかりとねらふ。

ねら・ふ[狙](他、は四) ㊀目標とす。目指す。㊁目指す所に中(ア)てんとして標ふ。目標に外(ハヅ)れざらんやうに定む。㊂覗ひ望む。うかゞふ。

＋ねり[耒轅](名)「とりくび」に同じ。

ねり[遲](名) ㊀そろ〳〵歩むを。ねるを。㊁「ねりもの」の略言。

ねり(名) ㊀ねるを。㊁ねりたる絹布。(練)。㊂よくきたひたる鐵。(鍊)。㊃「ねりぬき」の略言。

ねりあは・す[煉合](他、さ四) ねりてまぜあはす。

ねりいと[練絲](名) ねりて柔かくしたる絹絲。

ねりいろ[練色](名) うすきいろ。淡黃色。

ねりおしろい[煉白粉](名) ねりて製したる白粉。

ねりかう[煉香](名) 細末の香料を蜜にて煉りたるもの、焚きくゆらすに用ふ。あはせたきもの。

ねりかうぢ[煉麴](名) 麴をつめたる鹽酒に入れて醬へたる麴。

ねりかた・む[煉固](他、ま下二) ねりてかたくす。

⌒ねりかためる(他) 前條の訛。

ねりがね[鍊鐵](名) よくきたひたる鐵。

ねりかは[煉革](名) いためがは。

＋ねりか・む[齡](他、ま四)「にれかむ」に同じ。

ねりぎぬ[練絹](名) 練りて柔かくしたる絹布。「生絹(スズシ)」の對。

ねりこ[煉粉](名) ねりて製したる粉。

ねりざけ[煉酒](名) 常の酒に和して飲む白酒の如き飲料、清酒に玉子の蛋白質と砂糖とを入れてしづかに煮たるもの。(白醪)。

＋ねりそ[練麻](名) 木の枝を捩(ネ)ぢて綱の代りとしたるもの、薪などを束ぬるに用ふ。

＋ねりた・つ[練](他、た下二) むづかしく理窟をいふ。

ねりつば[煉鐔](名) ねりかはのつば。

ねりにんぎやう[煉人形](名) 土をねり固めてつくりたる人形。

ねりぬき[練貫](名)(練緯(ヌキ)の義) 生絲を經とし練絲を緯として織りたる絹布、多く儀式用とす。ねり。

ねりぬの[練布](名) ねりて柔かにしたる布。

ねりべい[練屏](名) 土と瓦とにて築き上げたる塀、上を瓦にて葺(フ)きたるもの。(築墻)。

ねりまだいこん[練馬大根](名)【植】武藏國北豐島郡練馬村に產する大根、太くして美味なり。

ねりもの[煉物](名) ねり固めてつくりたるもの、總稱。又、ねりてつくりたる珊瑚・寶石などの擬造物の特稱。 ――し[煉物師](名) 煉物をつくるを業とする職人。

ねりもの[遲物](名) 祭禮のときなどに、ねり行く山車又は踊屋臺などの類。

ねりヤウカン[煉羊羹](名) 羊羹の一種、煮たる赤小豆を擂(ス)りて皮を去り、後更に其水分を除き、寒天を交へ煉りかためて製したるもの。

ねり-やく［煉藥］（名）諸種の材料を蜜にて煉り合はせて製したる藥劑。

ねり-ゆ・く（かきくくけけ）［邌行］（自、か四）ねりて行く。

〔ネル〕（名）「フランネル」の略言。

ね・る（らりるるれれ）［邌］（自、ら四）㊀靜に歩行す。そろそろ歩む。㊁行列をとゝのへて行く。

ね・る（らりるるれれ）（他、ら四）㊀絹などを灰汁にて煮てやはらかになす。（練）。㊁金屬を燒きてきたふ。（鍊）。㊂火にかけてこね固む。（煉）。㊃こねまぜて粘（ネバ）らす。ねばす。（埏）。㊄革類を撓（タ）めて製造す。なめす。㊅みがく。をさむ。㊆推敲す。なほす。「句を―」。㊇經驗を重ぬ。修養を積む。

ね・る（ねねぬぬるぬれねよ）［寐、寢］（自、な下一）（「ぬ」の訛）㊀ねむる。いぬ。㊁横に臥す。ふす。㊂病牀に臥す。やむ。㊃物成熟す。㊄流行止む。㊅商品賣れず。又、資金はたらかず。

〔ね-ろ〕［嶺］（名）（「ろ」は接尾語）山のみね。

ね-わけ［根分］（名）根を分けて植（ウ）うること。

ね-わす・る（れれるるるれよ）［寐忘］（自、ら下二）寐過ぐす。

（ね-わすれる）（自）前條の訛。

〔ね-わたし〕［嶺亙］（名）みねより湖水へ吹き下ろす風。「比良の―」。

ね-を［根緒］（名）三味線の絃の一端に着け、根緒懸にかけて絃を張る組紐。――**かけ**［根緒懸］（名）三味線の棹の胴を貫きて出でたる所、即ち根緒を懸くる所。

（ねん）［年］（名）㊀「とし」に同じ。「―五ヶ月」。㊁「年季」。「―あけ」。

（ねん）［念］（名）㊀かんがへ。おもひ。㊁心をそゝぐこと。注意すること。㊂廿日の稱。「―四日」。――**の いる** 注意してあり。又、手數のかゝる。――**を いる** 注意す。手數をかく。――**を おす** たしかむ。

ねん-あけ［年明］（名）年季の盡くること。又、年季の盡きたる奉公人。

（ねん-えき）［粘液］（名）ねばりたる液體。ねばる液。――**しつ**［粘液質］（名）【心】氣質の一、刺激を感受すること遲鈍薄弱にして、興奮激昂すること少なく、熱心活氣の乏しきもの。――**せん**［粘液腺］（名）【生】粘膜の粘液を分泌する腺。

（ねん-が）［年賀］（名）年始の祝賀。新年の祝儀。

（ねん-かう）（コウ）［拈香］（名）香をつまみてたくこと。燒香。

（ねん-がう）（ゴウ）［年號］（名）我國及清・韓等にて、年に名づくる稱號。即ち、明治・安政などの類。漢の孝武帝のとき建元と號せしに濫觴す。我國にては孝德天皇のときの大化を始めとす。明治以前までは、時々改更ありしが、爾後は天皇御一代間は一稱號と定まりたり。

（ねん-がく）［年額］（名）年々の高。一個年の高。

ねん-が-じやう（ジヨウ）［年賀狀］（名）年賀の書狀。新年狀。

〔ねん-かふ〕（コウ）［年甲］（名）とし。よはひ。

（ねんがら-ねんぢゆう）（副）つねに。絶えず。

（ねん-かん）［年鑑］（名）事物の年々の狀勢の記錄。

（ねん-き）［年期］（名）一年以上の期間。

（ねん-き）［年季］（名）㊀雇人・奉公人を召し使ふ約束の年限。㊁年限を定めて召し使ふ約束。「―ではいる」。

（ねん-き）［年忌］（名）「くわいき」（回忌）に同じ。

（ねん-き）［年紀］（名）㊀とし。よ。年代。㊁よはひ。年齡。

ねんき-あけ［年期明］（名）一年以上の期間の完了すること。

ねんき-あけ［年季明］（名）ねんあけ。

（ねんき-しようもん）［年季證文］（名）約束の年限間は勤めんとの旨をしたゝめたる證書。

（ねん-きふ）（キユウ）［年給］（名）一ヶ年の俸給。年俸。

（ねんき-ぼうこう）［年季奉公］（名）年季を定めてなす奉公。

ねんき-もの［年季者］（名）年季を定めて召し使ふもの。

（ねん-ぎやう-じ）（ギヨウ）［年行事］（名）一年ごとに交替してつとむる行事。

（ねん-ぎよ）［年魚］（名）㊀其年に生じて其年に死する魚。㊁【動】「あゆ」に同じ。

ねん-ぎれ［年切］（名）㊀としぎれ。㊁年季のをはること。

（ねん-きん）［年金］（名）㊀國家より或人に其終身間每年下賜する年額一定の金。㊁私人より或人に一定の年限間若しくは其終身間支給する年額一定の金。――**がく**［年金額］（名）年金の一年のたか。――**ざん**［年金算］（名）年金に關する算法。――**しようしよ**［年金證書］（名）年金受領の權利あることを證明したる證書。

（ねん-ぐ）［年貢］（名）㊀年々のみつぎ物（おもに米にいふ）。㊁小作料。――**まい**［年貢米］（名）年貢としてをさむる米。

（ねん-くわ）［年華］（名）としつき。光陰。

（ねん-くわい）［年回］（名）「くわいき」（回忌）に同じ。

（ねん-くわう）（コウ）［年光］（名）としつき。

（ねん-ぐわん）［念願］（名）のぞみねがふこと。ねがひ。のぞみ。

（ねん-けい）［年契］（名）二國以上の出來事を年を逐ひ對照して錄したるもの。

（ねん-げつ）［年月］（名）としつき。光陰。

（ねんげ-みせう）（ミシヨウ）［拈華微笑］（名）（釋迦尼牟尼の華を拈（ヒネ）るを見て迦葉微笑すといふ故事に出づ、禪宗の條を見よ）心をもって心に傳ふること。いしんでんしん。

（ねん-げん）［年限］（名）定めたる年の期限。

（ねん-こう）［年功］（名）㊀年來の功勞。㊁年來の熟練。「―を積む」。――**かほう**［年功加俸］（名）年功によりて、本俸以外に俸給を與へらるゝこと。

〔ねん-こう〕［鯰公］（名）「なまづ」（二）に同じ。

ねんごろ［懇］（名）㊀大事にすること。手あつきこと。深切なること。こんせつ。ていねい。（慇懃）。㊁したしきこと。なかよきこと。ちつこん。ちかづき。

（ねん-さ）［年差］（名）【天】地球の太陽に對する距離の變化するにより、月の運行に起る變化の稱、一年を週期となすが故に此名あり。

〔ねん-さう〕（ソウ）［年星］（名）「ねさう」に同じ。

〔ねん-さう〕（ソウ）［年三］（名）年々正月・五月・九月に齋戒などすること。

（ねん-さん）［年算］（名）とし。よはひ。

（ねん-し）［年齒］（名）年齡のほど。よはひ。

（ねん-し）［年始］（名）㊀年のはじめ。㊁年頭の祝賀。年賀。――**じやう**（ジヨウ）［年始狀］（名）年賀狀。新年狀。

ねんじ-い・る（らりるるれれ）［念入］（自、ら四）思ひこむ。おもひ入る。

（ねん-じや）［念者］（名）㊀物事に念を入れて丁寧なる人。㊁競馬・相撲（スマフ）などにて、競技者に味方する人。ひいきする人。

（ねん-しゆ）［年首］（名）としのはじめ。新年。

（ねん-じゆ）［念珠］（名）「ずず」（數珠）に同じ。

（ねん-じゆ）［念呪］（名）心中にいのること。

（ねん-じゆ）［念誦］（名）佛名をとなへ又は經文を誦すること。

（ねん-しゆつ）［拈出］（名）㊀つまみて出すこと。㊁かゝげあぐること。

（ねん-しよ）［年初］（名）としのはじめ。

（ねん-しよ）［念處］（名）おもひかんがふる當面の境遇。

（ねん-しよ）［念書］（名）念を入れてかくこと。

（ねん-じん）［念人］（名）「ねんじや」に同じ。

（ねん-ず）［念珠］（名）「ねんじゆ」に同じ。

〔ねん-ず〕［念誦］（名）「ねんじゆ」に同じ。

ねん-・ず（ぜじずずれぜよ）［念］（他、さ變）㊀心中に祈る。心中に唱ふ。「觀世音を―」。㊁堪へ忍ぶ。こらふ。「ゆばりを―」。

（ねん-すう）［年數］（名）年の數。としかず。

（ねん-せい）［粘性］（名）【理】飴又は「アラビヤ」護謨などの如く、流動せんとするとき各部の互に抵抗を及ぼす性質。ねばる性質。――**かうど**（コウ）［粘性耕土］（名）百分中五割以上の粘土の存在する耕土、耕耘に適せざるもの。――**しやど**［粘性砂土］（名）多量の粘土の混じたる砂土、粘性耕土よりは耕耘に適するもの。

（ねん-ぜい）［年稅］（名）每年上納する租稅。

（ねん-せう）（シヨウ）［年少］（名）としわかきこと。又、としわかきもの。

（ねん-せう）（シヨウ）［燃燒］（名）【化】物體と空氣中の酸素と化合して熱と光とを發すること。物體の化合するとき、熱と光とを發すること。もゆること。

（ねん-そ）［年租］（名）一年間のそぜい。

（ねん-たい）［粘體］（名）【理】固體と液體との中間の狀態をなす物質、例へば飴又は蠟の如く、一見固體に異ならざれど、永く放置すれば、漸次扁平となるもの。

（ねん-だい）［年代］（名）㊀歷來りし時代。㊁とき。よ。時代。

（ねんだい-き）［年代記］（名）古來年每に起こりたる事件を次を追ひて記錄せしもの。――**もの**［年代記物］（名）年代記にかきのする程の事件。其人の平生になき振舞などをあざけりていふ語。

（ねん-ちやう）（チヨウ）［年長］（名）年のたけたること。又、年の長けたるもの。――**しや**［年長者］（名）としうへのもの。

（ねん-ちやく）［粘着］（名）ねばりつくこと。――**くわじつ**［粘着果實］（名）【植】牛蒡の果實などの如く人の衣裝などに粘着するもの。――**りよく**［粘着力］（名）【理】異なる物體の分子の互に相引く力。即ちねばりつく力。

（ねん-ぢゆう）［年中］（名）㊀一年の間。㊁あけくれ。始終。――**ぎやうじ**（ギヨウ）［年中行事］（名）一年間に、禁中にて行はるゝ一定の公事。

（ねん-ど）［粘土］（名）【鑛】長石を含める岩石の分解によりて生ずる土壤、即ち不純なる陶土の稱。よく水分を吸收含蓄し、乾けば忽ち凝固して耕作に適せざるもの。ねばつち。

（ねん-ど）［年度］（名）事務又は會計などの決算其他の便宜によりて、區分したる期間。

（ねん-とう）［年頭］（名）としのはじめ。年始。

（ねん-とう）［念頭］（名）こゝろ。おもひ。

ねんど-がはり（ガワリ）［年度替］（名）年度のかはりあらたまる時。

（ねんど-しつ）［粘土質］（名）粘土を多量に含む性質。

（ねん-ない）［年內］（名）其年のうち。「―立春」。

ねん-なう（ノウ）［念無］（副）㊀意外に。案外に。㊁たやすく。容易に。

ねん-な-しきくけれ[念無](形、二) ざんねんなり。くちをし。

ねん-によ[年預](名) ㊀院の廳の次官。㊁武家の執事に亞ぐ職名。

ねん-ね(名) ねること。(小兒語)。

(**ねん-ね**(名) ㊀あかご。(小兒の語)。㊁人形。(小兒の語)。

(**ねん-ねこ**(名) ㊀猫の異稱。(小兒の語)。㊁ねること。㊂「ねんねこばんてん」の略言。――**ばんてん**(名) 小兒を背に負ふ時、上より被ふはんてん。

(**ねん-ねん**[年年](名、副) ㊀としごと、まいねん。㊁年を追ひてすゝみゆくさまにいふ語。――**さいさい**[年年歲歲](名、副) 前條に同じ。「―花相似」。

(**ねん-ねん**[念念](名、副) 心のつねに起きおもふさまにいふ語。――**さうぞく**[念念相續](名) 【佛】前念と後念との間に餘念をまじへず一心專念なるを。

(**ねん-の-ため**[念爲](副) 注意のため、こゝろづけて。

(**ねん-ぱい**[年配](名) ㊀としごろ、としのほど。㊁其事にふさはしき年ばえ。(年輩)。

(**ねん-ばう**[念望](名) のぞみ。ねがひ。

(**ねん-ぱう**[年報](名) 一個年間に起りたる事の報告。

ねん-ばらし[念晴](名) 疑念を晴らすこと。(釋疑)。

(**ねん-ばん**[年番](名) 一年交替に番に當たること。

(**ねん-ばん-がん**[粘板岩](名) 【鑛】泥板岩の一層凝縮したるもの、剝離し易く、通常黑色若しくは灰色なり。

(**ねん-ぴ**[粘皮](名) 【鑛】鑛脈の兩側にある粘土。

(**ねん-ぷ**[年譜](名) 其人一代の年々の事を順を追ひて書るしたる記錄。

(**ねん-ぷ**[年賦](名) 年每に負債の幾分を返濟してゆくこと。――**きん**[年賦金](名) 年賦にして返濟する金。

(**ねん-ブツ**[念佛](名) 【佛】(い)佛を念じて、南無阿彌陀佛と六字の名號を唱(ト)ふること。(ろ)「ねんブツしゆう」の略言。「―無間」。――**かう**[念佛講](名) ㊀念佛宗の講中。㊁輪番。――**サンマイ**[念佛三昧](名) 一心專念に念佛すること。――**しゆう**[念佛宗](名) 【佛】佛敎の一派、崇德天皇の天治二年に天台の僧良忍の開始したるもの、後中絕せしが、後醍醐天皇の元亨年中に僧法明これを再興したり、華嚴經・法華經を所依とし傍ら無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經に依り、一念の稱名法界に周遍して有情非情共に平等の利益を成滿すとなす、一に融通念佛宗といふ。――**だう**[念佛堂](名) 寺院にて、念佛を修するための堂。――**わうじやう**[念佛往生](名) 【佛】念佛三昧によりて、往生の素懷を遂(ト)ぐること。

(**ねん-ぶん**[年分](名) 一個年の分。

(**ねん-ぺう**[年表](名) 年々の出來事を順を追ひて表につくりたるもの。

(**ねん-ぽ**[年暮](名) としのくれ。歲暮。

(**ねん-ぽ**[年甫](名) としのはじめ。年始。

(**ねん-ぽう**[年俸](名) 一個年間の俸給。

(**ねん-まく**[粘膜](名) 皮膚に連續して略(ホボ)其機能を同じくし、內腔の表面を蔽ふ薄き皮膜、赤色にして潤滑なり、即ち肋膜・腹膜の如きこれなり。

(**ねん-まつ**[年末](名) としのすゑ、くれ。歲暮。歲末。――**しやうよ**[年末賞與](名) 年末に、其一年間の勤勞を賞して與ふる金錢。

(**ねん-らい**[年來](名、副) 數年以來。としごろ。

(**ねん-りき**[念力](名) 思ひ込みたる力。精神のそゝぎ向ふ力。

(**ねん-りよ**[念慮](名) おもんぱかり。おもひ。

(**ねん-りん**[年輪](名) 【植】雙子葉植物及裸子植物の形成層の生長は、冬期に停止し翌春更に始まるが故に、新しき層と舊き層との間に境界を生ず、此境界線は每年一輪づゝ生ずるが故に年輪といふ。

(**ねん-れい**[年禮](名) 年始の祝賀の禮。(拜年)。

(**ねん-れい**[年齡](名) としの程。よはひ。とし。

(**ねん-れき**[年歷](名) 數年の來歷。

の

の 齒的鼻音N即ち舌端を硬口蓋の前部に接して發せしむる鼻音と、母音「オ」との綴音。

の[野](名) 廣き平地。のはら。はら。

の[箆](名) ㊀やだけ。㊁やがら。

の(助) ㊀上の名詞を受けて、下の形容詞又は動詞に關係し、其名詞の主格たるを特に表する語、「が」に同じ。「花―散る」「人―行く」。㊁名詞と名詞と又は代名詞と名詞との間にありて、諸種の關係を示す語、數種ありて、(い)所屬の義を示すもの、例へば「人の子」の類、(ろ)下なる名詞を限定するもの、例へば「梅の花」の類。(は)「にある」の意をなすもの、例へば「阿波の鳴門」の類、(に)「の如き」の意をなすもの、例へば「夢の世」の類、(ほ)「といふ」の意をなすもの、例へば「富士の山」の類なり。㊂「のか」の略言「もう歸へる―」。㊃芝居の臺詞などにて、力を入るゝとき、「を」の代はりに用ふる語。「酒見―仕り」。

(**の**(感) 句調を整(トヽ)ふる感動詞。「降る雨を日和りにしたいし―、生れついたる身を恥うして欲しいし―」と樣々の思ひごと。

―**の**[幅](接尾) 布の幅(ハヾ)を數ふるにいふ語、普通は鯨尺八九寸乃至一尺を一幅とす。「二―」「三―」「五―蒲團」。

ノー[No](副) 然らず。いな。いや。――**ノー**[No No](副) (「ノー」を重ねたる語) いや〳〵。

ノート[Note](名) ㊀しるし。記號。㊁標註。註釋。㊂手控。書附。㊃「ノートブック」の略言。――**ブック**[Note book](名) 手控帳。手帳。

の-あかざ[野藜](名) 【植】野生のあかざ。

の-あざみ[野薊](名) 【植】薊の一種、原野に自生す、莖低し、頭狀花序は八分內外の直徑を有す。(小薊)。

の-あそび[野遊](名) 野に出でゝ遊ぶこと。

の-あひ[野間](名) のはら。のら。

廿**のいずみ**[肉刺](名) (芒墨(ノギズミ)の音便) 沓(ツク)のためにすられて足に生ずるきず。くつずれ。まめ。

の-いばら[野薔薇](名) 【植】ばらの一種、原野に自生す、花は白色にして香氣多く、蒸溜して香油を製すべし。

(**のう**[能](名) ㊀はたらき。ちから。作用。㊁ちゑ。知力。才力。㊂わざ。技藝。技倆。㊃たくみなること。よくなすこと。堪能。㊄きゝめ。功能。效驗。

(**のう**[能](名) 散樂の餘流より出でたる一種の技戲、足利義滿のとき、觀世世阿彌の始めしものといふ、後に至りて、觀世・寶生・今春・金剛の四派に分かれ、喜多の一派も出でたり、謠曲に合はせて演ずるもの、囃子は笛・小鼓・大鼓・太鼓なり。能樂。

(**のう**[農](名) ㊀「のうげふ」(農業)に同じ。㊁農業に從事する人。農民。農夫。百姓。

(**のう**[濃](名) ㊀こきこと。㊁あつきこと。㊂こまやか。

(**のう**[膿](名) うみ。

(**のう-うん**[濃雲](名) くろくも。

(**のう-えき**[膿液](名) うみしる。

(**のう-えん**[濃艷](名) つや〳〵しくうつくしきこと。いとあでやかなること。

(**のう-か**[農家](名) ㊀ひやくしやうや。㊁農業する人。

(**のう-かう**[農耕](名) 作物をそだつること。耕耘に從事すること。

のう-がき[能書](名) ㊀藥などの効能を記せる文書。㊁吹聽する言。

(**のう-がく**[能樂](名) 能に同じ。

(**のう-がく**[農學](名) 種々の科學を應用して農業上の原理法則を研究する科學。

(**のう-がくかう**[農學校](名) 農業學校に同じ。

(**のう-がくしや**[農學者](名) 農學を修むる人。又、農學に長じたる人。

(**のう-かん**[能幹](名) よく物事を處理するはたらき。

(**のう-かん**[農間](名) ㊀ひやくしやうなかま。民間。㊁農業のひま。

(**のう-き**[農期](名) 農業の期節。

(**のう-き-き**[濃氣器](名) 【理】「壓搾空氣ポンプ」に同じ。

(**のう-きやうげん**[能狂言](名) ㊀能樂と狂言と。㊁能樂の間にて行ふ狂言。

(**のう-ぐ**[農具](名) 農業に使用する道具。

(**のう-くわい**[農會](名) 農事の改良發達を圖ることを以て目的としたる公共團體、農事に關する報告書を作成して地方長官に差出し、農事に關して行政廳に建議し又は行政廳の諮問に答申するもの、

市町村農會・郡農會・府縣農會等の種類あり。

(**のう-げ**[能化](名) ㊀よく人を敎化すること。㊁僧の師の稱。所化(シヨ)の對。

(**のう-げい**[農藝](名) 作物をつくること。耕作。――**くわがく**[農藝化學](名) 農業上に應用する化學。

(**のう-げき**[農隙](名) 農事のひま。

(**のう-けつ**[膿血](名) うみち。

(**のう-げふ**[農業](名) 土地を使用して、有用なる植物を栽培し又は有用なる動物を飼養し、以て人生の生活に必要なる貨物を生產すること。――**がくかう**[農業學校](名) 實業學校の一、農業に從事するものに必須なる敎育を施す所、蠶業・山林・獸醫等の專門學校もまた農學校と同一の規定の下に取扱はる。――**じだい**[農業時代](名) 【經】人類が農業を主業とし漁獵を副業とする時代、此時代には住居の場所一定し、從て人口蕃殖し、共同生活又は交換方法等次第に發達す。

(**のう-こう**[濃厚](名) こってりしたること。あつきこと。しげきこと。

(**のう-こう**[農功](名) 農のしごと。

(**のう-こう**[農工](名) 農業と工業と。又、農夫と職工と。――**ぎんかう**[農工銀行](名) 農工業の改良發達に要する資本の貸附をなすを目的とする株式會社、北海道・各府縣を一營業區域とし、一營業區域內に一行の設置せらるゝもの。

(**のう-さい**[能才](名) ちゑ多きこと。堪能なること。

(**のう-さう**[農桑](名) 耕作と養蠶と。又、其人。

(**のう-さく**[農作](名) つくり。耕作。

(**のう-さん**[農產](名) 農業の生產物。――**せ**

いざう[農産製造](名) 農産に多少の手數をかけて粗製品となすこと、即ち、麻・茶・煙草などの製造の如きこれなり。——ぶつ[農産物](名) 農産に同じ。

のう-し[野牛](名) 野に放飼する牛。

(のう-し)[能士](名) 才能多き人。役に立つ人。

(のう-じ)[能事](名) なすべきわざ。又、役に立つわざ。

(のう-じ)[農時](名) 農業のいそがしき時節。

(のう-じ)[農事](名) 農業の事。農民のしごと。——かうしふしよ[農事講習所](名) 農業に從事するものに必要なる講習をなさしむる所、各府縣に一個所を設く。——しけんぢやう[農事試驗場](名) 農事に關する種々の事項につきて試驗をなす所、農商務大臣の直接管理に屬するものは、農產の增殖改良に關する試驗・巡回講話・土壤・肥料・農產物其他農業上の物料の分析・鑑定等を掌り、各府縣に於けるものは其掌る所ほゞ前者と同じくして、更に種苗・蠶種等の配付をなす。

(のう-じふ)[膿汁](名) うみしる。

(のう-じや)[能者](名) 能ある人。よく物事のできる人。

(のう-しやう)[農相](名) 農商務大臣の稱。

(のうしやうむ-ぎやうせい)[農商務行政](名) 農業・商業・工業等に關する政務。

(のうしやうむ-しやう)[農商務省](名) 農商務大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて農商務行政の事務を取扱ふ中央官廳。又、農商務大臣の掌る事務全體の稱。

(のうしやうむ-だいじん)[農商務大臣](名) 各省大臣の一にして農商務行政の單獨官府、農・商・工・水產・林野・鑛山・發明・意匠・商標及地質等に關する事務を管理するもの。

(のう-しよ)[能書](名) 文字を巧(たく)に書くこと。又、其人。能筆。

‡のう-せう[凌霄](名) 【植】次條に同じ。

のうぜん-かづら[凌霄](名) 【植】紫葳科に屬する木。莖は上昇し、葉は羽狀複葉にして鋸齒を有する小葉より成る。花は夏秋の交に開き、大形筒狀にして黃赤色を呈し花冠の末端は五裂す。觀賞用として栽培せらる。のせう。まかやき。(紫葳、凌霄花)。

(のう-だいふ)[能太夫](名) 能狂言を演ずる者。

(のう-たん)[濃淡](名) こきとうすきと。

(のう-だん)[農談](名) 農事に關する談話。「—會」。

(のう-ど)[濃度](名) 【化】氣體又は液體の單位容積中なる分子量の稱。

(のう-どう)[能動](名) 自己が他のものに對してはたらきを仕掛くること。所動の對。

‡(のう-なし)[能無](名) 役に立たぬもの。はたらきのなきもの。

(のう-にん)[農人](名) 「のうみん」(農民)に同じ。

(のう-ひつ)[能筆](名) 「のうしよ」(能書)に同じ。

(のう-ふ)[農夫](名) ㊀耕作を業とする人。㊁雇はれて農業に從事する人。

(のう-ふ)[農父](名) ひやくしやうのおやぢ。

(のう-ふ)[農婦](名) ひやくしやうする婦人。

(のう-ぶん)[能文](名) 巧(たく)に文章をかくこと。

(のう-へい)[農兵](名) 平生農業に從事せるものを徵集して組織したる軍隊。又、其軍隊に屬する兵士。

(のう-べん)[能辯](名) 辯舌の達者なること。よくしやべること。——しや[能辯者](名) 能辯なる人。

の-うま[野馬](名) 野飼ひの馬。(草馬、牧馬)。

(のう-まい)[能米](名) くろごめ。

(のう-み)[濃味](名) こつてりしたるあぢ。

(のう-みつ)[濃密](名) ねばきこと。こまやかなること。

(のう-みん)[農民](名) 農業に從事する民。百姓。

(のう-む)[農務](名) ㊀農作の仕事。㊁農業上の政務又は事務。——きよく[農務局](名) 農商務大臣の管理の下に屬し、其意思を受けて農事・蠶・茶・畜產・家畜衛生及狩獵等に關する事務を掌る農商務省の一局。

(のう-む)[濃霧](名) こききり。ふかききり。

(のう-やくしや)[能役者](名) 能樂を演ずる者。

(のう-り)[能吏](名) よく事務を處理する官吏。

(のう-りつ)[能率](名) 效果の割合。

(のう-りよく)[能力](名) ㊀仕事する作用。活動するはたらき。㊁意識の作用。精神のはたらき。㊂【法】完全に私權を行使し得る資格。——しや[能力者](名) 【法】法律上能力を有するもの、即ち禁治產者・準禁治產者・妻・未成年者以外のもの。——せつ[能力說=Faculty theory](名) 【心】意識の作用は能力といふ實體が意識內にありてこれを營むといふ說、現今にては誤說として用ひられざるもの。

の-うるし[野漆](名) 【植】「たかとうだい」の一名。

のう-れん[暖簾](名) 「のれん」に同じ。

‡の-かがみ[白前](名) 【植】「すずめのをごけ」に同じといふ。

の-がけ[野駈](名) 花見などに、山野を駈(か)けまはりて遊ぶこと。郊外を散歩すること。(野掛)。

の-が・す[逃](他、さ四) のがれしむ。にがす。

の-かぜ[野風](名) 野に吹く風。

の-がは[野川](名) 野中をながるゝ小川。

の-がひ[野飼](名) 牛馬などを野に放(はな)ちて飼(か)ふこと。はなしがひ。(放飼)。

‡の-が・ふ[野飼](他、は四) のがひをなす。

のがらか・す[逃](他、さ四) のがす。

の-が・る[逃](自、ら下二) ㊀にげ走る。にぐ。(逭)。㊁離れ遠ざかる。のく。(退)。㊂避くるを得。まぬかる。(脫)。

のがれ-こうじやう[逃口上](名) にげこうじやう。

のがれ-ことば[逃辭](名) にげことば。

⌒のが・れる(自) 「のがる」の訛。

の-がん[野雁](名) 【動】涉禽類に屬する鳥。尾短かく頸長くして形雁に似る。背部は赤褐色にして斑文あり、腹・胸は白く嘴・脚は黑し。原野に棲息す。

の-き[軒](名) ㊀屋根の廂の四方へ垂(た)れ出でたる所。(簷、檐、宇)。㊁轉じて、家の稱。

の-ぎ[芒](名) ㊀稻・麥などの果實の外殼の尖端にある剛き毛。のげ。(秕、穎)。㊁喉に刺(さ)さりたる魚骨。とげ。

の-ぎ[野木](名) 野に生ふる樹木。

のき-あひ[軒合](名) 軒のすきま。

の-ぎく[野菊](名) 【植】(い)菊科に屬する草。葉はよめなに似て稍や尖頭を有し、舌狀花冠は黃色を呈す。(ろ)「よめな」の一名。(は)「あぶらぎく」の一名。

のき-さき[軒先](名) のきのはし。

のき-した[軒下](名) 軒のした。家のした。

のき-しのぶ[軒忍](名) 【植】羊齒類に屬する植物、岩石樹上等に附着して生ず、羽葉は不完全にして、子囊は橫裂す。

のき-ぢやうちん[軒提燈](名) 祭禮のときなどに、軒につりさぐる提燈。

のき-づけ[軒附](名) のきば。

の-ぎつね[野狐](名) 野にすむ狐。

のき-なみ[軒並](名) 次條に同じ。

のき-ならび[軒並](名) 家のならびあふこと。又、ならびあひたる家。(比屋)。

のき-ば[軒端](名) ㊀軒のはし。㊁軒に近き所。「—の梅」。

‡のき-の-いとみづ[軒絲水](名) あまだり。

‡のき-の-たまみづ[軒玉水](名) 前條に同じ。

‡のき-ばう・つ[退羽擊](自、た四) 鷹狩にて、主に離れて鷹それ行く。

‡のき-ばた[軒端](名) のきば。

のぎ-へん[禾偏](名) 漢字の偏の名、秋・稅等の字の左方にある禾の字の稱。

のぎ-め[芒目](名) 陶器又は鑛物などの肌にのぎの如き文理あるもの。

‡の-ぎやうかう[野行幸](名) 主上の鷹狩にめさせられしこと。

の・く[退](自、か四) ㊀しりぞく。たちのく。㊁仲間又は組合より脫す。

の・く[退](他、か下二) のかしむ。しりぞく。

の・く[除](他、か下二) 「のぞく」に同じ。

の-ぐさ[野草](名) 野に生(お)ふる草。

‡の-くれ-やま-くれ(副) 野にてあれ山にてあれ。

のけ[退除](名) のくること。又、のけたるもの。

のげ[芒](名) 「のぎ」の轉。

の-げいとう[野雞頭](名) 【植】莧科に屬する草、根一莖にして高さ數尺、花は小形白色にして端末紅淡色をなし、長橢圓形花序に排列す。觀賞用として栽培せらる。

のけ-かぶと[退兜](名) 兜をぬぎて頸に結び附くること。

‡のけ-くび[仰頸](名) 着物のえりをうしろの方におしさげて着ること。ぬきえもん。

のけ-さまに[仰樣](副) あをのけに。

⌒の-げし[野芥子](名) 【植】「けしあざみ」の一名。

のけ-ぞ・る[仰反](自、ら四) 後ろへそりかへる。あをのけにたふる。(京都地方の方言)。

のけ-ち[除地](名) 年貢を免除してある地。

のけ-に[仰](副) あをのけに。「—倒る」。

のけ-もの[除物](名) とりのぞきたるもの。

のけ-もの[除者](名) ㊀例外のもの。特別のもの。㊁仲間に加へざるもの。仲間のとりあはざるもの。

⌒のけ・る(他) 「のく」の訛。

⌒のこ[鋸](名) 「のこぎり」の略言。(關西地方の方言)。

のこ-ぎり[鋸](名) (「のほぎり」の轉) 材木及其他のものを挽(ひ)き切る具。きたひたる鐵をもて扁く薄く長方形に作り、緣邊に細かき齒を刻み設けたるもの。のほぎり。のこ。——くづ[鋸屑](名) 鋸にて或物を挽(ひ)きて生ずる細きくづ。——さう[鋸草](名) 【植】菊科に屬する草、山野に生ず、莖は紫色にして葉は麻に似、緣邊に鋸齒を有す、秋の頃白色の花開く。——ば[鋸齒](名) のこぎりの齒。又、のこぎりの齒の如きさまのもの。——びき[鋸引](名) ㊀鋸にて挽(ひ)き切ること。㊁德川時代の刑罰、兩肩を斫りて、其血を鋸に塗(ぬ)り、鋸にて挽きたる體になし、二日間町內に曝(さら)して、後に引き廻はしの上、磔殺せしもの。

のこ-くづ[鋸屑](名) 「のこぎりくづ」に同じ。

‡の-ごころ[野心](名) 飼の人になつかぬこと。

のこ・す[殘](他、さ四) ㊀殘るやうにす。の

こらしむ。㊁後世に傳ふ。死後にとゞむ。(遺)。

〰のこ-ずり[鋸](名) 「のこぎり」に同じ。(上野地方の方言)

〰のこ-のこ(名、副) ㊀何氣なく又は平氣にて進み出づるさまにいふ語。㊁しづ〳〵と序を追ひて行くさまにいふ語。 ――ざい-ざい(名、副) 前條に同じ。

のこ-ば[鋸齒](名) のこぎりは。

のごひ-の[拭箆](名) うすく塗りたる箆。

卄のご・ふ(ノゴウ)(はひふふへへ)[拭](他、は四) 「ぬぐふ」に同じ。

のこら-ず[不殘](副) ことごとく。悉皆。

のこり[殘](名) のこると。又、のこりたるもの。

――おほ-し(オホシ)(くしきけれ)[殘多](形、二) ㊀殘念なり。くちをし。㊁別れつらし。なごりおほし。

のこり-ぎく[殘菊](名) かさねの色目、表の黄にして裏の薄青なるもの。

のこり-きん[殘金](名) のこりたるかね。ざんきん。

のこり-ぐさ[殘草](名) 【植】冬菊の一名。

卄のこり-ざね[殘稻](名) 穀物を舂(ツ)きて、猶籾皮を脫せずにある粒。

のこり-なく[殘無](副) のこらず。ことごとく。

のこり-の-きく[殘菊](名) 菊節句以後迄てさき殘る菊。ざんぎく。

のこり-の-とし[殘年](名) 老さき短かき年。ざんねん。

のこり-の-よはひ(ヨワイ)[殘齡](名) のこりのとし。

のこり-ひさ・し(しくしきしけれ)[殘久](形、二) 前途なほとほし。將來なほ久し。「―に福あり」。

のこり-もの[殘物](名) あとにのこれるもの。

のこり-を・し(しくしきしけれ)[殘惜](形、二) 「のこりおほし」に同じ。

のこ・る(らりるるれれ)[殘](自、ら四) ㊀あとにとゞまる。とゞまる。㊁多くあり。あまる。(除)。㊂もる。ぬく。おつ。(遜)。㊃後世に傳はる。死後に及ぶ。「名が―」。㊄將來に屆す。前途に屆す。㊅(相撲(スマフ)にて、勝負つかんとしてつかず。

卄のこん[殘](名) 「のこり」の音便。「―の月」。「―の雪」。

卄の-さき[荷前](名) (「にさき」の轉)古昔、年末に十個所の御陵及外戚の八墓へ幣帛を奉られし公事、所司を十二月十三日に定め、別に吉日を擇びて行はれたり。

〰のさ-のさ(名、副) ㊀のさばり歩むさまにいふ語。㊁しづ〳〵歩むさまにいふ語。㊂落に振舞ふさまにいふ語。

の-ざは(ワ-サ)[野澤](名) 野中の澤。

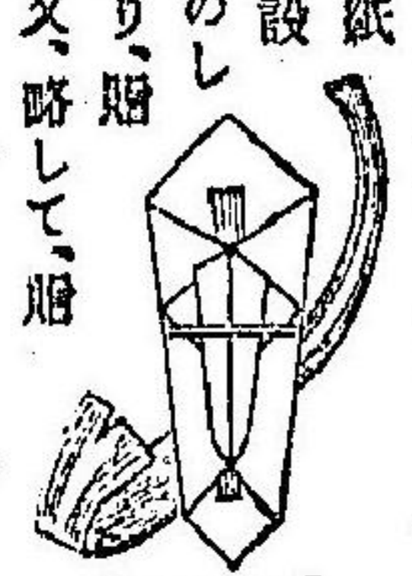
〰のさば・る(らりるるれれ)(自、ら四) ほしいまゝに巾(ハバ)をきかす。又、ほしいまゝに場所を占む。

の-ざらし[野晒](名) されかうべ。(髑髏)。

の-ざれ[野晒](名) 生れてより三個月内に捕(ト)へたる鷹。又、秋過ぎて冬に捕りたる鷹なりともいふ。

のし[熨](名) のすと。

のし[熨斗](名) ㊀「ひのし」の略言。㊁「のしあはび」の略言。㊂方形の色紙を細長き六角形にひだを設けて折りたゝみ、其中にのしあはびを小さく切りて張り、贈物に添ふるもの、特稱。又、略して、贈物の包紙などに「のし」とのみしるすこともあり。



[のし(三)]

卄のし(名) 【植】「しをん」の一名。

卄のじ[虹](名) 「にじ」の轉。「いかほろの、八坂のゐてに、立つ―の」。(古昔の東語)。

〰のし-あが・る(らりるるれれ)[伸上](自、ら四) ㊀のびあがる。㊁地位の昇る。身代ゆたかになる。㊂たかぶる。おごる。

のし-あ・ぐ(げげぐぐるぐれげよ)[伸上](他、か下二) ㊀のしあがらしむ。のばしあぐ。㊁地位を進ます。身代をゆたかにす。㊂なしとぐ。しとぐ。

〰のしあげる(他) 「のしあぐ」の訛。

のし-あはび(ワビ)[熨斗鰒](名) あはびの肉を薄く剝(ハ)ぎ延ばして乾したるもの、儀式又は贈物などに用ふ。其製法と用ひ方とによりて、ながのし・まきのし・うちあはび等の名稱あり。

のし-うめ[熨梅](名) 一種の食品。熟したる梅の實を一夜桶に封じおき、これを擂(ス)り潰(ツブ)して布もて絞(シボ)り、砂糖・葛粉などと合はせてゆるやかに煮たる後、內部に油をひきたる箱に入れて、日に乾したるもの。

卄のし-かた-の-くぎ[鉼鏂](名) 釘の頭の笠の狀をなしたるもの、即ち鋲(ビヤウ)。

の-じこ[野鵐](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する小鳥、形あをじに似、頭は青黃色にして翅に赤黑色の斑文あり、嘴・脚共に淡黃色なり。

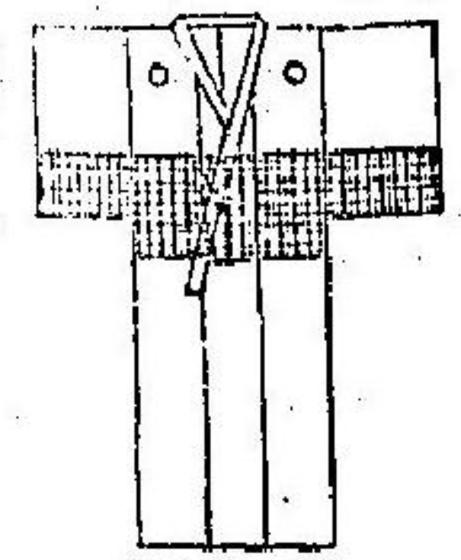
の-しこんぶ[熨斗昆布](名) のしたる昆布、祝儀に用ふるもの。

の-じし[野猪](名) 【動】「ゐのしし」に同じ。

のし-ちぢみ[熨斗縮](名) 地合のうすき縮織。

の-じね[野稻](名) 【植】稻の一種、種子は長くして白し、もと南蠻より來りたるもの、一に梵天米ともいふ。

のし-め[熨斗目](名) 經(タテ)は練絲を緯(ヨコ)は生絲を用ひて織り、仕立て、腰の邊にあたる所に縞を織り出だし他は無地なる織物、昔時、武家の禮服に仕立て、麻上下の下に着用したり。(熨目)。



[のしめ]

のし-もち[伸餅](名) 厚さ五分許に平く伸(ノ)したる餅、これを切りて切餅とす。

の-じゅく[野宿](名) 戶外に宿して夜を過ごすこと。(露宿)。

の-じゅん-ぎく[野春菊](名) 【植】菊科に屬する草、多く山野に生ず、葉は大形黑色にして一根に叢生す、高さ一尺許、春夏の頃、よめなに似たる花開く。(六月菊)。

の-しろ-しゅんけい[能代春慶](名) 能代塗の一名。

の-しろ-ぬり[能代塗](名) 羽後國能代より產出する春慶塗、蠟色漆を用ひ春慶塗中最も上品なるものなり、一に秋田春慶ともいふ。

の・す(さしすすせせ)[伸](他、さ四) ㊀長くす。高くす。廣くす。のばす。㊁火氣を加へて物の皺又は縮みなどをなほす。(熨)。㊂地位を進ます。身代を豐かにす。

の・す(さしすすせせ)[伸](自、さ四) ㊀伸びて進み行く。「蛇が―」。㊁伸びて強く張る。㊂地位すゝむ。身代豐かになる。

の・す(せせすするすれせよ)[載](他、さ下二) ㊀上に置く。のらす。のぼす。㊁受け積む。積み運ぶ。㊂記錄す。かきしるす。㊃計略に陷す。はむ。㊄調子を合はす。

卄のず[虹](名) 「にじ」の轉。「波にあふ―」。

卄の-せ[鵜鶘](名) 【動】「はしたか」の類。

卄の-せう(ヨウ-シ)(名) 【植】「のうぜんかづら」の古稱。

の-せり[野芹](名) 【植】野生の芹。

〰のせ・る(他) 「のす」の訛。

のぞき[覗](名) ㊀のぞくと。㊁「のぞきめがね」の略言。 ――からくり[覗機關](名) 「のぞきめがね」に同じ。 ――ばな[覗鼻](名) 孔の上にそり向ひたる鼻。 ――めがね[覗眼鏡](名) 匣(ハコ)の後方にそれ〴〵紐(ヒモ)のつけたる種々の畫を入れ、其紐をあやつりて畫をかふる裝置にして、前方に設けたる眼鏡より覗き見さするもの。

のぞ・く(かきくくけけ)[臨](自、か四) のぞむ。「水にのぞきたる家」。

のぞ・く(かきくくけけ)[覗](他、か四) 間より見る。かいまみる。うかゞふ。(窺)。

のぞ・く(かきくくけけ)[除](他、か四) ㊀加へず。入れず。㊁消す。亡す。㊂掃ふ。掃む。㊃誅す。芟(カ)る。㊄退ざく。退く。㊅省(ハブ)く。とりのく。

卄のぞこ・る(らりるるれれ)(自、ら四) のぞかれて消失す。「さはりのぞこり罪消えて」。

〰のそ-のそ(名、副) 「のさのさ」に同じ。

のぞま・し(しくしきしけれ)[望](形、二) 望む所なり。ねがはし。このまし。ほし。

のぞみ[望](名) ㊀ながめ。てうばう。㊁こゝろざし。ねがひ。希望。㊂人望。名望。「天下の―を負ふ」。

のぞ・む(まみむむめめ)[望](他、ま四) ㊀みやる。ながむ。㊁こゝろざす。ねがふ。もとむ。㊂うかゞふ。みる。㊃したふ。あふぐ。

のぞ・む(まみむむめめ)[望](自、ま四) むきあふ。相對す。「兩山相―」。

のぞ・む(まみむむめめ)[臨](自、ま四) ㊀高きにありて低きに對す。㊁治者として被治者に對す。「天下に―」。㊂貴きもの卑しきものゝ所に行く。「親ら其家に―」。㊃進入す。すゝみいる。㊄あたる。對す。「局に―」。㊅さしかゝる。のぞく。「水に―」。

のぞむ-らく-は(ラ-クワ)[望](副) のぞむ所は。どうか。なにとぞ。

の-だ[野田](名) 野原にある田。

〰の-だいこ[野太鼓](名) たいこもちをいやしみていふ語。

〰の-だいわう(ワ-ダ)[野大黃](名) 【植】「しのね」に同じ。(京都の方言)。

〰のた-うちまは・る(ワル-マ)(らりるるれれ)(自、ら四) くるしみもがきて、さま〴〵にふしまろぶ。ぬたうつ。

〰のた-う・つ(たちつつてて)(自、た四) ㊀くるしみもがく。ふしまろぶ。㊁はひ行く。ゐざり行く。

卄のたう・ぶ(ノトウブ)(ばびぶぶべべ)[宣](他、は四) 「のたまふ」に同じ。

〰のたく・る(らりるるれれ)(自、ら四) 「のたうつ」に同じ。

の-だち[野太刀](名) ㊀古昔、野外の逍遙などに帶びし略製の太刀の稱。㊁後世、長き太刀の稱。

の-だ・つ(たちつつてて)[伸立](自、た四) たかくのび立つ。成長す。

の-だて[野立](名) 昔時、貴人の、野中にて獵などを立て、休みしと。

卄のたば-く[宣曰](副) 「のたまはく」に同じ。

〰のたば・る(らりるるれれ)(自、ら四) 臥す。へたばる。

卄のたまは-く(ノタマワク)[宣、曰](副) のたまふには。

の-たま・ふ(ノタマウ)(はひふふへへ)[宣、曰](他、は四) (告(ノ)リ給ふ義)「いふ」の敬語。のりたまふ。いひたまふ。

の-だめ[篦撓](名) 箆のそりをたむると。 ――がた[篦撓型](名) のだめに用ふるかた。

〰のたり-のたり(名、副) しづかにのたるさまにいふ語。

の-た・る(らりるるれれ)(自、ら四) 匍ひ行く。ゐざり行く。

〰のたれ-しに(名) のたれて死ぬると。ゆきだふれ。

〰のた・れる(れれるるるれれよ)(自、ら下二) 路傍などにのたうち倒る。

のち[後](名) ㊀うしろ。あと。しり。㊁後胤。子孫。㊂未來。將來。「―の世」。㊃死後。亡後。「―のとむらひ」。

の-ぢ[野路](名) 野中の路。(野徑)。

卄のち-おひ(オイ)[後生](名) 「こうせい」(後生)に同じ。

のち-かた[後方](名) のち。のちほど。ごこく。

の-ぢさ[野苣](名) 【植】「けしあざみ」の一名。

のちざん[後産](名) 子の生まれて後ち、殘れる胞衣（エナ）などの出づること。あとざん。

‡のちせ[後瀬](名) のちのあふせ。「―を契りていでたまふ」(再會)。

のちぞひイソ[後添](名) 二度目の妻。うはなり。「後妻」。

‡のちつかた[後方](名) のちかた。

のちづれ[後連](名) 二度目の妻。

のちのあさ[後朝](名) 「きぬぎぬ」に同じ。

のちのあふせウーァ[後逢瀬](名) 後日に再び會合するとき。

のちのおや[後親](名) まゝおや。

のちのくい[後悔](名) 「こうくわい」に同じ。

のちのこと[後事](名) ㊀將來の事。又、死後の事。㊁とむらひ。法事。

のちのち[後後](名、副) 將來。前途。

のちのつき[後月](名) ㊀翌月。來月。㊁陰暦八月十五夜に對して、九月十三夜の月。

のちのつきみ[後月見](名) 陰暦九月十三夜の月見。

のちのもの[後物](名) 「のちざん」に同じ。

のちのよ[後世](名) ㊀將來。未來。㊁死後。ごせ。

‡のちのわざ[後業](名) とむらひ。法事。

‡のちびと[後人](名) 後の世の人。

のちほど[後程](名) のちがた。後刻。

‡のちまき[後蒔](名) おそまき。

のぢん[野陣](名) 露天に設けたる陣。野營。

‡のづかさ[野阜](名) 野原にある丘陵。

〔のっかる[乘](自、ら四) 「のる」に同じ。

〔のっきり[乘切](名) のっきること。

〔のっきる[乘切](自、ら四) 「のりきる」に同じ。

〔のっけ(名) さいしよ。初手。――に(副) ㊀さいしよに。はじめに。㊁いきなり。すぐに。

〔のっける[乘](他、か下二) 「のせる」に同じ。

〔のっこす[乘越](他、さ四) 「のりこす」に同じ。

〔のっしり(名、副) 「のっそり」に同じ。

〔のっそのっそ(名、副) 靜かに大またに歩むさまにいふ語。

〔のっそり(名、副) ㊀のろくして役に立たざるさまにいふ語。㊁轉じて、のろき人にいふ語。

‡のづち[野槌](名) 野にすむ蛇の類。

のっと[祝詞](名) 「のりと」の音便。

ノット[Knot](名) 「かいり」(海里)に同じ。

‡のつとり[野鳥](名) 「ぬつとり」に同じ。

のっとる[則](自、ら四) (「のりとる」の音便)のりとして從ひならふ。

〔のっとる[乘取](他、ら四) 「のりとる」の音便。

のっぴき(名) (退引（ノキヒキ）の音便)避け退くこと。まぬかるゝこと。「―ならぬ」。

のっぺい(名) 一種の料理、豆腐・大根・人參などを刻み、汁にまぜ葛粉を加へたるもの。ぬっぺい。

〔のっぺらぼう(名) ㊀なめらかなること。又、其もの。㊁模樣なきこと。又、其もの。㊂變化なきこと。又、其もの。㊃物事の見分のつかぬこと。又、其人。

〔のっぺり(名、副) ㊀ひらたくして長きさまにいふ語。㊁容貌の小綺麗なるさまにいふ語。

〔のっぽ(名) たけのたかきに過ぐること。又、其人。

のづら[野面](名) ㊀野原のおもて。㊁石の自然の肌。(石工の語)。㊂恥を知らぬ顏。あつかは。鐵面皮。

〔のでっぱう[野鐵砲](名) うそ。ほら。

のでら[野寺](名) 野中にある寺。

〔のでん[野天](名) 屋根のなき所。(露天)。

‡のと[祝詞](名) 「のりと」の約言。

のど[咽、喉](名) (「のむど」の約) ㊀口腔の奥の食道及氣道に通ずる所。㊁うたふ音聲。「―がいゝ」。

――がなる　美食などを見て、いたく食慾のおこるにいふ。

のどか(名) ㊀ゆったりしてあること。おちつきてしづかなること。(悠然)。㊁空晴れて天氣うらゝかなること。日和のおだやかなること。(長閑、晴和)。

のどくび[喉頸](名) 喉と頸とのあたり。

のどけ[喉氣](名) 喉の内部の腫（ハ）れて、食物又は呼吸の支（ツカ）ふる病氣。

のどけし[和](形、一) のどかなる狀にてあり。のどかなり。

‡のさとびと[野床人](名) 獵師の異稱。

〔のどちんこ(名) 「のどひこ」に同じ。

のどつづみ[喉鼓](名) のどのなること、即ち食慾のいとさかんにおこること。「よ。

のとなれやまとなれ　如何あらんともまゝよ。

‡のどに(副) のどかに。

‡のどのど(名、副) いとのどかなるさまにいふ詞。

のどひこ(名) 口腔の奥に垂下せる軟口蓋の尖端、のどちんこ。(懸壅垂)。

のどぶえ[喉吭](名) 喉の氣管の通ずる所。ふえ。のんどぶえ。(吭)。

のどボトケ[喉佛](名) 喉の凸く突き出でたる所、即ち甲狀軟骨の俗稱。

‡のどまる[和](自、ら四) 和づまる。おちつく。やはらぐ。「すこし心地のどまりて」。

‡のどむ[和](他、ま下二) のどまらしむ。

‡のどやか(名) 「のどか」に同じ。

‡のどよぶ[喉呼](自、は四) 喉聲にて呼ぶ。「ぬえ鳥ののどよび居る」。

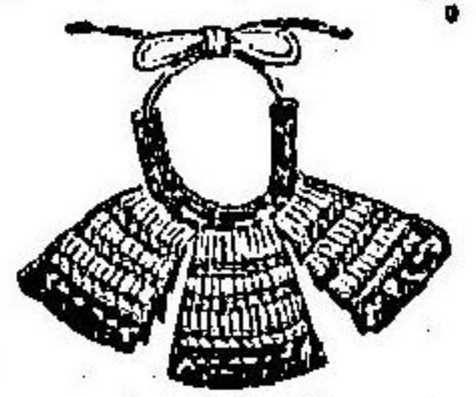
‡のどらか(名) 「のどか」に同じ。

‡のどる[則](自、ら四) 「のっとる」に同じ。

〔のとろ(名) 延（ノ）びてとりとめなきこと。「―に暮し」。

‡のどろか(名) 「のどか」に同じ。

のどわ[喉輪](名) 鎧の附屬具、喉の邊に取り添ふるもの、多くは半月の形をなす。



[わどの]

のなか[野中](名) 野原のなか。野のなか。――のしみづ[野中清水](名) ㊀野中に湧（ワ）ける清水。㊁(古今集の「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」といふ歌に出づ)もと己が妻としたる女。

のぬこ[野猫](名) 野原にすむ猫。

〔のねずみ[野鼠](名) 【動】「はつかねずみ」に同じ。(越前地方の方言)。

〔のの(名) 神佛又は月など、すべて尊ぶべきものゝ稱。(小兒の語)。――さま(名) 前條に同じ。

‡ののくれやまのくれ(副) 「のくれやまくれ」に同じ。

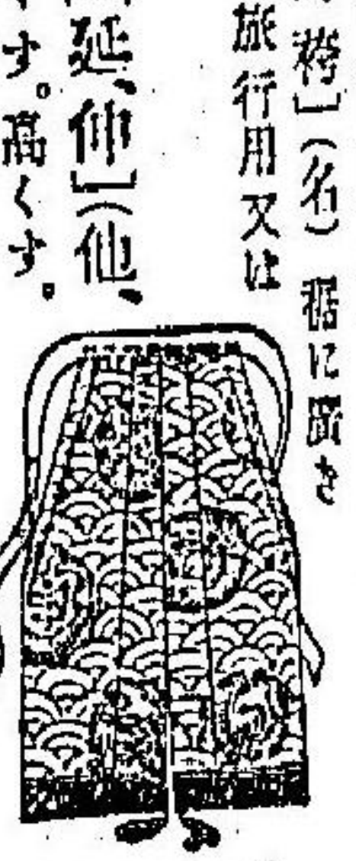
‡ののしる[喧呼](自、ら四) 聲高に騒ぐ。

ののしる[罵](他、ら四) ㊀聲高く叱す。怒りて叱す。どなる。しかる。㊁あしざまにいふ。いやしみていふ。やかましく呼ぶ。のゝめく。

ののみや[野宮](名) 皇女の齋宮又は齋院にならせらるべきとき、齋戒のため籠（コ）もられし宮の稱。齋宮のは山城國嵯峨の有栖川に、齋院のは同所の紫野にありき。

‡ののめく[喧呼](自、か四) 「ののしる」に同じ。

のばかま[野袴](名) 裾に廣き縁を附けたる旅行用又は遠足用の袴。



[まかばの]

のばす[延、伸](他、さ四) ㊀長くす。高くす。ひろくす。㊁盛大にす。富有にす。「身代を―」。㊂溶（ト）かす。とく。「糊を―」。㊃ながびかす。おそくす。おくらす。「日を―」。

のばと[野鳩](名) 【動】「やまばと」に同じ。

‡のばはる[延](自、ら四) 「のぶ」に同じ。

‡のばふ[延](他、は下二) 「のぶ」の延言。

のはら[野原](名) 人家などのなき廣き平地。の。

のび[延、伸](名) ㊀のぶること。㊁長さ。たけ。㊂疲（ツカ）れたるときなどに、手足を伸ばして欠（アクビ）などすること。

のび[野火](名) 春、野山に火を放ちて枯草を焚（ヤ）くこと。

のびあがり[伸上](名) のびあがること。

のびあがる[伸上](自、ら四) 足をつまだて脊を伸ばす。又、曲がりたる身體をのばし立つ。

のびたつ[伸立](自、た四) おひたつ。成長す。(暢)。

のびちぢみ[延縮](名) のぶることちゞまること。長くなると短くなると。

のびのび[伸伸](名、副) 心ゆるやかにして體のうちくつろぐさまにいふ語。

のびのび[延延](名、副) 次第に物事の延引するさまにいふ語、「―になる」。

‡のびやか(名) のびのびしてあること。

のびる[野蒜](名) 【植】百合（ユリ）科に屬する莖、臭氣多し、莖は細長にして葱（ネギ）に似、根莖は白色にして球狀をなす。

〔のびる[延](自) 「のぶ」の訛。

‡のふ[納](名) 「のふえ」に同じ。

のぶ[延、伸](自、は上二) ㊀長くなる。高くなる。廣くなる。㊁久しきにわたる。延引す。ながびく。(彌久)。㊂溶解す。とく。㊃盛大となる。富有となる。「身代が―」。㊄成長す。おひたつ。「草―」。(暢)。㊅おちゆく。にげゆく。㊆ゆるやかになる。㊇時間立ちて脆（モロ）くなる。(蒟蒻切などにいふ)。

のぶ[延、伸](他、は下二) ㊀長くす。高くす。廣くす。㊁延引せさす。ながびかす。㊂しく。ひろぐ。「諸國を―」。(陳)。㊃溶解す。とかす。

のぶ[宣、申、陳、述](他、は下二) かたる。つぐ。とく。いふ。

のふえ[納衣](名) 「のふのケサ」に同じ。

〔のふうぞく[野風俗](名) いやしき風俗。げびたるならひ。

〔のぶぎり[鋸](名) 「のこぎり」に同じ。(房・總地方の方言)。

のふく[野服](名) 昔時、遠行又は旅行などの衣服の稱、即ち野袴・脊割羽織の類をいふ。

のぶし[野伏](名) ㊀山野に露宿して修行する山伏。やまぶし。㊁野に棲（ス）む乞食。

のぶし[野武士](名) 山野などにさすらふ烏合の武士。

〔のぶすま[野伏間](名) 【動】「むささび」の一名。

のぶせり[野臥](名) ㊀野武士の稱。㊁山野に潛（ヒソ）める強盜。やまだち。(山賊)。

のぶだう[野葡萄](名) 【植】葡萄科に屬する植物、多く山野に自生す、莖は卷狀に分裂す、果實は大形にして秋の頃熟し、紫・紅・白・綠など雜（マジ）りあ

ひて腥（ハツル）しければ食すべからず

〔のぶと・し〕（くしけれ）【野太】（形、二）づぶとし。

のふ-の-ケサ（ノウ）【衲袈裟】（名）【佛】さまざまの不用の切地（キレ）をあつめて縫ひつゞりたる袈裟。

の-ぶろ【野風呂】（名）野遊などに携へ行く茶湯の風呂。

の-べ【野邊】（名）㊀のはら。のら。の。㊁はうむり。葬送。㊂くわさう 茶毘。「—の煙」。——おくり【野邊送】（名）（古昔は、主として、野邊に埋葬せし故にいふ）はうむり。葬送。——の-おくり【野邊送】（名）前條に同じ。

の-べ【延】（名）のぶること。又、のべたるもの。——がね【延金】（名）㊀鍛（キタ）ひて延べひろげたる金屬。㊁刀劍。——がみ【延紙】（名）小形の杉原紙、竪七寸横九寸許にして鼻紙に用ふるもの。——ざを【延棹】（名）つぎ棹にあらざる三味線の棹。——おさめ【延縮】（名）のぶると去むると。——ちぢめ【延縮】（名）前條に同じ。——ばらひ（ライ）【延拂】（名）支拂の期日を延ぶること。

〔のべたら〕（名、副）たえ間なくつゞきにいふ語。

〔のべつ〕（名、副）前條に同じ。——まくなし（名）たえ間なくつゞくこと。

〔のべる〕（他）「のぶ」の訛。

＋のぼ-ぎり【鋸】（名）「のこぎり」の古稱。

のぼ・す（せせすすれせよ）【上】（他、さ下二）㊀高きへ上ぐ。上へ進む。あぐ。すゝむ。（登、升）。㊁記載す。かきのす。「歷史に—」。㊂京へ送る。京へ遣る。㊃上流へ送る。さかのぼらす。

のぼ・す（せせすすれせよ）【逆上】（自、さ下二）㊀身氣常にたがひて頭部熱す。上氣す、㊁こり傾く、ふけりすさむ。㊂夢中になる。血迷ふ。

のぼせ【逆上】（名）㊀身氣常にたがひて頭部熱する病氣、頭痛又は齒痛若しくは便秘等をおこす。上氣。㊁こりかたむくこと。ふけりすさむこと。㊂血迷ふこと。夢中になること。

のぼせ-ひきさげ【逆上引下】（名）㊀のぼせをなほすこと。㊁「のぼせひきさげぐすり」の略言。——ぐすり【逆上引下藥】（名）のぼせを療治する下劑。

〔のぼせる〕（自）「のぼす」の訛。

のぼり【幟】（名）布の横に乳（チ）をつけ竿に通して立つるもの。——ぐひ（イ）【幟杙】（名）のぼりざををむすびつくる杙。——ざと【幟邑】（名）（其形の幟を立てたるさまに似たればいふ）漢字の旁の名、即ち郡・鄕等の右方にある阝の字の稱、字書にては邑部に屬す。おほざと。——ざを【幟竿】（名）のぼりをつけて立つる竿。

のぼり【上】（名）㊀のぼること。あがること。㊁のぼる路。のぼる阪。㊂袍のおくみ。㊃上京。——くだり【上下】（名）のぼるとくだること。——ぐち【上口】（名）のぼりすゝむこぐち。——ざか【上阪】（名）のぼる阪路。のぼりみち。——つ・む（めめむむるむれめよ）【上詰】（自、ま下二）極度までのぼる。のぼりて極度に遂す。〔——つめる〕（自）「のぼりつむ」の訛。＋——ば【上羽】（名）鳥の空にのぼるとき羽ばたきすること。——ばし【上階】（名）はしご。——ぶね【上船】（名）上流にさかのぼる船。又、京地へ向ふ船。——りゅう【上龍】（名）上に向ひて昇れる狀を描（エガ）きたる龍の畫。——りよう【上龍】（名）前條に同じ。

のぼ・る（らりるるれれ）【上】（自、ら四）㊀高きへ行く。上へ進む。あがる。（登、升）。㊁上流へ行く。さかのぼる。

「河を—」。㊂逆上す。のぼす。㊃京へ向ふ、京へ行く。㊄騰貴す。たかくなる。

の-ま【野馬】（名）野飼の馬。のろま。

の-まめ【野豆】（名）【植】豆科に屬する草、山野に自生す、莖は上昇す、葉はふぢまめに似、小さくして茶褐色を呈す、花は豆に似、淡紫色を呈し穗狀花序をなす。やぶまめ。（鹿藿）。

〔のま・れる〕（れれれるれるれれれよ）【被呑】（自、ら下二）㊀他にのまる。㊁のむことを得。㊂自ら他の勢におちおそる。

の-まを【野眞麻】（名）野生のからむしの稱。

のみ【蚤】（名）【動】蟲翅類に屬する細小なる昆蟲、體軀側扁にして胸部の三節は相分離し翅を闕（カ）く、三對の脚ありてよく跳躍す、夏濕地に生じ人畜に寄生して血を吸（ス）ふ、雌は雄よりも大なり。

のみ【鑿】（名）方圓の孔を穿（ウガ）つに用ふる具、柄あり、槌にて其頭を打ちて孔を穿つ、種類多し。

のみ【飲】（名）「のみくち」に同じ。

のみ（助）㊀それ一つにて、他になき意を表する語。「花咲く—」。（而已）。㊁決定の意を表する語。（多く漢文に用ふ）「如斯—」。（耳）。

のみ-かけ【飲掛】（名）飲む中途にて止めたる殘物。のみのこし。

のみ-ぐすり【飲藥】（名）内服する藥劑。内服藥。

のみ-くち【飲口】（名）㊀のみたるときの心地。㊁よく酒をのむこと。

のみ-ぐち【呑口】（名）樽の中の液體を注（ツ）ぎ出だす口、栓を拔差するやうにしたるもの。

のみ-くひ（イーク）【飲食】（名）飲むと食ふと。いんしよく。

のみ-くら・ふ（はひふふへへ）【飲食】（他、は四）㊀酒をのみ肴を食ふ。いんしよくす。㊁酒を十分に飲む。

のみ-こみ【呑込】（名）㊀のみて喉に下すこと。㊁ゑとく、なつとく、合點。

のみ-こ・む（まみむむめめ）【呑込】（他、ま四）㊀呑みて喉へ入る。呑みて腹中へ下す。（嚥下）。㊁心に理解す。さとる。合點す。會得す。

のみ-さし【飲殘】（名）のみさすこと。又、のみさしたるもの。

のみ-さ・す（さしすすせせ）【飲止】（他、さ四）飲む中途にて止む。

〔のみ-し〕【飲師】（名）のみて。上戸。

のみ-しろ【飲代】（名）酒などをのむ代金。

の-みち【野路】（名）野中の路。（野徑）。

〔のみっくら〕【飲競】（名）何れが多く酒を飲むかとくらべあふこと。

のみ-つぶし【飲潰】（名）のみつぶすこと。

〔のみ-つぶ・す〕（さしすすせせ）【飲潰】（他、さ四）㊀飲酒にふけりて財產を倒す。㊁酒を飲みて日を暮らす。

〔のみ-て〕【飲手】（名）よく酒を飲む人。

〔のみ-で〕【飲出】（名）酒などの飲むに足る量。

〔のみ-とり〕【蚤取】（名）のみをとること。又、其器。——ぐさ【蚤取草】（名）【植】「ありのタフぐさ」の一名。——まなこ【蚤取眼】（名）鋭くして視力の強き眼。又、大小もらさず注意して視ること。

〔のみ-ぬけ〕【飲拔】（名）そこぬけ。大酒家。

〔のみ-の-めをと〕【蚤夫婦】（名）夫より婦のたけ高きもの。

のみ-ほ・す（さしすすせせ）【飲乾】（他、さ四）杯の酒などを殘さずに飲む。

のみ-まはし（ーマワシ）【飲廻】（名）一つ器にもりたるものを順々に飲みてまはすこと。

のみ-みづ【飲水】（名）飲む水。飲用の水。

のみ-むし【蚤蟲】（名）【動】「はねむし」に同じ。

のみ-もの【飲物】（名）飲むべき料のもの。飲料。

のみ-れう（リヨウ）【飲料】（名）㊀前條に同じ。㊁のみしろ。㊂自分の飲むにあつるもの。

の・む（まみむむめめ）【呑】（他、ま四）㊀口より喉へ下し胃に送る。（飲）。㊁吸ひ込む。「煙草を—」。（喫）。㊂あはせ取る。とる。「遺恨を—」。㊃をさめ入る。をさむ。㊄輕蔑す。かろんず。㊅ふところにかくし持つ。「匕首を—」。

＋の・む（まみむむめめ）【祈】（他、ま四）請ひ願ふ。祈る。（乞）。

＋の-むし【蠹】（名）【動】「きくひむし」の古稱。

＋の-むど【咽喉】（名）（呑門の義）「のど」に同じ。

のむど-ぶえ【喉吭】（名）「のどぶえ」に同じ。

＋のめ【船茹】（名）船材のつぎ目に打ち込みて水の漏り入るを塞ぐもの。まいはだ。

〔のめ・す〕（さしすすせせ）（他、さ四）㊀前へ倒す。たふす。㊁動詞に添へて、稍や賤しむ意を表する語。「突き—」。「しやれ—」。

〔のめずり-こ・む〕（まみむむめめ）（自、ま四）㊀いつ入るともなく入り込む。㊁すべりこむ。

〔のめ-のめ〕（名、副）恥を恥とせず、厚顏にも其儘にあるさまにいふ語。おめ〳〵。

〔のめ・る〕（らりるるれれ）（自、ら四）㊀前へ倒る。たふる。㊁前へ傾く。かたむく。

＋の-も【野面】（名）のづら。

＋の-も-せ【野狹】（名）野も狹き程なること。

＋の-もり【野守】（名）古昔、野を守りし者。——ぐさ【野守草】（名）【植】萩の異稱。——の-かがみ【野守鏡】（名）野中の水に物の影の映（ウツ）るを鏡に見做していふ語。「春日野に—いざ尋ね見む」。

の-や【野矢】（名）鷹狩に用ふる矢。しゝや。

の-やき【野燒】（名）春草のよく生（オ）ふるため、冬に野を燒くこと。

の-やま【野山】（名）野と山と。

＋の-ら【野】（名）（「ら」は接尾語）「の」に同じ。

〔のら〕（名）なまけること。又、其もの。

〔のら-いぬ〕【野犬】（名）飼主の無き犬。

＋のら-え【野荏】（名）【植】紫蘇の古稱。

のら-かぜ【野風】（名）のらに吹く風。のかぜ。

〔のら-くら〕（名、副）㊀なまけあそびて徒に日を送るさまにいふ語。㊁のらくらもの。——もの（名）のらくらして役に立たぬもの。なまけもの。

＋のら-ね【野鼠】（名）【動】「ひみず」の古稱。

のら-ねこ【野猫】（名）飼主のなき猫。どらねこ。

のら-まめ【野豆】（名）【植】（い）＋豌豆の古稱。（ろ）「そらまめ」に同じ。（尾張地方の方言）。

〔のら-もの〕（名）のらくらもの。なまけもの。

のら-やぶ【野藪】（名）のらにあるやぶ。

のり【則】（名）㊀一定の道理。みち。㊁一定の數理。をしへ。（特に佛法にいふ）。「—の道」。（法）。㊂おきて。規則。（度）。㊃てほん。模範。（範）。

のり【糊】（名）米又は麥の粉を煮てねばくしたるもの、ものを貼（ハ）りつくるに用ふ。

のり【血】（名）「ち」に同じ。

のり【乘】（名）のること。

のり【海苔】（名）【植】（い）紅色藻又は綠色藻の如く、水中の木石などに附生して苔狀をなすもの。（紫菜、水苔）。（ろ）一種の食品、あまのりを紙の如くに漉（ス）きて乾（ホ）したるもの、火にあぶりて食ふ。即ち淺草海苔の類これなり。

＋の-り【箆入】（名）箭の入るほど。「千—」。「五百—」。

のり-あが・る（らりるるれれ）【乘上】（自、ら四）㊀上にのぼりあがる。㊁船又は車などが、進むはずみに其

物の上にあがる。

のりあ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）［乘上］（他、か下二）船又は車などを進めて、其物の上にあがらしむ。

〔**のりあげる**（他）「のりあぐ」の訛。

のりあひ（イ—ア）［乘合］（名）㊀船又は車に共に乘ること。又、其人々。㊁一つ物に共に出金すること。——**ばしや**［乘合馬車］（名）多人數共に乘る馬車。——**ぶね**［乘合船］（名）多人數共に乘る船。

のりあ・ふ（ウ—ア）（はひふふへへ）［乘合］（自、は四）共に其ものに乘る。

のりいた［糊板］（名）㊀そくひいた。㊁糊をのせおく板、事務員などにくばりおくもの。

のりい・る（らりるるれれ）［乘入］（自、ら四）船又は馬などに乘りて、其中に入る。

のりい・るる（れれるるるるれれよ）［乘入］（他、ら下二）船又は馬などを、乘りて其中に進めやる。

のりいれ［糊入］（名）㊀糊を入れて置く器。（糊壯）。㊁杉原紙の一種、糊を入れて製造したるもの、判大いなり。——**がみ**［糊入紙］（名）前條㊁に同じ。

〔**のりいれる**（他）「のりいる」の訛。

のりうち［乘打］（名）馬又は駕籠などに乘りたるまゝにて、通り行くこと。「—を禁ず」。

のりうつ・る（らりるるれれ）［乘移］（自、ら四）㊀のりかへる。のりかふ。「汽車に—」。㊁神靈其人の身にやどる。㊂たゝる。とっつく。「死靈が—」。

のりうま［乘馬］（名）乘るための馬。じようめ。

のりおり［乘下］（名）のることおるゝこと。

のりかか・る（らりるるれれ）［乘掛］（自、ら四）㊀乘ることに着手す。のらんとす。㊁なしはじむ。しはじむ。㊂上にのりて體を托す。

のりか・く（けけくくるくれけよ）［乘掛］（自、か下二）乘りながら上る。「岩に—」。

のりかけ［乘掛］（名）駄馬の荷を二十貫目として、一人其上に乘ること。

〔**のりかける**（自）「のりかく」の訛。

のりか・ふ（カ—ヘ）（へへふふるふれへよ）［乘替］（他、は下二）㊀のりものをかふ。㊁夫又は妻をかふ。

のりかへ（エ—カ）［乘替］（名）㊀のりかふること。㊁のりかふるために備へおくのりもの。（副乘）。

のりき［乘氣］（名）心の其物事にはずみすゝむこと。物事をなすに勢づくこと。

のりきり［乘切］（名）のりきること。

のりき・る（らりるるれれ）［乘切］（自、ら四）㊀のりかへせずにとほす。㊁のりたるまゝに行き過ぐ。㊂自ら進みて其事にあたる。

‡**のりぐ・す**（せしすするすれせよ）［乘具］（自、さ變）のりあふ。

のりくみ［乘組］（名）共に乘りたる人。のりあひ。——**ゐん**［乘組員］（名）のりくみの人員。

のりく・む（まみむむめめ）［乘組］（自、ま四）共に乘る。のりあふ。

のりこえ［乘越］（名）のりこゆること。〔——**る**（自）「のりこゆ」の訛。

のりこし［乘越］（名）のりこすこと。

のりこ・す（さしすすせせ）［乘越］（他、さ四）㊀上にのぼりこす。㊁他より上にすゝみのぼる。㊂汽車又は電車などにて、目的の地より先に進み過ごすこと。

‡**のりごつ**（たちつつてて）［詔、令］（他、た四）のりたまふ。おほせらる。

‡**のりごと**［詔令］（名）おほせ。みことのり。

‡**のりこぼ・る**（れれるるるるれれよ）［乘溢］（自、ら下二）あふるゝばかりに多くのる。

のりこみ［乘込］（名）のりこむこと。

のりこ・む（まみむむめめ）［乘込］（自、ま四）㊀或ものにのりて其中に入る。㊁のりくむ。のりあふ。㊂おもむく。でばる。いたる。㊃他より入りて其家の主となる。「本家へ—」。

のりこ・ゆ（えええゆゆるゆれえよ）［乘越］（自、や下二）「のりこす」に同じ。

‡**のりしり**［乘尻］（名）競馬の乘手。

のりす・つ（ててつつるつれてよ）［乘捨］（他、た下二）のりものより出で又は下りて、其儘すておく。

のりすて［乘捨］（名）のりすつること。〔——**る**（他）「のりすつ」の訛。

のりぞめ［乘初］（名）始めて物に乘ること。

のりだし［乘出］（名）のりだすこと。

のりだ・す（さしすすせせ）［乘出］（自、さ四）㊀乘りて出で行く。㊁おもむく。でばる。

〔**のりぢ**［乘地］（名）のりき。

のりぢ［糊地］（名）地に糊の強く延（ヒ）きてあること。

のりつ・く（けけくくるくれけよ）［乘着］（自、か下二）馬などを馳せて到り着く。

のりづけ［糊着］（名）糊にて着くること。又、其もの。

〔**のりつける**（他）「のりつく」の訛。

のりて［乘手］（名）㊀のる人。㊁馬などによく乘る人。

のりと［祝詞］（名）次條に同じ。「天つ—のふと—ごとをのれ」。

‡**のりとごと**［祝詞］（名）神に申し上ぐる詞。又、はらひに讀み上ぐる詞。

のりと・る（らりるるれれ）［則］（自、ら四）（のりをとる義）「のっとる」に同じ。

のりと・る（らりるるれれ）［乘取］（他、ら四）㊀攻め入りて奪ひ取る。㊁うばひて我有となす。

のりのあざ［血蹤］（名）血のながれたるあと。はゞり。

のりのあめ［法雨］（名）佛の敎化のあまねきを雨にたとへいふ語。

のりのうみ［法海］（名）佛の道理のふかきを海にたとへいふ語。

のりのころも［法衣］（名）「ほふえ」に同じ。

のりのこゑ［法聲］（名）讀經の聲。

のりのし［法師］（名）「ほふし」に同じ。

‡**のりのすべらぎ**［法皇］（名）「ほふわう」に同じ。

‡**のりのつかさ**［式部省］（名）「しきぶしやう」に同じ。

のりのともしび［法燈］（名）㊀佛に供ふるあかし。㊁佛道の系統。

のりのはな［法華］（名）佛道のひかり。

のりのみち［法道］（名）佛門。佛道。

のりのむしろ［法筵］（名）㊀佛像を拜する所。㊁佛道を說く所。

のりばけ［糊刷毛］（名）糊をものに塗るに用ふるはけ。

のりびやうし（ウ—ヒヨ）［乘拍子］（名）馬などに乘る拍子。「かいぐりく—」。

のりまき［海苔卷］（名）乾海苔にて卷きたるにぎり飯又は鮨。

のりまは・す（ワス—マ）（さしすすせせ）［乘廻］（他、さ下二）乘りものに乘りて方々をめぐる。

のりもの［乘物］（名）㊀人の乘りて行くもの、總稱。㊁駕籠・肩輿・轎等の特稱。

‡**のりもの**［賭物］（名）勝負事に賭（カ）くる品物。かけもの。

のりものかご［乘物籠］（名）人の乘り行く籠。のりもの。

‡**のりゆみ**［賭弓］（名）古昔、正月十八日に行はれし公事。當日は主上弓場殿に出御ありて、左右の近衛府・兵衛府の舍人等の弓を射るを御覽あり、勝ちたる方には大將より還饗（カヘリアルジ）ありたりといふ。

の・る（らりるるれれ）［乘］（自、ら四）㊀のぼる。あがる。㊁のりものに身を托す。㊂記載してあり。しるしてあり。「年代記に—」。（載）。㊃機會につけこむ。㊄調子に合ふ。㊅勢のまゝに進む。㊆勢づく。さかる。「油が—」。㊇あざむかる。たばからる。「計略に—」。

‡**の・る**（らりるるれれ）［宣、告］（他、ら四）言ひ聞かす。つぐ。いふ。のぶ。

‡**の・る**（らりるるれれ）［似］（自、ら四）「にる」の古言。

‡**の・る**（らりるるれれ）［罵］（他、ら四）惡口す。のゝしる。

の・る（らりるるれれ）［伸］（自、ら四）背をのばす。「—程食ふ」。——**かそるか**［伸反］（副）成敗を賭して。いちかばちか。

のれん［暖簾］（名）㊀張りて日光を避くるに用ふる布帛の幌（トバリ）。（布簾）。㊁商家の屋號。「—を分ける」。〔——**し**［暖簾師］（名）よろしからざる品を胡魔かして賣る商人。（東京地方の方言）。——**とうでおし** 少しもはりあひなきにいふ。

〔**のろ**（名）「のろま」の略言。

〔**のろくさい**（形）のろきさまなり。

〔**のろけ**［惚氣］（名）自分と自分の情人との間に於ける痴事を誇顏に人に話すこと。——**ばなし**［惚氣話］（名）のろけのはなし。

〔**のろ・ける**（けけけるけるけれけよ）［惚氣］（自、か下一）のろけ話をなす。

のろし［烽火］（名）古昔、警戒の相圖に打ちあげし煙火の稱。（狼煙）。——**もり**［烽火守］（名）のろしを守る人。

のろ・し（く、し、き、けれ）［鈍］（形、一）㊀敏捷ならず。にぶし。ぬるし。おそし。㊁色に溺（オボ）れ易し。女にまよひ易し。

〔**のろのろ**（名、副）のろきさまにいふ語。

‡**のろのろ・し**（しく、しく、し、しき、しけれ）（形、二）いとのろし。

のろひ（イノロ）［詛］（名）のろふこと。（呪）。——**ごと**［詛言］（名）のろひていふことば。

のろ・ふ（ウノロ）（はひふふへへ）［詛］（他、は四）㊀怨みある人に禍のあれかしと神佛に祈る。とこふ。㊁其人又は其物事の失敗にをはれかしとこひねがふ。㊂さまたぐ。妨害す。

〔**のろま**［鈍間］（名）氣の利（キ）かぬこと。又、其人。

〔**のろま**［野呂松］（名）「のろまにんぎやう」の略言。——**づかひ**（カイ—ツ）［野呂遣］（名）野呂松人形をあやつり舞はすもの。くゞつまはし。——**にんぎやう**（ヨウ—ギ）［野呂松人形］（名）あやつり人形の一種。色の青黑き奇怪なる人形をあやつり舞はせ、馬鹿氣たる狂言を演ずるもの、野呂松勘兵衛の創始といふ。

〔**のろり**（名、副）「のろのろ」に同じ。

のわき［野分］（名）秋より冬にかけて吹く烈（ハゲ）しきこがらし。——**だ・つ**（たちつつてて）［野分立］（自、た四）のわき吹き立つ。——**のかぜ**［野分風］（名）「のわき」に同じ。暴風。

のゑんどう［野豌豆］（名）〔植〕「はまゑんどう」の一名。

〔**のんき**（名）（延氣の義）㊀心配のなきこと。心がゝりのなきこと。㊁氣の長きこと。いそがざること。㊂無頓着。平氣。（暢氣）。

〔**のんこ**（名）恥辱の感じにぶきこと。鐵面皮なること。厚顏。——**のしや**（名）前條に同じ。

〔**のんだくれ**（名）おほざけのみ。そこぬけ。大酒家。

〔**のんたらう**（ロウ—タ）［呑太郎］（名）前條に同じ。

〔**のんど**［咽喉］（名）「のむど」に同じ。

〔**のんびり**（名、副）心ゆるやかにして體のくつろぐさまにいふ語。

〰のんべんだらり（名、副） 空しく時間を費やすさまにいふ語。

はばぱ

は 一種の聲音H即ち音道の呼吸の場合より聲門を稍や狹め深厚なる氣息を吐出して發せしむる音と、母音「あ」との綴音。

ば 「は」の濁音、すべて「ば」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、從來「は」の濁音となしゝは誤りなり。

ぱ 脣的破裂音P即ち上下兩脣を觸れて破裂せしむる音と、母音「あ」との綴音、從來「は」の半濁音となしゝは誤りなり。

は[齒]（名） ㊀動物の上齶の下面と下齶の上面とに生ずる白色にして骨に類するもの、主部は象牙質より成り、其冠部即ち齒齦上に露出せる部分の外面は琺瑯質にて被（ホオ）はれ、其根部即ち齒齦内に嵌入せる部分の外面は白堊質にて被はる、内部に小腔ありて神經及血管通ず、門齒・犬齒・臼齒等の別あり、食物を咀嚼し又は言語の發音を助くる作用をなす。㊁器具器械などに、細かき刻みの並び出でたるもの。「鋸の―」。㊂車輪のへり。㊃はきもの、下に著きたる板の脚。（屐齒）。――がうく 齒の根浮きあがる。又、噛みて未熟に且つ不快の感あるにいふ。

は[刃]（名） 刀又は小刀等すべて切物の薄く鋭くして物を切る部分。むねの對。「刀の―」。――がこぼれる 刃の處々の缺（カ）くるにいふ。

は[葉]（名） 【植】草木の幹莖又は枝梢の側邊に互生し又は對生し若しくは輪生するもの、通常綠色にして其形扁平なり、木質より成れる線狀ありこれを葉脈といふ、一個の片より成るものを單葉といひ、二個以上の片より成るものを複葉といふ、呼吸作用及同化作用を營む機關なり、又、種々の變形をなし特別の用をなすものもあり。

は[羽]（名） ㊀鳥の全身を被（ホオ）ふ毛。羽毛。㊁鳥類の空中飛行の用をなす翼。つばさ。「鶴の―風」。㊂昆蟲の成蟲が空中飛行の用をなす翅。㊃矢に著けたる鳥の羽。㊄「はぶり」の略言。「―が利く」。

は[端]（名） ㊀はた。はし。「山の―」。㊁はした。はんぱ。

卄は[蹊]（名） 「さしば」に同じ。「―とりの命婦」。

⌒は[派]（名） ㊀えだ。わかれ。㊁くみ。なかま。

⌒は[覇]（名） ㊀諸侯の首長。はたがしら。㊁武力又は術策を以て治國の本となすこと。㊂其社會の首長たるもの。其範圍の最傑たるもの。

はッ[者]（助） 事物を離して他と區別するに用ふる語。「花―咲く」。「人―歸る」。

は（感） ㊀他語の中間又は下に置く感動詞。「聲絶えず鳴けや鶯一年に再びとだに來べき春か―」。㊁應答の聲。㊂わらふ聲。

―はッ[把]（接尾） 束ねたる物を數ふるにいふ語。「一―」。「二―」。

―はッ[羽]（接尾） 鳥を數ふるにいふ語。

ば[場]（名） （場（ニハ）の約）ところ。には。場所。場席。

ば（助） 原因結果を表して兩語を連接する語。「せずんばあらず」。「聲て―響く」。

〰はあ（感） ㊀笑ふ聲。㊁ゆるき應答の聲。

ばあたり[場當]（名） ㊀芝居などにて、脚色に關係なく、當座の事柄につき、氣轉をきかして喝采を博すること。㊁すべて現前の事實に對し、氣轉をきかして當座の人氣を博すること。

ばあひ（アイ）[場合]（名） 其場に出合ひたる時。をり。若は。時機。

はあり[羽蟻]（名） 【動】膜翅類中蟻科に屬する昆蟲の翅を生じたるものが、空中に飛行して交尾をなすときの稱。飛蟻。

⌒はい[拜]（名） ㊀頭を低（タ）れて敬禮すること。をがむと。㊁書牘文などにて、自己の名の下に書きて敬意を表する語。

⌒はい[盃]（名） さかづき。（杯）。

⌒はい[胚]（名） ㊀はらごもり。みごもり。㊁おこり。もと。㊂【動】卵の黃色なる部分の上面にありて、俗に眼と稱せらるゝもの、即ち孵化して雛となる部分。㊃【植】種子の内部にありて二枚の厚き子葉を具するもの、即ち植物の起原となるべき部分。

⌒はい[肺]（名） ㊀肺臟に同じ。㊁肺病の略言。

⌒はい[牌]（名） ㊀かけふだ。㊁かんばん。㊂たてふだ。㊃徽章。㊄たて。

⌒はい[配]（名） ㊀つゐ。たぐひ。㊁つれあひ。めをと。

⌒はい[輩]（名） ㊀ともがら。やから。㊁あひて。たぐひ。㊂つら。なみ。

⌒はい[背]（名） うしろ。せ。

〰はい[鮠]（名） 【動】「はえ」に同じ。

〰はい[蠅]（名） 【動】「はへ」に同じ。

〰はい[唯]（感） ㊀敬意を表する應答の聲。「内より―と返事して」。㊁馬を追ふ聲。

⌒はい―[拜]（接頭） 或語に冠して、敬意を以てする意を表する語。「―送」。「―見」。

⌒―はい[杯]（接尾） 液體を器に盛りたるものゝ數を數ふるにいふ語。

⌒ばい[貝]（名） ㊀【動】螺の一種、海に産す、形はたにし似、長くして厚く、肉は食用に供せらる。（貝類、小甲香）。㊁法螺貝。

⌒ばい[倍]（名） 或數に對して、其數を二つ合したる量の稱。「―多い」。

⌒ばい[枚]（名） 古昔、夜討の軍勢などに聲を立てさせざるため、口の中に横に銜（クフ）ませ紐もて項（ヒク）に結び著けしもの。「人は―をふくみ、馬は舌を結ぶ」。

⌒ばい[馬醫]（名） 馬の醫者。馬の獸醫。伯樂。

―ばい[倍]（接尾） 或數に對し、其數を重ねたる度數を數ふるにいふ語。「二―」。「三―」。

⌒はいあん[廢案]（名） 廢止となりたる議案又は考案。

⌒はいい[敗衣]（名） やぶれごろも。

⌒はいいう[俳優]（名） やくしや。わざをぎ。

⌒はいいう[俳友]（名） 俳諧のとも。俳諧の連中。

⌒ばいいん[賣婬]（名） ひそかに婬をひさぐこと。

――ふ[賣婬婦]（名） 賣婬する婦。ぢごく。

⌒はいう[沛雨]（名） 沛然とふる雨。おほあめ。

⌒ばいう[梅雨]（名） 「つゆ」に同じ。（黴雨）。

⌒はいえつ[拜謁]（名） 目上の方に見ゆること。

⌒バイえふ（ヨウ）[貝葉]（名） 「バイタラえふ」に同じ。

⌒はいえん[肺炎]（名） 「コッケン」と稱する細菌より發する肺の病氣、初めは惡寒などを感じ、漸次發熱して胸部に刺すが如き疼痛を覺え、咳嗽を發するもの、往々他に傳染することあり。

⌒ばいえん[煤煙]（名） ㊀すゝ。㊁石炭のけむり。

⌒ばいおん[倍音]（名） 【理】原音に對して其整數倍の振動數を有する音。

⌒はいか[敗家]（名） ㊀家産をたふすこと。いへをつぶすこと。㊁やぶれいへ。

⌒はいか[配下]（名） てした。くみした。

⌒はいか[癈家]（名） ㊀相續人なくして家の斷絶すること。又、其家。㊁【法】新に一家を建てたる戸主が、他家に入籍して自ら建てたる家を廢すること。

⌒はいが[拜賀]（名） 目上の方によろこびを申すこと。謹みて祝儀をいふこと。

⌒ばいか[倍加]（名） ましくはゝること。

⌒ばいか[賣價]（名） うるあたひ。うりねだん。

⌒ばいか[買價]（名） かふあたひ。かひねだん。

⌒はいかい[俳諧]（名） ㊀たはむれ。おどけ。「―に紙につけはべりし」。㊁和歌の一體、ことばづかひを狂體に詠むもの。㊂短歌の一種、連歌の發句の五七五の三句を一首となすもの。ほっく。俳句。――うた[俳諧歌]（名） 前條㊁に同じ。――し[俳諧師]（名） 俳句を作る人。又、俳句に巧なる人。

⌒はいかい[沛艾]（名） 馬の勇ましきこと。

⌒ばいかい[媒介]（名） 雙方の中間に立ちてとりもつこと。なかだち。とりもち。

⌒はいかう（コウ）[佩香]（名） 携帶するにほひもの、即ちにほひ袋の類。

⌒はいかう（コウ）[廢校]（名） 學校をやむること。

⌒はいかう（コウ）[背向]（名） せなかあはせ。

⌒ばいかう（コウ）[陪行]（名） はんべりゆくこと。したがひゆくこと。

⌒はいがく[廢學]（名） ㊀學問をやむること。㊁學校を退學すること。

⌒はいかし[敗家子]（名） 家産をたふしたる道樂むすこ。

⌒ばいかひ（カイ）[賣買]（名） うりかひ。

⌒はいがふ（ゴウ）[配合]（名） ㊀とりあはせ。くばりあはせ。「色の―」。㊁娶（メ）あはすること。

⌒ばいがふ（ゴウ）[媒合]（名） 男女の中をとりもちて媾を結ばしむること。――ようし[媒合容止]（名） 男女をとりもちて、自分の家にとまらすること。

ハイカラ[高襟]（名） （High collar. 即ち高き「カラー」の義） ㊀普通よりもたけの高き「カラー」。又、其「カラー」を着用せるもの。㊁西洋風を好みまねること。又、其もの。㊂時流を追ひて服裝をかざること。又、其もの。㊃新しき流行、新しき服裝。㊄にやけたること、輕躁なること。又、其もの。――たう（トウ）[高襟黨]（名） 高襟なる人々。

⌒はいかん[肺肝]（名） ㊀肺と肝と。㊁轉じて、心の奧底。――をくだく[摧肺肝] 心の力をつくしてかんがふ。――をひらく[披肺肝] 心のおくそこをうちあかす。

⌒はいかん[廢刊]（名） 定期刊行物の刊行を廢止すること。

⌒はいかん[背汗]（名） あまりはづかしくして、背に冷汗の出づること。轉じて、いとはづかしきこと。

⌒はいかん[排陷]（名） 人をおとしいるゝこと。

⌒はいがん[拜顏]（名） （顏を拜する義）人に會（ア）ふことの敬語。（拜眉、拜謁）。

⌒はいき[廢棄]（名） ㊀やめて用ひざること。すつること。とりのぞくこと。㊁【法】控訴又は上告の裁判にて、原裁判又は訴訟手續を違法なりとして取消すこと。

⌒はいき[拜跪]（名） 拜してひざまづくこと。

⌒ばいき[煤氣]（名） 石炭瓦斯。

⌒はいきう[胚球]（名） 卵の發生の際に生ずる多數の細胞より成れる球狀のもの。

⌒はいきき[排氣機]（名） 「くうきポンプ」（空氣唧筒）に同じ。

⌒はいきしよう[排氣鐘]（名） 前條に同じ。

⌒ばいきせい[煤氣井]（名） 石油を吸み出す井戸。

⌒はいぎやく[悖逆]（名） 道理にたがひもとる

ヿ。法度にたがひもとるヿ。

（ばい-きやく）［賣却］（名）うりはらふヿ。うりはらひなすヿ。――きん［賣却金］（名）賣却して受取りたる金。――だいきん［賣却代金］（名）前條に同じ。

（はい-きよ）［廢去］（名）やめさるヿ。

（はい-きん）［拜金］（名）金錢を絶對無上のものとあがめたふとぶヿ。「―の徒」。

（はい-ぎん）［拜吟］（名）他人の詩歌を吟誦するヿにいふ敬語。

（ばい-きん）［黴菌］（名）【植】極めて細微なる下等植物、其細胞は纖維質の細胞膜に蔽（ホオ）はれたる原形質なり、これを延長して發育するにより絲狀をなす、少量の營養を得れば、液中又は空氣中にてよく蕃殖す、普通人目に觸るゝものは黴（カビ）なり。――がく［黴菌學］（名）黴菌に就きて研究する科學。

（はいきん-しゆう）［拜金宗］（名）金錢を絶對無上のものとあがめたふとぶ主義。「―の信者」。

（はいきん-しよう）［肺焮衝］（名）「はいえん」（肺炎）に同じ。「を見よ」。

（はい-く）［俳句］（名）俳諧の句、ほっく。（俳諧の條を見よ）。

（はい-ぐ）［拜具］（名）（謹みて申上ぐる義）書牘文の末尾に書する語。

（はい-ぐう）［配偶］（名）㊀そへあはするヿ。そはするヿ。㊁つれあひ。めをと。――しや［配偶者］（名）つれあひ。めをと。

（ばい-くわ）［梅花］（名）㊀梅の花。㊁煉香の一種。

（ばい-くわ）［賣貨］（名）うる品物。うりもの。

（ばい-くわ）［買貨］（名）かふ品物。かひもの。

（はい-くわい）［徘徊］（名）たちもとほるヿ。うろつくヿ、ぶらつくヿ。

（はい-くわい）［敗潰］（名）やぶれつひゆるヿ。

（はい-くわい）［廢潰］（名）あれつぶるゝヿ。

（はいくわ-けう）［拜火敎＝Fire worship］（名）火を靈なるものとして拜する宗敎。

（ばいくわ-なう）［梅花腦］（名）龍腦の一名。

（ばいくわ-はう）［梅花方］（名）梅の香のするたきもの。

（はい-くわん）［肺患］（名）肺のやまひ。

（はい-くわん）［拜觀］（名）觀（ミ）るヿの敬稱。

（はい-くわん）［廢官］（名）官職の廢止せらるゝヿ。

（はい-くわん）［稗官］（名）㊀ひくき官職。㊁小說。（稗說）。

（はい-くわん）［陪觀］（名）目上のともをしてみるヿ。はんべりみるヿ。

（ばい-くわん）［陪官］（名）はんべりしたがふ官吏。

（はい-ぐん）［敗軍］（名）たゝかひにやぶれたるヿ。まけいくさ。――の-しやう［敗軍將］（名）まけいくさの大將。又、失敗して世上より非難を受くるもの。

（はい-けい）［背景］（名）㊀背後の光景。㊁舞臺の後壁に描（ガエ）きたる景色。

（はい-けい）［拜啓］（名）（敬みて申上ぐる義）手簡の冒頭に用ふる語。

（はい-げい）［拜迎］（名）出迎するヿの敬語。おむかへ。

（はい-けう）［背敎］（名）をしへにそむくヿ。

（はい-げき）［排擊］（名）おしのけんと攻擊するヿ。非難するヿ。

（はい-けっかく）［肺結核］（名）結核症なる肺臟の病氣、恐るべき傳染病にして、一家ことごとくこれにかゝりて血統絶ゆるヿ珍しからず、老人よりも若き人に多く、其傳染は患者の咯痰よりするものなり、多病・運動不足・營養不給・房事過度・熱病後等はこれにかゝり易し、俗に肺勞といふ。

（はい-げふ）［廢業］（名）㊀職業をやむるヿ。㊁藝娼妓の稼業をやむるヿ。

（はい-けん）［拜見］（名）㊀見るヿの敬語。㊁見るヿをねがふヿ。㊂外國商人と生絲賣込人との生絲の取引にて、雙方立會の上、前に呈出せし見本に照して持込みたる生絲をあらため見て事を定むるヿ。

（はい-けん）［佩劍］（名）おびたるつるぎ。

（ばい-けんじやう）［賣券狀］（名）「うりけんじやう」に同じ。

ハイゲンスのげんり［―の原理］【理】「ホイヘンス」の原理に同じ。

（はい-こ）［癈痼］（名）療治とゞかずして遂に癈人となる病氣。

（はい-こ）［廢戶］（名）斷絶したる家。

（はい-こ）［敗鼓］（名）やぶれ太鼓。

（はい-ご）［廢語］（名）すたれて用ひられざる語。

（はい-ご）［背後］（名）うしろ。せ。

（はい-こう）［廢興］（名）すたるゝとおこると。

（はい-こう）［胚孔］（名）卵の發生する際に生ずる孔、後に至り肛門又は口となるもの。

（ばい-こく）［賣國］（名）本國の事情を敵國に通じ、又は本國の不利にして敵國の利益となる事を企つるヿ。「―の臣」。――ど［賣國奴］（名）賣國の所行ある人をのゝしりていふ語。

ばい-ごま［貝獨樂］（名）貝（バイ）の介殼を細工したる獨樂。陀螺。

（はい-ざい）［配劑］（名）藥劑を調合するヿ。くすりをもりあはするヿ。

（はい-ざう）［肺臟］（名）陸上に生息する脊椎動物の呼吸器、人類のは、胸腔の兩側に位し左右各一個ありて心臟を包む、葉狀をなし海綿質にして彈力に富む、內部は氣管細枝・肺胞及毛細血管等が網絮の如くに纏綿せり。

（はい-さつ）［廢札］（名）通用せざる紙幣。

（はい-さつ）［配札］（名）ふだをくばるヿ。又、くばるふだ。

（はい-ざん）［廢殘］（名）やぶりそこなふヿ。又、やぶれそこなはるゝヿ。

（はい-し）［胚子］（名）卵が受精作用をへて孵化するまでの稱。

（はい-し）［廢弛］（名）すたれゆるぶヿ。

（はい-し）［廢止］（名）行はぬヿ。やむるヿ。

＋（はい-し）［背子］（名）カラぎぬ。

（はい-し）［稗史］（名）小說的の歷史、稗官、小說。

（はい-し）［敗紙］（名）やぶれがみ。

（はい-し）［配祀］（名）本尊たる神に副（ソ）へてまつるヿ。

（はい-し）［拜芝］（名）面會するヿの敬語。

（はい-じ）［廢寺］（名）すたれたる寺。住僧のなき寺。

（はい-じ）［拜辭］（名）㊀辭退するヿの敬語。㊁暇乞するヿの敬語。

（ばい-し）［倍徙］（名）（徙は五倍の義）數を幾倍にもするヿ。

（ばい-し）［貝子］（名）㊀【動】「こやすがひ」の一名。㊁淸國の皇族にして未だ貝勒の稱號なき方の稱、我國の王の如きもの。

（ばい-し）［馬醫師］（名）「ばい」（馬醫）に同じ。

（ばい-じ）［媒辭］（名）【論】三段論法の前提にて、斷案を導き出す辭の稱。

（ばい-しう）［買收］（名）㊀かひとるヿ。かひあつむるヿ。㊁密に利益を與へて我味方となすヿ。「議員―」。――うんどう［買收運動］（名）買收のためにする奔走周旋。

（はい-しつ）［癈疾］（名）治療とゞかずして遂に不具となる病氣。

（はい-しつ）［肺疾］（名）はいびやう。

（ばい-しつ）［媒質］（名）【理】波動を傳播する物質。

（はい-じつ-せい）［背日性］（名）【植】植物の根が日光を避くる方に向って生長するヿ。

（はい-しや）［背斜］（名）【地】地殼の褶曲の凸起する所の稱。

は-いしや［齒醫者］（名）齒の療治を專門とする醫者。（牙醫）。

（はい-しや）［拜謝］（名）つゝしみてかたじけなしと謝を述（ノ）ぶるヿ。おれいをいふヿ。

（はい-しや）［廢舍］（名）あれはてたるいへ。

（はい-しやう）［廢娼］（名）娼妓を廢するヿ。

（はい-しやう）［俳倡］（名）わざをぎ。やくしや。

（はい-しやう）［敗將］（名）いくさにまけたる將。又、失敗したるもの。

（はい-しやう）［敗漿］（名）くされたるのみもの。

（ばい-しやう）［梅漿］（名）うめず。

（ばい-しやう）［賠償］（名）他人に蒙らしめたる損害の補償をなすヿ。つぐのひ。あがなひ。――がく［賠償額］（名）賠償するたか。――ぎむ［賠償義務］（名）賠償に任ずべき義務。

（はい-しやく）［拜借］（名）借るヿの敬語。

（はい-しやく）［杯酌］（名）杯をとりやりして酒をくみかはすヿ。

（ばい-しやく）［媒妁］（名）男女の緣をとりもつヿ、又、其人、なかうど。――にん［媒妁人］（名）媒妁する人。なかうど。

（はい-しゆ）［杯酒］（名）さかづきのさけ。

（はい-しゆ）［胚珠］（名）【植】子房內に存在する小礫、他日成熟して種子となるもの。

（はい-じゆ）［拜受］（名）うけいたゞくヿの敬語。

（はい-じゆ）［拜誦］（名）「はいしよう」に同じ。

（ばい-しゆ）［賣主］（名）うりぬし。

（ばい-しゆ）［買主］（名）かひぬし。

（ばい-しゆ）［醅酒］（名）もろみざけ。

（ばい-じゆう）［陪從］（名）はんべりしたがふヿ。ともをするヿ。又、其人。とも。

（はい-しゆつ）［排出］（名）㊀そとへおしだすヿ。㊁「はいせつ」（排泄）に同じ。

（はい-しゆつ）［輩出］（名）人物の相繼ぎて出づるヿ。

（はい-しよ）［配所］（名）配流せられたる地。ながされたる場所。「罪なくして―の月を見る」。（謫所）。

（ばい-じよ）［媒助］（名）なかだちするヿ。

（はい-しよう）［拜誦］（名）よむヿの敬語。

（はい-しよう）［拜承］（名）うけたまはるヿ。

（ばい-じよう）［陪乘］（名）貴人に陪從してあひのりするヿ。

（はい-しよく）［配色］（名）色の配合。

（ばい-しよく）［陪食］（名）貴人にはんべりて共に食事するヿ。しやうばん。

（ばい-しよく）［賣色］（名）婬をひさぐヿ。

（ばい-しよく）［培殖］（名）つちかひやしなふヿ。

（はい-しん）［背進］（名）背後に進行するヿ。しりぞくヿ。

（はい-じん）［俳人］（名）俳諧をよくする人。

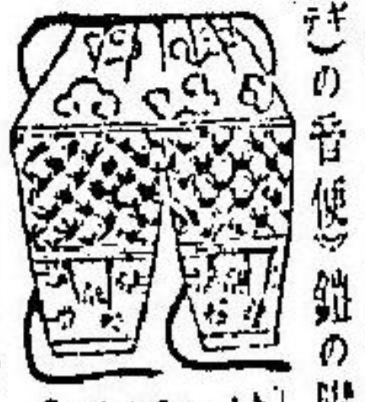
（はい-じん［癈人］（名）不具の人。かたは。
（ばい-しん［陪臣］（名）またもの。またげらい。
（ばい-しん［陪審］（名）訴訟の審理に陪席すると。――くわん［陪審官］（名）㊀陪審する官吏。㊁ばいせきはんじ（陪席判事）に同じ。
（ばい-しんどう［倍振動］（名）【理】倍音を發する振動。
はい-す（せしすするすれせよ）［配］（自、さ變）相當す。匹敵す。あたる。
はい-す（せしすするすれせよ）［配］（他、さ變）㊀頒布す。くばる。㊁つゐとなす。あつ。㊂夫婦となす。めあはす。㊃流刑に處す ながす。㊄穀屬となす。つく。
はい-す（せしすするすれせよ）［癈］（他、さ變）㊀行はず。用ひず。やむ。すつ。㊁其地位より退かしむ。
はい-す（せしすするすれせよ）［拜］（他、さ變）㊀頭を垂（タ）れて禮をなす。をがむ。㊁將軍の官に任ず。㊂ありがたく受く、つゝしみて受く。㊃ありがたく思ふ。たふとく思ふ。
はい-す（せしすするすれせよ）［癈］（自、さ變）機能すたる。不具となる。
はい-す（せしすするすれせよ）［排］（他、さ變）㊀おしひらく。おし去りぞく。「門をはいして入る」。㊁ならべおく。くばりおく。
ばい-す（せしすするすれせよ）［倍］（自、さ變）二つましになる。倍になる。
ばい-す（せしすするすれせよ）［倍］（他、さ變）倍になす。くはふ。ます。
ばい-す（せしすするすれせよ）［陪］（自、さ變）つき從ふ。ともす。はんべる。
（はい-すう［拜趨］（名）はしりおもむくとの敬語。參上。
（ばい-すう［倍數］（名）【數】甲數が乙數にて割り切るゝとき、甲の乙に對する稱。――ひれい［倍數比例］（名）【化】一の元素が他の元素と種々の比例を以て化合するとき、其比率は單一なる倍數を以て遞加すといふと。例へば窒素と酸素とは、窒素一に對して、酸素の一・二・三・四・五との化合物を生ずるが如し。

はい-ずみ［掃墨］（名）（「はきずみ」の音便）胡麻油又は菜種油の油煙、膠に和して墨を製し、又塗料とし或は藥用ともす。（油煙墨、灰墨）
（はい-すゐ［排水］（名）㊀内部に停滯せる水を排除すると。㊁水をおしひらくと。――き［排水器］（名）排水に用ふる器械。――とんすう［排水噸數］（名）船艦の排水量を噸數に見積りたるもの。――りやう［排水量］（名）船體がおしひらく水の量。
（ばい-ずゐ［陪隨］（名）はんべりしたがふと。
はいすゐ-の-ぢん［背水陣］（名）漢の韓信が趙王歇を攻めしとき、味方に死を期して戰はしめんがため、水を背にして陣したりといふ陣の稱。轉じて、覺悟を極め全力をつくして成敗を試みんとする態度の稱。
（はい-せい［排擠］（名）おしおとすと。おしのくると。
（ばい-せい［陪星］（名）【天】大いなる星に伴ひて見ゆる小さき星。衛星。
（ばい-せう-ふ［賣笑婦］（名）うかれめ。醜業婦。
（はい-せき［敗績］（名）たゝかひにまくると。やぶるゝと。
（はい-せき［排斥］（名）おしのくると。おし去りぞくると。
（ばい-せき［陪席］（名）㊀長上と同席すると。㊁「ばいせきはんじ」の略言。――はんじ［陪席判事］（名）合議裁判にて、裁判長と共に訴訟の審理に列席する判事。地方裁判所にては二人、控訴院にては四人、大審院にては六人なりとす。

（はい-せつ［排泄］（名）㊀内より外にもらしだすと。㊁動物體が、其營養を終へたる殘餘の不用物質を體外におし出すと、例へば尿を發するが如きこれなり。――き［排泄器］（名）動物體が排泄作用を營む器官、即ち腎臟・尿管の如きこれなり。――さよう［排泄作用］（名）動物體が排泄を營む作用。
（はい-ぜつ［廢絶］（名）すたりたゆると。――け［廢絶家］（名）相續者なくして絕えたるいへ。
（はい-せん［盃洗］（名）盃あらひ。
（はい-ぜん［沛然］（名、副）㊀物事の多大なるさま。㊁雨の大いにふるさまにいふ語。
（はい-ぜん［配膳］（名）膳部を客に配（クバ）り供ふると。
（ばい-ぜん［陪膳］（名）主上に供御を奉るときはんべる人。
（はい-そ［敗訴］（名）訴訟に負くると。まけくじ。
（はい-そう［敗走］（名）たゝかひに負けて走り逃ぐると。（敗亡）。
（はい-そう［拜送］（名）見送るとの敬語。おみたて。おみおくり。
（ばい-そう［陪送］（名）貴人にしたがひて見送りすると。
（ばい-た（名）よたか。やはち。辻君。
（はい-たい［胚胎］（名）㊀みごもり。はらごもり。㊁ねざすと。きざすと。
（はい-たい［佩帶］（名）おぶると。はくと。
（はい-たい［拜戴］（名）たまものをいたゞくとの敬語。ちやうだい。
（はい-たい［敗頽］（名）やぶれくづるゝと。あれくづるゝと。
（はい-だい［牌題］（名）看板に書しるしたる文字。
卄はい-だい［廢帝］（名）「はいてい」に同じ。

（ばい-たい［媒體］（名）【理】媒質の物體。
（はい-たう［佩刀］（名）刀をおぶると。又、おびたる刀。
（はい-たう［癈刀］（名）佩刀を癈止すると。
（はい-たう［配當］（名）㊀わけあつると。わりあつると。㊁銀行・會社などが、純益金を持株に應じて株主にわりあつると。㊂わけあてらるゝ額。わりまへ。――あん［配當案］（名）【法】破産管財人が破産財團の配當を行ふために調製したる書面、破産主任官の認可署名を要するもの。――きん［配當金］（名）各人に配當する金。――てつづき［配當手續］（名）【法】強制執行によりて收得したる金錢の總額が多數債權者の債務を完濟するに足らずして、債權者間の分配協議もまた調はざるとき、平等に債權者に配當する手續。又、破産財團より、財團のために生じたる諸種の費用・債務及優先權ある債權を支拂ひたる殘額を各債權者に平等に配當する手續。
卄はい-だか［鷂］（名）【動】「はしだか」の音便。
（はい-たく［癈宅］（名）あれはてゝ住む人なきいへ。
（はい-たつ［配達］（名）㊀くばりとゞくると。㊁くばりとゞくる人。――さき［配達先］（名）ものをくばりとゞくる先方。――にん［配達人］（名）配達をなす人。――ふ［配達夫］（名）配達をなす人夫。
（はいたつ-しようめい［配達證明］（名）郵便物をたしかに配達したるとの證明。――いうびん［配達證明郵便］（名）配達證明を差出人に送付する手續の郵便、書留郵便・價格表記郵便・小包郵便等に限る。

はい-だて［膝甲］（名）（「脛楯（ハギタテ）」の音便）鎧の附屬具、腰より垂れて股・膝を被（オホ）ふもの。



［はいだて］

はい-たみ［齒痛］（名）齒のいたむと。
バイタラ-えふ［貝多羅葉］（名）（梵語 [illegible] 即ち葉の義）【植】多羅樹の葉、「インド」にては、針を以てこれに經文を刻りつく。
（はい-だん［俳談］（名）㊀俳句のはなし。㊁おどけばなし。
（ばい-たん［煤炭］（名）【鑛】石炭。
（はい-ち［排置］（名）ならべおくと。くばりおくと。
（はい-ち［配置］（名）㊀くばりつけ。㊁てくばり。
（はい-ち［背馳］（名）ゆきちがふと。そむくと。
（はい-ぢく［敗衄］（名）たゝかひにまくると。
（はい-ぢく［胚軸］（名）【植】胚の地上に抽（ヌ）き出て、莖となる部分。
（はい-ち-せい［背地性］（名）【植】種子の發芽する際、子葉の上方に向ひて生長すると。
（はい-ちやう［癈廳］（名）設けおきたる官廳を癈すると。又、役に立たぬ官廳。
（はい-ちやう［拜聽］（名）聽（キ）くとの敬語。
卄はい-ちやう［蠅帳］（名）「はへちやう」の訛。
（はい-ちやく［廢嫡］（名）長子の相續者たるべきとを癈止すると。
（はい-ちゆつ［廢黜］（名）官職より去りぞけさぐると。
（はい-ぢよ［廢除］（名）すてのぞくと。やめのぞくと。
（はい-ぢよ［排除］（名）おしのくると。のぞくと。
（ばい-ぢよ［賣女］（名）遊女。娼妓。
（はい-ぢん［配陣］（名）陣所をまうけおくと。
（はい-てい［廢帝］（名）他より迫まられて位を退きたまひたる皇帝。

（はい-てい［拜呈］（名）㊀贈るとの敬語。㊁「はいけい」（拜啓）に同じ。
（はい-てう［廢朝］（名）君主の朝政に臨み給はざると。（輟朝）。
（はい-てう［敗兆］（名）まけとなるしるし。
（ばい-てう［媒鳥］（名）をとり。
（はい-てつ［廢撤］（名）やめてとりのぞくと。
（はい-てん［廢典］（名）すたれたる儀式。
（はい-でん［拜殿］（名）拜禮を行ふ神社の前殿。
（ばい-てん［賣店］（名）ものをうる店。
（ばい-でん［煤田］（名）「たんでん」（炭田）に同じ。
（はい-てん-とう［敗天公］（名）やぶれがさ。
はい-と［隼人］（名）「はやびと」に同じ。「薩摩の―」。
（はい-とく［悖德］（名）道德にたがひもとると。
（はい-とく［敗德］（名）けがれたるおこなひ。道ならぬおこなひ。
（はい-どく［拜讀］（名）讀むとの敬語。
（はい-どく［背讀］（名）書物を見ずにそらでよむと。
（ばい-とく［賣得］（名）ものを賣りて其代金をとり入るゝと。うりあげ。――きん［賣得金］（名）賣得したる代金。うりあげきん。
（ばい-どく［黴毒］（名）一種の傳染病、多くは交合より來る。陰部に小さき疹を生ずるに初まり、次第に全身に蔓延して、處々に腫瘍を生じ骨節などに疼痛を起すもの。たうがさ。かさ。さうどく。（梅毒）。――けんさ［黴毒檢査］（名）黴毒の有無の身體檢査。
卄はい-とり［蠅捕］（名）「はへとりむし」の訛。
（はい-なう［背囊］（名）獸皮にてつくりたる小さき箱、背に負ふもの。「ランドセル」。

(はい-なう（ノウ）)[胚囊](名)【動】卵の發生に際し、二皿の驅狀をなせるもの。

(はい-なふ（ノウ）)[拜納](名)㊀うけをさむることの敬語。㊁さしあげをさむることの敬語。

(はい-にく)[敗肉](名)くされたる肉。

(はい-にゆう)[胚乳](名)【植】胚の周圍にある粉狀の物質、胚の滋養料となるもの。

(はい-にん)[拜任](名)㊀官職に任命すること。㊁任命を受くることの敬語。

(ばい-にん)[賣人](名)遊女、賣女。

(はい-の-ざう（ゾウ）)[肺臟](名)「はいざう」に同じ。

(はい-はい)(感)「はい」を重ねたる語、(唯唯)。

(ばい-ばい)[賣買](名)㊀うりかひ、しやうばい、あきなひ。㊁【法】當事者の一方が或財產權を相手方に移轉することを約し、相手方がこれに對して其代金を支拂ふことを約すること。

(はい-はう（ホウ）)[敗報](名)やぶれたるしらせ。まけたるしらせ。

(はい-ばう（ボウ）)[敗亡](名)㊀たゝかひにまけて死ぬること。㊁たゝかひにまけてにぐること。

(はい-ばう（ボウ）)[牌榜](名)かけふだ、かんばん。

(はい-はく)[拜白](名)「はいけい」(拜啓)に同じ。

(はい-はん)[悖反](名)もとること、たがふこと。

(はい-はん)[背叛](名)そむくこと。

(はい-はん)[廢藩](名)㊀藩を廢止すること。㊁「はいはんちけん」の略言。——ちけん[廢藩置縣](名)明治四年に封建を廢して郡縣とせられしこと。

(はい-ばん)[杯盤](名)杯と皿鉢などと。酒宴の道具。「——狼藉」。

(はい-ばん)[胚盤](名)【動】卵の胚の稱。

(はい-ひ)[拜披](名)書狀などをひらくことの敬語。

(はい-び)[拜眉](名)人にあふことの敬語。

(はい-びやう（ビヨウ）)[肺病](名)肺に關する病氣の總稱、特に肺結核の稱。

(はい-ひん)[拜稟](名)「はいけい」(拜啓)に同じ。

(ばい-ひん)[賣品](名)うるしな。

(はい-ふ)[配付](名)くばりわたすこと。

(はい-ふ)[配賦](名)わりつけ、くばりつけ、(配布)。

(はい-ふ)[肺腑](名)㊀肺臟。㊁心のおくそこ。

(はい-ぶ)[背部](名)うしろの方。

パイプ[Pipe](名)㊀導管。㊁煙管。㊂卷煙草を挿(サ)して吸ふもの、すひくち。

(はい-ふく)[拜伏](名)ひれふしをがむこと、ふしをがむこと。

(はい-ふく)[拜復](名)返事することの敬語、返書の冒頭又は末尾に用ふ。

(はい-ふく)[佩服](名)㊀身におびつくること。㊁心にとゞめもつこと。

(はい-ぶつ)[廢物](名)やくに立たぬ物、すたれもの。——りよう[廢物利用](名)役にたゝぬものを役にたゝすること。

バイブル[Bible](名)「キリスト」敎の經典、舊約全書と新約全書とを倂せていふ。(聖書、聖典、聖經)。

(はい-ぶん)[敗聞](名)まけたるしらせ。

(はい-ぶん)[俳文](名)措辭及意義の滑稽にして洒落に巧(タク)なる一種の文體、德川時代に起りたるもの。

(はい-ぶん)[配分](名)割り當てくばること。わけくばること。——き[配分器](名)【理】蒸氣機關の汽筒の橫側に取附たる箱、此內にある瓣の運動により、蒸氣を活塞の上下にこもごも送る用をなすもの。

(はい-へい)[配兵](名)兵士の配置。

(はい-へい)[敗兵](名)敗北したる兵。

(はい-へい)[廢兵](名)戰爭などにて、負傷して不具者となりたる兵士。——ゐん[廢兵院](名)廢兵を收容して養ふことを目的とする所。

(はい-へう（ヒヨウ）)[牌標](名)しるしふだ、又、かんばん。

(はい-ぼ)[拜墓](名)はかまゐり。

(はい-ぼく)[敗北](名)たゝかひにやぶれて逃(ニ)ぐること。まけてにぐること。(敗走)。

(ばい-ぼく)[賣卜](名)錢を受けて、吉凶をうらなふこと。——しや[賣卜者](名)賣卜を業となすもの。うらなひしや。

(はい-ぼつ)[敗沒](名)㊀たゝかひにまけてうちじにすること。㊁やぶれしづむこと。

＋はいま[驛](名)「はゆま」の轉。——ぢ[驛路](名)「はゆまぢ」の轉。

(ばい-まし)[倍增](名)增して二倍にすること。

(はい-みやう（ミヨウ）)[俳名](名)俳句の作者としての稱號。

(はい-む)[廢務](名)㊀事務を行はざること。㊁國弊などのとき、主上は廢朝せられ官吏も執務せざること。

(はい-めい)[拜命](名)官職に補任せらるゝこと。

(はい-めい)[背盟](名)ちかひにそむくこと。

(はい-めい)[俳名](名)「はいみやう」に同じ。

(はい-めつ)[敗滅](名)やぶれほろぶること。

(はい-めん)[拜面](名)「はいがん」(拜顏)に同じ。

(はい-めん)[背面](名)㊀うしろむき、せなむき。㊁せな、うしろ。「——攻擊」。

(ばい-も)[貝母](名)【植】「ははくり」に同じ。

(はい-もん)[排悶](名)心中のもだえをのぞくこと、うさをはらすこと。

(ばい-やう（ヨウ）)[培養](名)草木をつちかひ養ふこと。

(はい-やく)[背約](名)約束にそむくこと。

(ばい-やく)[賣藥](名)調合して賣る藥。——しやう（シヨウ）[賣藥商](名)賣藥をうる商人。——ほ[賣藥舖](名)賣藥を賣るみせ。

(ばい-やく)[賣約](名)うる約束。——ずみ[賣約濟](名)うる約束の成立してあること。

(はい-よ)[敗餘](名)まけたるあと。

(はい-よう)[佩用](名)身體におびもちふること。

(はい-よう)[胚孕](名)はらむこと。

(はい-らい)[拜禮](名)「はいれい」に同じ。

(はい-らい)[蓓蕾](名)花のつぼみ。

(はい-らう（ロウ）)[肺勞](名)肺結核の俗稱。

(はい-らん)[拜覽](名)見ることの敬語。

(はい-らん)[悖亂](名)道德にもとりみだるゝこと。倫理にたがひくるふこと。

(はい-り)[悖理](名)道理にもとりたがふこと。

(ばい-り)[賣利](名)うりあげの利益。

(はい-りう)[配流](名)流罪に行ふこと、ながすこと。

(はい-りつ)[廢立](名)君位より退くると君位に立つること。

(はい-りつ)[排律](名)漢詩の一體、律の聯句の六句以上なるもの、五言と七言とあり。

(はい-りやう（リヨウ）)[拜領](名)主君などより頂戴することの敬語。拜賜。

(ばい-りやう（リヨウ）)[倍量](名)【數】一つの量を若干含む量。

(はい-りよ)[配慮](名)心づかひ、あんばい。

(はい-る)[配流](名)「はいりう」に同じ。

(はい-る)（らりるるれれ）[這入](自、ら四)「はひる」の轉。

(はい-れ)[齒入](名)ふる下駄の齒を入れ替(カ)ふること。又、其業の人。

(はい-れい)[拜禮](名)頭をたれて禮すること。をがむこと。

(はい-れい)[悖禮](名)禮儀にもとること。

(はい-れい)[背戾](名)もとること、たがふこと。

(ばい-れい)[陪隷](名)ともびと、とも。

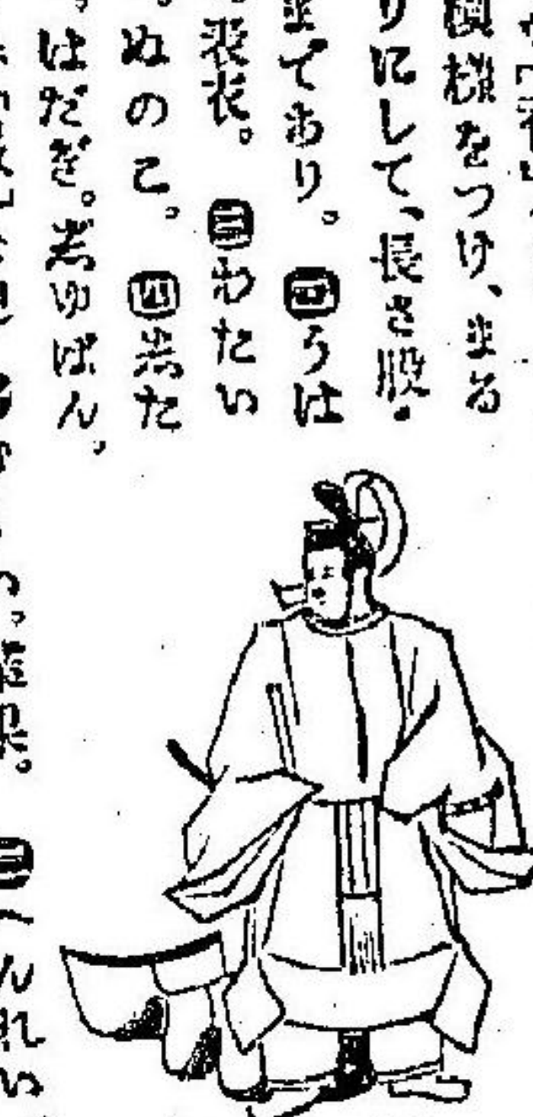
(はい-れつ)[排列](名)㊀ならべつらぬること。ならぶること。㊁ならび、つら。(配列)。

(ばい-ろく)[貝勒](名)淸朝にて親王の稱。

(はい-をく)[敗屋](名)やぶれや、あばらや。

パイント[Pint](名)「イギリス」國の液量の單位、一「ガロン」の八分の一、我國の三合一勺許に當る。

(はう（ホウ）)[方](名)㊀かた。むき。方位。「山の——」。「東の——」。㊁正方形の面積。平方。「——四十里」。㊂四角形。矩形。けた。㊃ところ。ばしよ。「異——所生」。㊄かたはら。そば。㊅さだまり。のり。規定。㊆しかた。てだて。方法。㊇ともがら。くみ。等類。「萬物を——となす」。㊈わざ。ぎじゆつ。技術。㊉宜しきこと。正しきこと。「行は——ならんを欲す」。⑪方角の吉凶。



[はう(一)]

(はう（ホウ）)[袍](名)㊀古昔、束帶用の上着、綾にて種々の模樣をつけ、まるえりにして、長さ股膝まであり。㊁うはぎ。表衣。㊂わたいれ。ぬのこ。㊃したぎ。はだぎ。じゆばん。

(はう（ホウ）)[報](名)㊀むくい。業果。㊁へんれい。報酬。㊂しらせ。通知。

(はう（ホウ）)[胞](名)㊀えな。㊁生物體を組織する原形質の微粒。

(はう（ホウ）)[砲](名)おほづゝ。たいはう。

(はう（ホウ）)[苞](名)㊀つと。あらまき。㊁【植】花梗の下部にある葉狀の片。㊂草木の芽をつゝむ皮。はかま。

(はう（ホウ）)[寶](名)㊀たから。㊁たふときこと。

(はう——（ホウ）)[芳](接頭)他人の物事に冠して、敬稱を表する語。「——翰」、「——函」。

(ばう（ボウ）)[坊](名)㊀まち、市中、「桃華——」。㊁春宮坊（トウグウバウ）の略、又、轉じて春宮を申す語。㊂僧侶の居所。又、轉じて、僧侶。

(ばう（ボウ）)[房](名)㊀へや。つぼね。㊁いへ。すまひ。㊂ふさ。㊃二十八宿の一、其條を見よ。

(ばう（ボウ）)[昴](名)二十八宿の一、其條を見よ。

(ばう（ボウ）)[芒](名)禾本科に屬する果實などの外殼の先端にある毛。のぎ。

(ばう（ボウ）)[帽](名)頭にかぶるもの。かぶりもの。

(ばう（ボウ）)[暴](名)㊀殘害すること。そこなふこと。㊁非道なること。殘酷なること。㊂不法なること。亂暴なること。㊃あらきこと。はげしきこと。——をもってばうにかふ[以暴代暴]相手が暴なればとて、これに應ずるに暴を用ふれば、遂に善惡是非の差別なしといふこと。

(ばう（ボウ）)[妄](名)㊀眞實ならざること。虛僞なること。うそ。いつはり。㊁愼重ならざること。思慮なきこと。

(ばう（ボウ）)[望](名)㊀陰曆にて、月の十五日の稱。㊁もちづき。

(ばう（ボウ）)[坊](代)㊀子供をあやしていふ語。㊁子供の自稱。

(ばう——（ボウ）)[亡](接頭)死者の姓名に冠して、生者の姓名と區別するに用ふる語。

(——ばう（ボウ）)[房](接尾)家の雅號などに用ふる語。

(ばう-あい（ボウ）)[芒鞋](名)わらぢ。わらぐつ。

(ばう-あく（ボウ）)[暴惡](名)㊀極めて無理非道なること。㊁極めてはげしくあらきこと。

(ばう-あつ（ボウ）)[防遏](名)ふせぎとゞむること。

(はう-あん（ホウ）)[方案](名)てだてのかんがへ。方法の考案。

(はう-あん（ホウ）)[保安](名)社會の安寧秩序をたも

つと。――けいさつ「保安警察」（名）【法】「ちあんけいさつ」（治安警察）に同じ。――でうれい「保安條例」（名）明治二十年、在野の志士が輦下に集まり時の政府を攻擊せるに際して發布せられたる有名の條例、幾多の志士はこれに照して帝都の三里以外に放逐せられたり。――りん「保安林」（名）公益のために特別の保護制限ある森林。

（**はう-い**（ホウ）「胞衣」（名）えな。

（**はう-い**（ホウ）「芳意」（名）他人の親切なるこゝろざしの敬稱。

（**はう-いう**（ホウ）「保有」（名）たもつこと。もつこと。

（**はう-いう**（ホウ）「包有」（名）つゝみもつこと。

（**ばう-いう**（ボウ）「亡友」（名）なき人となりし友人。

（**ばう-いう**（ボウ）「忘憂」（名）うさをわするゝこと。うさはらし。

（**ばう-いうけん**（ボウ）「卯酉圈」（名）【天】天頂を通過して且つ子午線に直角なる大圈。

（**はう-いく**（ホウ）「保育」（名）小兒を保護し養育すること。まもりそだつること。――しやう「保育場」（名）小兒を保育する所。

（**はう-いつ**（ホウ）「放逸」（名）きまゝにたのしむこと。ほしいまゝにあそぶこと。（放佚）。

（**ばう-いつ**（ボウ）「暴溢」（名）洪水などのにはかにあふるゝこと。

（**ばう-いん**（ボウ）「暴淫」（名）過度に房事を行ふこと。

（**ばう-いん**（ボウ）「暴飲」（名）過度に酒を飲むこと。

（**ばう-う**（ボウ）「暴雨」（名）㊀にはかあめ。㊁はげしきあめ。

（**はう-え**（ホウ）「胞衣」（名）えな。

（**はう-えい**（ホウ）「芳咏」（名）他人の詩歌の敬稱。

（**はう-えい**（ホウ）「泡影」（名）水のあわとものゝ影と。轉じて、はかなき物事にいふ語。

（**はう-えん**（ホウ）「砲煙」（名）砲發のけむり。

（**はう-おん**（ホウ）「報恩」（名）恩に報(ムク)ゆること。――かう（コウ）「報恩講」（名）一向宗にて、陰暦十一月二十二日より二十八日まで行ふ佛事、讀經又は法談するもの。

（**はう-か**（ホウ）「邦家」（名）くに。國家。

（**はう-か**（ホウ）「放下」（名）㊀なげすつること。すておくこと。㊁おろすこと。くだすこと。㊂「はうかソウ」の略言。

（**はう-か**（ホウ）「放歌」（名）街上などにて、聲たかくうたふこと。

（**はう-か**（ホウ）「砲架」（名）砲身をのせておく臺。

（**はう-が**（ホウ）「寶駕」（名）天子ののりもの。

（**はう-が**（ホウ）「萌芽」（名）㊀芽をきざすこと。又、きざしたる芽。㊁物事のきざし。

（**はう-がい**（ホウ）「寶蓋」（名）てんがい。

（**ばう-がい**（ボウ）「妨害」（名）さまたげ。邪魔。

（**はうかい-せき**（ホウ）「方解石」（名）【鑛】「はうげきやくこ」に同じ。

（**はう-かう**（ホウコウ）「方向」（名）㊀むき。かた。㊁めあて。あて。

（**ばう-かう**（ホウコウ）「放校」（名）不都合の所行ありたる學生を學校より放逐すること。

（**はう-かう**（ホウコウ）「芳香」（名）よきかをり。このましきにほひ。

（**はう-かう**（ホウコウ）「滂浩」（名）水面のひろきこと。

（**はう-かう**（ホウコウ）「咆哮」（名）さけぶこと。たけること。

（**はう-かう**（ホウゴウ）「咆號」（名）前條に同じ。

（**ばう-かう**（ボウコウ）「暴行」（名）㊀亂暴なる所行。手あらきわざ。㊁【法】暴力を他人の身體に加ふること。

（**ばう-かう**（ボウコウ）「滂沆」（名）水面のひろくしてはるかなること。

（**はうかうぞく-くわがふぶつ**（ホウコウゾクカゴウブツ）「芳香屬化合物」（名）【化】芳香を有する化合物、「ベンゼン」と稱する一の炭化水素のすべての誘導體なり。

（**はう-がき**（ホウ）「方書」（名）方法をしるしたるもの。

（**はう-がく**（ホウ）「放學」（名）規定の時間を終へて學生を學校よりかへすこと。

（**はう-がく**（ホウ）「方角」（名）㊀（四方四角の義）方位に同じ。㊁方向。進路。㊂てだて。手段。

（**ばう-がく**（ボウ）「妄覺」（名）「まうかく」に同じ。

（**ばう-かく**（ボウ）「暴客」（名）㊀あばれもの。亂暴人。㊁盜賊。外寇。

（**はうか-し**（ホウ）「放下師」（名）放下僧。

（**はうか-ソウ**（ホウ）「放下僧」（名）田樂の類、羯鼓・さゝら等の囃子を用ひ歌をうたひ舞をまふもの。又、其わざをなす僧侶。

（**はう-かふ**（ホウコウ）「保甲」（名）土地の安寧を保つために、其住民をして一定の組合を設け、寇敵の防禦にあたらしむる制度。

（**はう-がふ**（ホウゴウ）「抱合」（名）「くわがふ」（化合）に同じ。

（**はう-かん**（ホウ）「寶鑑」（名）よきかゞみ。たふときかゞみ。

（**はう-かん**（ホウ）「芳翰」（名）他人の手紙の敬稱。

（**はう-かん**（ホウ）「砲艦」（名）船體小さくして喫水淺く比較的大なる主砲を備ふる軍艦、水淺き所に於て利用せられ、海岸・河上の攻擊・防禦等に最も必要なるもの。

（**はう-がん**（ホウ）「砲眼」（名）砲丸をうち出すため城壁などに設けたる孔。

（**はう-がん**（ホウ）「包含」（名）つゝみふくむこと。ふくみもつこと。

（**はう-がん**（ホウ）「芳顔」（名）うつくしきかほ。

（**ばう-かん**（ボウ）「坊間」（名）まちなか。市中。

（**ばう-かん**（ボウ）「暴悍」（名）あら〱しくたけきこと。

（**ばう-かん**（ボウ）「冒寒」（名）寒氣をおかすこと。

（**ばう-かん**（ボウ）「防寒」（名）寒氣をふせぐこと。――い「防寒衣」（名）防寒のため特別に仕立てたる衣。――ぐ「防寒具」（名）防寒の必要具。

はう-き（ホウ）「帚」（名）（「ははき」の音便）㊀塵芥を掃ふ具。（掃帚）。㊁誰彼の差別なく色を漁すること。

（**はう-き**（ホウ）「抛棄」（名）㊀なげうちすつること。すておくこと。（放棄）。㊁其まゝにして關係せざること。自家の權利をすて、行使せざること。

（**はう-き**（ホウ）「芳紀」（名）年わかき美人のよはひ。

（**はう-き**（ホウ）「寶器」（名）たからのうつは。たからもの。

（**はう-き**（ホウ）「邦畿」（名）帝京に近接したる天子の直轄地。

（**はう-き**（ホウ）「邦規」（名）國家ののり。

（**はう-ぎ**（ホウ）「方技」（名）わざ。ぢゆつ。

（**ばう-き**（ボウ）「耄期」（名）八九十歳のとき。おいぼるゝとき。

（**ばう-き**（ボウ）「耄耆」（名）㊀としより。老人。㊁としよりておいぼるゝこと。

（**ばう-ぎ**（ボウ）「妄議」（名）みだりなる議論。すぢみちにたがひたる議論。

（**ばう-ぎ**（ボウ）「謗議」（名）そしり。惡評。

はうき-ぐさ（ホウキ）「帚草」（名）【植】藜科に屬する草、莖は細長にして分岐なり、花は莖を有せず小形白色にして夏の頃開く、葉は食用に供せられ、莖枝は乾(ホ)してくさばうきを製する料とせらる、ははきぎ。にはくさ。

はうき-ざや（ホウキ）「帚鞘」（名）毛皮にて作りたる尻鞘、草帚に似たるが故に名づく。

はうき-ぼし（ホウキ）「帚星」（名）「すゐせい」（彗星）の一名。

（**ばう-きふ**（ボウキフ）「忙急」（名）いそがしきこと。

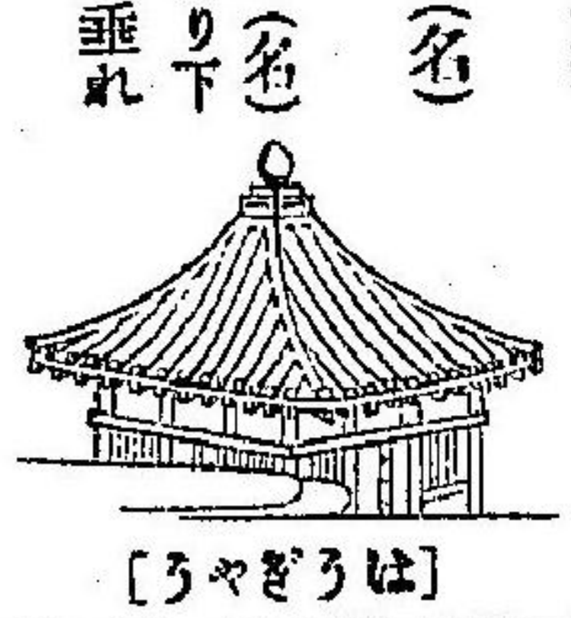
はうき-め（ホウキ）「帚目」（名）地面をはきたる帚の痕(アト)。

（**はう-きやう**（ホウキヤウ）「方磬」（名）一種の樂器、方形の磬の稱。

（**はう-きやう**（ホウキヤウ）「邦境」（名）くにのさかひ。くにざかひ。（邦疆）。

（**はう-きやう**（ホウキヤウ）「包莖」（名）かはかぶりの陰莖。

（**はう-ぎやう**（ホウギヤウ）「方桁」（名）屋根の組方、棟(ムネ)の兩端より下棟(クダリムネ)を簷(ノキ)の四隅まで垂れさぐるもの。（寶形）。



［はうぎやう］

（**はう-きやく**（ホウ）「放却」（名）うちすておくこと。其まゝになしおくこと。

（**ばう-きやく**（ボウ）「忘却」（名）わするゝこと。失念。

（**ばう-ぎやく**（ボウ）「暴虐」（名）むごくしへたぐること。無理非道にくるしむること。

（**ばう-きよ**（ボウ）「暴擧」（名）㊀亂暴なる所行。不法なるふるまひ。㊁暴動。一揆。

（**ばう-きよ**（ボウ）「妄擧」（名）みだりなるふるまひ。思慮なき所行。

（**ばう-ぎよ**（ボウ）「防禦」（名）㊀攻擊をふせぎまもること。ふせぎさゝふること。㊁ふせぐこと。ふせぐための設備。――こうじ「防禦工事」（名）敵の進擊をふせぐ設備の工事。――すゐらい「防禦水雷」（名）來寇する敵艦を轟沈するため、港灣などの海中に敷設しおく水雷、陸上より狙を定めて爆發せしむる裝置を觀發といひ、敵艦の衝突するによりて爆發する裝置を觸發といふ。――せん「防禦線」（名）防禦する線路。――ぶつ「防禦物」（名）防禦の用となるもの。

（**はう-ぎよく**（ホウ）「寶玉」（名）たからとして珍重するたま。

（**はう-ぎん**（ホウ）「芳吟」（名）他人の詩作の敬稱。

（**はう-ぐう**（ホウ）「方隅」（名）四方と四隅と。方位。

十**はう-くわ**（ホウ）「半靴」（名）古昔、使用したる頭の短き深靴。

（**はう-くわ**（ホウ）「放火」（名）火をつくること。つけび。

（**はう-くわ**（ホウ）「砲火」（名）砲發の火。――まじふ「交砲火」戰端をひらくにいふ。

（**はう-くわ**（ホウ）「放課」（名）定時間の課業をはること。――じかん「放課時間」（名）放課後の休憩時間。

（**はう-ぐわい**（ホウ）「方外」（名）昔時、僧侶・醫師・畫師などの長袖者流の稱。

（**ばう-ぐわい**（ボウ）「望外」（名）こひねがひのぞむ所より以上の好ましきこと。

（**はう-くわう**（ホウクワウ）「放曠」（名）しまりなきこと。しめくゝりなきこと。

（**はう-くわう**（ホウクワウ）「彷徨」（名）さまよふこと。ゆきつもどりつすること。うろつくこと。

（**ばう-くわう**（ボウクワウ）「膀胱」（名）排泄器の一、腎臟より輸送する尿を潴(タク)ふる薄膜の袋、これより尿道を通じて尿を體外に排泄す。小便ぶくろ。ゆばりぶくろ。

（**はう-くわつ**（ホウ）「包括」（名）あはせて一つにくゝること。ひきくるめて一つにまとむること。――ざいさん「包括財產」（名）【法】すべてをひきくるめて指示したる財產。特定財產の對。

（**ばう-くわ-ふ**（ボウ）「防火布」（名）「くわくわんぷ」（火浣布）に同じ。

（はう-くわん（ホウ）［保管］（名）「ほくわん」に同じ。

（ばう-くわん（ホウ）［寳冠］（名）寳玉にてかざりたる天子のかんむり。

╋はう-ぐわん（ホウ）［判官］（名）㊀四等官の一。丞よう。㊁檢非違使の尉（ジヨウ）の異稱。

（はう-ぐわん（ホウ）［砲丸］（名）大砲の彈丸。

（ばう-くわん（ボウ）［傍觀］（名）そばにて見てゐること。關係せずに見てゐること。

（ばう-くわん（ボウ）［望觀］（名）形勢の如何をながめゐること。

（ばう-くわん（ボウ）［坊官］（名）㊀春宮坊の官人。㊁門跡家の家司の僭稱。

（はうくわん-しやう（ホウクワンシヨウ）［寳冠章］（名）勳勞ある婦人に賜はる勳章、一等より八等まであり。

（ばう-くん（ボウ）［亡君］（名）歿したる主君。（先君）。

（ばう-くん（ボウ）［暴君］（名）暴虐なる君。

（ばう-くん（ボウ）［傍訓］（名）漢字のそばにつくる訓。ふりがな。

（ばう-げ（ボウ）［妨碍］（名）さまたげ。邪魔。

（はう-けい（ホウ）［方形］（名）四角形。四角。

（はう-けい（ホウ）［方計］（名）はかりごと。てだて。

（はう-けい（ホウ）［包莖］（名）「はうきやう」に同じ。

（ばう-けい（ボウ）［亡兄］（名）死にたる兄。

（ばう-けい（ボウ）［傍系］（名）直系より分出したる系統。――いんぞく［傍系姻族］（名）【法】或人と其人の配偶者の傍系血族との關係。――けつぞく［傍系血族］（名）【法】傍系尊屬及傍系卑屬の稱。――しん［傍系親］（名）【法】傍系血族及傍系姻族の稱。――しんぞく［傍系親族］（名）或人と傍系親あるもの、稱、特に、六親等內の傍系血族及三親等內の傍系姻族の稱。――そんぞく［傍系尊屬］【法】傍系に屬する尊屬、即ち伯叔父母などの類をいふ。――ひぞく［傍系卑屬］（名）【法】傍系に屬する卑屬、即ち姪・甥などの類をいふ。

（はう-げき（ホウ）［砲擊］（名）大砲にて擊（ウ）つこと。

（はうげ-せき（ホウ）［方解石］（名）【鑛】炭酸「カルシウム」より成る鑛物の一、普通斜方形の六面によりて圍まれたる結晶をなす、純粹なるものは無色透明なれど多くは種々の色を帶ぶ、火熱を加ふるときは生石灰を殘留す。はうかいせき。

（ばう-げつ（ボウ）［望月］（名）もちづき。

（ばう-げつ（ボウ）［卯月］（名）うづき。

（はう-けん（ホウ）［邦憲］（名）國家ののり。

（はう-けん（ホウ）［寳劍］（名）貴重なるつるぎ。

（はう-げん（ホウ）［方言］（名）其土地に限りて行はるゝ言語。なまり。

（はう-げん（ホウ）［放言］（名）㊀隨意にいふこと、思ひのまゝにいふこと。㊁無責任の言。出放題の言。㊂聲たかくいふこと。

（ばう-けん（ボウ）［望見］（名）遠くよりのぞみ見ること。

（ばう-けん（ボウ）［冒險］（名）危險をおかして事をなすこと。成否たしかならざる事をくはだつること。――てき［冒險的］（形）危險にして成否たしかならざるにいふ。

（ばう-げん（ボウ）［妄言］（名）㊀いつはりの言。うそ。㊁かんがへなき言。

（ばう-げん（ボウ）［暴言］（名）亂暴なることば。

（ばう-げん（ボウ）［傍言］（名）そばより口を出すこと。

（ばう-げん（ボウ）［妨言］（名）さまたげとなる言。

╋はう-こ（ホウ）［母子草］（名）【植】「はうこぐさ」の略言。

（はう-こ（ホウ）［寳庫］（名）㊀たからを入れおくくら。㊁多く財貨を入れたるくら。㊂多く財貨を產出して諸方に供給する地。㊃すべて物事を多く藏して、多くの供給をなすもの、稱。

（はう-ご（ホウ）［保護］（名）たすけまもること。かばひたすくること。はご。

（はう-ご（ホウ）［邦語］（名）自國のことば。

（はう-ご（ホウ）［放語］（名）「はうげん」（放言）に同じ。

（ばう-ご（ボウ）［妄語］（名）「ばうげん」（妄言）に同じ。

（ばう-ご（ボウ）［傍語］（名）㊀「ばうげん」（傍言）に同じ。㊁そばにてはなしをすること。

（ばう-ご（ボウ）［旁午］（名）ゆきあふこと。いりまじること。「羽檄――」。

はうご-あづかり（ホウ）［保護預］（名）金銀又は公債證書若しくは株券等を、其所有者の請求により、手數料を取りて保管すること。

（はう-こう（ホウ）［砲熕］（名）たいはう。おほづゝ。

（はう-こう（ホウ）［砲工］（名）㊀砲兵と工兵と。㊁銃砲を製する工人。――がくかう（ガツコウ）［砲工學校］（名）陸軍教育總監の管理に屬し砲兵及工兵の少尉・中尉を學生として、これに必要なる學術を教授する所。

（はうご-きん（ホウ）［保護金］（名）產業の改良發達のために與ふる獎勵金又は補助金。

（はう-こく（ホウ）［報告］（名）㊀しらせつぐること、しらせ。通知。㊁自己が任務を帶びて出張したる始末の陳述。

（はう-こく（ホウ）［報國］（名）國事に盡くすこと、國恩に報（ムク）ゆること。

（はう-こく（ホウ）［邦國］（名）くに。國家。

（ばう-こく（ボウ）［亡國］（名）㊀亡びたる國。又、亡ぶべき國。㊁國家をほろぼすこと。「亡國――」。

（はうこ-ぐさ（ホウ）［母子草］（名）【植】「ははこぐさ」の音便。

ばうこく-の-おん（ボウ）［亡國音］（名）亡（ホロ）ぶべき國の音樂又は調子。

（ばうこく-れい（ボウ）［防穀令］（名）穀物の輸入を防止する法令。

（はうご-こく（ホウ）［保護國］（名）國力の薄弱なるより、一定の條約によりて、他國の主權の下に保護せらるゝ國、されど一の國家たるその特性は保有して失はず、其保護をなす國家が他國と交戰すとも、局外中立を保ち得べき關係にありて、其臣民は其國の國籍のみを有し、其國に對してのみ忠實服從の義務を有するもの。

（はうご-しや（ホウ）［保護者］（名）或人を保護するもの。又、或人を保護する義務あるもの。

（はうご-しよく（ホウ）［保護色］（名）【動】或種の動物が環境の物色に適合する體色、これがために、敵の目をまぬかれて自己を保護する効あるもの、氷雪中に棲息する熊の體色の白きが如きこれなり。

（はうご-ぜい（ホウ）［保護稅］（名）自國の產業保護のため、外國の輸入品に賦課する關稅。

（はうご-てう（ホウ-テウ）［保護鳥］（名）捕獲又は賣買を禁ぜられたる鳥、即ち鶴・燕・小雀（コガラ）・日雀（ヒガラ）・四十雀（シジフカラ）・五十雀（ゴジフカラ）・柄長（エナガ）・菊戴（キクイタダキ）・雪加（セツカ）・蟲喰（ムシクヒ）・瑠璃（ルリ）・鶲（ヒタキ）・三光鳥・鶺鴒（セキレイ）・鷦鷯（ミソサザイ）・杜鵑（ホトトギス）・郭公（クワクコウ）・蚊母鳥（ヨタカ）・鴟鵂（ミミヅク）・鵂（フクロフ）・鳶・鵟（クソトビ）をいふ。又、雉（キジ）・鸐雉（ヤマドリ）は三月一日より七月三十一日まで、又、鵯（ヒヨ）・椋鳥（ムクドリ）・雲雀・鵙（モズ）・雷鳥（ライテウ）・鶉（ウヅラ）・松鷄（エゾヤマドリ）・鳩・鷸（シギ）は四月十六日より十月十四日まで。（北海道に於ては九月十四日まで）捕獲することを禁ぜらる。

（ばうこ-ひようが（ボウ）［暴虎馮河］（名）（論語に出づ、虎を手打にし河をかちわたりする義）血氣の勇にはやること。無謀の勇をふるふこと。いのちしらず。むかふみず。

（はうご-ぼうえき（ホウ）［保護貿易］（名）【經】國家が、其國內の產業を保護するため、國際の貿易に關して干涉政策を執ること、其說種々にして一定せず、時期によるときは、國內の產業の幼稚なる時代にのみ一時これを必要なりと說くもあれば、又、永久これが必要ありと說くもあり、目的によるときは、復仇的又は敎育的若しくは互惠的等に分かれ、目的物によるときは、或は工業或は商業或は農業或は航海業のためにいひ、方法によるときは、或は輸入品課稅或は輸出獎勵金或は輸出稅全廢或は精製品輸入禁止等を唱ふ。

（はう-こん（ホウ）［方今］（名、副）たゞいま。當時。現今。

（はう-こん（ホウ）［芳魂］（名）㊀美人のたましひ。㊁花の精。

（ばう-こん（ボウ）［亡魂］（名）㊀死人の魂。なきたま。㊁死人の魂が形體を現ずといふもの。幽靈。亡靈。

（はう-さ（ホウ）［硼砂］（名）【化】「はうしや」に同じ。

（はう-ざ（ホウ）［砲座］（名）大砲をすゑおく所。

╋ばう-ざ（ボウ）［病者］（名）「びやうしや」の約。

（はう-さい（ホウ）［堡塞］（名）とりで。こあら。（堡壘）。

（はう-さい（ホウ）［報賽］（名）願の成就したる御禮に神佛にまゐること。おれいまゐり。

（はう-ざい（ホウ）［寳財］（名）たから。財貨。

（はう-ざい（ホウ）［方劑］（名）㊀藥の調合。㊁調合したる藥。

（ばう-さい（ボウ）［亡妻］（名）死にたる妻。

（ばう-ざい（ボウ）［防材］（名）港灣に敵艦の侵入をふせぐため、巨大なる材木を鐵鎖などにてつなぎあはせ、これを港口又は灣頭の水路に布設しおくもの。

（はう-さう（ホウ）［疱瘡］（名）「てんねんとう」（天然痘）に同じ。

（はう-さう（ホウ）［包裝］（名）㊀ものゝうはづゝみをなすこと。㊁にづくりすること。

（はう-ざう（ホウ）［包藏］（名）中につゝみをさむること。「禍心を――す」。

（はう-ざう（ホウ）［寳藏］（名）寳物の倉庫。

（はうざう-ゐん-りう（ホウザウヰンリウ）［寳藏院流］（名）槍術の一派、南都寳藏院の僧胤榮の創始にかゝる、鎌槍を用ふるもの、一に鎌寳藏院流といふ。

（はう-さく（ホウ）［方策］（名）㊀（方は木版をいひ策は竹簡をいふ）記錄。文書。㊁はかりごと。てだて。

（はう-さつ（ホウ）［芳札］（名）他人の手紙の敬稱。

（ばう-さつ（ボウ）［牓札］（名）たてふだ。又、かけふだ。

（ばう-さつ（ボウ）［忙殺］（名）いといそがしきこと。

（はう-さん（ホウ）［寳算］（名）天子の御齡。（聖算）。

（はう-さん（ホウ）［放散］（名）はなち散らすこと。又、はなれ散ること。

（はう-さん（ホウ）［硼酸］（名）【化】無臭無味にして防腐性ある酸、光輝ある板狀の結晶をなす、醫藥として用ひられ、其水溶液は弱き酸性反應を呈す、箱根（湯本）又は草津などの溫泉には其少量を含む。

╋はう-し（ホウ）［拍子］（名）㊀「ひやうし」に同じ。㊁「さくはうし」の略言。

（はう-し（ホウ）［胞子］（名）㊀【植】隱花植物の子囊の中にある種子樣のもの、蕃殖作用を營む。㊁【動】原生動物の個體の分れてなりたる小體。

（はう-し（ホウ）［放資］（名）資本をおろすこと。

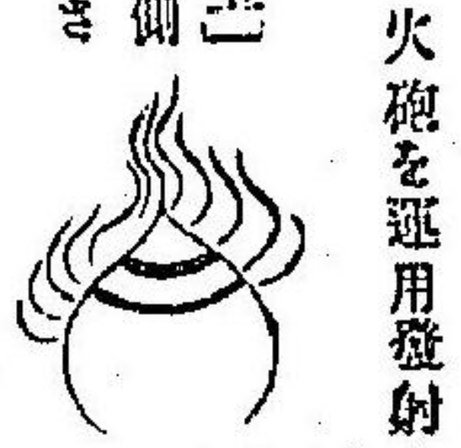
（はうし（ホウ）［放恣］（名） ほしいまゝ。きまゝ。（放肆）。
（はうし（ホウ）［芳志］（名） 他人の深切なるこゝろざしの敬稱。
（はうし（ホウ）［褒詞］（名） ほめたゝへたることば。
（はうし（ホウ）［方士］（名） 神仙の術を修むる人。道士。
（はうじ（ホウ）［褒辭］（名） 褒詞に同じ。
（はうじ（ホウ）［寶璽］（名） 天子の御印。
（はうじ（ホウ）［焙］（名） はうずると。いると。
（ばうし（ボウ）［防止］（名） ふせぎとゞむると。
（ばうし（ボウ）［髦士］（名） すぐれひいでたる人士。
（ばうし（ボウ）［帽子］（名） ㊀頭上に被（カブ）るものゝ總稱。ぼうし。シャッポ。㊁すべて物の頭部にかぶするものゝ稱。「筆の―」。
（ばうし（ボウ）［亡子］（名） 死にたるこども。
（ばうし（ボウ）［亡姉］（名） 死にたるあね。
（ばうし（ボウ）［傍視］（名） そばにて見てゐると。
（ばうし（ボウ）［紡絲］（名） いとをつむぐと。
（ばうし（ボウ）［芒刺］（名） とげ。いばら。
（ばうし（ボウ）［暴死］（名） 急に死ぬると。（頓死）。
（ばうし（ボウ）［茅茨］（名） ㊀ちがやといばらと。㊁ちがやにて屋根を葺（フ）くと。
（ばうじ（ボウ）［牓示］（名） ㊀ふだにしるして示すと。又、其ふだ。たてふだ。㊁くひをたてゝしるしとなすと。又、其くひ。しるしぐひ。
（ばうじ（ボウ）［亡兒］（名） 死にたるこども。
（ばうじ（ボウ）［庖仕］（名） くりやにて使はるゝ男。
（ばうじ（ボウ）［房事］（名） ねやのまじはり。男女の交合。ねやごと。
（はうしう（ホウ）［報酬］（名） ㊀むくい。へんれい。㊁自己のために他人がなしたる或勤勞に對して、利益を與ふると。㊂料金。代金。

（はうしう（ホウ）［報讐］（名） うらみをむくゆると。仇（アダ）をかへすと。
（はうしう（ホウ）［方舟］（名） 二つならべあはせたる舟。
（ばうしう（ボウ）［防臭］（名） 臭氣をふせぐと。臭氣どめ。
――ざい（ボウ）［防臭劑］（名） 防臭に使用する藥劑。
ばうしうずな（ボウ）［房州砂］（名） 安房國平群郡より産出するみがきずな。
（はうしうていげん（ホウ）［報酬遞減］（名）【經】「ちりよくていげん」（地力遞減）に同じ。
ばうしかけ（ボウ）［帽子架］（名） 帽子をかけおくもの。
（はうしき（ホウ）［方式］（名） ㊀一定の形式。かた。㊁一定の手續。てつゞき。
はうしぎん（ホウ）［寶字銀］（名） 寶永三年に鑄造せられたる銀貨。寶字の二字を印す。
ばうじぐひ（ボウジグイ）［牓示杙］（名） 境界のしるしにたつるくひ。さかひぐひ。
はうじこばん（ホウ）［寶字小判］（名） 寶永三年に鑄造せられたる小判。寶字の二字を印す。
（はうしせいしよく（ホウ）［胞子生殖］（名） 隱花植物及原生動物が胞子の作用によりて生殖すると。
（ばうしつ（ボウ）［亡室］（名） 死にたる妻。
（ばうしつ（ボウ）［亡失］（名） なくなると。うすると。又、なくなすと。うしなふと。
（ばうじつ（ボウ）［望日］（名） 陰暦十五日。
ばうしばけ（ボウ）［帽子刷毛］（名） 帽子のほこりを排（ハラ）ふ刷毛。
ばうしばな（ボウ）［帽子花］（名）【植】「つゆくさ」の一名。
（ばうしふ（ボウシウ）［妄執］（名） 「まうしふ」に同じ。
（はうしや（ホウ）［報謝］（名） ㊀物を贈りて報ゆると。㊁僧の佛事を修したる報酬として布施物を與ふると。㊂順禮などにものを與ふると。

（はうしや（ホウ）［硼砂］（名）【化】硼酸の「ナトリウム」鹽、硼酸の水溶液を炭酸「ナトリウム」にて中和し、これを熱して放冷するときに生ずる八面形の結晶と斜方形の結晶との混合物。其鎔けたるものは種々の金屬の酸化物を溶解して種々の色をなす。
（はうしや（ホウ）［放射］（名） ㊀はなちいると。㊁一點より四方へ出づると。
（はうしや（ホウ）［拋射］（名） なげやると。なげとばすと。
（はうしや（ホウ）［砲車］（名） 火砲を裝置したる車。
（はうしや（ホウ）［砲射］（名） 火砲を發射すると。
（はうしや（ホウ）［放赦］（名） 捕（トラ）へつなぎたるものをはなちゆるすと。
（はうしや（ホウ）［紡車］（名） 絲をつむぐ車。
（ばうしや（ボウ）［茅舍］（名） かやぶき屋根のいへ。
（ばうしや（ボウ）［暴射］（名） はげしく發射すると。
（ばうしや（ボウ）［暴瀉］（名） はげしき下痢。
（ばうしや（ボウ）［亡者］（名） 死にたるもの。
（ばうしや（ボウ）［坊舍］（名） ㊀まちや。㊁僧の住む所。
（はうしやう（ホウシヤウ）［保障］（名） ㊀保護して危害なからしむるやうにすると。たもちさゝふると。㊁さゝへ。ふせぎ。
（はうしやう（ホウシヤウ）［報償］（名） ㊀損害のつぐのひ。㊁むかへし。へんぱう。
（はうしやう（ホウシヤウ）［褒賞］（名） ㊀ほむると。たゝふると。㊁ほむる意を表するために送りやる品。
（はうしやう（ホウシヤウ）［褒章］（名） 奇特の所行あるものに褒賞として賜はる徽章。紅綬褒章・綠綬褒章・藍綬褒章・黄綬褒章の四種ありて、紅綬は自己の危難を顧ずして人命を救助したるものに賜はり、綠綬は德行卓絕なるもの又は衆民の模範たるべきもの等

に賜はり、藍綬は學術技藝の發明又は公共慈善の事業若しくは生産業の發達等に關し成績著明なるものの等に賜はり、黄綬は海防貿獻金のものに賜はる。
（はうしやう（ホウシヤウ）［褒狀］（名） ㊀褒賞の旨をしたゝめたる書狀。㊁褒章に副（ソ）へて賜はる書狀。
（はうしやう（ホウシヤウ）［芳情］（名） 「はうし」（芳志）に同じ。
（はうしやう（ホウシヤウ）［放生］（名） 生物をはなちにがすと。
（はうしやう（ホウシヤウ）［報狀］（名） しらせの書狀。
（はうしやう（ホウシヤウ）［帽章］（名） 帽子の徽章。
（ばうしやう（ボウシヤウ）［傍生］（名）【佛】生物の體の横になりたるもの、即ち畜生。
（ばうしやう（ボウシヤウ）［亡狀］（名） 無禮なるふるまひ。
（ばうしやう（ボウシヤウ）［暴狀］（名） 亂暴なるさま。
（はうしやうきん（ホウシヤウ）［報償金］（名） 報償に出す金。つぐのひきん。
（はうしやうゑ（ホウシヤウヱ）［放生會］（名） 陰暦八月十五日に行はる、八幡宮の神事、捕へおきたる鳥魚類を放（ハナ）ちにがすと。
（はうしやく（ホウ）［保釋］（名） 「ほしやく」に同じ。
（ばうじやくぶじん（ボウ）［傍若無人］（名） （傍に人の無きが如しといふ義）人を憚（ハバカ）らず振舞ふと。
（はうしやさうしよう（ホウソウ）［放射相稱］（名）【動】棘皮動物などの諸器官が、中心を圍みて配置せられ、狀態の恰も車輪の輻が車軸を圍みて射出するが如きとの稱。
（はうしやせん（ホウ）［拋射線］（名）【理】「はうぶつせん」（拋物線）に同じ。
（はうしやのうさ（ホウ）［放射能作］（名）【理】物質の電子を放射する性。

（はうしゆ（ホウ）［寶珠］（名） ㊀寶の珠、たから。㊁「はうしゆのたま」に同じ。
（はうしゆ（ホウ）［砲手］（名） 火砲を發射する事をつかさどるもの。
（はうしゆ（ホウ）［保守］（名） 「ほしゆ」に同じ。
（はうしゆ（ホウ）［保壽］（名） ながく壽命をたもつと。
（ばうしゆ（ボウ）［芒種］（名） 二十四氣の一、陽暦六月五日頃にあたる。
（はうしゆう（ホウ）［放縱］（名） きまゝ。ほしいまゝ。
（はうしゆう（ホウ）［砲銃］（名） 大砲と小銃と。
はうしゆがしら（ホウ）［寶珠頭］（名） ぎばうしゆ。
（はうしゆつ（ホウ）［方術］（名） ㊀てだて。しかた。㊁神仙の術。㊂わざ。技藝。
（はうしゆつ（ホウ）［砲術］（名） 火砲を運用發射する術。
はうしゆのたま（ホウ）［寶珠玉］（名） 尖頭にして頭部及左右側より火焰の燃（モ）えあがれるさまをなす玉の稱。



［はうしゆのたま］

（はうしゆん（ホウ）［芳春］（名） ㊀花ざかりの春、「―三月」。㊁「はうき」（芳紀）に同じ。
（ばうしゆん（ボウ）［髦俊］（名） すぐれひいでたる人士。
（はうしよ（ホウ）［苞苴］（名） ㊀つと。あらまき。㊁みやげもの。土産。㊂いんもつ。賄賂。
（はうしよ（ホウ）［芳書］（名） 他人の手紙の敬稱。
（はうしよ（ホウ）［方處］（名） ばしよ。ところ。空間。
（はうしよ（ホウ）［報書］（名） しらせのてがみ。又、へんしのてがみ。
（はうしよう（ホウ）［報鐘］（名） しらせのかね。相圖のかね。
（はうしよう（ホウ）［保證］（名） 「ほしよう」に同じ。
はうしよう（ホウ）［褒稱］（名） ほめたゝふると。

（はうしよう（ホウ）［放縱］（名） 「はうしゆう」に同じ。
（ばうしよう（ボウ）［冒稱］（名） 他家の姓を名乘ると、
（はうしよく（ホウ）［飽食］（名） ㊀腹に足るほど食ふと。㊁食事に不足なきと。
（ばうしよく（ボウ）［暴食］（名） おほぐひ。あらぐひ。
（ばうしよく（ボウ）［望蜀］（名） （後漢の光武帝が、隴右を平げて更に蜀を攻むるとき、人苦自不足、既得隴復望蜀といひし言に出づ）最初の望み遂（ト）げて、更に其上を望むと。
（はうじる［焙］（他） 「はうず」の訛。
（はうしん（ホウ）［放心］（名） ㊀精神を注がざると。心をとめざると。㊁外に馳せ向ひて收まりなき心。外物にまよひて本體を失ひたる心。「學問之道無他、求其放心而已矣」。㊂あんしん。あんど。（放神）。
（はうしん（ホウ）［方針］（名） ㊀羅針盤の方位を指し示す針、即ち磁針。㊁進み行く一定の方向。行ひなす一定の目的。「―を定む」。
（はうしん（ホウ）［砲身］（名） 火砲の主要部にして彈丸をこめて發射する處、鋼を以て圓筒狀につくり、下底に機關を裝置せるもの。大砲のつゝ。
（はうしん（ホウ）［芳信］（名） 花の開きたるおとづれ。
（はうしん（ホウ）［芳辰］（名） よき日。よき時。
（はうしん（ホウ）［芳心］（名） 美人の心。
（はうしん（ホウ）［報信］（名） しらせ。通知。
（はうしん（ホウ）［報身］（名）【佛】佛の三身の一、法身の妙智の果報によりて現ずる身、諸惑將盡して衆德こと〲く圓く光明遍照なりといふ。
（はうじん（ホウ）［邦人］（名） 自國の人。くにびと。
（はうじん（ホウ）［庖人］（名） 料理人。「コック」。
（ばうしん（ボウ）［傍心］（名）【數】傍接圓の中心。

(**ばう-しん**[妄信](名) みだりに信ずること。

(**ばう-しん**[亡親](名) 死にたる父母。

(**ばう-しん**[亡臣](名) 自國を脱走して他國にある臣下。亡命の臣。

++(**ばう-じん**[防人](名) さきもり。

(**ばう-じん**[傍人](名) そばにゐる人。かたはらにゐる人。

(**ばう-じん**[暴人](名) あばれもの。あらくしき人。

(**はう-じん-ブツ**[報身佛](名)【佛】報身の佛、即ち彌陀如來の類。

++**ばう・ず**（せじすずる／すれせよ）[謗](他、さ變) そしる。

はう・ず（せじずずる／ずれぜよ）[報](他、さ變) ㊀むくゆ。㊁知らす。告ぐ。

はう・ず（ぜじずずる／ずれぜよ）[焙](他、さ變) 火氣を與へて濕氣を去る。いる。「茶を——」。

(**ばう-ず**[坊主](名) ㊀坊の主僧。一個寺の住職。㊁僧侶。法師。㊂剃髪したる人。頭をまろめたるもの。㊃昔時、武家に事(ツカ)へて、茶湯其他の雜事に使役せられ、常に剃髪してありし身分賤しきもの。㊄剃髪したる頭、圓顱。㊅頭部の毛無きもの。頭部の禿(ハ)げたるもの「——山」「——筆」。㊆幼き男子の賤稱。——**がにくけりやケサまでにくい** 其人を惡む情の其人に關聯したるすべての事に及ぶにいふ。

ばう・ず（ぜじずずる／ずれぜよ）[忘](他、さ變) わする。「故郷ばうじ難し」。

ばうず-あたま[坊主頭](名) 剃髪したるあたま。

(**はう-すう**[方數](名)【數】二乘の數。

ばうず-おち[坊主落](名) 還俗すること。

ばうず-かむろ[坊主禿](名) 昔時、遊女につかはるゝ幼き禿の剃髪してありしもの。

ばうず-くさ・し（くしき／けれ）[坊主臭](形、二) 坊主めきたり。佛門めきたり。

ばうず-ふで[坊主筆](名) ちびふで。

ばうず-むぎ[坊主麥](名)【植】麥の變種、果實の外殼に芒(ノギ)なきもの。

++**ばうず-もち**[坊主持](名) 數人同行して交代に荷物を持ち行くとき、路に坊主に出會ふ度每に、持手の替(カ)はること。

ばうず-やま[坊主山](名) はげ山。

(**ばう-すゐ**[紡錘](名) 絲をつむぐつむ。

(**はう-すゐ**[方錐](名) よつめぎり。——**けい**[方錐形](名)【數】頂點を共有せる四平面と他の一平面とを以て圍まれたる立體。

(**ばう-すゐ**[防水](名) 水をふせぐこと。又、水をとほさぬこと。——**ふ**[防水布](名)「ゴム」などを引きて水のとほらぬやうに製したる布。

(**はう-すん**[方寸](名) ㊀一寸四方。㊁(列子の吾見子之心—之地虛矣の語に出づ)胸中。衷心。

(**はう-せい**[方正](名) 正しきこと。みだれざること。よこしまならざること。

(**はう-せい**[邦制](名) 國家の制度。

(**はう-せい**[芳聲](名) ㊀かんばしきほまれ。よき評判。㊁他人の名の敬稱。

(**はう-せい**[砲聲](名) 砲發のおと。

(**ばう-せい**[暴政](名) 暴虐なる政事。苛酷なる政令。

(**ばう-せい**[坊正](名) 町役人。

(**はう-ぜい-さうこ**[保稅倉庫](名)「ほぜいさうこ」に同じ。

(**ばう-せう**[芒硝](名)【化】硫酸「ナトリウム」の稱。

(**はう-せき**[寶石](名) 世人の珍重する美麗なる鑛物、琢磨して裝飾用とするもの、金剛石・鋼玉石・「ルービー」、柘榴石等これなり。

(**ばう-せき**[紡績](名) ㊀綿をつむぎて絲となすこと。㊁「ばうせきいと」の略言。——**いと**[紡績絲](名) 紡績器械にて製したる絲。——**きかい**[紡績器械](名) 綿を繰り且つつむぎて絲を製する器械。

(**ばう-せつ**[妄說](名) 無根の說。虛僞の說。

(**ばう-せつ**[暴說](名) 出放題の說。又、道理なき說。

(**ばうせつ-ゑん**[傍接圓](名)【數】多角形の一邊及これに隣る二邊に切し且つ全く其多角形の外にある圓。

(**はう-せん**[砲戰](名) 砲火をまじへて戰ふこと。大砲のうちあひ。

(**はう-せん**[砲船](名) 大砲を裝(ノ)せて敵をうつふね。

(**はう-せん**[寶前](名) 神佛の前。ひろまへ。

(**はう-ぜん**[保全](名) たもちまったうすること。安全にあらしむること。ほぜん。

(**ばう-せん**[防戰](名) ふせぎたゝかふこと。

(**ばう-ぜん**[茫然](名、副) ㊀あっけにとられたるさまにいふ語。㊁きぬけしたるさまにいふ語。㊂ひろくとほきさまにいふ語。㊃眼界のあきらかならざるさまにいふ語。

(**ばう-ぜん**[厖然](名、副) ひろがりてふときさまにいふ語。

はう-そ[柞](名)「ははそ」の音便。(櫟木)。

(**はう-そ**[硼素](名)【化】金屬の一、褐色の粉末にして、天然には硼酸又は硼砂となりて產出す、空氣中にて強く熱するときは、酸素及窒素と化合す。

(**はう-そ**[寶祚](名) 帝王の位。又、帝王の齡。「—萬歲」。

(**はう-そ**[苞苴](名)「はうしよ」に同じ。

(**ばうそ-かうべん**[妨訴抗辯](名)【法】原告の訴訟が訴訟の必要條件を闕如すといふを理由として、被告が其辯論をこばむこと。

(**はう-そく**[方則](名) ありかた。のり。

(**はう-ぞく**[邦俗](名) くにの風俗。くにのならはし。

++**はう-ぞく**[放俗](名) 下品なること。凡俗なること。品格なきこと。「人多く見る時なんすぎたるもの着たるは—に覺ゆる」。

(**ばう-そく**[亡息](名) 死にたるむすこ。

(**はう-ぞん**[保存](名)「ほぞん」に同じ。

(**ばう-そん**[亡孫](名) 死にたるまご。

(**ばう-そん**[亡損](名) そん。損害。

はう-た[端唄](名) 文句あまり長からず、多く二上りの調にてうたふ俗謠。長唄の對。

(**ばう-だ**[滂沱](名) ㊀雨の勢つよくふること。㊁涙の止めどなく流るゝこと。

(**はう-たい**[繃帶](名) 傷口又は腫物などにまきつくる木綿の布。

(**はう-たい**[砲隊](名) 火砲を使用する軍隊。砲兵の隊。

(**はう-だい**[砲臺](名) 火砲をすゑおく土石の築造物。だいば。

(**ばう-だい**[傍題](名) 和歌にて題外の無用のものを詠(ヨ)み添ふること。

(——**はう-だい**[放題](接尾) 動詞に添へて熟語となし、自由に行ふ意を表する語。「出—」。

(**ばう-だい**[厖大](名) ひろがりてふときこと。

(**はうたい-えき**[繃帶液](名) 繃帶の代用に塗抹する液。

++**はう-たう**[餺飥](名)「はくたく」の音便。

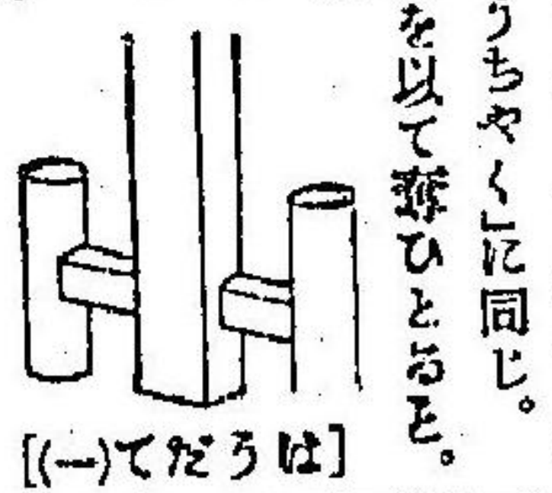
(**はう-たう**[放蕩](名) 酒色に耽(フケ)りて身持惡しきこと。放埒。

(**はう-だう**[報道](名) つげ。しらせ。報告。報知。

(**はう-たく**[寶鐸](名)「はうちやく」に同じ。

(**ばう-だつ**[暴奪](名) 暴力を以て奪ひとること。

はう-だて[方立](名)（根（ホコタチ）の義）㊀門柱の兩傍にたてゝ扉(トビラ)を着くる木。㊁あかたくみ。



[(一)てだうは]

(**はう-たふ**[報答](名) ㊀こたへ。へんじ。㊁むくい。かへし。

(**はう-たふ**[砲塔](名) 鋼鐵の堅壁を設け一門又は二門の巨砲を備へたる小高き所。

(**はう-たふ**[寶塔](名) 寺院の塔の敬稱。

(**はう-たん**[放膽](名) 思ひきってなすこと。忌憚なくものすること。——**ぶん**[放膽文](名) 漢文にて、忌憚なく思想を吐き、鋒鋩をあらはし、聲色をはげまし、洗練婉曲に缺くる所ありとも、筆路の窘束せざるやうにかく文の稱。初學者の學ぶべきものとせり。

(**はう-だん**[放談](名) 出放題のものがたり。

(**はう-だん**[砲彈](名) 火砲の彈丸。

(**ばう-だん**[妄誕](名) うそ。いつはり。

(**ばう-だん**[妄談](名) 根據なきはなし。

(**はう-ち**[放置](名) 其まゝになしおくこと。

(**はう-ち**[報知](名) しらせ。報告。通知。——**かん**[報知艦](名) 敵の動靜を通知し又は軍の命令を傳達する等の任務を帶ぶる軍艦。

(**はう-ぢ**[保持](名) たもちて失はざること。たもつこと。

(**はう-ちく**[方竹](名)【植】四方竹に同じ。

(**はう-ちく**[放逐](名) 逐(オ)ひ遣(ヤ)ること。おひだすこと。

はう-ちは[羽團扇](名) 鳥の羽にて製したる團扇。

(**はう-ちやう**[庖丁](名) ㊀食膳を調理する人。料理する人。㊁食膳の調理。料理。割烹。「[illegible]の—」。㊂「はうちやうがたな」の略言。

(**はう-ぢやう**[方丈](名) ㊀一丈四方。㊁寺院にて、住持のゐる所。㊂轉じて、寺院の住持。

(**ばう-ちやう**[傍聽](名) 演說又は討論などを其場にありて聽(キ)くこと。

(**ばう-ちやう**[膨脹](名) ㊀ふとりひろがること。ふくるゝこと。㊁發展して增大すること。のびますこと。「國勢の—」。㊂【理】物體が熱に會(ア)ひて其大きさを增すこと。

(**ばう-ちやう**[暴漲](名) 水の俄にみなぎること。

はうちやう-がたな[庖丁刀](名) おもに料理に使用する刃物の稱。(庖刀、廚刀)。

(**ばうちやう-けいすう**[膨脹係數](名)【理】物體が溫度一度昇る每に增加する體積と原體積との比、又物體が溫度一度昇る每に增加する長さと原の長さとの比、前者を體膨脹係數といひ、後者を線膨脹係數といふ。

(**ばうちやう-けん**[傍聽券](名) 入場して傍聽するを許す切符。

(**はうちやう-し**[庖丁師](名) 料理人。

(**ばうちやう-しや**[傍聽者](名) 傍聽するもの。

(**ばうちやう-せき**[傍聽席](名) 傍聽者のゐる所。

(**はうちやう-にん**[庖丁人](名) 料理人。

(**ばうちやう-にん**[傍聽人](名) 傍聽する

人。

(はう-ちやく)[寶鐸](名) 大形の風鈴、堂塔などの簷(ノキ)に懸くるもの。

(はう-ちゆう)[庖廚](名) くりや。だいどころ。

(はう-ちゆう)[方柱](名) 方形のはしら。

(はう-ぢん)[方陣](名) 兵士を方形に排列する陣形。

(はう-ぢん)[芳塵](名) 花見の場所などのちり「にいふ語。

はう・つ（たちつつてて）[羽撃](自、た四) 翼を打ちて音をなす。はゞたきす。

はう-づ[方圖](名) さだめ。かぎり。際限。「上を見ればーが無い」。

(ばう-て)[場打](名) 其場の有樣にうたれて勇氣「なくなると。

(はう-てい)[保定](名) たもち定むると。

(ばう-てい)[亡弟](名) 死にたる弟。

(はう-てい-しき)[方程式=Equation](名) 【數】式中の或文字に格段なる値を與ふるときは、相等しきとの成立する等式、例へば $3x+7=13$ 式は $2x^2+4xy+5y^2-10=0$ の如し。

(はう-てう)[烹調](名) 食物の調理。料理。

(はう-てう)[放鳥](名) とらへたる鳥をはなちにがすと。又、はなちにがす鳥。

(ばう-てう)[暴潮](名) 急にさしくるみちし「ほ。又、つなみ。

(はう-てき)[放擲](名) ㊀なげうつと。なげ出すと。㊁うちすてゝ置くと。 ——**せん**[放擲線](名) 【數】「はうぶつせん」(拋物線)に同じ。

(はう-でん)[寶殿](名) 神佛の御殿。

(はう-でん)[放電](名) 【理】電氣を失ふと、「ライデン」瓶の內外二箔に導線の兩端を近づくるとき、空氣又は他の絕緣物を破りて、音と火花とを發して陰陽兩電氣の中和するを破(ヤブ)放電といひ、起電機の一端に尖(トガ)りたる金屬を附するとき、電氣對流によりて漸々放電し、暗室內にて見るとき尖端より微光を放つものを微光放電といふ。

(はう-でん)[報電](名) しらせの電報。

(ばう-てん)[暴殄](名) あらしそこなふと。

(はう-ど)[邦土](名) くに。國土。

(はう-ど)[報土](名) 【佛】報身佛の受用せる淨「土。

(ばう-と)[暴徒](名) 暴擧をなす徒。兇徒。

(ばう-ど)[暴怒](名) はげしくいかると。あら〳〵しくいかると。

(はう-どう)[砲銅](名) 【化】錫と銅との合金、砲を鑄造するに用ふるもの。

(ぼう-とう)[冒頭](名) ㊀文章のかきおこし。㊁物事のはじまり。

(ばう-とう)[暴騰](名) 急にねだんの高くなる「と。

(ばう-どう)[妄動](名) 思慮なきふるまひ。みだりになすわざ。

(ばう-どう)[暴動](名) 騷亂を起こして國家社會の安寧を亂ると。徒黨を結び公然と世の中をさわがすと。 ——**ざい**[暴動罪](名) 【法】兇徒を嘯聚して騷亂を起したる罪。暴動をなしたる罪。 ——**さつじんざい**[暴動殺人罪](名) 【法】暴動をなし、ために故意に人を殺したる罪。 ——**はうくわざい**[暴動放火罪](名) 【法】暴動をなし、ために故意に放火したる罪。

(ばう-とく)[冒瀆](名) おかしけがすと。あなどりはづかしむると。

(はう-とく-しや)[報德社](名) 二宮尊德翁の教に遵由して組織したる一種の信用組合、駿河・遠江・參河等の地方に行はるゝもの。

(はう-とん)[砲墩](名) 大砲をすゑおく丘、

(はう-にん)[放任](名) 其事物のなりゆきに打ちまかせ置きて、干涉せざると。 ——**しゆぎ**[放任主義](名) 其物事の自由に放任して敢て干涉せざる主義。

(ばう-にん)[冒認](名) 【法】自己に處分權なき他人の所有物を、自己に處分權あるが如く裝ふと。 ——**ざい**[冒認罪](名) 【法】他人の所有物を冒認して、これを販賣・交換又は抵當・典物となした「る罪。

(はう-ねう)[放尿](名) 小便すると。

(はう-ねん)[放念](名) あんど。安心。

(はう-ねん)[芳年](名) ㊀よきとし。めでたきとし。㊁わかき時の歲月。

(ばう-ねん)[忘年](名) 其年の苦勞を忘(ワス)るゝと。としわすれ。 ——**くわい**[忘年會](名) 年末に催すとしわすれの宴會。 ——**のとも**[忘年友](名) 年齡のいと隔りたるにも關せず互に親密に交はる友人。

(はう-はい)[澎湃](名) 水波相もとると。波の「さかまくと。

(はう-はい)[傍輩](名) ㊀共に師に就く人。ともなかま。㊁共に同一の家に奉公して、同一の職業に從事する者。朋輩。

(はう-ばう)[方方](名、副) あちこち。あちらこ「ちら。

(はう-ばう)[寶坊](名) 寺院の敬稱。

(ばう-ばう)[茫茫](名、副) ㊀ひろくしてはるかなるさまにいふ語。「ーたる原野」。㊁眼界のはっきりせざるさまにいふ語。㊂髮又は草などの生ひ亂れたるさまにいふ語。(莽々)。

(はう-はく)[方伯](名) 一方面のはたがしら。

(ばう-はく)[磅礴](名) ㊀混じて一つになると。㊁みちふさがると。

(ばう-はく)[旁博](名) ひろきと。あまねきと。

(ばう-ばく)[茫漠](名) ぼっとしてとりとめのなきと。

(ばう-ばく)[茫邈](名) ひろくはるかなると。

(ばう-はち)[亡八](名) (仁義禮智孝悌忠信の八を亡ひたりとの義)くつわ。遊女屋。(忘八)。

(はう-はつ)[砲發](名) 火砲をうつと。

(はう-はつ)[萌發](名) きざすと。めぐむと。

(ばう-はつ)[暴發](名) ㊀にはかに起りたつと。㊁急になしはじむると。

(はう-はふ)[方法](名) しかた。しやう。てだ「て。手段。

(はう-ひ)[放屁](名) 屁(ヘ)をひると。おなら。

(はう-び)[褒美](名) ほむると。又、ほめてあたふる物。

(ばう-び)[防備](名) 防禦の準備。ふせぎのそ「なへ。

(ばう-ひやう)[妄評](名) ㊀みだりなる批評。㊁自家の批評の謙稱。

(はう-ふ)[抱負](名) ㊀いだくとおふと。㊁か「んがへ。計畫。

(ばう-ふ)[防風](名) 【植】「ばうふう」の略言。

(ばう-ふ)[亡父](名) 死にたる父。(先人)。

(ばう-ふ)[亡夫](名) 死にたるをつと。

(ばう-ふ)[亡婦](名) 死にたるよめ。又、死にたるつま。

(ばう-ふ)[防腐](名) 腐敗をとゞむると。

(ばう-ふ)[暴富](名) にはかに富むと。急に金持になると。

(ばう-ふう)[防風](名) ㊀【植】(中風を防ぐ義)繖形科に屬する草、多く海邊に自生す、高さ三尺許、葉は複葉にして芹(セリ)に似、嫩葉は赤色を帶ぶ、花は小形白色にして夏の頃開き複繖形花序に排列す、根は牛蒡に似、藥用に供せらる。はますがな。はまにがな。㊁風をふせぐと。 ——**りん**[防風林](名) 田圃の風の害をふせぐため、其近傍に植うる林。

(ばう-ふう)[暴風](名) あらき風。はげしき風。 ——**う**[暴風雨](名) あらき風雨。はげしき風雨。あらし。

(はう-ふく)[芳馥](名) よき香を發(ハッ)すと。か「ぐはしきと。

(はう-ふく)[報復](名) ㊀むかへし。むくい。㊁へんぽ。

(はう-ふく)[抱腹](名) 「はうふく」(捧腹)に同「じ。

(ばう-ふ-ざい)[防腐劑](名) 腐敗をふせぐに用ふる藥劑。

(はう-ふつ)[彷彿](名) ㊀よく似てあると。まがふと。㊁ほのか。かすか。「遠山ー」。(髣髴)。

(はう-ぶつ)[方物](名) 其地方の產物。「ーをたてまつる」。

(はう-ぶつ)[拋物](名) ものをなげとばすと。ものをとばしやると。 ——**せん**[拋物線](名) 【數】圓錐曲線の一、定點と定直線とより等距離にある諸點を連ぬる曲線の稱、定點を焦點といひ、定直線を準線といふ、物體を適宜の方向になげとばせば、此曲線を描(エガ)きて地上に落下するが故に此名あり。

(はう-ぶつ-めん)[拋物面](名) 切口が拋物線狀をなしたる曲面。 ——**きやう**[拋物面鏡](名) 【理】拋物面の內面が反射面をなす鏡、鏡曲の最も急なる所は頂點にして、頂點と焦點とを結ぶ直線を軸といふ、軸に平行せる光線は、反射の後悉く焦點を通過するが故に球面收差などなし。

‡はう-ぶ・る(ら、り、る、る、れ、れ)[葬](他、ら四) はふる。はうむる。

(はう-へい)[砲兵](名) 火砲を運用する軍隊。又、其軍隊に屬する兵士。 ——**くわいぎ**[砲兵會議](名) 砲兵の技術・兵器・材料等に關して、陸軍大臣の諮詢に應じ、且つ其改良進步を圖り審査立案をなす所。 ——**こうしやう**[砲兵工廠](名) 陸軍大臣の管理に屬し、陸軍所要の兵器・彈藥・器具・材料等を製造し又は修理する所。

(はう-へい-きゆう)[寶甁宮](名) 【天】十二宮の一。

(はう-へん)[褒貶](名) 褒(ホ)むると貶(オト)すと。「毀譽ー」。

(はう-べん)[放免](名) 「はうめん」に同じ。

(はう-べん)[方便](名) ㊀【佛】便宜にしたがひて人を導く方法を設くると。㊁てだて。手段。

(ばう-べん)[妄辯](名) 道理にたがひたる辯「論。

(はう-ぼ)[保姆](名) ㊀雇(ヤト)はれて小兒をまもりそだつる婦人。㊁幼稚園の女教師。

(ばう-ぼ)[亡母](名) 死にたる母。

はう-ぼう[魴鮄](名) 【動】硬鱗類中はうぼう科に屬する魚、體は長く頭部は斜方形をなす、前背鰭及胸鰭は非常に擴大せり、背部は淡黑色にして腹部は白く體側に褐色の斑點あり、體長一尺餘に達す、我國東北海に多し、肉白色にして淡泊なり。(竹麥魚)。

(はう-ぼく)[芳墨](名) ㊀にほひよきすみ。㊁他人の書狀の敬稱。

(はう-ぼく)[放牧](名) 牛馬などをはなしがひ「にすると。

(はう-まつ)[泡沫](名) ㊀うたかた。あわ。あぶく。㊁存在のいとはかなきものにいふ語。

(はう-まん)[放慢](名) ほしいまゝ。きまゝ。

はう-むり[葬](名) はうむると。

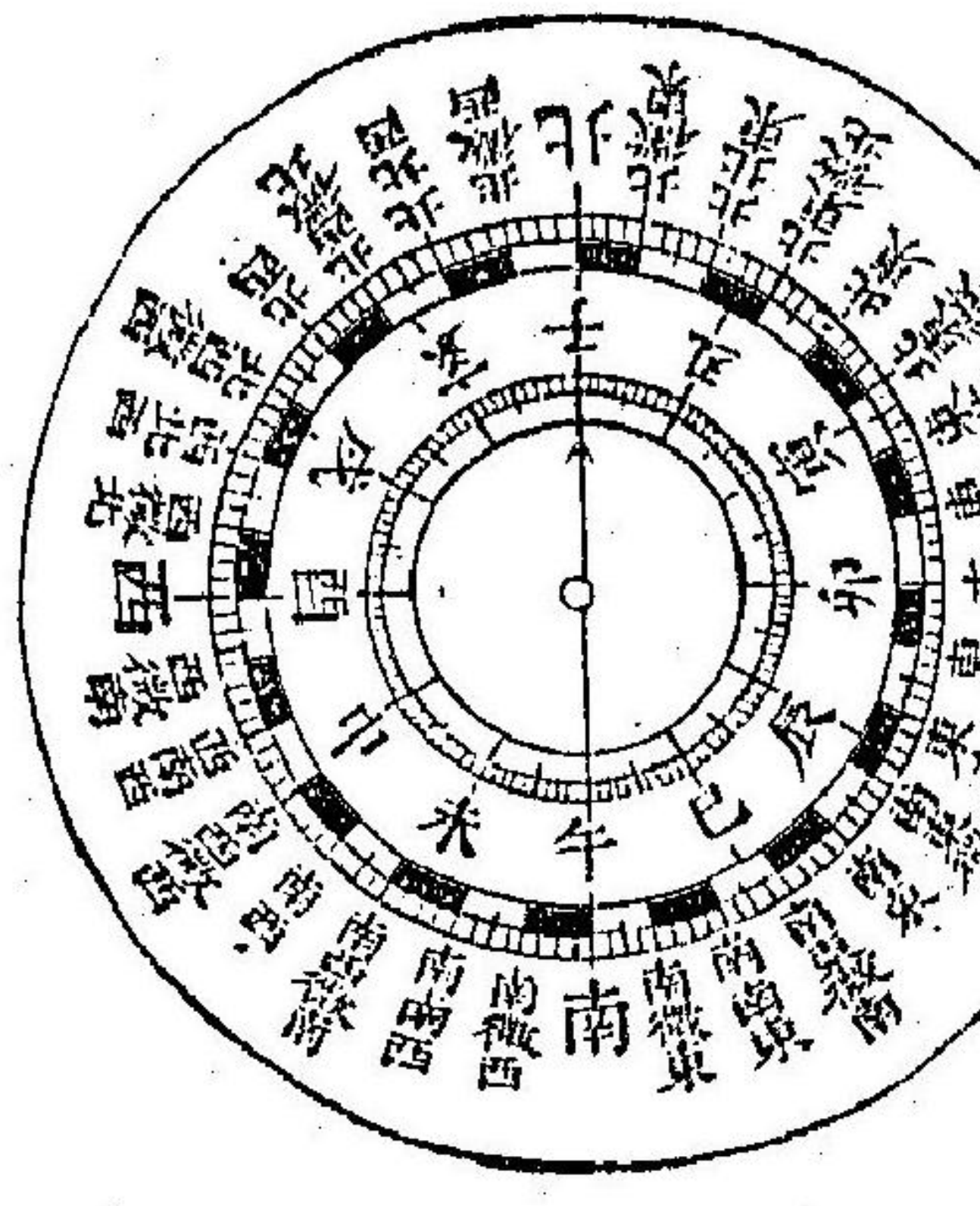
はう-む・る(ら、り、る、る、れ、れ)[葬](他、ら四) ㊀死體を葬地に送りて土中に埋(ウヅ)む。㊁すべて死體を入れをさむるにいふ。「魚腹にはうむられん」。

（はう-めいホウ［芳名］（名）㊀かうばしき名。よき名。㊁他人の姓名の敬稱。　「せ。
（はう-めいホウ［芳命］（名）他人の言の敬稱。おほ
（はう-めいホウ［保命］（名）いのちをたもつこと。いのちを永くすること。　「を報告すること。
（はう-めいホウ［報命］（名）命を受けてなしたる事
（ばう-めいボウ［亡命］（名）自國を脫走すること。かけおち。出奔。失踪。（亡名）。
（はう-めい-しゆホウ［保命酒］（名）一種の酩酒、味醂に似て氣強し。備後國鞆津の名產。
（はう-めんホウ［放免］（名）㊀とらへおきたる罪人をはなちゆるすこと。㊁刑期を終(ヲ)へたる囚人を出獄せさすること。㊂【法】豫審判事が、刑事被告人の證據十分ならざるとき、又は其事件の罪とならざるとき、又は其事件の時效にかゝりたるとき、又は其事件の已に確定判決を經たるとき、又は大赦あるとき、又は法律に於て其罪を免ずるとき、其ものゝ拘留を解くこと。㊃古昔、檢非違使の廳の下部の稱。
（はう-めんホウ［方面］（名）むき。かた。かは。
（ばう-めんボウ［傍面］（名）㊀かたはら。そば。㊁かたはらの面。
（はう-もつホウ［寶物］（名）たから。たからもの。
ばう-もりボウ［坊守］（名）㊀坊の番人。㊁一向宗の僧侶の妻。
（はう-もんホウ［砲門］（名）大砲のつゝぐち。銃口。
（はう-もんホウ［訪問］（名）おとなふこと。おとづるゝこと。訪ふこと。
（ばう-もんボウ［坊門］（名）まち。
（ばう-もんボウ［茅門］（名）かやぶき屋根の門。轉じて、わびしき住居又は自分の宅にいふ語。
（はう-やうホウヨウ［放養］（名）はなちやしなふこと。

（はう-やうホウヨウ［保養］（名）「ほやう」に同じ。
（ばう-やうボウヨウ［茫洋］（名）ひろくして目のとゞかぬこと。　「がむること。
（ばう-やうボウヨウ［望洋］（名）仰ぎ視ること。又、遠くな
（ばう-やう-の-たんボウヨウ　タン［亡羊歎］（名）如何なる方針を取らんかと思案にくるゝこと。（多岐亡羊の條を見よ）。　「くこと。
（ばう-ゆうボウ［暴勇］（名）あらあらしくしてつよ
（はう-よホウ［寶輿］（名）天子のおのりもの。
（はう-ようホウ［放鷹］（名）鷹がり。たかの。
（ばう-ようボウ［妄用］（名）みだりに用ふること。
は-うら［羽裏］（名）鳥の翅の裏。
（ばう-らいボウ［暴雷］（名）はげしき落雷。
（はう-らうホウロウ［放浪］（名）さまよふこと。ぶらつく
（ばう-らうボウロウ［暴浪］（名）はげしきなみ。　「こと。
（はう-らくホウ［炮烙］（名）つゝみやき。まるやき。
（はう-らくホウ［放樂］（名）「ほふらく」（法樂）に同じ。　「こと。
（ばう-らくボウ［暴落］（名）物價の急に下落する
（はう-らつホウ［放埒］（名）（馬の埒を放れたるが如しといふ義）遊蕩に耽(フ)けること。だらく。（放蕩）。　「こと。
（ばう-らんボウ［暴亂］（名）暴動おこりてみだるゝ
（はう-りホウ［方里］（名）一里平方。――せき［方里積］（名）一里平方宛に測りたる地積。
（ばう-りボウ［暴吏］（名）非道なる官吏。殘酷なる官吏。
（ばう-りボウ［暴利］（名）方外の利潤。不當の利益
（はう-りやうホウリヨウ［方領］（名）㊀裘袍(ウスハ)などのえりの方形に仕立てたるものゝ稱。㊁堂上家の局(ツボ子)に勤むるとき、家領外に受くる知行の稱。

（はう-りやくホウ［方略］（名）てだて。はかりごと。手段。計畫。
（はう-りよホウ［芳慮］（名）他人の念慮の敬稱。
（はう-るゐホウ［方類］（名）たぐひ。わかち。
（はう-るゐホウ［堡壘］（名）我軍の據りて敵を防禦又は攻擊するために設けたる土石の築造物。とり
（ばう-れいボウ［亡靈］（名）なきたま。亡魂。　「で。
（ばう-れいボウ［暴戾］（名）殘酷にして道理にもとること。あらあらしくして德義にさからふこと。
はう-れい-わたホウ［芳禮綿］（名）「はふれいわた」（法令綿）に同じ。（綿）。
（ばう-れうボウリヨウ［坊寮］（名）僧侶のすまひ。
（はう-れつホウ［砲列］（名）砲兵が砲發するため大砲を排列すること。
（はう-れんホウ［寶輦］（名）天子の御くるま。
ハウレン-さうホウソウ［菠薐草］（名）（字の唐音）【植】藜科に屬する草、莖は高さ一二尺許にして三稜をなす、葉は扁平にして稍々腹濶なり、花は夏の初めに開き穗狀花序をなす、莖・根色赤く甘味あり食用に供せらる。　「自宅の謙稱。
（ばう-ろボウ［茅廬］（名）かやぶきのいへ。轉じて、
（ばう-ろうボウ［望樓］（名）㊀遠方をのぞむためのたかどの。㊁海軍望樓に同じ。
（はう-ろくホウ［焙烙］（名）素燒の土鍋、物を炒(イ)るに用ふるもの。いりがら。いりごら。炒鍋。（炮碌、焙爐具）。　――てうれんチヨウ［焙烙調練］（名）多人數が隊を分け、各焙烙を頭に被せ、打ち合ひて割られたる方を負けとする調練。　――びや［焙烙火矢］（名）布にて包(ツ)み漆を塗りたる銅製の破裂彈。　――むし［焙烙蒸］（名）一種の料理、物を焙烙の中に入れて蒸したるもの、

（はう-わホウ［飽和］（名）定限の極度に達したること。――じようき［飽和蒸氣］（名）【理】一定の室內に於ける液體が一定の溫度に於て漸次蒸發して或度に達すれば、遂に蒸發休止するに至る、此蒸氣を其時の溫度に於ける飽和蒸氣といふ。――ようえき［飽和溶液］（名）【化】一定の溫度に於て固體或は液體が十分に溶(ト)けたる液。
（ばう-わうボウワウ［暴橫］（名）あらあらしきさま、なること。ほしいまゝに無理非道なる事を行ふこと。
（はう-ゐホウ［方位］（名）子午線よりの角距離、即ち東西南北の類、普通南北は北極星の位置又は磁針の方向により、東西は日出日沒によりて知ることを得。むき。方角。



[はうゐ]

（はう-ゐホウ［包圍］（名）まはりをとりまくこと。つゝみかこむこと。　「又、其長さ。
（はう-ゐホウ［抱圍］（名）兩手にていだきかこむこと。

（はう-ゐホウ［訪慰］（名）おとづれ慰(ナグサ)むること。
（ばう-ゐボウ［防圍］（名）ふせぎかこふこと。
（はう-ゐ-かくホウ［方位角］（名）【地】磁針の指す方向の子午線となす角。
（はう-ゐきホウ［邦域］（名）くにのさかひ。
（はう-ゐ-こうげきホウ［包圍攻擊］（名）敵をとりまきて攻擊すること。　「の敬稱。
（はう-ゐんホウ［芳韻］（名）他人の詩作又は其押韻
（ばう-ゑいボウ［防衞］（名）ふせぎまもること。
（ばう-ゑん-きやうボウ　キヨウ［望遠鏡］（名）遠き物體を見るに用ふる具、圓筒の一端に凸「レンズ」ありて、これを對物「レンズ」と稱し、他端に出入し得る小さき圓筒ありて、其端にも亦凸「レンズ」を備へ、これを接眼「レンズ」といふ、物體を望み見るには、對物「レンズ」を物體に向け、小さき圓筒を出入せしめて、對物「レンズ」の作る倒立の像を見るなり、斯く倒立の物像を見ずるものは、天體用には不都合なければ、地上用には適せざるが故に、筒內に對物「レンズ」の焦點距離より遠き所に、一對の凸「レンズ」を置きて直立の像を現ぜしむ。とほめがね。
（ばう-をくボウ［房屋］（名）いへ。
（ばう-をくボウ［茅屋］（名）㊀わらぶきやね。又、其家。㊁轉じて、あばらや又は自宅の稱。
はえ［鮠］（名）【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、淡水に產す、形鮎に類し、普通白色なれど、雌魚は產卵期に美麗なる彩色を呈す。
はえ［映］（名）はゆること。はゆるさま。（榮）。
〜はえ（名）南風の稱。（中國・西國及琉球等の方言）。
（は-えい［波影］（名）なみのうつろふかげ。
はえ-ぎはギハ［生際］（名）額などの髮の生えたるきは。髮際。

〜はえ-ぬき［生拔］（名）其地に生れて其地に長じたること。「―の江戸子」。　「えて見ゆ。
はえ-ばえ-ししく　しき　しけれ［映映］（形、二）いと映(ハ)
〜はえる（自）「はゆ」の訛。
は-おと［羽音］（名）㊀鳥のはうつ音。（脇扇）㊁矢の羽の風を切りて飛び來る音。
は-おり［羽織］（名）裘衣の上に著る短き衣、道服より轉化したるものといふ。〜――ごろ［羽織破落戸］（名）（羽織を著たるごろつきの義）堅氣の商人又は勤人などにして、よく人の弱點に乘じて暴利を貪るものをあざけりていふ語。　――はかま［羽織袴］（名）羽織と袴と。又、羽織を著し袴を穿つこと。　「掛けて著る。
〜はおるらり　る　れ　れ［羽織］（他、ら四）裘衣の上に打ち
はか［墓］（名）死骸を葬(ハウム)りたる處。つか。（墳墓）。
はか［計］（名）稻などを植(ウ)ゑ又は刈(カ)るとき、其地面を區分していふ語。「一―」「三―」。
〜はか［果］（名）仕事のすゝみ行く程度。はかどり。「―が行く」。（功程）。
‡はが［黐擌］（名）「はご」に同じ。
バカ［馬鹿］（名）㊀（梵語 Baka 即ち痴漢・無智漢の義、もと僧侶の隱語にして、常に馬鹿の字を當て用ふれど、秦の趙高が鹿を指して馬となし、故事より出でたりとするは附會なり）おろか。あはう。たはけ。（呆癡、愚人、癡漢）。㊁【動】「バカがひ」の略言。「―のむきみ」。
（は-かい［破戒］（名）【佛】戒を破ること。戒をおかすこと。「―の僧」。――むざん［破戒無慙］（名）【佛】破戒して其良心に恥ぢざること。
‡は-かうカウ［八講］（名）【佛】「はっかう」に同じ。
（は-かうコウ［波高］（名）なみのたかさ。

⌒**は-かう**（コー）[爬行]（名）はひ行くこと。

バカ-がひ（ガイ）[馬鹿貝]（名）【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、形は蛤に似、介殼薄く淡黄色にして、縦横の細目あり、柱の味よりも肉の味の劣るといふより此名あり。

廿**は-がき**[羽書]（名）さつ。紙幣。

は-がき[葉書]（名）㊀紙切などに記する覺書。㊁政府より發行する通信用の小紙片、其表面に宿所姓名をしたゝめ其裏面に通信の文言を書きて、其儘郵便函に投じ得べきもの。「郵便―」。（端書）。

⌒**は-かく**[破格]（名）格に外（ハヅ）るゝこと。きまりの以外なること。

は-か・く（けけくくるこ）[齒缺]（自、か下二）齒かけ損ず。（齟）。

⌒**ば-かく**[馬革]（名）馬のなめしがは。――**にかばねをつつむ**[馬革裹屍]（後漢の馬援の言に出づ）戰場にて打死するにいふ。

は-がくれ[葉隱]（名）木の葉の間に隱るゝこと。

〜**バカ-げる**（げげるるれよ）[馬鹿氣]（自、か下一）馬鹿らしく見ゆ。

廿**はかし**[佩刀]（名）（佩（ハ）かせ給ふ太刀の義）貴人の太刀の敬稱。はかせ。

は-かし[博士]（名）「はかせ」に同じ。

は-がしは（シワ）[葉柏]（名）【植】「かしは」に同じ。

はか-しよ[墓所]（名）むしよ。はかば。

はか-じるし[墓標]（名）墓のしるしに立てたる木石。墓石。

廿**は-かす**[齒滓]（名）はくそ。

廿**はか・す**（さしすすせせ）[佩]（他、さ四）「はく」の敬語。

廿**はか・す**（さしすすせせ）[魅]（他、さ四）「ばかす」に同じ。

は-かず[葉數]（名）葉のかず。

廿**は-かず**[羽數]（名）鳥のはゞたきの數。

廿**はが・す**（さしすすせせ）[放]（他、さ四）「はなつ」に同じ。

はが・す（さしすすせせ）[剝]（他、さ四）はぎ離す。はぎ取る。

〜**ばか・す**（さしすすせせ）[魅]（他、さ四）迷はしたばかる。あざむきほけしむ。

はかせ[佩刀]（名）「はかし」に同じ。

はか-せ[博士]（名）㊀古昔、大學寮及陰陽寮などにて、專門の道の敎授又は事務を掌りしもの、官名、紀傳博士・明經博士・天文博士などあり。㊁現今、專門の學術に熟達して學位令の規定に適合したるものに、文部大臣より授くる稱號、其種別は大學分科と同じく、法學・醫學・藥學・理學・文學・工學・農學・林學・獸醫學の九種あり。㊂ものしり。學者。㊃其道に達したるもの。㊄「ふしはかせ」の略言。――**くわい**[博士會]（名）文部大臣の監理に屬し、博士の稱號の授與褫奪に關する事項を審査する會、各種別の當該博士を以てこれを組織す。

は-かぜ[葉風]（名）葉を動かす風。

は-かぜ[羽風]（名）飛ぶ翅（ハネ）にて生ずる風。

はか-た[博多]（名）「はかたおり」の略言。――**おり**[博多織]（名）筑前國博多より產出する絹織又は紋織の織物、琥珀に似て重厚なり、初め唐土より織方を傳へたるものといふ。

は-がた[齒形]（名）齒にて嚙（カ）みたる痕。

は-がため[齒固]（名）上古、正月元三日の内に、齒を固（カタ）むるためとて、鹿・猪などの肉を食せしこと、後に至りては、餅又は押鮎などを用ひたり。

はか-ち[墓地]（名）はかしよ。ぼち。

廿**はが・つ**（たちつつてて）[離]（他、た四）はがす。はなす。

はか-どころ[墓所]（名）はかしよ。

はかどり[果取]（名）はかどること。はかどる度合。

バカ-どり[信天翁]（名）【動】「あはうどり」に同じ。

はか-ど・る（らりるるれれ）[果取]（自、ら四）仕事次第に仕上り行く。すゝみゆく。はかゆく。かたづく。（捗）。

廿**はかな-ごと**[果無事]（名）はかなき事。

はか-な・し（くしきけれ）[果無]（形、二）存在の間長からず。存在の甚たしかならず。かりそめにてあり。さだめなし。脆（モロ）し。（儚）。――**ごと**[果無事]（名）はかなき事柄。

廿**はかな-だ・つ**（たちつつてて）[果無立]（自、た四）はかなきさまとなる。

廿**はかな・ぶ**（ばびぶぶべべ）[果無]（自、は上二）「はかなだつ」に同じ。

廿**はかな-に**[果無]（副）はかなく。もろく。

廿**はかな・む**（まみむむめめ）[果無]（自、ま四）はかなく思ふ。

廿**はかな-もの**[果無物]（名）はかなきもの。

〜**バカ-に**[馬鹿]（副）いたく。いと。「―降る」。「―強い」。（東京地方の方言）。

は-がね[鋼]（名）刃物の刃にする鋼鐵。

バカ-ねん[馬鹿念]（名）過度に念の入ること。

はか-ば[墓場]（名）墓のある地。はかはら。ぼち。

はか-ばか・し（しくしきしけれ）（形、二）㊀たしかにてあり。「―き世のかため」。㊁はきはきしてあり。

バカ-バカ・し（しくしきしけれ）[馬鹿馬鹿]（形、二）㊀いと馬鹿らし。㊁過度なり。はなはだし。

バカ-ばやし[馬鹿囃子]（名）東京にて祭禮のときに行ふ一種のはやし、太鼓・鼓・笛・鉦などにてはやすもの。

はか-はら（ワラ）[墓原]（名）はかば。むしよ。

は-がひ（ガイ）[羽交]（名）左右の翅の打ち交ふ所。――**じめ**[羽交締]（名）・敵の背後より、自己の兩手を其左右の腋下を透（トホ）して手先を其襟首の邊にて組み合せ、かくて其人を強く抱きしむること。

廿**は-がひ**（ガイ）[齒貝]（名）【動】「たからがひ」に同じ。

は-がへ（エガ）[羽替]（名）鳥の羽のぬけかはること。

は-がへ（エガ）[葉替]（名）葉の生えかはること。

はかま[袴]（名）㊀腰脚をつゝみ蔽（オホ）ふ衣。はだばかま。（褌）。㊁上着の上に着けて腰より足までを被ふ寛き服、脚のところ二つに分れて筒の如し、禮服として用ひらる。㊂草の莖を被ふ皮。「薊の―」。（苞）。㊃酒德利を入れて据（ス）ゑ置く方形又は圓形の小さき具。――**ぎ**[袴着]（名）昔時、幼年の男子が始めて袴を着けしときの儀式、三歳又は五歳若しくは七歳に行ひたり。――**ごし**[袴腰]（名）袴の背の腰に當たる部分、中に薄板若しくは厚き紙などを入れて梯形に仕立てたるもの。――**ぢ**[袴地]（名）袴を製する布帛。――**むかばき**[袴行縢]（名）昔時、犬追物又は笠懸などの時に着用せし一種のむかばき。

は-がま[齒釜]（名）鍔（ツバ）のある釜。

はか-まつり[墓祭]（名）香花を供へて墓をまつること。

バカ-まひ（マイ）[馬鹿舞]（名）バカをどり。

はか-まゐり[墓參]（名）墓所へ詣づること。（展墓）。

は-がみ[齒嚙]（名）はぎしり。又、はぎり。（切齒）。

廿**はか-も-な・し**（くしきけれ）[果無]（形、二）はかなし。

バカ-もの[馬鹿者]（名）おろかなるもの。

はか-もり[墓守]（名）墓の番人。

は-がゆ・し（くしきけれ）[齒痒]（形、二）我思ふ如くならずして心いら立てり。事足らず思はれて殘念なり。もどかし。

はからざる-に[不圖]（副）はからず。思ひもそめず。

〜**バカ-らし**（しくしきしけれ）[馬鹿]（形、二）㊀おろかなるさまにてあり。㊁バカ〴〵し。

はからず[不圖]（副）思ひもそめざるに。不意に。慮外に。ふと。

はからひ（ハカライ）[計]（名）はからふこと。處置。

はから・ふ（はひふふへへ）[計]（他、は四）㊀はかる。かんがふ。㊁分別す。わきまふ。㊂相談す。たづぬ。㊃處分す。さばく。

はかり[量]（名）㊀はかること。㊁かぎり。あてど。めあて。㊂枡にて分けはかる量。「―のよい米」。

はかり[秤]（名）物體の重量を計る器械の總稱。（衡器）。

廿**はかり**[蹤血]（名）血の流れたるあと。

ばかり[計]（助）たゞそれ一つにして外なき意を表する語。「今年―」。

――**ばかり**[許]（接尾）（「はかり」の義）他の語に添へて「ころ」又は「ほど」の意を表する語。「六月朔日―」。「酒一升―」。

〜**はかり-きり**[量切]（名）ますにてはかりたるばかりにて、少しも添へ加へざること。

廿**はかり-ごと・つ**（たちつつてて）[謀]（他、た四）㊀はかりごとを立つ。㊁たばかる。欺く。

はかり-ごと[謀]（名）（計事の義）㊀はかり設けたる方法。たくみ定めたる手段。（計策、計略）。㊁たばかり。いつはり。

はかり-ざ[秤座]（名）德川時代に、公の特許を得て秤を賣りし所。

はかり-ざら[秤皿]（名）秤の附屬具、平たくして皿の狀をなし、秤竿の一端にかけつるして、中に重量をはからんとする物體を載（ノ）するもの。

はかり-ざを[秤竿]（名）秤の附屬具、桿狀をなし、上に秤目を盛りたるもの。

はかり-し[秤師]（名）はかりの製造を業とする人。

はかり-べり[量耗]（名）枡にて量り込みて枡目の不足となること。（斗耗）。

廿**はかり-むし**[計蟲]（名）【動】「しやくとりむし」の一名。

はかり-め[秤目]（名）㊀量る樣。㊁秤竿に記したるほし。

はかり-や[秤屋]（名）はかりを製造又は販賣する人又は家。

はか・る（らりるるれれ）[計]（他、ら四）㊀物事の度合を知らんと試む。㊁秤にて物の重量を知らんと試む。（權）。㊂枡にて量の多少を知らんと試む。（量）。㊃ものさしにて物の長短を知らんと試む。（度）。㊄計算す。かぞふ。㊅諮詢す。とふ。（諮）。㊆評議す。かたらふ。（議）。㊇分別す。わきまふ。㊈思料す。かんがふ。㊉推定す。おしはかる。⑪工夫す。（圖）。⑫あざむく。たばかる。

廿**はが・る**（れれるるれよ）[剝]（自、ら下二）はげおつ。はげはなる。

〜**はがれる**（るれ・るれよ）（自）「はがる」の訛。

〜**バカ-わらひ**（ワライ）[馬鹿笑]（名）笑ふさまの馬鹿らしく見ゆること。

⌒**は-がん**[破顏]（名）わらひを含むこと。ほゝゑむこと。

は-き[嘔]（名）はき出すこと。はくこと。（嘔吐）。

⌒**は-き**[覇氣]（名）㊀進取して勝を制せんとする意氣。㊁やま氣。

⌒**は-き**[破棄]（名）やぶりてうちすつること。

⌒**は-き**[破毀]（名）㊀やぶりこはすこと。又、やぶれこはるゝこと。㊁【法】上告裁判所に於て、原裁判所の判決を違法としてこれを取消すこと、其結果は更に適法の裁判をなさしむるため、其事件をもとの控訴裁判所に差戾すか若しくはこれと同等なる裁判所に移送するを普通とす。

はぎ[萩]（名）㊀【植】荳科に屬する灌木、幹は細く脆くして叢立す、葉は羽狀複葉にして三個の小葉より成り、花は紅紫色若しくは白色を呈す、子房は一個の胚珠を有し莢は一節より成る。（胡枝子）。㊁かさねの色目、表は蘇芳にして裏の青なるもの。

廿**はぎ**[榛]（名）【植】「はりのき」に同じ。

はぎ「脛」（名）下肢の膝より下にしてくるぶしより上なる部分の稱。むかふずね。すね。（股脛、脛）。

卄——**にあぐ**　衣の裾をからげて脛をあらはす。又、つゝめる心をあらはす。

はぎ「接」（名）はぐと。又、はぎたる部分、「切れの—」。

（**は-ぎ**）「羽利」（名）はぶりのよきと。又、其人。

はぎ-ぐすり「吐藥」（名）胃中のものを吐き出さしむるための藥劑。

はぎ-くだし「吐下」（名）はくと下だすと。（吐瀉）。

はぎ-ぐち「吐口」（名）はき出す口。

はぎ-け「吐氣」（名）胃中に停滯せるものを吐き出さんとする心もち。

はぎ-と「接子」（名）衣服のはぎたる所。

はぎ-しり「齒軋」（名）齒を嚙（カ）み合はせて、音さするを。はがみ。

はぎ-ぞへ「佩副」（名）わきざし。

はぎ-ぞめ「掃初」（名）新年に入りて正月二日始めて座敷の掃除をなすと。

はぎ-ぞめ「佩初」（名）始めて刀などをおぶると。

はぎ-ぞめ「履初」（名）初めて下駄などをはくと。

はぎ-だし「吐出」（名）はきだすと。

はぎ-だし「掃出」（名）はきだすと、又、はきだす所。

——**まど**「掃出窓」（名）室內の塵を掃出すために造りたる窓、座敷と平かに設く。

はぎ-だ-す「吐出」（他、さ四）㊀腹中又は口中のものを吐きて外へ出す。㊁ものを外へ出す。㊂支出す。け出す。

はぎ-だ-す「掃出」（他、さ四）塵芥を掃（ハ）きて外へ出す。

はぎ-たて「掃立」（名）㊀掃除してまだ程經（ヘ）ぬと、㊁蠶種にて、蟻蠶を蠶卵紙より取りて大いなる

紙に移すと。

はぎ-だめ「掃溜」（名）塵芥の捨場。ごみため。

（**はぎ-と**）（副）あきらかに。さだかに。はっきりと。

はぎ-と-る「剝取」（他、ら四）はがして奪ひ取る。

はぎ-の-たてあき「萩經靑」（名）かさねの色目、表は靑の經（タテ）と蘇芳の緯（ヨコ）とにて織りたるものにして、裏の靑色なるもの。

卄**はぎ-の-と**「萩戸」（名）古昔、淸涼殿の東西の小萩垣のありし所。

はぎ-の-もち「萩餅」（名）粳米（ウルチ）と糯米（モチゴメ）とを合せ炊ぎて、これを頃合の大きさに丸め、上にきなこ又は餡を塗りたるもの。おはぎ。ぼたもち。

（**はぎ-はぎ**）（名、副）㊀氣性の鋭くして活潑なるさまにいふ語。㊁物事のはかどり行くさまにいふ語。㊂物事のはっきりとしたるさまにいふ語。「—した男」。

はぎ-はぎ「接接」（名）多くのはぎ。

はぎ-はら「萩原」（名）萩のおひたる原。

（**は-きふ**）「波及」（名）漸次に影響の及ぶと。

はぎ-もの「履物」（名）下駄・靴・草履などの如く、すべて足に穿くものゝ稱。

（**は-きやう**）「破鏡」（名）㊀かたわれ月。（缺月）。㊁夫婦の離別。

はぎ-やき「萩燒」（名）長門國阿武郡松本村より產出する陶器、毛利輝元が朝鮮の陶器工を招きて燒かしめたるに濫觴せり。

（**は-きやく**）「破却」（名）やぶりそこなふと。こはすと。

（**は-きやく**）「跛脚」（名）びっこのあし、なえたるあし。

（**ば-きやく**）「馬脚」（名）うまのあし。——**をあらはす**　中途にて失敗す。

は-ぎり「齒切」（名）㊀はぎしり。はがみ。㊁齒にてかみきる心地。

は-ぎれ「齒切」（名）齒にてかみ切るときの感、

（**はく**）「伯」（名）㊀五等爵の一、侯の下にして子の上なるもの。㊁古昔、神祇官の長官。㊂をさ。かしら。首長。㊃そうりやう。長兄。㊄父母の兄。をぢ。㊅神。「風—」「水—」。

（**はく**）「帛」（名）きぬ。絹布。「布—」。

（**はく**）「箔」（名）金屬をたゝきて薄く平たく延（ノ）ばしたるもの。「金—」。

（**はく**）「魄」（名）身體の靈。たましひ。

（**はく**）「泊」（名）とまり。やどり。

はく「吐」（他、か四）㊀口中のものを口外に出す。㊁腹中の物を口外に出す。もどす。㊂言に出す。いふ。「大言を—」。㊃すべて內部のものを外部へ出すにいふ。「雲月を—」。

はく「佩」（他、か四）㊀腰に着く。おぶ。（帶）。㊁腰より以下に着く。うがつ。「袴を—」。（穿）。

卄**はく**「佩」（他、か下二）はかしむ。

はく「履」（他、か四）足に着く、足に穿つ。

はく「掃」（他、か四）㊀はうきにて掃（ハ）ひ除く。さらふ。「座敷を—」。㊁はらひのぞく、はらひおとす。㊂塗抹す。ぬる。「眉を—」。

卄**はく**「化」（自、か下二）變じて異形のものとなる。

はく「逝」（自、か下二）㊀滯らずして流る。「水—」。（疏通）。㊁悪く頽れ行く。「貨物が—」。

はぐ「剝」（自、か下二）㊀とれ離る。はがる。㊁脫（ヌ）げ落つ。おつ。㊂消え失（ウ）す。うす。

はぐ「剝」（他、か四）㊀離し取る。はがす。へぐ。㊁脫（ヌ）がし取る。むく。ぬがす。裸にす。㊂沒收す。うばふ。めしあぐ。「官を—」。（褫）。

はぐ「矧」（他、か四）矢竹に羽をはめて矢を作る。

卄**はぐ**「矧」（他、か下二）引き裂く。かく。

「いくさを見て矢を—」。

はぐ「接」（他、か四）綴ぢ合はす。つゞりあはす。つぎあはす。つゞく。つぐ。

（**ばく**）「貘」（名）㊀支那にて想像上の獸、象の鼻・犀の目・牛の尾・虎の脚にして全體は熊に似たるもの、惡夢を食ふとなへ、これが像を畫けば邪氣をはらふといふ。（貊）。㊁【動】奇蹄類に屬する獸、驢より稍や小形にして、其長き鼻は屈伸自在なり、前趾に四蹄ありて後趾に三蹄あり、全身に其毛生じ尾は短し、「インド」諸島及南「アメリカ」等に產す、性溫柔にして群居し人に馴れ易し。

（**ばく**）「縛」（名）㊀なは。さづな。㊁めしとり。なはめ。

ばく「化」（自、か下二）㊀變じて異形のものとなる。㊁素性をつゝみかくして別樣の人の如きさまを裝ふ。

（**ば-ぐ**）「馬具」（名）乘馬に必要なる具、鞍・鐙・轡等の一切をいふ。

（**はく-あ**）「白堊」（名）「はくあく」の訛。

（**はく-あい**）「博愛」（名）平等に愛すると。ひろく愛するを。

——**しゆぎ**「博愛主義」（名）その種族地位の如何を論ぜず、人類はすべて同等なるが故に平等に相愛せざるべからずといふ主義。

（**はく-あく**）「白堊」（名）㊀白色の土。しろつち。㊁白色の壁。しらかべ。㊂【化】炭酸「カルシウム」の粉末を固めたるもの、黑板に書畫をかくに用ひらる。

（**はく-い**）「白衣」（名）㊀白色のころも。㊁もめんの衣服。㊂官府の小使。㊃いやしきもの。官位なきもの。

——**のさいしやう**「白衣宰相」（名）官位なくして大政の顧問に備はるものゝ稱。

（**はく-う**）「白雨」（名）白く見ゆる雨。ゆふだちの雨。「一喚寒山、森森似銀竹」。

（**ばく-う**）「麥雨」（名）麥の熟する頃にふる雨。

（**はく-うち**）「箔打」（名）箔をうちのばすと。又、其人。

卄**はく-うち**「搏打」（名）「ばくち」に同じ。

（**はく-うん**）「薄運」（名）運命のあしきと。まはりあはせのあしきと。

（**はく-うん**）「白雲」（名）白き色の雲。しらくも。

——**せき**「白雲石」（名）【鑛】炭酸石灰と苦土との化合物、方解石と同一の結晶をなす。

（**はく-うんぼ**）「白雲母」（名）【鑛】白色なる雲母。

（**はく-え**）「白衣」（名）「びやくえ」に同じ。

ばく-えき「博奕」（名）金錢又は財物を賭（カ）けて勝負を爭ふと。ばくち。

（**はく-か**）「薄荷」（名）㊀【植】唇形科に屬する草、一種の香氣を有す、葉は卵形にして綠邊に鋸齒を有し對生す、花は小形にして淡紫色を呈し、花序は輪狀にして葉腋に生ず、薄荷精を採取す。㊁【化】「はくかせい」の一名。

（**はく-が**）「博雅」（名）ひろく正しく物事を知りたると。

（**ばく-か**）「幕下」（名）㊀將軍の尊稱。㊁大將の麾下。はたもと。㊂てか。部下。

（**ばく-が**）「麥芽」（名）むぎのもやし。

（**はく-がい**）「迫害」（名）せまりさまたぐると、くるしめなやますを。

（**はく-かう**）「薄倖」（名）ふしあはせ。不運。

（**はく-かう**）「薄行」（名）おこなひの輕薄なると。

（**はく-がく**）「博學」（名）ひろく學問に通ずると。（碩學）。

（**はくか-すゐ**）「薄荷水」（名）薄荷精を溶（ト）かしたる水。

（**はくか-せい**）「薄荷精」（名）【化】薄荷を水蒸氣と共に蒸溜して得たる無色針狀の結晶體、香氣殊に強し、醫藥に供せらる。

（**はくか-たう**）「薄荷糖」（名）一種の菓子、砂糖を固めてつくり、薄荷の香をつけたるもの。

（**ばくが-たう**）「麥芽糖」（名）【化】麥芽中の酵素が澱粉に作用して生ずる一種の砂糖、飴の甘味あるはこれが存在するによる。

（**はく-かふ**）「博洽」（名）あまねく物事にわたりて知ると。

（**はくか-ゆ**）「薄荷油」（名）薄荷を蒸溜して得たる香氣ある液。

（**はく-がん**）「白眼」（名）にらむめつき。冷遇するめつき。

（**はく-き**）「白旗」（名）白色の旗（ハタ）、現今にては、降伏のしるしにたつるもの。

（**はく-き**）「白鬼」（名）娼賣婦。しろくび。

（**はく-ぎ**）「駁議」（名）駁擊したる議論。

（**はく-ぎ**）「薄儀」（名）手うすき謝儀。輕少なる贈物。

は-ぐき「齒莖」（名）齒の根を包む肉。はじし。（齦）。

（**ばく-ぎ**）「幕議」（名）幕府の評議。

（**ばく-ぎ**）「博戲」（名）㊀スゴロク。㊁ばくち。

（**はく-きふ**）「薄給」（名）すくなき給料。

（**ばく-ぎやく**）「莫逆」（名）「ばくげき」に同じ。

（**はく-ぎよ**）「白魚」（名）【動】（い）「みごひ」の一名。（ろ）「しらうを」に同じ。

（**はく-ぎよくろう**）「白玉樓」（名）唐の李賀の故事に出づ。死者のおもむく所。

（**はく-きん**）「白金」（名）【化】灰白色の貴金屬、展性・延性に富み、高溫度に於ても酸素又は酸類等との反應なし、坩堝・蒸發皿を製するに用ひられ、又、「ガイスレル」管・白熱燈などの電極に用ひらる。「プラチナ」。

（**はく-ぎん**）「白銀」（名）㊀しろかね。ぎん。㊁昔時、銀を三寸許の平たき楕圓形となして、紙に包みたるもの、通用銀の三分に當る、賄賂などに用ひて

銀何枚と呼びたり。銀子。

（はく-く）ハツ［白駒］（名）㊀しろきうま。㊁（莊子の語に出づ）光陰の經過のはやきをたとへいふ語。つきひ。――げき を すぐ［白駒過隙］光陰の忽ちに經過するにいふ。「と。

（はく-ぐう）［薄遇］（名）もてなしの丁寧ならざること。

はぐくむ［羽含］（他、ま四）（羽組む、又羽含むの義）㊀親鳥、雛を羽の間に抱(イダ)きて育つ。㊁養育す。そだつ。㊂保護す。かばふ。

（はく-くわう）ハツクワウ［白光］（名）㊀しろく見ゆるひかり。㊁［天］日蝕の際、太陽の周圍に見ゆる白きひかり。「コロナ」。

（はく-けい）ハツ［伯兄］（名）第一の兄。「と。批難、

（ばく-げき）［駁擊］（名）他人の言說をうち難ずる

（はく-げき-はう）ホウ［迫擊砲］（名）步兵が敵壘に突貫するに際し、これを援助するため、敵壘間近に持ち來りて發射する一種の火砲、裝置輕便にして擲火の筒に類するもの。

（ばく-げき）［莫逆］（名）相互の友情少しも牴突せざること。いと親しきこと。――の-とも［莫逆友］（名）相互にいと親しき友人。

（ばく-げき）［搏擊］（名）くみうち。格鬪。

（はく-げつ）［白月］（名）月の上十五日。「の血球。

（はく-けつ-きう）［白血球］（名）血液中にある無色

（はく-げん-がく）［博言學＝Philology］（名）言語の起原・發達・變遷乃至比較等につきて研究する科學。言語學。「骨、

（はく-こつ）ハツ［白骨］（名）されて白くなりたる

はぐさ［莠］（名）水田に生じて稻を害するすべての雜草。（秋）。

（はく-さい）［舶載］（名）ふねにのせてはこぶこと。

（はく-さい）［薄才］（名）才智のすくなきこと。

（はく-さつ）［搏殺］（名）空拳にてうちころすこと。

（ばく-ざつ）［駁雜］（名）いりまじりたること。純粹ならざること。

（はく-し）［博士］（名）「はかせ」（二）に同じ。

（はく-し）［白紙］（名）㊀しらかみ。「一一枚」。㊁唐紙の一種、色白く、薄くして脆し、書畫用とす。

（はく-し）［白絲］（名）しろき絲。又、染めざる絲。

（はく-し）［薄志］（名）㊀志の輕薄なること。志のよわきこと。㊁心ばかりの謝儀。

（はく-じ）［白字］（名）㊀凹狀に印刻したる文字、搨せば白くあらはるゝもの。㊁白色の顏料を以て書

（ばく-し）［幕使］（名）幕府の使者。「したる字。

（ばく-しう）［麥秋］（名）㊀むぎをとりこむとき。㊁陰曆五月の異稱。「知りたること。

（はく-しき）［博識］（名）博く物事にわたりてよく

（はく-し-じやく-かう）ジヤクコウ［薄志弱行］（名）意志弱くして行爲のたしかならざること。

（はく-じつ）［白日］（名）㊀くもりなき日。㊁日中。ひるなか。

（はく-しや）［白砂］（名）白色の砂。「一青松」。

（はく-しや）［拍車］（名）騎乘するもの、穿つ靴の踵(カカト)に裝置する金具、尖端に齒を刻みたる輪車ありて、騎乘者が馬を御し又は懲らすためのもの。

（はく-しや）［薄謝］（名）いさゝかなる謝儀。

（はく-じや）［白蛇］（名）【動】白色の蛇。（白花蛇）。

（はく-じやう）ジヨウ［薄情］（名）義理人情のうすきこと。愛情なきこと。

（はく-じやう）ジヨウ［白狀］（名）㊀くちがき。口供。口書。㊁自ら自分の罪狀を申出づること。（首伏）。㊂自ら自分のつゝみかくしたる事實をいふこと。

（ばく-しやう）ヨウ［幕將］（名）幕軍の大將。

（はく-しやく）［伯爵］（名）五等爵の一、侯爵の下にして子爵の上なるもの。

（はく-じやく）［薄弱］（名）㊀うすくしてよわきこと。よわ〳〵しきこと。㊁たしかならざること。しっかりせざること。「證據―」。

（はく-しゆ）［拍手］（名）手を拍(ウ)ち鳴らすこと。

（はく-しゆ）［白首］（名）しらがあたま。又、しらが

（はく-しゆ）［白鬚］（名）しろきくちひげ。「くび。

（はく-しゆ）［薄酒］（名）氣の弱き酒。

（ばく-しゆ）［麥酒］（名）「ビール」。

（はく-しゆ-かつ-さい）［拍手喝采］（名）演說又は演藝などにて、手をたゝきてどよめきはむること。

（はく-しよ）［薄暑］（名）初夏の暑氣「一の節」。

（ばく-しよ）［曝書］（名）書物のむしぼし。

（はく-しよく）［白色］（名）しろきいろ。――じん-しゆ［白色人種］（名）人種の一、皮膚白色にして毛髮柔かに、顎の突出は黄色人種よりも更に少なく、額は他の人種よりも大なるを特性とす。

（はく-じん）［白刃］（名）しらは。ぬきみ。

（はく-じん）［白人］（名）㊀しろうと。（元祿時代の語）。㊁白色人種。――しゆ［白人種］（名）「はくしよくじんしゆ」（白色人種）に同じ。

（ばく-しん）［幕臣］（名）㊀幕府の臣下。㊁はたもと。ごけにん。

（ばく-しん）［麥蕈］（名）【植】「しようろ」の一名。

はく-す（せしすするすれせよ）［博］（他、さ變）ひろくす。ひろむ。「喝采を―」。「む。くゝる。

ばく-す（せしすするすれせよ）［縛］（他、さ變）しばる。いまし

ばく-す（せしすするすれせよ）［駁］（他、さ變）他人の言說を非難す。（攻擊）。

はく-すな［箔砂］（名）箔の粉末。

（はく-すゐ-しん-じん）［白水眞人］（名）（白水は泉の字を分ち、眞人は貨の字を分ちたるもの）泉貨即ち錢の稱。

（はく-せい）［剝製］（名）動物の皮膚を剝(ハ)ぎ、中に綿と締とを詰めて縫ひ合はせ、其生時の形に擬してつくれるもの。

（はく-せい）［薄脆］（名）うすくしてもろきこと。

（ばく-せい）［幕政］（名）幕府の政治。

（はく-せき）［白皙］（名）皮膚の色の白きこと。――じん-しゆ［白皙人種］（名）「はくしよくじんしゆ」（白色人種）に同じ。

（はく-せつ）［白雪］（名）しらゆき。「一皚々」。――かう コウ［白雪糕］（名）一種の菓子、粳の粉を加へたる白色の落雁

（ばく-せつ）［駁說］（名）駁擊したる說。

（はく-せん）［白扇］（名）地紙の白くして何ものも書きてなき扇。「同じ。

（はく-せん）［白戰］（名）「はくへいせん」（白兵戰）に

（はく-せん）［薄饍］（名）粗末なる膳部。

（ばく-せん）［搏戰］（名）くみうち。格鬪。「語、

（ばく-ぜん）［爆然］（名、副）爆發するさまにいふ

（ばく-ぜん）［漠然］（名、副）ばっとして分明ならざるさまにいふ語。（模糊）。

（ばく-ぜん）［驀然］（名、副）㊀まっしくらにすゝむさまにいふ語。㊁急速なるさまにいふ語。

はく-そ［齒屎］（名）齒に溜まれる垢滓。

（はく-たい）［白帶］（名）しらち。

（はく-たい）［薄待］（名）鄭重ならざる待遇。

（ばく-だい）［莫大］（名）（それより大なるはなしといふ義）極めて多大なること。

（はく-たい-げ）［白帶下］（名）しらち。

（はく-だう）ドウ［白道］（名）【天】太陰の軌道。

十（はく-たく）［餺飥］（名）うどん製の食物。はうた

（はく-だつ）［剝脫］（名）はぎぬがすこと。「う。

（はく-だつ）［剝奪］（名）奪ひ取ること。とりあぐること。「衣服を―す」。――こう-けん［剝奪公權］（名）【法】重罪の附加刑、終身間其人の公權を剝奪

（ばく-だん）［爆彈］（名）ばくれつだん。「すること。

（はく-ち）［白雉］（名）【動】「しらきじ」に同じ。

（はく-ち）［白痴］（名）普通の人よりも智力の甚だ

（はく-ち）［白地］（名）あからさま。「劣れる者。

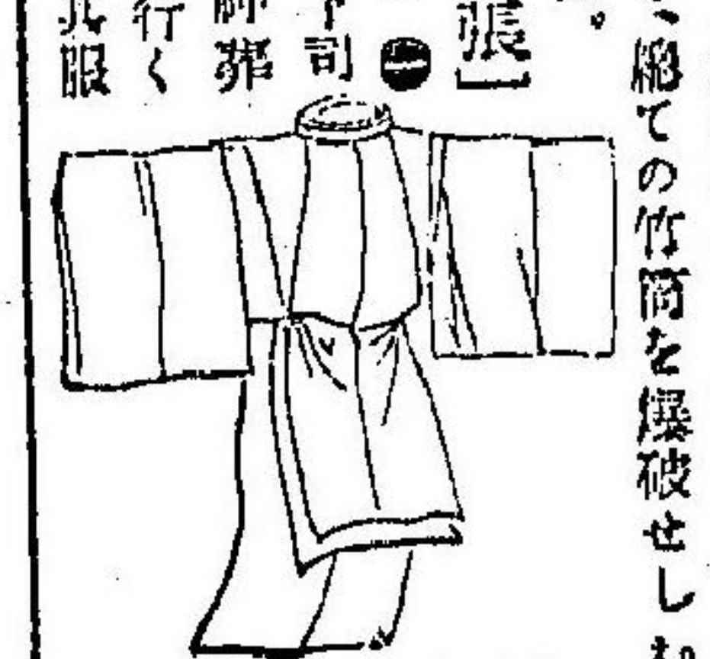
ばく-ち［博打］（名）（「ばくうち」の約）㊀一種の賭事、金錢を賭(カ)け、采を振りて勝負を行ふもの。ばくやち。かりうち。㊁「ばくちうち」に同じ。――うち［博打打］（名）博奕を行ふことを職業の如くにする人。博徒。――じる［博打汁］（名）一種の料理、豆腐を細く切りて賽としたる汁。――ば［博打場］（名）博打を行ふ場所。とば。

（ばく-ち）［驀地］（副）㊀まっしくらに。㊁急に。

（はく-ちう）［白晝］（名）まひる。ひるなか。白日。

（ばく-ちく）［爆竹］（名）㊀左義長の火。とんどの火。㊁支那にて、火藥をつめたる小さく短き竹筒を數多連ねたるもの、先づ其端の一に火を傳ふれば、漸次他に傳はり移りて、總ての竹筒を爆破せしむ、祝日などにこれを行ふ。

（はく-ちやう）ヨウ［白張］（名）（しらはりの義）㊀木綿の白張を着する下司の仕丁。㊁神事又は神葬などに、ものをかつぎ行く人夫の被(キ)る服。又、其服を着する人夫。（白丁）。



［はくちやう（二）］

（はく-ちゆう）［伯仲］（名）㊀兄と弟と。㊁似よりて優劣なきこと。――の-あひだ イダ［伯仲間］（名）前條（二）に同じ。「たること。

（はく-つう）［博通］（名）ひろく諸種の物事に通じ

ばく-つく（かきくくけけ）（他、か四）食ふ。

（はく-てう）ヨウ［白鳥］（名）㊀【動】游水類に屬する鳥、形雁に似て大きく、全身白色にして頸長し、嘴根に黄赤色の瘤あり。くゝひ。こふ。こひ。しろとり。（鵠）。㊁白き陶製の德利、頸細長くして白鳥に似たれば名づく。「同じ。

バクテリア［Bacteria］（名）「さいきん」（細菌）に

（はく-と）［白徒］（名）未熟なるもの。「ち。

（ばく-と）［博徒］（名）ばくちをうつ人、ばくちう

（ばく-ど）［麥奴］（名）麥の黑穗。くろぼ。

（はく-とう）［搏鬪］（名）くみうち。なぐりあひ。

（はく-とう）［白頭］（名）しらがあたま。――あらたなるが ごとし 互に白頭となるまでも長く交際しても、交情の依然として厚からざるにいふ。

（はく-どう）［白銅］（名）㊀銅と亞鉛及「ニッケル」との合金。㊁「はくどうくわ」の略言。

（はく-とう-をう）［白頭翁］（名）㊀しらがあたまの老人。㊁【動】「むくどり」に同じ。

（はく-どう-くわ）［白銅貨］（名）白銅にて鑄造したる五錢の補助貨幣。

（はく-とく）［薄德］（名）德を積むことの少なきこと。

（はく-ない-しやう）ヨウ［白内障］（名）そこひの一種、瞳子の灰色又は青色にして、透明ならざるもの。

（ばく-ねう）ニヨウ［麥繞］（名）漢字の偏の名、麪・麵等の字の左方にある麥の字の稱。

（はく-ねつ-とう）［白熱燈］（名）【理】電燈の一、內

部の空氣を排除したる「ガラス」球中に細き炭素線を入れたる裝置のもの、炭素線に電流を通ずるときは、はげしく熱せられて白光を放つ。

卄**はくのきぬ**[帛]（名）薄ききぬ、かりもの。

ばくのなは[縛繩]（名）不動尊の手に持てる繩の稱、惡を縛るためのものといふ。

ばくのふだ[貘札]（名）想像上の獸なる貘の形を描（ヱガ）きたる札、惡夢をさくるためとて寢床に敷くもの。

(**はくは**[白波]（名）しらなみ。

(**はくばい**[白梅]（名）白色の梅花。

(**はくば**[白馬]（名）しろうま。又、あをうま。

(**はくはく**[白白]（名、副）あきらかにして曇もくもりなきさまにいふ語、「明明—」。

(**ばくばく**[漠漠]（名、副）㊀とほくはるかなるさまにいふ語。㊁ばっとしてとりとめなきさまにいふ語。

(**ばくばく**[寞寞]（名、副）ひっそりとしてさびしきさまにいふ語。

〔**ばくばく**（名、副）㊀大いなる口を開閉するさまにいふ語、「お獅子—」。㊁つけあはせたる所の離れかゝりてあるさまにいふ語。

〔**ぱくぱく**（名、副）㊀前條に同じ。㊁物を食ふさまにいふ語。

(**はくはつ**[白髮]（名）しらが、「—翁」。

(**ばくはつ**[爆發]（名）急激に特種の作用發生して、外圍のものを破傷し又は飛揚せしむること。——**ぶつ**[爆發物]（名）爆發する性質のもの。又、爆發藥を裝塡してあるもの。——**やく**[爆發藥]（名）物を爆發せしむる火藥、即ち「ダイナマイト」の類。

(**はくはん**[拍板]（名）「びんざさら」に同じ。

(**はくはん**[白飯]（名）菜をそへぬめし。

(**ばくはん**[麥飯]（名）むぎめし。

(**はくひ**[薄皮]（名）うすきかは。

(**はくひ**[白砒]（名）【化】無水亞砒酸の稱。

(**はくび**[白眉]（名）（蜀の馬氏の五人兄弟の中にて、長兄なる良最もすぐれて、其人眉白かりし故事に出づ）其中にて傑出せるものにいふ語。

(**はくひょう**[薄氷]（名）厚さのうすき氷、うすごほり。

(**ばくひん**[幕賓]（名）將軍又は大臣などの顧問となりて、特別の待遇を受くる人、「大臣の—」。

(**はくふ**[伯父]（名）父母の兄。をぢ。

(**はくふ**[白布]（名）しろぬの。

(**ばくふ**[幕府]（名）將軍の軍務を處理する所。轉じて、武家の政務を處理する所。（覇府）。

(**ばくふ**[瀑布]（名）㊀ぬのざらし。㊁たき。飛泉、「那智の—」。

(**はくぶつ**[博物]（名）㊀ひろく物事をしること。㊁「はくぶつがく」の略言。——**がく**[博物學]（名）動物學・植物學・鑛物學等の總稱。——**がくしゃ**[博物學者]（名）博物學を修むる人。又、博物學に長じたる人。——**くわん**[博物館]（名）動・植・鑛物其他天然・人造を問はずすべての物を陳列して衆人の縱覽に供する所。「上野の—」。——**へうほん**[博物標本]（名）動・植・鑛物等の標本。

(**はくふん**[白粉]（名）㊀白色の粉。㊁おしろい。

(**はくぶん**[博聞]（名）ひろく物事をきゝ知ること。「—強記」。

(**はくぶん**[白文]（名）㊀訓點のなき漢文。㊁白字。——**くんてん**[白文訓點]（名）白文に訓點を施すこと。

(**はくへい**[白兵]（名）ぬきみ。しらは。白刃。——**せん**[白兵戰]（名）敵味方が互に白刃を揮ひて格鬪する戰爭。

(**はくへき**[白壁]（名）しらかべ。

(**はくへき**[白璧]（名）㊀外邊圓くして中心に孔ある白色のたま。㊁轉じて、貴重すべきものにいふ語。——**のびか**[白璧微瑕]殆ど完全にして少しの缺點あるものにいふ語。

卄**はくべら**[繁蔞]（名）【植】「はこべ」の古稱。

(**はくへん**[薄片]（名）うすきかけ、うすききれ。

(**はくぼ**[伯母]（名）父母の姉。をば。

(**はくぼ**[薄暮]（名）ゆふぐれ。たそがれ。

(**はくぼく**[白墨]（名）白堊を棒狀に製したるもの。しらずみ。（白堊）。

はぐま[白熊]（名）支那より舶來する犛牛の尾、馬尾より細くして白し、拂子に造り、又、旗・槍などの飾とす。

はぐま[兎替郎]（名）【植】菊科に屬する草、陰濕の地に生ず、一莖一根、直立して高さ尺餘に達す、葉は枇杷に似、小形にして鋸齒なく莖頭に稍生す、花は白色にして穗狀をなす。

(**はくまい**[白米]（名）搗（ツ）きて精（シラ）げたる米。「精米」。

(**ばくまつ**[幕末]（名）德川幕府の末路。

(**はくめい**[薄明]（名）うすあかり。

(**はくめい**[博名]（名）名聲をひろむること。

(**はくめい**[薄命]（名）ふしあはせ、不運。

(**ばくめい**[幕命]（名）幕府の命令。

(**はくめん**[白面]（名）㊀すがほ。㊁いろじろのかほ。㊂年わかく經驗乏しきこと、「—の書生」。——**らう**[白面郎]（名）色の志ろき若きもの、又、經驗乏しきわかもの。

(**はくもくれん**[白木蓮]（名）【植】木蘭科に屬する木、葉は倒卵形をなし花落ちて後生ず、花は倒卵形をなせる九個の花瓣より成り、白色にして香氣高し。（木蓮、玉蘭）。

(**ばくもんどう**[麥門冬]（名）【植】「りゆうのひげ」に同じ。

はくや[箔屋]（名）箔の工人、又、箔を賣る家。

(**はくや**[薄夜]（名）くれがた。たそがれ。

(**ばくや**[鏌鋣]（名）支那吳國の名劍、轉じて、鋭利なる名劍。「干將—」。（莫邪）。

ばぐや[馬具屋]（名）馬具を商ふ家。

(**はくやう**[白楊]（名）【植】「はこやなぎ」に同じ。

(**はくやう**[博奕]（名）ばくち。

卄**はくやうきゅう**[白羊宮]（名）【天】十二宮の一。

(**はくらい**[舶來]（名）㊀外國より船載して齎（モタラ）し來ること。外國よりの渡來、「—の品」。㊁外國より渡來したる物品。㊂上等なること。又、上等なる品。——**ひん**[舶來品]（名）舶來したる志な。

(**はくらう**[伯勞]（名）【動】「もず」に同じ。

(**ばくらう**[博勞]（名）馬を賣買する商賈。又、其商賈の人。（馬喰）。

(**ばくらう**[麥隴]（名）むぎばたけ。

はぐらかす（他、さ四）㊀はぐるゝやうにす。㊁人の問へるに答へずして餘の事をいふ。

(**はくらく**[伯樂]（名）（支那秦國の善く馬を相せし人の名に出づ）㊀馬を相する人。㊁馬醫。

(**はくらく**[剝落]（名）はげおつること、はがれおつること。

(**はくらふ**[白蠟]（名）「びやくらふ」に同じ。

(**はくらん**[白藍]（名）【化】靑藍を「アルカリ」性還元劑にて處理して得る無色の溶液。

(**はくらん**[博覽]（名）㊀博く書を覽（ミ）ること。㊁博く物事をみること。——**くわい**[博覽會]（名）學術・技藝・農工商業其他人生百般の事に係る物を集めて衆人に縱覽せしむる會。

はくり（名）【植】菌の一種、山中に生ず、葉は叢生すれど短小なり、春の頃四五寸許の莖を抽（ヌ）き、莖頭に淡黄色の花を着く。

(**はくり**[薄利]（名）利益のうすきこと。

(**はくり**[剝離]（名）はがれはなるゝこと、又、はぎはなすこと。

(**ばくり**[幕吏]（名）幕府の官吏。

ばくり（名、副）㊀卄つきまるさまにいふ語。㊁口を開きて、食ひつくさまにいふ語。㊂手早く物をとるさまにいふ語。

〔**ぱくり**（名）店先の品物を手早くぬすむこと。又、其もの。「—書生」。

(**はくりうせき**[白榴石]（名）【鑛】白色の硅酸鑛物、正立方形の結晶をなす。

(**はくりやうたい**[柏梁體]（名）（漢の孝武帝が柏梁臺を作りしとき、群臣に七言一句づゝを作らしめ、これをつゞりて一篇の詩となしたるに濫觴す）每句押韻の漢詩の聯句。

(**はくりん**[白燐]（名）黄燐の別名。

はぐる[撥]（他、ら四）剝ぎ捲（マ）くる。はねまくる。

〔**はぐるる**[逸]（自、ら下二）つれの人を見失ふ。つれの人に紛れはなる。

はぐるま[齒車]（名）輪の周圍に齒をきざみたる車、機械に裝置して運轉の用をなさしむるもの。

(**ばくれう**[幕僚]（名）㊀陸海軍の司令官又は總督・都督等に直屬して、參謀事務に從事する將校。㊁其人の部下にして、其計策に參ずるものゝ稱。

(**ばくれつ**[爆裂]（名）爆發して破裂すること。——**だん**[爆裂彈]（名）爆裂藥を裝置したる彈丸。——**やく**[爆裂藥]（名）「ばくはつやく」（爆發藥）に同じ。

卄**はぐれる**（自）「はぐるる」の訛。

(**はくれん**[白蓮]（名）白き色の蓮花。

〔**ばくれん**[莫連]（名）婦人のすれっからしとなること。——**もの**[莫連者]（名）莫連なる婦人。

(**はくろ**[白露]（名）㊀しらつゆ。㊁二十四氣の一、陽曆九月七日頃にあたる。

(**ばくろ**[暴露]（名）惡事・陰謀などの現はるゝこと。

はぐろ[齒黑]（名）「はぐろめ」に同じ。

(**はくろく**[博陸]（名）（漢の霍光が博陸侯に封ぜられし故事に出づ）關白の異稱。

(**はくろく**[薄祿]（名）俸祿のすくなきこと。

はぐろめ[齒黑]（名）鐵を酒に投（タ）して酸化せしめたるもの、齒を黑く染むるに用ふ。はぐろ。おはぐろ。かね。（鐵漿）。

(**ばくろん**[駁論]（名）駁撃して議論すること。

(**はくわ**[葩華]（名）はな。

(**はくわ**[破瓜]（名）女子十六歲の稱。

(**はくわい**[破潰]（名）やぶれつひゆること。又、やぶりくづすこと。

(**はくわい**[破壞]（名）㊀こはすこと、やぶりそこなふこと。又、こはるゝこと、やぶれそこなはるゝこと。㊁非認。否定。——**せつ**[破壞說]（名）㊀他の計畫又は論旨若しくは組織等をうちこはす意見。㊁確實なる眞理又は吾想の標準等の存在を否定する見解。

(**はくわう**[波光]（名）なみのうつろふいろ。

(**はくゑん**[白猿]（名）白色の毛の猿。

(**はぐんせい**[破軍星]（名）北斗の第七星、劍の

狀をなす、陰陽家にては、其劍の端に當る方を萬事に利なしとて忌む。

はけ【刷毛】(名) ㊀漆・糊などを物に塗るに用ふる具、獸毛を束ね其端を揃へて切りたるもの。㊁半髮（ハンパツ）の前のさき。

はけ【疏通】(名) うれゆくこと、さばけゆくこと。

はげ【剝】(名) ㊀はがれ離れたる痕、「漆の—」。㊁髮のぬけ落ちたる痕。㊂山などに樹木のなきこと。㊃はげあたま。

ばけ【化】(名) ばくること。又、ばけたるさま。

はげ-あたま【禿頭】(名) 毛髮のぬけおちたる頭。又、其頭の人。

はげ-あと【禿痕】(名) 毛髮のぬけおちたる痕。

はげ-いとう【葉鷄頭】(名)【植】莧科に屬する草、葉は紅色・紫色又は黃色を帶びて其色麗し、觀賞用として栽培せらる。雁來紅。

はけ-かた【疏通方】(名) さばけゆくさま。うれゆくさま。

ばけ-かた【化方】(名) ばけたるさま。

はけ-くち【疏通口】(名) さばけゆくみち。うれゆくみち。

はげ・し（しく・しき・しけれ）【烈】(形、二) 勢するどし、勢きびし。勢あらし。勢はなはだし。(劇)。

〔**ばけ-ちやん**〕(名) はげ頭の人をのゝしりていふ語。(東京地方の方言)。

〔**ばけ-の-かは**〕【化皮】(名) 素性をつゝみかくしたる體裁。——**をあらはす** つゝみかくしたる素性をあらはす。

(**はげ-ふ**)【覇業】(名) 覇者の事業。

はげま・す（さしすせ）【勵】(他、さ四) ㊀勵むやうにす。いさます。ふるはす。すゝむ。㊁はげしくす。あらくす、「聲をはげまして」。

はげみ【勵】(名) はげむこと。——**あひ**【勵合】(名) はげみあふこと。——**あ・ふ**（はひふへ）【勵合】(自、は四) 互に我劣らじと勵む。

はけ-みち【疏通道】(名) はけゆくみちすぢ。

はげ・む（まみむめ）【勵】(自、ま四) ㊀氣力をふるひて從事す、頭を殺してつとむ、すゝみてなす。㊁勢づく。きほふ。

はげ・む（まみむめ）【勵】(他、ま四) 前條に同じ、「業を—」。

はけ-め【刷毛目】(名) 刷毛にて塗りたる痕。

ばけ-もの【化物】(名) 化けて怪しき姿をなすもの。へんげ。妖怪。——**ばなし**【化物談】(名) 化物の出づといふ怪談。——**やしき**【化物屋敷】(名) 化物の出づといふ家。

はげ-やま【禿山】(名) 樹木なき山。(兀山)。

〔**はける**〕【疏通】(自) 「はく」の訛。

〔**はげる**〕【剝】(自) 「はぐ」の訛。

〔**ばける**〕【化】(自) 「ばく」の訛。

(**は-けん**)【派遣】(名) 手分して送りつかはすこと。命じて出張せさすること、「公使を—す」。

(**は-けん**)【覇權】(名) はたがしらの權力。

(**は-げん**)【波源】(名)【理】波動の起點。

(**ば-けん-しよ**)【馬見所】(名) 馬場の傍にありて馬術を觀(ミ)る所。

はこ【箱】(名) ㊀物をさめ納るゝ器。多くは木材にてつくる。(匣、筺、筥)。㊁「はこや」の略言。

はご【擌】(名) 細き割竹又は木枝などに黐(モチ)をつけたるもの、囮(オトリ)の側に設けおき、寄り來る鳥を其黐につけて捕ふるもの。

は-ご【羽子】(名) 「つくばね」(二)に同じ。(燕子)。——**いた**【羽子板】(名) 羽子をつくに用ふる長方形にして柄ある板、表に押繪などあり。

はこ-いり【箱入】(名) ㊀箱にをさまりてあること。又、其もの。㊁多く外へ出さず大事にしておくこと、又、其もの。——**むすめ**【箱入娘】(名) いと大切にしてそだつる娘。

(**は-ごく**)【破獄】(名) 囚人が獄をやぶりてぬけ出づること。ろうやぶり。

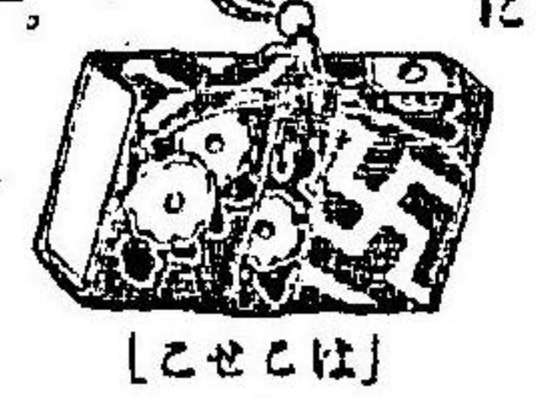
はごく・む（まみむめ）【孚】(他、ま四) 「はぐくむ」に同じ。

はこ-ざいく【箱細工】(名) 箱をつくること。

(**は-こ-し**)【破故紙】(名)【植】荳科に屬する草、高さ三四尺、葉は胡麻に似る、夏秋の頃、淡紫色の花開く。オランダびゆ。(補骨脂)。

は-ごし【葉越】(名) 葉の間より透(ス)きて見ゆること、「—の月」。

はこ-せこ【函迫】(名) 婦人の懷に挾み持つ一種の紙入、德川時代に奧女中の多く使用したるもの。



「はこせこ」

は-ごたへ【齒應】(名) 嚙(カ)みて齒にこたへあること、「—する餅」。

はこ-だん【箱段】(名) はこばしご。

はこ-ヂヤウチン【箱提燈】(名) 上に蓋ある大形の提燈、蓋に開閉し得る孔ありて、蠟燭の出入などをなし、蓋の中に全體の疊み込まるゝもの。

†**はこ-どり**【箱鳥】(名)【動】「かほどり」に同じ。

はこ-には【箱庭】(名) 底淺くして廣き箱の中に、庭園又は山水の模樣をつくりたるもの。

はこね-うつぎ【箱根空木】(名)【植】忍冬科に屬する木、葉は殆ど平滑なり、花は紅紫色又は白色を呈し初夏に開く、花冠は筒狀をなし上部膨大す、多く相模國箱根山に產し、觀賞用として栽培せらる。(錦帶花)。

はこね-ぐさ【箱根草】(名)【植】水龍骨科に屬する草、石上に生ず、高さ六七寸、葉は銀杏に似て小形なり、觀賞用として栽培せられ、葉柄は種々の用に供せらる、多く相模國箱根山に產す。(石長生)。

はこね-さんせううを【箱根山椒魚】(名)【動】山椒魚の一種、(山椒魚の條を見よ)。

はこね-しちたう【箱根七湯】(名) 相模國箱根山中の七個所の溫泉、即ち湯本・塔の澤・宮の下・堂が島・木賀・底倉・蘆の湯をいふ。

はご-の-き【羽子木】(名)【植】「つくばね」(一)に同じ。

はこ-ばしご【箱梯子】(名) 橫に板をうちつけて引出しを設けたる梯子。

はこ-ばしや【箱馬車】(名) 乘る所の箱の狀をなしたる馬車。

はこび【運】(名) ㊀すゝみ、はかどり。(步)。㊁はこぶこと。もちおくり。おくりとゞけ。

はこ-ひバチ【箱火鉢】(名) 箱の形につくりたる火鉢。

はこ・ぶ（はびぶべ）【運】(他、は四) ㊀物を持ちて送る。物を載せて送る。㊁おくりとゞく。おくりうつす。「足を—」。

はこ・ぶ（はびぶべ）【運】(自、は四) すゝむ。はかどる。

はこべ【蘩蔞】(名)【植】石竹科に屬する草、路傍などに生ず、葉は心臟形又は橢圓形をなし、花は白色にして初夏の頃開く、鳥餌又は食用に供せらる。はくべら。(鵝腸草)。——**じほ**【蘩蔞鹽】(名) はこべを黑燒として鹽に混(マ)ぜたるもの、齒を磨くに用ふ。

はこべら【蘩蔞】(名)【植】「はこべ」に同じ。

はこ-まくら【箱枕】(名) 底の箱になりたる枕。

はこ-まはし【箱廻】(名) 「はこや」(二)に同じ。

はこ-や【箱屋】(名) ㊀箱を作る人。又、箱を賣る家。㊁藝妓に從ひて、其三味線などを持ち運ぶ男、もと三絃を箱に入れて持ちしが故に名づく。

はこ-やなぎ【箱柳】(名)【植】楊柳科に屬する木、葉は圓形にして尖り鋸齒を有す、花はかはやなぎに似て、春の初、葉の未だ生ぜざるときに開く、材は柳行李・總楊子・「マッチ」などの料に用ひらる。(白楊)。

†**はこや-の-やま**【藐姑射山】(名) ㊀(莊子に出づ)神人の居るといふ山。㊁仙洞の敬稱。

は-ごろも【羽衣】(名) 鳥羽にてつくりたる衣、天女の着るものといふ。

(**は-こん**)【波痕】(名) なみのあと。

(**ば-さ**)【婆娑】(名、副) ㊀舞ふさまにいふ語。㊁袖の翻(ヒルガヘ)るさまにいふ語。㊂めぐりありくさまにいふ語。㊃亂れうごくさまにいふ語。㊄曲折多きさまにいふ語、「涯餘—」。

(**は-さい**)【破碎】(名) ㊀やぶりくだくこと。(破摧)。㊁やぶれくだくること。

は-ざくら【葉櫻】(名) 花落ちて後嫩葉の出でたるときの櫻。

は-ざま【狹間】(名) ㊀あはひ。あひだ。(迫間)。㊁たにあひ。谿間。(硲)。㊂城壘の壁に設けて、弓矢又は彈丸を射出する孔。

はさま・る（らりるれ）【挾】(自、ら四) 物と物との間に入る。人と人との間に立つ。(介)。

はさみ【鋏】(名) 物を挾み切る具、一雙の刃の相向ひて物を挾むやうになれるもの。(剪刀、鋏刀)。

はさみ【螯】(名) 蟹・蝦などの左右の脚の肥大にして鋏の如きさまをなすもの。

はさみ-いた【挾板】(名) 間にものをはさみ入るゝ板。

はさみ-い・る（るれれよ）【挾入】(他、ら下二) ㊀物と物との間に入れこむ。さしいる。(插入)。㊁箸などにて挾みて中に入る。

〔**はさみ-いれる**〕(他) 「はさみいる」の訛。

はさみ-うち【挾擊】(名) 敵を中に挾みて、前後又は左右より攻め擊つこと。

はさみ-う・つ（たちつて）【挾擊】(他、た四) はさみうちにす。

はさみ-き・る（らりるれ）【剪切】(他、ら四) 鋏に挾みて切り斷つ。つむ。

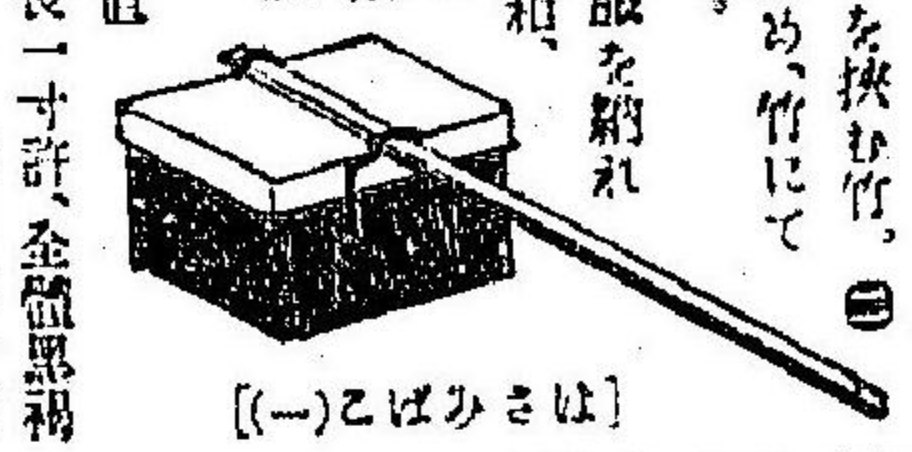
はさみ-こ・む（まみむめ）【挾込】(他、ま四) 「はさみいる」に同じ。

はさみ-さかな【挾肴】(名) 箸にて挾み取りて配る肴。

はさみ-しやうぎ【挾將棋】(名) 將棋の差方、將棋盤の端に雙方とも橫一列に九つの駒を並べ、これをかはるがはる縱又は橫に行(ヤ)り、敵の駒を前後又は左右より挾みて取るもの、早く敵の駒を取り盡くしたる方を勝とす。

はさみ-だけ【挾竹】(名) ㊀ものを挾む竹。㊁†古昔、二枚の板に衣袴などを締め、竹にて挾み、從に擔(ニナ)はせて行きしもの。

はさみ-ばこ【挾箱】(名) ㊀衣服を納れ棒を通して從に擔(ニナ)はせ行きし箱、挾竹の進製なり。㊁「はさみばこかぜ」の略言。——**かぜ**【挾箱風】(名) 耳・頰の下なる腺の腫るゝ病氣。(蝦蟇瘟)。



[はさみばこ(一)]

はさみ-むし【挾蟲】(名)【動】直翅類中蠷螋科に屬する昆蟲、體長一寸許、全體黑褐色にして黃色の脚を有す、翅なくして觸角二十節あり、尾端は岐をなし小蟲などを挾(ハサ)む。ありばさみ。(蠷螋)。

はさ・む（まみむめ）【挾】(他、ま四) 物と物との間に置く。物と物との間に入る。(插)。

はさ・む（まみむめ）【剪】(他、ま四) はさみにて切る。

ばさら(名) ㊀だて。風流。㊁しまりなきこと。みだるゝこと。——**がみ**(名) みだれがみ。

（は-さん［破産］（名）㊀家産を失ふこと。㊁家資分産。身代限。㊂［法］商人が自己の財産にて總ての負債を完濟すること能はずして、支拂を停止したるとき、本人又は債權者の申立により裁判所が決定を以てなしたる宣告に基き、其財産を各債權者に正當に配當するを、其手續の繼續中に破産者は自己の財産を占有管理及處分する權利を失ふ。　——くわんざいにん［破産管財人］（名）［法］破産裁判所より選定して、破産主任官の指揮監督の下に破産財團の管理換價・配當等を掌らしむるもの。　——ざいだん［破産財團］（名）［法］破産の手續の終局に至るまで破産者の所有に屬し且つ強制執行の目的たることを得る財團。　——さいばんしよ［破産裁判所］（名）［法］破産を管轄する裁判所、即ち破産者の營業所若しくは住所を管轄する地方裁判所。　——しや［破産者］（名）［法］破産の宣告を受けたる者。　——しゆにんくわん［破産主任官］（名）［法］破産裁判所の命じて其破産の事件を指揮監督せしむる判事。

は-さん［破璧］（名）瑕を出したる寶璧の珠をくづすこと。

はし［端］（名）㊀こぐち。はじめ。「爭ひの—」。㊁へり。ふち。㊂すゑ。をはり。㊃ゆかり。つて。㊄あひだ。はした。　——をきる　はしをからぐ。又、はしをはぶく。

はし［橋］（名）岸より岸へ又は家より家へ若しくは物より物へ架(カ)けわたす往來の道。（梁）。　——をわたす　はしをかく。又、なかだちす。

‡はし［階］（名）きざはし。きだはし。あがりだん。

はし［嘴］（名）くちばし。（喙、觜）。

はし［箸］（名）物を挾み取り又は食事などするに用ふる二本の小さき棒。（梜、匙筯）。　——をくだす［下箸］配膳の肴などを食ふにいふ。　——をつける　前條に同じ。　——をとる　前條に同じ。

‡はじ［土師］（名）（はにしの略）土細工をする人。

‡はし-し（しくしき しけれ）［愛］（形、二）いとほし。いつくし。「—き妻」。

はじ［黄櫨］（名）㊀［植］漆樹科に屬する木、葉は平滑にして光澤あり緣邊に粗なる鈌刻を有し、秋に至れば紅葉す、果實は豆大楕圓形にして之れより蠟を製す、木材もまた種々の用に供せらる。やまうるし。（櫨）。㊁かさねの色目。表の黄にして裏の萠黄なるもの。

〜はじ［端］（名）「はし」の訛。

‡ばし（接尾）或語に添へて、其事の限りを表はす語。「怪我—するな」。

はし-いた［橋板］（名）橋の桁(ケタ)の上に敷く板。

‡はし-うら［橋占］（名）辻占の一種、橋の邊に立ち往來の人の語を聞きて、或事の吉凶をトひしこと。

‡はしか［芒］（名）麥などの芒(ノギ)。

はしか［痲疹］（名）傳染性の皮膚病、小兒に多し、皮膚に赤斑を生じ、喉のいらちて渴するもの、一回これに罹(カカ)るときは再び罹ること稀なり。あかゞさ。あかもがさ。

はし-がかり［橋掛］（名）能の樂屋より舞臺へ通ふ路、欄干ありて橋の如くに造りたるもの。

はし-がき［端書］（名）㊀なほ〳〵がき。おつてがき。㊁書册の端に、大要又は評論若しくは關係ある事柄などを記する文。（序、敍）。

‡はし-がくし［階隱］（名）階の前に二本の柱を立て、屋根を作りかけたる所、乘輿を寄するためのもの。

‡はじかみ［生薑］（名）［植］「しやうが」の古稱。

‡はじかみ［椒］（名）［植］山椒の古稱。　——いを［椒魚］（名）［動］「さんせううを」の一名。

〜はし-から（副）次第に。漸次に。

〜はじ-から（副）前條に同じ。

はじき［彈］（名）㊀はじくこと。㊁彈く力ある機。（彈機）。㊂「いしはじき」の略言。　——がね［彈鐵］（名）ものをはじくために裝置したる鐵。

‡はしき-よし［愛哉］（「よ」と「し」とは助辭）愛(ハ)しと思ふ。いとほしく思ふ。

はじ-く（かきくくけけ）［彈］（他、か四）㊀はね返へす。はね飛ばす。㊁はねかへす力にて物を打つ。㊂受附けず。「油が水を—」。㊃おし返へす。

はじ-く（けけくくるくれけよ）（自、か下二）さけ開く。ゑみわる。はぜわる。罅裂す。

はし-ぐひ（イーグ）［橋杙］（名）橋桁を支ふる杙。（橋脚）。

〜はし-くれ［端］（名）はし。すゑ。

はしけ［艀］（名）「はしけぶね」の略言。

はし-けいせい［橋傾城］（名）（橋にたゝずむ傾城の義）つじぎみ。ぢごく。

はし-げた［橋桁］（名）架(カ)けわたして、橋板を支ふる材。

はしけ-ぶね［艀船］（名）陸と碇泊中の大船との間に貨物又は旅客などを運ぶための小舟。傳馬船。

はじけ-まめ（名）そら豆を煎(イ)りて、はぜしめたるもの。

‡はしけ-やし［愛哉］はしきよし。

〜はし-ける（けけけるけれけよ）［艀］（他、か下二）艀にて貨物又は旅客などを運ぶ。

〜はじける（自）「はじく」の訛。

はし-ご［梯子］（名）㊀高處に寄せかけて登る具、二雙の材に、幾條の横木を設けて足掛としたるもの。㊁だんばしご。きざはし。きだはし。（階）。㊂はしござけ。はしごのみ。　——がた［梯子形］（名）ていけいに同じ。　——ざけ［梯子酒］（名）二個所以上家を替(カ)へてつゞけに酒を飲むこと。　——だて［梯子立］（名）梯子をものに立てかくること。　——だん［梯子段］（名）だんばしご。又、其段。　——のみ［梯子飲］（名）「はしござけ」に同じ。　——のり［梯子乘］（名）直に立てたる梯子の上にのぼりて、さま〴〵の藝をなすこと。　——もち［梯子持］（名）火事に梯子を持ち行く消防夫。

はしこ-し（くしき けれ）［敏捷］（形、二）擧動はやし。才智するどし。すゝどし。すばやし。敏捷なり。

‡はし-ことば［端辭］（名）はしがき

‡はし-じし［齒肉］（名）はぐき。（齗）。

はし-じま［端島］（名）はしにある島

はし-ぜん［橋錢］（名）はしちん。

はし-た［端］（名）㊀どちらともつかざること、どちらともきまらざること。はんぱ。半途。㊁數の揃はぬこと。數の足らぬこと。㊂數の餘れること。數の多きこと。㊃「はしたもの」の略言。　——いろ［端色］（名）㊀かさねの色目。表も裏も濃きうすいろのもの。㊁經緯共に通紫色の絲にて織りたる織物の色。

はし-たか［鷂］（名）（敏鷹の義）［動］鷹の一種、普通のものより小形なり、腹に赤白又は黄黑の斑あり、鷹狩に用ふ。

はした-がね［端金］（名）數に足らぬ金錢。又、些少の金。

はした-ぜに［端錢］（名）前條に同じ。

はし-たて［箸立］（名）箸を立てゝおく器。

‡はし-だて［梯立］（名）梯子を立つること。（梱梯）。

‡はしたな-し（くしき けれ）（形、二）㊀どちらにもつかずしてあり、どちらともきまらずにあり。㊁取りつく所なし。きまり惡し。㊂淺まし。いやし。㊃なさけなし。つらし。

‡はしたな-む（めめむむるむれめよ）（他、ま下二）取りつく所無からしむ。

はした-め［中間女］（名）召しつかひの女。げす女。みづしめ。下婢。

はした-もの［中間者］（名）前條に同じ。

はした-もの［中間物］（名）數に足らぬもの。又、數あまれるもの。

‡はした-わらは（ワラハ）［中間童］（名）召使の子供。

はし-ぢか［端近］（名）家の端に近き所。あがりばな。

はし-ぢか-し（くしき けれ）［端近］（形、一）はしぢかにてあり。

はし-ちん［橋賃］（名）橋をわたるに支拂ふ賃。

‡はし-つ-かた［端方］（名）はしのかた。

‡はし-づくり［端作］（名）はしがき。

はし-づくり［橋造］（名）はしをつくる人。

‡はし-づつ［箸筒］（名）箸を入れおくつゝ。

‡はし-づま［愛妻］（名）はしきつま。愛する妻。かはゆき妻。（愛婦）。

はし-づめ［橋詰］（名）橋のたもと。

（ばじ-とうふう［馬耳東風］（名）（馬の耳に東風の吹く義）人の意見又は批評などを少しも感ぜざることにいふ語。

はし-どの［橋殿］（名）谷又は路などの上に橋の如くかけわたして造りたる家。

は-しとみ［半蔀］（名）半分おろしたる蔀とみ。

はし-なく［無端］（副）㊀はからず。ゆくりなく。㊁間もなく。やがて。

はし-ぬひ（イヌ）［端縫］（名）「はぬひ」に同じ。

‡はし-の-こ［梯子］（名）きざはし。きだはし。

はし-のり［端乘］（名）㊀もの、はしに乘ること。㊁かりそめに乘ること。

はし-ばこ［箸箱］（名）箸を入れおく細長き匣。

はし-ばし［端端］（名）㊀此處彼處のはし。あちこちのはし。㊁‡はしたにてあるさまにいふ語。

はし-ばみ［榛］（名）［植］樺木科に屬する木、葉は圓形潤尖にして皺(シワ)多く緣邊に鋸齒あり、花落ちて後生ず、花は黄色にして春開き、果實は栗に似る、總苞は葉狀にして果實の下部を被包す。

はし-ばみ［端食］（名）板を反(ソ)らせぬために、版木などの兩端の切口に細き材を填(ハ)むること、又、其填めたる材。

はし-ひめ［橋姫］（名）橋を守る女神、特に、山城國宇治橋の女神。

はしぶと-がらす［嘴太鴉］（名）［動］からすの一種、嘴は普通のものよりも太し、山に棲む。

はし-ぶね［端船］（名）小船。（艇）。

は-しほ（オシ）［齒鹽］（名）齒の裏面又は側面などに、鹽分の凝着したるもの。

はしぼそ-がらす［嘴細鴉］（名）［動］嘴太鴉に對して、普通のからすの稱。

はじまり［始、初］（名）はじめ。おこり。もと。發端。

はじま-る（らりるるれれ）［始］（自、ら四）あらたにおこる。あらたにひらく。

はじ-む（めめむむるむれめよ）［始］（他、ま下二）あらたにおこす。あらたにひらく。

はじめ［始］（名）㊀はじむること。ではじめ。㊁おこり。はじまり。㊂まへ。さき。（初）。

はじめ［初］（副）まへかた。まへ。

はじめ-て［始］（副）㊀あらたに。あたらしく。㊁はじめとして。發端として。（初）。

はじめ-の-とし［初年］（名）㊀其事のはじめの年。㊁年號の改まりたるはじめの年。

はじめる(他)「はじむ」の訛。

はじめ-をはり[始終](名) 物事の顛末。あと「さき。

はし-もと[橋本](名) 橋のたもと。

はじ-もみぢ[黄櫨紅葉](名) ㊀黄櫨の葉の秋に至りて赤くなりたるもの。㊁かさねの色目、表は黒ばみたる蘇芳にして裏の黄色なるもの。

はし-もり[橋守](名) 橋を守る人。橋の番人。

(は-しや[覇者](名) ㊀諸侯のはたがしら。㊁覇道を以て天下を治むるもの。

(は-しや[跛者](名) びっこ、あしなへ。

(ば-しや[馬車](名) 人を乗せ又は貨物を積みて馬に牽(ひ)かする車。うまぐるま。——うま[馬車馬](名) ㊀馬車をひき行く馬。㊁脇目もふらずに突進するもの。

(ば-しやう[馬上](名) ㊀馬背の上。㊁馬に乗ること。㊂馬にまたがりて戰場に往來すること。「—得之」。——ぐつ[馬上沓](名) 古昔、馬にのるに用ひし沓、革にてつくり、爪先に十二の器を設けて漆塗にしたるもの。——ヂヤウチン[馬上提燈](名) 馬上に携へもつ提燈、正圓にして長柄あるもの。うまのり提燈。

(は-しやう-ふう[破傷風](名) 傷口より黴菌の侵入するによりて發する病、烈しき痙攣を起こすもの。

はしや・ぐ(自、か四) ㊀かわく。ひる。㊁輕躁に戯る。

(ば-しやく[馬借](名) ㊀賃を取りて馬を借すこと。㊁うまかた。

(は-じや-けんしやう[破邪顯正](名) 邪道を說きやぶりて、正理をあらはし出すこと。

(は-しゆつ[派出](名) ㊀手分けして出張せさすること、(派遣)。㊁派出所の略言。

(ば-じゆつ[馬術](名) 馬に乗る術、うまのりのわざ。——し[馬術師](名) 馬術に長じたる人。

(は-しゆつ-しよ[派出所](名) ㊀部員を派出してある所。㊁巡査派出所の俗稱。

十はじ-ゆみ[波士弓](名) 黄櫨の材にて造りたる弓。

ハジユン[波旬](名) (梵語、惡と譯す)極惡なる者、又、惡魔、「天魔—」。

ば-しよ[場所](名) ㊀ところ。おき處。㊁ゐどころ。ばせき。——いり[場所入](名) 相撲取が相撲の場所に入ること。——がら[場所柄](名) 場所のありさま。場所のやうす。

(はし-よ・る[端折](他、ら四) (はしをるの約言) ㊀裾などの端を折りて帯に挾む、「尻を—」。㊁省略す。はぶく。

はしら[柱](名) ㊀土臺の上に直立して棟梁を受け屋根を支ふる材、「眞木—」。㊁すべて、物を支へ持つ材の稱。㊂たよりとなる唯一の人、最も信頼する人。㊃「かひのはしら」の略言。——かくし[柱隱](名) 柱の上をおほひ飾るために掛くるもの、板又は竹若しくは陶器などにてつくり、書畫などを描(ゑが)きたるもの。はしらかけ。(柱聯)。——がくれ[柱隱](名) 柱のかげに入ること。——かけ[柱掛](名) 「はしらかくし」に同じ。——はしら[柱](接尾) 神佛又は高貴の人を數ふるにいふ敬語、「二—の神」「三—の皇子」。

はしらか・す[走](他、さ四) はしらしむ。

はしら-ごよみ[柱暦](名) 柱などにかけおきて見るに便にせる略暦。

はしら-たいまつ[柱炬火](名) 佛教の諸宗寺の釋迦堂の前にて夜中行ふ儀式、大いなる炬火六十基を設け、釋迦の罪をとなへ百をつけて踊るもの。

はしら-だて[柱建](名) 家屋宮殿の建築にて、まづ柱を建て、祝賀の儀式を行ふこと。

はしら-どけい[柱時計](名) 柱又は壁などに懸けおく時計。かけどけい。

十はしら-ぬき[柱貫](名) 柱の上部を貫く横木、(欄額)。

はしら-ひき[柱引](名) 帆柱を立つるに用ふる綱。

はじ-らふ[黄櫨蠟](名) 黄櫨の果實より採取したる蠟。(櫨蠟)。

はしら-よせ[柱寄](名) 「はしらぬき」に同じ。

はしり[走](名) ㊀はしること。㊁臺所のながし。㊂魚鳥又は菜蔬などの嶄新なるもの。はつ、「鰹の—」。——あそび[走遊](名) かけまはりて遊ぶこと。十——いで[走出](名) かどぐち、門口。——うま[走馬](名) ㊀はしりゆく馬。㊁それいば。㊃迅速なること。——がき[走書](名) 筆を走らせ文字をつゞけていそぎ書くこと。はやがき、(快揮)。十——が・く[走書](他、か四) はしりがきにす。——がさ[走笠](名) 昔時、走衆のかぶりたる笠。——かさな・る[走重](自、ら四) 多くの人々はしり来る。——くら[走競](名) 「はしりくらべ」に同じ。——くらべ[走競](名) ㊀共に走りて速を競ふこと。かけっくら。㊁きそひあらそふこと、競爭。——とくら[走競](名) 「はしりくらべ」に同じ。——しもべ[走下部](名) はせまはりに使はるゝ下部。——しゆう[走衆](名) 將軍家親戚の道筋を警固せし徒士。——ずみ[走炭](名) はねずみ。——ぢ[走寺](名) 寺の一種、[illegible] ——づかひ[走使](名) [illegible]

又、北人。——のしゆう[走衆](名) 「はしりしゆう」に同じ。——び[走火](名) はねび。——ぶね[走船](名) はしりゆく船。十——ゆ[走湯](名) いでゆ、溫泉。——わらは[走童](名) 齋宮の御車などに從ひて走り行く女童、走婦。

パジリ(名) (ラテン語 Ungentum Basilicum) 吸出の膏薬、猪脂と松脂とにて製したるもの。——かう(名) 前條に同じ。

(ばじり-しやう(名) 才智鋭くして、物事をてきぱき處理すること。

はし・る[走](自、ら四) ㊀疾く行く、驅(は)せ行く、かく。(奔、趨、俳、驅)。㊁出奔す、逃亡す、にぐ。㊂敗れて落ち行く、負けて退き去る。㊃疾く流る。ながる。㊄飛び散る、ほとばしる、「血—」。㊅あふれ出づ、漏(も)れ出づ。㊆そる、すべる。㊇自由にめぐる、圓滑に動く、「筆—」。㊈はぬ、とぶ。

は-しろ[端城](名) でじろ。

はし-わたし[橋渡](名) ㊀なかだち、とりもち。くちひき、(媒介)。㊁暫時の代理。

はし-ゐ[端居](名) 家の端近に居ること。

はし-を・る[端折](他、ら四) 「はしよる」に同じ。

(ば-しん[婆心](名) 「らうばしん」(老婆心)に同じ。

はす[鰷](名) 【動】硬鰭類中にしん科に屬する魚、背部蒼色にして腹部は銀白色なり、體長一尺許に達す、我國西南湖に多し、遊泳魚にして常に群遊す。

はす[蓮](名) 【植】「はちす」の略言。

はす[斜](名) なゝめ、すぢかひ、はすかけ。なぞへ。

は・す[馳](自、さ下二) 走る。かく。

は・す[馳](他、さ下二) はしらす、「馬を—」。

は・す[破](他、さ變) 論說をうちやぶる。

は・す[派](他、さ變) 出張せさす、おくりつかはす、「巡査を—」。

はず[筈](名) ㊀箭の頭の弦(つる)を受くる所、やはず。㊁弓の端の弦(つる)をかくる所、ゆはず。㊂然るべきこと。すぢ、わけ。

はす-いけ[蓮池](名) 蓮の生じたる池、れんち。

はす-いも[蓮芋](名) 【植】さといもの一種、莖は孔ありてさといもより小さく、塊根もまたさといもより小なれど味美なり。くりいも。(白芋)。

はす-う[端數](名) はしたの數。

はす-かひ[斜交](名) うちちがひ、なゝめ、すぢかひ。

はず-さし[筈刺](名) 矢筈を刳す小刀、はんざし。

はす-だ[蓮田](名) はちすを植うる田。

はす-ぢ[蓮痔](名) あなぢ。

はす-ちや[蓮茶](名) 煮えたちたる甌茶の汁を蓮の花に注(つ)ぎ、其香をうつして呑むもの。

はす-ね[蓮根](名) れんこん。

はす-の-いひ[蓮飯](名) はすめし。

はす-の-うてな[蓮臺](名) 「はちすのうてな」に同じ。

はす-の-はがさ[蓮葉蓋](名) ㊀蓮の葉のさまをなしたる蓋。㊁小兒などの戯れに蓮の葉を採りて笠に被(き)るもの。

はす-の-は-がひ[蓮葉貝](名) 【動】「たこのまくら」に同じ。

はす-の-ひ[蓮飯](名) 蓮の葉に包みたる強飯、生靈祭に供ふるもの。

はす-は[蓮葉](名) ㊀蓮の葉。㊁婦人の心浮き浮きして貞操なきこと、うはき、浮りおる、(輕佻)。㊂旅店の下女、(京阪地方の方言)。——むすめ[蓮葉娘](名) はすはなる處女(むすめ)。——め[蓮葉女](名) ㊀前條に同じ。㊁うかれめ、遊女。——もの[蓮葉者](名) はすはなる婦人。——をんな[蓮葉女](名) 前條に同じ。

はずみ[機勢](名) ㊀はずむこと、はねかへること、(反跳)。㊁好機會、よき折、「—に乘る」。㊂勢づきて止まらぬこと。——ぐるま[機勢車](名) 【理】蒸氣機關に附屬する大いなる車、質量大いなるため慣性の大なるが故に、運轉速度を一定ならしむるに用ふ。

はず・む[勢](自、ま四) ㊀反動力にてはね返る、はねかへる。㊁勢に乘る、「氣が—」。㊂勢強まる。

はす-めし[蓮飯](名) 蓮の葉に飯を包みて蒸したるもの。又、蓮の蕊を蒸して刻み飯に雜ぜしもの。

(ば-すゐぼく[馬酔木](名) 【植】「あせみ」に同じ。

は-ずゑ[葉末](名) 葉のさき。

(ば-すゑ[場末](名) 都の町はづれ、都の鄙(ひな)に近き部分。

はず-を[筈緒](名) 帆柱の上方につくる綱。

十は-せ[玉莖](名) 陰莖。

はせ[稼](名) 稻束を懸(か)けて乾(ほ)せるもの、稻架子の類とす。

はぜ[沙魚](名) 【動】硬鰭類中はぜ科に屬する魚、體は長くして肉厚く、頭部扁く、口は大なり、背鰭は短く、尾鰭は圓し、背部は褐色にして淡黑色の斑點あり、河海の間に産す、我國にては東海より西南海に多し、(鰕虎魚)。

は-ぜ[黄櫨](名) 「はじ」の轉。

(は-せい[派生](名) 本源よりわかれ生ずること。

(ば-せい[馬政](名) 馬匹に關する政務。——き

よく［馬政局］（名）内閣總理大臣の管理に屬し、馬匹の改良・繁殖其他馬政に關する一切の事務を掌る所。

（ばせう）［芭蕉］（名）【植】芭蕉科に屬する植物、多く暖國に產す、莖は直立して無枝なり、葉は長大にして長楕圓形をなし、花は黄白色にして蓮花の苞に似る、蕚は三裂乃至五裂し雄蕊は五個あり、果實は綠色五稜にして食すべし、觀賞用として栽培せられ、纖維は種々の用に供せらる。はせを。――おり［芭蕉織］（名）次條に同じ。――ふ［芭蕉布］（名）芭蕉の纖維にて織りたる布、沖繩縣の名產。（蕉紗）

はせうち［馳擊］（名）互に馬に乘りて擊劍をなすこと。

はせうるし［黄櫨漆］（名）【植】果實より蠟の採取せらるゝ、黄櫨。

はせぐち［爆口］（名）はじけたる口、さけ開きたる口。

はせこ・ゆ（え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ）［馳越］（自、や下二）はせてこえすぐ。

〔はせこえる（自）「はせこゆ」の訛。

はせだま［爆丸］（名）破裂する彈丸。

〔はせばな［粽花］（名）【植】「こごめざくら」の一名。（京阪地方の方言）。

はせひき［馳引］（名）馬を馳せ又、弓を引くこと。武術の鍛錬。

はせまは・る（ら、り、る、る、れ、れ）［馳廻］（自、ら四）馬に乘りて方々をかけありく。

はせむか・ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）［馳向］（自、は四）かけてむかふ。いそぎてむかふ。かけつく。

〔はせる［馳］（他）「はす」の訛。

は・せる［爆］（自、さ下一）裂け開く、「肉が―」。

＋は・せを［芭蕉］（名）【植】「ばせう」に同じ。――ば［芭蕉葉］（名）【植】前條に同じ。

（はせん）［破船］（名）難破したる船。

（はせん）［波線］（名）波の如くうねりたる線。

はせん［端錢］（名）はしたぜに。

（ばせん）［馬氈］（名）鞍の上におほひ敷く虎・豹・熊などの皮。くらおほひ。（鞍褥）。

＋はそ［䑕］（名）【動】「はす」の古稱。

（はそく）［頗側］（名）かたよること、かたむくこと。

（ばそく）［馬足］（名）うまのあし。

（ばぞく）［馬賊］（名）支那の滿洲地方に橫行する群盜、處々に散在し、各主領ありて多く馬匹を畜（ハク）ふ。

はそで［羽袖］（名）羽を袖にたとへていふ語。

（はぞり）［端反］（名）端の反りたること。「―の陣笠」。

（はそん）［破損］（名）やぶれこはるゝこと。

はた［畠、畑］（名）蔬菜又は穀類を植（ウ）うる耕地。はたけ。陸田。

はた［機］（名）㊀布帛を織る器械、經（タテ）絲をわたしかけ緯（ヌキ）絲を通はして織る、種類多し。㊁＋機にかけて織りたるもの、織物。「殘―」（絁、服）。

はた［旗］（名）㊀布にて製し、其一端を竿に繫（カ）け、空中に飜（ヒルガヘ）して物事の標表となすもの、總稱。（幡、旌）。㊁「いかのぼり」に同じ。（九州地方の方言）。

はた［鰭］（名）㊀＋魚のひれ。㊁【動】硬鱗類中はた科に屬する魚、體は小なる楕形の鱗を以て蔽（オホ）はれ、頭部の前額骨の左右に突起あり。

はた［端］（名）へり、ほとり。はし。「―より見る」「池の―」。

はた［將］（副）（今「はまた」の轉）また、やはり。「侘びぬれば、今―同じ難波なる」。

はた［將］（接）上を承（ウ）けて下を起こす語、さはなくて、あるひは、

はた［二十］（數）十の倍、即ち、にじふ。

はだ［肌、膚］（名）㊀かは、表皮。「紙の―」「樹の―」。㊁はだへ、皮膚。㊂きめ、膚理。――をけがす　婦人の節操を破るにいふ。――をぬぐ　はだぬぎになる。又、其事に力を入るゝ。

バタ（名）次條に同じ。

バター［Butter］（名）牛乳を採りて製したる脂肪性のもの、「パン」などに塗りて食ふ。（牛酪）。――くさい［―臭］（名）西洋風にかぶれたるものもむさあるを。

はたあげ［旗揚］（名）兵をあぐること、又、事をおこすこと。

はたあし［旗脚］（名）旗の端末の垂れて打ちなびくところ。（旒）。

〔ばだい［齒代］（名）車の損料。

（はだい）［破題］（名）漢文などにて、冒頭より直に其題目に說き及ぶこと。

（ばだい）［馬代］（名）㊀昔時、馬を贈る代りとして贈りし金、黄金一片を大馬代といひ南鐐一片を小馬代といひたり。㊁借馬の賃錢。

＋ばだい［場代］（名）場席の代金。「芝居の―」。

はたいた［鰭板］（名）家の内部を外より見えぬやうにおほひかくす板。

はたいと［機絲］（名）はたを織るに用ふる絲。

はたいろ［旗色］（名）㊀戰場にて、旗の飜（ヒル）る樣子、よりて軍隊の氣勢如何をトすべしとなすもの。㊁轉じて、敵に對する氣勢の樣子。

（はたう）［坡塘］（名）つゝみ、どて。

（はたう）［破蕩］（名）やぶれてあとかたのなくなりしこと。

（はたう）［波盪］（名）なみ。

（はたう）［波濤］（名）波の如くみだるゝこと。

（はたう）［覇道］（名）術數及武力を以て治國の

要となすこと。覇者のみち。

（ばたう）［罵倒］（名）手痛くのゝしること、ひどくけなすこと。

はだおび［膚帶］（名）はだのおび。

はたおり［機織］（名）㊀機にて布帛を織ること。又、其工人。㊁【動】「はたおりむし」の略言。――むし［機織蟲］（名）【動】「きりぎりす」の一名。――め［機織女］（名）㊀【動】前條に同じ。㊁機を織る女。（紅女）。

＋はたおるむし［機織蟲］（名）【動】「はたおりむし」に同じ。

はだか［裸］（名）（肌赤の義）㊀衣服を脫（ヌ）ぎ全身を露出してあること。あかはだ。裸體。（赤身）。㊁おほひもの、なきこと、「―城」。㊂持ちもの、なきこと。㊃嫁入するに、何等の支度もなきこと。――いっくわん［裸一貫］（名）自己の身體の外何物をも所持せざること。――うま［裸馬］（名）鞍をおかざる馬。――ぐら［裸鞍］（名）たゞ鞍のみをおきて、たづななどをつけざる馬。＋――つるはぎ［裸鶴脛］（名）衣の裾（スソ）を高くかゝげて、多く脛をあらはすこと。――にんぎやう［裸人形］（名）衣服を被（キ）せてなき人形。――ひやくくわん［裸百貫］（名）（身體の外に僅か百貫のみある義）赤貧なること。――ぶみ［裸文］（名）封筒に入れず又は裹包せざる文。――まゐり［裸參］（名）寒中などに、裸體にて神佛に參詣すること。――み［裸身］（名）裸にてある身體。――むぎ［裸麥］（名）【植】大麥の一種、其穗は小麥より大なり、芒多けれど容易に脫落す。――むし［裸蟲］（名）㊀羽毛無き蟲。㊁人類の稱。㊂貧乏にて衣服のなき人、「―の洗濯」。――やま［裸山］（名）はげやま。――をどり［裸踊］（名）はだかになりておどること。――んばう［裸坊］（名）あかはだかなる人。

はたかざり［旗飾］（名）旗のかざりに用ふるもの。

はたがしら［旗頭］（名）㊀大小名の長。「中國の―」。㊁かしら、頭領。

はだか・る（ら、り、る、る、れ、れ）［開張］（自、ら四）㊀ひろがりて開く。ひろがる。「目口―」。㊁股をひろげて立つ。「立ち―」。㊂はゞをきかす。

はたき（名）㊀はたくこと。㊁「はたきこみ」の略言。㊂室内の塵をはたき拂ふ具、羽又は紙若しくは布などを束ねて柄を添へたるもの。ほこりはらひ、ちりはらひ。（采配、拂塵）。――こみ（名）相撲の手、出て來る敵を其首又は肩などを叩きて前へ倒すこと。

はだぎ［肌着］（名）肌に直ちに着くる衣服。じゆばん。（襯衣、肌衫、汗衫）。

はたぎやうれつ［旗行列］（名）多人數の者が、各旗を手にし行列をなして練り行くこと。

はたく（か、き、く、く、け、け）（他、か四）㊀叩（ツ）き碎く、つく、「麥を―」（碎）。㊁拂ひのく、はらふ、「塵を―」（撣）。㊂たゝく、うつ。（擊）。㊃財產をつかひ盡くして家を蕩（ツ）す、「身代を―」。

はだ・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）［捌］（他、か下二）搔き落とす、こそげおとす、「粉を―」。

〔はだ・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）［開張］（他、か下二）ひらきのばす、ひらく。

〔ばたくさ（名、副）音を立て、騷ぐさまにいふ語。

はたぐも［旗雲］（名）旗のやうに棚引く雲。

はたけ［畠］（名）「はた」に同じ。（畑）。――いね［畠稻］（名）【植】「をかぼ」の一名。――いも［畠芋］（名）【植】「さといも」の一名。――すゐれん［畠水練］（名）（畠の中にて水練する義）實地に適せざる研究又は計畫。――づくり［畠作］（名）畠に作物をつくること、又、其人。――つち［畠土］（名）畠に適する土、耕作に適する土。――な［畠菜］（名）【植】あぶらなの一種、形あぶらなに似る、若葉と莖（クキ）とは食用に供せられ、又、油をも採取す。（菘）。＋――ふ［畠生］（名）畠の麥粟などの生ひたる所。――もの［畠物］（名）はたけにつくる作物。

はたけ［疥］（名）一種の皮膚病、皮膚の纖（カワ）されて乾癬（カサ）の生ずるもの。――かさ［疥瘡］（名）前條に同じ。（乾疥）。

〔はだける（他）「はだく」の訛。

はたご［旅籠］（名）㊀＋昔時、馬の食を盛る器に用ひたる籠。㊁旅行用の食物又は雜品を入るゝ器、即ち行李の類。㊂やどや、宿泊所、旅人宿。（逆旅、旅籠）。㊃やどやの宿泊料又は食料。はたごせん。＋――うま［旅籠馬］（名）はたごをおひはこぶ馬。――せん［旅籠錢］（名）やどやの宿泊料又は食料。――ちん［旅籠賃］（名）前條に同じ。＋――どころ［旅籠所］（名）「はたごや」に同じ。――や［旅籠屋］（名）やどや、旅館、旅宿、旅店。――れう［旅籠料］（名）「はたごせん」に同じ。

はたざし［旗差］（名）昔時、馬に乘りて大將の旗を持ちし人。旗手。

はださはり［肌觸］（名）はだに觸るゝ、感じ。

はだざむ・し（く、し、き、けれ）［肌寒］（形、一）肌冷やかに感ず。

はたざめ［幡鮫］（名）【動】「てんぢくざめ」（天竺鮫）の一名。

はたざを［旗竿］（名）旗をつける竿。

はだし【跣】（名）（肌足の義）㊀素足にて大地を踏（フ）むこと。㊁はだしてにげること。——**でにげる** 激し得ざるにいふ語。到底比較にならざるにいふ語。

はたし‐あひ（イ）【果合】（名）雙方互に死を期して相闘ふこと。（決闘）。

はたし‐じやう（ジヤウ）【果狀】（名）はたしあひを求むる書狀。決闘狀。

はた‐した【旗下】（名）旗頭に直屬せる部下。はたもと。（麾下）。

はたして【果】（副）㊀思ひし如く。言ひし如く。案の如く。㊁まことに。實に。——**しからば**【果然】（副）まことに其通りにてあるならば。それにちがひなくば。

はた‐しね【機經】（名）しねいと。

はだし‐まゐり【跣詣】（名）神佛へ祈願をかけ、跣足にてまゐりすること。

はだ‐じゆばん【肌襦袢】（名）上の襦袢のよごれぬため、其下に着る肌衣。

はた‐じるし【旗標】（名）旗の目じるしにつくる紋所などの稱。（旗章）。

はた・す（さしすすせせ）【果】（他、さ四）㊀しとぐ。なしをふ。㊁殺す。

卄**はた‐すすき**【旗薄】（名）穗高く出でゝ旗の如くになりたるすゝき。

はだ‐せ【肌背】（名）馬の背に鞍を置かずあること。——**うま**【肌背馬】（名）はだかうま。

はた‐そで【端袖】（名）袍・直衣・直垂などの袖を長くするため、ゆきの外に半幅にて縫ひ着けたる袖。（鰭袖）。

はた‐そり【畠橇】（名）畠にて用ふる橇。

卄**はたた‐がみ**【霹靂】（名）（霹靂（ハタ）（クク）神の義）烈（ハゲ）しき雷鳴。（霹靂）。

は‐たたき【羽撃】（名）はたゝくこと。はゞたき。

卄**はたた・く**（かきくけけ）（自、か四）雷烈（ハゲ）しく鳴る。はためく。

は‐たた・く（かきくけけ）【羽撃】（自、か四）鳥翼をひろげて擊ちならす。はゞたく。（鼓翼）。

はたち【二十歳】（名）年齡二十の稱。

はたち【二十】（數）十の二倍。にあふ。——**かづら**【二十葛】（名）【植】「こもづの」の一名。

はだ‐つき【肌付】（名）肌のさま。「はだぎ」。

はだ‐つき【肌附】（名）㊀直に肌につくること。

はた‐つくり【畠作】（名）はたけを耕作すること。㊁又、其人。

はだ‐つけ【肌付】（名）馬の兩脇に鎧の當たる所を被ふ馬具。（韉）。

卄**はた‐つ‐もの**【畠物】（名）畠に生ずるもの。

卄**はた‐つ‐もり**【畠守】（名）【植】「りやうぶ」の古名。

はた‐つり【旗吊】（名）旗をつりさぐる杠（サヲ）。

卄**はたて**【果】（名）はて。かぎり。（際限）。

卄**はたで**【鰭】（名）「ひれ」に同じ。

はた‐と【礑】（副）㊀平手にてうつ音にいふ語。「——膝を拍つ」。㊁物の落つる音にいふ語。㊂事の差しつまるさまにいふ語。「——つまりて」。㊃其方を見つむるさまにいふ語。「——睨む」。

はた‐とせ【二十歳】（名）はたち。

卄**はた‐どの**【機殿】（名）布帛をおるいへ。

はだ‐ぬぎ【肌脫】（名）はだぬぐこと。（袒）。

はだ‐ぬ・ぐ（がぎぐげげ）【肌脫】（自、か四）㊀帶より上部の衣を脫して肌をあらはす。㊁加擔す。助力す。㊂力を入れて事をなす。

はだ‐の‐おび【肌帶】（名）ふんどし。したおび。ふどし。したふさぎ。

卄**はた‐の‐さもの**【鰭狹物】（名）小さき魚。

はた‐の‐たばこ【秦野煙草】（名）相模國秦野より產出する煙草。

はた‐の‐ひ【機杼】（名）「ひ」（杼）に同じ。

卄**はた‐の‐ひろもの**【鰭廣物】（名）大いなる「魚」。

はた‐の‐をさ【機筬】（名）「をさ」（筬）に同じ。

卄**はだ‐ばかま**【肌袴】（名）今の猿股引の類。

は‐タバコ【葉煙草】（名）採取して、貯藏せらるゝやうに製したる煙草の葉。

はた‐はた【鰰】（名）【動】硬鱗類中はたはた科に屬する魚、背部は淡褐色にして銀白色を帶び側線下には濃褐色の條線あり、體長一尺許、海中に群遊す、我國にては東北地方の特產なり。（鰰、鱩）。

はた‐はた【蟋蟀】（名）【動】（飛ぶ時はたはたと音する故にいふ）「ばった」に同じ。

〜**ばた‐ばた**（名、副）㊀つゞけてはたく音にいふ語。㊁物のつゞけて倒るゝさまにいふ語。㊂人のかけ走る足音にいふ語。

〜**ばた‐ばた**（名、副）前條に同じ。

卄**はた‐ばり**【機張】（名）布帛の幅。

はた‐ば・る（らりるるれ）【端張】（自、ら四）㊀ひろがる。のぶ。㊁幅がきく。勢あり。

はた‐び【旗日】（名）戸々に國旗を揭ぐべき日、卽ち大祭、祝日。

はた‐ぶぎやう（ギヤウ）【旗奉行】（名）昔時、武家にて大將の旗をつかさどりし職名。

はだへ（ハダヘ）【肌膚】（名）人獸の體表を被ふ皮。かはべ。はだ。

はた‐ぼこ【幢】（名）上部に小さき旗をつけたる鉾、祭禮のときなどに用ふ。

はだ‐まき【肌卷】（名）ふどし。ゆまき。

はた‐また【將又】（副）さはなくてあるならば、もしくは。

はだ‐まもり【肌守】（名）肌につくる守札。

はだ‐み【肌身】（名）からだ。身體。——**はなさず** 常に所持してあるにいふ語。——**をけがす** 婦人の節操を破るにいふ語。

はため・く（かきくけけ）（自、か四）なりひゞく。なりわたる。鳴動す。

はた‐もち【旗持】（名）㊀旗を持ち行くもの。㊁〜地位低き部下。

はた‐もと【旗本】（名）㊀牙旗のありし處、卽ち大將の陣所。旗下。㊁大將の陣所を衞りし兵士。㊂德川時代に、將軍家直參の士の、知行一萬石未滿にして百俵以上の者の稱。「——八萬騎」。

はた‐もの【畠物】（名）はたけに生ふるもの。

卄**はた‐もの**【機物】（名）㊀布帛を織る用具。はた。㊁織物。布帛。㊂卄上古の刑罰、後世のはりつけの類。——**にあぐ** はりつけの刑に處す。

はた‐や【機屋】（名）機をそなへおきて布帛を織ることを業とする家又は其人。

卄**はた‐や‐はた**【將將】（副）またまた。

卄**はだら**（名）まだら。まばら。

はたらか・す（さしすすせせ）【働】（他、さ四）はたらくやうにす。はたらかしむ。活用す。

はたらき【働、動】（名）㊀作用。活動。㊁てがら。いさを。㊂動作。擧動。㊃わざ。仕事。㊄かせぎ。稼業。㊅功用。功能。「藥の——」。㊆才能。智惠。㊇雜役の小使。㊈【文法】語尾の變化。活用。——**かけ**【働掛】（名）㊀吾より他に對して、はたらきを仕掛くること。㊁【文法】はたらきを起す性質の語。——**ことば**【働詞】（名）【文法】「どうし」（動詞）に同じ。——**もの**【働者】（名）㊀よくかせぐ人。㊁物事を巧（タク）に行ふもの。

はたら・く（かきくけけ）【働、動】（自、か四）㊀仕事をなす。業務をなす。㊁精出す。骨折る。㊂用をなす。功を奏す。㊃活動す。うごく。㊄【文法】語尾變化す。活用をなす。㊅將棊に賭る。品を吟味す。㊆勤務す。奉公す。

ば‐だらひ【馬盥】（名）㊀馬を洗（アラ）ふに用ふる大盥。㊁馬を洗ふ盥の形をなしたる花瓶。

卄**はだら‐ゆき**【斑雪】（名）はだらに降る雪。まばらに降（フ）る雪。はだれゆき。

はた・る（らりるるれ）【徵】（他、ら四）責めうながす。せむ。催促す。「稅を——」。

卄**はだれ**【斑】（名）まだら。まばら。——**しも**【斑霜】（名）まばらにおくしも。

卄**はだれ**【斑】（名）「はだれゆき」の略言。——**ゆき**【斑雪】（名）「はだらゆき」に同じ。

（**は‐たん**【破綻】（名）完全にとゝのはざること。やぶれほころぶること。成立たざること。

（**は‐だん**【破談】（名）㊀一旦きまりたる相談を取消すこと。㊁一旦きまりたる緣談を取消すこと。

ハタン‐きやう（キヤウ）【巴旦杏】（名）【植】李の一種、葉は小形綠色にして、花は小形白色なり、果實は食用に供せらる。（牛心李）。

はち【蜂】（名）【動】膜翅類に屬する昆蟲、四肢は膜質にして脈少なく、口器は嚙（カ）み又は舐（ネブ）るに適す、頭に單眼と複眼とを有し、胸部と腹部とは分明に判別す、種類多し、すべて變態は完全にして幼蟲は肢を有せざるもの多し、雌は尾端に產卵器又は螫（ハリ）を有す。

ハチ【鉢】（名）㊀（梵語 Patra の約、應器と譯す）印度の食器、佛門にては鐵製又は陶製なるを正式とす。㊁皿よりは深く瓶よりは平くして上の開き張りたる器。㊂「うゑきバチ」の略言。「盆——」。㊃掘（ホ）り起こしたる草木の根と土との塊をなしたる所。㊄兜（カブト）の頭上を被ふ部分。㊅腦蓋骨。頭蓋骨。

（**はち**【八】（數）四と四との和。や。やつ。

はぢ【恥】（名）面目を失ふこと。名譽のけがるゝこと。（恥辱）。——**をかく** 面目を失ふ。

（**は‐ぢ**【把持】（名）とりもつこと。とるること。「一定の主義を——す」。

（**ばち**【罰】（名）（「ばつ」の轉）㊀神佛が人の惡を懲らすこと。「——が當たる」。㊁惡事のむくい。

（**ばち**【撥】（名）琵琶又は三絃を彈（ヒ）き鳴らす具、端廣くして薄く本狹くして厚く、恰も銀杏の葉の如き形をなすもの。

ばち【桴】（名）太鼓を擊つ棒。ぶち。（枹）。

ばち‐あたり【罰當】（名）ばちにあたること。又、ばちにあたりたる人。

〜**ハチ‐あはせ**（ワセ）【鉢合】（名）㊀心附かずに行き合ひて、頭と頭と打ち當つること。㊁衝突。撞着。

ばち‐あはせ（ワセ）【撥合】（名）琵琶などを彈（ヒ）くとき、先づ調子を試むること。

はぢ‐い・る（らりるるれ）【恥入】（自、ら四）いたく恥づ。

（**はち‐いん**【八音】（名）支那にて、八種の樂器及其音の稱、卽ち金（鐘の類）・石（磬の類）・絲（琴瑟の類）・竹（笛の類）・匏（笙・竽の類）・土（塤の類）・革（鼓の類）・木（敔の類）をいふ。

ハチ‐うゑ【鉢植】（名）植木鉢に植（ウ）ゑてある植物。盆栽。

（**はち‐えふ**（ヨウ）【八葉】（名）紋所の名、八瓣の蓮花のさまを描（ヱガ）きたるもの。

ばち‐おと【撥音】（名）撥にて彈（ヒ）きならす音。

(はちおん)[八音](名) ⊖「はちいん」に同じ。⊜【佛】佛の出す音聲の極好・柔軟・和適・尊慧(聞く者をして尊重して悟解せしむるを)・不女(聞く者を敬畏せしめ天魔外道を歸伏せしむるを)・不誤・深遠・不竭なるを。

(はちかい)[八戒](名)【佛】五戒に高廣大の牀に坐せざると・脂粉を塗らざると・歌舞をなし又はこれを觀聽せざるとの三戒を加へていふ稱。

(はちかう)[八講](名)【佛】「はっかう」に同じ。

++はぢかがやく[恥赫](自、か四) はぢて面色いと赤らむ。

はぢかき[恥搔](名) はぢかくを。

はぢかく[恥搔](自、か四) 面目を失ふ。「恥を受く。」

(はちかく)[八角](名) 「はっかく」に同じ。

(はちかじん)[八歌人](名) 六歌仙に柿本人丸・山部赤人を加へていふ稱。

ばちかは[撥革](名) 三味線の胴の革(カハ)の撥の當たるべき所に別に貼(ハ)る革、普通小犬の皮を用ふ。

++はぢかはす[恥交](自、さ四) 互に「恥ぢあふ。」

++はぢがまし[恥](形、二) はぢと思はる。恥と見ゆ。

(はちかんぢごく)[八寒地獄](名)【佛】八樣の寒き地獄、即ち頞部陀(アブダ)・尼剌部陀(ニラブダ)・頞哳陀(アタダ)・臛臛婆(カカバ)・虎虎婆(ココバ)・嗢鉢羅(ウハラ)・鉢特摩(ハドマ)・摩訶鉢特摩(マカハドマ)をいふ。

(はちぎやく)[八逆](名) 上古の法律にて、八種の大罪、即ち謀反・謀大逆・謀叛・惡逆・不道・大不敬・不孝・不義をいふ。

はちく[淡竹](名)【植】竹の一種、節に白き粉ありて、節と節との間は眞竹(マダケ)よりも短かし、質強靱にして細緻なるが故に細く割り易く、精巧なる細工物などに用ふ、筍もまた味美なり。

(はちく)[破竹](名) (竹を破(ワ)るに、刃を其端に加ふれば、他は容易に裂くるよりいふ)到る處北勢に服從するを、又、勢猛烈にして防ぐべからざるを。

(はちぐわつ)[八月](名) 年の第八の月、はづき。

(はちけん)[八間](名) 扁(ヒラ)き大形の掛行燈、昔時、湯所などに用ひたるもの、はつぱう。

(はちこく)[八穀](名) 八種の穀物、即ち稻・黍・大麥・小麥・大豆・小豆・粟・麻をいふ。

(はちざ)[八座](名) ⊖(八人ありしが故にいふ)古昔、參議の別稱。⊜賀茂の攝社なる片岡・貴船・新宮・大田・若宮・奈良・澤田・氏神の稱。

ハチざかな[鉢肴](名) 鉢に盛りて出だすさかな、これを皿に分くるもの。

はぢさらし[恥曝](名) 恥を世間に廣く知らするを。

(はちじ)[八時](名) 一時より八つ目の時。

(はちじ)[八字](名) 八といふ字、又、其形。——ひげ[八字髭](名) 八字の如きさまをなすくちひげ。——のまゆ[八字眉](名) ⊖末の垂(タ)れさがりたる眉。⊜顏をしかめたるときの眉。

(はちしき)[八識](名)【佛】吾人の具有する八種の識、即ち眼・耳・鼻・舌・身・意・末那(梵語、意の當體)・阿賴耶(梵語、すべてを包藏するもの)をいふ。

(はちじふはちや)[八十八夜](名) 曆にて、立春より八十八日目の日の稱、春霜の降(フ)るは多く此節を限りとし、農家にて播種の候とす、陽曆五月二日頃にあたる。

はちじふはつかしよ[八十八個所](名) 四國の八十八個所の靈地、即ち、靈山寺・極樂寺・金泉寺・大日寺・地藏寺・安樂寺・十樂寺・熊谷寺・法輪寺・切幡寺・藤井寺・燒山寺・一の宮寺・常樂寺・國分寺・觀音寺・井戶寺・恩山寺・立江寺・鶴林寺・太龍寺・平等寺・藥王寺(以上阿波國)、東寺・津寺・西寺・神峰寺・大日寺・國分寺・一の宮寺・五臺山・禪師峰寺・高福寺・種間寺・淸瀧寺・靑龍寺・新田五社・蹉跎寺・寺山院(以上土佐國)、觀自在寺・稻荷・佛木寺・明石寺・大寶寺・岩谷寺・淨瑠璃寺・八阪寺・西林寺・淨土寺・繁多寺・石手寺・大山寺・延命寺・圓明寺・三島別宮・泰山寺・八幡札所・佐禮山・國分寺・橫峰寺・香園寺・一の宮・吉祥寺・前神寺・三角寺(以上伊豫國)、雲邊寺・小松尾山・琴彈八幡・觀音寺・本山寺・彌谷寺・曼荼羅寺・出釋迦寺・甲山寺・善通寺・金倉寺・道隆寺・道成寺・鄕照天皇寺・國分寺・白峰寺・根香寺・一の宮・屋島寺・八栗寺・志度寺・長尾寺・大窪寺(以上讚岐國)をいふ。

はぢしむ(他、ま下二) 「はづかしむ」に同じ。

〜はぢしめる(他) 「はぢしむ」の訛。

(はちじや)[八邪](名) 人身を害する八種のもの、即ち、風・寒・暑・濕・飢・飽・勞・逸をいふ。

はぢしらず[恥不知](名) 恥を感ぜざるものか、面目を失ふを意とせざるたはけもの。「ふ。」

はぢしらふ[恥](自、は四) はぢらふ。

はちす[蓮](名) (蜂窩(ハチス)の義)【植】睡蓮科に屬する草、池沼などに產し、春宿根より芽を生ず、葉は大形にして圓狀をなし、水上に浮び出づ、俗に莖を稱するものは、細長くして内部に細孔あり折れば絲を出す、花は大形多瓣にして白色又は淡紅色なり、花瓣と萼片とは區別明瞭ならず、花托の上部は延長して倒圓錐形をなし、數個の小孔ありて其狀恰も蜂窩の如し、其中に楕圓形の種子を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、地下莖は蓮根と稱し種子と共に食用に供せらる。(芙蓉、芙蕖)

はちす[木槿](名)【植】「むくげ」の一名。

はちすけ[八介](名) 古昔、八人の介の稱、秋田城介(出羽國)・三浦介(相模國)・千葉介(下總國)・上總介(上總國)・狩野介(伊豆國)・井伊介(遠江國)・富樫介(加賀國)・大内介(周防國)をいふ。

はちすのうてな[蓮臺](名) ⊖はちすの花の上。⊜極樂淨土。

はちすのうへ[蓮上](名) 前條に同じ。

はちすののり(名)【佛】法華經の異稱。

++はちすのはひ[藕](名) 蓮の地下莖、れんこん。

(はちたい)[八體](名) 「はったい」に同じ。

(はちだいか)[八大家](名) 八人の大家、從來西文界にては、多く韓愈・柳宗元(以上唐)・歐陽修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石(以上宋)をいふ。

(はちだいし)[八代史](名) 支那の歷史の晉書・宋書・齊書・梁書・陳書・周書・隋書・唐書をいふ。

(はちだいしふ)[八代集](名) 三代集に後拾遺集・詞華集・金葉集・千載集・新古今集の五部を合はせていふ稱。

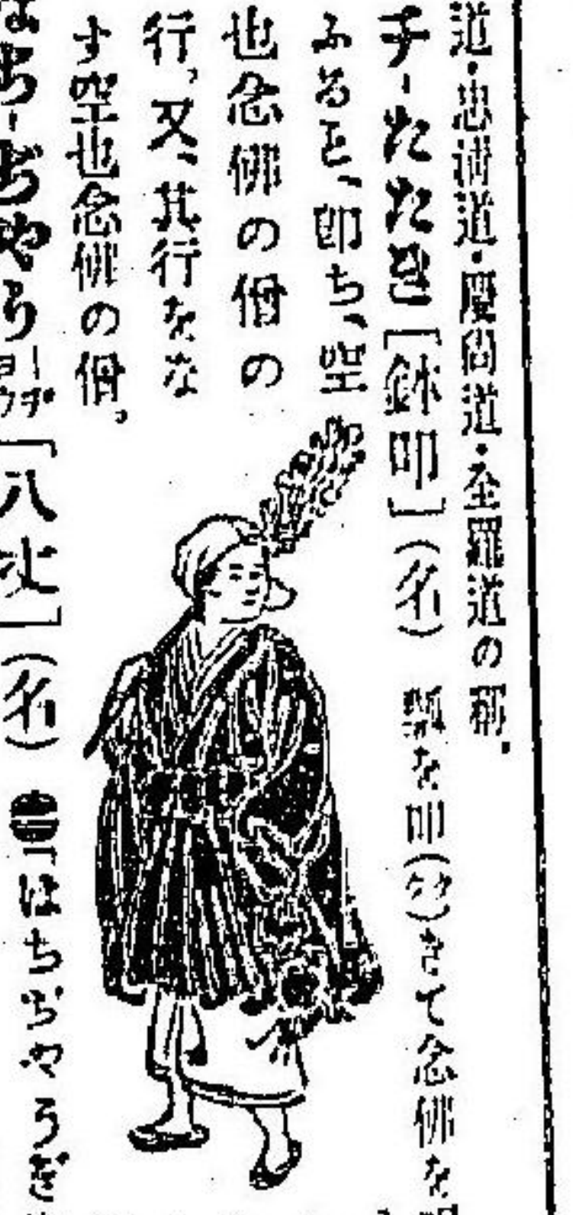
(はちだいぢごく)[八大地獄](名)【佛】八種の地獄、即ち、等活・黑繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間の稱。

(はちだいやしや)[八大夜叉](名)【佛】八體の夜叉、即ち、寶賢・滿賢・散支・衆德・應念・大滿・無比力・密嚴をいふ。

(はちだいりゆうわう)[八大龍王](名)【佛】八體の龍王、即ち難陀・跋難陀・娑竭羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅の稱。

(はちだう)[八道](名) ⊖我國の東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道・北海道の稱。⊜朝鮮の京畿道・江原道・咸鏡道・平安道・黃海道・忠淸道・慶尙道・全羅道の稱。

ハチたたき[鉢叩](名) 瓢を叩(タタ)きて念佛を唱ふるを、即ち、空也念佛の僧の行、又、其行をなす空也念佛の僧。


[ハチたたき]

(はちぢやう)[八丈](名) ⊖「はちぢやうぎぬ」の略言。⊜はちぢやうぎぬに似たる織方の織物、「とびー」。——ぎぬ[八丈絹](名) 伊豆國八丈島より織出す平織の絹布、黃八丈・黑八丈等の種類あり。——ぐは[八丈桑](名)【植】桑の一種、伊豆國八丈島の原産にして、葉の長さ一尺四五寸許、最も蠶に適する良質として、早く世に知らる。——しだ[八丈齒朶](名)【植】しだの一種、八丈島に產するもの。——じま[八丈縞](名) 八丈絹の縞物、即ち黃八丈。

(はちぢん)[八陣](名) 古昔の兵法にて有名なる八樣の陣立、普通天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇に象りたるものをいひ、吳起のは、車箱・車輪・曲陣・銳陣・直陣・卦陣・衝陣・鶴翼陣にして、孫子のは、方・圓・牝・牡・衝方・罘置・車輪・雁行にして、諸葛孔明のは、洞當・中黃・龍騰・鳥翔・連衡・握奇・虎翼・折衝なり。又、大江維時が唐より傳へたりといふは、魚鱗・鶴翼・雁行・彎月(偃月)・鋒尖・衡軛・長蛇・方圓なり。

ハチつけ[鉢附](名) 「ハチつけいた」の略言。——いた[鉢附板](名) かぶとの錏(シコロ)の第一枚目の板。

(はちでうりう)[八條流](名) 馬術の一派、小笠原流より出でたるもの、八條房繁を祖とす。

(はちなん)[八難](名) ⊖八つの災難、即ち飢・渴・寒・暑・水・火・刀・兵の稱。⊜【佛】八つの障難、即ち地獄・畜生・餓鬼・長壽天・北洲・盲聾瘖瘂・世智辯聰・佛前佛後の稱。

(はちにんげい)[八人藝](名) 一人にて數人の音聲又は擧動などを演ずる藝(雜藝)。

(はちにんざさう)[八人座頭](名) 前條に同じ。

(はちねつぢごく)[八熱地獄](名) 「はちだいぢごく」に同じ。

ハチのき[鉢木](名) 植木鉢に植(ウ)ゑたる樹、「盆樹」。

はちのす[蜂巢](名) 蜂のつくりたる巢、中に子を生みてそだつ。

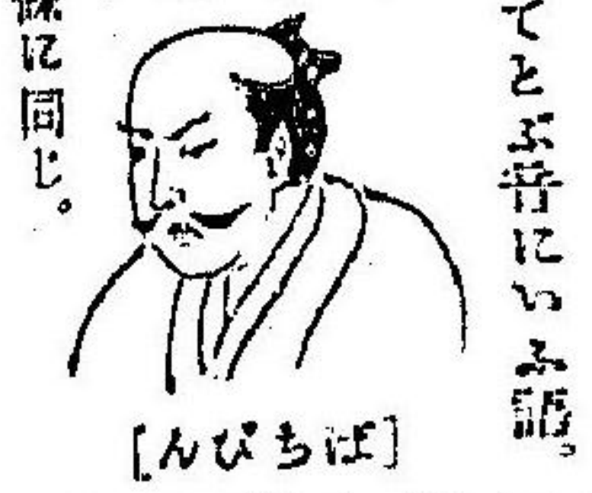
(はちはい)[八盃](名) 「はちはいどうふ」の略言。——どうふ[八盃豆腐](名) 一種の料理、水四盃醬油二盃酒二盃の割合の汁にて細く薄く切りたる豆腐を煮たるもの。

ハチばうず[鉢坊主](名) ⊖托鉢してあるく坊主。⊜墮落せる坊主。

〜はちはち[八八](名) 花合にて、勝負を決する點數を八十八點と定めたるもの。

(ぱちぱち)(名、副) ⊖物のはぜてとぶ音にいふ語。⊜目ばたきするさまにいふ語。

〜ばちびん[撥鬢](名) 寶永頃に流行せし男の髮の風、淨瑠璃太夫江戶半太夫より始まる、髮を剃り込みたるもの。——やっこ[撥鬢奴](名) ⊖前條に同じ。⊜髮を撥鬢に結びたる町奴。


[はちびん]

(はちふう)[八風](名) 「はっぷう」に同じ。

++はちふく[蜂吹](自、か四) (蜂の來るを吹き拂ふ義) 嫌ひて嘯く。

(はちふくでん)[八福田](名)【佛】福を種(ウ)うる八種のもの、佛・聖人・僧・和尙・阿闍梨・父・母・病人

を救濟することにいひ、又、嶮路に義井を設くること・水路に橋梁を架すること・險隘を平かにすること・父母に孝養すること・三寶を恭敬すること・病人に給事すること・貧窮を救濟すること・无遮會を設くることにもいふ。

ぱち-ぶくろ[撥袋](名) ばちを入れてつゝむ袋。

(**はち-へいし**[八平氏](名) 阪東にて平氏の系統に屬する八家の豪族、即ち、上總・千葉・三浦・土肥・秩父・大庭・梶原・長尾の稱。

(**はち-ぼ**[八墓](名) 古昔、天子の外戚の御祖父母などの八個所の墓。「十陵—」。

(**はち-ぼく**[八木](名) 松・柏・竹・榆・桑・棗・枳・橘の稱、灸に此木の火を用ふべからずといふ。

ハチ-まき[鉢卷](名) ㊀頭顱を布などにて卷きたるもの。(抹額、帕額、頭卷)。㊁土藏の檐下にして、蟲羽(ケラバ)の下廻なる、一段高く土を塗りたる處。㊂帽子を布帛にて卷きたるもの。

ハチ-まへエ｜ヤ[鉢前](名) 厠の傍にて、手水鉢を置く處。

(**はち-まん**[八幡](名) 八幡神の略言。「弓矢—も照覽あれ」。——**ざ**[八幡座](名) (八幡神の宿る所の義)兜の鉢の眞中の孔。かんやどり。——**じん**[八幡神](名) 應神天皇を祀りたる社の稱號、古來弓矢の神とせり。——**ばと**[八幡鳩](名)【動】「ずずかけばと」の一名。——**ぶね**[八幡船](名) 足利氏の末世に九州邊の海賊などの明國の海岸を侵掠せしもの、其船旗に八幡大菩薩と記せしよりいふ。

はち-みつ[蜂蜜](名) 蜜蜂の巢にある蜜、即ち蜜蜂の花蜜又は樹脂より採取したる液を醸(カモ)して貯へたるもの、食用又は藥用に供せらる。

(**はち-めん**[八面](名) ㊀八つのかは。「—六臂」。㊁八つの平面　㊂四方及四隅、㊃轉じて、各方面。——**たい**[八面體](名) 八個の平面にて圍まれたる立體。——**れいろう**[八面玲瓏](名) ㊀何れの方面もいと鮮明なること。㊁心中に何等のわだかまり又はくもりのなき狀態にいふ語。——**ろっぴ**[八面六臂](名) (八つのかはと六つのひぢと)前後左右より來る敵に油斷なく應じ得らるゝもの。

ぱち-めん[撥面](名) 琵琶の胴のばちかはを貼(ハ)りたる處。

ハチ-もの[鉢物](名) ㊀鉢にもりたる者。㊁鉢に植ゑてある草木。

(**はち-もんじ**[八文字](名) ㊀八といふ文字の形。「門を—に開く」。㊁道中のときの遊女の足のふみかた、爪先を内へ曲げて歩むもの。

ハチ-もらひライ｜モ[鉢貰](名) 托鉢すること、又、其僧。

は-ぢや[葉茶](名) 飲用料に製造したる茶の葉。——**や**[葉茶屋](名) 葉茶を賣る店。

はち-や[蜂屋](名) 「はちやがき」の略。——**がき**[蜂屋柿](名)【植】柿の一種、美濃國各務郡蜂屋村の原產にして、諸國に傳はりたるもの、果實はつるしがきとして味よし。

(**は-ぢやう**ヂヤ｜ウ[波長](名)【理】波の山と山と若しくは谷と谷との距離。

(**は-ちゆう**[爬蟲](名) 爬蟲類に屬する動物。——**るゐ**[爬蟲類](名)【動】皮膚に一種の甲鱗を被(カツ)り爬行する冷血動物、蛇類の外は皆な短少なる前後二對の步脚あり、肺にて呼吸し、多くは卵生なり、蛇・龜・蜥蜴・鰐等これに屬す。

(**は-ぢゆう**[把住](名)【心】一旦經驗したる事實を意識中に保留すること。

はぢら・ふハヂラ[羞](自、は四) 氣色又は擧動に恥づる心あらはる。はづかしがる。

(**はちり-はん**[八里半](名) (味の栗に及ばぬを九里にや、足らぬ義に寄せたるもの)やきいも。

(**はぢる**(自) 「はづ」の訛。

バチルス[Bacillus](名) ㊀細菌の一種、稍や長き棒狀のものにして、腸窒扶斯・結核等の病原となるもの。㊁病毒、病原。

(**はち-わうじ**ワウ｜ジ[八王子](名) 素盞烏尊の五男三女を合はせ祀る稱。

(**はちわ・れる**れ れ れる れる れれ れよ(自、ら下二) 自らさけわれる。

(**はつ**[鮪](名)【動】「まぐろ」の稱。(京阪地方の方言)。

はつ[初](名) はじめ。初手。

(**はつ**[發](名) はっすること。

は・つて て つ つる つれ てよ[果](自、た下二) ㊀きはまる。をはる。つく。㊁死ぬ。「はて給ふ」。

は・つて て つ つる つれ てよ[泊](自、た下二) 船到着す。つく。

はつ—[初](接頭) はじめての。新らしき。「—雪」。

(**は-づ**[巴豆](名)【植】大戟科に屬する小木本、多く熱帶地方に產す、其果實は豆に似て長く、仁は藥用に供せられ、又、油を採取すべし、支那の巴蜀より多く輸出するが故に此名あり。

は・づぢ ぢ づ づる づれ ぢよ[恥、羞](自、た下二) ㊀身の過ちなどを自覺し、人に知らるゝを面目なく思ふ。(慙、愧)。㊁自己の面目を汚(ケガ)すと思ひて忌みきらふ。

(**ばつ**[罰](名) ㊀罪惡又は過失あるものに科する懲報。㊁惡事をなしたる人に負はする責任。

(**ばつ**[跋](名) ㊀書物の末尾に記する文。あとがき。㊁をはり。くゝり。「—を合す」。

—**ぱつ**[發](接尾) 銃砲の彈丸の發射數をかぞふるにいふ語。

ば-づ[馬爪](名) 鼈甲に代用する馬のつめ。

はつ-あき[初秋](名) 秋のはじめ。孟秋。

はつあき-かぜ[初秋風](名) 初秋の頃の風。

はつあき-ぎり[初秋霧](名) 初秋の頃の霧。

(**はつ-あん**[發案](名) 考へ出すこと。

(**はつ-い**[發意](名) ㊀おもひたつこと。おもひ出すこと。㊁【心】意志の自ら發動すること、特に其努力によりて發動すること。

(**はつ-いく**[發育](名) そだち、成長。

(**はつ-いん**[發音](名) 「はつおん」に同じ。

はつ-う[初卯](名) 一月の初の卯の日、東京にては此日龜井戸の妙義神社に參詣す、又二の卯・三の卯などもあり。——**まゐり**[初卯詣](名) 初卯に龜井戸妙義神社に參詣すること。

はつ-うぐひすウグ｜イス[初鶯](名) 初めて聞く鶯。又、春の初に鳴く鶯。

(**はつ-うつ**[發鬱](名) 欝氣を散ずること。

はつ-うま[初午](名) 二月の初の午の日、稻荷神社の祭事あり、又二の午・三の午などあり。

(**はつ-うん**[發運](名) 運のひらくること。

(**ばつ-えふ**ヨ｜ウ[末葉](名) 「ばっそん」(末孫)に同じ。

(**はつ-おん**[發音](名) ㊀音を發すること。㊁言語の音のひゞき、又、其ひゞきの出し方。——**たい**[發音體](名) 音を發する物體。

はつ-か[二十日](名) ㊀月の第二十日に當たる日。㊁二十晝夜。

十**はつか**(名) わづか。はつ〳〵。

(**はつ-が**[發駕](名) 貴人の御出立。

(**はつ-が**[發芽](名) めぐむこと。めざすこと。

(**はっ-かい**[八戒](名)【佛】「はちかい」に同じ。

(**はっ-かう**ウ｜コ[八講](名)【佛】「はっけはっかうゑ」(法華八講會)に同じ。

(**はっ-かう**ウ｜コ[發行](名) ㊀世の中にひろむること、世の中にあらはすこと。㊁出版すること、賣り出すこと。㊂はやること、流行。

(**はっ-かう**ウ｜コ[發航](名) ふねをのり出すこと、ふなで。

(**はっ-かう**ウ｜コ[發向](名) 發足して其地に向ふこと。

(**はっ-かう**ウ｜コ[發港](名) 港をふなですること。

(**はっ-かう**ウ｜コ[醱酵](名)【化】醱母菌の作用によりて生ずる化學的變化、其砂糖に作用して「アルコホル」と炭酸瓦斯とに變ぜしむるが如きこれなり。

(**はっかう-しや**ウ｜コ[發行者](名) 發行の責任者。

(**はっかう-じよ**ウ｜コ[發行所](名) 發行する所。

(**はっかう-だか**ウ｜コ[發行高](名) 發行の數。

(**はっかう-ふ**ウ｜コ[八講布](名) 古昔、宮中の法華八講會のとき、布施とせられし麻布、加賀・越中の產を用ひられたり。

(**はっかう-ゑ**ウ｜コ[八講會](名)【佛】「はっかう」(八講)に同じ。

(**はっ-かく**[發覺](名) 罪惡のあらはるゝこと、又、秘密のあらはるゝこと。(露顯)。

(**はっ-かく**[八角](名) 八個の角ある形。——**けい**[八角形](名) 八角の平面形。——**すゐ**[八角錐](名) 斷面の八角形をなす錐體。——**ちゆう**[八角柱](名) 斷面の八角形をなす柱體。——**どけい**[八角時計](名) 八角形の柱時計。

(**ばつ-がく**[末學](名) 後進の學生。

はつか-ぐさ[二十日草](名)【植】(白樂天の花開花落二十日の句に出づ)牡丹の異稱。

はづか・ししく しく し しき しけれ[恥](形、二) ㊀恥づべし。面目なし。㊁心おくれて面ぶせなり。場うて、はき〳〵しく振舞ひにくし。

はづかし・むめ め む むる むれ めよ[辱](他、ま下二) ㊀恥辱を與ふ。はぢをかゝす。はぢしむ。㊁其器にあらずして其位地に據る、其分にあらずして其職を受く。

はづかしめ[辱](名) はづかしむること。ちじよく。はぢ。——**る**(他) 「はづかしむ」の訛。

はつか-しやうぐわつシヤウ｜グワツ[二十日正月](名) 陰曆正月二十日の稱、昔時は祝日となしたり。

(**はっ-かせん**[八歌人](名) 「はちかせん」に同じ。

はつ-かぜ[初風](名) 其季節の初に吹く風。

(**ばっ-かつ**[菝葜](名)【植】「さるとり」に同じ。

はつか-づき[二十日月](名) 陰曆二十日の月。

はつ-がつを[初鰹](名) 四月頃のはしりの鰹。

はつか-ねずみ[二十日鼠](名)【動】鼠の一種、體軀小形にして、人家に近き土中に穴居す、灰黑色にして尾長し。あまくちねずみ。のねずみ。(鼷鼠)。

はつ-がひイ｜カ[初買](名) 一月二日に、其年初めての買物をなすこと。

はつ-がみなり[初雷](名) 其年初めて聞く雷。

はつ-かり[初雁](名) 秋の初に北地より來たる雁。

はつ-がり[初狩](名) 初めて狩すること。

はつ-がり[初刈](名) ㊀初て稻などを刈りとること。㊁新年などに初て髮のかりこみをなすこと。

(**はっ-かん**[發刊](名) 文書を發行すること。

(**はっ-かん**[發汗](名) あせをかくこと。あせを出すこと。——**ざい**[發汗劑](名) 風邪に冒(オカ)されしとき、發汗して療治するに用ふる藥劑。

(**はっかん-ぢごく**[八寒地獄](名)【佛】「はちかんぢごく」に同じ。

十**はつ-き**[泊木](名) 枝のある木二本を樹(タ)て、これに竿又は繩などをかけ亙(ワタ)して物などを懸け乾すもの。はて。

(**はっ-き**[發揮](名) ㊀あらはし出すこと、あらはし示すこと。㊁はげましふるふこと、ふるひおこすこと。

(**はっ-き**[發輝](名) ひからすこと、かゞやかすこと。

(**はつ-ぎ**[發議](名) ㊀意見を唱へ出すこと、所存

をいひ出すこと。㊁議案を提出すること。——しや[發議者](名) 發議したるもの。

卄はづき[葉月](名) 陰曆八月の異稱。

(ばつ-ぎ[末技](名) 役に立たぬわざ。

(はっ-きやう[發狂](名) 氣の違ふこと、狂氣となること。きちがひとなること。

(はっ-きやう[發鄕](名) 故鄕を發足すること。

(はっ-きやう[發京](名) 京地を發足すること。

(はっ-きよく[八極](名) 四方と四隅と、即ち東・西・南・北・乾・坤・艮・巽の稱。

(はっ-きり(名、副) 分明なるさまにいふ語。

(ばっ-きん[罰金](名) ㊀[法]犯罪人より二圓以上の金錢を徵收する主刑。㊁すべて制裁として徵收する金錢の稱。

(はっ-く[八苦](名) [佛]四苦に、愛別離・怨憎會・求不得・五陰盛を加へていふ稱。

(はっ-く[八區](名) 八極に同じ。

はつ-ぐさ[初草](名) 春の初めに生ずる草。

(はっ-くつ[發掘](名) 地中のものをほり出すこと。

(はっ-くどくすゐ[八功德水](名) ㊀清・冷・輕・美・香・飲時心に適し・飲み已はりて患なく・臭からざる水の稱。㊁[佛]極樂淨土にありといふ澄淨水・淸冷水・甘美水・馨香水・柔輭水・安和水・除飢渴水・除疾病水の稱。

卄はつ-くに[初國](名) 初めて國を設けられたること。(發國)。

はつ-くろひ[羽繕](名) 鳥などの飛ばんとて羽を整ふること。

(はっ-くわ[八科](名) 漢方醫の八種の專門科、即ち大人・小兒・婦人・眼目・口齒・外科・鍼・按摩の稱。

(はっ-くわ[發火](名) ㊀火焰のあらはるゝこと、火を發すること。㊁銃砲に火藥のみをこめてうつこと。㊂はくち。

(はっ-くわい[發會](名) はじめての會合。はつの集會。

(はっ-くわう[八荒](名) 八方。(八紘)。

(はっ-くわう[發光](名) ひかりをはなつこと。——たい[發光體](名) 發光してある物體。自ら光をはなつ物體。

(はっ-くわえんしふ[發火演習](名) 銃砲に火藥のみをこめてうつ演習。

(はっ-くわてん[發火點](名) [化]物體が燃えそめんとするときの溫度。

(ばっ-くん[拔群](名) 多くのものにぬきいでゝあること。すぐれたること。「—の功」。

(ばつ-ぐん[拔群](名) 前條に同じ。

卄はつ-け[磔](名) はりつけ。

(はっ-け[八卦](名) ㊀八種の卦、即ち乾☰・兌☱・離☲・震☳・巽☴・坎☵・艮☶・坤☷の稱、これを方位五行に配して、乾を西北及金とし、兌を西及金とし、離を南及火とし、震を東及木とし、巽を東南及木とし、坎を北及水とし、艮を東北及土とし、坤を西南及土とす。(卦の條參照)。㊁うらなひ。卜占。

(ばっ-け[末家](名) 「ぶんけ」(分家)に同じ。

(はっ-けい[八景](名) 一の名所内の八種の景色を並べ稱するもの、もと支那の瀟湘の八景なる江天暮雪・瀟湘夜雨・山市晴嵐・遠浦歸帆・煙寺晚鐘・平沙落雁・漁村夕照・洞庭秋月に濫觴す、我國にて最も有名なるは近江八景にして、比良暮雪・矢走歸帆・石山秋月・瀨多夕照・三井晚鐘・堅田落雁・粟津晴嵐・唐崎夜雨をいふ。

(はっ-けい[八刑](名) 支那の周時代の八種の罪惡、即ち、不孝・不睦・不婣・不弟・不任・不恤・造言・亂民の稱。

(ばつ-げい[末藝](名) 役に立たぬ技藝。

(はっ-けくしゆう[八家九宗](名) 八宗と八宗に禪宗を加へたるものとの稱。

(はっ-けん[發見](名) 世人の未だ知らざるものを見出すこと。みつくること。

(はっ-けん[發遣](名) 送りつかはすこと。出張せさすること。

(はつ-げん[發現](名) 實際にあらはれ出づること。又、實際にあらはし出だすこと。

(はつ-げん[發言](名) ことばを發すること、又、意見をのぶること。——けん[發言權](名) 發言する權利。

(ばっ-けん[拔劍](名) 佩劍をぬきはなつこと。

はつ-ご[初子](名) 初めて生みたる子。

(はつ-ご[發語](名) 文句を說き出さんとする始に用ふる語、さて・それ等の類。

(ばっ-こ[跋扈](名) ㊀をどりはぬること。をどりこゆること。㊁恣にふるまふこと、きまゝの行爲をなすこと。

(はっ-こく[八穀](名) 「はちこく」に同じ。

はつ-ごほり[初氷](名) 其冬に初てはりたる氷。

はつ-ごゑ[初聲](名) はじめての鳴聲。

(はつ-ごん[發言](名) 「はつげん」に同じ。

(ばつ-ざ[末座](名) すゑの方の座。

(ばっ-さい[伐採](名) 樹木などをきりとること。

(はっ-さう[八草](名) 八種の草、即ち菖蒲(シヤウブ)・艾葉(ヨモギ)・車前(オホバコ)・荷葉(ハス)・蒼耳(ナモミ)・忍冬(ニンドウ)・馬鞭(バベン)・蘩蔞(ハコベ)の稱。

(はっ-さう[八相](名) [佛]釋迦牟尼の一生涯の八たびの變遷、即ち、降兜率・託胎・降生・出家・降魔・成道・說法・涅槃の稱。

(はっ-さく[八朔](名) 陰曆八月朔日の稱、農家にては、はじめて當年の穀を收め田實(タノミ)の節句

とてこれを祝ふ、德川時代には、天正十八年の八朔に家康が江戸に入城せしより、特別の祝日となしたり。

はつ-ざくら[初櫻](名) さきてまだ程經ぬ櫻。

(ばっ-さり(名、副) 一度にあびせかけ又はおほひかくるさまにいふ語。

はつ-さる[初申](名) 陰曆二月の初めの申の日、春日神社の祭典あり。

(はっ-さん[八算](名) [數]和算にて、一桁の割算の稱。

(はっ-さん[發散](名) 外に發しちること。——りう[發散流](名) [植]植物の葉面より水分の發散するが故に、絕えず根より莖へ水の上昇すること。

(ばつざん-がいせい[拔山蓋世](名) (項羽の力拔山兮氣蓋世の句に出づ)勇氣の天下に敵なきにいふ語。

はつ-ざん[初產](名) うひざん。

(ばっ-し[末子](名) すゑこ。

(はっ-しき[八識](名) [佛]「はちしき」に同じ。

(はっし-と[發止](副) ㊀矢のつきたつさまにいふ語。㊁敵の打ち來る刀をさゝへとむるさまにいふ語。「—うけとめ」。

卄はつ-しほ[初潮](名) はじめて汲む潮。

はつ-しも[初霜](名) 初めて降る霜。——づき[初霜月](名) 陰曆十月の異稱。

(はっ-しや[發車](名) 列車の出發すること。

(はっ-しや[發射](名) ㊀弓につがへて箭をいること。㊁彈丸をうち出すこと。

(はっ-しやう[八省](名) 古昔の八個の中央官廳、即ち中務省・式部省・治部省・民部省・兵部省・刑部省・大藏省・宮內省の稱。

(はっ-しやう[八姓](名) 八種の姓(カバネ)。(「かばね」の條を見よ)。

(はっ-しやう[八象](名) 八卦の象、即ち乾は天に、坤は地に、坎は水に、離は火に、艮は山に、兌は澤に、巽は風に、震は雷にあたる。

(はっ-しやう[八將](名) 昔時、關東に於ける八人の豪族、即ち千葉・結城(以上下總)・里見(安房)・小田・佐竹(以上常陸)・小山・宇都宮・那須(以上下野)の稱。

(はつ-じやう[發情](名) 春情をおこすこと。情慾をおこすこと。

(はっ-しやう-じん[八將神](名) 陰陽家にて祭る八柱の神、即ち、太歲(タイサイ)・大將軍(タイシヤウグン)・大陰(ダイオン)・歲刑(サイギヤウ)・歲破(サイハ)・歲殺(サイセツ)・黃幡(ワウバン)・豹尾(ヘウビ)の稱。

(はっ-しやう-ゐん[八省院](名) 古昔、八省の百官が政務を行ひたる處、其正殿を大極殿といふ。(朝堂院)。

(はっ-しゆう[八宗](名) [佛]佛教の八個の宗派、即ち倶舍(クシヤ)・成實(ジヤウジツ)・律・法相(ホツサウ)・三論・天台・華嚴(ケゴン)・眞言の稱。

(はつ-しゆう[發銃](名) 小銃をうつこと。

(はっ-しゆう-けんがく[八宗兼學](名) 八宗の教義をすべて學びをさむること。轉じて、ひろく物事に熟達したること。

(はっ-しゆつ[發出](名) 發しいだすこと、又、發しいづること。

(ばっ-しゆつ[拔出](名) ぬきだすこと、又、ぬけでること。

はっ-しよう-まめ[八升豆](名) [植]豆の一種、莢はそらまめに似て大きく、種子に黑斑あり。

(はっ-しん[發疹](名) 皮膚に小さき腫物の生ずること。

(はっ-しん[發信](名) 音信を發送すること。——き[發信機](名) 電信機の音信を發送する器械。——にん[發信人](名) 音信を發する人。

はっ-す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[發](自、さ變) ㊀おこる、はじまる。㊁生ず。でく。㊂現ず。あらはる。㊃のぶ。あがる。㊄ふるふ。うごく。㊅散ず。ちる。㊆出て行く。ゆく。

はっ-す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[發](他、さ變) ㊀放射す。はなつ。㊁生ぜしむ。でかす。㊂おこす。はじむ。㊃現ず。あらはす。㊄のぶ。あぐ。㊅散ず。ちらす。㊆ふるふ。うごかす。㊇ひらく。あばく。㊈行ふ。去く。「令を—」。㊉やる。つかはす。

はづ-す（さ・し・す・す・せ・せ）[解](他、さ四) ほごす。はぐす。

はづ-す（さ・し・す・す・せ・せ）[外](他、さ四) ㊀とく。ほどく。(釋)。㊁とりのぞく。とりさる。㊂うしなふ。あやまる。「好機を—」。㊃さく。よく。「座を—」。

ばっ-する（せ・し・する・する・すれ・せよ）[罰](他、さ變) 罰にあつ。罰に行ふ。

パッス[Pass](名) 汽車・電車などの無賃乘券。

(ばっ-すゐ[拔萃](名) ㊀書中の用所だけを抽(ヌ)き取ること。又、其もの。(摘要、抄錄)。㊁すぐるゝこと、ひいづること。(拔群)。

(はっ-すん[八寸](名) 高さ八寸ある足附の膳。——ぜん[八寸膳](名) 前條に同じ。

(はっ-せい[八姓](名) 「はっしやう」に同じ。

(はっ-せい[發生](名) ㊀おひ出づること。はえ出づること。㊁おこりはじまること、できること。㊂[動]卵子の發育して個體の動物となること。

(はっ-せい[發聲](名) ㊀聲を發すること。㊁宮中の御歌合せのとき、諸人の詠進せし歌を讀みあぐるもの。——き[發聲器](名) [動]發聲の器官、例へば、人類の聲帶・口腔及鼻腔內の諸器官の如きこれなり。

(ばっ-せき[罰責](名) 其罪過をせめてこれを罰すること。

(ばっ-せき[末席](名) すゑの席。(末座)。——き

けがす[汚末席] 其府につらなるを謙遜していふ語。

（**はっ-せつ**[八節]（名） 立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の稱。

（**ばっ-せふ**[跋涉]（名） 山を越え水を渡ること、轉じて、諸方を遊歷すること。

（**はっ-せん**[八專]（名） 陰曆、壬子（ミヅノエネ）の日より癸亥（ミヅノトヰ）の日に至る十二日間の稱、一年に六度あり、此時は降雨多しといひ、又、嫁娶を忌む。

（**はっ-せん**[八線]（名）【數】三角函數の條を見よ。

（**はっ-せん**[發船]（名） ふなで。

（**はっ-そう**[發送]（名） ものをおくりだすこと。

（**はっ-そく**[八則]（名） 祭祀・法則・廢置・祿位・賦貢・禮俗・刑賞・田役の稱。

（**ばっ-そく**[罰則]（名） 罰を科する規則。

（**ばつ-ぞく**[閥族]（名） ㊀いへがら、家格。㊁貴きいへがら、高き家格。

はつ-ぞめ[初染]（名） 染物をはじめて染むること。

はつ-ぞら[初空]（名） 初春の空。——**づき**[初空月]（名） 陰曆正月の異稱。

（**ばっ-そん**[末孫]（名） 子孫、後裔。

はつ-た[初田]（名） ㊀新に開墾したる田。㊁初めて稻を刈る田。

（**はっ-だ**[發兌]（名） 圖書などの出版。

〜**ばった**[鎰斯]（名）【動】いなごの類の總稱。（關東の方言）。

（**はっ-たい**[八體]（名） 漢字の八つの書體、即ち古文・大篆・小篆・隸書・飛白・八分・行書・草書の稱。

はったい[糗麨]（名）（「はたき」の音便）米・麥の新穀を炒（イ）り、ひきて粉となしたるもの。——**いし**[糗石]（名） 砂と鐵鑛との結合して固き塊狀をなせる石、黑褐色にして中空なり、こもちいし、いしなだんご。

（**ばっ-たう**[拔刀]（名） 刀をぬきはなすこと、ぬきみをさげもつこと。——**たい**[拔刀隊]（名） 拔刀して敵陣に切り込む部隊。

（**ばっ-たく**[拔擢]（名） えらびぬくこと、よりぬくこと、ひきあぐること。

はつ-だけ[初茸]（名）【植】一種の菌、陰濕の地に生ず、形は椎茸に似て青灰色をなし、菌柄は短くして帶綠色に變ずる液汁を分泌す、食用に供せらる。（青頭菌）。

（**はっ-たつ**[發達]（名） ㊀成長すること。のびたつこと。㊁進歩すること。すゝむこと。

（**はっ-たつ**[八達]（名） 八方へ通ずること。何れのかたへも達すること。

（**はっ-たん**[八端]（名）「はったんおり」の略言。——**おり**[八端織]（名） 縱橫の縞模樣ある黃褐色の絹布。——**がけ**[八端掛]（名） 前條に同じ。

〜**ばっち**（名） きたなきもの。（小兒の語）。

パッチ[褌襠]（名）（朝鮮語 Pachi の轉）股引の一種にして、長きもの。

〜**ハッチ-ばうず**[鉢坊主]（名） 托鉢してほどこしを乞ふ乞食僧。（化飯道人）。

（**はっ-ちゃく**[發着]（名） 發することとつくこと。

（**ばつ-ぢょ**[末女]（名） すゑのむすめ。

〜**ぱっ-ちり**（名、副） 目許などのはっきりしたるさまにいふ語。

（**はっ-ちん**[八珍]（名） ㊀八種の珍味。㊁盛大なる食膳。

バッテーラ[端艇]（名）（「ポルトガル」語 Bateira）西洋形の小艇、即ち「ボート」。（走舸）。

（**はっ-てい**[發程]（名） しゅったつ、かどで。

（**ばっ-てい**[末弟]（名） すゑのおとうと。

（**はつ-でう**[發條]（名） ぜんまい。

〜**ばっ-てき**[拔擢]（名）「ばったく」の訛。

はつ-てふ[初蝶]（名） 春初めて見る蝶。

（**はっ-てん**[發展]（名） ㊀のびひろがること。㊁さかえゆくこと。

（**はつ-でん**[發電]（名） ㊀電氣を發生すること。㊁電報をうつこと。——**き**[發電機]（名）【理】強き磁場に於て「コイル」を廻轉して強き電流を得る器械、「コイル」を通ずる電流は「コイル」の反廻轉毎に其方向を變ず、轉換子によりて外部の電線に直流を通ぜしむるものを直流發電機といひ、轉換子を用ひずして外部の電線に交流を通ぜしむるものを交流發電機といふ。——**し**[發電子]（名）【理】發電機の電氣を起す「コイル」の稱、磁場を強くするため、必ず「コイル」を軟鐵の心にて充たす、形狀は、環狀・鼓狀・盤狀等種々あり。——**しよ**[發電所]（名） 電氣を發生して電流を他に發送する所。——**たい**[發電體]（名） 電氣を發生してある體。

（**はっ-てん**（接） 故に。よつて。（長崎地方の方言）。

（**はっ-てんぐ**[八天狗]（名） 愛宕・比良・大山・大峯・鞍馬・飯綱・彥山・白峯の各山に住むといふ天狗。

（**はっ-と**[法度]（名） おきて。さだめ。禁制。「武家ー」。

（**はっ-と**[發途]（名） かどで。いでたち。

〜**はっ-と**（副） 俄に胸にこたへ驚くさまにいふ語。

〜**ばっ-と**（副） ㊀物事のはっきりせざるさまにいふ語。漠然。茫然。㊁火の急にもえあがるさまにいふ語。「ー燃え立つ」。

〜**ぱっ-と**（副） ㊀現はるゝ間もなく忽ち消ゆるさまにいふ語。㊁急に體をかはすさまにいふ語。

（**はつ-どう**[發動]（名） 活動を起すこと。——**き**[發動機]（名） 他の器械の運轉を起す器械、即ち水車の如きこれなり。

はっ-と-がき[法度書]（名） 法度の個條を書きしるしたる文書。

卄**はつ-とがり**[初鳥狩]（名） こたかゞり。

（**はっ-とく**[八德]（名） 仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の稱。

はっ-と-の-さい[八斗才]（名）（謝靈運の天下才共有一石、子建獨得八斗」の語に出づ）世にすぐれて才多きこと。

はつ-とり[初鷄]（名） ㊀元旦の鷄の聲。㊁曉の一番鳥。

はつ-とり[初酉]（名） 十一月の初てのとりの日。又、其日の酉町。

は-づな[端綱]（名） 馬の口に著（ツ）けて牽（ヒ）く綱。

はつ-なへ[初苗]（名） 初めてとり又はうゝる苗。

はつ-なり[初生]（名） 初めてなりたる果。

（**ばつ-なん**[末男]（名） 最も末のむすこ。季子。

はつ-ね[初子]（名） 正月の初めの子（ネ）の日又は子の日遊び。

はつ-ね[初音]（名） 初めての啼き聲、「鶯のー」。

（**はつ-ねつ**[發熱]（名） 體溫の亢進すること。

はつ-の-せっく[初節句]（名） 生れて初めての節句、男子なれば五月節句をいひ、女子なれば三月節句をいふ。

はつ-のぼり[初上]（名） 初めて出京すること。

はつ-のぼり[初幟]（名） 男子生れて初めての五月節句を祝ふこと、もと多くは幟を樹てしよりいふ。

（**はっ-ぱ**[八八]（數） 八に八を乘じたる數、即ち六十四。

（**はっ-ぱ**[葉]（名） 草木の葉。

パッパ[法王]（名）（「ラテン」語 Papa、父の義）羅馬の法王。

〜**ぱっ-ぱ**（名） タバコ。又、煙管。（小兒の語）。

（**はつ-ばい**[發賣]（名） 賣り出すこと、うりだし。

（**ばっ-ぱい**[罰杯]（名） 罰として強ひてのまする杯酒。

（**はつ-ばう**[發泡]（名） 身體の局部に貼（ハ）り水泡を生ぜしめて毒を取り去る藥劑。

（**はっ-ぱう**[發砲]（名） 大砲をうつこと。

（**はっ-ぱう**[八方]（名） ㊀四方と四隅と、八方位。㊁諸方。方々。㊂大いなる懸行燈の名、八間に同じ。——**にらみ**[八方睨]（名） ㊀方々へ目をくばりてあること。㊁畫像などの目が、何れの方より見れどもにらみて居るが如く見ゆること。——**びじん**[八方美人]（名） ㊀何れの方より見ても缺點なき美人。㊁何人に對しても程よくあひしらふ人。——**ゐ**[八方位]（名） 四方位と東北・西北・東南・西南との稱。

卄**はつ-はぎ**[初萩]（名） 花の初めて開きたる萩の花。

はつ-はつ[端端]（名、副） ㊀卄わづか。いさゝか。㊁辛（カラ）うじてとゞくさまにいふ語。

〜**ぱっ-ぱ-と**（副） ㊀急に立ち消ゆるさまにいふ語。㊁閃（ヒラ）めき散るさまにいふ語。㊂煙草を吸（ス）ふさまにいふ語。㊃飛びはぬるさまにいふ語。㊄惜氣なくつかひはたすさまにいふ語。

はつ-はな[初花]（名） ㊀初春第一に咲（サ）く花。㊁若木に始めて咲く花。㊂すべて、最初に咲く花の稱。卄——**ぞめ**[初花染]（名） 紅花の初花にて染めたる色。

はつ-はる[初春]（名） 春のはじめ。新年。——**づき**[初春月]（名） 陰曆正月の異稱。

はっ-ぴ[半被]（名）（「はんぴ」の轉）もと武家の中間の上着、形羽織に似て其家の標（シルシ）などをつけたるもの、後世すべて其體裁のものをいふ。（法被）。

はつ-びな[初雛]（名） 女兒の生れて初めての三月節句に雛人形をかざりて祝ふこと。

はつ-ひので[初日出]（名） 正月元日の日出。

（**はつ-びやう**[發病]（名） 病氣をおこすこと。

（**はっ-ぷ**[發布]（名） ㊀世上にあまねく出すこと。㊁世上にあまねく通知すること。「憲法ー」。

（**はっ-ぷ**[髮膚]（名） かみとはだへと。

パップ（名）（「オランダ」語 Pap）熱湯に浸（ヒタ）したる麪包、腫物を撫で、膿を促（ウナガ）すに用ふるもの。

（**はっ-ぷう**[八風]（名） ㊀八種の風、即ち、炎風・條風・景風・巨風・凉風・飂風・麗風・寒風の稱。㊁【佛】八種の人心を煽動するもの、即ち、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂の稱。

はつ-ぶたい[初舞臺]（名） ㊀舞臺にて初めて技を演ずること。㊁初めて其物事を行ふこと。

はっ-ぷり[半頭]（名） ㊀しころの無き兜（カブト）。（半首）。㊁額金（ヒタヒガネ）を施したる鉢卷。（冠鐵）。

（**はっ-ぷん**[八分]（名） 漢字の書體、秦の時に始まりたるもの、「八」の字を分散せるが如き形をなすより名づくともいひ、小篆二分隸書八分の書體なるより名づくともいふ。

（**はつ-ぷん**[發憤]（名） いきどほりを發すること、精神をふるひはげますこと。

（**ばつ-ぶん**[跋文]（名）「ばつ」（跋）に同じ。

（**はっ-ぺう**[發表]（名） おもてむきにしらすること。公にしめすこと。（公示）。

（**ばつ-べう**[拔錨]（名） 錨（イカリ）をあげて船出すること。

はつ-ほ[初穗]（名） ㊀始めて出でたる稻穗。（早穗、初實、初果、新米）。㊁すべて、始めて出でたるものゝ稱。㊂神社又は佛閣に稻の初穗の代りに奉る錢。

(ばっ-ぽう)[罰俸](名) 懲戒處分によりて俸給の全部若しくは幾分を納付せしむるヿ。

(ばっ-ぼく)[伐木](名) 樵夫などの木を伐(キ)るヿ。

はつ-まご[初孫](名) はじめての孫。

卄はつ-みゆき[初雪](名) 「はつゆき」に同じ。

はつ-むかし[初昔](名) (三月廿一日に摘むよりいふ、昔は廿一日の合字なり)上等の煎茶・抹茶の名。

(はつ-めい)[發明](名) ㊀人の未だ知らざるものを案出し又は未だ爲さゞるヿを爲し若しくは未だ造らざるものを製造するヿ。おもひだすヿ。かんがへだすヿ。㊁さかしきヿ。賢きヿ。りこう。怜悧。

卄はつ-も[初藻](名) はじめて刈る藻。

卄はつ-もとゆひ[初元結](名) 昔時、元服の時に髮を結びし紫の組紐。

はつ-もの[初物](名) ㊀其年初めて出でたる蔬菜・穀物。㊁始めて食するもの。

(はつ-やう)ヨウ[發揚](名) ㊀ふるひおこすヿ。「士氣を—す」。㊁のべあらはすヿ。

卄はつ-やく[初役](名) 初めてする役。

はつ-やま[初山](名) ㊀其年のはじめての登山。㊁生まれて始めての登山。

はつ-やり[初槍](名) いちばんやり。

はつ-ゆ[初湯](名) ㊀うぶゆ。㊁はじめての入湯。

(はづ-ゆ)[巴豆油](名) 巴豆より採取したる油。

はつ-ゆき[初雪](名) 其年の冬始めて降る雪。

卄—げんざん[初雪見參](名) 古昔、初雪のふりしとき、群臣の參內せしヿ。

はつ-ゆめ[初夢](名) 元日の夜の夢。又、二日の夜の夢。——づけ[初夢漬](名) 小さき茄子を芥子と麴とにて漬(ツ)けたるもの。

はつ-よ[初夜](名) はじめてのよる。

卄はつ-よ-ぐさ[初代草](名) 【植】松の異稱。

(はつ-らつ)[潑剌](名) 魚の勢よくとびはぬるヿ。

(はつ-らん)[撥亂](名) 世の中のみだれたるををさめとゝのふるヿ。「—反正」。

卄はつり(名) 麻をはつりて縄絲と共たるもの。

(ばつ-りう)[末流](名) ㊀末孫。後胤。(後裔)。㊁すゑの流派。

卄はつ・る（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）[脱解](自、ら下二) はつる。はぐる。

はつ・る（ら・り・る・る・れ・れ）[削](他、ら四) 少しづゝ削(ケヅ)り取る。へづる。

はづ・る（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）[外](自、ら下二) ㊀はまりたるもの外へそれて出づ。㊁あたらず。はまらず。㊂そむく。たがふ。

はづれ[外](名) ㊀はづるゝヿ。㊁はて。はし。「町の—」。㊂「つまはづれ」の略言。

(はつ-れい)[發令](名) 政令を發布するヿ。

(はつれ-ゆき)[斑雪](名) 「はだれゆき」に同じ。

〔はづれる〕(自) 「はづる」の訛。

(はつ-ろ)[發露](名) 惡事又は密事などのあらはれ知るゝヿ。ろけん。(露顯)。

(ばつ-ろ)[末路](名) ㊀生涯のはて。㊁物事の衰ふるとき。まつろ。

(はつ-わ)[發話](名) はなしを出だすヿ。

卄はつ-を[極尾](名) しだりを。

はつ-を[初紫](名) 桿秤(サヲバカリ)の竿の中にて最も輕き物をはかるに用ふるもの。

はて[果](名) ㊀おまひ。かぎり。きはみ。をはり。すゑ。(畢)。㊁喪のをはる時。

卄はて[八手](名) 「はつき」に同じ。「—に刈り乾す」。

〔はて〕(感) ㊀怪み又は迷ふ時などに發する語。㊁考へかへすときに發する語。

〔はで〕[派手](名) ㊀はえかゞやくヿ。はなやか。だて。華美。「すがたも—な姫ゆりの」。㊁かざりよそほふヿ。てらひかゞやかすヿ。(衒耀)。

(は-てい)[波底](名) なみのそこ。

(ば-てい)[馬丁](名) ㊀御者の下に働くもの。うまかた。㊁乘馬の口とり。べっとう。

(ば-てい)[馬蹄](名) うまのひづめ。——ぎん[馬蹄銀](名) 淸國の銀貨、馬蹄の形をなせるもの、大小一ならず、量目によりて其價格を異にす。——けん[馬蹄硯](名) 墨をすり水をたゝふる所を馬蹄の形にほりたる硯(スズリ)。——じせき[馬蹄磁石](名) 馬蹄の形をなしたる磁石。——せき[馬蹄石](名) 面に馬蹄の形ある帶黑色の石、庭石などにするもの。

(は-てう)[巴調](名) ㊀鄙俗なる調子又は詩歌。㊁自分の詩歌の謙稱。

はて-がた[果方](名) はてに近きヿ。

はて-し[果](名) はて。結局。「—なし」。

はで-すがた[派手姿](名) はでなるみなり。(艶姿)。

卄はて-つ-かた[果方](名) はてがた。

〔はて-な〕(感) 「はて」に同じ。

はて-の-つき[果月](名) をはりの月。

はて-の-ひ[果日](名) をはりの日。

はて-の-わざ[果業](名) 死者の四十九日又は一周忌などの佛事。

はて-の-を[果緒](名) 箏の最端の絃(イト)、即ち巾(キン)の絃。

はて-はて[果果](名) はてのはて。とゞのつまり。すゑのすゑ。

はで-やか(名) はなやか。華美。

〔はてる〕(自) 「はつ」の訛。

バテレン[伴天連](名) (「ポルトガル」語 Padre 即ち、父の義) 昔時、傳道のため我國に渡來したる切支丹宗の宣教師の號、轉じて、切支丹の異稱。——しゆう[伴天連宗](名) 切支丹宗。

(はてん-くわう)クワウ[破天荒](名) (唐の劉蛻の故事に出づ) 端をひらくヿ。事をはじむるヿ。

はと[鴿](名) 【動】鳩鴿類に屬する鳥の總稱、脚細くして短かく、嘴の基部柔軟にして鼻孔の周圍膨脹す、翼は長大にしてよく飛翔するに足る、每歲產卵するヿ二回雌雄こもごもこれを餌し、多く群棲す。種類多し。

はと[波戸](名) 水中に突出したる土石の築造物、波浪を防止する障蔽又は船荷を上下する經路となるもの。(埠頭、馬頭、防波堤)。

(ば-ど)[馬奴](名) うまかひ。

(は-どう)[波動](名) ㊀なみのうごき。㊁【理】物質の一部を振動せしむるとき、其振動が漸次物質內の各部に傳はるヿ。——せつ[波動說](名) 【理】光は宇宙間到る處として存在せざるとなき「エーテル」內に傳はる一種の橫波なりといふ說、「イタリー」國人「ホイゲンス」の初めて唱導したるものにて、現今は一般に信ぜらる。

ば-とう[拔頭](名) 舞樂の曲、西域の人虎に傷つけられ、其子復讐のために虎を殺したるを演ずるもの。(撥頭)。

(ばとう-くわんのん)[馬頭觀音](名) 【佛】七觀音の一、三面八臂にして、功德の深甚なるを、馬の水草をのみ念じて餘は知る所なきが如しといふ。

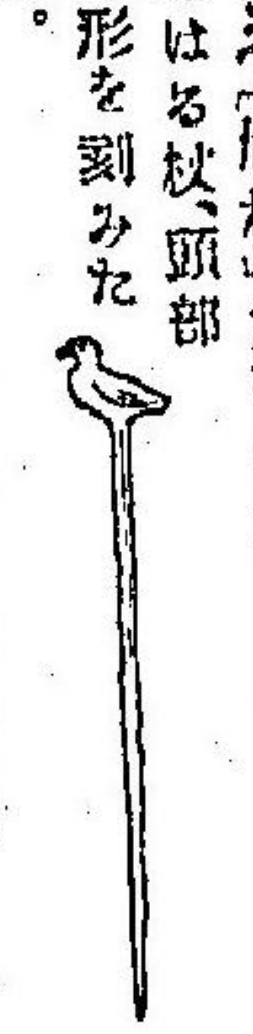
(ばとう-ゆ)[馬桐油](名) 旅人が馬の上にて、荷と共に身を被(オホ)ふに用ふる大いなる桐油合羽。

はと-ぐるま[鳩車](名) 子供の玩具、鳩の形に刻みたるものに車をつけ紐などにてひき行くもの。

はと-ざけ[鳩酒](名) 一種の料理、たゝきたる鳩の肉を酒に味噌を和したるものにて煮たるもの。

はと-ぞめ[鳩染](名) 「きくぢん」(麴塵)に同じ。

はと-づゑ[鳩杖](名) 宮廷より老人に慰勞として賜はる杖、頭部に鳩の形を刻みたるもの。


[はとづゑ]

はと-の-つゑ[鳩杖](名) 前條に同じ。

はと-ば[波戸場](名) はとのある所。——うけとり[波戸場受取](名) 船舶の荷物を波戸場にて受取るヿ。——わたし[波戸場渡](名) 船舶の荷物を波戸場にて引渡すヿ。

はとば-ねずみ[鴿羽鼠](名) 潤き紫色を帶びたる鼠色。

卄はと-ふ・く（か・き・く・く・け・け）[鳩吹](自、か四) 獵夫、鹿を呼ぶときなどに、掌を合はせて吹き鳴らし鴿の鳴聲をなす。

はと-むぎ[鳩麥](名) 【植】禾本科に屬する草、莖は大形にして丈は數尺に達す、果實も大形なり、種子は食用又は藥用に供せらる。(薏苡)。

はと-むね[鳩胸](名) ㊀胸部の高く突出したる人。(鳩胸、雞胸)。㊁鎧の胸の高くなりたる部分。

はと-め[鳩目](名) 煙草入の緒(ヲ)又は靴の紐などを通(トホ)す孔の鳩の目に似たるを云ふ。

は-どめ[齒止](名) 車の輪につけて、其運轉をとゞむるもの。(軔)。

卄はとり[服部](名) (機織の約) 機を織(オ)るヿ。又、其業の人。(織部)。

卄は-とり[執翳](名) 翳(ハ)を持ちかざす人。

パトロン(名) (「オランダ」語 Patroon)「はやごし」に同じ。

はと-を[鳩尾](名) 「きうび」に同じ。

はな[華、花](名) ㊀【植】植物の莖又は枝に生じ、種子を生成する機關、萼・花冠・雄蕊・雌蕊より成る。「梅の—」。「桃の—」。㊁花のある枝。「—を挿す」。㊂櫻の花の特稱。「—見」。㊃古昔、梅の花の特稱にもいへり。「この—」。㊄うるはしきヿ。はなやかなるヿ。「—の都」。㊅ほまれ。さかえ。「—を咲かす」。㊆最も評判よきもの。最も人望あるもの。「座中の—」。㊇うはべのかざり。外觀。㊈藝人などに、當座の賞として與ふる物。しうぎ。(纏頭)。㊉楮(シキ)の枝葉。⑪「はなあはせ」の略言。⑫「はなくじ」の略言。

はな[端](名) ㊀はじめ。最初。㊁はし。はづれ。

はな[鼻](名) (端(ハナ)の義) 高等動物の嗅器、人類にては顏の中央に隆起し、二孔ありて、其內面の上部には嗅神經の分布せる粘膜あり。——があく あてがはづる。又、だしぬかる。——がたかい 自慢す。——であしらふ 人より言をかけたるに、返辭をもせず冷遇す。——にかく ほこる。自慢す。——につく いやになる。飽く。嫌ふやうになる。——をたかくす 面目をあぐ。——をつく 香氣又は臭氣の甚しきにいふ。又、主君の前より遠ざかる。——をきる 恥をかゝす。

はな[洟](名) 鼻孔より出づる液。はなみづ。

〔はな-あかし〕[鼻明](名) あてのはづるゝヿ。だしぬかるゝヿ。

はな-あさぎ[花淺黃](名) 靑花にて染めたる淺黃。

はな-あせ[鼻汗](名) 鼻端に汗をかくヿ。

はな-あはせ[花合](名) ㊀古昔、櫻花を左右

に分けて、互に優劣を闘はせし遊戯。(闘花)。㊁一種の遊戯、花「ガルタ」を合せ取りて勝負を決するもの。はな。

はなあぶ［花虻］(名)【動】あぶの一種、形大なれども螫刺なし、全身灰黒色にして黄色の縦毛條あり、よく花蜜を吸(ス)ふ。

はなあふひ（オイ）［花葵］(名)【植】「たちあふひ」の別名。(蜀葵)。

はなあぶら［鼻油］(名) 小鼻のあたりに分泌するあぶら。

はなあやめ［花菖蒲］(名) ㊀【植】「あやめ」に同じ。㊁かさねの色目、表は白にて裏の萌黄(モエギ)なるもの。

はないかだ［花筏］(名) ㊀【植】五加(ウコギ)科に屬する小木本、山中に自生す、高さ數尺、葉は楕圓形にして緣邊に鋸齒あり、花は五瓣淡青色にして夏の初めに開き、嫩葉は食用に供せらる。(青莢葉)。㊁花の水面に散り敷きたるを筏に見立てゝいふ語。㊂花の枝を渡きたる筏。㊃化粧用のあぶらぐすり。

はないき［鼻息］(名) ㊀鼻にてするいき。(鼻)。㊁人の機嫌、「―を伺ふ」。――があらい 機嫌つねならずして意氣のはげしきをいふ。

はないくさ［花軍］(名) ㊀櫻の花にて撃ち合ふあそび。㊁花「ガルタ」のたゝかひ。花あはせ。

はないけ［花瓶］(名) 花を活(イ)けおく器。くわビン。はなたて。くわへい。(花器)。

はないろ［花色］(名) ㊀花の色。㊁「はなだいろ」の略言。――ごろも［花色衣］(名) ㊀種々の色に咲き亂れたる花を衣にたとへていふ語。㊁露草にて染めたる衣。

十はなうそ・や・ぐ（がぎぐぐげげ）［鼻嘯］(自、か四) 可笑(ヲカ)しさに堪へずしてそと鼻息吹き出づ。

はなうた［鼻唄］(名) ㊀鼻に掛かりたる低聲にて小唄などをうたふを。(鼻歌)。㊁頓着なく平氣で行ふを、「―で受附けず」。

はなうり［花賣］(名) 花を賣りあるく人。

はなうるし［花漆］(名) 薄紙にて漉(コ)したる上品なる漆。

はなおち［花落］(名) 花落ちて程經ぬに採りて食用となす胡瓜・茄子などの稱。

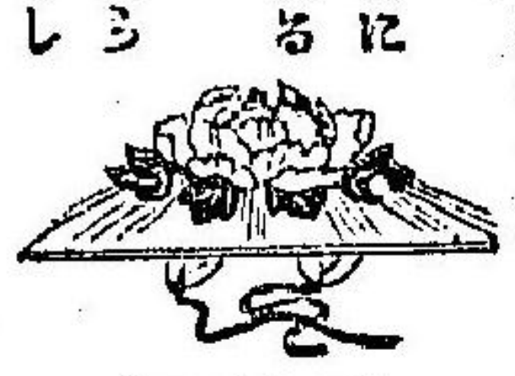
はなかうぢ（コウジ）［花柑子］(名) 花の咲きたるかうぢの樹。

はながき［花垣］(名) 花のさく植物にてつくりたる垣。

はなかけ［鼻缺］(名) 鼻のかけそこねたるもの。

はなかご［花籠］(名) ㊀竹製の花器。はなこ。㊁花の枝を盛り挿したる竹籠。

はながさ［花笠］(名) 造花などに飾れる笠、踊又は祭禮などに用ふるもの。


［はながさ］

はなかぜ［鼻風］(名) ㊀はなあらし。㊁鼻腔に加答兒(カタル)をおこして、鼻汁の多く出づる感冒。

はなかぜ［花風］(名) 花のさかりの頃の風。

はながた［花形］(名) ㊀花の模樣、花の形。花文。㊁あばたのあと。痘痕。㊂我國在來の鏡の異稱、裏に菱の花を附くるが故に名づく。(婦人の語)。㊃はなやかに扮(イデタ)つ若手。㊄人氣よき若手。――やくしゃ［花形役者］(名) 花形の俳優。

十はながたみ［花筐］(名) 花又は若菜・摘菜などを摘(ツ)み入るゝ籠。

十はながつみ(名) 本義さだかならず、或は菰(コモ)なりといひ或は「たの若も」なりともいふ。

はなかづら［花鬘］(名) ㊀舞妓などの簪(カザシ)せる花飾り。㊁花にて飾りたる鬘。㊂鬘の美稱。(關西の方言)。

はながつを［花鰹］(名) 鰹節を花びらの如く薄く細かに削りたるもの。

はながは（ガワ）［鼻革］(名) 馬の鼻に着くる革の紐。(紲革)。

はながひ（イガ）［花貝］(名)【動】「さくらがひ」の一名。

はなかへで（カエデ）［花楓］(名)【植】槭樹科に屬する木、葉は三裂して對生す、觀賞用として栽培せらる。

十はなかへ・る（カエル）（らりるるれれ）［花返］(自、ら四) はないろの染色さむ。

はながみ［鼻紙］(名) 鼻汁などを拭ふ用意に懷中せる紙。たゝうがみ。ふところがみ。――いれ［鼻紙入］(名) はながみぶくろ。かみいれ。――ぶくろ［鼻紙袋］(名) 鼻紙又は貨幣などを入れて懷中する袋。はながみいれ。(夾袋)。

はなか・む（まみむむめめ）［擤］(自、ま四) はなしるをぬぐひとる。

はながめ［花瓶］(名) はないけ。

はながルタ［花骨牌］(名) 花合に用ふる骨牌、松・梅・櫻・藤・菖蒲・牡丹・萩・薄・菊・紅葉・柳・桐の十二種の畫各四枚都合四十八枚にして、其中に點數の高下あり。

はなかんざし［花簪］(名) 造花の簪。

はなぎ［鼻木］(名) 牛の鼻にとほす環狀の木。

はなぎ［端木］(名) 材木の切端(キレハシ)。

はなぎぬ［花絹］(名) 唐草などを描(エガ)きたる絹。

はなき・る（らりるるれれ）［劓］(他、ら四) 鼻を切る。(支那の古代に行ひし刑)。

十はなくぎ［花釘］(名) 頭部の圓く又は花の形をなせる釘かくし。

十はなぐき［鼻莖］(名) はなすぢ。

はなくじ［花鬮］(名) 賴母子講にて、本鬮の外に、若干の金錢を分配するため、講中のものに引かする鬮。

はなぐすり［鼻藥］(名) ㊀少量の賄賂。㊁子供をなだむるために與ふる菓子の類。

はなくそ［鼻屎］(名) 鼻の孔の中に鼻液(ハナシル)と塵との相混じて固まりたるもの。(鼻滓)。

⊓はなくた［鼻腐］(名) 鼻のかけそこねて聲の濁りつまるもの。

十はなぐはし（ーゲワシ）（しくしくしきしけれ）［花細］(形、二) 花うつくし。

十はなぐはし（ーゲワシ）［花細］(枕)「櫻」に冠らする詞。

はなぐもり［花曇］(名) 櫻花の咲く頃、空の晴れやかならざるを。(養花天)。

⊓はなくわい［花會］(名) 職人又は博徒などが、知合(シリアヒ)の人の醵金を乞ふために催はす會合。

はなぐわゐ［花慈姑］(名)【植】「おもだか」の一名。

はなげ［鼻毛］(名) 鼻腔の中に生ずる毛。――ぬき［鼻毛拔］(名) 鼻毛を拔くけぬき。⊓――をぬく だしぬく。⊓――をのばす 女にほれまよふ。⊓――をよむ 婦人が、己の色に迷ひたる男子を自由にたぶらかす。

はなご［花籠］(名) はなかご。はながたみ。

はなごけ［花苔］(名)【植】菌類に屬する隱花植物、山中に生じ、白色の花開く、莖は高さ二三寸、圓形且つ中空にして花の蕊に似たり。しらこけ。(石蕊)。

十はなごころ［花心］(名) うはきなる心。あだあだしき心。

はなござ［花茣蓙］(名) 藺をいろ〳〵の色に染めて模樣を織出したるござ。はなむしろ。(佳文席)。

はなごろも［花衣］(名) さくらがさねの衣。はないろの衣。

はなごゑ［鼻聲］(名) ㊀涙に咽(ムセ)びて鼻のつまりたる聲。㊁鼻にかゝりて濁りて出づる聲。

はなざかり［花盛］(名) 花の盛に咲くを。又、其の時節。

はなさき［鼻先］(名) めのまへ。目前。

はなざくら［花櫻］(名) ㊀【植】櫻の一種、花の重瓣にして淡紅色なるもの。㊁かさねの色目、表は白色にして裏の青なるもの。

⊓はなさん［鼻樣］(代) ほこる者の自稱。

はなし［話、咄］(名) ㊀ものがたり。談話。㊁かたらひ。相談。㊂うはさ。ひやうばん。㊃わけ。事情。㊄たゞ言說のみにて實際にあらざるを。㊅落語。⊓――にはながさく いろ〳〵さま〴〵の話が出る。⊓――にみがいる 興に乘じて話す。

⊓――ばなし［放］(接尾) 動詞に添へて、其まゝになしおく意を表する語。「書き――」。

はなしあひ（イーア）［話合］(名) はなしあふこと。

はなしあひて（イーアイテ）［話相手］(名) ㊀はなしの相手。ことばかたき。㊁相談する人。さうだんにん。

はなしあ・ふ（ウーア）（はひふふへへ）［話合］(自、は四) ㊀相談す。㊁共謀す。

はなしか［咄家］(名) 滑稽談又は人情話などする業の人。落語家。

はなしがき［放書］(名) 「はなちがき」に同じ。

⊓はなしがひ（イーガ）［話甲斐］(名) いひがひ。話の効。

はなしがひ（イーガ）［放飼］(名) ㊀野がひ。㊁放生會。

はなしがめ［放龜］(名) はなしがひの龜。又、はなちにがす龜。

はなしくせ［話癖］(名) はなしかたのくせ。

はなしぐち［話口］(名) ㊀はなしの模樣。㊁はなしの極意。

はなしじやうず（ージョウ）［話上手］(名) はなしの巧(タクミ)なるを。

はなしずき［話好］(名) 人とはなしするを好むを。

はなしたかげ［花下陰］(名) 花のしたかげ。

⊓はなしづく［話盡］(名) 話合の限りを盡くすを、「―でどうでもなる」。

十はなしづめ［鎭花］(名) 「はなしづめのまつり」の略言。――のまつり［鎭花祭］(名) 古昔、春の花の散るとき、疫癘を鎭むるため、神祇官にて大神(オホミワ)狹井(サヰ)の二神を祭りしを。

はなして［話手］(名) はなしをする人。又、はなしの巧(タクミ)なる人。

はなしとぎ［話伽］(名) 話相手となりて、其人を慰むるもの。

はなしどり［放鳥］(名) 追善のために鳥を放ちやるを。

十はなしね［花稻］(名) 古昔、紙に米を包みて、幾個となく木につけ神に奉りしもの。

はなしべ［花蘂］(名) しべ。くわずゐ。

はなしほ（シオ）［花鹽］(名) 播磨國赤穗の名產にして花の形に製したる燒鹽。(印鹽)。

はなしやうぶ（ショウブ）［花菖蒲］(名)【植】鳶尾科に屬する草、花・葉共にかきつばたに似、初夏の頃、花開く、觀賞用として栽培せらる。

はなじゆんさい［花蓴菜］(名)【植】「あさざ」に同じ。

はなしる［鼻汁］(名) はなみづ。はな。(涕)。

はなじろ［鼻白］(名) ㊀魚鳥などの鼻端の白きを。㊁ぶりの成長第一期の稱。

十はなじろ・む（まみむむめめ）［鼻白］(自、ま四) 臆したる顏色をなす。

はな・す（さしすすせせ）［離］(他、さ四) ㊀解き分く。わかつ。㊁割き開く。さく。㊂遠ざけ隔つ。とほざく。㊃除

き去る。さる。㊃放ち遣る。はなつ。「鳥を—」。

はなす（さ・し・す・す・せ・せ）［話］（他、さ四）㊀告ぐ。いふ。かたる。「趣きを—」。㊁互にかたりあふ。かたらふ。（談）。

はなすげ［花菅］（名）【植】「ちも」に同じ。

はなすすき［花薄］（名）㊀穂の出でたるすゝき。㊁かさねの色目、表は白にして裏のうすはなだ色なるもの。

はなすすり［洟啜］（名）洟をすゝりながら泣くこと。

はなすぢ［鼻筋］（名）眉間より鼻さきまでの鼻の梁骨。はなぐき。（鼻梁）。

はなズハウ（ウーオ）［花蘇芳］（名）【植】荳科に屬する木、葉は互葉にして圓形をなし、花は紫色にして蝶形の花冠をなす、果實は莢をなし内に扁小なる種子を藏す、觀賞用として栽培せらる。（紫荊）。

はなずまふ（ーズモウ）［花相撲］（名）本場所の給金定めの相撲に對して、普通興行する相撲の稱。

＋**はなずり**［花摺］（名）萩又は露草の花を衣に摺（ス）りて色を染むること。——**ごろも**［花摺衣］（名）花ずりにしたる衣。

はなせきしやう（ーシヨウ）［花石菖］（名）【植】「いはぜきしやう」に同じ。

〔**はなせる**（自）話相手とするに足る。又、話しするによく物事わかる。

はなぞの［花園］（名）花の咲く草木を栽培せる園。はなばたけ。

はなぞめ［花染］（名）露草の花にて染めたる染色。——**ごろも**［花染衣］（名）花染の衣。

はなだ［縹］（名）㊀「はなだいろ」の略言。㊁かさねの色目、表も裏もはなだいろなるもの。——**いろ**［縹色］（名）薄き藍色。はないろ。

はなだか［鼻高］（名）㊀鼻の高きこと。（隆準）㊁

〔天狗の異稱。㊂古昔、俳優の履きし沓、ぴかう。

はなたか・し（く・しき・けれ）［鼻高］（形、二）得意なり。自慢す。はゆ。

はなたかだか・と［鼻高高］（副）いとほこりかに。いと得意らしく。

はなだか・に［鼻高］（副）得意げに。自慢らしく。

はなだかめん［鼻高面］（名）天狗の假面。

はなだぐさ［縹草］（名）【植】露草の異稱。

はなたたき［鼻叩］（名）小さきまゆはき、鼻の上の白粉を滑かにするに用ふるもの。

はなたちばな［花橘］（名）㊀花の咲ける橘の稱。㊁かさねの色目、表は朽葉色（クチバイロ）にして裏の青色なるもの。㊂【植】「なつみかん」の一名。

＋**はなだ・つ**（た・ち・つ・つ・て・て）［花立］（自、た四）花開く。さく。

はなたて［花立］（名）佛前又は墓前などに花・樒（シキミ）などを立て、供へおくもの。

〔**はなたらし**［洟垂］（名）㊀よくはなたるを垂れてゐる人。㊁女房などに甘くして意氣地なき人をのゝしりていふ詞。

＋**はなた・る**（ら・り・る・る・れ・れ）［洟垂］（自、ら四）はなみづたれ落つ。

はなたれ［洟垂］（名）「はなたらし」に同じ。

はなぢ［鼻血］（名）鼻腔より出づる血。（衄血）。

＋**はなちあ・ぐ**（げ・げ・ぐ・ぐる・ぐれ・げよ）［放上］（他、か下二）聲をはりあぐ。

＋**はなちいで**［放出］（名）古昔の家の作りかた、母屋より續けて出したるところ。

はなちうま［放馬］（名）放飼にする馬。又、つなぎおかざる馬。

はなちがき［放書］（名）文字を一つゞゝはなして書くこと。

はなちがひ（ーガイ）［放飼］（名）「はなしがひ」に同じ。

はなちごま［放駒］（名）「はなちうま」に同じ。

はなちじやう（ーヨウ）［放狀］（名）古昔、莊園などを人に讓り與ふるとき、其の由を記して渡し、狀。ゆづりじやう。

＋**はなちで**［放出］（名）「はなちいで」に同じ。

はなちどり［放鳥］（名）㊀翅（ハネ）などを切りて水に放ち飼ふ鳥。㊁「はなしどり」に同じ。

＋**はなちのかみ**［放髪］（名）たれがみ。ふりわけがみ。

はな・つ（た・ち・つ・つ・て・て）［放］（他、た四）㊀解きはなす。ゆるし遣る。（縱）。㊁しりぞけ遠ざく。しりぞく。㊂流罪に處す。ながす。（謫）。㊃追放に處す。おひはらふ。㊄發射す。とばす。いる。うつ。㊅開きはなす。ちらす。ひらく。㊆火をかく。火をつく。

＋**はな・つ**（た・ち・つ・つ・て・て）［除］（他、た四）とりのく。のぞく。

はなつき［鼻衝］（名）㊀礑（ハタ）と行き會ふとたん。てあひがしら。㊁距離近きこと。へだたり少なきこと。

＋**はなつ・く**（か・き・く・く・け・け）［鼻衝］（自、か四）主人より遠ざけらる。かんだうせらる。

はなつくり［花作］（名）花の咲く草木を培養する人。

はなづくゑ［花机］（名）㊀脚に花形の彫物ありて、經文・佛具などを載せて佛前に供ふる机。㊁花瓶を載（ノ）せおく机。

はなづつ［花筒］（名）花をいけおく筒。

はなづな［鼻綱］（名）牛の鼻に繋ぐ綱。

はなづの［鼻角］（名）犀の鼻の上にある短かき角。

はなつぶれ［鼻潰］（名）鼻のいとひらたきこと。

＋**はなづま**［花妻］（名）㊀花に對する萩の如く、常に其ものに連れ添ひたる花。㊁花を親しみていふ稱。

〔**はなつまみ**［鼻摘］（名）人に忌みいやしまるゝ人。

＋**はなつみ**［花摘］（名）花をつみとること。

はなづら［牛縻］（名）（鼻連の義）はなづな。（鼻綱、縻鼻）。

はなづら［鼻面］（名）鼻の端。はなさき。

はなどき［花時］（名）花のさかり。花の咲く頃。

はなどり［花鳥］（名）花にやどる鳥。

はなでしこ［花撫子］（名）かさねの色目、表は紫色にして裏のくれなゐなるもの。

はなばり（ーナ）［鼻紐］（名）はなづな。はなづら。

＋**はなにほひ**（ーニオイ）［花匂］（名）花のいろつや。馥郁。

はなねぢり［鼻捻］（名）あれ馬などを制するため、其鼻をねぢるための用具。

はなの［花野］（名）花のさける野邊。

はなのあに［花兄］（名）【植】梅の雅稱。四季の花の眞先に開く故に名づく。百花魁。

はなのあめ［花雨］（名）花にふりそゝぐ雨。

はなのあるじ［花主］（名）花の持主又は番人。

はなのうてな［花臺］（名）㊀はなぶさ。㊁「はちすのうてな」に同じ。

＋**はなのえ**［花枝］（名）花のさきたる枝。

はなのえん［花宴］（名）花見のさかもり。

はなのおとゝ［花弟］（名）【植】菊の雅稱。四季の花の最後に開く故に名づく。

はなのかげ［花影］（名）花のいろ。花の光。

はなのかほ（ーカオ）［花顏］（名）㊀花のかたち。花のけしき。㊁うつくしき顏。

はなのかほばせ（ーカオバセ）［花顏］（名）前條㊁に同じ。

はなのくも［花雲］（名）櫻のさき滿ちたるさまを雲にたとへていふ語。

はなのくわい［花會］（名）㊀生花（イケバナ）の會。㊁はなのえん。

はなのころ［花頃］（名）はなのさくころ。

＋**はなのころも**［花衣］（名）はなやかなる衣。

はなのさいしやう（ーシヨウ）［花宰相］（名）【植】芍藥の異稱。

はなのさかづき［花杯］（名）花見のえんのさかづき。

はなのさかり［花盛］（名）㊀はなざかり。はなどき。㊁最もはえさかるとき。㊂わかざかり。青年。「—の敦盛」。

はなのさき［鼻端］（名）㊀はなの尖端。㊁めのまへ。目前。㊂極めて近き所。てぢか。

〔**はなのした**［鼻下］（名）鼻の下方。——**がながい** 女に迷ひやすきにいふ。——**のこんりふ** 食のために稼ぐにいふ。

はなのもとのかうし（ーコウ）［花下好士］（名）連歌師の異稱。

はなのしやうじ（ーシヨウ）［鼻障子］（名）鼻腔の隔壁。

はなのすがた［花姿］（名）㊀花のありさま。㊁いとうつくしきすがた。

＋**はなのそで**［花袖］（名）花ぞめ衣のそで。

＋**はなのたもと**［花袂］（名）前條に同じ。

はなのつゆ［花露］（名）㊀花の上におく露。㊁薔薇の花を蒸溜したる水。（薔薇露）。㊂天花粉に油を加へたるもの。化粧用とす。

はなのとざし［花扃］（名）花のさきたる中にあるいへ。

はなのとぼそ［花樞］（名）前條に同じ。

はなのふぶき［花吹雪］（名）花のみだれ散るを吹雪にたとへていふ語。

はなのみやこ［花都］（名）宮城のある都の美稱。

はなのやま［花山］（名）花の多く咲きてある山。「此處小便無用—」。

はなのゆき［花雪］（名）花を雪にたとへていふ語。

はなのわう（ーヲウ）［花王］（名）【植】牡丹の異稱。

はなは（ハナワ）［塙］（名）山のさし出でたる所。又、土地の小高き處。

〔**はなばう**（ーボウ）［鼻坊］（名）自己の稱。

はなばかま［花苞］（名）「くわはう」に同じ。

はなばさみ［花鋏］（名）植物の枝をつむはさみ。

はなばしら［鼻柱］（名）鼻の雙孔を隔つる壁。はなのしやうじ。（鼻梁）。

はなはだ［甚］（副）過度に。いたく。いみじく。大いに。いと。（太、孔）。

はなばたけ［花畠］（名）草花を多くうゑ作る所。

はなはだ・し（しく・しき・しけれ）［甚］（形、二）過度に劇烈なり。過度に多大なり。いみじ。はげし。

はなばな・し（しく・しき・しけれ）［華華］（形、二）いとはなやかなり。いとりっぱなり。いとみごとなり。

はなばなと［華華］（副）はなやかに。りっぱに。

はなび［花火］（名）種々の火藥を調合して、これを張筒又は竹筒などに裝塡し、火を點じて高く空中に放ち、種々の光又は形を現はさしむるもの。（煙花）。

はなびし［花菱］（名）紋所の名、菱形の周圍を花瓣の如き形となしたるもの。

〔**はなひしげ**［鼻拉］（名）はなつぶれ。

＋**はなひせ**［鼻塞］（名）鼻竅の久しく通ぜずして鼻塞がること。

はなびせんかう（ーコウ）［花火線香］（名）㊀種々の火藥を調合して藁しべに附け又はこよりにより込みたるもの、これに火を點じて種々の光を發せしむ。せんかうはなび。㊁一時は非常の勢なれどやがて冷却する性質の人。

はなびら［花瓣］（名）「くわべん」に同じ。——**もち**［花瓣餅］（名）花瓣の如き形の餅。——

ゆき[花瓣雪](名) 花瓣の如き形の雪。

はな-ひる（ひ、ひ、ひる、ひる、ひれ、ひよ）[嚔](自、は上二) くさめをなす。

はな-ふき[鼻拭](名) 鼻をふく小さき布。

卄**はな-ぶくろ**[花袋](名) 「にほひぶくろ」の古稱。

はな-ぶさ[花房](名) ㊀【植】「がく」(蕚)に同じ。㊁ふさになりて咲く花の稱。「藤の—」。(英)。

はな-ふさがり[鼻塞](名) はなのあなのふさがると。

卄**はな-まじろぎ**(名) はなをうごめかすと。

はな-み[花見](名) 花を觀(ミ)てあそぶと。(おもに櫻に就いていふ)。

はな-み[花實](名) ㊀花と實と。㊁名と實と。㊂さかえ。榮華。「死んで—が咲くものか」。

は-なみ[齒並](名) 齒のならび。

は-なみ[葉並](名) 葉のそろふさま。「製茶の—」。

はなみ-ぐさ[花見草](名) 【植】冬菊の異稱。

はなみ-ざけ[花見酒](名) 花見に飲む酒。

⌒**はなみ-じらみ**[花見虱](名) 春の櫻花のさく頃、衣服の裘などに這ひ出づる虱。

はな-みぞ[鼻溝](名) 鼻孔の下より上脣へかけて、中央の窪(クボ)みたる處。(人中)。

はな-みち[鼻道](名) はなすぢ。(鼻梁)。

はな-みち[花道](名) 芝居にて、俳優が舞臺の正面より舞臺に出づるために設けたる細長き路。

はな-みづ[鼻水](名) はなしる。はな。(洟)。

はなみ-づき[花見月](名) ㊀陰曆三月の異稱。㊁或花の開くを見る月の稱。

はなみ-どき[花見時](名) 春に花見をする時節、即ち春のはなざかりの頃の稱。

はなみ-どり[花見鳥](名) 【動】鶯の異稱。(春鳥)。

卄**はな-みね**[鼻莖](名) 馬のはなぐき。

はなみ-ぶね[花見船](名) 井上の花をながむるため水上に浮ぶる船。

⌒**はな-むけ**[鼻向](名) 鼻を其方に向くると、即ち、其臭氣を受くると。「—もならず」。

はな-むけ[餞](名) (鼻向の義、もと旅立つ人の乘りたる馬の鼻を其行くべき方に向けなほしたるより起る)旅立ちする人に贈る品物又は詩歌の類。(贐、餞別)。

はな-むこ[花聟](名) 結婚當時の聟を呼びていふ稱。(新郎)。

はな-むしろ[花席](名) 「はなござ」に同じ。(花筵)。

はな-むすび[花結](名) 花をつかねくゝると。

はな-むすめ[花娘](名) 年わかく容貌うつくしき女。

卄**はな-め-く**（か、き、く、く、け、け）[華](自、か四) ㊀はなやかに見ゆ。㊁ときめく。

はな-もうせん[花毛氈](名) 花模樣ある毛氈。

⌒**はな-もち**[鼻持](名) 其臭氣を受け堪ふると。

はな-もつやく[花沒藥](名) 一種の繪具、闇き木を二つに割りたるが如き形をなすもの、新しき時は褐色にして、後には黄色に變ず。(紫鉚)。

はな-もとゆひ（イ―ユ）[花元結](名) 美(ウツク)しくそめたる元結。

はな-もみぢ[花紅葉](名) 花と紅葉と。

はな-もやう（ツ―ヨ）[花模樣](名) ㊀花の模樣。㊁うつくしき模樣。

はな-もり[花守](名) 花を守る人。花の番人。

はな-や[花屋](名) 花を賣る人又は家。

はな-やか[華](名) きらびやかなると。うるはしきと。はなばなしきと。

卄**はな-や-ぐ**（が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ）[華](自、か四) はなやかになる。はなばなしくなる。

はな-やくしや[花役者](名) 「はながたやくしや」(花形役者)に同じ。

はな-やしき[花屋敷](名) 多く草花などを培養して人の觀覽に供する園。

はな-やなぎ[花柳](名) かさねの色目、表は白にして裏の青なるもの。

はな-やまぶき[花山吹](名) かさねの色目、表は淡朽葉色にして裏の黄色なるもの。

はな-よめ[花嫁](名) 結婚當時の嫁を呼びていふ稱。(新婦)。

はな-よめご[花嫁御](名) 前條に同じ。

卄**はなり**[垂髮](名) ㊀ふりわけがみ。㊁ふりわけ髮の女兒。

卄**はな-る**（ら、り、る、る、れ、れ）[離](自、ら四) 次條に同じ。

はな-る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）[離](自、ら下二) ㊀解け分かる。㊁隔たり遠ざかる。㊂割け開く。「膠—」。㊃別れ去る。逃(ソ)る。㊄きづな解く。(放)。㊅緣絶ゆ。

はなれ[離](名) ㊀はなるゝと。距離。㊁はなれざしき。

はなれ-いは（ワ―イ）[離岩](名) 水中に孤立せる岩。

はなれ-うま[放馬](名) 繋ぎたる所よりはなれてある馬又は逃(ソ)れてはしる馬。(逸馬)。

はなれ-がたな-し（く、しき、けれ）[離難](形、一) ㊀未練多くして離れにくゝ思へり。㊁金錢を身よりはなすとを嫌へり。[illegible]。

はなれ-ごま[放駒](名) はなれうま。

はなれ-ざしき[離座敷](名) 母屋より離れて別に建てたる座敷。はなれや。はなれ。(子亭)。

はなれ-じま[離島](名) 陸より遠くはなれたる島。(孤島)。

はなれ-す[離洲](名) 陸より遠く離れたる洲。

卄**はなれ-そ**[離磯](名) 遠く海上に出でたる磯。

⌒**はなれ-にく-し**（く、しき、けれ）[離惡](形、一) はなるゝとつらし。

はなれ-や[離家](名) ㊀人里離れたる家。(孤家)。㊁はなれ座敷。(子亭)。

⌒**はなれ-る**[離](自) 「はなる」の訛。

はなれ-わざ[離技](名) 尋常の及ぶべからざる技藝。非凡なるわざ。(驚技)。

はな-わ[花環](名) 種々の造花にて環狀につくり、歡迎の意を表して呈するもの。

卄**はなわけ-ごろも**[花分衣](名) 花のさける野山を行くに着る衣。

はな-わらび[花蕨](名) 【植】蕨類に屬する羊齒植物、陰濕の地に生じわらびに似て小さき莖を有するもの。高さ五六寸。(陰蕨)。

はな-を[鼻緒](名) 履物の緒。——**ずれ**[鼻緒擦](名) 鼻緒にて擦れたる足の傷。

はな-をれ-だひ（イ―ヤ）[鼻折鯛](名) 【動】「まだひ」の異稱、其頭部方形にして鼻の折れたるが如くに見ゆるよりいふ。

はに[埴](名) 瓦・陶器などの料となす緻密なる粘土、上古はこれを衣に摺りつけて模樣をいだしたりといふ。ねばつち。あかつち。へな。

卄**はに-かみ**(名) はがみ。はぎしり。

卄**はにか-む**（ま、み、む、む、め、め）(自、ま四) はがみをなす。

⌒**はにか-む**（ま、み、む、む、め、め）(自、ま四) はぢらふ。はづかしがる。(羞澁)。

は-にく[齒肉](名) はじし。はぐき。

⌒**ば-にく**[馬肉](名) うまの肉。

卄**はにざふ**（サ―ソ）[半挿](名) 「はんざふ」に同じ。

卄**はに-し**[土師](名) 上古、埴輪を作りたる職、後には、葬式一切の事を掌るに至れり、垂仁天皇の御宇に、出雲の人野見宿禰が土偶を樹(タ)めて殉死に代へんとの議を上りして、土師(ハニシ)の姓を賜はりたるに始まる。

卄**はにし**[黃櫨](名) 【植】「はじ」の古稱。

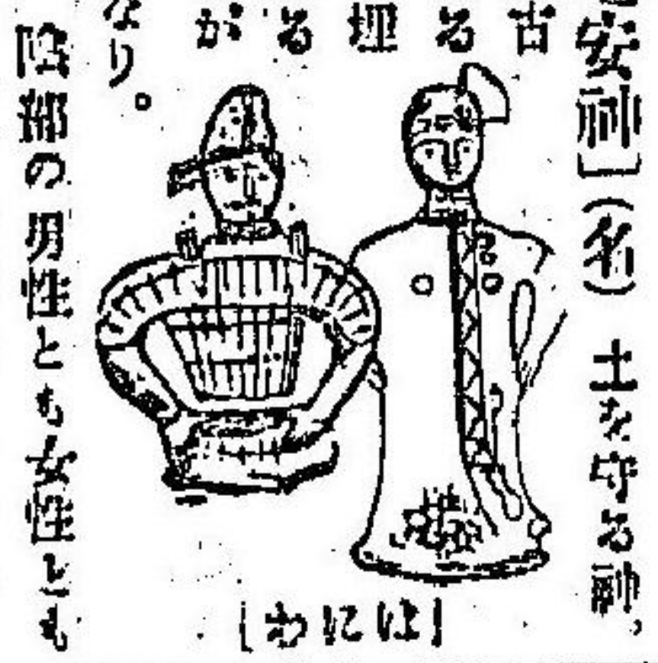
卄**はに-ふ**（フ）[埴生](名) 埴のある地。——**のこや**[埴生小屋](名) いやしきもの、住むいぶせき家。賤が伏屋。——**のとこ**[埴生床](名) 土の上に直に席を敷きたる床。

卄**はに-べ**[埴瓮](名) 瓦製の瓶。

卄**はに-ま**[埴馬](名) 古代、陵墓の周圍に立て列べたる瓦製の馬。

卄**はにやす-の-かみ**[埴安神](名) 土を守る神。

卄**はに-わ**[埴輪](名) 上古陵墓の周圍に埴にて作りたる人・馬・鷄などを半ば地に埋め立て輪の如くに列ねたるもの、殉死の人を生きながら埋むるに代(カ)へたるなり。



［はにわ］

⌒**はに-わり**[半割](名) 陰部の男性とも女性ともなり得るものゝ稱。又、陰部の男女兩性を有するものゝ稱。(人痾)。

は-にんじん[葉人參](名) 人參の根未だ長ぜずして嫩葉のみの食用となるときの稱。

は-ぬ（ね、ね、ぬ、ぬる、ぬれ、ねよ）[跳](自、な下二) ㊀をどりあがる。㊁飛散す。とびちる。㊂はじく。はぜる。「猫が—」。㊃其日又は其夜の興行終(ヲ)はる。

は-ぬ（ね、ね、ぬ、ぬる、ぬれ、ねよ）[撥](他、な下二) ㊀末を上げて拂ふ。㊁末を拂ひ上ぐ。「筆を—」。㊂投げ棄つ。㊃取り除く。㊄突き返へす。㊅頸を斬る。「首を—」。(刎)。㊆物の一部分を掠(カス)め取る。「あたまを—」。

は-ぬき[齒拔](名) 病める齒を拔くとなどを業とする人。

は-ぬけ[齒脫](名) 齒の脫(ヌ)けおつると。又、其人。

は-ぬけ-どり[羽脫鳥](名) 羽の脫け代はる時の鳥。

は-ぬひ（イ―ヌ）[端縫](名) 布などの端を細く折りて縫ふと。はしぬひ。

は-ね[羽根](名) ㊀鳥の羽の根。(翮)。㊁鳥の全身に生ぜる毛。㊂鳥類又は蟲類のつばさ。㊃矢の頭部に矧(ハ)ぎたる羽。㊄つくばね。羽子。「—を突く」。㊅器械などにて、翅の形に似たるもの。——**がはえてとぶ** 如何なる處にも故障なく用ひらる。——**をかはす** 次條に同じ。——**をならぶ** 鳥の雌雄がはねをならべて離れぬと、轉じて、男女常に相伴ひて離れぬと。

はね[跳](名) ㊀はぬると。㊁其日又は其夜の興行の終(ヲ)はると。㊂衣の裾(スソ)などに飛び散る泥。

はね[撥](名) 文字を書くに、筆を拂ひ上ぐると。又、筆を拂ひ上げて書くべき文字の部分。

ばね[彈機](名) 鋼鐵或は眞鍮などを螺旋狀に卷き或は彎曲せしめて彈性を貯へしめたるもの、種々の器械に用ひらる。

はね-あが-る（ら、り、る、る、れ、れ）[跳上](自、ら四) をどりあがる。とびあがる。

はね-あ-ぐ（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）[撥上](他、か下二) はねて上へあがらしむ。

はね-あり[羽蟻](名) 【動】「はあり」に同じ。

はね-う-つ（た、ち、つ、つ、て、て）[羽撃](自、た四) はたゝく。

はね-うま[跳馬](名) よくくるひはぬる馬。

はね-お-く（き、き、く、くる、くれ、きよ）[跳起](自、か上二) 身をおどらせておきあがる。

はね-おと[羽音](名) 「はおと」に同じ。

＋**はね-がき**【羽掻】（名）鳥の嘴（バシ）にて自ら羽をしごくと。

はね-か・く（けけくくる、くれけよ）【撥掛】（他、か下二）㊀はねてとばしかく。はねて散らしかく。㊁强ひて人に世話をせさす。むして人に取扱はさす。㊂己れの罪を人にあびせかく。

はね-か・す（さしすすせせ）【撥】（他、さ四）はぬるやうにす。とばしちらす。

＋**はね-かづら**【花鬘】（名）「はなかづら」に同じ。

はね-かへり【跳反】（名）㊀はねかへること。㊁物事のかるはずみなること。――**もの**【跳反者】（名）物事のかるはずみなる人。

はね-かへ・る（らりるるれれ）【跳反】（自、ら四）㊀跳ねてもとへもどり返る。はずみてかへる。㊁勢つよく跳ぬ、勢づよくもどる。

はね-ぎ【跳木】（名）架（カ）けわたすもの、兩端の下部に積みかさねて、其ものを支へもつ材木。

はね-ぐき【羽莖】（名）つばさの主要なる骨。

はね-ごろも【羽衣】（名）「はごろも」に同じ。

はね-ざいく【羽細工】（名）鳥の羽毛を用ひて細工すること。又、其細工物。

はね-しやうぎ【跳將棊】（名）「とびしやうぎ」に同じ。

＋**はね-ず**【唐棣】（名）【植】「にはうめ」の一名。――**いろ**【唐棣色】（名）紅色を帶びたる白色。

はね-ずみ【跳炭】（名）火に爆（ハ）ぜて飛ぶ炭。はしりずみ。（爆炭）。

［**はね-せん**【撥錢】（名）うはまへをはねたる錢。

はね-つき【羽子突】（名）羽子を突きて遊ぶこと。

はね-つ・く（けけくくる、くれけよ）【撥附】（他、か下二）はね付けてうけつけず。

はね-づくろひ【羽繕】（名）「はづくろひ」に同じ。

［**はね-つける**（他）「はねつく」の訛。

はね-つるべ【撥釣瓶】（名）柱の上に横木をわたし、其一方に石を載せ他の一方に釣瓶を懸け、石の重みにて撥ねて水を汲む裝置のもの。（桔槹）。

はね-ならし【羽習】（名）鳥のつばさをひろげて飛ぶことをならすこと。

＋**はね-ならはし**【羽習】（名）前條に同じ。

＋**はね-ならぶ-とり**【羽比鳥】（名）「ひよくのとり」（比翼鳥）に同じ。

はね-に【撥荷】（名）㊀荷物の中よりえり出しのぞきたるもの。㊁難船などのとき、海中に投げすてたる荷物。

はね-の・く（かきくくけけ）【跳退】（自、か四）身をおどらせて退く。とびのく。

はね-の・く（けけくくる、くれけよ）【撥除】（他、か下二）㊀[illegible]に除き去る。㊁つきのく。むしのく。

［**はね-のける**（他）前條の訛。

［**はね-ばうき**【羽帚】（名）「はばうき」に同じ。

はね-ばし【跳橋】（名）綱に懸けてつり上ぐる橋、即ち吊（ツ）橋。

はね-び【跳火】（名）爆（ハ）ぜて飛ぶ火。はしりび。（爆火）。

はね-まは・る（らりるるれれ）【跳廻】（自、ら四）方々をはねありく。

はね-むし【跳蟲】（名）㊀【動】彈尾類中跳蟲科に屬する小蟲、暗色にして粗毛あり、尾端に劍狀の附屬肢ありてよく跳躍す、水面又は陰濕の地に棲息す。とびむし。㊁かるはずみの人。

はね-もとゆひ【跳元結】（名）婦人の髮のかざりにかくる元結。

はね-やうじ【羽楊枝】（名）[illegible]（カ）をつくるに用ふる楊枝、細き柄の頭に羽をつけたるもの。

はね-やすみ【羽休】（名）鳥のしばらく飛ぶことをやめて羽をやすむること。

はね-やすめ【羽休】（名）前條に同じ。

［**はねる**【跳】（自）「はぬ」の訛。

［**はねる**【撥】（他）「はぬ」の訛。

＋**はね-を-かはせる-とり**（名）「ひよくのとり」（比翼鳥）に同じ。

は-の-じ【巴字】（名）㊀巴といふ字形。㊁もの、めぐりまはるさま。＋――**の-みづ**【巴字水】（名）古昔、三月三日の曲水の宴のとき、水上に巴の字をかきしより、曲水の宴の稱。

＋**は-のぼる-つゆ**【葉上露】（名）葉の上におく露。

パノラマ【Panorama】（名）中央を觀覽場とし適應の空地を隔てたる周圍の側壁に全面一幅の大繪畫を掲げ、其空地には繪畫の下部に接して畫中の形象にまぎるゝ假設物を設け、屋上より來る光線を利用して、觀者に實景を目擊する感あらしむる裝置のもの。（[illegible]畫）。

はは【母】（名）我を生みたる女親。又、父親の妻たる女。いろは、たらちね、はゝ、おや、をんなおや、めおや。（北堂、萱堂）。

はば【幅】（名）㊀面の一端より他の一端に至る距離、平面形の短き徑。㊁はぶり、勢力。――**がきく** はぶりよし。――**をきかす** 勢力をふるふ。

ばば（名）㊀父又は母の母。おほば。（祖母）。㊁としとりたる婦人。老女。（老媼）。

［**ばば**【屎】（名）大便の稱。（小兒の語）。

ば-ば【馬場】（名）（「うまば」の約）乘馬の練習をなす處。（調馬場）。

は-ばうき【羽帚】（名）鳥の羽をあつめてつくりたる帚、はねばうき、とりばうき。

はは-うへ【母上】（名）母の敬稱。

＋**はは-か**【波波加】（名）【植】「かばざくら」に同じ。

はは-かた【母方】（名）母の血筋。（外戚）。

＋**はばから-は・し**（しくしし、しけれ）（形、二）はゞかるべし。

はばかり【憚】（名）㊀はゞかること。おそるゝこと。きらふこと。かたんずること。㊁厠の稱。又、厠に行くことの稱。（婦人の語）。――**さま**【憚樣】（名）人を累はすときにいふ語。――**ながら**【乍憚】（副）㊀おそれ多き事なれど。㊁申しにくき事なれど。㊂口幅き言分なれど。

はばか・る（らりるるれれ）【憚】（自、ら四）ひろがりあまる。はだかりてあまる。

はばか・る（らりるるれれ）【憚】（自、ら四）㊀遠慮す。敬服す。おそる。㊁厭ひ忌む。いみきらふ。㊂むづかしと思ふ。かたんず。

＋**は-はき**【帚】（名）「はうき」の古言。――**ぎ**【帚木】（名）㊀【植】「はうきぐさ」に同じ。㊁（古昔、信濃國のそのはらふせやといふ所の森に、帚の如き梢ある木、立寄りて見れば其形なかりきといふ故事に出づ）情あるらしく見えて、實のなきにいふ語。㊂「まぶ」の異稱。（江戸吉原の隱語）。――**ぐさ**【帚草】（名）【植】「はうきぐさ」に同じ。――**ぼし**【帚星】（名）「はうきぼし」に同じ。（彗星）。

はばき【脛巾】（名）脛に纏（マト）ふ衣、脚絆。（脛衣、行纏）。

はばき【鎺】（名）刀の鍔（ツバ）の上下の際に裝置して、鍔元を固むる金具。

［**はば-きき**【幅利】（名）はゞのきくこと。はぶりのよきこと。又、其人。

＋**はは-くそ**【黑子】（名）ほくろ。はゝくろ。ほくそ。

＋**はは-くり**【貝母】（名）【植】「あみがさゆり」に同じ。

＋**はは-くろ**【黑子】（名）はゝくそ。

はは-こ【母子】（名）「はゝこぐさ」の略言。――**ぐさ**【母子草】（名）【植】菊科に屬する草、原野に自生す、葉はすべりひゆに似、稍く長くして白毛あり、冬も枯れず、春夏の交、黄色の花開く、ごぎやう。もちよもぎ。はゝこ。はうこ。ひきよもぎ。（鼠麴草）。――**もち**【母子餠】（名）母子草の葉をつきまぜたる餠。

はは-ご【母御】（名）母の敬稱。

はは-じや-ひと【母者人】（名）母の敬稱、芝居の臺詞（セリフ）などにて用ふ。

＋**はは-しろ**【母代】（名）母となりて後見する人。

ばば-すゑ【馬場末】（名）馬場の馬をのりかへす所。

＋**ははそ**【柞】（名）【植】「かしは」の古稱。（櫟）。――**はの**【柞葉】（枕）「はゝ」（母）に冠らする詞。――**はら**【柞原】（名）はゝその生ひしげれる野原。

は-ばたき【羽擊】（名）はゞたくこと。（鼓翼）。

は-ばた・く（かきくくけけ）【羽擊】（自、か四）鳥つばさをひろげ擊つ。はたく。

［**ばばっちい**（名）きたなきこと。又、きたなきもの。（小兒の語）。

は-はつてう【咧咧鳥】（名）【動】とさかのある一種の鳥、舌尖る、舌を切れば他のもの、聲を眞似すといふ。

はば・む（まみむむめめ）【阻】（他、ま四）さまたぐ。ふせぐ。さゝふ。とゞむ。

はば・む（めめむむるむれめよ）【阻】（他、ま下二）前條に同じ。

はば・む（まみむむめめ）【阻】（自、ま四）くじけ止む。おとろへ挫く。

はは-びと【母人】（名）はゝうへ。はゝご。

はば-びろ【幅廣】（名）幅の普通のものよりひろきこと。

＋**はばめ-ど・ふ**（はひふふへへ）【阻問】（他、は四）なじる。せむ。

ばば-もと【馬場本】（名）馬場の馬を乘り出す所。

は-ばり【刃針】（名）長さ二寸幅二三分許の雙刃（モロハ）の扁（ヒラ）き針、外科瘍治に用ふるもの、ひらばり。（披鍼）。

＋**はば・る**（らりるるれれ）（自、ら四）張りひろがる。

ば-はん【八幡】（名）（足利氏の末世に、九州邊の海賊一隊をなして明國に寇せしもの、八幡の神號を記したる旗を立てたるを明人の讀みて「ばつはん」といひしもの、轉音）國禁を犯して商船の外國に渡ること。ぬけあきなひ。（密賣買）。

はひ【灰】（名）㊀火の燃えつくしたる後に殘る粉末の物質。㊁活氣のたえ果てたるもの。「心――となる」。――**にす** 次條に同じ。――**になす** 燒きすつ。燒きはらふ。又、火葬にす。――**になる** 燒けてあとかたなくなる。又、火葬に附せらる。

はひ【蠅】（名）【動】「はへ」の轉。

は-び【端日】（名）奇數の日。はんの日。

［**ば-ひ**【馬皮】（名）うまのかは。

［**ば-び**【馬尾】（名）㊀馬の尾。㊁うまのす。

＋**ばひ-あ・ふ**（はひふふへへ）【奪合】（自、は四）互に奪ひて我ものとす。

＋**はひ-い・づ**（ででづづるづれでよ）【這出】（自、た下二）はひて出づ。

はひ-いろ【灰色】（名）稍や、うすぐろき色。鼠色。

＋**ばひ-・う**（えええうるうれえよ）【奪得】（他、あ下二）うばひとらんと爭ふ。

＋**はひ-うら**【灰占】（名）古昔、灰を搔（カ）きて吉凶を占ひしこと。

＋**はひ-え**【延枝】（名）はひのびたる枝。

＋**はひ-おく・る**（れれるるるれれよ）【灰後】（自、ら下二）（古昔、紫色を染むるに椿の灰を差しゝよりいふ）染色さむ。

はひ-おさへ【灰押】（名）次條に同じ。

はひ-おし（ハイ）［灰押］(名) 香爐などの灰をおさへ又はならす具。はひならし。(香鍬、香匙)。

はひ-おとし（ハイ）［灰落］(名) 巻煙草の灰をおとし入るゝ具。

はひ-かき（ハイ）［灰掻］(名) はひおさへ。はひおし。

はひ-かぐら（ハイ）［灰神樂］(名) 火の中へ湯水をこぼし又は火鉢などをかへして、灰のたちあがるを。

卄はひ-かへ・る（ハイカヘル）（ら・り・る・る・れ・れ）［灰返］(自、ら四)「はひかくる」に同じ。

〔はひ-から〕（ハイ）［灰殻］(名)「ハイカラ」に同じ。

卄はひき-の-かみ［波比岐神］(名) 旅行するもの、道中をまもるといふ神。

はひ-こ・む（ハイ）（ま・み・む・む・め・め）［這込］(自、ま四) ㊀はらばひして入りこむ。㊁よばひをなす。

はびこ・る（ら・り・る・る・れ・れ）［蔓延］(自、ら四) ㊀はびひろがる。のびひろがる。㊁ひろくおよぶ。あまねく行く。㊂勢さかんになる。つよくなる。

卄はひ-さ・す（ハイ）（さ・し・す・す・せ・せ）［灰差］(自、さ四) 古昔、紫色を染むるとき、其中に椿灰を入る。

卄はひ-しらが・ふ（バイシラガフ）（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）［称合］(他、は四)「はひあふ」に同じ。

〔はひ-ずみ〕（ハイ）［灰墨］(名)「はいずみ」(掃墨)の訛。

〔ば-ひつ〕［馬匹］(名) うま。「―改良」

はひ-つくば・ふ（ハイツクバフ）（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）［這蹲踞］(自、は四) 地に伏さんばかりに、つくばひかしこまる。

卄ばひ-と・る（バイ）（ら・り・る・る・れ・れ）［奪取］(他、ら四) うばひ取る。

はひ-ならし（ハイ）［灰均］(名) はひおし。はひかき。

はひ-ね（ハイ）［這根］(名) はひのびたる根。

はひ-の・る（ハイ）（ら・り・る・る・れ・れ）［這乘］(自、ら四) はふやうにしてのる。

〔はひ-はひ〕（ハイハイ）［這這］(名) はふを。(小兒の言)。

はひ-びやくしん（ハイ）［這柏心］(名)【植】びやくしんの變種、莖平臥して地上に這ふもの、觀賞用として栽培せらる。(蛇木、矮檜、矮柏)。

〔ば-ひ-ふう〕［馬脾風］(名)「ヂフテリア」に同じ。

はひ-ふき（ハイ）［灰吸］(名) 煙草の吸殻を打(タ)き入れ又は唾などを吐き入るゝ筒。(唾壺)。

はひ-ふき（ハイ）［灰吹］(名) 銅と銀とを吹き分くる方法、ふいごの口に灰にて土手を築きて吹くもの。

はひ-ぶし（ハイ）［這伏］(名) はらばひふすを。

はひ-ふ・す（ハイ）（さ・し・す・す・せ・せ）［這伏］(自、さ四) はらばひてふしかゞむ。

はひ-ふるひ（ハイフルイ）［灰篩］(名) 灰をふるひて、中にまじりたるものを取り去るに用ふるふるひ。

〔ば-び-ほう〕［馬尾蜂］(名)【動】膜翅類に屬する小さき昆蟲、全身赤褐色なり、翅は飴色にして週(コ)き斑紋あり、尾に馬毛の如き長き産卵管を有す。

卄はひ-まぎ・る（ハイ）（れ・れ・る・るる・るれ・れよ）［這紛］(自、ら下二) はひりこみてわからぬやうになる。

〔はひまぎれる〕(自) 前條の訛。

卄はひ-まゆみ（ハイ）［杜仲］(名)【植】「まさき」の古稱。

はひ-まつ（ハイ）［這松］(名) 高山に生ずる松、風雪の强きがため、其枝幹地に伏しはふ。

はひ-まつは・る（ハイマツハル）（ら・り・る・る・れ・れ）［這纏］(自、ら四) まきつく。からみつく。

はひ-まは・る（ハイマワル）（ら・り・る・る・れ・れ）［這廻］(自、ら四) あちこちをはひありく。

はひ-みづ（ハイ）［灰水］(名) あくみづ。あく。

はひ-も（ハイ）(名) 竹の根の傍に出て、筍の狀をなすもの。

卄はひ-もとほ・る（ハイモトオル）（ら・り・る・る・れ・れ）(自、ら四) はひまはる。

卄はひり（ハイ）［這入］(名) 家のいりぐち。

はひ・る（ハイ）（ら・り・る・る・れ・れ）［這入］(自、ら四) 入る。

はびろ［葉廣］(名) 葉のひろきを。

はひ-わた・る（ハイ）（ら・り・る・る・れ・れ）［這亙］(自、ら四) はびこる。

はふ［破風］(名) 家の兩側面たる屋根の切棟の兩下して山形をなす所。(搏風)。

〔は-ふ〕［霸府］(名) 武家時代に、將軍の大政を處理する所。幕府。

〔はふ〕（ホウ）［法］(名) ㊀おきて。法令。㊁のり。法則。㊂ゐや。禮儀。㊃てほん。模範。㊄みち。道理。㊅刑罰。制裁。㊆きめ。さだめ。㊇てだて。しかた。㊈【數】割算にて、實を割る數の稱。

は・ふ（ハウ）（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）［這］(自、は四) ㊀手と足とを地につけて行く。はらばふ。㊁體を地につけて行く。㊂まとはりて傳ひ行く。㊃のび行く。はびこる。(延)。

卄は・ふ（ハウ）（へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ）［延］(他、は下二) 張りわたす。のべ引く。「繩延き―」。

はぶ(名)【鑛】靑色を帶びたる黑色の雲母(キラ)。

はぶ［波布］(名)【動】蛇類に屬する爬蟲、頸部細く頭部大きくして恰も飯匙の如し、全身灰褐色若しくは錆黄色にして黑紋あり、身長五六尺に及ぶ、毒牙を有し、樹上又は叢陰にひそみて人畜を咬(カ)む、其毒甚猛烈にして咬まれたる者は大抵斃死し若しくは殘廢となる、我國にては大島(薩摩國)又は琉球等に産す。(飯匙蛇)。

〔ば-ふ〕［馬夫］(名) うまかひ。まご。

〔はふ-あん〕（ホウ）［法案］(名) 法律の案文。

〔はふ-か〕（ホウ）［法家］(名) 法律を修むるもの。又、法律に通じたるもの。

〔はふ-が〕（ホウ）［法衙］(名) 司法の官衙、即ち裁判所。

〔はふ-がく〕（ホウ）［法學］(名)【法】政治・法律・經濟の原理を研究する科學。

はぶか・る（ら・り・る・る・れ・れ）［省］(自、ら四) 除(ノゾ)かれて減る。

はふ-き（ホウ）［法規］(名) 法律命令又は國際間の規定等の總稱。

〔はふ-ぎ〕（ホウ）［法義］(名) 法の意義。

卄は-ぶき［羽振］(名) はぶくを。はたゝき。

はぶき［省］(名) はぶくを。

卄はぶ・く（か・き・く・く・け・け）［羽振］(自、か四) 羽をうち振る。はたゝく。

はぶ・く（か・き・く・く・け・け）［省］(他、か四) ㊀除去す。のぞく。㊁節約す。つゞむ。㊂減少す。へらす。㊃卄やつす。

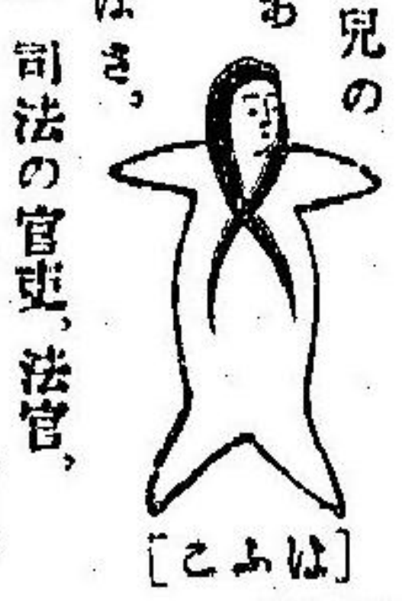
〔はふ-くわ〕（ホウ）［法貨］(名) 國法上强制的に通用せしむる貨幣。

〔はふ-ぐわい〕（ホウ）［法外］(名) 道理の外。又、常規の外。

〔はふ-くわん〕（ホウ）［法官］(名) 司法の官吏。裁判官。

〔はふ-けん〕（ホウ）［法憲］(名) のり。おきて。

はふ-こ（ホウ）［這子］(名) 小兒の這ふさまに製したる玩具。おまがつ。(母子)。


［こふは］

卄はぶさ［羽總］(名) つばさ。

〔はふ-さう〕（ホウ）［法曹］(名) 司法の官吏、法官。

はぶし［羽節］(名) はぐき。(羽莖)。――ざけ［羽節酒］(名) 雉の羽節の肉を入れ少しく鹽をまぜてつくりたる酒。

〔はふ-しき〕（ホウ）［法式］(名) のり。かた。おきて。

〔はふ-しやう〕（ホウシヤウ）［法相］(名) 司法大臣の異稱。

〔はふ-じゆつ〕（ホウ）［法術］(名) ㊀てだて。しかた。㊁法學の應用。

〔はふ-じん〕（ホウ）［法人］(名)【法】自然人にあらずして法律上人格を與へられ權利義務の主體たるもの、卽ち、人類若しくは物の集合體なり、社團法人と財團法人とあり。

〔はふ-せい〕（ホウ）［法制］(名) 制定せられたる治國の法律。――きよく［法制局］(名) 內閣に隸し、內閣總理大臣の命に依りて法令を起草し、又は法令の制定・改廢の意見を上申し、又は各省大臣より內閣に提出せる法令案を審査する等の事務を掌る所。

〔はふ-そく〕（ホウ）［法則］(名) 原因結果の規定、行爲動作の準則。のり。

はぶたへ（エ）［羽二重］(名) 薄く滑かにして光澤ある平織の絹布、生絲にて緻密に織り精練したるもの。――はだ［羽二重肌］(名) きめ細かくして白き肌。

〔はふ-ち〕（ホウ）［法治］(名) 法律命令を設定し、これに準據して政治を行ふを。――こく［法治國］(名) 政治の形式が一定の法律命令によりて行はるゝ國。

はふ-づくり［破風作］(名) 家の作方、棟を山形につくりて其兩端に破風を設くるもの。

〔はふ-てい〕（ホウ）［法廷］(名) 裁判官が訴訟を審理する場所。しらす。

〔はふ-てい〕（ホウ）［法定］(名) 法令によりて規定せられたるを。――かかく［法定價格］(名) 法令によりて規定せられたる價格。――くわじつ［法定果實］(名)【法】物の使用の對價として受くべき金錢及其他のもの、例へば利息・地代の如き是なり、天然果實の對。――くわへい［法定貨幣］(名)「はふくわ」(法貨)に同じ。――ざいさんせい［法定財產制］(名)【法】夫婦間に於ける財產上の關係を規定せる制度。――だいりにん［法定代理人］(名)【法】特別に委任を受けずとも、法律上當然に代理關係ある人、例へば後見人は未成年者の法定代理人なる類。――りそく［法定利息］(名) 法定利率によれる利息。――りりつ［法定利率］(名) 法律にて規定したる利息の元金に對する割合。

〔はふ-でう〕（ホウヂヨウ）［法條］(名) ㊀のり。おきて。規則。㊁法律の條文。

〔はふ-でふ〕（ホウヂヨウ）［法帖］(名) 古人の手蹟を石摺にしたる折本。

〔はふ-てん〕（ホウ）［法典］(名) ㊀のり。おきて。さだめ。㊁同一種類に屬する法律をあつめたるもの。

〔はふ-ど〕（ホウ）［法度］(名) のり。おきて。

卄はふ-に［白粉］(名) おしろい。

卄はふ-はふ（ホウホウ）［這這］(名、副) ㊀辛(カラ)うじて步み行くさまにいふ語。㊁辛うじて逃げ行くさまにいふ語。――のてい［這這體］(名) 散々にくるしめられ辛うじてのがれたるを。

〔はふ-ふく〕（ホウ）［法服］(名) ㊀規定の衣服。㊁判事・檢事又は辯護士が法廷にて着用すべき制服。

〔はふ-ぶん〕（ホウ）［法文］(名) 法令の文章。

〔はふ-まう〕（ホウモウ）［法網］(名) 法律が犯罪者をしてまぬかれしめざるさまをあみにたとへていふ語。

〔はふ-む〕（ホウ）［法務］(名) 法律上の事務。――きよく［法務局］(名) 軍事上の司法・監獄・特赦・罪人引渡等の事項を掌る陸軍省の一局。

卄はふらか・す（さ・し・す・す・せ・せ）［放］(他、さ四) すてやる。うちすつ。

卄はふら・す（さ・し・す・す・せ・せ）［放］(他、さ四) 前條に同じ。

卄はふり［祝］(名) かんなぎ。かんぬし。(神職)。

卄はふり［葬］(名) はうむり。葬送。

〔はふ-り〕（ホウ）［法理］(名) 法律全體に共通する原理。

〔はふ-り〕（ホウ）［法吏］(名) 司法の官吏。

は-ぶり［羽振］(名) ㊀羽を振ふを。㊁羽の樣子。

㊂世に立ついきほひ。人に對する面目。「—よき當世才子」。

十はふり-こ[祝子](名) はふり。

はふり-だ・す[放出](他、さ四) ㊀なげだす。なげとばす。㊁あらく出す。つき出す。㊂其ものを犠牲に供す。

(はふ-りつ)[法律](名)【法】廣義にては、主權者の認定又は制定したる人類の共同生活の規則。狹義にては、帝國議會の協賛を經て制定せられたる規則。——あん[法律案](名) 法律の草案。——か[法律家](名) 法律を修むる人。又、法律にあかるき人。——かうゐ[法律行爲](名)【法】私法上の効果を生ぜしむるを目的とする意思表示。私權の發生・變更・移轉・消滅の原因たる行爲。——がく[法律學](名)【法】「はふがく」(法學)に同じ。——がくしや[法律學者](名) 法律學を修むる人。又、法律學に通じたる人。——くわんけい[法律關係](名) 法律上に於ける人と人と若しくは人と物との關係。——や[法律屋](名) 法律家をのゝしりていふ語。

十はふり-と[祝人](名) 「はふり」に同じ。

十はふり-め[祝女](名) かんなぎ。みこ。

十はふり-もの[葬物](名) 葬式の用具。

(はふ-りよく)[法力](名) 法の威力。法の効力。

はふ・る[放](他、ら四) ㊀なげやる。なげとばす。㊁うちすつ。すてゝおく。

十はふ・る[葬](他、ら四) 死者を野邊に送りて土中に埋む。葬送す。はうむる。

十はふ・る[放](他、ら四) ㊀はなちやる。㊁はなち散らす。

十はふ・る[放](自、ら下二) ㊀散り亂る。㊁さまよふ。さすらふ。

(はふ-れい)[法令](名) ㊀のり。おきて。㊁法律と命令と。

(はふ-れい)[法例](名) ㊀おきて。さだめ。㊁すべての法令に通ぜらるべき規則。

はふれい-わた[法令綿](名) 打ちたるもめん綿。(綿綿)。

(ば-ふん)[馬糞](名) 馬の糞。——し[馬糞紙](名) ㊀下等なる唐紙。㊁藁を原料としたる一種の紙、質粗糙にして厚く黄色なり、書籍の表紙又は紙箱などの料に供せらる。ボール紙。

はへ[蠅](名)【動】雙翅類に屬する昆蟲、身長三分許、三對の脚を有す、春より秋にかけて、食物などに集まる、種類多し、其幼蟲を蛆といふ。(蒼蠅)。

(は-へい)[頗僻](名) よこしま。又、かたむき。

十はへ-き[榱](名) たるき。

はへ-ぢやう[蠅帳](名) 食物を入るゝ、小さき廚子、四面に紗などを張れるもの。

はへ-とり-ぐさ[蠅捕草](名)【植】馬鞭草科に屬する草、山中の濕地に自生す、葉は新月形をなして互生す、葉身に粘液あり、蠅これに觸るれば粘着す、花は長き穗狀花房に排列し、花冠は淡紫紅色にして唇狀をなす。(茅膏菜)。

はへ-とり-ぐも[蠅捕蜘蛛](名)【動】蜘蛛の一種、大いさ三四分許、板上又は壁上などに徘徊し、よく跳躍して蠅を捕ふ。(蠅虎)。

はへ-とり-ばな(名)【植】「はへとりぐさ」に同じ。

はへ-とり-むし[蠅捕蟲](名)【動】「かまきり」の異稱。

はへ-の-こ[蠅子](名) うじ。

はへ-はらひ[蠅拂](名) 蠅を拂ふ拂子(ホッス)。

十はへ-むし[蠅蟲](名) 人をいやしみいふ語。

はべ・り[侍](自、ら變) ㊀貴人の側に伺候す。はんべる。さぶらふ。㊁「在り」「居り」の敬語。

(は-へん)[破片](名) こはれたるかけ。——がん[破片岩](名) 破片の集合して成りたる岩石。

(ば-べん-さう)[馬鞭草](名)【植】馬鞭草科に屬する草、原野に自生す、高さ二三尺、葉は對生し細かき鋸齒あり往々分裂す、花は夏開き小形紫色にして穗狀花序に排列す。まつゞら。

は-ぼたん[葉牡丹](名)【植】十字花科に屬する草、高さ一二尺、葉は綠色を帶び牡丹の花の如く相重なる、花はあぶらなに似て、淡黄色なり。(甘藍)。

は-ほん[端本](名) 全部の揃はぬ書物。卷册缺(カ)けて足らぬ書籍。

はま[濱](名) ㊀湖又は海に沿(ソ)ひたる水ぎはの平地。㊁圍碁にて、あげ石の稱。(死子)。

はま-かぜ[濱風](名) 濱に吹く風。「幽靈に—」。

(は-まき)[葉卷](名) 「はまきタバコ」の略言。

はま-ぎく[濱菊](名)【植】菊科に屬する草、葉は長倒卵形にして鋸齒を有す、花は大形にして長き花梗の頂上に生じ、舌狀花は白色にして頭狀花は黄色なり、觀賞用として栽培せらる。

はまき-タバコ[葉卷煙草](名) 煙草の葉を捲きて製したる卷煙草。

はま-ぐり[蛤](名) (濱栗の義、栗の實に似たればいふ)【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、介殼は黑色又は褐色の斑點を有し、卵圓形にして緣邊は平滑なり、淺海の汀砂中に棲息す、我國東海及内海に多く産す。(蚌、蜊)。——うり[蛤賣](名) 蛤をうりあるく人。——なべ[蛤鍋](名) 一種の料理、蛤のむきみを味噌にて煮たるもの。——は[蛤刃](名) ㊀刀の刃を研(ト)ぎつけぬもの。㊁木劍の稍々圓筒狀をなすもの、「—の木劍」。

はま-ごり(名)【植】「はまばひ」に同じ。

はま-すがな[濱菅菜](名)【植】「ばうふう」に同じ。

はま-すげ[濱菅](名)【植】莎草科に屬する草、海邊に生ず、地下莖を有し、葉は狹長深綠色にして叢生す、花は赤褐色にして小穗狀花序をなし、花柱は三裂す、地下莖の有する塊を藥用とし、香附子といふ。(莎草)。

はま-ぜり[濱芹](名)【植】「ひるむしろ」に同じ。

はま-だ[濱田](名) 濱にある田。

(はま-ち)[魬](名)【動】「いなだ」に同じ、(關西地方の方言)。

はま-ぢ[濱路](名) 濱邊の路。磯路。

はま-ちどり[濱千鳥](名) 濱邊に遊ぶ千鳥。

十はま-ちどり[濱千鳥](枕) 「あと」に冠する詞。

はま-ちりめん[濱縮緬](名) 近江國長濱地方より産出する上品なる縮緬。

はま-づと[濱苞](名) 濱邊より持ち來るみやげもの。

はま-つばき[濱椿](名)【植】「はまばひ」に同じ。

はま-つら[濱面](名) 濱邊のおもて。

はま-て[濱手](名) 濱邊の方。

十はま-な[濱菜](名) 濱邊に生ずる蔬菜。

はま-なし[濱梨](名)【植】「いはなし」に同じ。

はま-なす[濱茄](名)【植】薔薇科に屬する草、莖は密生せる刺を有し葉は短細なる毛を具す、花は大形紅色にして稍や球形をなせる萼筒を有し香氣あり、觀賞用として栽培せられ、又、根皮は染料に花は藥用に供せらる。(玫瑰、蕣瑰)。

はま-なつめ[濱棗](名)【植】鼠李科に屬する木、葉は二寸内外にして三大脈を有しなつめに似る、嫩枝は密生毛を具し、果實は乾果にして上部の周圍に環狀の緣邊を有す。

はまな-なっとう[濱名納豆](名) 遠江國濱松(もと濱名と稱す)大福寺より製出し創めたる納豆、黑大豆に小麥粉の麴(カウヂ)を加へ、山椒・生薑などを刻み込み、密封して醱(カモ)すもの。(鼓豉)。

十はま-にがな[濱苦菜](名)【植】「ばうふう」の古稱。

はま-にんじん[濱人參](名)【植】「はまぜり」に同じ。

はま-ばうふう[濱防風](名)【植】繖形科に屬する草、海濱に自生し、田畝にも栽培せらる、葉は複葉にして芹に似、花は夏開き、白色小形にして複繖形花序に排列す、嫩葉は食用に供せらる。(珊瑚菜、石防風)。

はま-ばた[濱端](名) はまべ。海濱。

はま-ばひ[蔓荊](名)【植】馬鞭草科に屬する灌木、水邊の砂中に生ず、葉は單葉にして下面は灰白色を呈し、花は黄色若しくは深紫色なり、果實は胡椒より大きく仁は藥料に供せらる。はまごう。

十はま-び[濱邊](名) 「はまべ」に同じ。

十はま-びさし[濱庇](名) 濱邊の家。

はま-びし[濱菱](名)【植】蒺藜科に屬する草、海濱に生ず、莖は平臥し、葉は偶數羽狀複葉をなす、花は五瓣黄色にして夏の頃開き、實の大いさ三分許にして針狀の突起あり。(蒺藜、旱草)。

はま-びと[濱人](名) 濱邊に住む人。漁人。

十はま-ひめ[濱姫](名) 濱邊にすむ女。

はま-ふね[濱船](名) 濱邊の船。

はま-べ[濱邊](名) 湖又は海の水にそひたる平地。「はま」。

はま-ぼう[濱榛](名)【植】錦葵科に屬する草、海濱に自生す、葉は廣倒卵形にして下面に短き柔毛を有し、花は大形黄色にして脚部に紅色を帶ぶ、纖維は種々の用に供せらる。きむくげ。

はま-まつ[濱松](名) ㊀濱邊に生ずる松。㊁黑色の珊瑚樹。

はま-や[濱屋](名) 濱邊にある家。

はま-やき[濱燒](名) 一種の料理、鯛を蒸燒にしたるもの。——だひ[濱燒鯛](名) 濱燒にしたる鯛。

はま-ゆか[濱床](名) 上古使用せられし貴人の坐床、三尺四方にして高さ一尺許の臺を四つ列べ、四隅に柱を立て、帳を垂れたるもの。

十はま-ゆふ[濱木綿](名)【植】石蒜科に屬する草、海岸に自生す、莖芭蕉に似、葉は大形多肉なり。(文珠蘭)。

はマ-ゆみ[破魔弓](名) 新年に兒の弄ぶ弓矢。

はまり[塡](名) はまること。——やく[塡役](名) 其人に最も適當なる役前。

はま・る[塡](自、ら四) ㊀ほどよく入る。「太刀が鞘に—」。㊁適當す。㊂納得す。㊃〜おちいる。おちこむ。㊄〜おぼる。ふける。

はま-ゑんどう[濱豌豆](名)【植】荳科に屬する草、海邊に自生す、莖は平臥し、葉はゑんどうに似る、花は初夏に開き初は紫色にして後に碧色となる、花時甚だ久し。のゑんどう。

はま-をぎ[濱荻](名) ㊀濱邊の荻。㊁【植】蘆の異稱。(伊勢國の方言)。

十はみ[蝮蛇](名)【動】「まむし」に同じ。(蝮)。

はみ[馬銜](名) ㊀くつわの馬の口に中たる部分。㊁悍馬の口にはませて綰(ワ)りおくもの。

は-みがき[齒磨](名) 楊枝につけて齒を磨く粉。——こ[齒磨粉](名) 前條に同じ。

(はみ-だ・す)[食出](自、さ四) 餘りて間より外へあらはれ出づ。

(はみ-で・る)[食出](自、た下一) 前條に同じ。

＋＋はむ［鱧］（名）【動】「はも」に同じ。

ハム［Ham］（名）ふすべて鹽漬にしたる豚の股の肉（火腿）。

＋＋は・む（まみむむめめ）［食］（他、ま四）㊀くらふ。くふ。㊁知行を受く。

は・む（めめむむむれめよ）［塡］（他、ま下二）㊀入れこむ。さしこむ。（嵌）。㊁當つ。あてがふ。「戸を—」。㊂おとしいる。おとす。「計略に—」（陷）。

ば・む（まみむむめめ）（自、ま四）はのめき現はる。「氣色—」。

は・むかひ［齒向］（名）はむかふこと。敵對。

は・むか・ふ（はひふふへへ）［齒向］（自、は四）㊀嚙みつかんとす。㊁さからひむかふ。てきたいす。抗敵。

は・むけ［羽向］（名）鳥の羽の向けやう。

は・むし［羽蟲］（名）【動】寄鷄蟲の一種。鳥の羽毛の間に寄生するもの。

は・むしや［端武者］（名）㊀雜兵。歩卒。㊁地位低き部下。

はめ［羽目］（名）㊀板を張りて隔壁となしたるもの。㊁窮迫の場合。こまるなり。——いた［羽目板］（名）羽目の板。——をはづす　興に乘じて程を忘る。

はめ・こみ［塡込］（名）はめこむこと。又、其つくり。

はめ・こ・む（まみむむめめ）［塡込］（他、ま四）入れこむ。

（は・めつ［破滅］（名）やぶれほろぶること。

はめ・はづし［塡外］（名）はめこむととりはづすと。

〔はめる［塡］（他）「はむ」の訛。

（は・めん［波面］（名）㊀なみのおもて。水面。㊁【理】波動の傳達する面。

ば・めん［場面］（名）㊀ばしよ。ばせき。㊁ばしよのおもて。ばしよのさま。

（ば・めん［馬面］（名）㊀馬のかほ。㊁馬のかほにかぶらする面。㊂うまかほ。うまづら。——よろひ［馬面鎧］（名）古昔、乘馬の面にかぶらせしよろひ。

はも［鱧］（名）【動】喉鰾類中はも科に屬する魚。體細は圓筒形をなし尾部に至りて漸く側扁となる。皮膚粘滑にして背部は淡黑色、腹部は白色なり。身長普通三尺餘、性猛烈よく物を咬（カ）む。肉に小刺多けれど美味なり。九州・四國の近海及瀨戸内海等に多く産す。（海鰻鱺）。

は・もち［葉餅］（名）木の葉につゝみたる餅。即ちかしは餅の類。ちまき。

は・もの［端物］（名）はしたなる物。そろはぬ物。

は・もの［刃物］（名）刃のあるもの。きれもの。——ザンマイ［刃物三昧］（名）ともすれば刃（ハ）物をふりまはすこと。又、みだりに刃物をふりまはすこと。——し［刃物師］（名）刃物を製作する人。

は・もり［羽盛］（名）一種の料理。燒鳥の兩羽兩足を其飛ぶときの如きさまにして鉢に盛るもの。

＋＋はもり・の・かみ［葉守神］（名）樹木を守る神。

（は・もん［破門］（名）㊀師弟の關係を絶ちて門下より除斥すること。㊁信徒たる資格を奪ひて、宗門より除斥すること。

は・や［甲矢］（名）一手二本の矢の中、初めに射る矢。乙矢（オトヤ）の對。

は・や［鮠］（名）【動】「はえ」に同じ。（關東の方言）。

は・や［早］（副）㊀すでに。もはや。㊁とく。はやく。すみやかに。

は・や—［早］（接頭）或語に冠して、はやき意義を表する語。

ば・や（助）希望の意を表する語。たい。たし。「歸ら—」。「行か—」。

はや・あし［早足］（名）急速なる歩調。いそぎあし。

はや・いと［早絲］（名）絲車と紡錘（ツム）とにかけわたす絲。よらべいと。

はや・うた［早歌］（名）㊀神樂歌（カグラウタ）の曲名。㊁小唄。はやりうた。——うたひ［早歌謠］（名）早歌をうたふ人。

はや・うち［早打］（名）馬を馳（ハ）せて急報すること。又、其人。

はや・うち・かた［早打肩］（名）俄に肩の充血して痛む病氣。

はや・うま［早馬］（名）㊀早打（ハヤウチ）の乘りて急ぎ馳（ハ）する馬。㊁よく疾走する馬。

はや・うり［早瓜］（名）普通のものより早く生（ナ）りたる瓜。

はや・おき［早起］（名）朝早くおき出づること。

はや・おひ［早追］（名）晝夜休む時なく、駕籠を飛ばして急報する使者。飛脚。（飛使）。

はや・がき［早書］（名）はやく書くこと。

はや・がね［早鐘］（名）火急の知らせに烈（ハゲ）しく撞（ツ）く鐘又は半鐘の音。（警鐘、急鐘）。

はや・かは［早川］（名）流れのはやき川。——の［早川］（枕）「ゆかくも知らず」に冠らする詞。

はや・がはり［早變］（名）㊀早く姿を變（カ）ふること。㊁芝居にて、役者がすばやく姿を變へて、前後相異なる役を一人にて演ずること。

はや・がへり［早歸］（名）㊀いつもの時刻より早く歸へること。はやびけ。㊁朝早くかへること。

（は・やく［破約］（名）約束を履行せざること。又、約束を取消すこと。

は・やく［端役］（名）主要ならざる役。はしたの役。

はやく［早］（副）㊀すみやかに。さっそく。㊁にはかに。たちまちに。㊂さきに。とくより。㊃すでに。はや。㊄あしたに。つとに。

はや・くち［早口］（名）ものいひやうの早きこと。ことばのすみやかなること。（捷舌）。

はや・ご［早具］（名）火藥を込めたる小さき紙筒、小銃に込めて彈丸を發射するに用ふるもの。「パトロン」（火藥包）。

はや・ごう［早具］（名）前條に同じ。

はや・ごと［早言］（名）「はやくち」に同じ。

はや・さ［早］（名）はやきこと。又、はやき度合。（速）。

はや・ざき［早咲］（名）普通のものより早く咲く花。おそざきの對。

＋＋はや・さめ［暴雨］（名）にはかあめ。むらさめ。

はやし［林］（名）㊀樹木のむらがり生じてある所。㊁轉じて、物事の多く集まりたるもの。「辭の—」。

はやし［囃子］（名）能樂・芝居其他諸種の演藝に、拍子（ヒヤウシ）をとり又は賑はすため、笛・太鼓又は腰鼓若しくは三味線などを合奏すること。

〔はやし（名）細かにきりきざむこと。

はや・し（くしきけれ）［早］（形、二）㊀疾速なり。すみやかなり。とし。㊁敏捷なり。するどし。すゝどし。㊂急激なり。はげし。あらし。「氣—」。㊃まへなり。さきなり。㊄時刻未だ來らず。物事未だ到らず。

はやし・かた［囃子方］（名）囃子を演ずる人。

〔はや・しまひ［早仕舞］（名）いつもの時刻より早く仕舞ふこと。

＋＋はやしも［鞭］（名）「むち」の古稱。

はやし・もの［囃子物］（名）囃子に用ふる樂器。

はや・す（さしすすせせ）［生］（他、さ四）生ぜしむ。おひたゝしむ。のばす。「髭を—」。

はや・す（さしすすせせ）［囃］（他、さ四）㊀面目をして映（ハ）えあらしむ。ほむ。たゝふ。「はめ—」（稱揚）。㊁聲をたて、歌曲の調子を取る。㊂囃子（ハヤシ）を行ふ。㊃聲を發して嘲（アザケ）る。

〔はや・す（さしすすせせ）（他、さ四）細く切りきざむ。

はや・ず［早醋］（名）粟又は糯（モチゴメ）などにてつくる醋。こんず。

はや・ずし［早鮨］（名）一種の料理。魚の肉を細かく刻みて早く醋になる、やうにしたるもの。

はや・せ［早瀨］（名）流水の急なる瀨。

＋＋はや・たつ（名）川の異稱。

はや・だより［早便］（名）㊀火急のしらせ。㊁早く着したるたより。

＋＋はや・ち［疾風］（名）急に吹き起るはげしき風。「はやて」。（颶風）。

はや・つぎ［早接］（名）こはれものを容易につぎあはすること。又、其藥。

はや・つけぎ［早附木］（名）すりつけぎ。「マッチ」。

はや・て［疾風］（名）「はやち」の轉。

はや・と［隼人］（名）㊀「はやひと」の略言。㊁東百官の一。

はや・とび［早飛］（名）はやくとぶこと。又、はやくとびつくこと。

はや・とり［早取］（名）「はやとりしやしん」の略言。——しやしん［早取寫眞］（名）短時間に物體を寫眞すること。「シヤッター」を裝置せる寫眞器械を用ふ。

はや・なは［早繩］（名）警吏などの罪人を捕縛する繩。とりなは。捕繩。

はや・なべ［早鍋］（名）物の早く煮（ニ）ゆる薄き鍋。

はや・なみ［早浪］（名）はげしく打つ浪。

〔はや・ね［早寢］（名）普通の時刻よりも早く寢床に就（ツ）くこと。

はや・ばしり［早走］（名）はやくはしること。

はや・はや［早早］（副）㊀いと早く。㊁いと急ぎて。㊂とくに。

はや・ばや［早早］（副）前條（一）（二）に同じ。

はや・びきやく［早飛脚］（名）特に急ぎ行かする飛脚。

＋＋はや・ひと［隼人］（名）上古、薩摩・大隅の土人の稱。年年京（ミヤコ）に勤番して、宮門を守り又は行幸の先驅をなし、大嘗の日に犬吠をなしゝもの。はやと。

はやひと・ぐさ（名）【植】（い）「ひるがほ」の古名。（ろ）「たかとうだい」の古名。

はやひと・の・つかさ［隼人司］（名）「はいとのつかさ」に同じ。

はや・ひなは［早火繩］（名）火急の用に供する火繩。

はや・ぶさ［隼］（名）㊀【動】猛禽類中たか科に屬する鳥。形は普通の鷹より小さく、胸腹は白色にして稍や赤色を帶び、背・腹全部に斑文あり。性質頗る勇猛なり。（鶻）。㊁敏捷なる人の稱。

はや・ふね［早舟］（名）㊀急ぎて漕（コ）ぎ行く船。㊁早く走る小船。（快舟、短舸）。

は・やま［端山］（名）麓（フモト）の山。はしの山。

はや・ま・る（らりるるれれ）［早］（自、ら四）いそぎて事を誤る。やりてしくじる。

はや・みち［早道］（名）㊀距離少なき路。ちかみち。㊁簡易なる手段。便法。（捷徑）。㊂いそぎあし。はやあし。

はや・む（めめむむむれめよ）（他、ま下二）早くす。いそがす。うながす。

〔はや・め［早目］（名）さだめの時刻よりも早き程度。

はやめ［早］（名）㊀はやくすること。㊁出産又は死亡をうながすこと。㊂「はやめぐすり」の略言。——ぐすり［早藥］（名）㊀産のときに出産を促すに用ふる藥。（催生藥）。㊁早く死せしむるために飮ますする藥。〔——る（他）「はやむ」の訛。

はやり［流行］（名）㊀はやること。㊁時代の風潮。——うた［流行唄］（名）流行の小唄。俗謠。俗

歌）。—**かぜ**［流行風］（名）流行性感冒。「インフルエンザ」。—**がみ**［流行神］（名）一時はやりて、愚昧人又は信仰者を盛んに引きつくる神。—**っこ**［流行兒］（名）全盛なる藝妓又は娼妓。—**め**［流行目］（名）一種の眼病、眼瞼の内部腫（ハ）れて赤く、眼球に赤線をあらはし、粘液を分泌するもの。—**もの**［流行物］（名）一時はやる品物。—**やまひ**（ヤマイ）［流行病］（名）一時はやる傳染性の病氣（時疫）。—**やみ**［流行病］（名）前條に同じ。

++**はやり-か**［逸］（名）はやるさま。いらつさま。「聲—にていふやう」。

はやり-ごころ［逸心］（名）はやるこゝろ。せきたつ心。勇みごゝろ。「せく」。

++**はやり-だ-つ**（たちつつ、てて）［逸］（自、た四）いらだつ。

はやり-を［早雄］（名）㊀氣の進みはやるを。心のはげみすゝむを。㊁勇み銳き血氣の若者。

はや・る（らりるる、るれれ）［早］（自、ら四）㊀心激昂す。氣あらだつ。㊁せき込む。いらだつ。あせる。せく。

はや・る（らりるる、るれれ）［流行］（自、ら四）㊀ひろく世に行はる。あまねく人に用ひらる。㊁時を得てさかゆ。時めく。

はや-わかり［早分］（名）早く會得の出來ること。はやくわかること。さとりのよきこと。

++**はや-わざ**［早技］（名）手早くして巧（タク）なる技藝。敏捷なるうでまへ。（早業、手練）。

はや-わせ［早稻］（名）「わせ」に同じ。

はや-を［早緒］（名）㊀船の艣につくる繩。ろなは。㊁「はやいと」（早絲）に同じ。「箏の柄揩。」

はや-をけ［早桶］（名）死人を入れて葬送する下

は・ゆ（えゆえ、ゆる、ゆれ、えよ）［生］（自、や下二）生ず。そだつ。おふ。のぶ。「芽—」「齒—」。

++**は・ゆ**（ゆえ、ゆる、ゆれ、えよ）［映］（自、や下二）㊀照り輝く。うつりかゞやく。㊁色あざやかに見ゆ。つやまさりて見ゆ。㊂さかゆ。さかる。

++**はゆ・し**（くしき、けれ）［映］（形、二）色合（イロアヒ）などはゆるさまにてあり。

++**はゆま**［驛］（名）（早馬の約）宿場にてつぎたつる馬（傳馬）。—**ぢ**［驛路］（名）宿場の路。—**づかひ**（カイ）［驛使］（名）宿場〳〵にて馬をつぎかへて乘り行く急ぎの使者。

バヨネット［Bayonet］（名）小銃の一端に着くる劍、西曆十七世紀の中葉、Bayonne の土人の發明せし武器にして、以來英・佛の軍隊に用ひらる。銃劍（銃嘴刀）。

はら［腹］（名）㊀胸腔の横隔膜以下、胃腸などの内臟を包める處。㊁こゝろばせ。かんがへ。㊂いかり。うらみ。㊃度量、膽力。㊄其人を生みたるもの。㊅［理］定常波の振動搖もはげしき部分。㊆すべて、物の中央の部分、「山の—」。⌒—**がいゆ**　いかりを晴らして滿足す、うらみをはらして氣持ちよくなる。⌒—**がくだる**　下痢す。⌒—**がすく**　空腹となる。—**がたつ**　いかる。うらむ。—**がはる**　飽食して滿腹となる。又、腹肥ゆ。又、消化あしくして腹工合よろしからず。—**がふくる**　腹肥ゆ。又、食腹に滿つ。又、姙娠す。又、言ふべき事を言はずしてあり。⌒—**がふとい**　腹ふくれてあり。又、度量大なり。膽力つよし。⌒—**がへる**　空腹となる。⌒—**にいちもつ**　心中にたくらみあること。⌒—**にすゑかね**　我慢しきれずして怒る。⌒—**のくろい**　惡事をたくらめるにいふ。⌒—**をあはす**　協力す。又、肝膽相照らす。

⌒—**をいためたこ**　自分の生みたる子。—**をいやす**　いかりをはらす。うらみをかへす。⌒—**をかかふ**　をかしさに堪へずして吹き出し笑ふ。—**をきる**　切腹す。⌒—**をくだす**　下痢す。⌒—**をさぐる**　それとはなしに他人のこゝろばせをうかがふ。⌒—**をすう**　覺悟を定む。—**をたつ**　いかる。うらむ。⌒—**をみらる**　所存をさぐらる。⌒—**をゑぐる**　腹部に刃をつきさす。又、先方の意想外なることに切り込み尋ぬ。

はら［原］（名）㊀平かにして廣き地。㊁耕作せざる「平地」（原野）。

ばら［荊棘］（名）とげのある木の總稱。いばら。

ばら［薔薇］（名）［植］「しやうび」に同じ。

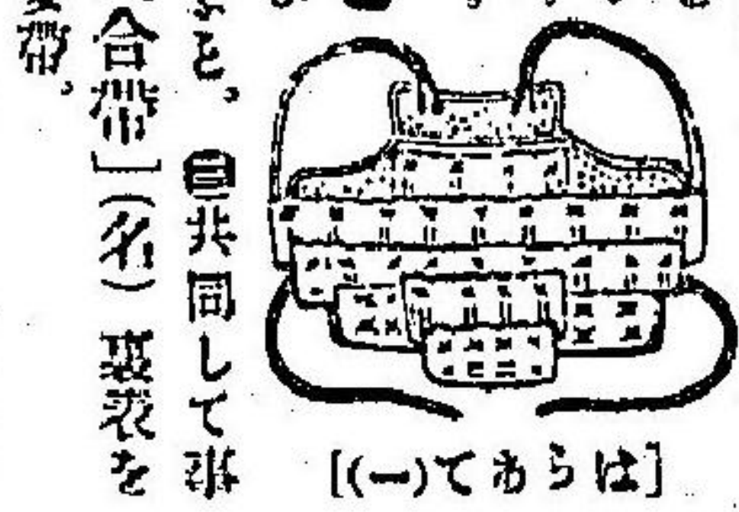
ばら（名）㊀ばら〳〵してあるを。又、其もの。㊁「ばらせん」の略言。

—**ばら**［儕］（接尾）ともたち。「若殿—」。「侫人—」。

++**はら-あか**［腹赤］（名）【動】「ます」の一名。

はら-あ・し（しくしき、しけれ）［腹惡］（形、二）心根あし。

はら-あて［腹當］（名）㊀腹を包（ツツ）み脊にて合はする鎧、袖も草摺もなし、雜兵の用ふるもの。（胴甲）。㊁はらかけ。はらまき。


［はらあて（一）］

はら-あはせ（ワ—セ）［腹合］（名）㊀帶の表裏を別々の布帛にて縫ひ合はするを。㊁向ひ合ひて並ぶを。㊂共同して事をなすを。—**のおび**［腹合帶］（名）表裏を別々の布帛にて縫ひ合せたる女帶。

はら-いせ［腹癒］（名）いかりをはらすを。うらみをはらすを。「つら」。

はら-いたみ［腹痛］（名）腹中のいたむこと。ふくつう。

はら-いっぱい［腹一杯］（名、副）㊀腹にみち足

るさまにいふ語。㊁思ふ存分。

（**はら-らう**）ウ—ロ［破牢］（名）らうやぶり。

（**はら-らう**）ウ—ロ［波浪］（名）海水の振動。なみ。—**じん**［波浪神］（名）船をまもり醫を威（ドオ）すといふ神、彫刻して船首などに置くもの。

はら-おび［腹帶］（名）㊀人の腹をまき括（ク）る帶。はらまき。㊁孕婦の下腹に卷く帶。ゆはたおび。㊂馬の腹を括る帶。はるび。㊃膽力。「—をしめてかゝる」。

++**はら-か**［腹赤］（名）【動】「はらあか」に同じ。

はら-かけ［腹掛］（名）胸より腹まで被ひ、脊にて十文字に交叉して掛くる衣、職人などの着るもの。

はら-がはり（ガワリ）［異腹］（名）父の同じうして母の異なる兄弟。はらちがひ。いふく。

はら-から［同胞］（名）㊀同母の兄弟姉妹の稱。轉じて、一般の兄弟姉妹の稱。㊁他國の國民に對して、自國の國民を稱する語、「四千萬の—」。

はら-ぎたな・し（くしき、けれ）［腹穢］（形、二）心根きたなし。心根潔からず。

はら-きり［切腹］（名）自ら腹を切るを。せっぷく。（屠腹）。—**がたな**［腹切刀］（名）はらきりに用ふる刀、普通九寸五分を定法とすといふ。

はら-き・る（らりるる、るれれ）［腹切］（自、ら四）自ら自分の腹をたち切る。

はら-くだし［腹下］（名）次條に同じ。

はら-くだり［腹下］（名）胃又は腸の常を失して大便の度の劇げきを。下痢。

はら-ぐろ［腹黑］（名）はらぐろきを。又、其人。

はら-ぐろ・し（くしき、けれ）［腹黑］（形、二）心ねぢけひがむ。心性善良ならず。こゝろだてよからず。

はら-げい［腹藝］（名）㊀芝居にて、役者が自己の扮してある人の其時の精神は斯くあるべしと想像せらるゝ程の心のむきを、其言語擧動の外にあらはすを、「團十郎の—」。㊁腹部に人面などを畫き、呼吸の作用によりて、これをさま〴〵に變化するを。

++**はらげ・し**（くしき、けれ）（形、二）ちらばりてあり。

はら-ご［腹子］（名）「はららご」に同じ。

⌒**はら-ごなし**［腹消食］（名）運動など又は藥劑を用ひて食物の消化を助くるを。

はら-ごもり［腹籠］（名）㊀胎内に子のこもりゐるを。（胎中）。㊁父の死するとき未だ母の胎内にあるを。わすれがたみ。（遺腹）。㊂すべて腹内に入れこめてあるをの稱。

はら・す（さしすす、すせせ）［晴、霽］（他、さ四）㊀晴るゝやうにす。くもりなきやうにす。㊁消し洗って快くす。散らして滿足さす。氣を晴らす。思ひをはらす。

はら・す（さしすす、すせせ）［脹］（他、さ四）腫（ハ）るゝやうにす。「眼を—」。

⌒**ばら・す**（さしすす、すせせ）（他、さ四）㊀ばら〳〵にす。破り散らす。㊁人を殺す。（關東の方言）。㊂うりはらふ。

はら-すぢ［腹筋］（名）㊀腹の皺（シワ）又は筋。㊁（腹筋を撚る義）可笑（ヲカ）しさに堪へぬと、「から〳〵と笑ひあな—な」。—**をよる**　可笑（ヲカ）しさに堪へざるにいふ。

⌒**ばら-ずみ**（名）俵にいれず其まゝにしてある炭。

⌒**ばら-せん**（名）一文二文のはした錢。

++**はら-たか・し**（くしき、けれ）［腹高］（形、二）はらめるさまなり。

はら-だた・し（しくしき、しけれ）［腹立］（形、二）腹立つべし。怒るべし。

はら-だち［腹立］（名）はらだつを。立腹。

⌒**はら-だち-じやうご**（ジヨ—ウ—）［腹立上戸］（名）㊀酒に醉ひてよく腹を立つる人。㊁轉じて、よく腹を

立つる人。

はら-だ・つ（たちつつ、てて）［腹立］（自、た四）腹を立つ。いかる。うらむ。

パラヂウム［Palladium］（名）【化】銀白色の金屬、大氣中にて熱すれば、最初酸化物を以て被（オホ）はれ、光澤を失ひ、高溫度に及びては、再び酸素を遊離して其面に光澤を帶ぶるに至る、此金屬は其性質として多量の水素瓦斯を吸收す。

はら-ちがひ（ガイ）［腹違］（名）はらがはり。

はら-つづみ［腹鼓］（名）㊀食に飽（ア）きてふくれたる腹を、鼓（ツヽ）に見たてゝ、たゝき鳴らすを、即ち、衣食足りて樂しむさまにいふ語。㊁狸が腹をたゝきて、鼓の音をまねすといふを。

++**はら-とり**［腹取］（名）「あんぷく」（按腹）に同じ。

はら-なか［原中］（名）野原のなか。

++**はら-ぬち**［腹中］（名）「はらのうち」に同じ。

はら-の［原野］（名）のはら。はら。

はら-の-うち［腹中］（名）㊀腹の内部。ふくちゆう。㊁こゝろのうち。しんちゆう。

はら-の-かは（カワ）［腹皮］（名）㊀腹部のかは。㊁（腹皮をよる義）可笑（ヲカ）しさに堪へざるを。—**をよる**　可笑しさに堪へず。

++**はら-の-ふえ**［大角］（名）古昔、戰爭の合圖に用ひし笛。

はら-の-むし［蛔蟲］（名）㊀【動】「くわいちゆう」に同じ。㊁むかりたつ感情。—**がしようちせぬ**　腹立ちて我慢できず。

はら-ばひ（イ—バ）［腹這］（名）はらばふを。

はら-ば・ふ（はひふふ、へへ）［腹這］（自、は四）腹を地につけて行く。手足にて獸の如く匍（ハ）ひ行く。はふ。（匍匐）。

はら-はら（名、副）㊀木の葉などの散るさまにいふ語。㊁涙などの落つるさまにいふ語。㊂氣づかひ危ぶむさまにいふ語。

〔**ぱら-ぱら**〕［散散］（名、副）㊀亂れ散らばれるさまにいふ語。㊁三々五々に集まり又は散ずるさまにいふ語「―立ち歸り」。㊂疎雨又は霰などの降るさまにいふ語。

はら-ぱら（名、副）雨又は霰などの點々降るさまにいふ語。

はらひ（ハライ）［拂］（名）㊀貫錢又は代金をはらひ渡すこと、支拂。㊁物品を賣りはらふこと。 **―が きたない** 支拂いさぎよからず。 **―が きれい** いさぎよく支拂をなす。

はらひ（ハライ）［祓］（名）㊀神に祈（イノ）りて災難・罪障などをはらひ去ること。又、其式。㊁神に祈りて災厄・罪障などをはらふために誦（ヨ）む詞、「中臣の―」。㊂犯罪を贖（アガナ）ふために出だす物。㊃「はらひばこ」の略言。

はらひ-ぎたな-し（ハライ）［拂穢］（形、二）つねに支拂をこゝろよくなさず。

はらひ-きよ-む（ハライ）［祓淸］（他、ま下二）はらひを行ひて災厄又は罪障を消す。

〔**はらひきよめる**〕（他）「はらひきよむ」の訛。

はらひ-きり（ハライ）［拂切］（名）はらひきること。

はらひ-ぎり（ハライ）［拂切］（名）横さまに薙（ナ）ぐこと。

++**はらひ-ぐさ**（ハライ）［祓物］（名）はらひ淸むるもの。

はらひ-さ-ぐ（ハライ）［拂下］（他、か下二）官府より人民に賣渡す。

はらひ-さげ（ハライ）［拂下］（名）はらひさぐること。 〔**―る**〕（他）「はらひさぐ」の訛。

はらひ-ずみ（ハライ）［拂濟］（名）賃金又は代金を支拂ひて已に事濟となること、支拂のすむこと。

はらひ-だし（ハライ）［拂出］（名）はらひ出すこと。

はらひ-だ-す（ハライ）［拂出］（他、さ四）金錢を支拂ひ出す。

はらひ-てがた（ハライ）［拂手形］（名）「志はらひてかた」（支拂手形）に同じ。

++**はらひ-ど**（ハライ）［祓戸］（名）はらひを行ふ所。 **―の-かみ**［祓戸神］（名）祓戸を守りたまふ神、卽ち瀨織津姫・氣吹戸主・速秋津姫・佐須良姫をいふ。

はらひ-の-かみ（ハライ）［拂紙］（名）婦人の髮をくしけづりて、櫛につきたる毛を入るゝ紙。

はらひ-の-く（ハライ）［拂除］（他、か下二）のぞきさる。はらひのぞく。

〔**はらひのける**〕（他）前條の訛。

はらひ-ばこ（ハライ）［祓箱］（名）㊀祓の玉串をいるゝ箱。㊁免職、解僱。

はらひ-ぶそく（ハライ）［拂不足］（名）金額の中幾分の支拂が未だすまざること。

はらひ-もの（ハライ）［拂物］（名）うりはらふもの。

はらひ-わた-す（ハライ）［拂渡］（他、さ四）㊀金錢を支拂ひて手渡す。㊁賣渡す。

はら-ふ（ハラウ）［拂］（他、は四）㊀のぞき捨つ。のぞく。㊁かすり擊つ。はたく。㊂横さまに切る。なぐ。㊃吹き飛ばす。ふく。㊄追ひ去らす。去りぞく。「敵を―」（攘）。㊅追放の刑に處す。㊆賣拂ふ。

はら-ふ（ハラウ）［祓］（他、は四）神に祈（イノ）りて災厄又は罪障などをのぞき去る。

++**はら-ふ**（ハラウ）［祓］（他、は下二）前條に同じ。

〔**ぱら-ふ**〕［散斑］（名）玳瑁の甲に黑斑のまばらにあるもの。

パラフィン［Paraffin］（名）【化】石炭「タール」より得る白色透明の結晶體にして凝附（ツケン）油に似たるもの、蠟燭製造の材料とし、又、五色にねりなして小兒の弄びものともなす。

++**はら-ふえ**［大角］（名）「はらのふえ」に同じ。

〔**はら-ふくれ**〕［腹脹］（名）㊀ちやうまん。㊁かねもち。

はらへ（ハラエ）［祓］（名）「はらひ」に同じ。 **―きよむ**［祓淸］（他、ま下二）「はらひきよむ」に同じ。 ++**―ぐさ**［祓種］（名）㊀かたしろ。㊁罪過のあがなひに出すもの。 **―ぐし**［祓串］（名）大神宮にて祓などに用ふる玉串、細く割りたる木に細く切りたる紙をつけたるもの。 **―づき**［祓月］（名）陰曆三月の異稱。 **―つもの**［祓物］（名）「はらひぐさ」に同じ。 **―どの**［祓殿］（名）はらひを行ふ殿。 **―ばこ**［祓箱］（名）「はらひばこ㊀」に同じ。

はら-まき［腹卷］（名）㊀はらおび。㊁はらあて。㊂鎧（ヨロヒ）の一種、腹に卷きて背に合するやうにしたるもの。せわりぐそく。

++**はらまき**［波羅蠻計］（名）人をのゝしりていふ語。

はらみ-ご［孕子］（名）はらにやどしたる子供。

++**はらみ-すすき**［孕薄］（名）すゝきの穗のはらまれてまだ伸びざるもの。

ハラミツ［波羅蜜］（名）【佛】（梵語、Paramita、彼岸に到着する義、生死を此岸とし煩惱を中流とし涅槃を彼岸としていふ）最上智を得ること。

はらみ-をんな［孕女］（名）子をはらみてある女。みもち女。

はら-む［孕］（他、ま四）㊀自己の胎内に子を宿す。みもちになる。くわいにんす。みごもる。（姙娠）。㊁中にふくみ持つ。ふくむ。

はら-む［孕］（自、ま四）ふくる。はる。

はら-むし［腹蟲］（名）はらのむし。

++**はら-め**［孕婦］（名）はらみをんな。

++**はら-め-く**（自、か四）はら〳〵と散るさまに見ゆ。

〔**はら-もち**〕［腹持］（名）㊀腹のぐあひ。㊁腹中に入りて久しく持つこと、「強飯は―がよい」。

バラモン［婆羅門］（名）㊀（梵語 Brahman 淨行の義）「インド」の四種族中の貴族、自ら梵天の苗裔にして北口より生じたるものと稱す、又、淨裔又は梵士といふ。㊁「バラモンけう」の略言。 **―けう**［婆羅門教］（名）婆羅門種族の司どりし宗教、梵天の所傳なりといひ傳ふ、佛教の起る以前既に「インド」に行はれ、今も尙は行はる、其宗徒は或は山に入り或は家にありていろ〳〵の難行苦行をなし、道學を盤として固く道を守り、操行を潔白にするを旨とす。

はら-や［水銀粉］（名）水銀に明礬鹽を和して製したる藥品、いせおしろい。はおしろい。（汞粉、輕粉）。

++**はらら-か**（名）はらゝくと。はらゝくさま。

++**はらら-か-す**［散］（他、さ四）はらゝくやうにす。

++**はらら-く**［散］（自、か四）ばら〳〵になる。くづれちる。ちらばる。

はらら-ご［鮞］（名）腹ごもりの魚の子。「鮭の―」。（散子）。

はらら-じる［磨豆腐汁］（名）豆腐を擂（ス）りつぶしてたきたる味噌汁。

++**はらら-に**（副）ばら〳〵に。ちり〴〵に。

〔**ばらり**〕（名、副）㊀はなればなれになるさまにいふ語。㊁ものを切りおとすさまにいふ語。 **―づん-と**（副）一刀の下に切りおとすさまにいふ語。

はら-わた［腸］（名）㊀（腹綿の義）古昔、大腸のみの特稱、現今は大腸小腸の總稱。㊁瓜などの内部に肉の雜りて柔（ヤハラ）き綿の如きもの。㊂心中。又、性根。 **―が きれい** 心の淸らかなるにいふ。邪險なるにいふ。 **―が くさる** 氣骨なくなる。食慾一方になる。 **―が みえすく** 心中がよくわかる。 **―を きる** はらきりをする。屠腹す。 **―を たつ**［斷腸］いたくかなしむ。いたくなげく。

はら-ゐせ［腹癒］（名）「はらいせ」に同じ。

ばら-を［散緒］（名）細き緒を數條集めてつくりたる珠緒、「―の雪踏」。

（**は-らん**）［波瀾］（名）㊀おほなみ。なみ。㊁もめ。さわぎ。ごたく。㊂抑揚頓挫なく平坦に述べ來りて、忽ち語勢を急に筆鋒をはげしくすること。

は-らん［葉蘭］（名）【植】百合（ユリ）科に屬する草、地下莖を有し、葉柄を高く地上に挺出して末端に葉を開展す、葉は大形にして卵狀披針形をなし常綠なり、花は深紫色にして壺狀をなし、地面に附着して開く、觀賞用として栽培せらる。（蜘蛛抱蛋、扁獎、璽冊香、紫闔）。

はり［針、鍼］（名）㊀布帛などを縫ひ又は止むるに用ふる具、鋼鐵にて製し、圓くして細長し一つの端末尖（トガ）れども他の一端には絲を通（トホ）す微孔あり、縫針。又、孔なく頭圓きものあり、留針。㊁鍼治に用ふる具、形は縫針又は留針に似て、人身の患部に刺し、筋肉を和げ血液を導くもの、現時は專ら金銀にて製すれど往古は石・鐵などにても製したり。㊂針を人身に刺して病を療すること、卽ち鍼治。㊃いら。とげ。（刺）㊄蜂などの尾部にありて、刺して毒をなすもの。（螫）。㊅「つりばり」の略言。

++**はり**［欅］（名）【植】「はりのき」に同じ。

はり［梁］（名）棟と打違（ウチチガヒ）に柱の上に亙（ワタ）して屋根を支ふる材。うつばり。（欐）。

はり［羽蟻］（名）【動】「はあり」に同じ。

はり［張］（名）㊀はること。㊁つっぱる力。ひっぱる力。㊂いきはり。いきぢ。㊃はりあひ。競爭。㊄「はりて」の略言。

ハリ［頗黎］（名）㊀（梵語 Sphatika）七寶の一、水晶。㊁轉じて、硝子。㊂【鑛】玻璃狀の岩石又は岩石中の玻璃質の部分の稱。（玻璃・玻瓈）。

―はり［張］（接尾）弓又は提燈などを數ふるにいふ語。「弓一―」。

（**ば-り**）［罵詈］（名）のゝしること、惡口すること。

〔**ばり**〕［尿］（名）「ゆばり」の略言、「金鼠瓜の―する枕もと」。

―ばり［張］（接尾）弓の強弱を表するにいふ語、「三人―の弓」。

〔**はり-あひ**〕（ハリアイ）［張合］（名）㊀はりあふこと。㊁かひあること。せんあること、「ちっとも―がない」。

〔**はり-あ-ふ**〕（ハリアウ）［張合］（自、は四）競ひあふ。せりあふ。

はり-あふぎ（ハリオウギ）［貼扇］（名）上部を紙にて張りつゝみたる扇子、講談師などが、調子をとるために机を打つもの。

はり-い［鍼醫］（名）鍼を人身の患部にさして療治することを專門とする醫者、鍼治の醫者。（針醫）。 **―しゃ**［鍼醫者］（名）前條に同じ。

はり-いた［張板］（名）洗ひたる布又は漉（ス）きたる紙などをはりて乾（ホ）す板。

はり-いれ［針入］（名）針を入れておく箱。

はり-うち［針打］（名）婦人の髮の根掛のかざりに挿（サ）すもの。

バリウム［Barium］（名）【化】稀有の金屬、深黃色

にして酸化し易く、よく水を分解する性あり。

〔**はり-かた**「張型」(名) 陰莖の形につくりたるもの。

はり-がね「針金」(名) 金屬を細長く絲の如くに延(ノ)ばしたるもの。(線)。――**だより**「針金便」(名) 電報の稱。「―で聞かせたい」。――**むし**「針金蟲」(名)【動】圓蟲類中線蟲類に屬する蠕形動物、針金の狀をなし長さ二尺内外に達す、蟷螂の腹中にて屢ば見る所なり。あしまつひ。(線蟲)。

はり-かへ（エ・ガ）「張替」(名) ㊀ふるきものをへ(ぎと)りて張り直すこと。又、其もの。(貼替)。㊁衣服を解(ト)き洗ひのりを附けて張りのばすこと。又、斯くして仕立てたる衣服。

はり-か・へる（エル・カ）〔へ・へ・へる・へる・へれ・へよ〕「張替」(他、は下二) はりかへをなす。

はり-がみ「張紙」(名) ㊀糊にて物に貼(ハ)りつけたる紙。㊁注意又は意見を記して貼りつけおく紙。(附箋)。㊂紙のはりふだ。

〔**はり-ぎ**「栢扁」(名)【植】「このてがしは」に同じ。(土佐の方言)。

(**ば-りき**「馬力」(名)（一匹の馬にてなす力の義）【理】工率の單位、一分間に三萬五千磅(ポンド)の重量を擧ぐべき力。

ハリ-きやう（ヨウ・キヤウ）「玻璃鏡」(名) 硝子の裏面に水銀をひきてつくりたる鏡。

はり-ぎり「針桐」(名)【植】大戟科に屬する木、山中に生ず、幹は桐に似て刺(トゲ)多く、材は堅くして白し。(刺楸)。

はり-き・る（ら・り・る・る・れ・れ）「張切」(自、ら四) 十分に張る。

はり-き・る（れ・れ・るる・るれ・れよ）「張切」(自、ら下二) 過度にはれふくれて裂(サ)く。

〔**はり-きれる**(自)「はりきる」の訛。

＋**はり-くすし**「針醫師」(名) はりい。はりいしや。

はり-くやう（ヨウ・クヤウ）「針供養」(名) 婦人が二月八日に、平素の裁縫にて折れたる針を悉く淡島社に納めて、其日の裁縫を休むこと。はりのくやう。

はり-ぐら「張鞍」(名) 革を張りたる鞍。

バリケン「麝香鴨」(名)（「オランダ」語 Berge-Endeの訛）【動】普通の鶩(アヒル)よりも大きくして南「アメリカ」に特產するもの。オランダあひる。

はり-こ「張子」(名) はりぬき。――**がひ**（イガ）「張子貝」(名) はりこにて貝の形に作り、香などを入るゝもの。

はり-ごし「張輿」(名) 蓙表にて張り包み、押緣を打ちたる略式の輿。

＋**はり-ごと**「張言」(名) 互にきそひいふことば。

はり-こみ「張込」(名) はりこむこと。――**をつける** みはりをおく。又、罪人逮捕の手配をなす。

はり-こ・む（ま・み・む・む・め・め）「張込」(自、ま四) ㊀力を込む。力を入る。㊁奮發す。いきこむ。㊂散財す。おごる。㊃はりばんす。みはる。㊄罪人逮捕の手配をなす。

はり-さ・く（け・け・くる・くれ・けよ）「張裂」(自、か下二) ㊀憤怒・苦痛等の情に堪(タ)へず。㊁張りふくれて裂く。

〔**はり-さける**(自)「はりさく」の訛。

はり-さし「針刺」(名) 針をさしおく具、布帛に綿などを包みたるもの。はりやま。(針墊)。

はり-し「針師」(名) 針の製造を業とする人。

はり-しごと「針仕事」(名) 衣類を絎(ク)け又は縫ふわざ。裁縫。

ハリしつ-くわざんがん「玻璃質火山岩」(名)【鑛】地中より噴出する岩漿が結晶する暇なく迅速に冷却して成りたる岩石、多孔にして玻璃様の

狀をなす。

はり-すひ-いし（イス・イシ）「針吸石」(名) 磁石の一名。

＋**はり-すり**「榛摺」(名) 古昔、榛の樹皮をもて布を染めしこと。

はり-すり「針磨」(名) 針の製造、又、其業の人。

はり-せん-ぼん「針千本」(名)【動】固顎類に屬する魚、脊部黑く腹部白し、全身鋭き刺にて被はれ、空氣を含みてふくるゝときは球狀をなして、其刺悉く直立す、北海道に產す。([illegible])。

＋**はり-た**「墾田」(名) あらたに開墾したる田。

＋**はり-たくみ**「張工」(名)「きやうじや」(經師屋)に同じ。

はり-たけ「張茸」(名)【植】「しかたけ」に同じ。

はり-だし「張出」(名) ㊀張り出だすこと。又、其所。又、其もの。㊁はりふだ。はりがみ。㊂番附の欄外に記すること。――**おほぜき**（オウ・オホ）「張出大關」(名) 番附の欄外に記さるゝ、別格の大關。

はり-だ・す（さ・し・す・す・せ・せ）「張出」(他、さ四) ㊀張りて外へ出す。㊁ひろく示すため、札又は紙に記して揭(カカ)ぐ。

はり-たて「針立」(名) はりさし。はりやま。

〔**はり-たふ・す**（タオ・タフ）（さ・し・す・す・せ・せ）「張倒」(他、さ四) 勢あらく倒さまに打つ。なぐる。

はり-たましひ（タマシイ・タマシヒ）「張魂」(名) 勝氣にして一徹なる氣象。

はり-つ・く（け・け・くる・くれ・けよ）「張附」(他、か下二) ㊀糊などにて物を張る。㊁物を張り開きて他の物につく。㊂はりつけの刑に處す。(磔)。

はりつけ「張附」(名) ㊀昔の刑罰、身體を板又は地上に張附けて殺すこと、後世十字架に張附け槍を以て左右の腋下よりすぢかひに肩に突通して殺す。(磔)。㊁物を張附くること、又、張附けてある物。「―の逕暦の謂」。――**がみ**「張附紙」(名) 張附に用

ふる紙。――**ばしら**「張附柱」(名) はりつけの刑に用ふる柱、即ち十字架。(磔柱)。

〔**はり-つ・ける**（け・け・ける・けれ・けろ・けよ）「張附」(他、か下二) ㊀「はりつく」の訛。㊁勢あらく横さまに打つ。なぐる。

はり-づつ「鍼筒」(名) 鍼治に用ふる針をいれおく筒。

はり-て「張手」(名) ㊀つきはる性質の人。㊁相撲(スマフ)にて、敵の面部を横さまにうつこと。

はり-なすび「針茄」(名)【植】「マンダラげ」に同じ。

はり-ぬき「張拔」(名) 型(カタ)に紙を重ね貼(ハ)り、糊乾きて後、其型を拔き去りたるもの。はりこ。――**づつ**「張拔筒」(名) ㊀張拔につくりたる鐵砲。㊁張拔きて圓く長くしたる筒。

はり-ぬ・く（か・き・く・く・け・け）「張拔」(他、か四) 張拔に作る。

はり-ねずみ「針鼠」(名)【動】食蟲類に屬する小獸、體肥えふくれ、頭脚共に小なり、體長一尺許、全身に尖鋭なる棘毛あり背筋の作用によりてこれを立つ、夜出て、食を求め、冬月は樹洞岩窟の中に蟄居す、中央「アジア」及「ヨーロッパ」に產す。(猬、蝟)。

はり-の-あな「針孔」(名) 縫針の頭部にある絲を通(トホ)す孔。――**から てんのぞく** 針孔より天をうかゞふ義にして、小さき見識を以て大なる物事を觀ずるにいふ。

＋**ハリ-の-かがみ**「玻璃鏡」(名)「じやうハリのかがみ」(淨玻璃鏡)に同じ。

＋**はり-の-き**「榛」(名)【植】「はんのき」の古稱。

＋**はり-の-みみ**「針耳」(名) はりのあな。

はり-の-むしろ「剌筵」(名)（はりをうゑたるむしろの義）懼りおそれて片時も安き心ならざるさまにいふ語。

はり-の-めど「針孔」(名) 前條に同じ。

はり-ばこ「針箱」(名) ㊀裁縫一切の具を入るゝ箱。㊁賈姫婦。(備讚地方の方言)。

〔**はり-はり**(名) 一種の料理、みのほし大根を細く刻みて酢醬油に浸(ヒタ)したるもの。

〔**ばり-ばり**(名、副) ㊀ひき掻(カ)き又はひき裂(サ)く音などにいふ語。㊁齒にて堅きものを嚙み又は齒嚙する音などにいふ語。

〔**ぱり-ぱり**(名、副) 前條に同じ。㊂はぶりのいとよきさまにいふ語。

〔**ばりばり-ぐさ**(名)【植】「いはがねさう」に同じ。

はり-ばん「張番」(名) 見張りて番をなすこと、又、其人。

はり-ひぢ「張臂」(名) 臂を左右に張り出すこと。

はり-ふぐ「針河豚」(名)【動】「はりせんぼん」に同じ。

＋**はり-ぶくろ**「針袋」(名) はりを入るゝ袋。

はり-ふだ「張札」(名) 事を記して張りかゝぐる札。

はり-ぶんこ「張文庫」(名) 紙張の文庫。

はり-ま「梁間」(名) 家の梁の長さ、桁行の對。

＋**はりま-あさぎ**「播磨淺黃」(名) 古昔、播磨國より產出せし淺黃。

はり-まぜ「張雜」(名) 種々の書畫をまぜあはせて張りたるもの。「―の屏風」。

＋**はり-まち**「飯」(名)【動】「はまち」に同じ。

はり-みち「針道」(名) 布帛を縫ふ針のはこび方。

＋**はり-みち**「墾道」(名) 新に開きたる路。新道。

はり-むしろ「張筵」(名) 張りて物のおほひとせるむしろ。

はり-め「針女」(名) 裁縫にやとはれたる婦人。

はり-め「張目」(名) はりあはせたる部分。

はり-め「針目」(名) 縫目。――**ぎぬ**「針目絹」(名) ㊀縫目多き衣。いろく衣。㊁ぬひかへしの

衣。――**ごろも**「針目衣」(名) 前條に同じ。

はり-めだか「針目高」(名)【動】めだかの一種、小形黑色にして目突出す。

はり-もぐら「針鼴」(名)【動】一穴類に屬する獸、形はもぐらもちに似て、體に棘毛を密生す、多く森林に棲息し、時に地中を潛行して小蟲を捕食す、繁殖期に及べば腹囊を生じ、其中にて卵を孵化せしむ、「オーストリア」の特產なり。

はり-もの「張物」(名) ㊀布帛を洗ひ、糊を附けて板に張り乾(ホ)すこと。又、其布帛。㊁物をはること。又、はる物。

はり-もん「張紋」(名) 紋のはりつけたるもの。

はり-や「針屋」(名) 針を賣る店。

はり-やま「針山」(名) はりさし。はりたて。

はり-や・る（ら・り・る・る・れ・れ）「張破」(他、ら四) 張りのべて破る。

はり-わた「張綿」(名) 張りのべたる綿。

＋**はり-を**「針魚」(名)【動】「さより」の古稱。

(**は-りん**「破倫」(名) 人倫の道にそむくこと。

(**ば-りん**「馬藺」(名)【植】鳶尾科に屬する草、高さ二三尺、葉は線形にして捩(ヨヂ)れ、花は烈開して通常淡紫色の線條を有す、觀賞用として栽培せられ、又、其根は刷毛を製するに用ひらる。

はる「春」(名) 四時の一、冬の終りより夏の始めに至る、陰曆にては、正月より三月までをいひ、陽曆にては三月より五月までをいふ、大氣の溫暖なる季節なり。

は・る（ら・り・る・る・れ・れ）「張」(自、ら四) ㊀ひろがり延ぶ。のびひらく。㊁ふくる。ふとる。㊂一面に蔽ひ閉づ。「氷が―」。㊃芽出づ。めぐむ。㊄盛る。殖ゆ。㊅分に過ぐ。度に超(コ)ゆ。「仕事が―」。㊆筋肉凝る。「肩が―」。

はる（らりるるれれ）［張］（他、ら四）㊀ひろげのぶ。のべひらく。「弓を―」。㊁引きわたす。わたす。「綱を―」。㊂突き出す。「胃を―」。㊃ふとくす。ふくらす。「腹を―」。㊄盛にす。殖す。「門戸を―」。㊅設く。開く。「酒宴を―」。㊆一面に蔽ひ蔵る。「水を手水鉢に―」。㊇ねば着く。糊などにてつかす。「札を―」。㊈張拔に作る。㊉中空なる器を造る。「鐵砲を―」。「煙管を―」。(十一)平たく打ち着く。「羽目を―」。(十二)強ひて行ふ。押して通す。「いひ―」。(十三)横さまに撃つ。平手で撃つ。「頬を―」。（批、拍）。(十四)博奕にて、金銭を賭(カ)く。(十五)張番を設く。見張をおく。(十六)其婦人を手に入れんとつけねらふ。(十七)娼妓が店先に並びて客を引く。

†**はる**（らりるるれれ）［墾］（他、ら四）新に地を開く。かいこんす。

はる（るれれるるれれ）［晴、霽］（自、ら下二）㊀雲霧散ず。雨霽止む。空合よくなる。㊁心のくもりとけ散る。胸のおもひ消えうす。「疑ひ―」。㊂さはり解(ト)け開く。さわやかになる。

はる（るれれるるれれ）［脹］（自、ら下二）皮膚ふくれあがる。

〔**ぼる**（らりるるれれ）［尿］（自、ら四）小便す。（関西・四國の方言）。

はる・あき［春秋］（名）㊀はるとあきと。㊁年月。「―の重なりて」。

†**はる・りへ**（エ→ウ）［春上］（名）東宮殿下を申し奉る語。

はるか［遙］（名）㊀遠く隔たりてあるを。㊁久しく隔りてあるを。

†**はるか・す**（すきしすせせ）［晴、霽］（他、さ四）はるゝやうにす。はらす。「思を―」。

はる・かすみ［春霞］（名）春の季節に立つかすみ。（春靄）。

はる・かぜ［春風］（名）春の季節に吹く風。おもに東又は南より吹く。（和風、東風）。――の［春風］（枕）「ふと」に冠らする詞。

†**はる・かたまけ・て**（副）春の季節になりて。

はるか・に［遙］（副）㊀遠く隔(ヘダ)りて。㊁久しく隔りて。㊂いと違(タガ)ひて。

はる・ぎ［春着］（名）春の季節に着(キ)る衣服。特に正月に着る衣服。

†**はる・く**（けけくくるれけよ）［晴、霽］（他、か下二）はるゝやうにす。はるかす。

†**はる・く**（かきくくけけ）［晴、霽］（自、か四）晴(ハ)る。開く。解け開く。

はる・くさ［春草］（名）春になりても萌え出でたる草。若草。新草。

はる・けし（くしききけれ）［遙］（形、二）はるかなり。とほし。

はる・げしき［春景色］（名）のどかなる春の景色。（韶景、淑光、春色）。

はる・ご［春子］（名）春に生まれたる子。

はる・ご［春蠶］（名）春に育(ソダ)つ蠶。

はる・ごま［春駒］（名）㊀春の野にある駒。㊁馬の頭の形につくりたるものに竹をさして柄となし、其末端に車を附けて脚に擬したる玩具。㊂心の勇み立つかたち。

はる・さき［春先］（名）春のはじめ。

はる・さめ［春雨］（名）春のあたゝかき頃にふる雨。（膏雨）。

ハルシヤ・がは（―ガワ）［波斯革］（名）昔時、「オランダ」人の「ペルシヤ」國より齎(モタラ)しゝ革。

†**はる・す**（さしすすせせ）［晴、霽］（他、さ四）はるゝやうにす。はらす。はるかす。

†**はる・すすき**［春薺］（名）【植】柳の異稱。

はる・ぜみ［春蟬］（名）【動】蟬の一種、稍や大形にして全身黑く、春の末より鳴く。（蟀母）。

はる・つげどり［春告鳥］（名）【動】鶯の異稱。

―**はる・に**［遙］（副）「はるかに」に同じ。

はる・の・こゝろ［春心］（名）㊀春ののどかなる心。㊁いろけ。（春情）。

はる・の・ころも［春衣］（名）㊀はるぎ。㊁かすみの異稱。

はる・の・みや［東宮］（名）「とうぐう」に同じ。

はる・の・よ・の・ゆめ［春夜夢］（名）はかなき物事に譬へいふ語。「驕れる者久しからず、たゞ―の如し」。

†**はる・ばな**［春花］（名）春の頃に咲く花。――の［春花］（枕）「めづらし」に冠らする詞。

はる・ばる［遙遙］（名、副）㊀遠く隔(ヘダ)りたるさまにいふ語。㊁遠く隔りたる方より來るさまにいふ語。――ぞ［遙遙］（副）前條に同じ。

†**はる・ばる**［春春］（名）年々めぐり來る春。

はる・ひ［春日］（名）春の日。――の［春日］（枕）「かすむ」に冠らする詞。

はるび［腹帶］（名）馬のはらおび。

はる・ぶくろ［春袋］（名）兒女などの初春に縫ひ初(ソ)むる袋。春を張(ハ)るに寄せて祝ふ。

†**はる・べ**［春邊］（名）春の頃。

†**はる・まけ・て**（副）「はるかたまけて」に同じ。

†**はる・まち・づき**［春待月］（名）陰暦十二月の異稱。

パルミチン［Palmitin］（名）【化】白色鱗狀の結晶體、脂肪の成分をなすもの。

はる・め・く（かきくくけけ）（自、か四）春らしくなる。

†**はる・をしみ・づき**［春惜月］（名）陰暦三月の異稱。

はれ［晴］（名）㊀空の晴るゝヿ。ひより。（霽）。㊁おもてむき。おほやけ。「―の席」。㊂多人數の中。ひとなか。

はれ［腫］（名）㊀はるゝヿ。ふくるゝヿ。㊁すゐき。（水腫）。

〔**ばれ**（名）ばれるヿ。

はれ・いしやう（―シヤウ）［晴衣裳］（名）はれぎ。

〔**ばれ・いしよ**［馬鈴薯］（名）【植】「ジヤガタラいも」に同じ。

(**ばれう**（―リヨウ）［馬料］（名）うまの飼料。

〔**ばれ・かかり**（名）ばれかゝるヿ。

〔**ばれ・かか・る**（らりるるれれ）（自、ら四）事さきにばれんとす。

はれ・がまし（しくしきしけれ）（形、二）㊀あまりにおもだちてあり。㊁あまりに憚らざるさまなり。

はれ・ぎ［晴着］（名）はれの場所に出るときに着る衣服。

はれ・ぎぬ［晴衣］（名）前條に同じ。

〔**ばれ・くち**（名）ばれかゝるいとぐち。

(**はれつ**［破裂］（名）㊀割れ裂くるヿ。さけ砕(クダ)くるヿ。㊁相談の調(トト)のはざるヿ。談判の成立せざるヿ。――おん［破裂音］（名）【文法】子音の一、一時氣流を遮りて其十分閉れるとき、俄にこれを放つによりて起る音、喉的破裂音・齒的破裂音・脣的破裂音に分つ。――ぐわん［破裂丸］（名）物にあたりて破裂する彈丸。ばくれつだん。――だま［破裂丸］（名）前條に同じ。

はれ・て［晴］（副）世に憚る所なく。おもてむきに。

はれ・の・しようぶ［晴勝負］（名）多くの人の見てゐる所にてなす勝負。

はれ・の・ばしよ［晴場所］（名）多くの人の集まれる場所。

はれ・ばれ・し（しくしくしきしけれ）［晴晴］（形、二）㊀はれてさわやかなり。はれやかなり。㊁はなやかなり。はでやかなり。㊂すこしも憚る所なし。

はれ・ばれ・と［晴晴］（副）はればれしく。はれやかに。

〔**ばれ・ふ**（―リヨウ）［馬鬣］（名）馬のたてがみ。

はれ・ま［晴間］（名）雨雪などの止みたる間。

はれ・もの［腫物］（名）皮膚の腫(ハ)れて膿(ウ)めるもの。できもの。ねもつ。「でものーところ嫌はず」。――にさはるやうにむづかしき氣質の人をあしらひて、其機嫌を損(ソコ)ねざるやうにするにいふ。

はれ・やか［晴］（名）㊀晴れてさわやかなるヿ。㊁はなやか。はでやか。㊂少しも憚る所なきヿ。

はれ・やまひ（―ヤマイ）［腫病］（名）身體に水氣催(モヨホ)してはれふくるゝ病氣。すゐき。

はれ・らか［晴］（名）「はれやか」に同じ。

†**はれる**［晴］（自）「はる」の訛。

〔**ばれ・る**（るれれるるれれよ）（自、ら下一）㊀破れて成立せず。㊁たくらみ露顯す。㊂ところならぬ場所に小便す（四國地方の方言）。

(**ばれん**［馬簾］（名）纏(マトヒ)に垂(タ)れ下ぐるもの、紙又は革を細長く裁(タ)ちてつくる。

(**ばれん**［馬棟］（名）㊀【植】「ばりん」（馬藺）に同じ。㊁版木を摺(ス)る用具、平たきものを心とし、これを竹の皮(カハ)にてつゝみたるもの、版木にあてたる紙の上をすりてその書畫を寫す、もと馬藺の皮を用ひしよりいふ。

(**はれんち**［破廉恥］（名）㊀はぢをはぢとも感ぜざるヿ。はぢを知らざるヿ。鐵面皮。㊁職務を汚(ケガ)すヿ。地位をよごすヿ。㊂不正の手段又は不法の所爲により他人の財物を取るヿ。――ざい［破廉恥罪］（名）【法】竊盜罪・消費罪・收賄又は詐欺取財等の稱、又、國事犯以外の犯罪の稱。

ハロ［Halo］（名）【天】「かさ」（暈）に同じ。

ハロゲン［Halogen］（名）【化】弗素・鹽素・臭素・沃素の總稱。――くわがふぶつ（―コウ―ブツ）［―化合物＝Halogen compounds］（名）【化】弗化物・鹽化物・臭化物・沃化物の總稱。

†**はろ・ばろ**［遙遙］（名、副）「はるばる」に同じ。

バロメーター［Barometer］（名）「せいうけい」（晴雨計）に同じ。

(**はわう**（―オウ）［霸王］（名）㊀霸者と王者と。霸道と王道と。㊁諸侯を統御し天下に君臨する者。――じゆ［霸王樹］（名）【植】「サボテン」に同じ。

†**は・わかれ**［齒別］（名）齒と齒との間のわかれ透(ス)くヿ。（歷齒）。

は・わけ［葉分］（名）葉の間を穿(ウガ)ちわくるヿ。「―の月」。

は・わけ［派分］（名）黨派又は流派の區別。

は・わたり［刃渡］（名）㊀刃物の刃の長さ。「―三尺の薙刀」。㊁物の刃の方を踏み行く輕業。

†**は・ゐる**（ゐゐゐるゐるゐれゐよ）［齗］（自、わ上一）齒浮くが如くに覺えて痛む。（齗）。

†**はゑ**［破壞］（名）やぶるゝヿ。こはるゝヿ。

†**はゑ・つ・く**（きききくくるくれきよ）［蝕盡］（自、か上二）日又は月全く蝕す。皆既となる。

(**はん**［判］（名）㊀みわけ。はんだん。㊁さばき。さいばん。㊂指令書。又、裁決文。「―の後に書して日く」。㊃さうな。花押(カキハン)。㊄印形。印判。

(**はん**［藩］（名）㊀まがき。かき。㊁かこひ。おほひ。㊂一地方を鎭撫して帝室のおほひとなるもの。㊃諸侯の封土。大名の領地。

(**はん**［版］（名）㊀いた。（板）。㊁ふだ。（札）。㊂にんべつ。名簿。㊃版木。印刷版。㊄印刷版の型又は「インキ」などのつきぐあひ。

(**はん**［飯］（名）めし。いひ。

(**はん**［半］（名）㊀なかば。はんぶん。㊁二にて割り切れざる數。奇數。丁の對。

(**はん**［反］（名）㊀うらはら。反對。㊁そむくヿ。むほん。（叛）。㊂漢字の一字の聲と一字の韻と相合して第三の音を出だすヿ、例へば、堅の音「き」は必歷の反なるが如し。㊃［Antithesis］辨證法にて、物

事若しくは概念が、正より發展して、一の矛盾の狀態となること。

はん[繁]（名）㊀しげきこと。おほきこと。「—より簡に入る」。

はん[煩]（名）㊀わづらはしきこと。㊁もだゆること。

はん[斑]（名）マダラ。ぶち。「—紋」。

はん[班]（名）㊀ついで。次序。㊁くらゐ。階位。㊂れつ。くみ。

—はん[犯]（接尾）罪名の下に添へ附くる語。「強盜—」「國事—」。

—はん[般]（接尾）或語に添へて、事又は時の意に用ふる語。「今—」「先—」「百—」「全—」。

ばん[鷭]（名）【動】大鷭と小鷭との總稱。

ばん[晩]（名）㊀ゆふぐれ。ひぐれ。㊁年老いて後。「—年」。

ばん[盤]（名）㊀さら。ハチ。㊁たらひ。ぼん。㊂だい。つくゑ。㊃將基盤又は碁盤の略稱。

ばん[番]（名）㊀かはるがはる順次に其事をなすこと。㊁ばんにん。又、みまはり。㊂當直。宿直。

ばん[判]（名）紙などの廣さ。「大—」「中—」「小—」。

ばん[萬]（名）よろづのもの。おほくのもの。

ばん[萬]（名）【數】千の十倍。まん。

ばん—[番]（接頭）或物に冠して、常用又は粗末の意を表する語。「—茶」。「—傘」。

—ばん[番]（接尾）㊀順序・等級を數ふるにいふ語。㊁組合・取組などを數ふるにいふ語。

パン[麵麭]（名）（「ホルトガル」語 Pão）一種の食品。白麵麭と黑麵麭とあり、前者は小麥の粉にて製し、後者は裸麥の粉にて製す、其製法は普通麥粉を水にて揑（こ）ね、これに酵母を加へて醱酵せしめたるものを、爐に入れ熟して膨脹せしめ其組織を海綿狀となしたるもの。「イギリスパン」「フランスパン」・餡（アン）「パン」・「堅パン」等の各種あり。

はんあい[汎愛]（名）誰彼の差別なくひろく愛すること。（博愛）。

はんあう[煩懊]（名）心のもだえわづらふこと。

はんい[瘢痍]（名）きず。きずあと。

はんい[犯意]（名）犯罪の意思。

ばんい[蕃夷]（名）化外のもの。えびす。（蠻夷）。

はんいう[汎友]（名）普通一般の交際をなす友。

はんいう[般遊]（名）方々をめぐりあそぶこと。

はんいう[煩憂]（名）わづらひうれふること。

ばんいう[萬有]（名）時・空の間に存在するありとあらゆるすべてのもの。——いんりよく[萬有引力]（名）【理】物體の互に相引きあふ力、其力は各質量の相乘積に比例し二者の距離の自乘に逆比例す。（宇宙引力）。——しんけう[萬有神教＝Pantheism]（名）萬有は絕對唯一なる實在の現顯にして、其以外には何物も存在せず、即ち神と萬有とは同一體なりと說く教義。

はんいしき[半意識＝Subconscious]（名）【心】現在に於ては認知せられざれど將來に於て意識の現象に入り來るべき意識の內容。

ばんいち[萬一]（名）㊀萬分の一。わづか。いさゝか。「國恩の—に報ず」。㊁殆どなくして稀にある場合。「—を僥倖し」。

ばんいち[萬一]（副）ひよっと。もし。

はんいつ[汎溢]（名）洪水のみなぎりあふるゝこと。

ばんいつ[萬一]（名、副）「ばんいち」に同じ。

ばんいぬ[番犬]（名）番をする犬。

はんいんはんせい[半陰半晴]（名）見ゆる範圍のなかばはくもりなかばははれてあること。

はんいんやう[半陰陽]（名）ふたなり。

ばんう[盤紆]（名）めぐりまはること。

はんうつ[煩鬱]（名）心のわづらひふさぐこと。

はんえい[繁榮]（名）さかゆること。はんじやう。

はんえい[反映]（名）反射してうつること。

はんえい[反影]（名）反映したる影。

はんえいきうちくじやう[半永久築城]（名）宣戰の前後、要衝の地點に、數週若しくは數月の日數を以て構へたる築城。

はんえり[半襟]（名）襦袢・胴着又は婦人の衣服の襟（エリ）にかぶせて縫ひつくる布帛。

はんえん[藩垣]（名）かき。まがき。

はんえん[繁衍]（名）しげりはびこること。

はんえん[煩厭]（名）わづらひいとふこと。

はんえん[絆緣]（名）きづなとなる因緣。

はんえん[攀緣]（名）よぢたどること。——けい[攀緣莖]（名）【植】葡萄の莖の如く卷鬚を以て他物に攀緣し、又は蔦の莖の如く不定根によりて物に攀緣するもの、稱。

はんおう[反應]（名）うらぎり。內通。

はんおう[反應]（名）【化】二種若しくは二種以上の物體間に起る化學的變化。

はんか[煩苛]（名）わづらはしくくどくどしきこと。

はんか[反歌]（名）かへしうた。

はんか[半價]（名）定價の半分。はんねだん。

はんか[半可]（名）なま。未熟。

ばんか[挽歌]（名）㊀柩を挽（ひ）きて野邊のおくりをなすときにうたふ歌。㊁死者を哀悼する詩歌。

ばんか[晩霞]（名）ゆふやけ。

ばんか[晩夏]（名）㊀夏の末。㊁陰曆六月の異稱。

はんかい[半開]（名）㊀なかばひらくこと。「花は—酒は微醉」。㊁未開の域を脫して、未だ開化の域に達せざること。

はんかう[版行]（名）㊀書籍を印刷して世に出すこと。（刊行）。㊁轉じて、版木の稱。㊂印形。

はんかう[伴行]（名）㊀ともなひゆくこと。つれゆくこと。㊁他のものにつれて行はるゝこと。

はんかう[犯行]（名）犯罪の行爲。

はんかう[頒行]（名）くばり弘くこと。わかつこと。

はんかう[反抗]（名）はりあふこと。はむかひ。てむかひ。てきたい。

はんかう[半髮]（名）（「はんかみ」の轉訛）頭髮を半ばそりたるもの。

ばんかう[蠻行]（名）野蠻なるおこなひ。

ばんかう[萬考]（名）さまざまに考ふること。

ばんがう[番號]（名）順番の符號。

はんかうや[版行屋]（名）版木をほることを業とする人又は店。

はんかがみ[判鑑]（名）「いんかん」（印鑑）に同じ。

はんがく[半額]（名）全額の半分。

はんがく[板額]（名）きりやうの美しからぬ女を嘲りていふ語。

ばんかく[萬客]（名）おほくの客。

ばんがく[晩學]（名）年長けて後に學問をはじむること。

はんかげ[半影]（名）【理】物體が光に照さるゝとき、其後に投ずる影の中周圍の稍や明き部分。

ばんがさ[番傘]（名）常用の粗末なる雨傘。

ばんがしら[番頭]（名）昔時、武家の一隊の番士の長。

ばんかず[番數]（名）番のかず。

ばんがた[晩方]（名）くれがた。ゆふかた。

ばんかぢ[番鍛冶]（名）昔時、諸國より京都にかはるがはる勤番せし鍛冶。

ハンカチーフ[Hand-kerchief]（名）西洋風の手ふき、方形なるもの「ハンケチ」。

はんかつう[半可通]（名）なまものしり。一知半解。

はんガッパ[半合羽]（名）丈短き合羽、享保の初頃より行はる。

ばんがはり[番代]（名）かはりばん。

ばんカラ[蠻襟]（名）風采の粗野なること。言動のゐなかじみたること。「ハイカラ」の對。

はんかわき[半乾]（名）まだよくかわかぬこと。

はんかん[反間]（名）敵の間者の入り來りたるを利用して、敵同士の仲をさく流言又は手段を設くること。轉じて、敵同士の仲をさく流言又は手段をめぐらすこと。（離間策）。

はんかん[藩翰]（名）「はんぺい」（藩屏）に同じ。

はんかん[繁閑]（名）いそがしきとひまなると。

はんかん[繁簡]（名）しげきと簡略なると。「—宜しきを得」。

はんかん[犯姦]（名）法をおかすこと。

はんがん[半眼]（名）眼を半ば開きたること。

はんがん[斑岩]（名）【鑛】閃綠岩・輝綠岩等の巨晶が岩面に散布せるもの。

はんき[半旗]（名）弔悼の意を表するため、竿頭よりさげて國旗をかゝぐること。

はんき[反旗]（名）むほん者たるもの、樹（タ）つるはた。——をひるがへす[飜反旗] むほんをなすにいふ。

はんき[半期]（名）一個年の半分。

はんき[範軌]（名）のり。てほん。

はんき[飯器]（名）めしを盛る器具。

はんぎ[版木]（名）文字・圖畫などを彫刻せる板、これに墨又は繪具（ヱノグ）を塗りて紙に印刷するもの、材は、我國にてはおもに山櫻・黃楊などを用ひ、支那にては梨・棗などを用ふ。かたぎ。ゑりいた。

ばんき[萬機]（名）㊀おほくの機密。又、おほくの要件。㊁天下の政事。帝王の政務。

ばんき[晩歸]（名）おそくかへること。夕方に歸ること。

はんぎ[板木]（名）合圖に叩きて鳴らす板。

はんきう[斑鳩]（名）【動】「ずずかけばと」に同じ。

はんきう[半球]（名）㊀地球を東西又は南北に切半したるものと假想しての稱。「東—」。㊁【數】中心を通過する平面にて球を兩分したるもの、一。

はんぎし[版木師]（名）版木をほる業の人。

はんぎや[版木屋]（名）前條に同じ。

はんきやう[反響]（名）㊀【理】音響の障壁にあたり反射して同じ響の聞こゆること、山彦の如きは即ちこれなり。㊁他に影響して、其處にも同樣の事情生ずること。

はんぎやう[版行]（名）「いんぎやう」（印形）に同じ。

ばんきやう[蕃境]（名）蕃民の居る土地。

ばんきやう[萬頃]（名）「ばんけい」に同じ。

はんぎやく[叛逆]（名）そむくこと。むほん。

はんぎやく[犯逆]（名）もとりさかふこと。

はんぎやく[煩逆]（名）胸もとのむかつくこと。

はんきゆう[半弓]（名）大弓（ダイキユウ）の凡そ半分の長さの弓。

はんぎよ[販魚]（名）【動】「ひらめ」に同じ。

ばんきよ[盤踞]（名）わだかまること。

はんきよく[反曲]（名）そりかへること。

はんぎよく[半玉]（名）（未だ一人前とならずして、玉代の半分なる故）。年わかき藝者。（雛妓）。

ばんきよく[盤曲]（名）わだかまりめぐること。

ばんきよく[盤局]（名）將棊盤・碁盤などの稱。

はんきり[半切]（名）「はんきりがみ」の略言。

――がみ［半切紙］（名）杉原（スギハラ）を横にふたつに切りたる書狀用の紙、後にはすべて此形に切りて用ふる紙の稱。
はん-ぎり［半切］（名）能の裝束、形は大口に同じくして襞積あるもの。
（はん-ぎり（名）底淺き桶。
はん-きれ［半切］（名）「はんきり」に同じ。――がみ［半切紙］（名）「はんきりがみ」に同じ。
（はん-きん［繁勤］（名）いそがはしきつとめ。
（はん-きん［煩襟］（名）わづらはしきおもひ。又、ちりにけがれたるこゝろ。
（はん-きん［半金］（名）金額の半分の金額。
（ばん-きん［版金］（名）㊀昔時、大判・小判の總稱。㊁後世、大判の特稱。（判金）。
（ばん-きん［輓近］（名、副）ちかごろ。近世。最近。
（はん-く［半句］（名）㊀一句の半分。㊁すこしのことば。「一言―」。
（はん-く［半工］（名）一人前の半分の手間。
（はん-くう［半空］（名）なかぞら。中天。
はん-ぐつ［半沓］（名）西洋風の底淺き沓、足首だけ入るゝもの。
（ばん-くつ［蟠屈］（名）わだかまりまがること。
ばん-ぐみ［番組］（名）演藝又は勝負ごとのくみあはせ。又、これを記したるもの。
（はん-くわ［繁華］（名）㊀しげくしてはなやかなること。「―を尙ばず」。㊁さかえにぎはふこと。
（ばん-くわ［晩花］（名）おそざきのはな。
（ばん-くわい［挽回］（名）もとへひきもどすこと。むかしへとりかへすこと。（恢復）。
（ばん-ぐわい［番外］（名）定まりたる番數の外。
（はん-くわこ［半過去］（名）［文法］動詞の現在に最も近き過去の動作を表するもの。
（はん-くわん［盤桓］（名）たちもとほること。
（はん-ぐわん［判官］（名）㊀「はうぐわん」に同じ。㊁裁判官。法官。㊂臺灣總督府法院にて裁判事務を取扱ふ官職。――だい［判官代］（名）古昔、院の廳の官名。
（はん-くわんぱう（リ-ポ）［半官報］（名）政府の機關新聞。
（はん-くわんぴ［半官費］（名）其費用の半分が官費なること。
（はん-げ［半夏］（名）㊀「はんげしやう」の略言。㊁【植】三白草科に屬する草、葉はおもだかに似て、數葉莖頂に若生し、半夏生の頃白色を呈す、花は外綠色にして內紫黑色を呈し、萼及瓣を缺き總狀花序に排列す、根は藥用に供せらる。はくそみ。（三白草）。
（はん-けい［半徑］（名）【數】圓又は球の中心より其圓周又は表面に至るまでの距離。
（ばん-けい［晩景］（名）㊀夕日の影。㊁ゆふがたの景色。㊂ゆふがた。ゆふぐれ。
（ばん-けい［萬頃］（名）地面又は水面のひろきさまにいふ語。
（はん-げき［反擊］（名）軍隊をあとへひきかへして追ひ來る敵をうつこと。
（はん-げき［繁劇］（名）用事のしげきこと。せはしきこと。（多忙）。
（はん-げしやう（ヨウ-シ）［半夏生］（名）曆にて、夏至の第二候即ち夏至より十一日目、陽曆七月二日の頃に當り、農家にては田植の終期となす。
ハンケチ（名）「ハンカチーフ」に同じ。
（はん-けつ［判決］（名）㊀曲直をわかちきむること。さばき。㊁【法】裁判所が法規を適用して、訴訟事件を處分し終結せしむること。――しゆぶん［判決主文］（名）判決文の一部にして、裁判所のなしたる處分を表示したる部分。――ぶん［判決文］（名）判決を下したる事實・理由及主文を記載したる文書、其訴訟事件の掛判事の作成するもの。――れい［判決例］（名）訴訟事件に對する判決の實例。
（はん-げつ［半月］（名）㊀一個月の半分。㊁弓張月。弦月。㊂弦月の形をなしたる半圓。
（はん-けん［版權］（名）著作權の舊稱。
（はん-げん［反言］（名）いひかへすこと。
（はん-げん［半減］（名）半分へること。
（はん-げんぷく［半元服］（名）維新前、男子の額のすみを剃（ソ）り、女子の眉毛も剃（ソ）らず鐵漿（カネ）もつけずして、たゞ丸髷に結びしこと。
（はん-ご［反語］（名）㊀前言をうらがへしにして結ぶ語、例へば「勉めざるべけんや」「來べきものかは」などの類。㊁相手の說に對して種々の質問を試み、相手をして自家撞着に陷らしむること、古昔「ギリシヤ」の「ソクラテス」又は支那の孟子などのよく使用したりといふ方法。
（はん-ご［煩語］（名）くだくだしきことば。
（ばん-こ［萬古］（名）㊀永久。永遠。㊁「ばんこやき」の略言。
（ばん-こ［萬戶］（名）おほくのいへ。すべてのすまひ。
（ばん-ご［蠻語］（名）夷狄のことば。
（ばん-こう［萬口］（名）㊀多くの人のくち。㊁いろいろさまざまにいひなすこと。
（ばん-こうくわ［番紅花］（名）【植】「さふらん」に同じ。
（はん-こく［翻刻］（名）「ほんこく」に同じ。
（はん-ごく［反獄］（名）罪質の罪にて處刑の定まりたるものを、あらためかへて無罪となすこと。
（ばん-こく［晩刻］（名）㊀ゆふかた。ゆふぐれ。㊁よる。夜分。
（ばん-こく［蕃國］（名）化外の國。外國。
（ばん-こく［萬國］（名）世界の國々。地球上の各國。――いうびんれんがふ（ゴウ）［萬國郵便聯合］（名）萬國郵便聯合條約の締盟國及加入國が、相互の郵便局の間に、信書・葉書・印刷物・營業用書類・商品見本等の郵送の交換をなすために組織せる聯合。――こうはふ（ホウ）［萬國公法］（名）「こくさいこうはふ（國際公法）」に同じ。――こくわいぎ（コツ）［萬國國會會議］（名）加盟せる諸國の國會議員の代表者若しくは有志者が會合して、意見を交換し緊要なる事項を決議する會議。――はくらんくわい［萬國博覽會］（名）萬國の參同する博覽會。――へいわくわいぎ［萬國平和會議］（名）萬國の平和を目的とし、條約國より委員を派出してこれに參同し、國際共通の規定を協議する會議、「ロシア」國皇帝「ニコラス」二世の唱道にかゝる。
（ばん-こ-こう［萬戶侯］（名）知行多き大名。
（ばん-こ-に［番個］（副）㊀其度ごとに。㊁かはりあひて。
（ばん-こふ（ゴウ）［萬劫］（名）永遠。永久。
（ばん-ごや［番小屋］（名）番をするために造れる小屋。
ばん-こ-やき［萬古燒］（名）伊勢國朝明郡小向村より產出する陶器、薄くして堅く、萬古の文字を印す。
（はん-こん［瘢痕］（名）きずあと。
（ばん-こん［晩婚］（名）年長けて後の結婚。
（ばん-こん［盤根］（名）㊀わだかまりたる根。㊁困難なる事。――さくせつ［盤根錯節］（名）紛糾して處理いとむづかしき事件。「―に會せずんば利器を試むるを能はず」。
（はん-ごんかう（ウ-コ）［反魂香］（名）漢の孝武帝が、李夫人の物故せし後、香を燃じて其のおもかげをありありと見たりといふ故事より、燃ずれば死者のおもかげを其煙の中に見ることを得べしといふ迷想のある香。「たましひ還す―」。
（はん-さ［煩瑣］（名）こまごましきこと。くだくだしきこと。
（はん-ざ［反坐］（名）加害者を、其の被害者に加へたる害と同一の刑に處すること。
（はん-ざ［半座］（名）一座席の半分。――をわかつ［分㆓半座㆒］自分の席を半分あけて人を坐せしむ。
┼はん-ざ［判者］（名）「はんじや」に同じ。
（はん-さい［燔祭］（名）ひもろぎを供して神を祭ること。
（はん-さい［半截］（名）半分にたちきること。又、其きれ。
（はん-さい［半歲］（名）一個年の半分。
（はん-さい［半齋］（名）【佛】（い）（午時は一日の中半なるが故にいふ）午時の齋食（トキ）。（ろ）亡人忌日の前夜即ち逮夜をもいふ。
（はん-ざい［犯罪］（名）【法】刑罰を附したる法令に違反する所爲。正義に反し社會を害する所爲。犯したる罪。
（ばん-ざい［晩歲］（名）「ばんねん（晩年）」に同じ。
（ばん-ざい［萬歲］（名）㊀いつまでも生くること。又、いつまでも榮ゆること。㊁祝すべきこと。めでたきこと。㊂物事の緣起を祝するに用ふる呼び聲。㊃物事をはやすに用ふる語。――のち［萬歲後］（名）貴人の死後の義にいふ語、「陛下―」。
（はんざい-しや［犯罪者］（名）犯罪のあるもの。
（はんざい-にん［犯罪人］（名）前條に同じ。
┼はんざい-の-おび［斑犀帶］（名）古昔、四位・五位の人が束帶のときに用ひし革帶。
ばんざい-の-はた［萬歲旛］（名）「ばんぜいのはた」に同じ。
（ばんざい-らく［萬歲樂］（名）雅樂の曲名。
ばん-さいるゐ［板鰓類］（名）【動】魚類の一目、鰓は板狀をなし內に隱れて鰓蓋なく五個乃至七個の鰓孔あり、其骨骼は軟骨を以て組織せられ、顆粒狀又は齒狀の鱗を有す、すべて海產にして卵生又は胎生なり、さめの類これに屬す。
（はん-さう（ウ-ツ）［反想］（名）おもひかへすこと。
（はん-さう（ウ-ツ）［繁霜］（名）しげき霜。
（はん-さう（ウ-ツ）［瘢瘡］（名）きずあと。
┼ばん-さう（ウ-ツ）［番匠］（名）「ばんじやう」に同じ。
（ばん-さう（ウ-ツ）［萬象］（名）「ばんしやう」に同じ。
（ばん-さう-かう（コウ-ソウ）［絆創膏］（名）瘡口の開かぬためにはる膏藥。
はん-ざき［半割］（名）【動】「さんせううを」に同じ。
はん-ざし［笄刺］（名）「はずさし」の音便。
（はん-ざつ［煩雜］（名）わづらはしくいりくみたること。くだくだしく混雜すること。（錯綜）。
はんさ-てつがく［煩瑣哲學＝Scholasticism］（名）「ヨーロッパ」の中世に行はれし哲學、當時は一般に「キリスト」教の支配を受け、哲學はたゞ其教理の眞理なることを證明する具となれり。
（はん-ざふ（ウ-ゾ）［半插］（名）㊀水を注（ソソ）ぎ入るゝに用ふる具、柄に水の通路あり。（匜）。㊁齒黑に用ふるみゝだらひ。
（はん-さよう［反作用］（名）【理】甲物體の乙物體に及ぼす作用に對して、乙がこれと等（ヒト）しき力にて、反對に甲に作用すること。

(はん-さん[半産](名) ながれ産。流産。
(ばん-さん[晩蠶](名) おそくかひたるかひこ。
(ばん-さん[晩餐](名) ゆふめし。ばんめし。夜食。
——くわい[晩餐會](名) 衆客を招待して晩餐を供するを。
(はん-し[半紙](名) 昔時、延紙(ノベガミ)を半截して日常用ひたる紙の稱。後世は、別に其大さに製したるものをいふ。
(はん-し[半死](名) ㊀いきのたえぐくなるを。死にかゝりてあるを。㊁餘命いくばくもなきを。
(はん-し[班師](名) 軍隊をひきゐてもどるを。
(はん-し[飯匙](名) めししやくし。
(はん-し[藩士](名) 大名の臣下。
(はん-し[判士](名) ㊀審判をなすもの。㊁軍法會議の裁判を掌る職名。——ちやう[判士長](名) 軍法會議の裁判長。
(はん-じ[判事](名) ㊀古昔、刑部省の被管に屬し、罪人を糺問し刑罰の事を掌りたる職名、大少中の別あり。㊁現今は、裁判所を組織し裁判事務を掌る官職、勅任若しくは奏任なり。
(はん-じ[班次](名) ㊀ならび。㊁くらゐ。㊂じゆんばん。
(はん-じ[半時](名) はんとき。
(ばん-し[番士](名) ㊀番組に分けたる兵士。㊁番に當りたる兵士。
(ばん-し[挽詩](名) 死者を弔する詩。
(ばん-し[萬死](名) ㊀とても生命のたすからぬを。㊁生命をなげ出すを。——をいでていつしやうをう[出萬死得一生] 危きいのちの助かりしにいふ。
(ばん-じ[萬事](名) すべての事。
(ばん-しう[晩秋](名) ㊀秋の季。㊁陰曆九月の異稱。(暮秋)。

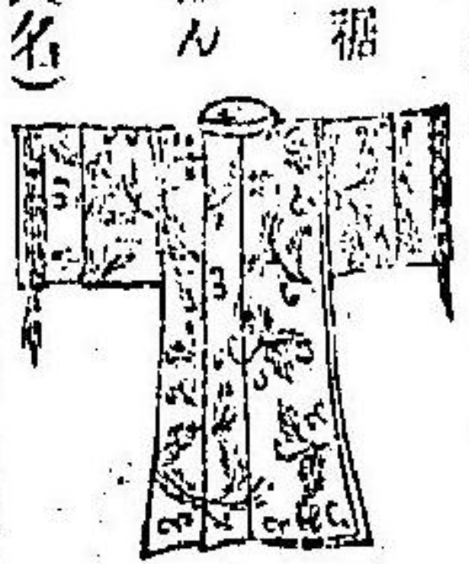
(はん-しき[範式](名) ㊀のり。かた。㊁[數]「こうしき」(公式)に同じ。
(ばん-しき[盤渉](名) 十二律の一。
(はん-しくわ[斑枝花](名) [植]「ぱんや」に同じ。
(はん-じせい-たい[反磁性體](名) [理]磁石に近づくるとき、磁石に近き端に同名の極を有する物體、蒼鉛は其一なり。
はん-した[版下](名) 版木に貼(ハ)りて彫(ホ)るべき下書。——がき[版下書](名) 版下をかくを。又、其人。
(はん-じつ[半日](名) 「はんにち」に同じ。「浮生—の閑」。
(はん-しはん-しやう[半死半生](名) 半分死してゐるを、即ちいきのたえぐくにて殆ど死せんとせるを。
(ばん-しふ[蕃習](名) えびすのならひ。
はん-じ-もの[判じ物](名) あらはに説かずして其意義を文字又は圖畫などに寓し、觀者をして考へ判ぜしむるもの。
(はん-しや[反射](名) [理]日光などの波動が一物質より他物質に向つて進むとき、その境界面に達するや再び初めの物質内に逆行するを。
(はん-じや[判者](名) 物事の可否、優劣等を判斷する人。
(ばん-しや[挽車](名) ひつぎをのせてひき行く車。
(ばん-しや[蕃社](名) 蕃人の組合。
(ばん-しや[萬謝](名) あつく御禮をいふを。又、あつく御わびをするを。
(はん-しやう[反省](名) 「はんせい」に同じ。
(はん-しやう[斑晶](名) [鑛]或物の結晶が他物中に點在せるもの。

(はん-しやう[反掌](名) たなごゝろをかへすを。物事のいと容易なるにいふ語。
(はん-しやう[叛將](名) むほんしたるものゝ大將。
(はん-しやう[帆檣](名) ほばしら。
(はん-じやう[叛狀](名) むほんのやうす。
(はん-じやう[犯狀](名) 犯罪のやうす。
(はん-じやう[繁昌](名) にぎはふを。さかゆるを。
(ばん-しやう[番匠](名) ㊀古昔、大和・飛驒などの諸國より、京都へかはるぐ勤(ツト)めし大工の稱。㊁轉じて大工の稱。
(ばん-しやう[萬象](名) さまぐのかたち。いろぐのもの。「森羅—」。
(ばん-しやう[萬障](名) いろぐの故障。さまぐの差支。「—御繰合」。
(ばん-じやう[萬狀](名) さまぐのかたち。いろぐのさま。「千態—」。
(ばん-じやう[番上](名) 順番に上直(トノヰ)するを。
(ばん-じやう-づち[番匠槌](名) さいづち。
はん-しや-うんどう[反射運動](名) [心]外來の刺激に對して無意識に起る吾人の運動、例へば睡眠せる人の手に觸るれば、其人は意識せざれど其觸れたる部分を動かすが如し。
(はん-しや-かく[反射角](名) [理]反射線と法線とのなす角、角度は投射角に等(ヒト)し。
(はん-しや-きやう[反射鏡](名) 光線を反射せしむる鏡面。
(ばん-しやく[晩酌](名) くれがたの食事のときに酒を飲むを。
(ばん-じやく[磐石](名) ㊀大いなる石。いはほ。大石。㊁堅固なるを、しつかりして動かざるを。——のり[盤石糊](名) 麩にて製したる糊、膠の如く粘り強し。

(はん-しや-さよう[反射作用](名) [心]反射運動をなす作用。
(はん-しや-せん[反射線](名) [理]波動が反射して逆行するときの方向、法線に對して投射線の反對側にあり。
(はん-しや-そくかく-き[反射測角器](名) [鑛]鑛物の面角を測る器械。
(はん-しや-ろ[反射爐](名) 鋼鐵を熔(ト)かすに用ふる爐、光線を集合せしむる裝置のもの、大砲などを鑄るに用ふ。
(はん-しゆ[藩主](名) 藩の領主、即ち大名。
(はん-じゆ[判授](名) 古昔、所屬長官の判斷にて位を授けしを、即ち八位以下の叙位にいふ。
(はん-じゆ[藩儒](名) 藩主に事ふる儒者。
(ばん-しゆ[晩種](名) おそくたねまきするを。
(ばん-じゆ[萬壽](名) (數かぎりなきことぶきの義)壽命をことぶきていふ語。——せつ[萬壽節](名) 支那にて、天子の御誕生日のいはひ。「天子の—」。
(はん-じゆく[半熟](名) なまにえ。なまやけ。
(はん-しゆご[半守護](名) 古昔、一國の半を守護せしもの。
(ばん-しゆつけ[晩出家](名) 年長けて後出家したるもの。
(ばん-しゆん[晩春](名) ㊀春のすゑ。㊁陰曆三月の異稱。
(はん-しよ[犯所](名) 犯罪ありたる現場。
(ばん-しよ[蕃書](名) 徳川時代に、西洋の書籍の稱。「—取調所」。
(ばん-しよ[番所](名) 番人の詰所。ばんどころ。「見番」。

(ばん-しよ[繙書](名) 書をひもとくを。
(ばん-しよ[蕃薯](名) [植]「さつまいも」に同じ。
(はん-しよう[反證](名) 反對の證據。
(はん-しよう[汎稱](名) ひろくすべとなふるを。
(はん-しよう[半鐘](名) 小さきつりがね、寺院又は陣中若しくは火災などのとき、相圖にたゝき鳴らす鐘。
(はん-じよう[煩冗](名) わづらはしくくだ〲しきを。
(ばん-しよう[晩鐘](名) 入りあひの鐘の音。
(ばん-じよう[萬乘](名) (周の時代に天子は兵車一萬輛の定めなりしよりいふ)君主の位。
廿はん-じよう-でん[半昇殿](名) 古昔、殿上の間の小板敷(コイタジキ)まで昇るを許されしを。
(はん-しよう-どろばう[半鐘泥坊](名) (火見櫓につるしたる半鐘をぬすむものゝ義)いとすぐれて丈の高き者をあざけりていふ語。
ばん-じよう-の-きみ[萬乘君](名) (支那の周の代に、天子は兵車萬乘を出す制なりしよりいふ)君主。天子。
(はん-しよく[斑色](名) まだらいろ。
(はん-しよく[繁殖](名) しげりふゆるを。ふえはびこるを。ふえますを。(蕃殖)。
(はん-じよく[繁縟](名) 過度にこまかくしげきを。くだ〲しきを。
(ばん-しよく[晩食](名) ゆふ方の食事。
(ばん-しよく[蠻觸](名) (莊子に蝸牛の左角に觸氏右角に蠻氏といふ國ありて相爭ふといふ寓言あるに出づ)小さき了見から、互に役に立たぬ事に爭ひをなすもの。
(ばん-しよく[伴食](名) ㊀さうばん。ばいしよく。㊁實力實權なく徒に其職に備はりて、他の同僚のなすまゝにまかするを。

廿はん-じり[半尻](名) 裾のみじかき狩衣。


[はんじり]

(はん-じる[判](他) 「はんず」の訛。
(はん-しるゐ[半翅類](名) [動]昆蟲類の一目、口器は吻狀をなし、物に刺(サ)し入れて其汁液を吸ふに適す、膜樣の四翅を有するものあり、又は全く缺如するものあり、變態不完全にして害蟲多し、あらみ・せみ・うんか等これに屬す。
はん-じ-ゑ[判じ繪](名) 繪をかきて判物(ハンジモノ)としたるもの。
(はん-しん[半身](名) ㊀全身の半分。㊁半身の像又は寫眞。
(はん-しん[反身](名) そりみ。
(はん-しん[反脣](名) (くちびるをかへす義)そしるを。
(はん-しん[叛心](名) そむかんとするこゝろ。
(はん-しん[叛臣](名) むほんをなす臣下。
(はん-しん[藩臣](名) 諸侯の臣。
(はん-じん[犯人](名) 犯罪ある人。
(ばん-しん[蕃神](名) 外國のもの、信ずる神。えびすの神。
(ばん-じん[蕃人](名) 外國の人。えびすの人。
(はん-しん-けう[汎神教](名) 「はんいうしんけう」(汎有神教)に同じ。
(はん-しん-はん-ぎ[半信半疑](名) 半ば信じ半ば疑ふを。信疑何れとも決せざるを。
(はん-しん-ふずゐ[半身不隨](名) 中風の病にかゝり、半身だけ感覺を失ひてはたらけぬを。
はん-ず[反](自、さ變) ㊀うらはらにてあり。反對なり。㊁たがふ。もとる。㊂謀叛す。そむく。㊃反省す。かへりみる。
はん-ず[判](他、さ變) ㊀判斷す。みわ

く。㊁推考す。かんがふ。

(はんすう)[半數](名) 全數の半分。

(はんすう)[反數](名) 【數】或數にて一を除したるもの、其數に對する稱。逆數。

(はんすう)[反芻](名) にれがむと。 **――るゐ**[反芻類](名) 【動】偶蹄類の一、概ね門齒犬齒を缺(カ)き、胃複雜にして四部より成る、あらくかみたる食物は第一の胃に入り第二の胃に移りて再び口に吐出し、十分にかみて後、第三第四の胃に送らる、うし・しか・ひつじ等これに屬す。

(ばんすけ)[半助](名) 五十錢の異稱。圓助の對。(東京の方言)。

はんずり[版摺](名) 版木を紙にすると。又、其人。

(はんずゐ)[伴隨](名) つきしたがふと。

(ばんすゐ)[晩炊](名) ゆふ方のかしぎ。

(はんすゐ-はんせい)[半睡半醒](名) 半はねむり半はさめてあると。うつらうつらしてあると。

はんすゐ-はんせい[半醉半醒](名) 半は醉ひ半は醒めたると。ほろよひ。

(はんせい)[半生](名) 生涯の半分。

(はんせい)[伴生](名) ともなひ生ずると。

(はんせい)[反正](名) もとの正しきさまにかへると。又、もとの正しきさまにかへすと。

(はんせい)[藩政](名) 大名の其領地内に行ふ政事。

(はんせい)[繁盛](名) にぎはひさかゆると。

(はんせい)[反省](名) ㊀自ら自己の身心の狀態をよく觀察すると、かへりみると。㊁[Reflection]自己の內界の諸作用に關する經驗。

(はんせい)[反噬](名) 恩ある人にかみつくと、又、恩ある人にそむくと。

(ばんせい)[萬世](名) よろづよ。(萬代)。

(ばんせい)[萬姓](名) あをひとぐさ。たみ。萬民。

(ばんせい)[晩晴](名) ゆふかたにそらのはるゝと。

(ばんせい)[晩生](名) おそくはゆると。

(ばんせい)[晩成](名) ㊀おそく出來あがると。㊁年長けて後成功すると。

(ばんせい)[蠻性](名) 野蠻なる性質。

(はんせい)[阪西](名) 「くわんせい」(關西)に同じ。

(ばんぜい)[萬歲](名) 皇運の長久を壽(コト)ぶき祝ふ語。 **――のはた**[萬歲旛](名) 天皇御卽位の時、祝意を表してたつるはた。

(ばんせい-ふきう)[萬世不朽](名) 永遠にくちざると。いつまでも存在してあると。

(はんせう)[半霄](名) なかぞら。

(はんせう)[半宵](名) よなか。

(はんせう)[反照](名) 「はんえい」(反映)に同じ。

(はんせう)[返照](名) ゆふひかげ。ゆふひ。

(はんせう)[蟠繞](名) よぢまとふと。

(はんせう)[煩擾](名) わづらはしくいりみだると。

(ばんせう)[蕃椒](名) 【植】「たうがらし」に同じ。

(はんせき)[版籍](名) 版圖と戶籍と。轉じて、土地と人民と。

(はんせき)[藩籍](名) 封土と人民と。「――を奉還す」。

(はんせき)[叛跡](名) むほんのあとかた。

(ばんせき)[盤石](名) 碁盤と碁石と。

(はんせつ)[半切](名) ㊀半分にきると。(半截)。㊁唐紙・白紙・畫仙紙などの全一枚を、竪(タテ)に二切にしたるもの。(半折)。

(はんせつ)[反切](名) 漢字の二字の音を合して一音となす方法、卽ち切に同じ。(反及切の條を見よ)。

(はんせつ)[汎說](名) ひろくひきくるめて說くと。

(はんぜつ)[反舌](名) 【動】「もず」に同じ。

(ばんせつ)[晩節](名) 老後。晩年。

(はんせん)[半錢](名) ㊀一錢の半、卽ち五厘。㊁轉じて、わづかのかね。

(はんせん)[搬船](名) 荷物をつみはこぶ小船。

(はんせん)[帆船](名) ほまへせん。

(はんせん)[盤旋](名) めぐると。まはると。

(はんせん)[飜然](名、副) おもひかへすさま又は心を改むるさまにいふ語。

(はんぜん)[判然](名、副) はっきりとよくわかるさまにいふ語。「事實――」。

(ばんせん)[萬千](名) 數おほきと、又、さまざまなると。「氣象――」。

(ばんぜん)[萬全](名) いと安全なると。少しも不安心なきと。だいぢやうぶ。「――の策」。

(はんそ)[反訴](名) 【法】本訴の防禦方法として、被告が原告に對し、本訴と相關連せる一の請求を、本訴の繫屬せる裁判所に提出すると。

(はんそ)[藩祖](名) 土地を領有する大名の祖先。

(ばんソウ)[伴僧](名) 葬儀に伴(トモ)ふ僧。

(はんそく)[犯則](名) 法規をおかすと。法にもとると。(反則)。

(はんそく)[反側](名) ㊀ねかへると。㊁そむきて敵につくと。㊂約をたがふると。

(はんぞく)[叛賊](名) むほんせるものども。

(ばんぞく)[蕃賊](名) 自國に仇(アダ)するえびす。

(ばんぞく)[蕃俗](名) えびすのならはし。

(はんそく-し)[反側子](名) あちらにつきこちらにつきて、行動の定まらざるもの。

(はんそく-しや)[犯則者](名) 犯則せる人。

(ばんそつ)[萬卒](名) おほくの兵卒。「――は得易く一將は得難し」。

(ばんそつ)[番卒](名) 番をする兵卒。

(はんた)[繁多](名) ㊀用事の多くいそがはしきと。㊁物事のおびたゞしきと。

(はんた)[煩多](名) わづらはしくおほきと。いりみだれておほきと。

はんだ[盤陀](名) (岩代國半田銀山の産なるが故ともいひ、又は「マレー」諸島中なる「バンダ」島の名に起るともいふ)錫と鉛との合金、蒼白色を呈し、金屬をつぎ合はすに用ひらる。

はんだ[畚](名) 罪人などを舁(カ)き行く粗末なるかご。

(はんたい)[反對](名) ㊀うらはら、うらうへ。㊁むかふに立つと。さからふと。(敵對)。

(ばんた)[番太](名) 番太郎の略言。

(はんだい)[飯臺](名) 衆人の並びて食事する臺。

(はんだい)[盤臺](名) 淺くして廣き楕圓形の盥(タラヒ)、肴屋の用ふるもの。(板臺)。

(ばんたい)[萬態](名) いろいろの狀態。

(ばんだい)[萬代](名) よろづよ。永遠。

(ばんだい)[番臺](名) 湯屋などにて、番人の見張してゐる高座。

(はんたい-うんどう)[反對運動](名) 或ものゝ行動に反對してなす運動。

(はんたい-きふふ)[反對給付](名) 【法】當事者の一方が、相手方の或給付をなすに對して給付をなすと、例へば買手が代金を拂ふに對して、賣手が物品を渡すが如し。

(はんたい-せつ)[反對說](名) 反對なる意見。

(はんたい-せん)[反對船](名) 同一の航路に對し、二三の船主が互に相反目して、運賃を低減し乘客を引きつくるとを競爭するもの。

(はんだい-づら)[盤臺面](名) ひらたくしてみにくきかほをのゝしりていふ語。

はんだいふ[半太夫](名) 「はんだいふぶし」の略言。 **――ぶし**[半太夫節](名) 江戸節の一種、江戸半之丞の語り出だしゝもの。

(ばんだい-ふえき)[萬代不易](名) 永遠にかはらぬと。

(はんたい-ぼうえきふう)[反對貿易風](名) 【地】貿易風の條を見よ。

(はんたう)[半島](名) 【地】その大部は水に圍繞せられ、僅かに狹き陸地によりて大陸と連なれるところ。

(はんだう)[半道](名) ㊀はんと。ちゆうと。㊁下等の役者。

(ばんたう)[晩稻](名) おくて。

(はんだく-おん)[半濁音](名) 【文法】「ぱぴぷぺぽ」の通稱、脣音學上よりいへば「カ」「タ」と同じく破裂音に屬すべきもの。

はんだたみ[半疊](名) 一疊の半分のたゝみ。

(ばんたらう)[番太郎](名) 德川時代に、江戸市中の木戶の番屋の稱。又其番人の稱。

(はんだん)[判斷](名) ㊀對象の如何なる物事なるかを、意識の作用によりて決定すると。かんがへてわけきむると。㊁吉凶のみわけ。

(ばんたん)[萬端](名) あらゆる物事。さまざまの物事。「萬事――」。

(はんち)[判知](名) 判斷して知ると。

(はんぢ)[藩治](名) 大名の知行所內の政治。

(ばんち)[蕃地](名) 化外の民のすむ土地。

(ばんち)[番地](名) 番號を追ひて住所地を區別したる稱呼。

(はんちう)[範疇＝Category](名) ㊀分類。部屬。㊁【哲】吾人が外物を認識してこれを概念とする際、必ず執らざるべからざる形式、卽ち根本的思惟の形式。

(はんちく)[斑竹](名) 【植】竹の一種、幹の表皮に斑文あるもの。マダラだけ。

(ばんちや)[番茶](名) 下等なる茶、摘(ツ)みのこりのあらき茶の葉にて製したるもの。

(はんちやう)[藩廳](名) 大名の領分內の政務を取扱ふ所。

(ばんちやう)[番長](名) 古昔、近衛府の舍人の長。

(はんちゆう)[藩中](名) 大名の家臣の中。 **――もの**[藩中者](名) ㊀同藩のもの。㊁大名の家臣。

(はんちよく)[板直](名) 詩文の平々坦々として何等の變化もなきと。

(はんちん)[藩鎭](名) ㊀一地方のしづめのため兵隊を屯在せしむるもの。㊁王家の藩屛たる諸侯。

ばんづけ[番附](名) 演藝又は遊物などの番組又は勝負ごとに加はれるもの丶人名を、順を追ひて記せるもの。

(はんてい)[判定](名) みわけさだむると。はんけつ。はんだん。

(はんてい)[藩邸](名) 大名の屋敷。

(はんてう)[反跳](名) はづみてとびかへると。

(ばんてう)[晩潮](名) くれがたにさし來るうしほ。

(はんでう)[斑條](名) マダラのすぢ。

(ばんてう)[晩釣](名) くれがたに魚をつると。

(ばんてき)[蠻的](名、形) 其さまの野蠻的なると。粗野なると。

(はんでふ)[半疊](名) 一疊の半分。

ばんて-をけ［番手桶］（名）拭掃除（フキサウヂ）などに用ふる雜用の手桶。

（**はん-てん**［斑點］（名）まばらに散在せる點。まだら、

（**はん-てん**［半天］（名）㊀一天の半分。㊁なかぞら。中空。

（**はん-てん**［半點］（名）㊀一點の半分。㊁いさゝか。わづか。

（**はん-てん**［反轉］（名）㊀まろぶこと。又、まろばすこと。㊁ひつくりかへること。又、ひつくりかへすこと。

（**はん-てん**［半纏］（名）羽織に似て襟をかへさずに着る一種の衣服、まちなく、胸紐をもつけず、半襟を掛くるを普通とすれど、襟に標（シルシ）を染め出して、職人などの着用するもの、仕立には、半襟を掛けず。（半體衣）。——**ぎ**［半纏着］（名）㊀半纏を着ること。㊁半纏を着る職業のもの、即ち職人の類。

（**はん-でん**［班田］（名）官府より一般の公民に田地を給すること、我國にては孝德天皇の御宇に此制を定められ、生れて六歳に至れば、男子は水田二段女子は其三分二を給せられ、毎六年毎に改めて收授せられたり。

はんてんのていり［反轉定理］（數）二つの比が相等しければ、其反比もまた等しといふこと。

（**はん-と**［半途］（名）㊀行く路のなかば。㊁爲す事のなかば。（中道）。

（**はん-と**［版圖］（名）一國の地圖。轉じて、一國の領域。

（**はん-と**［叛徒］（名）むほんをなすともがら。

（**ばん-ど**［蠻奴］（名）㊀めしつかひのえびすの人。㊁えびすの人をいやしめていふ語。

（**はん-どう**［反動］（名）㊀［理］反射作用を起すこと。㊁すべて起動に反對して生ずる動作の稱。㊂ゆりかへし。ゆりもどし。

（**ばん-とう**［晩冬］（名）㊀冬の末。㊁陰暦十二月の異稱。

（**ばん-とう**［番頭］（名）㊀商家の雇人の店の萬事を預るもの。（主管、番店）。㊁［法］商業使用人の一、營業上或種類又は特定の事項を委任せらるゝもの、手代に異ならず。——**かぶ**［番頭株］（名）やがて番頭となるべき商家の雇人。

（**ばん-どう**［阪東］（名）「くわんとう」（關東）に同じ。

（**はん-どう-くわう**［斑銅鑛］（名）［鑛］黃銅鑛に伴生する銅鑛、赤色を帶びたる銅赤色を呈す、銅の原料としては黃銅鑛に次ぎて主要なるものなり。

はんどう-りよく［反動力］（名）反動をおこす力。

（**はん-とき**［半時］（名）一時の半分。

（**はん-どく**［繙讀］（名）書をひもときて讀むこと。

（**はん-どく**［判讀］（名）判じて讀むこと。推察して讀むこと。

（**はん-どくりつ**［半獨立］（名）半獨立國の狀態。——**こく**［半獨立國］（名）或國の一部分にして、特に他國と通商條約を締結し若しくは他國の領事を受容するを得る等の權利を有するもの。

はん-どり［判取］（名）㊀同意者又は加入者などに、共證として捺印せしむるため方々ありくこと。㊁「はんとりちやう」の略言。——**ちやう**（ヨウチ）［判取帳］（名）金錢又は代物の授受の證印を受け置く商用の帳面。

ハンドル［Handle］（名）とつて。把手。（自轉車・「ミシン」などにいふ）。

（**はん-ドン**（名）（半日の「ドンタク」の義）土曜日の半日休なるにいふ。

はん-なが［半長］（名）「はんながぐつ」の略言。——**ぐつ**［半長靴］（名）長靴よりは短く半靴よりは長き雨靴。

（**はん-なふ**（ノウ）［半納］（名）全額の半分だけを納付すること。

（**はん-なん**［繁難］（名）しげくしてむづかしきこと。

（**ばん-なんくわ**［蕃南瓜］（名）［植］「たうなす」に同じ。

（**はん-にく**［燔肉］（名）ひもろぎの肉。

（**はん-にち**［半日］（名）一日の半分。——**がくかう**（ガッコウ）［半日學校］（名）全校の學童を二部に分け、これを午前と午後とに敎授する小學校。

ハンニヤ［般若］（名）㊀（梵語 Prajna、智と譯す）分別妄想を離れたる智慧。㊁恐ろしき面相の鬼女。般若（ハンニヤ）。——**たう**（トウ）［般若湯］（名）僧家にて、酒の隱語。——**づら**［般若面］（名）㊀般若に似たる面。㊁嫉妬をおこしたる女の顏。——**ハラミツ**［般若波羅密］（名）［佛］智慧の光によりて證果を得ること。——**めん**［般若面］（名）㊀前條に同じ。㊁般若の假面。

（**はん-にん**［犯人］（名）犯罪をなしたる人。

（**はん-にん**［半人］（名）一人前の半分。

（**はん-にん**［判任］（名）判任官の略言。

（**はん-にん**［判人］（名）㊀保證に立ち印形を捺（オ）す人。㊁ぜげん。

（**ばん-にん**［萬人］（名）おほくの人。よろづのひと。

（**ばん-にん**［番人］（名）番をする人。

（**はんにん-くわん**［判任官］（名）本屬長官が委任を受けて任命する官吏。

（**はん-ねつ**［煩熱］（名）むし〳〵するあつさ。又、塵世のあつさ。

（**はん-ねん**［半年］（名）一年の半分。

（**ばん-ねん**［晩年］（名）年の老いたる時。「——を樂しむ」。老年、老後。

（**ばん-のう**［萬能］（名）㊀よろづの物事に功能あること。㊁よろづの物事をなし得ること。

はん-の-き［榛木］（名）［植］（「はりのき」の音便）樺木科に屬する喬木、山中に生ず、葉は長橢圓形にして中肋の各側に十個内外の側脈を有す、果實は松に似、幹は薪炭の料に供せられ、果實・樹皮は染料に供せらる。はり。はりのき。（赤楊）。

はん-の-ひ［半日］（名）奇數の日。

（**ばん-ば**［斑馬］（名）マダラうま。

（**はん-ぱ**［半端］（名）㊀揃はぬこと、足らぬこと。はした。㊁おろか。まぬけ。「——もの」。

（**はん-ばい**［販賣］（名）うりさばくこと。うること。あきなふこと。「一手——」。——**くみあひ**（イ-ア）［販賣組合］（名）［法］産業組合の一、組合員の生産したる物に加工し又は加工せずして賣却するもの。——**しや**［販賣者］（名）うる人。あきなふもの。——**しよ**［販賣所］（名）ものを販賣する場所。——**てん**［販賣店］（名）うりさばくみせ。——**にん**［販賣人］（名）「はんばいしや」に同じ。——**ひん**［販賣品］（名）うるしな。あきなふもの。

（**はん-ぱう**（ボウ）［繁忙］（名）いそがはしきこと。（多忙）。

（**ばん-ぱう**（ボウ）［萬邦］（名）おほくのくに。もろもろのくに。

（**ばん-ぱう**（ボウ）［萬方］（名）㊀前條に同じ。㊁すべての方面。方々。㊂さま〴〵に試むること。てをかへしなをかへてなすこと。

（**ばん-ぱう**（ボウ）［蕃邦］（名）化外の國。えびすのくに。

はん-ばかま［半袴］（名）昔時、素袍などの下に用ひたる踝（クルブシ）までの長さの袴、今日普通に用ふる袴はこれなり、長袴の對。

（**はん-ばく**［反駁］（名）反對して非難すること。

（**はん-ぱく**［半白］（名）ごましほの毛髮。（斑白）。

（**はん-ぱく**［斑駁］（名）ぶち。マダラ。

（**ばん-ぱく**［蕃舶］（名）外國のふね。えびすのふね。

（**はん-ばつ**［藩閥］（名）勢力ある藩の出身者が、互に相團結して他藩のものを排して登庸せざること。——**せいふ**［藩閥政府］（名）勢力ある藩の出身者によりて組織せられたる政府。

（**はん-ぱつ**［半髮］（名）男子の髮の結方、頂の周圍の髮を束ね、更に曲げて髻とはけとを作るもの、維新前一般の男子の結（ユ）ひたるもの。

（**はん-ぱつ**［斑髮］（名）しらがまじりの頭髮。

（**はん-ぱつ**［反撥］（名）はねかへすこと。うけつけざること。——**りよく**［反撥力］（名）はねかへす力。

（**はん-はん**［半半］（名）半分づゝにして雙方相等しきこと。

（**はん-ぱん**［斑斑］（名、副）あやのまじりあふさまにいふ語。

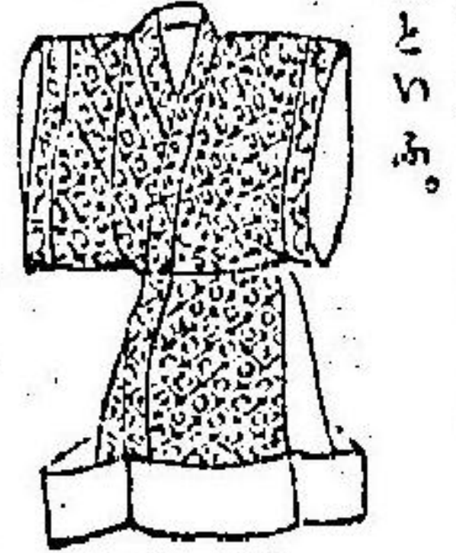
（**ばん-ばん**［萬萬］（副）㊀とても。決して。「左樣な事は——ない」。㊁十分に。まつたく。——**いち**［萬一］（副）もし。ばんいち。ゆめにも。

（**ばん-ぱん**［萬般］（名）いろ〳〵の事。さま〴〵の事。

はん-び［半日］（名）奇數の日。

（**はん-ぴ**［反比］（名）［數］乙數の甲數に對する比を甲數の乙數に對する反比といふ。

（**はん-ぴ**［半臂］（名）古昔、束帶の時、袍と襴（カサネ）との間に着せし兩袖のなき短かき衣、「うへのはかま、すはうがさね、累——」。



［はんぴ］

はん-びらき［半開］（名）花の半ば咲きたること。

はん-びらけ［半開］（名）半ば文明なること。

（**はん-ぴれい**［反比例］（名）［數］甲數が數倍せらるれば乙數は同數分せらるゝ關係あることを、甲乙二數は相反比例すといふ。

（**はん-ぶ**［繁蕪］（名）雜草のおひしげること。

（**はん-ぷ**［頒布］（名）あまねくわかちくばること。ひろくしわたらすこと。「曆の——」「法令の——」。

（**ばん-ぷ**［萬夫］（名）おほくのをのこ。

（**はん-ぷう**［瘢風］（名）なまづはだ。

（**はん-ぷう**［半風］（名）［動］「しらみ」の異稱。——**し**［半風子］（名）前條に同じ。

（**ばん-ぷう**［晩風］（名）くれがたの風。

（**ばん-ぷう**［蠻風］（名）えびすのならはし。野蠻の風習。

（**はん-ぷく**［反覆］（名）うらがへること。又、うらがへすこと。

（**はん-ぷく**［反復］（名）くりかへすこと。たび〳〵すること。

（**はん-ぷく**［叛服］（名）そむくとしたがふと。

（**はん-ぷく**［半腹］（名）山のなかほど。（中腹）。

（**ばん-ぷく**［萬福］（名）さち多きこと。福多きこと。

（**ばん-ぶつ**［萬物］（名）宇宙間に存在せるすべてのもの。ありとあらゆるもの。——**の-れい**［萬物靈］（名）萬物のかしら、即ち人類の稱。

（**ばん-ぷ-ふたう**（トウ）［萬夫不當］（名）剛勇にして、萬夫かゝりても當り得ざること。「——の勇力」。

（**はん-ぶん**［半分］（名）なかば。ふたつわけ。

（**はん-ぶん**［斑文］（名）マダラのもやう。

（**はん-ぶん**［繁文］（名）規則の條項の多きこと。——**じよくれい**［繁文縟禮］（名）規則や禮節のくだ〳〵しきこと。手續などのわづらはしきこと。

（**はん-ぺい**［半平］（名）（駿河國の料理人の名よ

り出づ）一種の食品、魚肉を叩（タ）きて蒸したるもの。あんぺい。はんぺん。

（ばん-ぺい）［番兵］（名） 張番する兵士。番の兵士。番卒。衛卒。

（はん-ぺい）［藩屏］（名） ㊀まがき。へだて。へい。㊁王室の守護。「一の任」「華族は皇室の一」。

（はん-べつ）［判別］（名） ㊀わかち。㊁みわけ。

┼**はん-べ-り**［侍］（自、ら變）「はべり」の音便。

（はん-ぺん）［半片］（名） 一片の半分。

（はん-ぺん）［半平］（名）「はんぺい」の轉訛。

（はん-ぽ）［反哺］（名）（かへしくはす義）子鳥の幼時養はれたるむくいに、食を親鳥にくはへ與ふること。 ── **の-かう**［反哺孝］（名） 鴉は反哺して、よく親鳥につかふといふこと。

（ばん-ぼ）［晩暮］（名） ㊀ゆふぐれ、日ぐれ。㊁時機のおくれたるとき。

（はん-ぼく-るゐ）［攀木類］（名）【動】鳥類の一目、脚は木を攀（ヨ）づるに適す、嘴は强直にして鋭く木を啄（タク）むに適し、樹幹に棲む昆蟲を捕食す、多くは樹穴に巢を營む、きつゝき、ほとゝぎす等これに屬す。

はん-ぼり［版彫］（名） 印形又は版木の彫刻。又、其業の人。 ── **とがたな**［版彫小刀］（名） はんぼりに用ふる小刀。

（はん-ぽん）［飜本］（名） 飜刻したる本。

（はん-ぽん）［版本］（名） 版木を印刷せる書物。印本。

（はん-ま）［半間］（名） ㊀そろはぬこと。たらぬこと。又、其物。㊁氣のきかぬこと。のろきこと。又、其人。

（はん-マンテル）（名）「モーニングコート」の俗稱。

はん-みち［半道］（名） ㊀一里の半分。㊁一行程の半分。

（ばん-みん）［萬民］（名） おほくのたみ。衆民。

（ばん-みん）［蕃民］（名） えびすのたみ。化外の民。

（はん-む）［繁務］（名） いそがはしきつとめ。

（はん-む）［煩務］（名） わづらはしきつとめ。

（はん-めい）［反命］（名） 使ひして其結果を申述ぶること。命を受けたる事をへて其始末を報告すること。（復命）。

（はん-めい）［判明］（名） はっきりとあきらかなること。よくわかること。

（はん-めい）［藩命］（名） 大名又は藩廳の命令。「一を銜み」。

（はん-めう）［斑猫］（名）【動】鞘翅類芫菁科に屬する昆蟲、一對の觸角と三對の步足とを有す、體長一寸許、全身灰黑色にして赤色又は黑色の斑點あり、猛毒ありて劇毒を含む、藥用に供せらる。（芫菁）。

ばん-めし［晩飯］（名） 晩方の食事。

（はん-めん）［半面］（名） ㊀かほの半分。㊁かたかた。かたつら。 ── **しき**［半面識］（名）（後漢の應奉が嘗て袁賀の許に至りしとき、車匠あり、扇戶を開き半面を出して奉を視たり、後數年を經て奉途中にて其車匠を見、識りて聲をかけたりといふ故事に出づ）曾てちよっと面會せしこと。 ── **しんけい**［半面神經］（名） かほの半分の神經痛。

（ばん-めん）［盤面］（名） 盤のおもて。

（はん-も）［繁茂］（名） 草木の生ひ茂（シゲ）れること。しげること。（蕃茂）。

（はん-もく）［反目］（名） 互ににらみあふこと。仲あしきこと。

（ばん-もく）［萬目］（名） 多くの人々の見る所。

（ばん-もつ）［萬物］（名）「ばんぶつ」に同じ。

ハンモック［Hammock］（名） 丈夫なる綱を以て編みたる吊床（ツリドコ）、夏の木陰（コカゲ）又は船中などに吊（ツ）るして寢るためのもの。つりどこ。

はん-もと［版元］（名） 書籍を發兌する所。出版主。

はん-もゝひき［半股引］（名） 丈短くして僅に膝の上まである股引。

（はん-もん）［反問］（名） とひかへすこと。

（はん-もん）［煩悶］（名） おもひみだるゝこと。おもひわづらふこと。わづらひもだゆること。

（はん-もん）［斑紋］（名） まだらの模樣。

（はん-や）［半夜］（名） よなか。中夜。

はん-や［版屋］（名） 版木をほることを業とする人又は店。

ばん-や［番屋］（名） 番人のゐる所。

（ばん-や）［蠻野］（名） 知識開けず道德低きこと。やばん。

パン-や［麪麭屋］（名）「パン」を賣る家。

パンヤ［斑枝花］（名）【植】禾本科に屬する木、熱帶地方に產す、花は椿の如く葉は胡桃に似たり、果實はかがいもに似、中に絮の如きものあり、採（ト）りて布團などに入れて綿の代用とす。（木綿）。

（ばん-ゆう）［蠻勇］（名） 是非善惡に明せず無やみに斷行すること。物事をよく考へず、おしきって突進すること。

（はん-よ）［板輿］（名） いたごし。

（はん-よう）［繁用］（名） 用事繁げきこと。ことおほ。

（ばん-らい）［萬籟］（名） よろづの聲。

（ばん-らい）［晩來］（名） くれがた。

（はん-らう）［煩勞］（名） わづらはしき骨折。うるさき苦勞。

（はん-らう）［藩老］（名） 大名の家老。

（はん-らく）［般樂］（名） あそびたのしむこと。

（はん-らん）［汎濫］（名） 水のみなぎりあふるゝこと、水のはびこりひろがること。「洪水一す」。

（はん-らん）［煩亂］（名） 心のわづらひみだるゝこと。

（はん-らん）［斑爛］（名） いろ〳〵のあやありてう

つくしきこと。

（はん-り）［藩籬］（名） ㊀まがき。かき。㊁かこひ。しきり。

（はん-り）［半里］（名） 一里の半分。はんみち。

（はん-りふ）［飯粒］（名） めしつぶ。

（はん-りやう）［半兩］（名） 支那の漢時代の銅錢。

（ばん-りやう）［盤領］（名） 袍又は水干などの領（エリ）の圓く仕立てあるもの。まるえり。（方領）。

（ばん-りやう）［晩涼］（名） くれ方のすゞしき氣。

（はん-りよ）［煩慮］（名） わづらはしきおもんぱかり。うるさきおもひ。

（はん-りよ）［伴侶］（名） とも。つれ。

（ばん-りよう）［蟠龍］（名） わだかまれる龍。

（ばん-りよく）［蠻力］（名） ㊀蠻勇の力。㊁腕力。

（はん-りん）［半輪］（名） 一輪の半分。「一の明月」。

（はん-るゐ）［煩累］（名） うるさきこと。わづらはしきこと。わづらひ。心配。面倒。

（はん-れい）［煩禮］（名） わづらはしき禮儀。

（はん-れい）［半嶺］（名）「はんぷく」（半腹）に同じ。

（はん-れい）［凡例］（名） 書中の大要又は注意の條々を、書の初めに揭（カカ）げ記すこと。

（はん-れい-がん）［斑糲岩］（名）【鑛】火成岩の一種、粒狀をなすもの。

（はん-れう）［飯料］（名） めしだい。たべれう。

（はん-れき）［頒曆］（名） 曆をくばること。

（はん-れつ）［斑列］（名） ㊀つら。ならび。㊁くみ。

（はん-れん）［半簾］（名） 半ばおろしたるすだれ。

（はん-ろ）［販路］（名） 貨物をうりさばく方面。貨物のうれゆく經路。うれみち。はけくち。

（はん-ろ）［阪路］（名） さかみち。

（はん-ろう）［樊籠］（名） ㊀鳥のをり。かご。㊁自由を束縛せられてつながれある所。

（はん-ろん）［汎論］（名） ひろく通ずる論。又、概括したる論。

（はん-ろん）［煩論］（名） わづらはしく論ずること。

（はん-ゐ）［範圍］（名） ㊀かこひの内に入れこむこと。㊁さかひ。きまり。かこひ。かぎり。區域。ひろさ。

（ばん-ゑ）［盤繪］（名） 盤出して圖狀をなす模樣。

（はん-ゑん）［半圓］（名）【數】直徑にて圓を分ちたる一半。 ── **けい**［半圓形］（名） 半圓の形をなすもの。

ひびぴ

ひ 一種の氣音H即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を吐出する時に生ずる音と、母音「い」との綴音。

び 「ひ」の濁音、すべて「ひ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、從來「ひ」の濁音となしゝは誤なり。

ぴ 脣的破裂音P即ち上下兩脣を離れて破裂せしむる音と、母音「い」との綴音、從來「ひ」の半濁音となしゝは誤りなり。

ひ［日］（名） ㊀太陽の稱。（日輪、金烏、陽靈、赤烏）。㊁太陽の光又は熱。㊂ひる。ひるま。㊃地球自動の一回轉に要する時間、即ち夜半の零時より起算して午後十二時に至る約二十四時間。よるひる。晝夜。㊄ひぎり。日限。㊅とき。をり。㊆ひかず。日數。「一を經る」。㊇日每に行ふこと。「一掛けの金」。㊈主上の御事に冠する語、日神即ち天照皇大神の御裔なるよりいふ。「一の御門」「天津一嗣」。

ひ［火］（名） ㊀物體の灼熱して深紅色となれるもの。㊁物體の燃燒。㊂ほのほ。炎焰。㊃きりび。燧火。㊄あかし。燈火。㊅おき。炭火。㊆焚ること。燎くこと。「一のもの」。㊇火事。火災。㊈烈しき情。おこりたつ情。「戀の一」「胸にたく一」。 ┼ ── **あやふし**［火危］ 古昔、禁中にて近衞の官人が、夜中火の用心に呼びあるきし語。 ── **のごとし**［如火］ いかりのはなはだしきにいふ。又、熱のはなはだしきにいふ。 ── **をあぐ**［擧火］ 火をたく。又、生計をたつ。 ── **をかく** 火をはなつ。 ── **をきんず**［禁火］ 火をたくことを禁ず。 ── **をおとす**［失火］ あやまちて火事をおこす。 ── **をはなつ**［放火］ 火をつく。

ひ［檜］（名）【植】（火の義、鑽（キ）れば火を得るよりいふ）松杉科に屬する喬木、幹高く聳（ソビ）ゆ、葉は常綠にして、小形鱗片狀をなし全部莖に密接す、腹面に生ずる葉は內部の綠に白粉を有す、春の末毬形の果實をむすぶ、材は緻密にして美しく水氣に堪ふるが故に、建築・造船其他種々の用に供せられ、樹皮もまた用途多し。ひのき。

ひ［樋］（名） ㊀せきとめたる水の口に戶を設け、これを開閉して水を出入せしむるもの。ひのくち。（水門）。㊁かけわたして水を送る長き筒（タク）、とひ。「受け一」「かけ一」。㊂刀の刃につくる細長き溝。ちながし。（血溝）。㊃すべて、物の面に設けある細長き溝の稱。「一定木」。㊄廁にて糞を受くる器。（廁）。

┼**ひ**［氷］（名） 水の凍りたるもの。こほり。「一室」。

ひ［杼］（名） 機に緯絲を卷きたる筆（クダ）を入るゝ具。をさ。（梭）。

ひ[翳](名) 瞳(ヒトミ)の上に翳(クモリ)出て、物の見えざる病。

ひ[隔](名) 物事の隔たり又は重なると、「—こ」「そこ—」。

(ひ)[婢](名) めしつかひの女。はしため。こしもと。「女中。下女。」

(ひ)[非](名) ㊀可ならざると。あしきと。㊁道ならざると。よこしま。㊂眞ならざると。いつはり。㊃つみ。罪惡。「—を掩ふ」。㊄きず。缺點。——をうつ そしる。非難す。

(ひ)[否](名) ㊀よからぬと。あしきと。㊁然らざると。いなむべきと。㊂運の開けざると。

(ひ)[脾](名) 【生】胃の外側にある卵圓扁平なる臓、恰も海綿狀をなし、赤血球の新生と崩解とをつかさどるもの。よこし。

(ひ)[比](名) ㊀くらべ。ならび。㊁たぐひ。ともがら。㊂ためし。かた。㊃支那古代の詩の六義の一、物事にくらべて情をのぶると。㊄【數】甲量の中に、乙量の幾倍が含まるゝやの關係の稱。aのbに對する比を$a:b$と表はす。

(ひ)[碑](名) いしぶみ。たていし。せきひ。

(ひ)[緋](名) 火に似たる深紅の色。「—縮緬」。

(ひ)[妣](名) 亡き母の稱。「先—」。

(ひ)[被](名) ㊀おほひ。かぶり。㊁よぎ。布團。

(ひ)[祕](名) ㊀測(ハカ)るべからざると。見るべからざると。㊁示さざると。見せざると。

(ひ)[鄙](名) ㊀いやしきと。㊁ゐなか。

(ひ)[妃](名) きさき。「王—」。

(ひ)—[非](接頭) ㊀或語に冠して、其物事を否定する意を表する語。㊁勤めの明きたると。「—空談」。「—番」「—役」。

(ひ)—[被](接頭) 或語に冠して、其受身なる意卽ち「せらる」の意を表する語。

(び)[美](名) ㊀味の好きと。㊁義の正しきと。㊂讃むべきと。よみすべきと。㊃容貌のすぐれたると。みめよきと。㊄うつくしきと。うるはしきと。㊅すべて感興ある實體の理想化せられたる形象にいふ語。

(び)[微](名) ㊀かすか。ほのか。㊁ちひさきと。こまかきと。㊂すくなきと。わづかなると。㊃いやしきと。寒賤。㊄たへ。精妙。㊅しのび。隱密。「—行」。

(び)[尾](名) ㊀しりを。を。㊁すゑ。しりへ。㊂をはり。おしまひ。㊃廿八宿の一、其條を見よ。

(—び)[尾](接尾) 魚を數ふるにいふ語。「鯛一—」。

ビーア[麥酒＝Beer](名) 「ビール」に同じ。

ヒート[呎](名) 「フート」に同じ。

ビーフ[Beef](名) 牛肉。——カツレツ[Beef cutlet](名) 一種の料理、牛肉を原料としたる「カツレツ」。——ステーキ[Beef steak](名) 一種の料理、牛肉を脂にて煠(イ)めたるもの。

ビール[麥酒＝Beer](名) 大麥を主要なる原料として醸造したる一種の酒、大麥の麥芽より浸出したる液に「ホップ」を加へて苦味芳香を附與し、これに酵母を混じ醱酵せしめて釀造するもの、普通のものは褐色なれど黒麥酒・白麥酒等あり。

(ひ)あい[悲哀](名) ㊀かなしむと。なげくと。(愁歎。哀痛)。㊁かなしむべきと。あはれなると。

(び)あく[美惡](名) よきとあしきと。みめよきとみにくきと。

(ひ)あが・る（らりるるれれ）[乾上](自、ら四) ㊀全く涸る。よくかわく。㊁生計立ちがたくなる。「口—」。

ひあし[日脚](名) 日の空を行くはやさ。ひかげ。

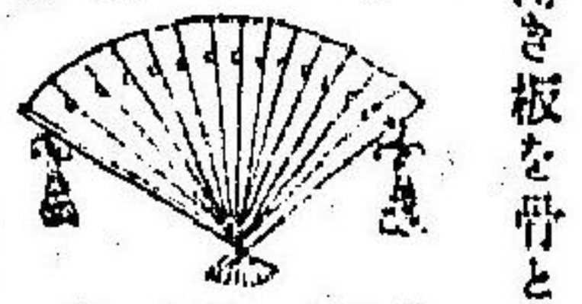
ひあたり[日當](名) 日光のあたると。

ピアノ[Piano](名) 西洋より傳來したる一種の樂器、形は「オルガン」に似、内部に數十條の鐵線を張りたるものにして、上部の裝置を指にて押せば、鐵線に觸れて琴に似たる音色を發す。(洋琴)。

ひあはひ（アハイ）[廂間](名) 家と家との間、「—が高い」。

ひあひ（アイ）[日間](名) ㊀日數。㊁高利貸の日歩、

ひあふぎ（アウギ）[檜扇](名) ㊀檜の薄き板を骨とせる扇、公卿のは二十五枚を、殿上人のは二十三枚を合はせ、絲もて綴ぢたるもの、婦人のは三十九枚にして、繪を描(カエ)き絲の餘りを垂れたり。㊁【植】鳶尾科に屬する草、葉は菖蒲の如くにして廣く、並び生じて形檜扇に似たり、花は黃色にして濃色の斑點あり、觀賞用として栽培せらる。


[ひあふぎ(一)]

ひあぶり[火炙](名) 昔時の刑罰、柱に縛りおき、周圍よりこれを燒き殺すと、放火せる者に科したり。(燔刑)。

(び)い[微意](名) いさゝかのこゝろざし、自分のこゝろざしをへりくだりていふ語、「—を表し」。

ひいき[贔屓](名) 特に愛して力を添ふると。殊にめをかけて助け成すと。

卄(ひ)いけ[氷池](名) 氷をとる池。

(び)いしき[美意識](名) 美を感受する意識、美醜を判別する意識。

ひいぢぢ[曾祖父](名) 祖父又は祖母の父、ひおほぢ。

ひい・づ（づでづづるづれでよ）[秀](自、た下二) ㊀すぐる。まさる。ぬきんづ。㊁卄穗ぬき出づ。

[ひ]いでる(自) 「ひいづ」の訛。

ビイドロ[玻璃](名) (ポルトガル語 Vidro)「ガラス」(硝子)。——かがみ[玻璃鏡](名) 玻璃の裏に水銀を塗りたる鏡。——がみ[玻璃紙](名) 蠟などを延(ヒ)きたる透明の紙。——よま[玻璃絲](名) 「ビイドロ」の粉を塗り延(ヒ)きたる絲(イト)、長崎にて凧を上ぐるに用ふ。

ひいな[雛](名) 「ひひな」に同じ。

ひいばば[曾祖母](名) 祖父又は祖母の母、ひおほば。

ひいふっと(副) 矢を射放つさまにいふ語。

ヒイホン[被風](名) 被風(ヒフ)の唐音。

ひい・る（らりるるれれ）[沖](自、ら四) 「ひひる」の音便、

ひいれ[火入](名) 煙草を吸ふ炭火を入るゝ小さき器。(火盒、火盆)。

ひいろ[緋色](名) ㊀緋(ヒ)の色。㊁銅器のあざやかなる茜色。

(ひ)いん[庇蔭](名) おかげ。かげ。

(び)いん[微陰](名) すこしのくもり、

(ひ)う[飛宇](名) (空にとぶのきの義) 高き家ののき。轉じて、高き殿。

卄ひ・う（ゑゑううるうれゑよ）[㓟](他、わ下二) 肉など細く小さく切る。

(び)う[微雨](名) こさめ。こぶり。

(び)う[眉宇](名) 眉の邊、「喜色—に上る」。

ひうち[火打](名) 火を打ちて出すと。又、其用具。——いし[火打石](名) 下等なる石英、尖鋭なる角を有し、火打鎌と相打ちて火を取るに用ふるもの、神代にはこれを鑽(キ)に代用したりといふ。——がね[火打金](名) 次條に同じ。(燧金)。——がま[火打鎌](名) 古昔、鋼をもて作り木に嵌(ハ)めて燧石(ヒウチイシ)と打ち合はせて、火を取るに用ひたるもの。——だうぐ（ダウ—グ）[火打道具](名) 火を打ち出すに用ふる道具。——ば[火打羽](名) 鳥のつばさの端末。——ばこ[火打箱](名) 火打道具をいれおく箱。——ぶくろ[火打袋](名) 火打道具を入れて携帶する袋。

ひうつり[火移](名) 火のもえうつると。

ひうつり[日映](名) 日光のうつると。

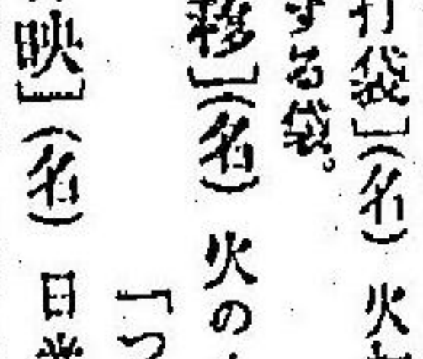
ひうを[乾魚](名) 魚のひもの。(枯魚)。

(ひ)うん[飛雲](名) とびゆくくも。

(ひ)うん[否運](名) 運命のひらけざると。(非運)。

(び)うん[微運](名) 運命のうすきと。(薄命)。

(び)うん[微雲](名) すこしのくも。


[ひうちぶくろ]

ひえ[稗](名) 【植】禾本科に屬する植物、水陸二種あり、穗は粟に似て小さく、種子は食用に供せらる。(稗子)。

(ひ)え(名) 疝氣。

ひえ[冷](名) 身體の寒氣におかさるゝと。——あたり[冷中](名) 前條に同じ。

(び)えい[微影](名) うすきかげ。かすかなるかげ。

ひえ・いる（らりるるれれ）[冷入](自、ら四) さむさいと身にしむ、しみとほる。

(ひ)えう（ヨウ）[飛搖](名) とびうごくと。

(ひ)えう（ヨウ）[祕要](名) おくぎ。あうぎ。

(ひ)えき[裨益](名) おぎなひ益すると。たすけとなると。

(び)えき[鼻液](名) はなしる。

(ひ)えつ[披閱](名) ひらきてけみすると。

ひえどり[鵯](名) 【動】(稗を好むが故に名づく)「ひよどり」に同じ。

ひえまき[稗蒔](名) 野稗を蒔き、其芽の出づるを青田に見せたる盆栽。

(ひ)える[冷](自) 「ひゆ」の訛。

卄ひえり[日擇](名) よき日をえらぶと。

(ひ)えん[飛簷](名) ㊀殿堂の簷(ノキ)の二重線の上は延び下は縮まりて、四隅の曲がり立ちたるもの、㊁高きのき。

(ひ)えん[飛燕](名) ㊀飛びかふ燕(ツバメ)。㊁輕術にて、飛びかふ燕の如くに身を飜(ヒルガヘ)すと。

(ひ)おこり[日瘧](名) 毎日發熱するおこり。

ひおどし[緋縅](名) 緋色の絲又は革にておどしたる鎧(ヨロヒ)。

ひおほぢ（オオヂ）[曾祖父](名) 祖父又は祖母の父、おほ〳〵ぢ。ひぢゝ。

ひおほば（オオバ）[曾祖母](名) 祖父又は祖母の母。おほ〳〵ば。ひばゝ。ひいばゝ。

ひおほひ（オオイ）[日覆](名) ㊀日光をおほひ隔つるもの。ひよけ。㊁芝居にて、天井の邊の稱、「—上り」「松の釣枝」、

(び)おん[美音](名) 美しき音聲。

(び)おん[鼻音](名) 【文法】有聲の氣息を鼻腔に通じて發する音、喉的鼻音、齒的鼻音、脣的鼻音に分つ。

(ひ)か[比價](名) 他物と比較してのあたひ。

(ひ)か[飛舸](名) はやふね。

(ひ)か[悲歌](名) かなしきうた。又、かなしくうたふと。

(ひ)か[飛蛾](名) 【動】「ひとりむし」に同じ。

(ひ)が[彼我](名) 彼と我と。他と自己と。

ひが—[僻](接頭) 或語に冠して、實際にたがひ又は道理にあたらざる意を表する語、「—目」「—言」。

(ひ)がい[被害](名) 害を被ると。損害を受くると。——しゃ[被害者](名) 被害のもの。——ち[被害地](名) 害を被りたる土地。

(ひ)かう（コウ）[飛行](名) 空中をとびゆくと、

(ひ)かう（コウ）[披講](名) 詩歌などをひらきて、讀みあぐると。

(ひ)かう（コウ）[比較](名) くらべあはすると。ならべあはすると。ひかく。

(ひ-かう（ヴ-コ）)[非行](名) よろしからざるおこなひ。

(び-かう（ヴ-コ）)[微行](名) しのびあるき。

(び-かう（ヴ-コ）)[尾行](名) あとをつけゆくこと。

(び-かう（ヴ-コ）)[備考](名) 參考にそなふること。

(び-かう（ヴ-コ）)[微香](名) かすかのにほひ。

(び-かう（ヴ-コ）)[鼻高](名) 僧家にて用ふる一種の沓(ツク)。はなたか。

ひが-おぼえ[僻覺](名) 實際にたがひたる記憶。

ひ-かがみ[引屈](名) ㊀「ひきかがみ」の約。膝の後の坐る時に屈む處。よぼろ。ひつかゞみ。(膕)。

ひ-かき[火搔](名) ㊀ひきかき。㊁十能(ジフノウ)。

ひ-がき[檜垣](名) 檜の薄板にてあじろに編みたる垣。

(ひ-かく)[比較](名) 「ひかう」の訛。

(ひ-がく)[費額](名) 入費の高。いりめ。

(び-がく)[美學](名) 「しんびがく」(審美學)に同じ。

ひ-がくし[日隱](名) ひおほひ。ひよけ。「(圖)。

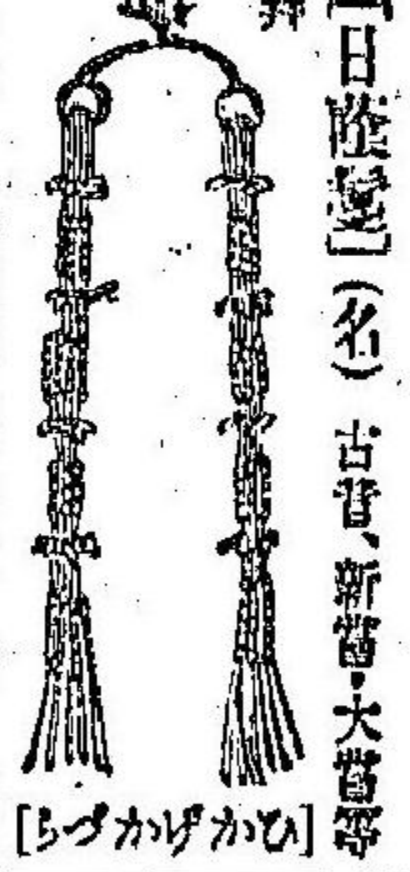
ひ-かげ[日景](名) ㊀日光。ひなた。㊁ひあし。

ひ-かげ[日陰](名) ㊀日光に映る物のかげ。㊁日光の物におほはれてあたらぬ所。㊂【植】「ひかげかづら」の略言。

ひ-かけ[火掛](名) 干菓子の類を氷蜜に浸(ヒタ)し、直に蒸籠にて乾かすこと。

ひ-がけ[日掛](名) 日毎に若干づゝの金錢を掛けて行くこと。

ひかげ-かづら[日陰蘰](名) 古昔、新嘗・大嘗等の神事に、冠の笄(カウガイ)の左右に掛けたるもの、もとは女蘿(ヒカゲ)を用ひたりしが、後世には白と青との絹絲數條を用ふることとなれり。


[ひかげかづら]

ひかげ-かづら[日陰葛](名)【植】「さるをがせ」に同じ。(女蘿)。

卄ひかげ-ぐさ[日陰草](名)【植】「あふひ」の異稱。

ひかげ-もの[日陰者](名) ㊀世の中にあらはれ出でざるもの。うもれぐさとなりたる人。㊁公けに世に出でられぬもの。世をかくれしのぶもの。

ひが-ごころ[僻心](名) ひがみたる心。ねぢけたる心。すなほならざる心。

ひが-ごと[僻事](名) 實際に違ひたる事。道理にあたらぬ事。「すこし—も、聞こえつべけれども」。

ひ-がさ[日傘](名) さしがさの一種、紙を澁又は紺にて染め、日光を遮ぎるに用ふ。(涼傘)。

ひがし[東](名) ㊀「ひむかし」の約。㊁日出づる方。南面して左手の方、西の對。㊂「ひがしかぜ」の略言。

——うけ[東受](名) 東に向ひたること。 ——

——かぜ[東風](名) 東の方より吹き來る風。こち。

ひ-かず[日數](名) 日をかさぬること。「—がかゝる」。

(ひ-かすう)[被加數](名)【數】寄算にて、相加ふべきすべての數。

卄ひ-かた[日方](名) 西南の風。「天ぎらひ—吹くらし水茎の、岡のみなとに波立ちわたる」。

ひ-かた[干潟](名) 潮の干(ヒ)たる潟。「—ふく浦風寒み水茎の、岡のみなとに千鳥なくなり」。(斥鹵)。

ひ-かたま・る[乾固](自、ら四) 乾きてかたくなる。

(びか-ちやう)[鼻下長](名) ㊀鼻の下のながきこと。女に迷ひやすきこと、女色におぼれやすきこと。又、其人。(好色家)。

(ひか-ちゆうしや)[皮下注射](名) 皮膚内に藥劑を注射すること、服藥せしむべからざる場合又は局部を麻痺せしむる場合などに用ふ。

ひ-かのこ[緋鹿子](名) 緋色のかのこしぼり。

(ぴか-ぴか)(名、副) ひかりかゞやくさまにいふ語。

卄ひが-ひが・し[僻僻](形、二) 僻みたるさまにてあり。すなほならず。

ひか・ふ[控、扣](他、は下二) ㊀ひきとゞむ。ひき倒す。㊁手許にしるしおく。㊂そばにかまへおく。

ひか・ふ[控](自、は下二) ㊀進まずしてとゞまり待つ。㊁うちばにす。ほどゝにす。

ひかへ[控、扣](名) ㊀ひきとゞむること。㊁記し置くもの。又、記しおきたるもの。㊂用意にそなへおくもの。

——ぐひ[控杙](名) ものゝ倒るゝを支ふるための杙。

——ち[控地](名) 用意のために設けおく土地。

——てい[控邸](名) ひかへやしき。

——ばしら[控柱](名) ㊀塀・垣などの倒るゝを支ふるための柱。(支柱)。㊁其家の萬事をさゝへもつ人。

——め[控目](名) 思ひきってなさゞること。うちばにすること。

——や[控家](名) 用意のために設けおく家。

——やしき[控屋敷](名) 用意のために設けおく屋敷。

〜——る(自、他) 「ひかふ」の訛。

ひ-がへり[日歸](名) 其日に往(ユ)きて其日に歸ること。

ひが-み[僻](名) ひがむこと。

(ひ-がみ)[日髮](名) 日毎に髮をゆふこと。

卄ひが-みみ[僻耳](名) 聞きそこなひ。

ひが・む[僻](自、ま四) ねぢく。まがる。かたよる。

ひが・む[僻](他、ま下二) ひがむやうにす。まぐ。

ひが-め[僻目](名) ㊀ひとみの正しからぬ目。すがめ。㊁見ちがへ。見あやまり。

ひが-もの[僻者](名) ねぢけ者。わる者。「世の—にて」

ひが-よみ[僻讀](名) よみあやまり。

ひ-がら[瞟眼](名) すがめ。ひがめ。

ひ-がら[日雀](名)【動】燕雀類中やまがら科に屬する鳥、四十雀(シジフカラ)に似て小さく、頭と背とは赤色にして腹白く、尾と翅とは黑し。

ひ-がら[日次](名) 日數。「—が立つ」。

ひ-がら[日柄](名) 其日の吉凶。「—が吉し」。

(ひ-からび・る)(自) 「ひからぶ」の訛。

ひ-から・ぶ[乾枯](自、は上二) 全く乾(ヒ)る。よくかわく。

ひかり[光](名) ㊀ひかること。ひかるもの。㊁【理】眼が感ずるもの、其本性に就きては、以前は微塵說行はれしも、現今は波動說行はる。(微塵說及波動說の條を見よ)。㊂美しき色。つや。「瑳の—」。㊃いきほひ。威光。

——かがや・く[光輝](自、か四) ㊀さかんにひかる。㊁いとはゆ。

卄——ぐさ[光草](名)【植】「ひめゆり」の異稱。

——もの[光物](名) 流星の類、光りて空中を走るもの。

卄——のぞむ 貴人の來り給ふにいふ。

ひか・る[光](自、ら四) 光を放つ。かゞやく。てる。

卄——かみ[光神](名) なるかみ。

ひ-かわ・く[乾燥](自、か四) ひからぶ。

ひが-わざ[僻事](名) 「ひがごと」に同じ。

(ひ-かん)[脾疳](名) 小兒の腸胃の病氣、頸瘦せて腹ふくるゝもの。(疳勞)。

(ひ-かん)[避寒](名) さむさをさくること。

(ひ-がん)[彼岸](名) ㊀【佛】(梵語「ハラミツ」到彼岸と譯す、生死を此岸といひ、煩惱を中流といふに對す、菩薩無相の智惠を以て禪定の舟航に乘り此岸より彼岸に到らしむといふ)證果を得たる地位、即ち菩薩三歸の地位。涅槃。㊁【佛】春分・秋分の日を中日とし、其前後三日合はせて七日間彼岸會を行ふこと。㊂彼岸會の行はるゝ七日間の氣節。

——ざくら[彼岸櫻](名)【植】櫻の一種、春の彼岸の頃に咲く、花は單瓣淡紅色なり。

——ばな[彼岸花](名)【植】「マンジュシャゲ」の一名。

——ゑ[彼岸會](名)【佛】彼岸の七日間に行ふ佛事。

(び-かん)[美感](名) 美の假感。美の快感。うつくしき感じ。

(び-がん)[美顏](名) うつくしきかほ。

ひき[引](名) ㊀たすけ。贔負。㊁つて。緣故。㊂いざなひ。誘引。㊃「ひきあはせ」の略言。

ひき[蟇](名)【動】「ひきがへる」に同じ。

(ひ-き)[誹毀](名) ㊀そしること。惡口すること。㊁【法】他人の醜行惡事を摘發すること。他人の名譽を傷(キズ)つくること。

(ひ-き)[悲喜](名) かなしみとよろこびと。

(ひ-き)[避忌](名) さけきらふこと。

——ひき[匹、疋](接尾) ㊀獸・鳥・魚・蟲などを數ふる語。「馬五—」。㊁鳥目二十五文を一匹として數ふる語。「金百—」。㊂布二段を一匹として數ふる語。

卄ひ-ぎ[氷木](名) 「ちぎ」に同じ。

(ひ-ぎ)[非義](名) 義理にそむくこと。

(ひ-ぎ)[非議](名) そしること。(非譏)。

(ひ-ぎ)[批議](名) 批評すること。又、非難すること。

(ひ-ぎ)[比擬](名) ひきくらぶること。なぞらふること。

ひき-あ・ぐ[引上](他、か下二) ㊀ひきて高く擧ぐ。あぐ。㊁軍隊を率(ヒキ)ゐて退く。㊂人數をまとめて去る。㊃選拔して登用す。

ひき-あけ[引明](名) あかつき。あけがた。よあけ。

ひき-あげ[引上](名) ひきあぐること。

〜——る(他) 「ひきあぐ」の訛。

ひき-あて[引當](名) ㊀かた。抵當。㊁こゝろあて。めあて。

ひき-あは・す[引合](他、さ下二) ㊀引き寄せて合はす。㊁引き寄せて比(クラ)ぶ。㊂とりもちて對面せしむ。

ひき-あはせ[引合](名) ㊀引き合はすこと。㊁古昔は艷書用となし、皺無き檀紙の稱、後世は普通の檀紙の稱。

——がみ[引合紙](名) 前條(二)に同じ。

〜——る(他) 「ひきあはす」の訛。

ひき-あひ[引合](名) ㊀賣買の取組、又、其證據。㊁まきぞへ。連累。㊂引證。

ひき-あ・ふ[引合](自、は四) ㊀雙方互に引く。㊁賣買を取組む。㊂賣買して利潤を得。㊃骨折りのかひあり。

ひき-あみ[引網](名) 「ぢあみ」(地網)に同じ。

ひき-いた[引板](名) なるこいた。

ひき-いだ・す[引出](他、さ四) 「ひきだす」に同じ。

卄ひき-いでもの[引出物](名) 「ひきでもの」に同じ。

ひき-い・る[引入](自、ら四) いき絶ゆ。絶息す。

ひき-い・る[引入](他、ら下二) ㊀引きて內へ入る。㊁いざなひて仲間に加はらしむ。

ひき-いれ[引入](名) ㊀ひきいるゝこと。㊁古昔、元服の時、冠を被(カフ)らしめし人。烏帽子親。

ひき-いれ[挽入](名) ろくろ細工。——がふ[挽入合子](名) ろくろざいくの合子。

ひき-いれ-ごゑ[引入聲](名) かすかにものいふ聲。

ひき-いれ-えぼし[引入烏帽子](名) 烏帽子を懸緒をかけずに、頭に引入れてかぶること。

(ひ-きう)[貔貅](名) つはもの。兵士。

(ひ-かう)[非行](名) よろしからざるおこなひ。

(び-かう)[微行](名) おしのびあるき。

(び-かう)[尾行](名) あとをつけゆくこと。

(び-かう)[備考](名) 參考にそなふること。

(び-かう)[微香](名) かすかのにほひ。

(び-かう)[鼻高](名) 僧家にて用ふる一種の沓(クツ)。はなたか。

ひが-おぼえ[僻覺](名) 實際にたがひたる記憶。

ひ-かがみ[引屈](名) (「ひきかがみ」の約)膝の後の坐る時に屈む處。よぼろ。ひっかがみ。(膕)。

ひ-がき[火搔](名) ❶ひきかき。❷十能(ジフノウ)。

ひ-がき[檜垣](名) 檜の薄板にてあじろに編みたる垣。

(ひ-かく)[比較](名) 「ひかう」の訛。

(ひ-かく)[價額](名) 入費の高。いりめ。

(び-がく)[美學](名) 「しんびがく」(審美學)に同じ。

ひ-がくし[日隱](名) ひおほひ。ひよけ。(慝)。

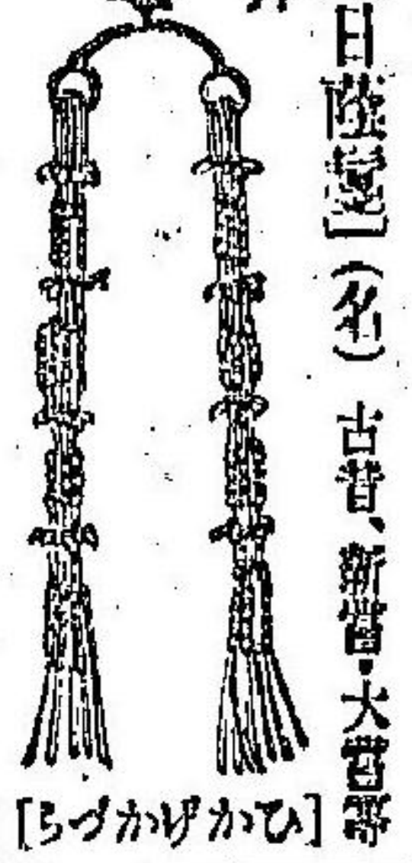
ひ-かげ[日影](名) ❶日光。ひなた。❷ひあし。

ひ-かげ[日陰](名) ❶日光に映る物のかげ。❷日光の物におほはれてあたらぬ所。❸[植]「ひかげかづら」の略言。

ひ-かけ[火掛](名) 干菓子の種を氷室に遷(ウツ)し、直に藥鍋にて乾かすこと。

ひ-かけ[日掛](名) 日毎に若干づゝの金錢を掛けて行くこと。

ひかげ-かづら[日陰蔓](名) 古昔、新嘗・大嘗等の神事に、冠の笄(カウガイ)の左右に掛けたるもの、もとは女蘿(ヒカゲ)を用ひたりしが、後世には白と青との絹絲數條を用ふることとなれり。



[ひかげかづら]

ひかげ-かづら[日陰蔓](名) [植]「さるをがせ」に同じ。(女蘿)。

＋＋ひかげ-ぐさ[日陰草](名) [植]「あふひ」の異稱。

ひかげ-もの[日陰者](名) ❶世の中にあらはれ出でざるもの。うもれぐさとなりたる人。❷公けに世に出でられぬもの。世をかくれ忍ぶもの。

ひが-ごころ[僻心](名) ひがみたる心。ねぢけたる心。すなほならざる心。

ひが-ごと[僻事](名) 實際に違ひたる事。道理にあたらぬ事。「すこし—も、聞こえつべけれども」。

ひ-がさ[日傘](名) さしがさの一種、紙を張又は絹にて張め、日光を遮ぎるに用ふ。(涼傘)。

ひがし[東](名) (「ひむかし」の約) ❶日出づる方。南面して左手の方。西の對。❷「ひがしかぜ」の略言。

—うけ[東受](名) 東に向ひたること。

—かぜ[東風](名) 東の方より吹き來る風。こち。

ひ-かず[日數](名) 日をかさぬること。「—がかゝる」。

(ひ-かすう)[被加數](名) [數]算術にて、相加ふべきすべての數。

＋＋ひ-かた[日方](名) 西南の風。「天ぎらひ—吹くらし水莖の、岡のみなとに波立ちわたる」。

ひ-かた[干潟](名) 潮の干(ヒ)たる潟。「—ふく浦風暴み水莖の、岡のみなとに千鳥なくなり」。(斥鹵)。

ひ-かたま・る(らりるるれれ)[乾固](自、ら四) 乾きてかたくなる。

(び-かちやう)[鼻下長](名) (鼻の志たのながき義)女に迷ひやすきこと。女色におぼれやすきこと。又、其人。(好色家)。

(ひ-か-ちゆうしや)[皮下注射](名) 皮膚內に藥劑を注射すること、服藥せしむべからざる場合又は局部を痲痺せしむる場合などに用ふ。

ひ-かのこ[緋鹿子](名) 緋色のかのこしぼり。

(ぴか-ぴか)(名、副) ひかりかゞやくさまにいふ語。

＋＋ひが-ひが・し(しく、しき、しけれ)[僻僻](形、二) 僻みたるさまにてあり。すなほならず。

ひか・ふ(へへふふるれへよ)[控、扣](他、は下二) ❶ひきとゞむ。ひき制す。❷手許に志るしおく。❸そばにかまへおく。

ひか・ふ(へへふふるれへよ)[控](自、は下二) ❶進まずしてとゞまり待つ。❷うちばにす。ほど〳〵にす。

ひかへ[控](名) ❶ひきとゞむること。❷記し置くもの。又、記しおきたるもの。❸用意にそなへおくもの。

—ぐひ[控杙](名) もの、倒るゝを支ふるための杙。

—ち[控地](名) 用意のために設けおく土地。

—てい[控邸](名) ひかへやしき。

—ばしら[控柱](名) ❶屏・垣などの倒るゝを支ふるための柱。(支柱)。❷其家の萬事をさゝへもつ人。

—め[控目](名) 思ひきってなさゞること。うちばにすること。

—や[控家](名) 用意のために設けおく家。

—やしき[控屋敷](名) 用意のために設けおく屋敷。

ひ-がへり[日歸](名) 其日に往(ユ)きて其日に歸ること。

〰—る(自、他)「ひかふ」の訛。

ひがみ[僻](名) ひがむこと。

(ひ-がみ)[日髮](名) 日毎に髮をゆふこと。

＋＋ひが-みみ[僻耳](名) 聞きそこなひ。

ひが・む(まみむむめめ)[僻](自、ま四) ねぢく。まがる。かたよる。

ひが・む(めめむむむるれめよ)[僻](他、ま下二) ひがむやうにす。まぐ。

ひが-め[僻目](名) ❶ひとみの正しからぬ目。すがめ。❷見ちがへ。見あやまり。

ひが-もの[僻者](名) ねぢけ者。わる者。「世の—にて」。

ひが-よみ[僻讀](名) よみあやまり。

ひがら[瞟眼](名) すがめ。ひがめ。

ひがら[日雀](名) [動]燕雀類中やまがら科に屬する鳥、四十雀(シジフカラ)に似て小さく、頭と背とは赤色にして腹白く、尾と翅とは黑し。

ひ-がら[日次](名) 日數。「—が立つ」。

ひ-がら[日柄](名) 其日の吉凶。「—が吉し」。

(ひからびる)(自) 「ひからぶ」の訛。

ひ-から・ぶ(びびぶぶるるれびよ)[乾枯](自、は上二) 全く乾(ヒ)る。よくかわく。

ひかり[光](名) ❶ひかること。ひかるもの。❷[理]眼が感ずるもの、其本性に就きては、以前は微塵說行はれしも、現今は波動說行はる。(微塵說及波動說の條を見よ)。❸美しき色。つや。「葉の—」。❹いきほひ。威光。

—かがや・く(かきくくけけ)[光輝](自、か四) ❶さかんにひかる。❷いとはゆ。

＋＋—ぐさ[光草](名) [植]「ひめゆり」の異稱。

—もの[光物](名) 流星の類、光りて空中を走るもの。

＋＋—ののぞむ 貴人の來り給ふにいふ。

ひか・る(らりるるれれ)[光](自、ら四) 光を放つ。かゞやく。てる。

＋＋—かみ[光神](名) なるかみ。

ひ-かわ・く(かきくくけけ)[乾燥](自、か四) ひからぶ。

ひが-わざ[僻事](名) 「ひがごと」に同じ。

(ひ-かん)[脾疳](名) 小兒の腸胃の病氣、頸痩せて腹ふくるゝもの。(疳勞)。

(ひ-かん)[避寒](名) さむさをさくること。

(ひ-がん)[彼岸](名) ❶[佛](梵語「ハラミツ」到彼岸と譯す、生死を此岸といひ、煩惱を中流といふに對す、菩薩無相の智惠を以て禪定の舟航に乘り此岸より彼岸に到らしむといふ)證果を得たる地位、即ち菩薩三歸の地位。涅槃。❷[佛]春分・秋分の日を中日とし、其前後三日合はせて七日間彼岸會を行ふこと。❸彼岸會の行はるゝ七日間の氣節。

—ざくら[彼岸櫻](名) [植]櫻の一種、春の彼岸の頃に咲く、花は淡紅色なり。

—ばな[彼岸花](名) [植]「マンジユシヤゲ」の一名。

—ゑ[彼岸會](名) [佛]彼岸の七日間に行ふ佛事。

(び-かん)[美感](名) 美の假感。美の快感。うつくしき感じ。

(び-がん)[美顏](名) うつくしきかほ。

ひき[引](名) ❶たすけ。贔負。❷つて。緣故。❸いざなひ。誘引。❹「ひきあはせがみ」の略言。

ひき[蟇](名) [動]「ひきがへる」に同じ。

(ひ-き)[誹毀](名) ❶そしること。惡口すること。❷[法]他人の醜行惡事を摘發すること。他人の名譽を傷(キズツ)くること。

(ひ-き)[悲喜](名) かなしみとよろこびと。

(ひ-き)[避忌](名) さけきらふこと。

—ひき[匹、疋](接尾) ❶獸・鳥・魚・蟲などを數ふる語。「馬五—」。❷鳥目二十五文を一匹として數ふる語。「金百—」。❸布二段を一匹として數ふる語。

＋＋(ひ-き)[氷木](名) 「ちぎ」に同じ。

(ひ-ぎ)[非義](名) 義理にそむくこと。

(ひ-ぎ)[非議](名) そしること。(非譏)。

(ひ-ぎ)[批議](名) 批評すること。又、非難すること。

(ひ-ぎ)[比擬](名) ひきくらぶること。なぞらふること。

ひき-あ・ぐ(げげぐぐぐるぐれげよ)[引上](他、か下二) ❶ひきて高く擧ぐ。あぐ。❷軍隊を率(ヒキ)ゐて退く。❸人數をまとめて去る。❹選拔して登用す。

ひき-あけ[引明](名) あかつき。あけがた。よあけ。

ひき-あげ[引上](名) ひきあぐること。

〰—る(他) 「ひきあぐ」の訛。

ひき-あて[引當](名) ❶かた。抵當。❷こゝろあて。めあて。

ひき-あは・す(せせすするるれせよ)[引合](他、さ下二) ❶引き寄せて合はす。❷引き寄せて比(クラ)ぶ。❸とりもちて對面せしむ。

ひき-あはせ[引合](名) ❶引き合はすこと。❷古昔は艶書用となし、皺無き檀紙の稱、後世は普通の檀紙の稱。

—がみ[引合紙](名) 前條(二)に同じ。

〰—る(他) 「ひきあはす」の訛。

ひき-あひ[引合](名) ❶賣買の取組。又、其證者。❷まきぞへ。連累。❸引證。

ひき-あ・ふ(はひふふへへ)[引合](自、は四) ❶雙方互に引く。❷賣買を取組む。❸賣買して利潤を得。❹骨折りのかひあり。

ひき-あみ[引網](名) 「ぢあみ」(地網)に同じ。

ひき-いた[引板](名) なるこいた。

ひき-いだ・す(さしすすせせ)[引出](他、さ四) 「ひきだす」に同じ。

＋＋ひき-いで-もの[引出物](名) 「ひきでもの」に同じ。

ひき-い・る(らりるるれれ)[引入](自、ら四) いき絶ゆ。絶息す。

ひき-い・る(るるるるるれれよ)[引入](他、ら下二) ❶引きて內へ入る。❷いざなひて仲間に加はらしむ。

ひき-いれ[引入](名) ❶ひきいるゝこと。❷古昔、元服の時、冠を被(カブ)らしめし人。烏帽子親。

ひき-いれ[挽入](名) ろくろ細工。

—がふ[挽入合子](名) ろくろざいくの合子。

ひき-いれ-ごゑ[引入聲](名) かすかにものいふ聲。

ひき-いれ-えぼし[引入烏帽子](名) 烏帽子を懸緖をかけずに、頭に引入れてかぶること。

(ひ-きう)[貔貅](名) つはもの。兵士。

︵ひ-きう[彌久](名) 久しきにわたること。ながびくこと。「曠日—」。

ひき-う・く（けけくくるくれけよ）[引受](他、か下二) ㊀自己に負擔す。自己に受持つ。㊁あとを受けつぐ。かはりて爲す。㊂迎へ受く、「敵をひきうけて」。㊃あひしらふ。㊄身許保證に立つ。㊅自己に關したる言なりと邪推す。

ひき-うけ[引受](名) ㊀ひきうくること。㊁[法]手形の支拂人が、手形の主たる債務者となる意思表示を手形に記入すること。—て[引受手](名) ひきうけにん。—にん[引受人](名) 引受する人。〜—る(他)「ひきうく」の訛。

ひき-うす[碾臼](名) 籾を麺（ハマ）して、穀物を粉に碾（ヒ）く石臼。

‡ひき-うど[短人](名) たけひくき人。

ひき-うま[引馬](名) かざりにひき出す馬。

ひき-おこし[引起](名) [植]唇形科に屬する草、莖は方形にして高さ二三尺、葉は木賊（トクサ）に似、花は小形にして秋の頃開く。

ひき-おこ・す（さしすすせせ）[引起](他、さ四) ㊀倒れたるを起し立つ。㊁衰へたるをもとの如く盛にす。

ひき-おとし[引落](名) ㊀ひきおとすこと。㊁相撲（スマフ）の手、敵の體を前へ引き、膝を折りて地につかしむること。

ひき-おと・す（さしすすせせ）[引落](他、さ四) 引きて下へ落す。

ひき-おひ（イ-オ）[引負](名) 人に代りて賣買又は取引をなし、其消費又は損耗の額が自分の負擔となること。(遁缺、抵負)。

‡ひき-おび[引帶](名) 袍又は直衣の帶。

ひき-おろ・す（さしすすせせ）[引下](他、さ四) ひきて下へおろす。

ひき-かがみ[引屈](名) 「ひかがみ」に同じ。

‡ひき-がき[引柿](名) 柿澁をひきたるもの。「—の直垂」。

ひき-かぜ[引風](名) かぜひき。風邪。「—の妙藥」。

ひき-がね[引金](名) 鐵砲の火口に装置せる金具、これをあげ引きおとして發火せしむるもの。

ひき-か・ふ（ウ-カ）（へへふふるふれへよ）[引替](他、は下二) ㊀物と物とを交換す。かへあふ。㊁反對す。うらはらにてあり。

ひき-かへ（エ-カ）[引替](名) ひきかふること。

ひき-かへ（エ-カ）[引替](副) うらはらに。反對に。

ひき-かへし（チシ-カ）[引返](名) ㊀ひきかへすこと。㊁芝居にて、前の幕に續けて直ちにくり返へしてなす早幕。㊂婦人の盛服、裘とすそまはしとの同じ切地のもの。

ひき-かへ・す（エス-カ）（さしすすせせ）[引返](他、さ四) ㊀くりかへす。反復す。㊁あとへもどす。もとへかへす。「路を—」。㊂とりもどす。とりかへす。

〜ひきかへる(自)「ひきかふ」の訛。

ひき-がへる（エル-ガ）[蟇蛙](名) [動]兩棲類中無尾類に屬する動物、四肢を有し、後趾の趾間に蹼を具す、皮膚に數多の疣（イボ）あり、體軀肥大にして動作遲鈍なり、陰濕の地に棲息し夜間出て、食を求む。

ひき-きり-な・し（くしきけれ）[引切無](形、二) 絶え間なし。たてつけなり。のべつなり。

‡ひき-きり-に[引切](副) 性急に。氣早に。

ひき-き・る（らりるるれれ）[引切](他、ら四) 引き張りて斷ち切（キ）る。

ひき-き・る（らりるるれれ）[挽切](他、ら四) 鋸などにて物をひきて切る。

ひき-ぐ・す（せしすするすれせよ）[引具](他、さ變) つれゆく。つれ立つ。

ひき-ぐすり[引藥](名) 皮膚に塗（ヌ）る藥、ぬりぐすり。

ひき-く・む（まみむむめめ）[引組](自、ま四) ㊀引き寄せて組みつく。㊁くみつく。くみあふ。

ひき-くる・む（めめむむむるむれめよ）[引括](他、ま下二) 一つにまとむ。すべあはす。

〜ひきくるめる(他)「ひきくるむ」の訛。

ひき-こ[熟蠶](名) 蠶が十分に發育して身體の透明となりたるもの。

〜ひき-こ[挽子](名) 車宿にかゝへおく車ひき。

ひき-こし[引越](名) ひきこすこと。やうつり。やどがへ。移轉、轉居。

ひき-ごし[引腰](名) 裳の後にひく帶の如きもの。

ひき-こ・す（さしすすせせ）[引越](自、さ四) 家を移す。居を轉ず。轉宅す。

ひき-こと[引言](名) 事の説明に他の事を例として擧ぐること。(例證、引例)。

ひき-こみ[引込](名) ひきこむこと。(引籠)。—じあん[引込思案](名) 勇氣なきかんがへ。しりごみの思案。—しゆぎ[引込主義](名) ㊀家にこもりて出でざること。㊁萬事に手を控ふるのみにして、自ら進んでなさんとせざること。—すぎ[引込過](名) 過度にひきこむこと。

ひき-こ・む（まみむむめめ）[引込](自、ま四) ㊀内にこもり居て出でず。閉居。㊁しりごみす。ぐずぐずす。㊂しりぞき入る。㊃さがりて低くなる。

ひき-こ・む（まみむむめめ）[引込](他、ま四) ㊀引きて入れこむ。㊁いざなひて仲間にす。加はらしむ。㊂深く感冒にかかる。「風を—」。

ひき-こ・む（めめむむむるむれめよ）[引込](他、ま下二) ㊀しりぞけ入らしむ。㊁さげて低からしむ。

〜ひきこめる(他) 前條の訛。

︵ひき-ざい[誹毀罪](名) [法]他人を誹毀したる犯罪。

ひき-さが・る（らりるるれれ）[引下](自、ら四) しりぞく。おる。くだる。さがる。

ひき-さ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[引下](他、か下二) しりぞかす。おろす。くだす。さがらす。

ひき-さげ[引下](名) ㊀ひきさぐること。㊁「ひきさげぐすり」の略言。—ぐすり[引下藥](名) 逆上を治癒する藥。〜—る(他)「ひきさぐ」の訛。

ひき-さらへ（ザ-エ）[挽竹把](名) 熊手に網をつけたるもの。

ひき-ざん[引算](名) [數]一數より他數を減ずる算法。減法。

‡ひき-し（くしきけれ）[低](形、二) ひくし。

ひき-しほ（オ-シ）[退潮](名) 海水の低く降（クダ）りたるときの稱。滿潮（ミチシホ）の對。(落潮)。

ひき-しぼ・る（らりるるれれ）[引絞](他、ら四) 矢をつがへて弓を十分に張る。

‡ひき-しやう（ヨウ-シ）[火起請](名) 古昔、火を踏（フ）みて邪正を定めたる起請。

‡ひき-しろ・ふ（ロウ-シ）（はひふふへへ）[引合](他、は四) ㊀互に引きあふ。㊁引きずる。

ひき-すま・す（さしすすせせ）[彈澄](他、さ四) 琴などを彈（ヒ）きて餘念なくあり。

ひき-ずみ[引墨](名) 墨を引きてしるしとなすこと。

ひき-ずり[引摺](名) ㊀ひきずること。(拉、扯)。㊁(裾を引きずる義)なまめきて不性なる婦人を嘲りていふ語。㊂粗末なる下駄。(京阪地方の方言)。—もち[引摺餅](名) 注文したる家に至りて賃餅を搗（ツ）くこと。

ひき-ず・る（らりるるれれ）[引摺](他、ら四) ㊀地をすりて曳（ヒ）き行く。㊁垂れて地を摩す。㊂いやがるを無理に引き行く。

ひき-ぞへ[引副](名) 被馬にそへて引き行くはだか馬。

ひき-ぞめ[彈初](名) 其年になりて初めて琴・三味線などを彈（ヒ）くこと。

ひき-た[引板](名) 「ひきいた」に同じ。

ひき-だし[引出](名) ㊀ひきだすこと。㊁箪笥・机などに横に拔差の出來る匣。(抽斗、抽匣)。

ひき-だ・す（さしすすせせ）[引出](他、さ四) ㊀引きて外へ出す。㊁いざなひて外へ出す。㊂資金を取り出す。㊃預金を取戻す。㊄引言として示す。㊅よび出す。

ひき-た・つ（たちつつてて）[引立](自、た四) 景氣よくなる。勢よくなる。さかんになる。見よくなる。

ひき-た・つ（てててつつるつれてよ）[引立](他、た下二) ㊀ひきおこす。㊁はげます。㊂おひて連れ行く。㊃擧げ用ふ。登庸す。㊄力を添ふ。たすく。

ひき-たて[引立](名) ㊀ひきたつること。㊁ひいき。愛顧。「お—を被り」。—えぼし[引立烏帽子](名) ひきおこしてかぶる一種の烏帽子、もみ烏帽子の類。

ひき-ちや[碾茶](名) 製茶を碾（ヒ）きて粉末となしたるもの、湯を注（ソ）ぎかきまぜて飲用に供す、薄茶・濃茶の二方あり。

ひき-つぎ[引繼](名) ひきつぐこと。「事務の—」。

ひき-つ・く（けけくくるくれけよ）[引附](自、か下二) 小兒が腦病又は痙攣（ケイレン）などのために氣絶す。

ひき-つ・く（けけくくるくれけよ）[引附](他、か下二) ㊀手許に近寄す。㊁いざなひ近寄す。㊂連れ來り合はす。

ひき-つ・ぐ（がぎぐぐげげ）[引繼](他、か四) 其あとをうけつぐ。

ひき-つくろ・ふ（ウ-ロ）（はひふふへへ）[引繕](他、は四) (「ひき」は接頭語)「つくろふ」に同じ。

ひき-つけ[引附](名) ㊀ひきつくること。㊁先例に合せて事を處分すること。㊂「ひきつけしゆう」の略言。㊃「ひきつけざしき」の略言。㊄痙攣（ケイレン）。—かしら[引附頭](名) 引附衆の頭。—ざしき[引附座敷](名) 遊女屋にて、遊客を先づ通し置き、女郎をつれ來りて面會せさする座敷。—しゆう[引附衆](名) 鎌倉時代の評定衆の下司の職名、一に引附方奉行ともいふ、政所に出勤して日記を記し例證等を書き留むる事を務りしもの。〜—る(自、他)「ひきつく」の訛。

ひき-つづ・く（かきくくけけ）[引續](自、か四) (「ひき」は接頭語)「つづく」に同じ。

ひき-つ・る（らりるるれれ）[引釣](自、ら四) 痙攣を起す。

ひき-つ・る（れれるるるるれれよ）[引連](他、ら下二) ひきゐて行く。つれ行く。

〜ひきつれる(他)「ひきつる」の訛。

ひき-づゑ[引杖](名) 杖をひきずり行くこと。

ひき-て[彈手](名) 三味線又は琴などを彈（ヒ）く人。又、其巧（タク）に彈く人。

ひき-て[引手](名) ㊀ふすま・障子などの開閉に手を掛くる處、金具などを附く。(鋪首)。㊁導く人。さそふ人。㊂遊郭にて、仲居の稱。—ぢやや[引手茶屋](名) 遊郭にて、遊客を案内する茶屋。

ひき-でもの[引出物](名) 饗應のとき主人より客への贈物、上古は馬を出して贈りしよりいふ。

ひき-ど[引戸](名) 溝（ミゾ）にはめて左右へ送る戸。やりど。

ひき-とり[引取](名) ひきとること。受取ること。—て[引取手](名) 受取る人。—にん[引取人](名) 前條に同じ。

ひき-ざ・る（らりるれれ）［引取］（他、ら四）㊀ひきて手許に取る。㊁自分の方に受取る。

ひき-ざ・る（らりるれれ）［引取］（自、ら四）㊀まかり去る。去りぞきかへる。㊁絶息す、いきたゆ。

ひき-づな（ヅナ）［引綱］（名）物につけてひく綱。

++**ひき-なほし**（ナホシ）［引直衣］（名）古昔、天子などのめさせたまひし直衣。

ひき-なほ・す（ナホス）［引直］（他、さ四）もとへもどす。

ひき-の・く（くけけくくるれけよ）［引退］（他、か下二）引きて去りぞかす、引きて離す。

［**ひき-のける**］（他）「ひきのく」の訛。

ひき-のばし［引延］（名）ひきのばすと。

ひき-のば・す（さしすすせせ）［引延］（他、さ四）㊀引きて長くす、又、引きて擴くす。㊁大きくす、「原版を―」。

++**ひき-の-ひたひ-ぐさ**（ヒク）［細辛］（名）【植】「さいしん」の古稱。

ひき-はぎ［引剝］（名）おひはぎ、おひおとし。

ひき-はだ［蟇肌］（名）㊀「ひきはだがは」の略言。㊁ひきはだかはもて作りたる刀の尻鞘。――**がは**（ガハ）［蟇肌革］（名）蟇蛙の背の如くに皺（シワ）ある革、志ぼみかは。

ひき-はな・す（さしすすせせ）［引離］（他、さ四）㊀引きて離れしむ。㊁無理に離れしむ。

ひき-は・る（らりるるれれ）［引張］（他、ら四）㊀ひきて延（ノ）ばす。㊁ひきて開く。

++**ひき-びと**［低人］（名）たけひくき人。

（**ひ-きふ**（キフ））［悲泣］（名）かなしみなくを。

ひき-ふだ［引札］（名）㊀諸方へ配（クバ）る商賈のひろめのちらし、（招貼、廣告）。㊁其店の呼物となりたる品。㊂籤引のふだ。

ひき-ふね［引船］（名）㊀綱を附けて曳（ヒ）き行く船。㊁下等の娼妓（元祿時代の語）。「ぎ」（引折）。

++**ひき-へぎ**［引倍木］（名）板引にしたる絹、ひへぎ。

++**ひき-ぼし**［曳干］（名）干（ホ）したる海藻。

ひき-まく［引幕］（名）引張る幕。

ひき-まど［引窓］（名）つけたる綱を引きて開閉せさするてんまど。

ひき-まはし（ワシ）［引廻］（名）㊀ひきまはすを。㊁徳川時代に斬罪以上の重刑の附加刑、犯人をいましめのまゝ馬に乘（ノ）せて其罪狀をかゝげ記し、府内又は犯罪地を引廻して後、本刑に行ひしを。㊂九合羽の稱。㊃長さ七八寸濶さ五六分ある鋸、竹などを切るに用ふるもの。

ひき-まは・す（サス）（さしすすせせ）［引廻］（他、さ四）㊀ひきてくるしくまはす。㊁方々をつれ行く。

++**ひき-まゆ**［獨繭］（名）一匹の蠶にて一つの繭をつくりたるもの。ひとつまゆ。并繭（フツマユ）の對。

ひき-まゆ［引眉］（名）㊀眉を剃（ソ）りたる痕（アト）に墨もて描（カ）きたる眉。㊁薄きを濃く見するため其上に墨などにて描きたる眉。つくりまゆ。

ひき-まゆげ［引眉毛］（名）前條に同じ。

ひき-め［蟇目］（名）木製の鏃（ヤジリ）、長さ四寸周圍五寸許、數個の孔あり、これを射るときは、空氣其孔に觸れて一種の音を發し、妖魔を伏すといへり。――**がは**（ガハ）［蟇目革］（名）赤色の紋ある革。――**くり**［蟇目刳］（名）ひきめを製造するを業とする人。――**のほふ**（ホフ）［蟇目法］（名）蟇目を射て妖魔を調伏する法。

ひき-も-きらず［引不切］（副）絶えずに、つゞきて。

ひき-もの［彈物］（名）彈き鳴らすもの、鳴りもの。

ひき-もの［引物］（名）㊀「ひきでもの」の略言。㊁客の饗膳に添ふる菓子などの類。

ひき-もの［挽物］（名）ろくろ細工の器具。

（**ひ-きやう**（キヤウ））［悲境］（名）かなしき境遇、あはれなる境遇。

（**ひ-ぎやう**（ギヤウ））［飛行］（名）「ひかう」に同じ。

（**び-きやう**（キヤウ））［微響］（名）すこしのひゞき、かすかなひゞき。

（**び-きやう**（キヤウ））［鼻鏡］（名）鼻孔をのぞくため鼻にさす圓筒形の鏡。

++**ひぎやう-しや**（ギヤウ）［飛香舍］（名）古昔、内裏の凝華舍の前にありたる御殿。

++**ひき-やか**［低］（名）ひくきと。

（**ひ-きやく**）［飛脚］（名）㊀急事の志らせにつかはす人夫（法進）。㊁昔時、信書などを遠方に屆けしむるを業とせし人夫。――**せん**［飛脚船］（名）定期航海をなす郵便船。――**や**［飛脚屋］（名）㊀昔時、飛脚を仕立つるを業とせし店。㊁飛脚に行く人夫。

ひき-やぶ・る（らりるるれれ）［引破］（他、ら四）引きてやぶる。ひきさく。

++**ひき-やま**［低山］（名）ひくきやま。

++**ひき-や・る**（らりるるれれ）［引遣］（他、ら四）引きてのかす、ひきのく。

++**ひき-や・る**（らりるるれれ）［引破］（他、ら四）ひきやぶる。

［**ひき-ゆ**］［率］（他）「ひきゐる」の訛。

（**び-きよ**）［美擧］（名）うつくしきふるまひ、ほむべきくはだて。

（**ひ-きよう**）［非興］（名）おもしろからざると、興のさめたると。

（**ひ-きよく**）［祕曲］（名）祕しめて容易に傳へざる音曲。

（**ひ-きよく**）［悲曲］（名）かなしき音曲、あはれなる音曲。

ひき-よもぎ［引蓬］（名）【植】（い）「ははこぐさ」の一名。（ろ）玄參科に屬する草、莖はよもぎに似て、夏秋の頃、黄色の花開く。（鬼油麻）。

ひき-らか［低］（名）ひきやか。

++**ひ-きり**［火切］（名）上古、檜の枯れたる木口に棒を當て、はげしく揉（モ）みて火を出しゝもの、後世の燧（ヒウチ）に相當す。

ひ-ぎり［緋桐］（名）【植】馬鞭草科に屬する木、多く暖地に產す、高さ一二尺、葉は圓狀にして末尖り緣邊に鋸齒を具す、花は朱色にして夏の頃開く、たうぎり。（赬桐）。

ひ-ぎり［日切］（名）日數のかぎり、日限。

ひき-りやう（リヤウ）［引兩］（名）紋所の名、輪の中に橫に二筋を引きたるもの、足利氏の紋所これなり。

ひき-れ［引入］（名）「ひきいれ」に同じ。

ひき-わ・く（けけくくるれけよ）［引分］（他、か下二）ひきてはなす。

ひき-わけ［引分］（名）㊀ひきわくると。㊁相撲（スマフ）にて、長く取組みて勝負のつかざるとき、勝負をつけさせずして止めさするを。㊂轉じて、勝負つかずして止むるを。++――**づかひ**（カヒ）［引分使］（名）古昔、驅競のとき、取りのこしの御馬を院・東宮などへまゐらせらるゝ時につかはされし使者。［――**る**］（他）「ひきわく」の訛。

ひき-わた［引綿］（名）もめん綿の上に薄く延（ヒ）く眞綿。

ひき-わたし［引渡］（名）ひきわたすを、「罪人―」。

ひき-わた・す（さしすすせせ）［引渡］（他、さ四）㊀綱又は縄などを彼方より此方へ長く渡し張る。㊁ものを他人の手へさづけ移す。

ひき-わり［碾割］（名）「ひきわりむぎ」及「ひきわりめし」の略言。――**めし**［碾割飯］（名）碾割麥と米と混ぜて炊（タ）きたる飯。――**むぎ**［碾割麥］（名）大麥を粗（アラ）く碾（ヒ）きて割りたるもの。

ひき-ゐ・る（ゐゐるるれれよ）［率］（他、わ上二）㊀志たがへ行く。ともなひ行く。ひきつる。㊁其行動を指揮す、其進退を管理す、（帥、將）。

（**ひ-きん**）［飛禽］（名）とぶとり。

（**ひ-きん**）［卑近］（名）深遠ならざると、てぢかきと。

（**ひ-きん**）［費金］（名）つひやすかね。

（**ひ-きんぞく**）［非金屬］（名）【化】非金屬元素の稱。――**げんそ**［非金屬元素］（名）【化】金屬にあらざる單體、即ち硫黄・燐・酸素等の如し。

ひ・く（かきくくけけ）［退］（自、か四）㊀去りぞく、脫す、のく。㊁まかる、かへる。㊂官を罷（ヤ）む、職を辭す。

ひ・く（かきくくけけ）［引］（他、か四）㊀我方へ將す、我方へ近づく。㊁後に從へ行く、「馬を―」、（牽）。㊂前へ進め遣る「車を―」（挽）。㊃拔き出す「綱を―」（抽）。㊄地を摺（ス）り行く、「裾を―」（曳）。㊅長く標（シル）をゑがく、「圖を―」（劃）。㊆延（ノ）べ張る「幕を―」（延）。㊇いざなひ試む「氣を―」（試）。㊈弓弦を張り開く、（彎）。㊉味方となす、⑪みちびく、とほす、「水を―」、「客を―」「坐に―」。⑫負す、たすく。⑬例として擧ぐ、「故事を―」。⑭後へ去りぞかす、「陣を―」（退）。⑮拔（ザ）し出す、さがす、「字書にて字を―」。⑯ひろく塗る、「油を―」。⑰除きへらす、（減）。⑱研（ス）り潰（ブツ）す。⑲引出物とす。⑳拔き採（ト）る、「小松を―」、（採）。㉑長く續く、「後を―」。㉒吸ひ入る。㉓我身に受く「風を―」。㉔沐浴す、あぶ。

ひ・く（かきくくけけ）［彈］（他、か四）絃のかゝりある樂器を搔き鳴らす。たんず、かなづ。「琴を―」。

ひ・く（かきくくけけ）［挽］（他、か四）㊀鋸もてものを切り割る。㊁轆轤鉋（ロクロカンナ）にて挽物を造る。㊂もの、上を車をきしらせ通す「人の手を―」。

ひ・く（かきくくけけ）［碾］（他、か四）穀類をひきうすの中に入れ、うすを廻はしてすりくだく。

びく（名）㊀網もて作りたる簀（ス）の類。㊁魚を入るゝ竹籠、（魚籃）。

（**び-く**）［微軀］（名）㊀いやしきからだ。㊁自己の身體の謙稱。

ビク［比丘］（名）㊀（梵語、乞食して清淨に活命するもの即ち乞士の義）僧侶、沙門。㊁轉じて、比丘尼の稱。

（**ひ-ぐ**）［備具］（名）㊀そなはると、とゝのひたると。㊁そなふると、とゝのへみたすと。

ひく・し（くしきくけれ）［低］（形、二）㊀高さ少し、高からず。㊁身長短し、（矮）。㊂身分いやし。㊃聲大ならず。

ひ-ぐち［樋口］（名）樋のある所。

ひ-ぐち［火口］（名）鐵砲の火氣を筒に通ずる穴、「火門」。

（**ひ-くつ**）［卑屈］（名）氣力なく行爲いやしきと、品性の下劣なると、いくぢなし。

ひ-くづ［簸屑］（名）簸（ヒ）にて穀物などをよりとりて殘りたる屑。

［**ひく-つ・く**］（かきくくけけ）（自、か四）ひくひくす。

［**びく-つ・く**］（かきくくけけ）（自、か四）びくびくす。

ひく-て［引手］（名）引く人、いざなふ人。

ビク-ニ［比丘尼］（名）㊀（梵語）七衆の一、出家せる婦人、アマ。㊁昔時、江戸市中にありし剃髮法衣せる遊女。――**ごしよ**［比丘尼御所］（名）皇女の出家して住職となりたまふ寺院。――**せった**［比丘尼雪駄］（名）踵（カカト）の反（ソ）りたる雪駄。――**や**［比丘尼屋］（名）昔時、比丘尼の

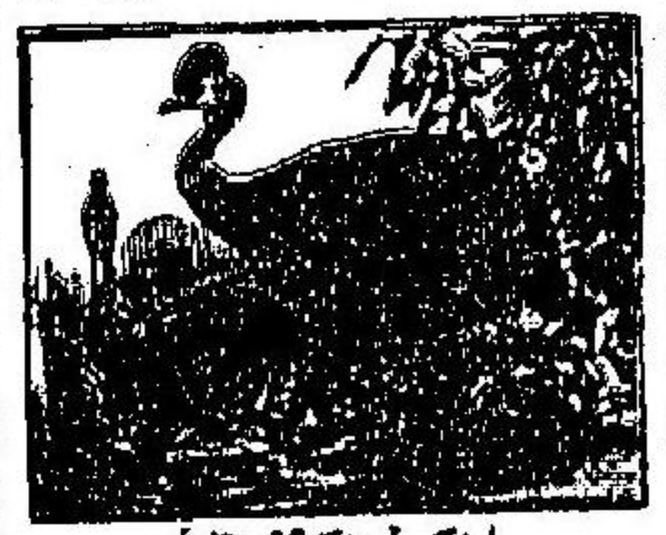
遊女をかゝへ置きたる女郎屋。

（ひく-ひく（名、副）氣息のたえ〴〵なるさまにいふ語。

（びく-びく（名、副）絶えず怖（オ）ぢ恐るゝさまにいふ語。（惴惴）。

（びく-びく（名、副）「ひくひく」に同じ。

ひ-くひ-どり（イ-ク）［火食鳥］（名）【動】走禽類に屬する鳥、頭上に冠狀の隆起を戴き、頭・頸共に裸出せり、羽毛黑くして鬉の如く垂る、脚短かけれどよく奔馳す、多く「ニユギニア」に産す。（食火鷄）。



［ひくひどり］

ひ-ぐま［羆］（名）【動】肉食類中くま科に屬する獸、普通の熊よりは大形にして、頸長く脚高く力強し、我國にては北海道に産す。

卄ひ-くらうど（クワウ-ド）［非藏人］（名）古昔、藏人所の下に屬し、殿上にありて侍臣の雜用を辨ぜし役。

ひ-ぐらし［日暮］（名）㊀一日をくらすこと。㊁【動】有吻類中せみ科に屬する昆蟲、翅長くして全身青黑色なり、秋の頃、おもに日暮にかけて鳴く。（寒蟬、晩蟬、寒蟬、茅蜩）。

ひ-ぐらし［日暮］（副）朝より暮まで。ひねもす。終日。

ひ-ぐるま［火車］（名）【植】「ひまはり」の一名。

ひ-ぐれ［日暮］（名）日の暮れ方。ゆふぐれ。晩方。

（び-くわ［美化］（名）美に醇化すること。

（ひ-くわい［悲懷］（名）かなしきおもひ。

（ひ-くわい［鄙懷］（名）自分の心中の謙稱。

（び-くわう（ヲ-ク）［備荒］（名）凶年の用意をなすこと。

——ちよちく［備荒貯蓄］（名）凶年のときの用意にたくはへおくこと、又、其物。

（び-くわう（クワウ）［微光］（名）ひかりの薄弱なること。

——はうでん（ハウ-デン）［微光放電］（名）【理】導體の末端に電氣蓄積するとき、微光を放ちて、徐々に放電すること。

ひ-ぐわし［乾菓子］（名）乾きたる菓子、生菓子の對。

（ひくわ-すゐそ［砒化水素］（名）【化】砒素と水素との化合物、熱火し易き氣體にして、白色の焔をあげて燃（モ）ゆ。

（ひ-くわん［被官］（名）附屬の官、省の下に附せらるゝ、寮司などをいふ。

（ひ-くわん［悲觀］（名）㊀かなしむべきものと觀ずること。㊁世界を苦惡なるものと觀ずること。厭世觀。

（ひ-ぐわん［飛丸］（名）とび來る彈丸。

（び-くわん［美觀］（名）うつくしきみもの。

（び-くわん［微官］（名）いやしき官職。

（び-くん［微醺］（名）ほろゑひ。

［ひけ［引］（名）㊀退出。退散。「役所の―」。㊁まけ。おくれ。「勝負で―を取る」。㊂直段のめり。「―が立つ」。㊃遊郭などにて、店を張る女郎が店をひく時、即ち夜十二時過ぎの稱。

ひげ［髭、鬚、髯］（名）㊀脣又頰の邊に生ずる毛。脣の上のを髭（ウハヒゲ）といひ、頤のを鬚（アゴヒゲ）といひ、頰のを髯（ホホヒゲ）といふ。㊁すべて動物の口の邊に生ずる長き毛の稱。㊂ひげをたくはへはやしたる人。

——をはらふ［拂鬚］（宋の宰相寇準嘗て參知政事丁謂と會食したるとき、準の鬚が羹に染まりたるを見て、謂起てこれを拂ひければ、準色を正しうして、「身爲執政何自爲宰相拂鬚耶」といひし故事に出づ）目上にもねりへつらふにいふ語。

（ひ-げ［卑下］（名）㊀へりくだること。（謙遜）。㊁いやしむること。

（ひ-けい［祕計］（名）㊀祕密なる計略。㊁不思議なる計略。「殺物「―盡亡」。

（び-けい［美景］（名）㊀うつくしき景色。㊁よき景色。

（び-けい［美形］（名）容貌うつくしき女。

（ひ-けう［飛橋］（名）はねばし。

（び-けう［鼻竅］（名）はなのあな。

（ひ-げき［悲劇］（名）㊀觀客をして悲哀の情を催さしむる演劇、喜劇の對。㊁悲哀なる人事。

（ひ-げき［飛檄］（名）檄文をいそぎまはすこと、又、いそぎまはす檄文。

（び-げき［尾擊］（名）後をおひかけて擊つこと、追擊。

［ひげ-ぐち［髭口］（名）くちひげの生（ハ）へある口。轉じて、男のおとなの口。

卄ひげ-こ［鬚籠］（名）竹の端を編み殘して鬚さまにせる竹籠。

ひ-けし［火消］（名）㊀火を消すこと。㊁火事を消しとむる職の者、即ち消防夫。**——つぼ**［火消壺］（名）おきびを密閉して消す壺。

（ひ-けつ［祕結］（名）大便の壺より滯りて通ぜざるを、けっし。

（ひ-けつ［否決］（名）議題となりたる議案を、成立せしむべきものにあらずと決すること。

（ひ-けつ［祕訣］（名）おくのて。奧義。

（び-げつ［眉月］（名）まゆの如き月、即ち、陰暦の月の初の夜の月。

（ひけつ-しやう［祕結性］（名）よく祕結する性質。

（ひ-けつ-しやう［非結晶］（名）規則正しき結晶をなさゞること。**——たい**［非結晶體］（名）非結晶の物體。

［ひげ-づら［髭面］（名）ひげの生ひたる顏、又、其人。

（ひ-けふ［卑怯］（名）㊀よく物事におそるゝこと、膽病。㊁心術のいやしきこと。

（ひ-げふ［罷業］（名）勤務をやすむこと。

卄ひけ-る［引］（自、か下二）㊀退散になる。退出になる。「役所が―」。㊁氣おくれす。

ひげ-をとこ［髭男］（名）ひげの多き男。

（ひ-けん［披見］（名）手紙などをひらき見ること。

（ひ-けん［鄙見］（名）わが意見の謙稱。

（ひ-けん［比肩］（名）かたをならぶること。

（ひ-げん［鄙言］（名）㊀いやしきことば。㊁自分の言說の謙稱。（卑言）。

（ひ-げん［飛言］（名）いひふらし。うはさ。

（び-げん［美言］（名）㊀よきことば。（嘉言）。㊁うまきことば。（甘言）。㊂ほむることば。（褒稱）。

（ひげん-かうはん［非現行犯］（名）【法】犯罪事實の終（ヲ）はりたる後に發覺したるもの、現行犯・準現行犯の對。

（ひ-げんすう［被減數］（名）【數】引算に於て、或數の減ぜらるゝ數。

卄ひ-こ［彥］（名）男子の美稱。

卄ひ-こ［孫］（名）子の子。うまご。まご。

ひ-こ［曾孫］（名）（「ひひこ」の約）孫の子。ひまご。ひいまご。

ひ-こ［小舌］（名）口腔の奧に上より懸垂せる肉の稱。のどのひこ。

ひご［籤］（名）（「ひげ」の轉）竹を細く割りて削りたるもの、籠などを編むに用ふ。

（ひ-ご［卑語］（名）下等なる言葉。いやしきことば。さとびことば。（鄙語）。

（ひ-ご［悲語］（名）かなしきことば。

（ひ-ご［飛語］（名）いひふらし。ひやうばん。（蜚語）。

（ひ-こう［罷工］（名）工事をやすむこと。ひげふ。「同盟―」。

（び-こう［獼猴］（名）【動】さる。

（び-こう［鼻腔］（名）はなのあな。鼻のうつろになりたる所。（鼻孔）。

（び-こう［鼻口］（名）はなとくちと。

卄ひこ-え［孫枝］（名）枝より更に生じたる枝。

（ひ-こく［被告］（名）【法】訴訟事件の原告の相手方、即ち訴へられたる方。原告の對。**——にん**［被告人］（名）被告たる地位に立つ人。

卄ひこ-じろ-ふ（ロウ-ジ）（ふはひふ）［蘗合］（自、は四）互にひきあふ。ひきづる。「延げんと―ほどに」。

ひご-ずゐき［肥後芋莖］（名）はすいもの莖を乾したるもの。

ひご-たい［平江帶］（名）【植】（支那の平江府より出でしより此名あり）菊科に屬する草、莖はのあざみに似て刺なく白毛あり、花は藍色毬形にして夏秋の頃開く。（與州漏蘆）。

（ひ-こつ［腓骨］（名）脛骨の後外側にある長き骨、左右各一對あり。

（び-こつ［鼻骨］（名）鼻を構成する骨。左右各一對あり。

（び-こつ［尾骨］（名）をのほね。

卄ひこ-づら-ふ（ロウ-ツ）（ふはひふ）［蘗合］（自、は四）「ひこじろふ」に同じ。「あがたゝせればひこづらひ」。

（ひ-ごと［毎日］（名、副）まいにち。にち〳〵。

（ひ-ごと［火事］（名）くわじ。

ひこ-ばえ［蘗］（名）（孫生（ハエ）の義）切りたる根より出でたる芽（メ）。

卄ひこ-ばゆ［蘗］（自、や下二）ひこばえ生ず。

ひ-ごひ（イ-ゴ）［緋鯉］（名）【動】鯉の變種、全身朱色又は白色若しくは朱白相雜るもの、人多く飼ひ弄ぶ。（金鯉）。

ひ-ごひ（イ-ゴ）［日乞］（名）晴天をいのること。雨乞の對。

（ひ-ごふ（ゴウ）［非業］（名）【佛】罪のむくいにあらざること。（非命）。**——の-し**［非業死］（名）罪なくして人に殺さるゝこと。

ひこ-ぼし［彥星］（名）七夕に祭る牽牛星、俗に織女（タナバタ）の夫といふもの、いぬかひぼし。

ピコル［Picol］（名）清國の重量の單位、即ち「クン」に同じ。（在東洋歐洲人の稱呼）。

ひ-ごろ［日頃］（名、副）平生。ふだん。つね。「つね―」。

卄ひ-こゑ［失聲］（名）聲の出でぬ病。

ひこん-あを［比金襖］（名）㊀かされの色目、表は黃ばみたる青にして裏はふた藍なるもの。㊁青黑の經（テク）に黃の緯（ヨコ）を織りたる織色。

卄ひこん-さ（名）錦襴の類。

ひざ［膝］（名）股と脛との關節の折れ曲がれる前面。**——とも-だんかふ** 如何にやくざな人なればとて談合すれば多少利する所あるにいふ。**——をかがむ** ひざをまげかゞむ。又、人に屈從す。**——をくっす**［屈膝］前條に同じ。**——をくづす** 端坐したる趾をかへてさまゝなるすわり方をなす。**——をくむ** あぐらをかく。**——をつく** ひざを折りて下につく。**——ををる** ひざを曲ぐ。又、かゞむ。伏す。

（び-さい［微細］（名）こまやかなること。こまかきこと。

（び-ざい［微罪］（名）わづかのつみ。

（ひ-さう（ウ-ツ）［皮相］（名）㊀うはべ。うはつら。㊁知識の淺薄なること。

（ひ-さう（ウ-ツ）［悲壯］（名）㊀なげきかなしみて意氣のふるひおこること。㊁衝突の解決が現象世界に於て絕ゆるとき美と認めらるゝもの、自己の存在を斷滅し、死を須要の制約となす。

（ひ-さう（ウ-ツ）［非想］（名）想念を絕滅せしむること。

卄ひ-さう（ウ-ツ）［非常］（名）「ひたやう」に同じ。「―の時もあひみてやみぬべきか」。

（ひ-さう（ウ-ツ）［祕藏］（名）祕めて大事にかこふこと。

又、其もの。「—むすこ」「—むすめ」。

(ひ-ざう)[脾臟](名)「ひ」(脾)に同じ。

(び-さう)[美裝](名) うつくしきよそほひ。

(ひ-さう-せき)[砒霜石](名) ㊀【化】銀又は銅などを吹き分くるときに生ずる砒素の化合物、劇毒を含む。㊁【鑛】砒石の一名。

ひ-さかき[柃](名)【植】山茶科に屬する常綠木、高さ二三尺、葉は橢圓形にして緣邊に鋸齒を有す、花は小形白色にして毬形紫黑色の小果を結ぶ、枝葉は榊(サカキ)に代用して神に供し、又、燒きて灰汁(アク)の灰となす。

ひざ-かけ[膝掛](名) ㊀まへだれ。まへかけ。㊁車などに乘る時、膝に掛くる蔽(オホ)ひもの。

ひざ-がしら[膝頭](名) 膝のさき。ひざかぶ。

十ひさかた-の[久方](枕)(日差方の義)「天」「都」及天に關する物事に冠らする詞。「—、光のどけき、春の日に」「—、みやこをおきて草枕」(久堅)。

[ひざ-がため][膝固](名) 演藝場などにて、客のそろふを待つこと。

ひざ-かな[乾魚](名) ほしざかな。

ひざ-かぶ[膝株](名) ひざがしら。

ひ-ざかり[日盛](名) 日のてらす最中。

ひ-さき[火先](名) ㊀火のもゆるさき。ほのほ。㊁火のもえ行く端。

ひ-さぎ[楸](名)【植】紫葳科に屬する木、直立に聳(ソビ)えて上に枝を分かち、枝葉共に對生す、葉は桐に似て五尖をなす、花は淡黃色にして紫色の斑點あり、豆の如開く、果實は莢をなし、尺餘にして十六さゝげの如くに垂下す。

十ひさぎ-びと[鬻人](名) ものをひさぐ人。

十ひさぎ-め[鬻女](名) ものをひさぐ女。

十ひさく[杓](名)(「ひさご」の轉)「ひしやく」に同じ。

十ひ-さく[引裂](他、か四)「さく」に同じ。

ひさぐ[鬻](他、か四) うる。あきなふ。(販)。

ひさぐ[提](他、か下二)(「ひきさぐ」の約)手にさげ持つ。ひっさぐ。

十ひさぐ[拉](自、か下二) ひしがる。

十ひさぐ[拉](他、か四) ひしぐ。

ひさく-がた[杓形](名) ㊀塔上に置く寶珠。(火珠)。㊁杓の形に似たるもの。

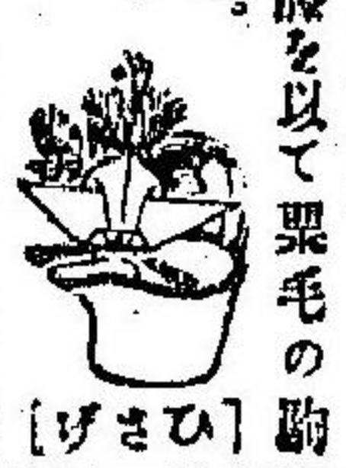
ひざ-ぐみ[膝組](名) ひざぐむこと。あぐら。

ひざ-ぐむ[膝組](自、ま四) 足をくみあはせて坐す。あぐらをかく。

ひ-ざくら[緋櫻](名)【植】櫻の一種、花は小形四瓣にして莖は長く垂れ、蕾(ツボ)は色甚だ赤し。

ひざ-くりげ[膝栗毛](名)(膝を以て栗毛の駒にかふ義)長の道中を徒歩すること。

ひさげ[提子](名) 酒を盛りて盃に注(ツ)ぐ鉉(ツル)ある器。(注子)。


[ひさげ]

ひさご[杓](名) ㊀古昔、水を汲むに用ひし器、現時の杓より深きもの。㊁「ひしやく」の一名。

ひさご[瓠](名)【植】ゆふがほ・ふくべ等の總稱。(瓠、瓢)。 ——うり[瓠瓜](名)【植】「からすうり」の一名。 ——がた[瓠形](名) へうたんがた。 十——ばな[瓠花](名) 古昔の童子の髮の結方、額上にあげ左右へ分けて結(ユ)ひしもの。

十ひさ-さ[久](名) ひさしき間。

ひさ-さき[柃](名)【植】「ひさかき」に同じ。

ひざ-ざら[膝皿](名) 膝頭の中の皿に似たる骨、即ち膝蓋骨。(膝骨、膝髕)。

ひ-さし[庇](名)(日鎖(ヒサ)の義) ㊀十上古、母屋の四面にありし狹き室の稱。㊁後世、家の軒に別に差出したる軒の稱。㊂冠帽などの額上に差出したる部分の稱。 ——がみ[庇髮](名) ㊀束髮の一種、前部の髮を前方に突出するやうに結ひたるもの。又、其髮を結へる婦人。㊁女學生の異稱。 ——をかして おもやを とられる 自家の所有に屬するものゝ、內すこし許を貸したるに因緣し、終に其全體を奪はるゝに至るをいふ。

ひさ-し[久](形、二)(しく、しき、しけれ) 時を經(フ)ること長し、時ながし。

ひ-ざし[日差](名) 日の差入ること。(日數)。

十ひさし-の-たいきやう[庇大饗](名) 古昔、大臣の年々の大饗、庇の間にて行はれしよりいふ。

[ひさし-ぶり][久振](名) 逢はずして久しく時を經(ヘ)たること。「—で會ふ」。

(ひ-さつ)[飛札](名) 至急におくり來る手紙、いそぎの手紙。急報。

ひざ-つき[膝突](名) ㊀十半疊の敷物。㊁遊藝の束脩。(京阪地方の方言)。

十ひさ-に[久](副) ひさしく。

十ひざ-の-かはら[膝髕](名) ひざざら。

十ひざ-の-とこ[膝牀](名) ひざびやうし。

ひさ-びさ[久久](名) ㊀ながらく面會せざること。㊁ながらく此物事を絕ちてありしこと。

ひざ-びやうし[膝拍子](名) 膝をたゝきて拍子をとること。

ひざ-ぼね[膝骨](名)「ひざざら」に同じ。

十ひざ-まくらく[膝枕](自、か四) 膝枕をなす。

ひざ-まくら[膝枕](名) 他人の膝に頭をもたせて臥すこと。

ひざ-まづく[跪](自、か四)(膝衝(ツ)くの義)膝を地に突きて屈(カガ)みゐる

ひざ-まはり[膝廻](名) 貴人の前にて、ひざまづきて膝を轉ずること。

ひ-さめ[大雨](名) おほあめ。(甚雨)。

十ひ-さめ[氷雨](名) あられ。又、ひよう。

十ひさめ-く[私語](自、か四) さゝめく。

ひざ-もと[膝元](名) ㊀膝の近邊。座の近所。㊁父母の手許。(膝下)。㊂宮城又は覇府のある地。

ひざ-よろひ[膝鎧](名) 膝につくるよろひ。

ひ-ざら[火皿](名) ㊀鳥銃の火藥を盛る處。㊁煙管の煙草をつめこむ處。

ひ-ざらし[日曬](名) 日光にさらすこと。

(ひ-さん)[砒酸](名)【化】無水亞砒酸を強硝酸にて燬して得る結晶體、顏料又は染料に供せらる。

(ひ-さん)[悲慘](名) ㊀かなしむこと。いたむこと。㊁いたましきこと。あはれなること。(悽慘)。

(び-さん)[瀰散](名) ひろがりちること。(撒散)。

ひし[菱](名) ㊀【植】菱科に屬する水草、葉は中部の膨大せる長き柄を有して水面に叢生す、花瓣は白色にして四個あり、果實は堅果にして角狀の突起をなす、種子は白くして食用に供せらる。㊁「ひしがた」の略言。

ひし[鏃](名) ㊀頭部に銳利なる鐵をつけたる漁具、魚を刺すに用ふるもの。㊁岐(マタ)になりたる鐵に長き柄をつけたる武器。さすまた。(鏃鑯)。㊂鐵製の刺を多く設けたる防禦物。さかもぎ。(鐵蒺藜)。

(ひ-じ)[非時](名)【佛】(齋(トキ)ならぬに食ふ義)午後の食時。

(ひ-じ)[秘事](名) 祕密なる事柄。

(び-し)[微志](名) 自分の志の謙稱。

(び-じ)[微時](名) いやしかりしとき。

(び-じ)[美事](名) 讃(ホ)むべき事。うつくしき事。

(び-じ)[美辭](名) ㊀うつくしき文句、巧(タク)みなることば。㊁「びじがく」(修辭)に同じ。

(ひ-しう)[比周](名) くみあひて互に惡事を隱しあふこと。又、ぐるになって惡事をたすけあふこと。

(び-しう)[美醜](名)「びあく」(美惡)に同じ。

(び-じ-がく)[美辭學](名)「しうじがく」(修辭學)に同じ。

ひし-がた[菱形](名) 四邊形のすべての邊が相等しく且つすべての角が直角にあらざるもの。

ひ-しき[火敷](名) 香を燻(タ)く時火の上に敷く具。かうしき。

十ひ-しき[引敷](名) しとね。しきもの。 ——もの[引敷物](名) 前條に同じ。

ひじき[鹿尾菜](名)【植】(「ひずきも」の約)褐色藻類に屬する海草、海中の岩石に着生す、長さ二三寸、鼠の尾に似て黑く、食用に供せらる。(羊栖菜)。

十ひじき-も(名)【植】「ひじき」に同じ。

十ひじき-もの(名)【植】「ひじき」に同じ。

ひし-ぐ[拉](他、か四) ㊀おしつぶす。㊁くじきとゞむ。

ひし-ぐ[拉](自、か下二) ㊀おされて砕(クダ)く。㊁くじけはゞむ。

ひし-くひ[鴻](名)【動】(菱食の義、好みて菱の實を食ふよりいふ)游水類に屬する鳥、雁よりも大形なり、翅は黑色にして腹は白く、背・頸は淡褐色なり。

[ひしげる](自)「ひしぐ」の訛。

ひしこ[鯷](名)【動】「ひしこいわし」の略言。 ——いわし[鯷](名)【動】喉鰾類中ひしこ科に屬する魚、形は鰯に似、背部蒼黑色にして腹部は白色、體側に蒼綠色の縱線あり、體長三四寸に達す、乾してたつくりとす。ひしこ。しこ。(鯷鰯)。

ひ-しごと[日仕事](名) 晝間になす仕事。

(ひ-し-しよくぶつ)[被子植物](名)【植】胚珠は柱頭の子房內に包まれ、花粉は受粉の際其上に附着する植物、さくら・うめ等これに屬す。

(ひ-し-せん)[皮脂腺](名)【生】皮膚にありて脂肪を分泌する腺。

(び-しつ)[美質](名) よき性質。ほむべき性質。

ひ-しづめ[鎭火](名)「ひしづめのまつり」の略言。 ——の-まつり[鎭火祭](名) 古昔、火災を防ぐため、六月及十二月に行はれし祭事。

ひし-と[緊](副) ㊀きびしくおされて鳴るさまにいふ語。㊁はげしく。ゆるみなく。

ひし-なり[菱形](名)「ひしがた」に同じ。

ひ-じに[乾死](名) ひじぬること。うゑじに。

ひ-じぬ[乾死](自、な變) 饑(ウ)ゑて死ぬ。

ひし-ぬひ[菱縫](名) よろひの板の菱形に綴ぬひたる所。

ひし-の-もち[菱餠](名)「ひしもち」に同じ。

ひし-はり(名)【植】「すまふとりぐさ」の一名。

ひし-ばひ[菱灰](名) 菱の果實の殼を燒きたる褐色の灰、香爐用のもの。

[ひし-ひし][緊緊](名、副) ㊀きびしく壓(オ)されて鳴るさまにいふ語。㊁はげしくゆるみなきさまにいふ語。

[びし-びし][緊緊](名、副) 前條に同じ。

(ひ-しふ)[卑濕](名) 土地ひくゝして濕氣多きこと。

ひ-しほ[干潮](名) ひきしほ。

ひ-しほ[醬](名) 精(シ)げたる小麥の飯に、豆・糯米などを炒(イ)りたるものを雜(マ)ぜ、これに鹽を加へ、貯ふること數十日にして成るもの。なめもの。 ——いろ[醬色](名) かさねの色目、表も裏も

黒みを帶びたる醇芳なるもの。廿――す［醱酢］（名）「ひしほ」に同じ。

廿ひ-し-む（[illegible]）［乾］（他、ま下二）かわかす。「ほす。

ひしめき［犇］（名）ひしめくこと。

ひしめ-く（かきくくけけ）［犇］（自、か四）㊀ひし〳〵と音す。㊁騒ぎ立つ。さわぎあふ。

ひしもち［菱餅］（名）菱形に切りたる三色の餅、三月の節句に用ふ。

（ひ-しや［飛車］（名）將棋の駒の一、縱橫とも直線に幾格にても自由に飛び行くもの、なりては銀將のはたらきを兼ぬ。

（ひ-しやう（ーシヨウ）［飛翔］（名）空中をとびかけること。

（ひ-しやう（ーシヨウ）［裨將］（名）補佐の將。副將。

（ひ-しやう（ーシヨウ）［悲傷］（名）かなしみいたむこと。かなしみなげくこと。

（ひ-じやう（ーシヨウ）［非情］（名）心の無きもの、即ち木石の類。

（ひ-しやう（ーシヨウ）［非晶］（名）【鑛】結晶せざる特質。

（ひ-じやう（ーシヨウ）［非常］（名）普通ならざること。常ならざること。事變。（異常）。――ぐち［非常口］（名）出火其他の事變に遁げ出づるための門戶。――けいさつ［非常警察］（名）【法】戰時又は事變に際し、治安を維持するため、戒嚴令によりて行はるゝ警察。――けいはう（ーホウ）［非常警報］（名）非常のしらせ。――しや［非常赦］（名）古昔、國に大いなる吉凶禍災などありたる時、全國の罪人を赦免(ユル)し放ちしこと。――じやうこく（ージヨウ）［非常上告］（名）【法】第一審と第二審とを問はず、法律に於て罰せざる所爲に對して刑を言渡し又は相當の刑より重き刑を言渡したるは、期間內に上訴することなくして其裁判確定したるとき、其事件につき上告を受くるの權ある裁判所の檢事は、司法大臣の命により若しくは職權を以て、何時にても其裁判所になす上告。――せうしふ（ーシヨウシウ）［非常召集］（名）戰時又は事變に際して行ふ在鄕軍人の召集。――せん［非常線］（名）犯罪事件の生じたるときなどに、犯罪人逮捕のため警察官が或範圍を警戒すること。――ひ［非常費］（名）㊀非常のときの費用。㊁【法】第二豫備金の稱。

（び-しやう（ーシヨウ）［微傷］（名）すこしのきず。かすりきず。うすで。（輕傷）。

（び-しやう（ーシヨウ）［微晶］（名）【鑛】拍子木の如き形狀をなす微細なる結晶。

（ひ-しやうにん（ーシヨウ）［非商人］（名）【法】商人にあらざる人。商人の對。

ひしやく［柄杓］（名）㊀湯水などを汲み取る器、竹筒又は椀若しくは曲物(マゲモノ)に長き柄をつけたるもの。㊁遊女の異稱。

（ひ-しやく［飛錫］（名）僧侶又は道士の旅行。行「脚。

ビシヤモン［毘沙門］（名）（梵語 Vaisravana、多聞と譯す）【佛】四天王の一、東方を守護し財寶を掌る神。――てん［毘沙門天］（名）前條に同じ。（多聞天）。

（ひ-しゆ［匕首］（名）懷劍の類。あひくち。

ビシユカツマ［毘首羯磨］（名）古代「インド」の彫刻家、能く佛像を刻みたりとて、後世、これを祭る。

（ひ-じゆつ［祕術］（名）㊀人に知らさぬ術。㊁おくのて。

（び-じゆつ［美術］（名）美を表現するを目的とする技術又は製作、即ち、詩歌・音樂・繪畫・彫刻・建築などの類をいふ、普通には特に繪畫・彫刻等を指す。――か［美術家］（名）美術を業とする人。又、美術に巧(タク)みなる人。――かい［美術界］（名）美術家の社會。――しん［美術心］（名）美術の趣味を解し得る心。――ひん［美術品］（名）美術の製作物。

（び-じゆく［糜粥］（名）まるかゆ。かゆ。

（ひ-じゆん［批准］（名）㊀可否を判決してゆるすこと。㊁當事國の全權委員が合議談判して設定したる條約の案文を、其國の主權者が承認すること。――かうくわん（ーコウ）［批准交換］（名）批准を經(ヘ)たる條約を當事國が互に交換すること。これにより條約は効力を生ず。

（ひ-しよ［避暑］（名）轉地して暑氣を避(サ)くること。

（ひ-しよ［祕書］（名）㊀祕藏の書籍。㊁其人に直屬して機密の事務を取るもの。

（ひ-しよ［飛書］（名）書狀をいそぎおくること。又、急用の書狀。

（ひ-しよ［飛絮］（名）とびちる柳絮。

（ひ-じよ［裨助］（名）たすけ。すけ。

（び-しよう［美稱］（名）ほめていふとなへ。

（ひ-しよう-じけん［非訟事件］（名）【法】裁判所の取扱に屬する民事・刑事の訴訟以外の事件、即ち權利の確認又は決定若しくは侵犯を豫防する等の目的のものにして、例へば禁治產の宣告・親族會の招集の如きこれなり。

（ひ-じよう-すう［被乘數］（名）【數】或數の乘ぜらるべき數。

（ひ-しよく［非職］（名）官吏たる位置は其まゝにして、職務を免ぜらるゝこと。（非役）。――くわんり［非職官吏］（名）非職を命ぜられたる官吏。

（び-しよく［美食］（名）あぢよき食物。又、あぢよき食物をくらふこと。

（び-しよく［美色］（名）㊀うつくしきいろ。㊁うつくしき容貌。

（ひ-しよ-くわん［祕書官］（名）大臣・總督・都督・統監等に直屬して、機密事務を取扱ふ高等官。

（び-しよ-ぬれ（名）ぬれそぼちたること。

（び-しよ-びしよ（名、副）雨の絕間なくしげくふるさまにいふ語。

ひ-じり［聖］（名）（日のものに洽(アマネ)きが如く、ひろくものを知るとの義）㊀聖天子の稱。㊁聖人の稱。㊂すべて、凡人に勝れたる人の稱。「歌の―」。㊃高德の僧の稱。㊄濁酒の異稱。㊅僧侶の尊稱。――ごころ［聖心］（名）僧侶めきたる心。廿――ことば［聖語］（名）僧侶めきたることば。――づか［聖柄］（名）唐木などにてつくり上をつゝみ飾らざる刀の柄。廿――のみよ［聖御世］（名）天皇の御代をたゝへ奉りていふ語。「橿原の―ゆ」。――め［聖目］（名）「せいもく」に同じ。

廿ひじ-る（らりるるれれ）［聖］（自、ら四）ひじりとなる。「或人難じて、父に似て―べからずといふ」。

ひ-じろ［樋代］（名）伊勢大神の御神體を容(イ)れ奉る器、純金にて橢圓形なりといふ。みひじろ。

（ひ-しん［披針］（名）はばり。

（び-しん［微震］（名）【地】靜止せる人又は注意せる人の感ずるほどの地震。

（び-じん［美人］（名）容貌の麗はしき女。美女。――けい［美人系］㊀美人の系統。㊁美人の多く生ずるといふ地帶。――さう（ーソウ）［美人草］（名）【植】（虞美人草の略）「ひなげし」の一名。――せう（ーシヨウ）［美人蕉］（名）【植】芭蕉科に屬する植物、形は芭蕉に似て小さし、花は蘘荷(メウガ)に似て朱色なり、多く琉球に產す、此葉を黑燒にし又は煎じて油に煉り、髮を洗ふに用ふれば、禿(ハ)げたるも發生すといふ。ひめばせう。（紅蕉）。

ひ・す（せしすするすれせよ）［比］（他、さ變）㊀くらぶ。なぞらふ。㊁たすく。かばふ。

ひ・す（せしすするすれせよ）［祕］（他、さ變）ひむ。かくす。「醜を―」。

び・す（せしすするすれせよ）［尾］（自、さ變）あとにつきゆく。又、あとをつけゆく。

（ひ-すう［卑陬］（名）身分いやしきこと。

廿ひずか-し（しきしくしけれ）［彆］（形、二）心ゆがみたり。心ねぢけたり。かだまし。

廿ひずき-も［鹿尾菜］（名）【植】「ひじき」の古稱。

ビスケット［Biscuit］（名）一種の菓子、小麥粉を原料とし、「バタ」・牛乳・玉子などを入れてよく煉(ネ)り、これを型(カタ)にかけたるものを蒸釜の中に入れて蒸燒にしたるもの。

ヒステリー［歇私的里＝Hysteria］（名）婦人の神經病、多くは子宮病又は月經不順若しくは產後等に原由して發す、感情の變化はげしく或は笑ひ或は泣き且ついたく勞働するとを厭(イト)ふもの。

ヒステレシス［Hysteresis］（名）【理】鐵心を圍む「コイル」に通ずる電流の方向を變じ、磁極を轉換せんとするときに起る磁氣的抵抗、必ず「エネルギー」の損失を來たすものなり、發電機の發電子に生ずるを以て、成るべくこれを避くるやうに發電子を組立つるを要す。

ピストル［短銃＝Pistol］（名）短小なる銃、即ち短銃。――がうたう（ーゴウトウ）［短銃強盜］（名）短銃を使用して人を脅迫又は殺傷する強盜。

廿ひ-すまし［樋洗］（名）古昔、禁中などにて、廁(カハヤ)の掃除を司りし下司の女。――わらは（ワラハ）［樋洗童］（名）ひすましのわらは。

ひずみ［歪］（名）㊀ひずむこと。たわみ。㊁【理】彈性體が外力を受けたるときの體積又は形の變化。

ひず・む（まみむむめめ）［歪］（自、ま四）正しき形を失ふ。いびつになる。まがる。ねぢく。

廿ひず・む（まみむむめめ）［潛］（自、ま四）「ひそむ」に同じ。

ひすら・ぐ（がぎぐぐげげ）［磷］（他、か四）すれてうすらぐ。

ひすろ・ぐ（がぎぐぐげげ）［磷］（自、か四）前條に同じ。

（ひ-すゐ［翡翠］（名）㊀【動】「かはせみ」に同じ。㊁鳥の尾の長き羽。㊂つやゝかなる髮。

（び-すゐ［微醉］（名）すこしゑふこと。ほろゑひ。

（び-すゐ-こつ［尾推骨］（名）尾の骨。

（ひ-せい［秕政］（名）よからぬ政治。

（び-せい［美聲］（名）うるはしき聲。よきこゑ。

（び-せい［美政］（名）よきまつりごと。善政。

（ひ-せう（ーシヨウ）［費消］（名）つひやしうしなふこと。つかひはたすこと。「官金―」。

（ひ-せう（ーシヨウ）［非笑］（名）そしりわらふこと。

（び-せう（ーシヨウ）［微小］（名）こまかきこと。ちひさきこと。

（び-せう（ーシヨウ）［微少］（名）すくなきこと。わづかなること。

（び-せう（ーシヨウ）［微笑］（名）ほゝゑむこと。「ゑ。

（ひ-せう-ざい（ーシヨウカ）［費消罪］（名）【法】委託物を費消したる犯罪。

（び-せうねん（ーシヨウ）［美少年］（名）顏だち美はしき少年。

（ひ-せき［砒石］（名）【鑛】銀又は鉛の鑛物に伴ひて存在する砒素を含む鑛物、柱狀・粒狀又は塊狀をなす、元來は銀白色なれど曝りて暗黑色となれるもの多し、質脆くして熱すれば一種の臭氣を發し煙を放つ。砒霜石。礜石。

（ひ-せき［肥瘠］（名）こえたると瘠(ヤ)せたると。

(ひ-せき)［碎石］（名）いしぶみ。たていし。又、其石材。

(ひ-せき)［丕績］（名）おほいなる功績。

(び-せつ)［微雪］（名）すこしのゆき。ちら〳〵ふる「僅。ゆき。

(び-せつ)［眉雪］（名）眉の雪の如く白きを「―老。

(ひ-せふ)［婢妾］（名）そばめ。こしもと。

ひ-ぜめ［火攻］（名）火を放ちて攻むること。やきうち。

ひ-ぜめ［火責］（名）火にあてあぶりて、拷問すること。「水責―は厭はねど」。

(ひ-せん)［飛泉］（名）高處より直下する水。たき。

(ひ-せん)［卑賤］（名）身分いやしきこと。地位ひくきこと。いやしきこと。（鄙賤）。

(ひ-ぜん)［怫然］（名、副）立腹するさまにいふ語。

(ひ-ぜん)［皮癬］（名）「かいせん」（疥癬）に同じ。――がき［皮癬疥］（名）前條に同じ。――かき［皮癬搔］（名）皮癬に罹(カカ)りてあるもの。

(び-せん)［鼻尖］（名）はなのさき。

(び-ぜん)［美髯］（名）うつくしきあごひげ。――こう［美髯公］（名）美髯ある人の稱。

(ひ-せんきよ-けん)［被選擧權］（名）選擧せらるゝことを得る法律上の資格。

(ひ-せんきよ-にん)［被選擧人］（名）選擧せらるゝ人。

(び-せん-たう)［眉尖刀］（名）なぎなた。（薙刀）。

(び-ぜん-とくり)［備前德利］（名）備前燒の德利。

び-ぜん-やき［備前燒］（名）備前國和氣郡伊部村より産出する陶器。質堅く蒼色にて、雅致多し。

++ひ-そ［檜曾］（名）檜のこまるた。（檜楚）。

(ひ-そ)［砒素］（名）〔化〕灰白色の金屬性光澤を有する脆(モロ)き非金屬。これを熱すれば一種の臭氣を放ちて氣化す。極めて有毒なり。鷄冠石又は雄黃となりて天然に存在す。

(ひ-そ)［飛鼠］（名）〔動〕「かうもり」に同じ。

(び-そ)［鼻祖］（名）先祖。元祖。（始祖）。

(ひ-そう)［皮層］（名）皮のかさなり。

ひそか［密、窃］（名）人に知らせざること。人目をさくること。忍びやか。ないしよ。「―にいふ、まろ、この歌かへしせんといふ」。――ごと［密事］（名）ないしようごと。

++ひ-そく［祕色］（名）㊀青磁の磁器。㊁瑠璃色。

(ひ-ぞく)［卑屬］（名）血統上自己より地位ひくきもの、即ち子・孫・姪・甥などの如きもの。

(ひ-ぞく)［卑族］（名）身分いやしきやから。

(ひ-ぞく)［卑俗］（名）いやしきこと。げびたること。

(ひ-ぞく)［匪賊］（名）多人數組みあひたる盜賊。

(び-そく)［鼻息］（名）㊀はないき。㊁機嫌。「人の―を窺ふ」。

(び-ぞく)［美俗］（名）うるはしき風俗。ほむべきならはし。

++ひそく-いろ［祕色色］（名）㊀瑠璃色。㊁かさねの色目。表は經(タテ)紫にして緯(ヨコ)青なる織色にして裏は薄色なるもの。

(ひ-そすう)［非素數］（名）〔數〕素數にあらざる數。

ひそ-ひそ［密密］（名）忍びやかになすさまにいふ語。――ばなし［密密話］（名）聲低くしてはなすこと。ないしようばなし。（私語）。

ひそま・る［潛］（自、ら四）㊀しづかになる。ひっそりとなる。㊁ひそむやうになる。かくる。

ひそみ［顰、嚬］（名）眉のひそむこと。――にならふ［倣顰］（故事）越の美人西施が嘗て心(ムネ)を病みしとき、眉ひそみてありけるを、醜女見て斯くすれば美しく見ゆるならんと思ひて、己もまた眉をひそめたりといふ故事に出づ。みだりに人の眞似をなすにいふ。

ひそ・む［潛］（自、ま四）㊀しのびてゐる。かくれてゐる。かくる。しのぶ。「草に―」。㊁内部に存在して、未だ外部に發現せず。

ひそ・む［顰、蹙］（自、ま四）㊀眉の邊に皺(シワ)よる。しかむ。㊁老いて口すげむ。

ひそ・む［顰、蹙］（他、ま下二）眉の間に皺をよす。しかむ。

ひそ・む［潛］（他、ま下二）ひそむやうにす。かくす。

ひそめ・く［私語］（自、か四）さゝやく。

ひそめ-に［密］（副）ひそめて。ひそかに。

ひそ-やか（名）しのびやか。ひそか。「―にものいふ」。

ひ-ぞ・る［乾反］（自、ら四）乾(カワ)きて反(ソ)りかへる。「板敷が―」。

++ひ-た［引板］（名）「ひきた」に同じ。「我が作る門田の―に驚きて」。

++ひた―［直］（接頭）ひたすら。うちつけ。急。（頓）。

ひ-だ［襞積］（名）衣裳などに細く折りて縫ひ附けたる皺。

び-た［鐚］（名）粗惡なる錢。びたせん。

(ひ-だい)［肥大］（名）こえてふとること。

(び-たい)［媚態］（名）こぶるさま。なまめくさま。

(び-たい)［眉黛］（名）まゆずみ。

(ひ-たう)［緋桃］（名）〔植〕桃の一種。花は鮮紅色にして重瓣なり。

(ひ-たう)［悲悼］（名）人の死をかなしみなげくこと。

(ひ-だう)［非道］（名）㊀道理に外(ハヅ)れたること。（非理）。㊁人情に外れたること。殘酷。㊂明色。

(び-たう)［眉刀］（名）なぎなた。眉尖刀。

(ひ-だうぐ)［火道具］（名）埋火の器械。火箸。

ひた-おし-に［直押］（副）あやにむにおして。ひたすら進みて。

++ひた-おもて［直面］（名）うちつけ。「―にて、いかであらはし玉はん」。

++ひた-おもむき-に［直趣］（副）ひたすらに。一途に。

++ひた-かふ［直甲］（名）琵琶の甲の一枚板なるもの。

++ひた-かぶと［直兜］（名）一同揃ひて甲冑を着かためてあること。「―の士一人」。

ひ-たき［鶲］（名）〔動〕燕雀類に屬する鳥。大きさ雀にひとし。頭・頰は黑色にして白斑あり。背・翅は赤色にして黑斑あり。嘴・脚は蒼黑色なり。能く囀る。

++ひた-き［直黃］（名）全體黃色なること。

++ひ-たき［火燒］（名）㊀古昔、家の内外を照らすため夜間に篝火などを燒きしこと。㊁爐の古稱。――や［火燒屋］（名）㊀衞士などのひたきして夜を守りし小屋。㊁竈を燒く小屋。

ひ-た・く［日闌］（自、か下二）日影高くのぼる。

++ひた-くれなゐ［直紅］（名）全體のくれなゐなること。

++ひた-ぐろ［直黑］（名）全體のくろきこと。

ひた-ごころ［直心］（名）一途なるこゝろ。

ひた-さわぎ［直騷］（名）一途にさわぎたつること。

ひ-だし［簸出］（名）箕(ミ)にて簸(ヒ)たる屑(クヅ)。

++ひたし-の-うま［常足馬］（名）なみあしの馬。

ひたし-もの［浸物］（名）一種の料理。蔬菜などをゆで、醬油にひたしたるもの。

++ひた-しろ［直白］（名）全體の白きこと。

++ひた・す［養］（他、さ四）（日足すの義）養ひ育つ。そだつ。「人のおや、ものがわくごをひたしなさむることの如く」。

ひた・す［浸］（他、さ四）㊀水中に入る。水中に漬く。つく。㊁濕らし濡めす。ぬらす。しめす。

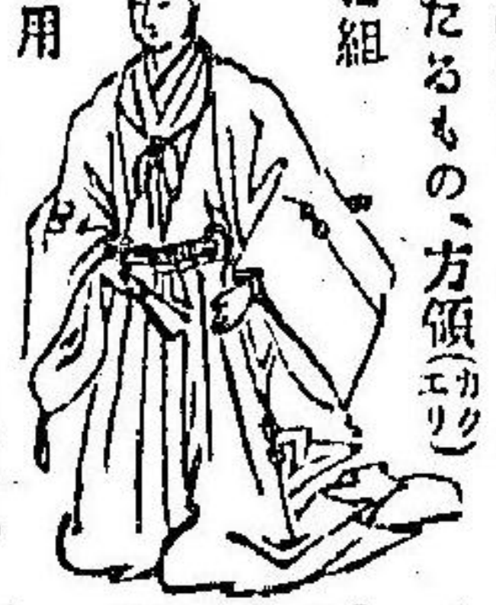
ひた-すら［只管］（名、副）それはかり。ひとむき。一途。一向。――に（副）前條に同じ。

びた-せん［鐚錢］（名）なべせん。びた。

++ひた-た［纔］（副）わづかに。

++ひた-た・く［滔］（自、か下二）とりまとまりなくしてあらはに見ゆ。つゝみかくしなく見ゆ。「ひたゝけし家居」。

++ひだ-たくみ［飛驒工匠］（名）㊀古昔、每年飛驒國より京師に召出されし工匠。㊁轉じて、木工の稱。



［ひたたれ］

ひた-たれ［直垂］（名）㊀古昔は庶人の常服にして、後世には禮服となりたるもの。方領(カクエリ)にして無紋、菊綴・胸紐は組緒にして袖括(ソデクク)りあり。もとは踝(クルブシ)に及ぶ袴を用ひたりしが、後には長袴をも用ふることとなれり。㊁「ひたたれぶすま」の略言。――ぶすま［直垂衾］（名）領(エリ)と袖とをつけたる衾。

ひ-だち［肥立］（名）ひだつこと。「産後の―」。

ひたち-おび［常陸帶］（名）古昔、正月十四日常陸國鹿島神社の祭禮に、男女おの〳〵意中の人の名を記して神に供したる帶。巫覡(コミ)の結びて頒(カワ)つを受けて婚をトせりといふ。

ひ-だ・つ［肥立］（自、た四）㊀日を逐(オ)ひて成長す。㊁日を逐ひて全快す。

++ひた-づかひ［直使］（名）わざ〳〵其事にのみつかはす使者。

++ひた-つち［直土］（名）地に直接すること。

ひた-てり［直照］（名）いたくてりつくること。

ひた-と［直］（副）へだてなく。うちつけに。たゞちに。ぢかに。（頓）。

ひた-ぬれ［直濡］（名）全體のぬれそぼつこと。ずぶぬれ。

++ひた-の-かけなは［引板懸繩］（名）引板をひきならす繩。

ひた-ばしり［直走］（名）やすまずにいそぎはしること。

ひた-はだか［直裸］（名）まるはだか。

ひたひ［額］（名）㊀顏面の上部の髮の生際(ハエギハ)より眉までの間。㊁古昔、女房の裝束のとき頭髮の裝飾に用ひし髻(カツラ)の類。㊂冠又は烏帽子などの額に當たる部分の名、其厚・薄によりて、厚びたひ・薄びたひ等の別あり。㊃物の差出でたる處「岸の―」。――がね［額金］（名）軍用の鉢卷の額に當たる處に入れたる鐵。（鉢鐵）。――がみ［額髮］（名）額上の毛髮。ぬかがみ。まへがみ。――ぎは［額際］（名）額のはえぎは。――じろ［額白］（名）馬のつきじろ。――つき［額付］（名）額の樣子。――のなみ［額波］（名）年老いて額による皺(シワ)。++――ゑぼし［額烏帽子］（名）額につくる小さき烏帽子。――をあつむ［鳩額］多人數よりあつまりて相談をこらすにいふ。

ひ-だひ［干鯛］（名）薄鹽にして乾したる鯛。

++ひだ-びと［飛驒人］（名）ひだたくみ。

++ひた-ぶる［頓］（名、副）ひたすら。一途。一向。――ごころ［頓心］（名）一途なる心。――に［頓］（副）ひたすらに。

ひ-だま［火玉］（名）㊀球狀をなして飛び行く怪(アヤ)しき火。ひのたま。㊁煙管(キセル)の火皿(ヒザラ)につめたる煙草の火となりたるもの。

廿**ひだまひ-の-ふだ**（イ-ダマ）［日給札］(名) 古昔、殿上人の名を書しるしたるふだ。

廿**ひた-みち**［直路］(名) ひとすぢ。一途。—**に**［直路］(副) ひとすぢに。ひたすらに。

廿**ひた-め**［大雨］(名) おほあめ。轉じて、ひさめ。

廿**ひだ-め**［襞積目］(名)「ひだ」に同じ。

廿**ひた-もの**［頓］(名、副) ひたすら。一向。

廿**ひた-や-ごもり**［直隱］(名) 何の譯（ワケ）ともなくひたすら引籠りゐること。「—に悄げなし」(蜻蛉)。

ひだら［干鱈］(名) 淵鹽にして乾したる鱈。

廿**ひ-だら・す**（さしすすせせ）［日足］(自、さ四) 成長したまふ。人となる。

ひだり［左］(名) ㊀人の南へ向きて東に當たる方。左方。右の對。㊁左方の手。㊂酒を飲むこと。「—が利く」。〜—**うちは**（チワ-ウ）［左團扇］(名) 樂隱居の境遇。—**がな**［左假名］(名) 漢字の左傍に施すふりがな。—**きき**［左利］(名) ㊀右手よりも左手のよく利くこと。㊁酒を好むこと。又、其人。〜—**ぎっちよ**［左利］(名) 前條(一)に同じ。廿—**ざま**［左樣］(名) 正しき道にたがふこと。(左道)。—**づま**［左褄］(名) ㊀衣服の左方のつま。㊁左方のつまをとりて歩むよりいふ藝者の異稱。—**なは**（ナ-サ）［左繩］(名) 左へ撚(ヨ)りして綯(ナ)ひたる繩。—**のうまつかさ**［左馬寮］(名)「さまれう」に同じ。—**のみさとづかさ**［左京職］(名)「さきやうしき」に同じ。—**まへ**（エ-マ）［左前］(名) ㊀衣の左の衽(エリ)を右の衽の上に合はせて着ること。(左衽)。㊁逆に成行くこと。運惡しくなること。—**みぎ**［左右］(名) ㊀左と右との位置の顚倒してあること。㊁歩調をとらするため、左右兩足をはこぶ順番に注意する號令。

廿—**みぎ-に**［左右］(副) かれこれと。いろ〳〵と。—**むき**［左向］(名) ㊀左方へ向くこと。㊁〜おとろへかゝること。—**もじ**［左文字］(名) 普通の文字を裏返して見たる形の文字。(倒形)。—**ゆがみ**［左曲］(名) ㊀左方のゆがむこと。㊁廿貧しき人の美しき妻を持つこと。—**より**［左縒］(名) 左方へよりをかくること。又、其絲。

ひた・る（らりるるれれ）［浸］(自、ら四) ㊀水につかる。水に入る。㊁ぬる。ひづ。うるほふ。

ひだる・し（くしきけれ）［饑］(形、一) 空腹にして食欲(ホ)し。饑ゑてあり。ひもじ。

廿**ひ-だれ**［臀］(名) 鳥の尾の肉。あぶら出り。

廿**ひた-を**［頓丘］(名) 小さきをか。こやま。

(**ひ-たん**)［悲歎］(名) かなしみなげくこと。「—の涙」。

(**ひ-たん**)［飛湍］(名) 水流のいとはやき瀨。

(**ひ-だん**)［飛彈］(名) とびくる彈丸。

(**び-たん**)［鼻端］(名) はなのさき。

(**び-だん**)［美談］(名) 名譽のものがたり。忠臣孝子などの話。

(**び-だん**)［美男］(名) 次條に同じ。—**し**［美男子］(名) 容貌うつくしき男子。

ひぢ［肱］(名) ㊀かひなとたゞむきとの間。(臂)。㊁すべて、曲がり出て、肘の狀をなす物。「—金」。—**を まぐ**［曲肱］ひぢをまげて手枕とす。

廿**ひぢ**［泥］(名) どろ。

ひぢ-かけ［肘掛］(名) ㊀ひぢをもたせかくる所。㊁「ひぢかけまど」の略言。—**まど**［肘掛窓］(名) (坐して肘をかけ得べき窓の義)床(ユカ)の上一尺餘の所に明けたる窓。

廿**ひぢ-かさ**［肘笠］(名) ㊀肘を以て頭上をおほひて笠にかふること。㊁「ひぢかさあめ」の略言。—**あめ**［肘笠雨］(名) (にはかにして肘笠にて凌ぐ雨の義)にはか雨。

ひぢ-がね［肘金］(名) 開戸のくるゝの用具、鐵にて肘の如くに曲(マ)げて作り、戸に打附け、肘壺と相合ひて戸を開閉するもの。

ひぢ-き［肘木］(名) ㊀「うでぎ」に同じ。(曲枅)。㊁碾臼(ヒキウス)の把手。

(**ひ-ぢ-しや**)［被治者］(名)【法】權力關係に於て、治者の統治を受くるもの、即ち臣民。

ひ-ぢぢ［曾祖父］(名) 祖父又は祖母の父。

廿**ひぢ-ぢか**(名) なれ〳〵しく柔和にて人づきのよきこと。

ひぢ-つき［肘突］(名) 机の上に置きて、肘を突くための小さき布團。(肘托)。

ひぢ-つぼ［肘壺］(名) 開戸のくるゝの用具、鐵にて壺のやうに作り、柱に打附け、肘金と相合ひて戸を開閉するもの。

〜**ひぢ-でっぱう**（ウ-ホ）［肘鐵砲］(名) ㊀肘の端にて突くこと。㊁挑(イド)まれたるをはねつくること。

ひぢ-は・る（らりるるれれ）［肘張］(自、ら四) ㊀肘を張り出す。㊁意地を張る。

ひぢ-ブトン［肘布團］(名)「ひぢつき」に同じ。

廿**ひぢ-まき**［臂卷］(名)「くしろ」に同じ。

ひぢ-まくら［肱枕］(名) 己が肱を曲げて枕とすること。

廿**ひぢ-もち**［肘持］(名) 肘を張りて行くこと。

ひ-ぢやうぎ（ヂョ-ウ）［樋定木］(名) 樋を剗(ホ)りたる定木。

(**ひ-ぢゆう**)［比重］(名)【理】物體の重さとこれと等體積なる攝氏四度の水の重さとの比、金は一九・三、銀は一〇・五、銅は八・八、鐵は七・八、「アルミニウム」は二・七、水銀は一三・六、硫酸は一・八、硝酸は一・六、「アルコール」は〇・八なり。—**けい**［比重計］(名)【理】液體の比重を測るに用ふる器、上部は細くして目盛ありて中腹の膨大せる硝子管の下端に水銀を入れ、これを液中に直立して浮かしむる裝置のもの、重き液には沈むこと少なく輕き液には沈むこと深きが故に、液面が接する所の目盛を讀みて、其比重を知ることを得。—**ビン**［比重瓶］(名)【理】液體又は粉狀の物質の比重を測るに用ふる硝子瓶、瓶の重さと瓶に水を入れたるときの重さ及瓶に測らんとする物質を充たしたるときの重さとを知りて、比重を測る。

(**び-ちゆう**)［微衷］(名) (すこしの衷(マコト)の義)自分の心のたけの謙稱。

(**び-ちゆう**)［鼻柱］(名) はなばしら。

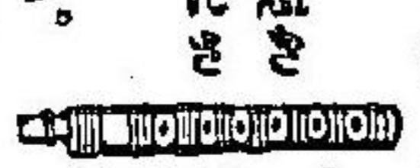
(**び-ぢよ**)［美女］(名) 容貌うつくしき婦人。

びぢよ-かね［鉸具］(名) 鐵環の中に前後に回轉する鐵片ありて、これに革紐の孔を通し緊めくゝる用とするもの、古く、鐙をつるに用ひ、近時は多く帶皮などに用ふ。ちからがね。かこ。

(**ひ-ぢよ-すう**)［被除數］(名)【數】或數にて除せらるべき數。

廿**ひちら**［饆饠］(名) 古昔の食物、麪にて作り餡を包みたるもの。

ひちりき［篳篥］(名) 雅樂の樂器、形短き笛に似て、表七孔、裏一孔、蘆の舌を上端にさし入れて縱に吹くもの。



［きりちひ］

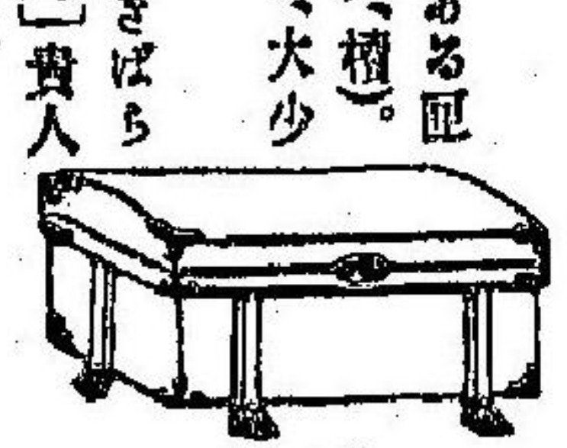
廿**ひぢ-り-こ**［泥］(名) こひぢ。どろ。ひぢ。

ひ-ぢりめん［緋縮緬］(名) 緋色の縮緬。

ひぢ-を・る（らりるるれれ）［肱折］(自、ら四) 肘を折りたらんやうに曲ぐ。

(**び-ぢん**)［微塵］(名) ㊀こまかきちり。㊁いとこまかきもの。みぢん。—**せつ**［微塵說］(名)【理】光の本性に關する說、發光體は極めて輕微なる一種の塵を發射するものにして、此の塵、眼を刺激して光を感ぜしむといふ、「ニウートン」の唱へたる說なれど、光に關する種々の現象發見せらるゝに及び、此說は破るゝに至れり。

ひつ［櫃］(名) 大形にして蓋(フタ)ある匣物の總稱。「長—」。「小—」。(匱、匣、櫝)。



［つひ］

(**ひつ**)［弼］(名) 彈正臺の次官、大少あり。

(**ひつ**)［蹕］(名) みちおさへ。さきばらひ。—**を とゞむ**［駐蹕］貴人の途中にとゞまりたまふにいふ。

(**ひつ**)［匹］(名) ㊀「ひき」に同じ。㊁たぐひ。ともがら。㊂つれあひ。めをと。㊃あひて。とも。㊄つゐ。そろひ。

ひ-づ［氷頭］(名) 鮭・鯨などの頭蓋骨、透明にして脆(モロ)く、刻みて食用に供せらる。「—膾」。

廿**ひ・づ**（ちぢづづるづれぢよ）［漬］(自、た上二) ぬる。ひたる。「袖ひぢて、むすびし水のこほれるを」(古)。

廿**ひ・づ**（ちぢづづるづれぢよ）［漬］(他、た上二) ぬらす。ひたす。

廿**ひ・づ**（でででづるづれでよ）［秀］(自、た下二) ひいづ。

(**ひつ-い**)［筆意］(名) 筆のさま。ふでのおもむき。

廿**ひ-つ-いで**［日次］(名) ひどり。ひなみ。

(**ひつ-えう**)（ヨ-ウ）［必要］(名) ぜひとも要あること。缺(カ)くべからざること。なくてならぬこと。—**ひん**［必要品］(名) なければ事のかける品。必要なる品。ぜひとも入る品。

(**ひっ-か**)［筆架］(名) ふでを横にしてかけおく具。ふでかけ。(筆床、筆格、筆峰、筆牀)。

(**ひっ-かう**)（カ-コ）［筆耕］(名) ㊀賃金を受けて寫字をなすこと。㊁文筆によりて衣食すること。—**けん でん**［筆耕硯田］(名) (筆をもて硯の田を耕す義)文筆を使用して生活を立て行くこと。

ひっ-かがみ［引屈］(名)「ひきかがみ」に同じ。

ひっ-かかり［引掛］(名) ひっかゝること、ひっかゝる所。

ひっ-かか・る（らりるるれれ）［引掛］(自、ら四) ㊀かゝりとゞまる。かゝりて離れず。㊁あざむかる。だまさる。

ひっ-か・く（かきくくけけ）［引搔］(他、か四) ㊀爪にて搔(カ)く。㊁とげなどにて搔く。㊂いひかゝりをつく。論點を見出す。

ひっ-か・く（けけくくるくれけよ）［引掛］(他、か下二) ㊀かけておく。かけて釣り下(サ)ぐ。㊁掛代金を拂はず。㊂〜たらしこむ。あざむく。㊃〜ぐいのみに飲む。

〜**ひっ-かけ**［引掛］(名) ㊀ひっかくること。㊁婦人の帶の結方、お太鼓に結ばずに垂らしおくもの。—**て**［引掛］(副) つゞけて。〜—**る**(他)「ひっつぐ」。

ひっ-かつ・ぐ（がぎぐぐげげ）［引擔］(他、か四) 勢あらくかつぐ。「かつぐ」の訛。

ひっ-かへし［引返］(名)「ひきかへし」に同じ。

ひっ-かへ・す（エス-カ）（さしすすせせ）［引返］(他、さ四)「ひきかへす」に同じ。

廿**ひ-つぎ**［日次］(名) 日ごとの貢物。

〜**ひ-つき**［火附］(名) 火のつきよきさま。「—のよくない炭」。

(**ひっ-き**)［筆記］(名) ㊀書き記すこと。書き取ること。かくこと。㊁海軍にて、諸給與に關する軍務に從事する判任官。—**しけん**［筆記試驗］(名) 答案を紙に書き著して出す試驗。

ひつぎ[日嗣](名)（日の位をつぎたまふ義）天皇の御位を申し奉る語。――**のみこ**[日嗣御子](名)皇太子を申し奉る語。

ひつぎ[棺](名)死者のかばねをさめ納れて葬る匱。くわん。（柩）。

⌒**ひっきやう**[畢竟](副)つまるところ。はては。所詮。

ひっきり[挽切](名)㊀ひっきること。㊁歯の細き小さなる鋸。

〰**ひっきる**（ら、り、る、る、れ、れ）[挽切](他,ら四)挽(ヒ)きて切りたつ。

ひつく（か、き、く、く、け、け）[乾附](自,か四)からびてかたまりつく。

⌒**ひつぐう**[匹偶](名)㊀つれあひ。めをと。㊁たぐひ。ともがら。㊂あひて。とも。

〰**びっくり**[喫驚](名)物事の意外なるにおどろくこと。――**ぎやうてん**[喫驚仰天](名)いたくおどろくこと。――**しゃっくり**(名,副)おどろきあわつるさまにいふ語。

ひっくりかへす（さ、し、す、す、せ、せ）[引繰返](他,さ四)くつがへす。顛覆せさす。

〰**ひっくりかへる**（ら、り、る、る、れ、れ）[引繰返](自,ら四)くつがへる。顛覆す。

〰**ひっくりひっくり**(名,副)「ひくひく」に同じ。

⌒**ひっくわ**[筆華](名)文詞のあや。

⌒**ひっくわん**[筆管](名)ふでのぢく。ふでづか。

ひつけ[火附](名)㊀人家に火をつくること。放火。㊁放火したる犯罪人。

ひづけ[日着](名)其日の中に先方に到着すること。

ひづけ[日附](名)文書を作成又は差出の日を記すこと。――**へんかうせん**[日附變更線](名)【地】航海上にて百八十度の經線の稱。地球の表面は經度を異にするに從ひて時刻を異にするが故に、東西に進航するもの、日子を一致せしむるため、西航して該線を過ぐるものは一日を省き、東航して該線を過ぐるものは一日を加へて日子を數ふるなり。

⌒**ひっけい**[必攜](名)必ず攜(タヅサ)ふべき必要のもの。

⌒**ひっけん**[筆硯](名)㊀ふでとすずりと。㊁書牘文にて、文筆にたづさはるもの、起居の義にいふ語。「――愈御清適」。

〰**びっこ**[跛](名)（足を引く義）ちんば。足なへ。

〰**ひっこぬき**[引拔](名)ひっこぬくこと。

〰**ひっこぬく**（か、き、く、く、け、け）[引拔](他,か四)ひきぬく。ぬきとる。

⌒**ひっさい**[筆才](名)文才あること。

ひっさく（か、き、く、く、け、け）[引裂](他,か四)ひきさく。

ひっさぐ（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）[提](他,か下二)㊀手にさげ持つ。㊁揭(カ)げ持つ。㊂携へ行く。

〰**ひっさらふ**（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[引攫](他,は四)つかみとる。うばひとる。

⌒**ひっさん**[筆算](名)㊀書くと數ふると。文筆と算用と。㊁數字を記して運算する算法。珠算の對。

⌒**ひっし**[必至](名)必ず其事情の到來すること。當然いたること。

⌒**ひっし**[必死](名)㊀必ず死すること。㊁死を決してなすこと。決死。㊂力のかぎりを盡くしてなすこと。「――となりてかせぐ」。

⌒**ひっし**[筆紙](名)㊀筆と紙と。㊁書き寫すこと。文句にあらはすこと。「――に盡しがたし」。

ひつじ[羊](名)【動】偶蹄類中、反芻類に屬する獸。體毛は柔軟にして卷縮す、性怯にして溫柔なり、牡には螺旋形の角あり、毛は毛織物の原料に供せられ、肉は美味にして食用に供せらる。（綿羊）。――**のあゆみ**[羊步](名)（屠所におもむく羊の歩の義）㊀あゆみのいとのろきこと。㊁次第に死に近づくこと。

ひつじ[未](名)㊀十二支の第八位。「えと」の條を見よ。㊁昔時の時刻の名、現今の午後二時。㊂方角の名、西南と南との間の方。――**さる**[未申](名)方角の名、西南。（坤）。

ひつじぐさ[睡蓮](名)【植】睡蓮科に屬する草、葉は楕圓狀箭形をなし、花は白色にして八個以上の瓣より成り、柱頭は數個に分裂す、觀賞用として栽培せられ、根は藥用に供せらる。

⌒**ひっしぼく**[筆紙墨](名)ふでとかみとすみと。

⌒**ひっしゃ**[筆者](名)筆を執りて書したる人。「さては――の誤か」。

⌒**ひっしゃ**[筆寫](名)かきうつすこと。

⌒**ひっしゃう**[筆匠](名)ふでを製造する職工。

⌒**ひっしゅつ**[筆述](名)文書にのべあらはすこと。

ひっす（せ、し、す、する、すれ、せよ）[必](自,さ變)かたくそれと定む。

⌒**ひっすう**[苾蒭](名)出家。沙門。

⌒**ひっすゐ**[必衰](名)かならずおとろふること。

⌒**ひっせい**[筆勢](名)筆のいきほひ。ふでづかひ。かきかた。（筆力）。

⌒**ひっせい**[筆生](名)文字を書きうつすことを專門とするもの。寫字生。

⌒**ひっせい**[畢生](名)一生涯。「――の目的」。

⌒**ひっせき**[筆蹟](名)書きたる文字のさま。ふでのあと。「――巧みなり」。

⌒**ひっせん**[筆洗](名)筆を洗(アラ)ふ器。ふであらひ。

⌒**ひっせん**[筆尖](名)ふでのさき。

⌒**ひっせん**[筆船](名)ふでいれ。

⌒**ひっせん**[筆戰](名)㊀互に文章によりて議論をたたかはすこと。㊁互に文章の優劣をあらそふこと。

⌒**ひつぜん**[必然](名,副)必ずしかあるべきこと。必ずしかあること。蓋然の對。

⌒**ひっそく**[逼塞](名)㊀つまりふさがること。㊁徳川時代に行はれし士族以上の閏刑、閉門より輕く、門を鎖(トザ)して白晝の出入を聽(ユル)さざりしこと、罪の輕重に由りて、其日數に長短ありき。㊂おちぶれて忍びかくれて居ること。

〰**ひっそり**(名,副)㊀ひそかにものしずかなるさまにいふ語。㊁しんとしてものおとの聞こえざるさまにいふ語。（寂寞）。

〰**ひつだう**[筆道](名)文字のかきかた。書法。

〰**ひったくり**(名)㊀ひったくること。㊁（其債務者を強制して財物をひったくることと職名と音の相近きよりもぢりていふ）執達吏をのゝしりていふ語。

〰**ひったくる**（ら、り、る、る、れ、れ）[引手繰](他,ら四)奪ひてひきとる。無理にとり去る。

ひったつ（た、ち、つ、つ、て、て）[引立](自,た四)きはだつ。はゆ。

ひったつ（て、て、つ、つる、つれ、てよ）[引立](他,た下二)引きて連れ立つ。無理に連れ行く。

〰**ひったてる**(他)前條の訛。

〰**ぴったり**(名,副)いさゝかの間隔もなく工合よく合ふさまにいふ語。

⌒**ひったん**[筆端](名)㊀筆のさき。㊁文章のいきほひ。「――不[illegible]」。

⌒**ひつだん**[筆談](名)互に意思を文字に書きあらはして對談すること。

⌒**ひっち**[筆致](名)ふでのおもむき。かきぶり。

‡**ひつぢ**[穭](名)刈(カ)りたる後に自生する稻。またばえ。おろかおひ。ひつぢぼ。（稻孫）。――**いね**[穭稻](名)前條に同じ。――**ぼ**[穭穗](名)前條に同じ。

⌒**ひっちう**[匹儔](名)たぐひ。ともがら。

⌒**ひっちゃう**[必定](副)かならず。きっと。たしかに。

⌒**ひっちゅう**[筆誅](名)其罪惡をかきたてゝ、これをせむること。

⌒**ひつぢん**[筆陣](名)文詞によりて議論の優劣をたゝかはさんとすること。

ひづつ[火筒](名)鐵砲。

‡**ひづつ**（た、ち、つ、つ、て、て）[漬](自,た四)「ひづ」に同じ。

〰**ひっつく**（か、き、く、く、け、け）[引附](自,か四)㊀ぴったりとつく。粘着す。㊁男女相通ず。

〰**ひっつける**（け、け、ける、ける、けれ、けよ）[引附](他,か下二)ひっつくやうにす。

〰**ひっつり**[引釣](名)やけど其他の傷のために、皮膚のちゞみつること。

⌒**ひってき**[匹敵](名)㊀たぐふこと。ならぶこと。㊁相手。對手。

〰**ひってん**(名)空虚なること。（皆無）。

⌒**ひつでん**[必傳](名)必ず傳はること。「――の作」。

⌒**ひっとう**[筆筒](名)ふでづゝ。筆たて。

⌒**ひっとう**[筆頭](名)㊀筆のさき。（筆鋒）。㊁かきだし。ふでがしら。――**さい**[筆頭菜](名)【植】「つくづくし」に同じ。

⌒**ひつどく**[必讀](名)㊀かならず讀むこと。㊁かならず讀むべきこと。

ひづなます[氷頭膾](名)一種の料理、氷頭(ヒヅ)を細かく削(ケヅ)りて膾としたるもの。

⌒**ひつば**[匹馬](名)たゞ一匹の馬。

⌒**ひっぱく**[逼迫](名)㊀さしつまること。餘裕なきこと。㊁資財乏しきこと。貧乏。

⌒**ひっぱふ**[筆法](名)筆のはこび。かきかた。

ひっぱり[引張](名)㊀ひっぱること。㊁路傍に居て、通行の男子をひっぱり強ひて婬をひさぐ女子。（東京の方言）。――**だこ**[引張蛸](名)一つのものを、二人以上にて互に自己のものとなさんとあらそふこと。

ひっぱる（ら、り、る、る、れ、れ）[引張](他,ら四)㊀引きのべはる。㊁引き寄す。㊂いざなひ引く。

⌒**ひっぷ**[匹婦](名)㊀ひとりの女子。㊁身分ひくきたゞの女。㊂物事にくらきたゞの女。

⌒**ひっぷ**[匹夫](名)㊀ひとりのをのこ。㊁身分ひくきたゞの人。㊂物事にくらきたゞの人。――**げらう**[匹夫下郎](名)いやしきをのこ、卑賤なるもの。――**のゆう**[匹夫勇](名)思慮なくして勢のみの強きを、度量せまき勇。――**ひっぷ**[匹夫匹婦](名)身分ひくきものども。又、敎育なきものども。愚夫愚婦。

⌒**ひっぽう**[筆鋒](名)㊀筆のはこびかた。文字のいきほひ。㊁文辭のはきき、文句のいきほひ。

⌒**ひっぼく**[筆墨](名)ふでとすみ。――**しやう**[筆墨商](名)筆墨のあきなひ。又、其人。

ひづめ[蹄](名)（蹄爪の義）牛・馬・羊などの趾端にある堅固なる厚き爪。

⌒**ひつめつ**[必滅](名)かならずほろぶること。「生者――」。

⌒**ひつもん**[蓽門](名)いばらにてつくりたる門。轉じて、いぶせきすまひ。

⌒**ひつよう**[必用](名)無くてかなはぬこと。缺(カ)くべからざること。（必要、必需）。

†ひ-づら［角髮］（名）「みづら」の轉、

（ひつ-らう［筆勞］（名）物を書く勞力、

（ひつ-りよく［筆力］（名）筆のちから、筆のいきほひ、

（ひ-てい［否定］（名）然らずとなすこと、非とすること。——めいだい［否定命題＝Negation proposition］（名）【論】主辭と賓辭との一致を拒否する命題、例へば「人性は善にあらず」「人生は幸福にあらず」の如きこれなり、

（ひ-てい-こつ［尾骶骨］（名）かめのを、

（ひ-てう［飛鳥］（名）空にとびかける鳥、

（び-てき［美的］（形）物事の美なるにいふ語、——くわいかん［美的快感］（名）美のために生ずる快樂の感、——くわんねん［美的觀念］（名）美に關する觀念、——せいくわつ［美的生活］（名）美を人生の中心とし、美によりて慰藉滿足を得んとする生活。

ひ-でり［旱］（名）（日照の義）夏季に永く降雨なくして暵天のつゞくこと。（旱魃）。——ぐも［旱雲］（名）ひでりの志るしの雲。——つゞき［旱續］（名）幾日となく旱のながくつゞくこと。

（ひ-てん［批點］（名）㊀詩歌文章を訂正し又は批評して志るす點。㊁詩歌文章の訂正又は批評、㊂訂正又は批評すべき箇處、きず、ひってん、（非點）、

（ひ-てん［飛天］（名）天人、天女。

（ひ-でん［秘傳］（名）人に秘してみだりに漏らさざる傳授。

（ひ-でん［飛電］（名）㊀いなづま、㊁到來せる電報、

（ひ-でん-ゐん［悲田院］（名）古昔、官より病人又は棄兒などを救ふために設けられし所。

ひと［人］（名）㊀動物中最も進化し最も高等なるもの、言語・思想・理性等他の動物の有し得ざる優秀なる性能を有し社會を組織す、にんげん、人類、㊁世人、「—のさがなさ」、㊂他人、㊃おとな、大人、成人、「—となる」、㊄然るべき人、相應の人、「—がない」、㊅ひととなり、こゝろだて、性質、「—が惡るい」、㊆【法】權利の主體たるもの、㊇†臣民、㊈をっと、「うちの—」、㊉意中の人、戀人、「—のこひしさ」、

（ひ-と［費途］（名）金錢をつひやすすぢみち。

（ひ-と［匪徒］（名）暴動をなすやから。

ひと［一］（數）數のなき數、ひとつ、「—たび」、「—つ」。

ひと—［一］（接頭）㊀或語に冠して「或」の意を表する語、「—とせ」、㊁或語に冠して「一度」の意を表する語、「—ねむり」、㊂或語に冠して、つねに異なる意を表する語、「—風かはりて」、㊃或語に冠して、みちたる意を表する語、㊄或語に冠して、たゞそればかりの意を表する語、「たゞ—こと」、

ひ-ど［肥土］（名）おもに砂土及粘土より成りたる土、耕作に適す。

ひと-あきなひ［人商］（名）人身の賣買、

ひと-あし［人足］（名）人のゆきき、「—志げきちまた」、

ひと-あれ［一荒］（名）ひと志きりあるゝこと、

ひと-い［一寐］（名）ひとねいり、

ひと-いき［一氣］（名）㊀いきをつかざること、㊁うんと力をこむること、㊂休まずに勢にまかせてつゞけてなすこと、㊃暫時、「—休んで」、

ひと-いだき［一抱］（名）ひとかゝへ、

†ひと-いへ［一家］（名）「いっか」に同じ。

（ひ-とう［臂頭］（名）ひぢのさき。

（ひ-どう［悲慟］（名）いたくかなしみなげくこと、

（ひ-どう［飛動］（名）とびうごくこと、

（び-とう［鼻頭］（名）はなのさき、

（び-どう［微動］（名）すこしくうごくこと、

ひと-うけ［人請］（名）㊀奉公人の身元引受、㊁他人の氣受。——志ようもん［人請證文］（名）奉公人の身元引受の證文、

†ひと-うと-し（くしきけれ）［人疎］（形、二）人に親しみつかず、人になれず。

ひと-えり［人選］（名）「にんせん」に同じ。

ひと-おと［人音］（名）人の居り又は來るおと、

†ひと-が［人香］（名）人の居るけはひ。

ひと-がき［人垣］（名）垣のやうに人の立ち並ぶこと、

ひと-かげ［人影］（名）人の影、人のすがた、

ひと-かさ［一嵩］（副）ひときは、一段、一層、

†ひと-がしら［人頭］（名）されかうべ、（髑髏）、

ひと-かず［人數］（名）㊀人の數、にんず、にんとう、㊁然るべき人の數、人なみ、

ひと-がた［人形］（名）㊀にんぎやう、でく、（偶人）、㊁祓へのかたしろ、「はらへさせ—のせて」、

†ひと-がたき［人敵］（名）かたきとなる人、

ひと-かた-ならず［不一方］（副）一通りならず、なゝめならず。

ひと-かたまり［一塊］（名）一つにあつまりかたまりたるもの。

ひと-かど［一角］（名）㊀一つのかど、「固くとも—あれや人心」、㊁或事柄、㊂一人前、「—の男」、

†ひと-かどひ［人勾引］（名）人をかどはかすもの、かどはかし。

ひと-かひ［人買］（名）かどはかしたる兒女などを買ふ惡人。

ひと-がま-し（しくしきしけれ）（形、二）㊀人たる資格あるらし、ひとらし。㊁人に知らるゝほどなり。

ひと-がら［人柄］（名）㊀人物の品位、志んぴん。㊁志んぴんよきこと。

---

†ひと-き［棺］（名）死骸を納むる匣、ひつぎ、くわんをけ、（柩）、

ひと-ぎき［人聞］（名）人に聞かるゝこと、外聞、「いとうかるべし」、

ひと-きは［一際］（副）一だん、一そう、ひと志ほ、

ひと-きり［一切］（名）㊀ひとつのきり、一段、㊁ひとところ。

ひと-きり［人斬］（名）㊀人を斬ること、㊁死罪の罪人を斬るもの、くびきり、（首切）、——ばうちやう［人斬庖丁］（名）刀の異稱、

〜ひと-ぎれ［人切］（名）㊀人の通らぬこと、㊁人の來ぬこと。

（ひ-とく［否德］（名）よからぬみもち、けがれたるおこなひ。

（び-とく［美德］（名）ほむべきおこなひ。よき德行。

ひと-くくり［一括］（名）一つにくゝること、又、一つにくゝりたるもの。

†ひと-くさ［人草］（名）もろ〳〵の人、あをひとくさ、（庶民、蒼生、黎民）、

ひと-くさ［一種］（名）ひといろ、一種類。†——もの［一種物］（名）ひといろのさかな、

〜ひと-くさい［人臭］（形）人らしく思ふにいふ語、

ひと-くさり［一闋］（名）一きり、一だんらく、

ひと-くせ［一癖］（名）㊀ひとつのくせ、㊁何處か精神の凡ならぬ所、

ひと-くち［一口］（名）㊀一度に食ふこと、「ふにはや—にくひてけり」、㊁少しく飲食すること、㊂一概に言ふこと、㊃一たび口を開くこと。——ばなし［一口噺］（名）いと手短なるはなし、

†ひと-ぐち［人口］（名）㊀人の評判、㊁人の口前、

†ひと-ぐに［他國］（名）餘所の國、ほかのくに、（異邦）。

†ひと-く-ひと-く（副）鶯の鳴聲。

†ひと-ぐま［人隈］（名）人の居らぬ所、

ひと-くるめ［一括］（名）一つにまとめくゝること、

ひと-げ［人氣］（名）㊀人の居るけはひ、㊁人らしきこと。

ひ-どけい［日時計］（名）日晷によりて時刻を測る器、盤に針を立て時の進むに隨ひ其針の影の移るを見て時刻を知る、（日晷儀）、

ひと-ごこち［人心地］（名）ひとごゝろ、

ひと-ごころ［人心］（名）㊀人間の心、ひとの心、㊁人情、物理、㊂平生の心、いきてゐるこゝち、㊃息を吹き返へすこと、よみがへること、「—がつく」、

ひと-ごと［人言］（名）㊀他人のいふことば、㊁世のうはさ、

ひと-ごと［人事］（名）㊀他人の事、㊁世上の事、

†ひと-このかみ［首長］（名）古昔、一群の人の長の稱、（君長、魁帥）。

ひと-ごみ［人込］（名）人の込み合ふこと、又、其場所。

〜ひと-ごろ［一頃］（副）ある時、一時、

ひと-ごろし［人殺］（名）人を殺すこと、又、人を殺したる人、

ひと-ごゑ［人聲］（名）人の發する聲、

ひと-さかり［一盛］（名）一時盛ること、暫時盛ること、

〜ひと-さかり［一盛］（副）ひところ、「櫻の花も—」、

†ひと-さし-の-および［人差指］（名）ひとさしゆび、

ひと-さし-ゆび［人差指］（名）拇指の次の指、（食指）、

ひと-ざと［人里］（名）人の住まふ所、

〜ひと-さま［人樣］（名）他人の敬稱、

†ひと-ざま［人狀］（名）ひとがら、「いかでかいなび申さん、—よき人におはすなといひ」、

〜ひと-さわがせ［人騷］（名）故なく他人をさわがすこと、

ひと-し（しくしきしけれ）［均］（形、二）㊀よくそろひてあり、とゝのへり、（齊）、㊁同一なり、おなじ、（等）、㊂平かなり。

ひど-し（くしきけれ）（形、一）㊀むごし、殘酷なり、（酷）、㊁はなはだし、過度なり、（甚）。

ひと-しきり［一頻］（副）ひとさかりは、「—降る雨」、

ひと-じち［人質］（名）誓約の保證に妻子などを質として遣はし置くこと、

†ひと-し-なみ-に［均並］（副）同じなみに、同じやうに。

〜ひと-じに［人死］（名）不時の出來事のために人の死にたること。

ひと-しほ［一鹽］（名）魚菜などに、淡（アハ）く鹽をひくこと、又、其物。

ひと-しほ［一入］（名）染物を初めて染液に入れひたすこと、

ひと-しほ［一入］（副）ひときは、一層、一段、

†ひと-し-む（めめむむるむれめよ）［均］（他、下二）ひとしからしむ、

ひと-ずくな［人少］（名）人手のすくなきこと、

ひと-すぢ［一筋］（名）㊀すぢの一本なること、㊁たゞ其物事にのみ心をとゞめて、他を顧ざること、——に［一筋］（副）ひたすらに、一途に、

ひと-せせり（名）人をせゝること、

†ひと-ぞう［一族］（名）「いちぞく」に同じ、

ひと-そぢ［一十］（數）「とを」に同じ、

ひと-たがへ［人違］（名）ひとちがへ、

ひと-たち［人達］（名）ひと〴〵。

ひと-だち［人立］（名）人の多くよりあつまりて立つこと、

†ひと-だ-つ（たちつつてて）［人立］（自、た四）人らしくなる。大人になる。成人す。

ひと-だね［人種］（名）㊀現在せる人數。㊁使用すべき人數。㊂「じんしゅ」に同じ。

ひと-だのみ［人頼］（名）他人を頼みにすること。

‡**ひと-だのめ**［人頼］（名）頼もしく思はしめて、其實は頼もしからざること。

ひと-だま［人魂］（名）夜間、空中を飛行する燐火、多くは色青白くして尾を引く、古來人のたまなりといひ傳へたり。（人魂火）。

‡**ひと-だまひ**［人給］（名）㊀從者に賜ひて所用せしめらるゝもの。㊁そへぐるま。（從乘、副乘）。

ひと-だまり［一溜］（名）暫時支（サ）へもつこと。

ひと-だまり［人溜］（名）人の集りひかふる所。

ひと-ちがひ［人違］（名）㊀あらぬ人を其人と思ひちがふること。㊁別人かと思ふほど容貌のかはるを。

〜**ひと-ちがへ**［人違］（名）前條に同じ。

ひとつ［一］（名）㊀現にそのもののみなること。單獨。㊁にかよふこと。類似。㊂おなじきこと。同一。「一事」。

ひと-つ［一］（數）數の始め。いち。

〜**ひとつ-あな**［一穴］（名）㊀おなじあな。又、あなをおなじうすること。㊁ぐるになりて事をたくらむこと。

——のきつね［一穴狐］（名）次條に同じ。

——のむじな［一穴貉］（名）ぐるになりて共に事をたくらむものゝ、しりていふ語。

ひとつ-がき［一書］（名）個條を分け、各個條の冒頭に一の字を掲げて書き分くること。又、其文書。

ひとつ-かまど［一竈］（名）㊀一個のかまど。㊁同じかまど。又、同じかまどにて煮炊（ニタキ）すること。

ひと-づき［人附］（名）㊀他人とのつきあひ。㊁他人の氣受。

ひと-づきあひ［人附合］（名）他人とのつきひ。（交際）。

ひとつき-おき［一月置］（名）「かくげつ」（隔月）に同じ。

ひとつ-くち［一口］（名）㊀たゞ一箇所の口。㊁同じやうに言ふこと。

ひとつ-ご［一子］（名）ひとりご。

ひとつ-すまひ［一住居］（名）㊀おなじすまひ。㊁同居。同棲。

ひと-づて［人傳］（名）㊀他人に託して言を傳ふること。ことづて。㊁他人に託して物をおくること。

ひとつ-ね［一寢］（名）共に一つの寢床にねること。

ひとつ-ば［一葉］（名）【植】（い）水龍骨科に屬する草、山中の陰地に生ず、葉は深綠色にして、下面に褐色の毛を具し冬猶ほ枯れず、根部を綰（ワガ）ねて檐（ホノ）などに懸け觀賞用に供す。いはかは。（石葦）。（ろ）「ばらん」の異稱。

ひとつ-ばし［一橋］（名）まるきばし、獨木橋。

ひとつ-びとつ［一一］（副）ひとつ每に。いち〳〵。

‡**ひとつ-びる**［獨子蒜］（名）【植】「にんにく」の古稱。

〜**ひとつぶ-えり**［一粒擇］（名）「ひとつぶより」に同じ。

ひとつぶ-がのこ［一粒鹿子］（名）かのこしぼりのいと細かきもの。

ひとつぶ-だね［一粒種］（名）ひとりご。

ひと-つぶて［人礫］（名）柔術などにて人を提（ヒト）へて礫の如く投（ナ）ぐること。

ひとつぶ-より［一粒擇］（名）㊀一粒づゝよること。又、其よりたるもの。㊁多くの中よりくはしくすぐりよりたること。又、其よりたるもの。

ひとつ-べっつひ［獨竈］（名）㊀たゞ一つつくり設けたるへっつひ。㊁剃髮したるものが髮を蓄（タクハ）へて未だ結髮する程に延びざるとき、たゞ月代（サカヤキ）及額（ヒタヒ）を剃りたるもの、稱。

ひとつ-ぼし［一星］（名）夕暮に始めて一つ現はれたる星、又、明（ア）方にたゞ一つ殘れる星。

‡**ひと-づま**［人妻］（名）他人の妻。

ひとつ-まつ［一松］（名）たゞ一本おひたてる松。（孤松）。

ひとつ-まみ［一撮］（名）㊀一つつまみたる程の量、轉じて、わづかの量。㊁敵をなぐりたふすに無造作なること。

ひとつ-み［一身］（名）長さ八尺乃至一丈一尺の鯨巾の布帛にて仕立つる衣服、一二歲の小兒の着るもの。

‡**ひとつ-むすめ**［一娘］（名）ひとりむすめ。

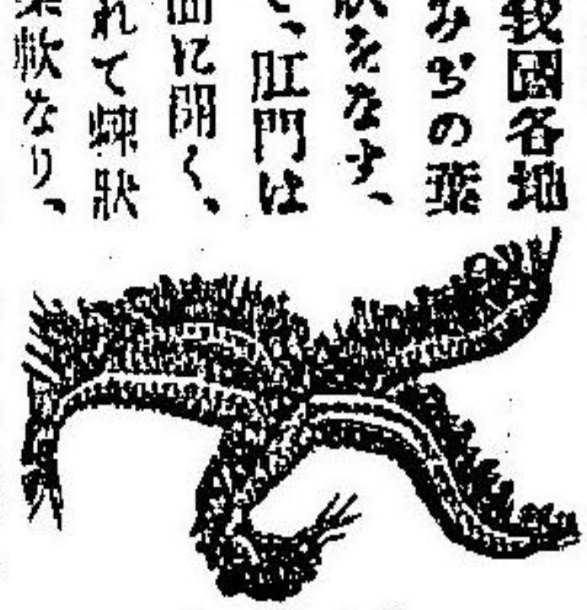
ひとつ-もの［一物］（名）㊀たゞそればかりのもの。㊁おなじきもの。

ひとつ-や［一屋］（名）山間又は野中などにたゞ一軒ある家。いっけんや。（孤屋）。

‡**ひと-つれ**［一連］（名）ひとくみ。一隊。

ひと-て［一手］（名）㊀一人の所業。獨力。㊁一つにまとむること。一括。㊂ひとくみ。一隊。㊃一回のわざ。「まひの一」「手品の一」。㊄一種類。

ひと-で［人手］（名）㊀他人のたすけ。㊁他人のわざ。「一にかゝる」。㊂はたらく人。㊃【動】海盤車類に屬する棘皮動物、我國各地の海底に產す、形恰ももみぢの葉の如く五腕射出して星狀をなす、口は腹面の中央にありて、肛門はこれに反對の方向、背面に開く、腹面は石灰質に蔽（オホ）はれて棘狀の突起を有し、背面は柔軟なり、貝などを捕食す、小なるは腕の長さ一寸に過ぎざれども、大なるは尺餘に達す。（海盤車）。



「ひとで」

ひと-で［人出］（名）人の出でつどふこと。

〜**ひと-でなし**［人無］（名）人たる資格なきもの、恩義又は人情を解せざるもの。

‡**ひと-てらふ**［人衒］（自、は四）「てらふ」に同じ。

ひと-とき［一時］（名、副）㊀しばらく、暫時。㊁ある時。

ひと-とせ［一年］（名、副）ある年。「一宇治の狩」。

ひと-となり［爲人］（名）其人の性質。うまれつき。たち。もちまへ。性狀。

ひと-と-な・る［成人］（自、ら四）㊀成長す。おひたつ。㊁いきかへる。よみがへる。

ひと-とほり［一通］（名）㊀よのつね。尋常。㊁全體の概略。

ひと-とほり［一通］（副）あらまし。「一御覽あれ」。

ひと-とほり［人通］（名）人の通行。人のゆきき。わうらい。

ひと-どり［人取］（名）人を捕（ト）へ食ふといふ怪物。

ひと-なか［人中］（名）衆人の中。

ひと-ながれ［一流］（名）㊀一本の旗。㊁‡同じ流儀。

ひと-なだれ［人頽］（名）群集せる人の押されてなだれ崩るゝこと。

ひと-なぶり［人嬲］（名）人をなぶること。

ひと-なみ［人波］（名）群集せる人のどよめくさま。

ひと-なみ［人並］（名）世間の人のなみ。普通一般の人のとほり。

‡**——なみ**［人並並］（名）前條に同じ。

‡**ひと-ならはし**［人習］（名）世間のならはし。

ひと-な・る［人馴］（自、ら下二）㊀交際に馴る。㊁獸類など人に馴れ親しむ。㊂禽獸など人になれつく。

ひと-にぎり［一握］（名）㊀一つにぎる程の量、又は大きさ。又轉じて、わづかなる量。㊁なぐりたふすにいと無造作なること。

ひと-ねむり［一眠］（名）㊀一たびねむりにつくこと。㊁眠りてすこしもさめざる間。

‡**ひ-どの**［樋殿］（名）かはや。せっいん。（廁）。

‡**ひと-のひ**［人日］（名）「じんじつ」に同じ。

ひと-のみ［一呑］（名）㊀一口にのむこと。㊁相手をものゝかずともせざること。

ひと-は-いさ（副）人は如何にあらうと。

ひと-ばえ［人映］（名）稚子などの他人の面前にてあまゆること。

‡**ひと-はぐさ**［一葉草］（名）【植】（い）桐の異稱。（ろ）萩の異稱。

〜**ひと-ばしら**［人柱］（名）古昔、橋の柱などを立てんとする時、河伯に犧牲として生きたる人を水底に埋めしこと。

‡**ひと-はた**［一端］（名）器に充たすこと。器一杯。

ひと-はだ［人膚］（名）人の膚、又、其暖み。

ひと-はな［一花］（名）㊀一輪の花。㊁一度の榮華。「一さかす」。

ひと-ばなれ［人離］（名）人の住居にはなれとほざかれる所。

ひと-ばらひ［人拂］（名）人を拂ひのけて近づけぬこと。

ひと-ひ［一日］（名）㊀いちにち。ひねもす。㊁ある日。ある時。㊂ついたち。朔日。

——おき［一日置］（名）「かくじつ」（隔日）に同じ。

——まぜ［一日雜］（名）前條に同じ。

ひと-びと［人人］（名）㊀多くの人。㊁各個の人。

‡**ひと-びと・し**［人人］（形、二）人らしくあり。ひとなみなり。

ひと-ひめぐり［太白神］（名）（一日廻りの義）陰陽家にて祭る神、日每に方角をかへてめぐる、金の精にして大將の象あり、兵凶を司るといふ。

ひと-ふで［一筆］（名）㊀特に書きつくること、「一啓上仕候」。㊁ちよっと書きつくること。㊂筆をやすめずに書き續くること。

ひと-へ［一重］（名）㊀そればかりにて重ならぬこと。（單）。㊁花瓣の一片づゝ、重ならずして花冠を形成すること。（單瓣）。㊂「ひとへぎぬ」の略語。

——ぎぬ［一重衣］（名）㊀一重にて裏のなき衣。ひとへもの。（單衣）。㊁裝束の下に重ねて着る衣。

‡**——ぐさ**［一重草］（名）【植】桔梗の異稱。

——ばおり［一重羽織］（名）裏をつけぬ羽織、夏季に着用するもの。

——ばかま［一重袴］（名）うらをつけぬ袴。

——もの［一重物］（名）「ひとへぎぬ」（一）に同じ。

ひと-へ-に［偏］（副）ひたすら、ひとすぢ、なにとぞ。

ひ-とぼし［火點］（名）㊀火をともすこと。㊁火をともす具。

——ごろ［火點頃］（名）燈火を點ずる頃、即ち夕暮。

——どき［火點時］（名）前條に同じ。

ひと-ま［人間］（名）人の居ぬ間、人の見ぬ間。

‡**ひと-まうけ**［人設］（名）人を待ち合はすこと。

ひと-まかせ［人任］（名）自分はなさずして、他人にのみまかせてなさしむること。

ひと-まく［一幕］（名）芝居などのひときり。

ひと-まじはり［人交］（名）他人とのまじはり、世間のつきあひ。（交際）。

ひと-ます［人枡］（名）軍勢をはかるために設けたる城の枡形。

ひと-まぜ［人雜］（名）人を雜（マ）ぜ加ふること。

ひと-まち［人待］（名）人の來るを待ちあはすこと。

——がほ［人待顏］（名）人待（マチ）するらし

き顔つき。

ひとまづ[一先](副) 何はともあれ。まづ。

ひとまとめ[一纏](名) 一つにまとむること。一つにくゝること。

ひとまね[人眞似](名) 他人のまね。人間のまね。

ひとまはり[一廻](名) ㊀一回めぐり行くこと。㊁一週間。七日間。

ひとまへ[人前](名) 諸人の見聞せる前。

ひとみ[瞳](名) (人見の義) 眼球の中の黒き部分。即ち瞳孔。(眸、睛)。

ひとみ[人見](名) よそのみるめ。他人の見る所。

‡ひとみ[一身](名) 全身。

ひとみごくう[人身御供](名) ㊀古昔、人身を生贄(イケニヘ)として神に供へしもの。(人牲)。㊁或人のために犠牲に供せられしもの。

ひとみしり[人見知](名) 小兒の見馴れぬ人を見るをきらふこと。

ひとみせ[人見](名) みえ。外見。見せびらかし。

ひとみち[一道](名) ㊀其外には道なきこと。㊁其事に一途になること。㊂‡よみぢ。黃泉。

ひとむかし[一昔](名) 十年以前。又、十七年以前。

ひとむき[一向](名) 其物事にのみ志を寄せて他を顧ざること。いってつ。——**に**[一向](副) ひたすらに。一途に。

ひとむら[一叢](名) 一かたまりに生ひ茂げること。

ひとむれ[一群](名) 人の群集せる一團。

ひとめ[人目](名) 他人の見る所。——**をつつむ** 人目に知られぬやうにかくす。——**をぬすむ** 人目につかぬやうにひそかになす。

ひとめ[一目](名) ㊀たゞ一度見ること。「——千本」。㊁‡眼中の全體。

ひ・どめ[火止](名) ㊀採取したる石油を精製して、揮發油及粘油を去り、引火點を高くならしむること。㊁「ひどめせきゆ」の略言。——**あぶら**[火止油](名) 「ひどめせきゆ」に同じ。——**せきゆ**[火止石油](名) 精製して揮發油及粘油を去りて引火點を高くしたる石油。

‡ひとめかし(形、二) 人らし。

‡ひとめかす(他、さ四) ひとめかしくす。

ひとめく(自、か四) 人らしく見ゆ。

ひとめぐり[一周](名) ㊀一回めぐること。㊁一周忌。

‡ひとめづつみ[人目包](名) 人目をつゝむ

ひとめのせき[人目關](名) 人目が憚(ハバカ)られて思ひのまゝにならぬことを關門の人を通さぬにたとへていふ語。人目の妨(サマタゲ)。

ひ・とも[火點](名) 「ひとぼし」に同じ。

ひともじ[一文字](名) 【植】葱(キ)の女房詞、其一音の語なるよりいふ。

ひとや[囚獄](名) (人屋の義) 罪人を入れこめてとゞめおく家。(牢屋、獄屋)。‡——**のつかさ**[囚獄司](名) 古昔、刑部省の被官にして、ひとやの事をつかさどりし職名。

ひとやど[人宿](名) 雇人の口入宿。

‡ひとやり[人遣](名) ㊀他人にせさすること。「——にする」。㊁人を遣りつかはすこと。‡——**ならず** 他人のしわざにあらず。

ひとよ[一夜](名、副) ㊀ひとばん。㊁ある夜。

ひとよぎり[一節切](名) 尺八に似て長さ一尺八分の笛。竹の一節を掛け切りてつくるより名づく。

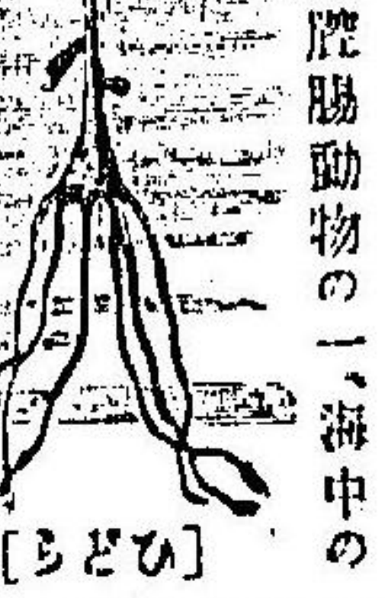
ひとよざけ[一夜酒](名) (一夜の間に造らるゝよりいふ) あまざけ。

ひとよせ[人寄](名) ㊀人を招き寄すること。㊁「ひとよせせき」の略言。——**せき**[人寄席](名) 人を寄せあつめて落語・音曲又は講談などを興行する所。よせ。よせせき。ひとよせ。よせ。——**だいこ**[人寄太鼓](名) 演藝又は興行物にて、其はじまる前に人を寄せあつむるために打ち鳴らす太鼓。

ひとよづま[一夜妻](名) ㊀始めて一夜逢ひたる女。㊁遊女。女郎。

‡ひとより(名) ひとたび。

ヒドラ[Hydra](名) 【動】腔腸動物の一、海中の岩石に附着し、一見海藻と誤らるゝこと多し、仔蟲は親蟲と分離せず、漸々其數を増加して結合體をなし樹形を呈す、外は硬質の皮を生じて全體を保護す。



[ひどら]

ひとらし(形、二) ㊀人間のやうにてあり。㊁人間たる資格あるらし。

ひ・とり[火採](名) 外側は木にして内側は陶器などにてつくり、銅の蓋(フタ)を掛けたる香爐。(薰爐)。

ひとり[一人](名) 一個の人。いちにん。

ひとり[獨](名) 自己のみにてあること。(孤)。

ひとり[獨](副) 其もの、みにて外になく。たゞ。

ひ・どり[日取](名) 日を定むること。

ひとりあるき[獨歩](名) つれ又はつきそひの人なく、たゞ單身にてあるくこと。

ひとりあんない[獨案内](名) 人に聞はずとも、讀めば獨にてわかるやうにつくりたる書物。

ひとりあんま[獨按摩](名) 自ら自分の體を按摩するに使用する器具。あんまいらず。

‡ひとりうど[獨人](名) ひとりもの。

ひとりかご[火採籠](名) 火採におほひて、衣をかけ香をたきこむるに用ふる籠。

ひとりがち[獨勝](名) 他人はことごとく負けて、たゞひとり勝を占め得たること。

ひとりぎめ[獨決](名) 自分一己の考にて事をきむること。

‡ひとりぐさ[日取草](名) 【植】「つゝじ」の異稱。

ひとりご[獨子](名) 兄弟も姉妹も無き子。たゞひとりの子。

‡ひとりごつ[獨言](自、た四) ひとりごとを言ふ。

ひとりごと[獨言](名) 相手なきに、獨りにてものいふこと。又、其語。

ひとりしめ[獨占](名) たゞ一人にて占むること。たゞ一人にてもっぱらにすること。

ひとりずまひ[獨住](名) たゞ單獨にてすむ

ひとりずまふ[獨相撲](名) ㊀相手なきに、ひとりにて相撲をとる眞似をなすこと。㊁相手なきに、ひとりにて意氣張りきそふこと。

ひとりずみ[獨住](名) ひとりずまひ。

ひとりだち[獨立](名) ㊀自分一己の力にて立つこと。他人の力によらずして立つこと。どくりつ。㊁つれのなきこと。味方のなきこと。

ひとりたび[獨旅](名) 單身にて旅行すること。つれなきたび。

ひとりでに[自](副) おのづから。自然に。

ひとりなき[獨泣](名) たゞひとりにて泣くこと。

ひとりね[獨寐](名) ひとりにて寐ること。(孤眠)。

(ひとりのみこみ)[獨呑込](名) よく物事をたしかめずに、自分一己の了見にて然かあるべしと早呑込すること。

ひとりひとり[一人一人](副) ひとりづゝ。ひとりごとに。

ひとりふし[獨臥](名) ひとりね。

ひとりぶたい[獨舞臺](名) ㊀其役者たゞ一人舞臺にありて伎を演ずること。㊁其人の行動の群にすぐれて最も映(ハ)えある場合。己れ一人にて思ふ存分にふるまひ得る場合。

ひとりまけ[獨負](名) 他のものはことごとく勝ちたるに、たゞひとり負けをとること。

ひとりまなび[獨學](名) 「どくがく」に同じ。

ひとりまへ[一人前](名) いちにんまへ。

ひとりみ[獨身](名) 「どくしん」に同じ。

ひ・とりむし[火取蟲](名) 夏夜の燈火に集まる蛾。(燈蛾)。

ひとりむしや[一人武者](名) 最もすぐれたる武者。

ひとりむすこ[一人息](名) たゞ一人のむすこ。

ひとりむすめ[一人娘](名) たゞ一人の娘。

ひとりもの[一人者](名) 其人のみにして他に家族なきもの。どくしんもの。

ひとりれんが[獨連歌](名) 一人にてする連歌。

ひとりわらひ[獨笑](名) 相手なきに笑ふこと。

ひとりゐ[獨居](名) たゞひとりにて居ること。

ひとりゑみ[獨笑](名) 相手なきにゑむこと。

ひとりをとこ[一人男](名) 男のひとりもの。無妻者。

ひとりをんな[一人女](名) 女のひとりもの。無夫者。

ひ・どる[日取](他、ら四) 日をえらび定む。

ひ・どる[火取](他、ら四) 火にあぶる。

‡ひ・とるたま[火取玉](名) 上古、光線を集めて、其焦點より火を取るに用ひし珠。(火珠、火精)。

‡ひとるゐ[一類](名) ㊀同じ種類。㊁「いちぞく(一族)」に同じ。

‡ひとわき[人別](名) 人々の差別。

ひとわけ[人別](名) 人々によりて區別すること。

‡ひとわたす[人濟](他、さ四) 濟度す。

ひとわたり[一應](副) ひとたび。いちど。いっくわい。

ひとわらはれ[人笑](名) 人に笑はるゝこと。世の笑ひぐさ。

ひとわらひ[人笑](名) 前條に同じ。

‡ひとわらへ[人笑](名) ひとわらはれ。

‡(ひとわる)[人惡](名) 性質あしきこと。又、其人。

‡ひとわろし[人惡](形、二) ㊀外聞わろし。㊁性質わろし。

‡ひとをれ[一折](名) ひとふし。

ひな[雛](名) ㊀孵化して間もなき鳥の子。ひよこ。ひゝな。ひいな。㊁ひなまつり。ひなあそび。

‡ひな[鄙](名) 都外の地。ゐなか。

ひな——[雛](接頭) 或語に冠して、小さき意を表する語。「——人形」。

ひなあそび[雛遊](名) 「ひひなあそび」に同じ。

(ひなうるゐ)[被嚢類](名) 【動】脊椎動物に近き一種の動物。「ほや」これに屬す。海濱の岩石等に附着し、體の外面は革の如く硬(カタ)き皮又は白き柔軟の皮をもって被(オホ)はる。二孔ありて水は其一より入り他の一より出づ。雌雄同體にして幼蟲は蝌斗の狀をなし成長後は退化す。

ひなか[日中](名) ひるなか。

ひなが[日永](名) 日中の永きこと。

ひながた[雛形](名) ㊀物の形を小く象(カタド)りたるもの。㊁書式。

ひなぎきやう[雛桔梗](名) 【植】桔梗科に

屬する草、原野に自生す、莖の形なでしこに似て、稍や細く、花は小形青紫色にして桔梗に似る。いはぎきやう。ひめぎきやう。（細莖沙參）。

ひな-げし【雛芥子】（名）【植】罌粟科に屬する草、有毛にして葉は羽狀に分裂す、花は小形にして美麗なり、觀賞用として栽培せらる。（美人草）。

ひな-さき【雛尖】（名）㊀烏帽子の眉の中央。㊁女子の陰部の陰孔の突肉。（吉舌、陰挺）。

ひ-なし【日濟】（名）㊀借金を日每に若干宛返濟すること。㊁「ひなしがね」の略言。——**かし**【日濟貸】（名）日濟金を貸す人。——**がね**【日濟金】（名）日每に若干宛返濟せしむる約定の貸金。

++**び-なし** くしきけれ【便無】（形、二）びんなし。

ひな-た【日向】（名）日の照る處。——**くさい**【日向臭】（形）日向に乾せし衣服・布團などの臭にいふ。——**ぼかう** ボコウ（名）次條に同じ。——**ぼこり**（名）日向に出て、暖まること。（負暄）。——**ぼっこ**（名）前條に同じ。

++**ひなつ-ぼし**【熒惑星】（名）「けいわくせい」の一名。

ひな-づる【雛鶴】（名）鶴の雛。

++**ひな-さ**【曉】（名）あかつき。あけがた。

ひな-どり【雛鳥】（名）鳥のひな。

ひな-の-せっく【雛節句】（名）三月三日の稱、雛祭をなすよりいふ。

++**ひな-の-みやこ**【鄙都】（名）古昔、諸國の國府の稱。

ひ-なは ナワ【火繩】（名）竹幹の肉を細かく叩（タタ）き碎（クダ）きたるものをなひてつくりたる繩、火を點じおく用となすもの。——**づつ**【火繩筒】（名）火繩の火にて、導火線に點火し彈丸を發射する裝置の銃砲。

++**ひな-ぶ** ぶびぶぶれぶよ【鄙】（自、は上二）ゐなかめく、

ひな-ぶり【夷振】（名）上古、面姿の風に因りて分かちたる歌曲の一曲。（夷曲）。

++**ひな-べ**【鄙邊】（名）ゐなかの方。

++**ひなべ-や**【並屋】（名）ならべてたてたる屋。

++**ひ-なほ-る** らりるるれれ【日直】（自、ら四）天氣なほる。日和になる。

ひな-まつり【雛祭】（名）「ひひなまつり」に同じ。

ひ-なみ【日並】（名）㊀日每にものすること。㊁日の順序。（日次）。

ひな-や【雛屋】（名）ひなを飾る小さき屋。

ひな-やしろ【雛社】（名）ちひさきほこら。

ひ-ならず【不日】（副）ちかぐ〳〵のうちに。とほからず。ふじつ。

（**ひ-なん**【非難】（名）缺點又、過誤などをとがめ責むること。そしり難ずること。（批難）。

（**ひ-なん**【避難】（名）災難をさくること。——**ち**【避難地】（名）避難してある地。

（**び-なん**【美男】（名）容貌美なる男子。びだん。——**かづら**【美男葛】（名）【植】「さねかづら」の一名。——**し**【美男子】（名）「びなん」に同じ。

（**ひ-にく**【皮肉】（名）㊀肉と皮と。㊁骨身にこたふるやうに鋭利なる非難をなすこと。㊂意地惡くとほまはしに反對すること。㊃彼此入りくみたる内部の關係。「——に入りこむ」。

（**ひ-にく**【肥肉】（名）こえたる肉。

（**ひ-にく**【飛肉】（名）鳥の稱。

（**ひ-にく**【腓肉】（名）ふくらはぎの肉。

（**ひ-にく**【髀肉】（名）もゝの肉。——**の-たん**【髀肉歎】（名）（蜀の劉備の語に出づ）久しく馬に乘りて戰場に赴かざるより、もゝの肉のふとりたるをなげくこと、即ち、功名を立て若しくは技倆を試（ココロ）

さん程の事あれかしと待つのみにて、空しく時日を經過するをなげくこと。

++**ひ-に-けに**【日每】（副）ひごとに、まいにち。

++**ひ-に-そひ-て** イーソ【日添】（副）時日を經過するにつれて。

++**ひ-に-そへ-て** エーソ【日添】（副）前條に同じ。

ひ-に-ひ-に【日日】（副）㊀にちにち。每日。㊁日を逐（オ）ひて。

ひ-に-まし【日增】（副）日をおひてまさりゆくさまにいふ詞。

（**ひ-にん**【非人】（名）㊀罪人。㊁乞食。

（**ひ-にん**【否認】（名）是認せざること。みとめざること。

++**ひ-ね**【晩稻】（名）おくての稻。

ひ-ね【陳】（名）㊀前年にとりたるふるき穀物。㊁賣れ殘りて古びたるもの。

「**ひね-くる** らりるるれれ【弄】（他、ら四）㊀手さきにてひねり弄ぶ。㊁すねまがる。㊂いろ〳〵とのべいふ。「小理窟を——」。

ひね-ごめ【陳米】（名）米の陳（フル）となりたるもの。

ひ-ねずみ【火鼠】（名）支那にて、南荒の外なる火山に住めりとなす獸、其毛を取りて火浣布を織るといへり。

（**ひ-ねつ**【比熱】（名）【理】物體の溫度を一度だけ昇するに要する熱量と此物體と等質量の水の溫度を一度だけ昇するに要する熱量との比、即ち鐵は〇・一一、銅は〇・〇九三、銀は〇・〇五六、金は〇・〇三二、水は一、「アルコホル」は〇・五八、硫酸は〇・三三、水素は三・四一、水蒸氣は〇・四八、空氣は〇・二四、而して氣體には壓力一定なるときの比熱即ち定壓比熱と、體積一定なるときの比熱即ち定積比熱とあれど、定壓比熱は一般に定積比熱の一・四倍に

して、上に掲ぐる氣體の比熱は定壓比熱を示すものなり。

（**び-ねつ**【微熱】（名）すこしの熱。

++**ひね-もす**【終日】（名、副）朝より夕まで。終日。「ひるは——」。

ひね-り【拈、捻、撚】（名）㊀ひねること。ねぢまはすこと。㊁をでからみの類。ねぢ。㊂尋常と違ひてねぢれたること。㊃包紙の上部をひねりたる祝儀又は賽錢。——**いだ-す** さしすせ【拈出】（他、さ四）さま〴〵に考へてつくり出す。——**どめ**【拈止】（名）「いときり」に同じ。——**ぶみ**【拈書】（名）㊀數枚の短籍（タンザク）又は紙にそれ〴〵或事を記し、これを別々に拈りて鬮（クジ）とし、探りとりて占（ウラナ）ふもの。もみくじ。（短籍）。㊁卷きて其端を拈りたる手紙。

ひね-る らりるるれれ【拈、捻、撚】（他、ら四）㊀指の端にて撚（ヨ）ぢまはす。㊁めぐらす。まはす。「智な——」、「稻をひねる」。

「**ひね-る** らりるるれれ【拈、捻、撚】（自、ら四）故意に尋常と異なりたるさまをなす。

（**ひ-ねん**【比年】（名、副）としどし。年々。「——登らず」。

ひ-の-あし【日脚】（名）「ひあし」に同じ。

ひ-の-いへ エイ【火宅】（名）「くわたく」に同じ。

ひ-の-いり【日入】（名）日の西に入る頃。ひぐれ。

ひ-の-うち【日中】（名）ひるま。につちゆう。

ひ-の-え【丙】（名）（火兄の義）十干の第三位。

++**ひ-の-おまし**【晝御座】（名）古昔、主上の晝間御座ありたる所、淸涼殿にあり。

ひ-の-かみ【日神】（名）天照皇大神を申し奉る語。

ひ-の-き【檜木】（名）「ひ」（檜）に同じ。——**づな**【檜木綱】（名）檜木の樹皮にてつくりたる綱。——**ぶたい**【檜木舞臺】（名）㊀檜木にて張り

たる歌舞伎芝居の舞臺。㊁其道に長じたる者の自家の伎倆を研（ミガ）き又は見はすに適當なる所。

ひ-の-くち【樋口】（名）「ひ」（樋）（一）に同じ。——**まもり**【樋口守】（名）【動】「みぞごひ」の一名。

ひ-の-くるま【火車】（名）㊀地獄にありといふ上に火の燃（モ）ゆる車、罪ある亡者を載（ノ）せて責めつゝひくといへり。㊁因果のめぐり來ること。㊂家政の極めて苦しきこと。

ひ-の-くれ【日暮】（名）ゆふぐれ。ゆふかた。

ひ-の-こ【火粉】（名）火事などの火の飛び散るもの。（火花、飛火、火片）。

++**ひ-の-こし**【火輿】（名）古昔、葬禮に用ひし火を點じたる輿。

++**ひ-の-こと**【火事】（名）「くわじ」に同じ。

ひ-の-ざう ゾウ【脾臟】（名）「ひ」（脾）に同じ。

++**ひ-の-さうぞく** ソウゾク【晝裝束】（名）ひるまの束帶。ひのよそひ。とのゐ裝束の對。

++**ひ-の-さわぎ**【火騷】（名）くわじ。（火災）。

ひ-の-し【火熨斗】（名）底の滑かなる金屬製の器、中に火を入れ、其底をあて、布帛の縮みを熨（ノ）すに用ふるもの。

ひ-の-した【日下】（名）あめがした。——**かいさん**【日下開山】（名）武藝又は相撲（スマフ）などにて、天下に敵なきものゝ稱。

++**ひ-の-たて**【日縱】（名）東西に通ずる大路。

++**ひ-の-ためし**【氷様】（名）古昔、元日に宮内省より禁中へ氷室の氷の厚薄を奏聞せしこと、其厚薄によりて、年の豐凶を占へり。——**の-そう**【氷様奏】（名）前條に同じ。

ひ-の-つじ【日辻】（名）まひる。ひるのもなか。

ひ-の-て【火手】（名）火の燃（モ）え上がるさま。「——

があがる」。

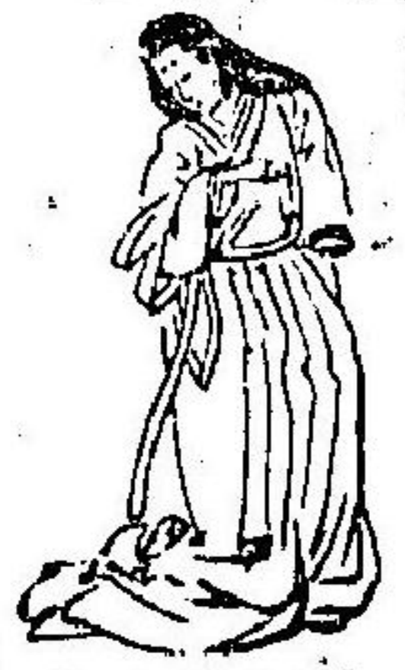
ひ-の-で【日出】（名）朝日の昇（ノボ）り出づること。

ひ-の-と【丁】（名）（火弟の義）十干の第四位。

++**ひ-の-との**【晝殿】（名）晝間ゐる殿（トノ）。

++**ひ-の-ぬき**【日緯】（名）南北に通ずる大路。

ひ-の-はかま【緋袴】（名）緋色の精好（セイカウ）にて仕立てたる袴、女官の着用するもの。



［ひのはかま］

ひ-の-べ【日延】（名）限れる期日を延（ノ）ばすこと。延期。

ひ-の-まる【日丸】（名）太陽の象、軍扇又は旗のしるしとするもの。——**の-はた**【日丸旗】（名）「につしやうき」（日章旗）に同じ。

ひ-の-み【火見】（名）「ひのみやぐら」の略言。

++**ひ-の-みかげ**【日御蔭】（名）天皇のおはします御殿。

++**ひ-の-みかど**【日御門】（名）前條に同じ。

++**ひ-の-みこ**【日御子】（名）ひつぎのみこ。

++**ひ-の-みつぎ**【日貢】（名）每日たてまつるみつぎ。

ひ-の-みはた【日御旗】（名）日丸の國旗。

++**ひ-の-みや**【日宮】（名）「ひのみかげ」に同じ。

ひのみ-やぐら【火見櫓】（名）火災のとき、登りて其遠近を望見する櫓。ひのみ。（望火樓）。

++**ひ-の-みやびと**【日宮人】（名）おほみやびと。

ひ-の-め【日目】（名）目に見る日の光。

ひ-の-もと【火元】（名）火災のもと。ひもと。

ひ-の-もと【日本】（名）我國の一名。

ひ-の-もの【火物】（名）煮（ニ）又は燒きたる食物。——**だち**【火物斷】（名）火物を斷（タ）ちて食せざること。

++ひ-のよそひ［晝裝］（名）ひのさうぞく。

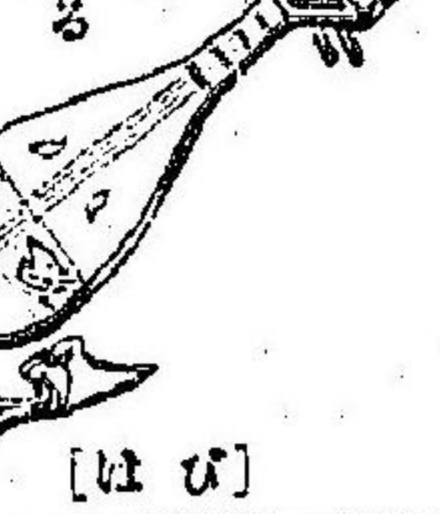
ひは［鶸］（名）「ひわ」の轉。「―色」「―茶」。

ひ-ば［檜葉］（名）㊀【植】「ひのき」又は「あすはひのき」の一名。㊁檜の葉。

ひ-ば［乾葉］（名）大根の葉を乾（ホ）したるもの。

（ひ-ば［肥馬］（名）こえふとりたるうま。

（び-は［琵琶］（名）一種の樂器。體は楕圓形にして扁（ヒラ）く北上部狹まりて棹をなし、形恰も杓子の如し、これに四絃を張り四柱を設く、棹の頂（イタヾキ）の轉手のある所は後に反（ソ）る、抱きて彈ずるもの。よつのを。


[びは]

（び-は［枇杷］（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は長大にして毛を有し常綠なり、雌蕊は五個あり子房は結合して一體をなす、果實は圓形にして少毛を有す、初夏の頃熟して黄色を呈し、食用に供せらる。

（ひ-はい［疲憊］（名）つかれおとろふるを。くたびれよわるを。

（ひ-ばい-ひん［非賣品］（名）賣らざる品。

（ひ-ばう［庇保］（名）かばひたすくるを。

（ひ-はう［飛報］（名）いそぎのしらせ。

（ひ-はう［比方］（名）くらぶるを。くらべ。

（ひ-はう［祕方］（名）藥劑の祕密の處方。

（ひ-ばう［誹謗］（名）そしるを。惡口。「讒謗」。

（ひ-ばう［非望］（名）分際をこえたるのぞみ。

（び-ばう［美貌］（名）うつくしき容貌。

（び-ばう［微茫］（名）はっきりせざるを。かすか。

（び-ばう［備忘］（名）忘るるときの用意。――ろく［備忘錄］（名）忘るるときの用意にかきおきしたるもの。

（び-ばう-じん［未亡人］（名）夫（ヲツト）死して後に殘（ノコ）れる妻。やもめ。

（び-は-えふ-たう［枇杷葉湯］（名）枇杷の葉の毛を去りて乾したるものを主劑として煎じ出したる汁、暑氣拂に用ふるもの。

ひ-ばかり［日計］（名）【動】蛇の一種、全體褐色なり、體長大なるは四尺に達す、我國諸所に棲息す。

++ひ-はぎ［引剝］（名）おひはぎ。おひおとし。

（ひ-はく［飛白］（名）㊀かすりたるさまの模樣。㊁漢字の一體、筆蹟のかすれたるもの、形は八分に類す、後漢の蔡邕の創始にかゝるといふ。

（ひ-ばく［飛瀑］（名）「ひぼく」の訛。

ひ-ばこ［火箱］（名）爐の底とする箱。

ひ-ばこ［樋箱］（名）厠の床の孔にはむるわく。

び-は-ごと［琵琶琴］（名）琵琶の異稱。

ひ-ばし［火箸］（名）おきびなどを挾（ハサ）むに用ふる金屬製の箸。（火筯）。

ひ-ばしら［火柱］（名）空中に赤氣立ちのぼりて柱のさまに見ゆるもの。

ひ-はだ［檜皮］（名）㊀まいはだ。㊁「ひはだいろ」の略言。㊂かさねの色目、表は黑みたる蘇芳にして裏ははなだなるもの。――いろ［檜皮色］（名）蘇芳に黑みある色。――ぶき［檜皮葺］（名）㊀檜皮にて屋根を葺（フ）くを。又、檜皮にて葺（フ）きたる屋根。㊁檜皮にて屋根を葺くを業とするもの。――や［檜皮屋］（名）屋根の檜皮葺なる家。

ひ-バチ［火鉢］（名）炭火を貯へおく器。「火桶」。

（ひ-はつ［被髮］（名）髮をとき亂してあるを。

ひ-ばな［火花］（名）㊀火の飛び散るもの。ひのこ。㊁【理】「レイデン」瓶若しくは感應「コイル」によりて放電するとき發する火光、兩極近きときは直線狀なれど、兩極少しく遠きときは枝狀又は鋸齒狀をなす、電光（イナヅマ）は即ち空中の電氣が放電するときの火花なり。――を-ちらす　はげしく切り結ぶ。轉じて、はげしく相爭ふ。

ひ-ばば［曾祖母］（名）ひいばば。

び-は-ひき［琵琶彈］（名）琵琶を彈（ヒ）くもの。

（ひ-はふ［非法］（名）法にたがふを。

（び-は-ほふ-し［琵琶法師］（名）びはを彈ずる盲者。

ひ-はら［脾腹］（名）よこはら。

ひ-ばり［雲雀］（名）【動】燕雀類中ひばり科に屬する鳥、雀に似て稍や大形なり、頭・背は暗灰色にして胸・腹は灰白色、後趾の爪は長直なり、地上に巣を構ふ、春季晴朗の日には飛揚してよく囀（サヘヅ）る。（告天子、天鷚）。――げ［雲雀毛］（名）馬の毛色、黄白雜りたるもの。――ぶえ［雲雀笛］（名）雲雀の囀る如き音を出す笛。

（ひ-はん［批判］（名）確實なる批評又は研究を遂（ト）げて後、其物事の判斷をなすを。

（ひ-ばん［非番］（名）當番にあらざるを。

（ひ-ひ［霏霏］（名、副）雪又は細雨のふるさまにいふ語。

（ひ-ひ［比比］（名、副）ならびつらなるさまにいふ語。「―皆是」。

（ひ-ひ［狒狒］（名）㊀【動】猿猴類に屬する獸、かたち人類に似たれども口吻突出して黃色の髯生ず、形貌獰惡にして大なるものは身長五尺に達す、性兇暴にして多力なり、多く「アフリカ」に產し深山に棲む。㊁淫慾の盛んなる人をのゝしりていふ語。

（ひ-ひ（名）㊀笑ふ聲。㊁泣く聲。

ひび［皹］（名）寒さにおかされて、皮膚に生ずる細かき裂目。ひみ。

ひび［罅］（名）㊀細かく割れ裂けたる瑕。ひゞれ。ひゞき。ひゞり。（罅痕）。㊁罪惡を犯したると

ひび（名）海苔を寄するため海中に立つるそだ。

ひ-び［日日］（名、副）にちにち。每日。

（び-び［微微］（名、副）さゝやかなるさま又はちひさきさまにいふ語。

（び-び［娓娓］（名、副）順を追ひてこまかく說くさまにいふ語。

（び-び［亹亹］（名、副）つとめて倦まざるさまにいふ語。

ひびか-す（さしすせ）［響］（他、さ四）㊀ひゞくやうにす。㊁ほのめかす。

ひびき［響］（名）㊀ひゞくを。とゞろくを。㊁反響。㊂音の末尾、即ち餘韻。㊃傳はりおよぶ震動。㊄きこえ。評判。㊅さしひゞき。影響。㊆ひゞれ。ひゞ。（璺）。――いし［響石］（名）鸚鵡石の類。――め［響目］（名）ひゞの入りたるすぢ。きず。（璺目）。――の-こゑ-に-おう-ずる-が-ごとし［如響應聲］應對の極めて神速なるにいふ。

ひび-く（かきくけ）［響］（自、か四）㊀音聞こえわたる。音とゞろく。㊁反響す。「山に―」。㊂頭を生ず。㊃震動傳はりおよぶ。㊄評判す。うはさす。㊅音に聞こゆ。世に聞こゆ。「名聲世に―」。㊆通ず。こたふ。㊇ひゞを生ず。

++ひび-く（かきくけ）［疼］（自、か四）ひりひり痛む。ひゞらく。

++ひ-ひこ［曾孫］（名）孫の子。ひまご。

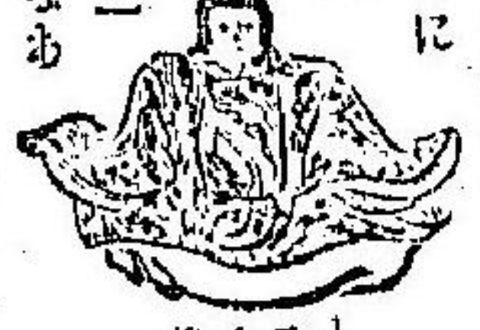
（ひ-ひ-さう［非非想］（名）【佛】（い）有無に執着する想念なけれども尙如を求むる想念あるを。（ろ）無色界の頂上。

び-び-し（しく、しき、しけれ）［美美］（形、二）はなやかなり。うるはし。うつくし。

++ひ-びつ［火櫃］（名）火鉢の類。

ひ-ひと-ひ［日一日］（名、副）其日一日。ひねもす。ひすがら。ひもすがら。

ひひな［雛］（名）女兒の玩具、紙又は土にて造りたる小さき人形、多くはこれに衣を着せて飾る。――あそび［雛遊］（名）ひゝなに適應したる種々の調度を揃へ飾りてもてあそぶを。++――きぬ［雛衣］（名）ひゝなに着する衣。――まつり［雛祭］（名）三月三日に女兒が酒飯を供してなすひゝなあそび。++――や［雛屋］（名）ひゝなを飾る小さき家。


[ひひな]

++ひひめ-く（かきくけ）［冲］（自、か四）「ひひる」に同じ。

（ひ-ひやう［批評］（名）㊀非を擧げて評するを。缺點を摘（ツ）みて評するを。㊁善惡を判斷するを。美醜を評價するを。――か［批評家］（名）批評する人。又、批評に長じたる人。――がん［批評眼］（名）批評の眼識。

（ひ-びやう-ゐん［避病院］（名）流行病の患者を收容する病院。

ひび-やき［罅燒］（名）釉（クスリ）にひゞを細かく見（ア）はして燒きたる磁器。

++ひびらか-す（さしすせ）（他、さ四）ひゞらくやうにす。

ひひらぎ［柊］（名）【植】木犀科に屬する木、葉は厚く常綠にして端末の針狀をなす大形の鋸齒を有す、花は白色にして果實は紫黑色なり、材は算盤珠などに用ひらる。（杠谷樹）。

++ひびら-く（かきくけ）（自、か四）㊀すこしく震ひ動く。ふるふ。（顫）。㊁ひりひり痛む。うづく。（疼）。

ひびり［皹］（名）ひゞ。

ひひ-る（らりるれ）［冲］（自、ら四）ひら〳〵と飛び上がる。高く飛び上る「天に―」。

ひひる［蛾］（名）【動】（い）火取蟲。（ろ）蠶蛾。

ひ-ふ［被風］（名）形は羽織に似て衽（オクミ）深くしてまるえりなる衣服、表衣の上に着るもの。

（ひ-ふ［皮膚］（名）動物體の表面をおほひ包む薄き膜、高等動物のは表皮と眞皮とより成る。

（ひ-ふ［鄙夫］（名）性質のいやしきをとこ。

ひ-ぶ［日步］（名）一日の利息の割合、銀行などにては、元金百圓に對し利息何錢といふべきを、略して日步何錢といふ。

ひ-ぶ［日賦］（名）借金などを日每に返しゆくを。又、其借金。ひなし。

（ひ-ぶ［匪武］（名）武事に長ぜざるを。

（ひ-ふう［悲風］（名）㊀秋の末の風。㊁あはれを催す風。

（ひ-ふう［祕封］（名）他に見せざるやうにかたく封をなしおくを。又、其もの。

（ひ-ふう［被覆］（名）おほひかぶすを。

（び-ふう［微風］（名）いさゝかの風。すこしの風。

（び-ふう［美風］（名）うつくしきならひ。はむべきならはし。

ひふき-だけ［火吹竹］（名）火を吹き熾（オコ）す竹筒。ふきだけ。（吹火筒）。

ひふき-ダルマ［火吹達磨］（名）達磨の形を造り、小さき口を穿ち、中に水を貯へて火の傍に置き、其口より蒸氣を吹きて火を熾（オコ）すもの。

（ひ-ふく［被服］（名）きもの。ころも。

（び-ふく［美服］（名）うつくしき衣服。

（び-ふく［微服］（名）服裝をやつすを。忍び姿。

ひ-ぶくれ［火脹］（名）火傷にて皮膚の腫（ハ）れふくるゝを。

（ひふ-こきふ）ヒフコキフ［皮膚呼吸］（名）【生】皮膚より炭酸瓦斯及水分を排出して酸素を攝取すること。
ひ-ぶせ［火伏］（名）火災を防ぐ神佛の力。（防火）。
ひ-ぶた［火蓋］（名）火繩筒の火皿を被ふ蓋。（火門蓋）。——をきる　鐵砲の火蓋をあけて、何時にても點火することの出來るやうにす。轉じて、すべて、物事に取りかゝるにいふ語。
ひ-ブツ［祕佛］（名）ひめて大事にせる佛像。
（び-ぶつ）［微物］（名）さゝやかなるもの。
（ひふ-びやう）ヒフビヤウ［皮膚病］（名）皮膚に腫物又は傷瘡を生ずる病氣、ひぜん・たむし・なまづ・しらくも等これに屬す。
ひ-ぶみ［日文］（名）神代にありたりと稱せらるゝ一種の文字、實は朝鮮諺文の輸入せられたるものか又は後世の僞作なり。
ひ-ぶるひ ヒブルヒ［日顫］（名）毎日ふるふおこり。
（ひ-ふん）［悲憤］（名）かなしみいきどほること。かなしみなげきて意氣の激昂すること。
（ひ-ぶん）［碑文］（名）石碑に彫（ほ）れる文章。
（ひ-ぶん）［非分］（名）分限の外なること。分にこえたること。
（ひ-ぶん）［非文］（名）文理に通ぜざること。
（び-ぶん）［美文］（名）みやびやかなる語句を用ひてうるはしくかざりつゞりたる文章。
（び-ぶん）［微分］（名）【數】或函數の極微の變差。——がく［微分學］（名）【數】或變數の函數の微分と、これに相當する其變數の微分との比の極限なる價を求めて、其函數の變化を研究する學。
（び-ぶんし）［微分子］（名）こまかき分子。
（ひ-へい）［疲弊］（名）つかれつひゆること。おとろふること。
‡ひ-へぎ［引倍木］（名）「いたびき」に同じ。
ピペット［Pipette］（名）尖端細くして中腹大なる「ガラス」管、液をいれて少しづゝ點下せしむるに用ふるもの。

ひ-へん［日偏］（名）漢字の偏の名、即ち晴・時などの字の左方にある日の字の稱。
ひ-へん［火偏］（名）漢字の偏の名、即ち煙・燈などの字の左方にある火の字の稱。
（ひ-ほ）［裨補］（名）たすけ。すけ。
‡ひぼ［紐］（名）「ひも」の訛。
（ひ-ぼう）［祕謀］（名）ひめたるはかりごと。又、奇妙なるはかりごと。
（び-ほう）［彌縫］（名）かけつぐこと、とりつくろふこと、あぎなひあはすること。——さく［彌縫策］（名）失敗又は缺點をとりつくろふはかりごと。
（ひ-ぼく）［飛瀑］（名）高處より直下する水流、たき。
（ひ-ぼく）［婢僕］（名）下女と下男と。
（ひ-ほけん-しや）［被保險者］（名）【法】保險せらるゝ當事者、保險者の對。
ひ-ぼし［火乾］（名）火にほしたるもの。
ひ-ぼし［日乾］（名）日にほしたるもの。
ひ-ぼし［干乾］（名）食無くして餓ゑおとろふること。
‡ひぼ-とき［紐解］（名）「ひもとき」に同じ。
‡ひぼろぎ［燔］（名）「ひもろぎ」に同じ。
（ひ-ほん）［祕本］（名）祕藏の書物。
（ひ-ぼん）［非凡］（名）凡庸にこえ出でたること、つねにこえすぐれたること。「—の所說」。
（び-ほん）［美本］（名）印刷紙質其他裝釘等の美しき書籍。
ひま［隙］（名）㊀すきま。すきあな。㊁時間。光陰。㊂をり。機會。㊃てすき。閒暇。㊄なかたがひ。不和。「—あり」。㊅主從又は夫婦の約を解き、其關係を絶つこと。
（ひ-ま）［蓖麻］（名）【植】「たうごま」に同じ。

（ひ-ま）［披麻］（名）山又は岩などを描くに、麻をひらき散らしたるが如き條にてあらはすこと。
ひま-い・る（ら・り・る・る・れ・れ）［隙入］（自、ら四）時間長くかゝる。
ひ-まご［曾孫］（名）孫の子。
（ひ-まし）［日增］（名）食物食品などの製してより日數を經（へ）たること。
ひまし-に［日增］（副）日毎に增して。日々に進みて。「—ふゆ」。
ひまし-の-あぶら［蓖麻子油］（名）たうごまの種子より採取したる油。
（ひまし-もの）［日增物］（名）日增となりたる食物又は食品。
ひま-すぐる-こま［隙過駒］（名）（莊子の如白駒過郤の語に出づ）光陰の經過のはやきをたとへいふ語。
‡ひ-まぜ［日交］（名）一日おき。隔日。
ひ-まち［日待］（名）（日祭の義）陰曆十月五日の夜、寐（イ）ねずして日出を待つこと。
ひ-まつり［火祭］（名）火災のなきやうに祈禱などをすること。
ひま-ど・る（ら・り・る・る・れ・れ）［隙取］（自、ら四）時間多くかゝる。てまどる。
ひま-の-こま［隙駒］（名）「ひますぐるこま」に同じ。
ひ-まはし ヒマハシ［火廻］（名）「ひまはり」に同じ。
ひ-まはり ヒマハリ［火廻］（名）小兒の遊戲、車座になり、火をつけたる線香を順々に廻し、尻取などして、其言に窮し其火の指に迫りてこまるを慰みとするもの。
ひ-まはり ヒマハリ［日廻］（名）【植】菊科に屬する草、莖は高さ五六尺、葉は稍や圓形にして鋸齒を有す、花は菊に似、大形にして黃色を呈し常に日の方へ廻り向かふ。ひぐるま。ひうがあふひ。日向葵。日輪草。

——さう サウ［日廻草］（名）【植】前條に同じ。
ひま-ゆく-こま［隙行駒］（名）「ひますぐるこま」に同じ。
（ひ-まん）［肥滿］（名）こえふとること。
（び-まん）［瀰漫］（名）ひろがりはびこること。
‡ひみ［皹］（名）「ひび」の古言。
（び-み）［美味］（名）うまきあぢ。又、其物。
ひ-みじか［日短］（名）冬などの日の短かきこと。「短日」。
ひ-みず［地鼠］（名）【動】（日を見ずの義）「ぢねずみ」の一名。
（ひ-みつ）［祕密］（名）㊀ひそかになすこと。しのびてなすこと。㊁かくして知らせざること。ひめて示さざること。㊂公開せざること。おほやけにせざること。㊃おくのて。奧義。㊄うちわ。內證。㊅隱惡。私曲。——くわい［祕密會］（名）㊀祕密の集會。㊁傍聽を禁ずる會。——くわいぎ［祕密會議］（名）㊀祕密の會議。㊁傍聽を禁ずる會議。——けっしや［祕密結社］（名）存在又は組織等を祕密にして公に知らさゞる結社。——しふくわい シフクワイ［祕密集會］（名）祕密になす集會。——だんたい［祕密團隊］（名）存在又は組織等の祕密にして公に知らさゞる團隊。
‡ひ-みづ［氷水］（名）氷のとけたる水。
ひ-みづ［火水］（名）㊀火と水と。㊁轉じて、仲の極めて惡しきこと。
（ひ-みやく）［皮脈］（名）皮膚と血脈と。
ひ・む（め・め・む・むる・むれ・めよ）［祕］（他、ま下二）隱して示さず。をさめて知らさず。ないしよにす。ひす。
‡ひ-むかし［東］（名）「ひがし」の原語。
ひ-むろ［氷室］（名）冬の氷を夏まで貯藏して置く室又は山陰などの穴。‡——どの［氷室殿］（名）ひむろの家。——もり［氷室守］（名）ひむろの番人。

ひ-め［姫］（名）㊀女子の敬稱。彥（ひこ）の對。（媛）。㊁貴人の娘の敬稱。㊂遊女の稱。（京阪地方の方言）
ひ-め［糄糅］（名）㊀‡穀物不詳、今の飯の類ならんか。㊁ひめのり。
ひめ-［姫］（接頭）小さくして愛らしき物に冠する語。「—百合」「—垣」。
ひめ-あざみ［姫薊］（名）【植】菊科に屬する草、高さ六七寸、莖・葉共に刺あり、花はやまあざみに似て淡紫色なり、かはあざみ。
（ひ-めい）［非命］（名）災害又は負傷などにて死すること。橫死。「—の死を遂ぐ」。
（ひ-めい）［悲鳴］（名）㊀悲しみ鳴くこと。「鷄—す」。㊁あはれなる泣聲。
（ひ-めい）［碑銘］（名）石碑の銘。
（び-めい）［美名］（名）よき名聲。ほまれ。（令名）。
（び-めい）［微明］（名）うすあかり。
（び-めう）ビメウ［微妙］（名）奧深く玄妙なること、たへなること。
（び-めう）ビメウ［美妙］（名）うるはしさの言語にたえたること。
ひめ-うり［姫瓜］（名）【植】瓜の一種、花葉共に小形にして、長さ二寸程の瓜を結ぶ。（金甕瓜）。——のせっく［姫瓜節供］（名）古昔、伊勢國桑名地方にて、八月朔日に姫瓜雛をつくりこれを棚にすゑ、酒・赤飯などを供して祭りしこと。——ひな［姫瓜雛］（名）姫瓜に眉目鼻口を描（ヱガ）き、これに竹の筒などをつけて體とし、紙又は絹などの服を着（キ）せたるもの。
ひめ-ウヰキヤウ ヒメウヰキヤウ［姫茴香］（名）【植】「ゐのんど」の古名。

‡ひめ-かがみ［姫蘿藦］（名）【植】「すゞさいこ」の一名。
ひめ-かがみ［姫鑑］（名）淑女の手本となるべきもの。
ひめ-がき［姫墻］（名）たけ低き墻。（女墻）。
ひめ-がひ ヒメガヒ［姫貝］（名）【動】「いがひ」の一名。
ひめ-ききやう ヒメキキヤウ［姫桔梗］（名）【植】「ひなぎきやう」の一名。
ひめ-ぎみ［姫君］（名）㊀貴人の令嬢の敬稱。㊁‡古昔、公卿の長女の敬稱。
‡ひめ・く（か・き・く・く・け・け）（自、か四）さけぶ。なく。
ひめ-ごぜ［姫御前］（名）ひめぎみ。
‡ひめ-ごと［祕事］（名）ないしようごと。
ひめ-こまつ［姫小松］（名）【植】（い）「ひめまつ」に同じ。（ろ）五葉松の一種、葉は短くして細し。（は）「ふじまつ」に同じ。（京都の方言）。
ひめ-しをん［姫紫菀］（名）【植】菊科に屬する草、莖はをぐるまに似て小さく、めどに似たる白色の花簇（ムラ）がりて開く。（女菀）。
ひめ-たちばな［姫橘］（名）【植】「きんかん」の一名。
ひめぢ-がは ヒメヂガハ［姫路革］（名）播磨國姫路より産出する革、文庫などを張るに用ふ。
‡ひめ-つばき［姫椿］（名）【植】「ねずみもち」の古名。
‡ひめ-とね［姫刀禰］（名）六位以上の宮女の稱。
ひめ-とらのを［姫虎尾］（名）【植】玄參科に屬する草、葉は披針形にして淡綠色を呈し綠邊に鋸齒を有す、花は淡紫綠色にして長き穗狀花序に排列す、觀賞用として栽培せらる。（水蔓青）。
ひめ-のり［姫糊］（名）飯にて製したる糊。
ひめ-はぎ［姫萩］（名）【植】遠志科に屬する草、高さ三四寸、葉はつげに似て薄し、花は淡紫色にして總狀花序をなす。すゞめはぎ。（遠志）。

ひめ-はじめ［姫始］（名）㊀＋＋古昔、正月編米（ヒ）を供し始むるに吉しといひし日。㊁馬の乗りぞめに吉き日。（飛馬始）。

ひめ-ばせう［姫芭蕉］（名）［植］「びじんせう」（美人蕉）の一名。

ひめ-ふぢ［姫藤］（名）［植］「いはふぢ」の一名。

ひめ-まつ［姫松］（名）［植］小さき松。

ひめ-みこ［姫御子］（名）内親王。皇女。

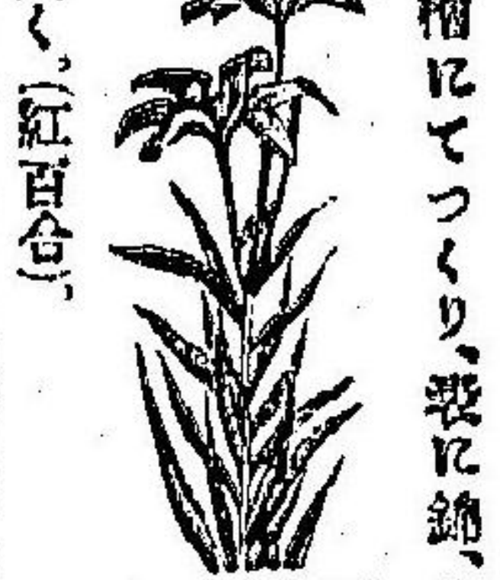
ひめ-みや［姫宮］（名）前條に同じ。

＋＋**ひめもす**［終日］（名、副）「ひねもす」に同じ。

＋＋**ひめ-や**［姫矢］（名）古昔、木を割るときに、割目にはさみし楔（クサビ）。

ひめ-ゆぎ［姫靫］（名）檜にてつくり、裂に錦、裏に帛をつけたる靫。

ひめ-ゆり［姫百合］（名）［植］百合の一種、葉はおにゆりに似、夏の頃、六瓣黄紅色の花開く。（紅百合）。


［ひめゆり］

ひめ-よし［姫葦］（名）［植］よしの一種、葉細し。

ひめ-よもぎ［姫艾］（名）［植］よもぎの一種、原野に生ず、葉少く枝多し。（野艾蒿）。

（**ひ-めん**）［罷免］（名）職務をやめらるゝこと。

ひも［紐］（名）物を束ね又は繋（ツナ）ぐ太き絲又はほそき革。ひぼ。

＋＋**ひも-かがみ**［氷面鏡］（名）氷の異稱、其面の明かなるを鏡に似たればいふ。

＋＋**ひも-かがみ**［紐鏡］（名）古昔、裏の鈕（ツマミ）に紐を通して掛へし鏡。

＋＋**ひも-かがみ**［紐鏡］（枕）鏡の裏の紐は結びつけて解くことなき故、「ーなときそ」より轉じて、「のどか」に冠らする詞。

ひも-がたな［紐刀］（名）紐をつけ懐中に佩（オ）びて下帯に差す短刀。

ひも-かは［紐革］（名）革の紐。——**うんどん**［紐革饂飩］（名）紐革の如く平たく細く製したる饂飩。いもかはうどん。

（**ひ-もく**）［皮目］（名）樹皮の表面の處々にある目「（モク）」。

（**ひ-もく**）［費目］（名）支出する費用の名目。

（**び-もく**）［眉目］（名）㊀まゆとめと。㊁見え、體裁、「圖點を附してーを明かにす」。㊂ほまれ、面目。

（**び-もく**）［美目］（名）めもとうつくしき目。

（**ひもく-ぎよ**）［比目魚］（名）［動］「ひらめ」に同じ。

ひもく-の-まくら［比目枕］（名）同衾すること。

＋＋**ひも-さ-す**（さしすせ）［紐差］（自、さ四）㊀紐をむすぶ。㊁蕾いまだ開かず。

ひも-じ（じくじきじけれ）［饑］（形、二）空腹にて食欲（ホシ）し。ひだるし。

ひ-も-すがら［終日］（名、副）「ひねもす」に同じ、よもすがらの對。

＋＋**ひめ-すどり**（名）【動】「かはせみ」の異稱。

（**ひも-つき**）［紐附］（名）㊀紐のつきてある衣服、即ち小兒の衣服。㊁「なはつき」に同じ。

ひも-つけ［紐附］（名）衣服・調度などの紐をつくべき部分。

ひも-と［火元］（名）火事の起りたるもと、又、火事の起りたる家。

ひも-とき［紐解］（名）女兒が七歳になりたるとき、衣のつけひもを解き去り、ひもなき衣服となして着すること。

＋＋**ひも-と-く**（かきくけ）［紐解］（自、か四）㊀下紐を解く。㊁＋＋蕾開く。「櫻花ー」。

ひも-と-く（かきくけ）［紐解］（他、か四）紐にて結びたるを解きひらく、「書物をー」。（繙）。

ひも-とほし［紐通］（名）紐を通すべき孔、「袴のー」。

ひも-とみ［火元見］（名）昔時、火元を見とゞくるため、火事場に出張せし役者。（望火馬）。

ひも-なほし［紐直］（名）「ひもとき」に同じ。

ひ-もの［干物］（名）鹽にして干したる魚。（枯魚、乾腊）。

ひ-もの［檜物］（名）㊀檜の材にてつくりたる薄きわげもの。㊁轉じて、すべてのわげもの、一稱（[illegible]）。——**し**［檜物師］（名）檜物の職人。＋＋——**だくみ**［檜物工］（名）次條に同じ。

＋＋**ひもろぎ**［神籬］（名）榊を立て廻らして、假りに神の御室として祭る所。ひぼろぎ。（叢祠）。

ひもろぎ［胙］（名）神に薦る供物。（膰）。

（**ひ-もん**）［祕文］（名）祕密の咒文。

ひ-や［火箭］（名）古昔、矢に火を仕掛て放射せしもの。後世、火藥を仕掛けて放射する火器。

ひ-や［火屋］（名）やきば、火葬場。

（**ひや**）［冷］（名）㊀ひやみづ。㊁ひやざけ。

ヒヤ［Hear］（副）傾聽するに足るさまにいふ語。又、賛成の時などにいふ語。

ひや-（接頭）或語に冠して、ひやき意を表する語。「ー水」「ー酒」。

ビヤー［Beer］（名）「ビール」に同じ。——**ホール**［Beer hall］（名）「コップ」一盃の價若干と定めて、「ビール」を飲ます手輕き酒店、多くは傍ら西洋料理をなす。

ひや-あせ［冷汗］（名）甚しく恥ぢたる時などに出る冷（ヒヤ）やかなる汗。漸汗。

（**ひやう**）［評］（名）價値の論定、可否の判斷、さだめ。

（**ひやう**）［兵］（名）將卒の稱、即ち、ぶし。

（**ひやう**）［平］（名）漢字の四聲の一、平聲に屬するもの、仄の對。

（**ひ-やう**）［飛揚］（名）とびて高くあがること。

（**ひ-やう**）［飛颺］（名）とびひるがへること。

（**び-やう**）［鋲］（名）頭の大いなる釘、（泡頭釘）。

（**び-やう**）［微恙］（名）すこしく身體のすぐれざること。

（**びやう-あ**）［病痾］（名）ながき病氣。

（**びやう-いん**）［病因］（名）病氣の原因。

（**ひやう-か**）［評價］（名）㊀品物相應のねだんをつくること。㊁善惡美醜の價値を論定すること。

（**びやう-か**）［病家］（名）病人のある家。

（**びやう-かん**）［病間］（名）病氣にかゝれる間。

（**ひやう-ぎ**）［評議］（名）かたらひ議すること。あつまり議すること。相談。「ー最中」。——**ゐん**［評議員］（名）評議にあづかる人。

（**びやう-き**）［病氣］（名）身體器官の健全ならざること。病毒におかさるゝこと。やまひ、いたづき、わづらひ。疾病。

（**びやう-きん**）［病菌］（名）病因となる黴菌。

（**ひやう-ぐ**）［兵具］（名）㊀武器。㊁よろひ。

（**びやう-く**）［病苦］（名）病氣のくるしみ。

（**びやう-く**）［病軀］（名）病氣になやめるからだ。

（**びやう-くぎ**）［鋲釘］（名）「びやう」に同じ。

（**びやう-くわん**）［病患］（名）やまひ。わづらひ。

（**ひやう-けつ**）［評決］（名）評議して決定すること。

（**ひやう-げん**）［評言］（名）批評のことば。

（**びやう-げん**）［病源］（名）病氣のみなもと。

（**ひやう-ご**）［兵庫］（名）㊀兵器ををさめおくくら。㊁「ひやうごわげ」の略言。

（**ひやう-ご**）［評語］（名）「ひやうげん」に同じ。

（**びやう-こ**）［病故］（名）病氣といふ事故。

（**びやう-ご**）［病後］（名）病氣のなほりたるあと、やみあげく、やみあがり。

＋＋**ひやうご-れう**［兵庫寮］（名）上古、衞府に屬し、儀仗兵器の出納を掌りしつかさ。

ひやうご-わげ［兵庫髷］（名）婦人の結髪、攝津國兵庫の佐比江（サビエ）町の遊女が創めて結（ユ）ひ出だしたるもの。

（**びやう-こん**）［病根］（名）病みつきのもと。病源。

＋＋**びやう-ざ**［病者］（名）「びやうじや」に同じ。

（**ひやう-し**）［拍子］（名）㊀音樂の節を助けて調子を取ること。㊁をは、をり。㊂はづみ、とたん。——**ぎ**［拍子木］（名）長方形に木を削（ケヅ）り、二個相打ちてならすもの。——**ごと**［拍子事］（名）偶然の出來事。——**ぬけ**［拍子拔］（名）きのぬけたること、はりあひのぬけたること。

（**ひやう-じ**）［平字］（名）平聲に屬する漢字、仄字の對。

（**びやう-し**）［病死］（名）病みて死ぬること。

（**びやう-しつ**）［病室］（名）病人を入れおく室。

（**びやう-しつ**）［病質］（名）病氣の性質。

（**びやう-しや**）［病者］（名）病氣にかゝれるもの、病人。やまひもち。

（**ひやう-しやう**）［平聲］（名）漢字の四聲の一、即ち上平・下平の總稱。

（**びやう-しやう**）［病症］（名）病氣のたち。

（**びやう-しやう**）［病牀］（名）病人のねどこ。やみて臥しあるとこ、やまひのとこ。——**にっし**［病牀日誌］（名）病人の日々の經過を志るしたるもの。

（**びやう-じやう**）［病狀］（名）病氣のありさま。

（**ひやう-しやく**）［評釋］（名）批評し且つ釋義すること。

（**びやう-じやく**）［病弱］（名）やみておとろへよわりたること。

（**びやう-しよ**）［病所］（名）㊀病人のある所。㊁やめる局部。

（**びやう-じよく**）［病蓐］（名）やまひのとこ。

（**びやう-しん**）［病身］（名）身の弱くして多病なること。

（**ひやう-じん**）［氷人］（名）婚姻のなかうど。

ひやう-す（せしすするすれせよ）［評］（他、さ變）價値を論定す。しなさだめをなす。「ーと」

（**びやう-すゐ**）［病衰］（名）やみておとろふること。

（**びやう-せい**）［病勢］（名）病氣のなりゆき。

（**びやう-せい**）［病性］（名）病氣のたち。

（**ひやう-せつ**）［評說］（名）㊀うはさ、とりざた。㊁評を加へて說明すること。

（**ひやう-せん**）［兵船］（名）いくさぶね、軍船。

（**ひやう-そく**）［平仄］（名）㊀平と仄と、平字と仄字と。㊁つぢつま、順序、「ーの合はぬ話」。

（**ひやう-そく**）［秉燭］（名）燈盞の一種、中央に臍あり、これに燈心を立て點火するもの。柄燭。

（**びやう-たい**）［病體］（名）病ある身。病氣にかゝれるからだ。

（**びやう-たい**）［病態］（名）病氣のありさま。

（**ひやう-たん**）［氷炭］（名）こほりとすみと、轉じて互に甚しく相反するもの。——**あひいれず**［氷炭不相容］互に相反して一つとならざるにいふ。

（**ひやう-ぢやう**）［評定］（名）評議して事を決定すること、「評決」。——**くわん**［評定官］（名）或事件を評議して決定する官職、「行政裁判ー」。——**しゆう**［評定衆］（名）鎌倉幕府の時、會同して政事を評定せし役名。——**しよ**［評定所］（名）

ひめ-はじめ［姫始］(名) ㊀++古昔、正月編衣（ヘ）を供し始むるに吉しといひし日。㊁馬の乘りぞめに吉き日。(飛馬始)。

ひめ-ばせう（ーシヨウ）［姫芭蕉］(名)【植】「びじんせう」(美人蕉)の一名。

ひめ-ふぢ［姫藤］(名)【植】「いはふぢ」の一名。

ひめ-まつ［姫松］(名)【植】小さき松。

++**ひめ-みこ**［姫御子］(名) 内親王。皇女。

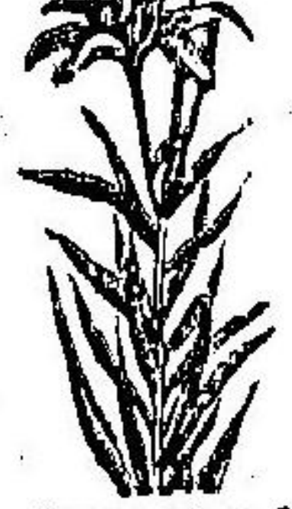
ひめ-みや［姫宮］(名) 前條に同じ。

++**ひめ-もす**［終日］(名、副)「ひねもす」に同じ。

++**ひめ-や**［姫矢］(名) 古昔、木を割るときに、割目にはさみし楔（クサビ）。

ひめ-ゆぎ［姫靫］(名) 檜にてつくり、表に錦、裏に帛をつけたる靫。

ひめ-ゆり［姫百合］(名)【植】百合の一種、葉はおにゆりに似、夏の頃、六瓣黄紅色の花開く。(紅百合)。


［ひめゆり］

ひめ-よし［姫葭］(名)【植】よしの一種、葉細し。

ひめ-よもぎ［姫艾］(名)【植】よもぎの一種、原野に生ず、葉少く枝多し。(野艾蒿)。

(**ひ-めん**［罷免］(名) 職務をやめらるゝこと。

ひも［紐］(名) 物を束ね又は繋（ツナ）ぐ太き絲又はほそき革、ひぼ。

++**ひも-かがみ**［氷面鏡］(名) 氷の異稱、其面の明かなるを鏡に似たればいふ。

++**ひも-かがみ**［紐鏡］(名) 古昔、裏の鈕（ツマミ）に紐を通して携へし鏡。

++**ひも-かがみ**［紐鏡］(枕) 鏡の裏の紐は結びつけて解くことなき故、「—なときそ」より轉じて、「のどかに冠らする詞。

ひも-がたな［紐刀］(名) 紐をつけ懐中に佩（オ）びて下帯に差す短刀。

ひも-かは（ーカハ）［紐革］(名) 革の紐。——**うんどん**［紐革饂飩］(名) 紐革の如く平たく細く製したる饂飩、いもかはうどん。「(モ)」。

(**ひ-もく**［皮目］(名) 樹皮の表面の處々にある目。

(**ひ-もく**［役目］(名) 支出する習用の名目。

(**び-もく**［眉目］(名) ㊀まゆとめと。㊁見え、體裁、「圏點を附して—を明かにす」。㊂ほまれ、面目。

(**び-もく**［美目］(名) めもとうつくしき目。

(**ひもく-ぎよ**［比目魚］(名)【動】「ひらめ」に同じ。

ひもく-の-まくら［比目枕］(名) 同衾するを。

ひも-さ-す（さしすすせせ）［紐差］(自、さ四) ㊀紐をむすぶ。㊁蕾いまだ開かず。

ひも-じ（じくじきじけれ）［饑］(形、三) 空腹にて食欲（ホ）し、ひだるし。

ひも-すがら［終日］(名、副)「ひねもす」に同じ、よもすがらの對。

++**ひもす-どり**（名）【動】「からす」の異稱。

(**ひも-つき**［紐附］(名) ㊀紐のつきてある衣服、即ち小兒の衣服。㊁「なはつき」に同じ。

ひも-つけ［紐附］(名) 衣服・調度などの紐をつくべき部分。

ひ-もと［火元］(名) 火事の起りたるもと、又、火事の起りたる家。

ひも-とき［紐解］(名) 女兒が七歳になりたるとき、衣のつけひもを解き去り、ひもなき衣服となして着するを。

++**ひも-と-く**（かきくくけけ）［紐解］(自、か四) ㊀蕾開く、「櫻花—」。㊁下紐を解く。

ひも-と-く（かきくくけけ）［紐解］(他、か四) 紐にて結びたるを解きひらく、「書物を—」。(繙)。

ひも-とほし（ートオシ）［紐通］(名) 紐を通すべき孔、「紐の—」。

ひも-とみ［火元見］(名) 昔時、火元を見とゞくるため、火事場に出張せし役者。(望火馬)。

ひも-なほし（ーナオシ）［紐直］(名)「ひもとき」に同じ。

ひ-もの［干物］(名) 鹽にして干したる魚。(枯魚、薨腊)。

ひ-もの［檜物］(名) ㊀檜の材にてつくりたる薄きわげもの。㊁轉じて、すべてのわげもの、稱、(桮棬)。——**し**［檜物師］(名) 檜物の職人。++——**だくみ**［檜物工］(名) 次條に同じ。

++**ひもろぎ**［神籬］(名) 榊を立て廻らして、假りに神の御室として祭る所。ひぼろぎ。(靈廟)。

ひもろぎ［胙］(名) 神に薦る供物。(膰)。

(**ひ-もん**［祕文］(名) 祕密の咒文。

ひ-や［火箭］(名) 古昔、矢に火を仕掛て放射せしもの。後世、火藥を仕掛けて放射する火器。

ひ-や［火屋］(名) やきば、火葬場。

(**ひや**［冷］(名) ㊀ひやみづ。㊁ひやざけ。

ヒヤ［Hear］(副) 傾聽するに足るさまにいふ語、又、贊成の時などにいふ語。

ひやー（接頭） 或語に冠して、ひやゝき意を表する語、「—水」「—酒」。

ビヤー［Beer］(名)「ビール」に同じ。——**ホール**［Beer hall］(名)「コップ」一盃の價若干と定めて、「ビール」を飲ませる手輕き酒店、多くは傍ら西洋料理をなす。

ひや-あせ［冷汗］(名) 甚しく恥ぢたる時などに出る冷（ヒヤ）やかなる汗、漸汗。

(**ひやう**（ヒヨウ）［評］(名) 價値の論定、可否の判斷、「さだめ」。

(**ひやう**（ヒヨウ）［兵］(名) 將棊の駒の名、即ち、ふ。

(**ひやう**（ヒヨウ）［平］(名) 漢字の四聲の一、平聲に屬するもの、仄の對。

(**ひ-やう**（ーヨウ）［飛揚］(名) とびて高くあがるを。

(**ひ-やう**（ーヨウ）［飛颺］(名) とびひるがへるを。

(**びやう**（ビヨウ）［鋲］(名) 頭の大いなる釘、(泡頭釘)。

(**び-やう**（ーヨウ）［微恙］(名) すこしく身體のすぐれざるを。

(**びやう-あ**（ビヨウ）［病痾］(名) ながき病氣。

(**びやう-いん**（ビヨウ）［病因］(名) 病氣の原因。

(**ひやう-か**（ヒヨウ）［評價］(名) ㊀品物相應のねだんをつくるを、㊁善惡美醜の價値を論定するを。

(**びやう-か**（ビヨウ）［病家］(名) 病人のある家。

(**びやう-かん**（ビヨウ）［病間］(名) 病氣にかゝれる間。

(**ひやう-ぎ**（ヒヨウ）［評議］(名) かたらひ議するを、あつまり議するを、相談、「—最中」。——**ゐん**［評議員］(名) 評議にあづかる人。

(**びやう-き**（ビヨウ）［病氣］(名) 身體器官の健全ならざるを。病毒におかさるゝを。やまひ、いたづき、わづらひ、疾病。

(**びやう-きん**（ビヨウ）［病菌］(名) 病因となる黴菌。

(**ひやう-ぐ**（ヒヨウ）［兵具］(名) ㊀武器。㊁よろひ。

(**びやう-く**（ビヨウ）［病苦］(名) 病氣のくるしみ。

(**びやう-く**（ビヨウ）［病軀］(名) 病氣になやめるからだ。

(**びやう-くぎ**（ビヨウ）［鋲釘］(名)「びやう」に同じ。

(**びやう-くわん**（ビヨウ）［病患］(名) やまひ。わづらひ。

(**ひやう-けつ**（ヒヨウ）［評決］(名) 評議して決定するを。

(**ひやう-げん**（ヒヨウ）［評言］(名) 批評のことば。

(**びやう-げん**（ビヨウ）［病源］(名) 病氣のみなもと。

(**ひやう-ご**（ヒヨウ）［兵庫］(名) ㊀兵器をおさめおくくら。㊁「ひやうごわげ」の略言。

(**ひやう-ご**（ヒヨウ）［評語］(名)「ひやうげん」に同じ。

(**びやう-こ**（ビヨウ）［病故］(名) 病氣といふ事故。

(**びやう-ご**（ビヨウ）［病後］(名) 病氣のなほりたるあと、やみあげく、やみあがり。

++**ひやうご-れう**（ヒヨウゴリヨウ）［兵庫寮］(名) 上古、衞府に屬し、儀仗兵器の出納を掌りしつかさ。

ひやうご-わげ（ヒヨウ）［兵庫髷］(名) 婦人の結髪、攝津國兵庫の佐比江（サヒエ）町の遊女が創めて結（ユ）ひ出したるもの。

(**びやう-こん**（ビヨウ）［病根］(名) 病みつきのもと。病源。

++**びやう-ざ**（ビヨウ）［病者］(名)「びやうしや」に同じ。

(**ひやう-し**（ヒヨウ）［拍子］(名) ㊀音樂の節を助けて調子を取るを。㊁ふし、はり。㊂はづみ、とたん。——**ぎ**［拍子木］(名) 長方形に木を削（ケヅ）りて二個相打ちてならすもの。——**ごと**［拍子事］(名) 偶然の出來事。——**ぬけ**［拍子拔］(名) まのぬけたるを、はりあひのぬけたるを。

(**ひやう-じ**（ヒヨウ）［平字］(名) 平聲に屬する漢字、仄字の對。

(**びやう-し**（ビヨウ）［病死］(名) 病みて死ぬるを。

(**びやう-しつ**（ビヨウ）［病室］(名) 病人を入れおく室。

(**びやう-しつ**（ビヨウ）［病質］(名) 病氣の性質。

(**びやう-しや**（ビヨウ）［病者］(名) 病氣にかゝれるもの、病人。やまひもち。

(**ひやう-しやう**（ヒヨウシヨウ）［平聲］(名) 漢字の四聲の一、即ち上平・下平の總稱。

(**びやう-しやう**（ビヨウシヨウ）［病症］(名) 病氣のたち。

(**びやう-しやう**（ビヨウシヨウ）［病牀］(名) 病人のねどこ。やみて臥しあるとこ、やまひのとこ。——**にっし**［病牀日誌］(名) 病人の日々の經過を誌るしたるもの。

(**びやう-じやう**（ビヨウジヨウ）［病狀］(名) 病氣のありさま。

(**ひやう-しやく**（ヒヨウ）［評釋］(名) 批評し且つ釋義するを。

(**びやう-じやく**（ビヨウ）［病弱］(名) やみておとろへよわりたるを。

(**びやう-しよ**（ビヨウ）［病所］(名) ㊀病人のある所、㊁「やめる局部」。

(**びやう-じよく**（ビヨウ）［病蓐］(名) やまひのとこ。

(**びやう-しん**（ビヨウ）［病身］(名) 身の弱くして多病なるを。

(**ひやう-じん**（ヒヨウ）［氷人］(名) 婚姻のなかうど。

ひやう-す（せしすするすれせよ）［評］(他、さ變) 價値を論定す。あなさだめなす。「と、」

(**びやう-すゐ**（ビヨウ）［病衰］(名) やみておとろふるを。

(**びやう-せい**（ビヨウ）［病勢］(名) 病氣のなりゆき。

(**びやう-せい**（ビヨウ）［病性］(名) 病氣のたち。

(**ひやう-せつ**（ヒヨウ）［評說］(名) ㊀うはさ、とりざた。㊁評を加へて說明するを。

(**ひやう-せん**（ヒヨウ）［兵船］(名) いくさぶね、軍艦。

(**ひやう-そく**（ヒヨウ）［平仄］(名) ㊀平と仄と、平字と仄字と。㊁つぢつま、順序、「—の合はぬ話」。

(**ひやう-そく**（ヒヨウ）［秉燭］(名) 燈盞の一種、中央に臍あり、これに燈心を立て點火するもの。(柄燭)。

(**びやう-たい**（ビヨウ）［病體］(名) 病ある身、病氣にかゝれるからだ。

(**びやう-たい**（ビヨウ）［病態］(名) 病氣のありさま。

(**ひやう-たん**（ヒヨウ）［氷炭］(名) こほりとすみと、轉じて互に甚しく相反するもの。——**あひいれず**［氷炭不相容］ 互に相反して一つとならざるにいふ。

(**ひやう-ぢやう**（ヒヨウジヨウ）［評定］(名) 評議して事を決定するを。(評決)。——**くわん**［評定官］(名) 或事件を評議して決定する官職、「行政裁判—」。——**しゆう**［評定衆］(名) 鎌倉幕府の時、會同して政事を評定せし役名。——**しよ**［評定所］(名)

鎌倉幕府の訴訟を裁決せし所。

⌒ひやう-ぢやう［兵仗］（名）古昔、隨身の持ちたる儀衞の武器。——せんげ［兵仗宣下］（名）古昔、文官に隨身を賜はされしこと。

⌒ひやう-ちゆう［評註］（名）評を加へ註を入るゝこと。

⌒びやう-ちゆう［病中］（名）やまひにかゝれる間。

⌒ひやう-てい［評定］（名）よしあしを論じて定むること。

⌒びやう-てい［病體］（名）病のようだい。

⌒ひやう-でう［平調］（名）十二律の一。

⌒びやう-てき［病的］形　物事の健全ならざるにいふ。

⌒ひやう-てん［評點］（名）㊀批評の點。㊁評と點と。

⌒ひやう-でん［評傳］（名）評論を加へたる傳記。

ひやう-と（副）矢を射（イ）る音のさまにいふ語。「—射落す」。

⌒びやう-どう［平等］（名）㊀不同なく一樣にてあること。ひとしきこと。（均一）。㊁差別なく一切にあまねきこと。——かい［平等界］（名）萬有の差別なき世界即ち眞如實相の世界。差別界の對。——しゆぎ［平等主義］（名）彼此の差別を立てず總べて平等にこれを遇する主義。

⌒びやう-どく［病毒］（名）病氣を發生せしむる毒。

⌒びやう-なん［病難］（名）病氣の災難。

⌒びやう-にん［病人］（名）病氣にかゝれる人。やまうど。病者。

⌒ひやう-ばん［評判］（名）㊀評論して決定すること。㊁うはさ。世評。㊂名高きこと。「—娘」。

⌒びやう-ふ［病夫］（名）やまひにかゝれる男又はをつと。

⌒びやう-ふ［病婦］（名）やまひにかゝれる女又はつま。

びやう-ぶ［屏風］（名）（風を防ぐ義）室内に立てゝものを遮り又は裝飾とする具、襖（フスマ）の如きもの二枚・四枚・六枚等を番ひ合せに繼ぎあはせ折り疊むやう作れるもの。（連屛）。

⌒ひやう-ぶ-きやう［兵部卿］（名）兵部省の長官。

十ひやう-ぶ-しやう［兵部省］（名）㊀十古昔の八省の一、武官の考選、位記を掌り又兵馬・兵器・城壘等の事を掌りしもの。つはものゝつかさ。㊁維新後、一時設置せられたる陸海軍に關する政務を取扱ひし官府。

⌒びやう-ぼつ［病歿］（名）病氣にかゝりて死ぬること。病死。

⌒ひやう-ほふ［兵法］（名）㊀「へいはふ」に同じ。㊁劍術。

⌒びやう-ま［病魔］（名）やまひを起さしむるといふ魔。

⌒びやう-めい［病名］（名）やまひの名。

びやう-やなぎ［未央柳］（名）【植】金絲桃科に屬する木、高さ二三尺、葉は柳に似、花は五瓣黃色にして梅雨の頃開く、觀賞用として栽培せらる。（金絲桃）。

⌒ひやう-らう［兵糧］（名）㊀戰場に於ける軍人の食料。いくさのかて。㊁活動力を支持するもの。——ぜめ［兵糧攻］（名）敵の糧道を絕ち、戰はずにその戰鬪力を兵糧の缺乏によりて衰弱せしむること。

⌒ひやう-らん［兵亂］（名）戰爭のみだれ。いくさのみだれ。

⌒びやう-り［病理］（名）病氣の原理。——がく［病理學］（名）病理に就きて研究する醫學。

⌒ひやう-りん［評林］（名）批評をあつめたる冊子。

⌒びやう-るゐ［病羸］（名）やみてつかれよわること。

⌒ひやう-ろん［評論］（名）價値善惡を論ずること。批評。——か［評論家］（名）批評家に同じ。

⌒びやう-ゐん［病院］（名）病人を療治するために設けたる醫院。

十ひやう-ゑ［兵衞］（名）古昔、兵衞府に屬せし武官。——ふ［兵衞府］（名）古昔、禁闕の出入の前後又は宮中の守衞などを掌りし役所、左右二府ありき。

十ひや-か［冷］（名）ひやゝか。

ひやかし［冷］（名）㊀水に漬（ツ）けてひやすこと。㊁ものゝ價を問ひながら買はざること。又、其人。（素見）。㊂なぶること。冷評。愚弄。「—半分」。

ひやか-す［冷］（他、さ四）㊀水に漬（ツ）けて冷（ヒ）ゆるやうにす。ひやす。㊁物の價を問ひながら買はず。素見す。㊂愚弄す。冷評す。なぶる。

⌒ひ-やく［非役］（名）役を免ぜられたること。役なしにてあること。

⌒ひ-やく［飛躍］（名）㊀とびあがること、をどりあがること。㊁地位の俄に進むこと。㊂大膽に進取すること。

⌒ひ-やく［祕藥］（名）㊀祕して人に知らさぬ藥。㊁功能いちじるしき藥。妙藥。

十ひや・く［冷］（自、か下二）充分に漬（ツ）かりて冷ゆ。

⌒ひやく［百］（名）多くのもの。いろ〳〵のもの。ありとあらゆるもの。

⌒ひやく［百］（數）十の十倍。もゝ。

⌒ひやく-いち-ぶつ［百一物］（名）【佛】僧家の什具の總稱。

ひやく-いろ-めがね［百色目鏡］（名）二つの鏡の間に色「ガラス」の數片をおきたる玩具、眼鏡を供へてこれを望むときは、二つの鏡の反射によりて美麗なる色の數多く見ゆるもの。

⌒びやく-え［白衣］（名）㊀白色の衣服。㊁古昔、白小袖に揩貫又は狩衣などのみにて直衣・直垂などを著けざりしこと、後世、たゞ白小袖のみ着くるにもいへり。

⌒ひやく-か［百家］（名）百人又は多數の作者又は學者。

⌒ひやく-かう［百行］（名）ありとあらゆるおこなひ。「孝は—の本」。

⌒ひやく-かう［百考］（名）いろ〳〵とかんがふること。

⌒びやく-がう［白毫］（名）【佛】佛の額にありて光を發したりといふ毛、多く佛像の額に圓形左旋の物を作りてこれを表す。

⌒ひやく-かにち［百箇日］（名）人死して百日目。

⌒ひやく-き-やぎやう［百鬼夜行］（名）いろ〳〵の鬼の夜行すること、轉じて、あやしき形體のもの、行動にいふ語。

⌒ひやく-くわ［百花］（名）いろ〳〵さま〴〵の花。

⌒ひやく-くわ［百科］（名）もろ〳〵の科目、又もろ〳〵の學科。「—辭典」。

⌒ひやく-くわん［百官］（名）もろ〳〵のつかさ。

⌒ひやく-けい［百計］（名）いろ〳〵のはかりごと、さま〴〵のてだて。

⌒びやく-こ［白狐］（名）毛色の白き狐、年老いたるものといひ傳ふ。

⌒びやく-こ［白虎］（名）西方に見はるゝ星の名。（四神の條を見よ）。

⌒ひやく-こう［百工］（名）もろ〳〵の工人。

⌒ひやく-こう-せん-さう［百孔千創］（名）多くのあなときずと、即ち缺點の多きことにいふ語。

⌒ひやく-こく［百穀］（名）さま〴〵の穀物。

⌒びやく-こ-たい［白虎隊］（名）明治元年に官軍會津城に迫りしとき、城中の少年團結して防禦にあたり、殆ど屍を戰場に曝し、有名なる決死隊。

⌒びやく-こ-たい［白袴隊］（名）白地の袴を着用せる墮落書生の仲間をあざけりていふ語。

十ひやく-さう［百姓］（名）「ひやくしやう」に同じ。

⌒ひやく-さう［百草］（名）もろ〳〵のくさ。

⌒びやく-さん［白散］（名）山椒・防風・肉桂などを刻みて酒に入れたる屠蘇。

⌒ひやく-じ［百事］（名）さま〴〵の事。

⌒ひやく-し［拍子］（名）一種の樂器、手の如き板、十餘枚を重ねこれを韋（ナメシカハ）にて連ねあはせ、相うちて鳴らすもの。（百子、拍板）。

⌒ひやく-じつ-こう［百日紅］（名）【植】「さるすべり」に同じ。

⌒ひやく-しやう［百姓］（名）㊀天下一般の民。しんみん。㊁農民の特稱。㊂ゐなかものをあざけりていふ語。——よみ［百姓讀］（名）漢字を旁（ツクリ）によりてあて讀みすること。

⌒ひやく-しやく-かんとう［百尺竿頭］（名）百尺のさをのさき、即ち物事の到達すべききはめ。——にいつぽをすゝむ［百尺竿頭進一步］極所に至り更に一段の精神を奮ひて突進するをいふ、又、十分に言葉の盡くしてある上に更に進めて說くをいふ。

⌒ひやく-しゆつ［百出］（名）いろ〳〵さま〴〵にあらはれ出づること。「疑問—」。

⌒びやく-しん［柏槇］（名）【植】松杉科に屬する木、多く暖地の山中に自生す、幹は直立し、葉は杉の如き尖れる葉と小形鱗片狀の葉とを有し、常綠にして輪生す、花は單性にして雌雄異株なり、毬狀の果實を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に供せらる。

⌒ひやく-せん［百千］（名、副）いろ〳〵、さま〴〵。——いろ［百千色］（名）前條に同じ、「—の血の源」。

⌒ひやく-せん-ひやく-しよう［百戰百勝］（名）もゝたびたゝかひてもゝたびかつこと、即ち戰ひて勝たずといふことなきこと。

⌒ひやく-たい［百態］（名）いろ〳〵さま〴〵のさま。

⌒ひやく-たん［百端］（名）㊀いろ〳〵さま〴〵のいとぐち。㊁いろ〳〵さま〴〵になし試むること。

⌒びやく-ダン［白檀］（名）【植】檀香科に屬する木、「インド」に產す、其芳香ある木材は香料又は器具の料に供せらる。（檀香）。「栴檀—」。

⌒ひやく-ぢやう［百丈］（名）船をひくつな。

⌒ひやく-ど［百度］（名）「ひやくどまゐり」の略言。——まゐり［百度參］（名）神社又は佛閣などに願掛などのため、一定の距離の間を百度往返して其神佛に參拜すること。

ひやく-にち-ぜき［百日咳］（名）（發（オコ）る時は百日間も治らぬ義）小兒に發生するせき、傳染し易く容易に治（ナホ）らぬもの。（痙攣咳）。

⌒ひやく-はつ-ひやく-ちゆう［百發百中］（名）もゝたび發してもゝたび中（アタ）ること、即ち發して中らずといふことなきこと。

⌒ひやく-はち-ぼんなう［百八煩惱］（名）【佛】百八種の煩惱、即ち眼・耳・鼻等の六根、色・聲等の六塵に對して、好・惡・平の不同あるより十八種の煩惱を生じ、更に樂受・苦受・不樂不苦受によりて十八種の煩惱を生じ、合せて三十六種となる、而してこれが過去・現在・未來の三世にわたりて生ずるより都合百八種となる、或寺院にては、これを覺醒せ

ん意にて、除夜の半夜より、百八遍ほど鐘を撞く。

(ひやく-ばん)[百蠻](名) さま〳〵のえびす。

(びやく-び)[白薇](名)【植】「ふなばら」に同じ。

ひやく-ひろ[百尋](名) はらわた。

(ひやく-ふ)[百夫](名) 多數のをのこ。

(ひやく-ぶ)[百部](名)【植】「ほどつら」に同じ。

(ひやく-ぶつ)[百物](名) いろ〳〵のもの。さま〳〵のもの。

(ひやく-ぶん)[百聞](名) もゝたび聞くこと。たび〳〵聞くこと。——**いつけんにしかず**[百聞不レ如二一見一] いくたび聞くとも一たび實際を見たるとの利益に及ばざるにいふ。

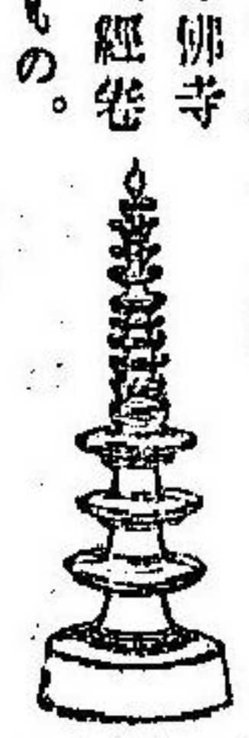
(ひやく-ぶん-ざん)[百分算](名)【數】「ぶあひざん(歩合算)」に同じ。

(ひやく-へい)[百弊](名) いろ〳〵さま〳〵のつひえ。

ひやく-ほん-づけ（ヒヤツポン）[百本漬](名) 乾したる大根百本を糠一斗麴四升鹽三升半の割合にて、漬けたるもの。

(ひやく-まなこ)[百眼](名) 紙にてつくり面部にかくる玩具、目にあたる所だけをくり抜き、さま〴〵の面相を描(ゑが)くもの。

(ひやく-まん-タフ)（トウ）[百萬塔](名) 奈良朝の頃、朝廷より諸國の佛寺に納め給ひし小塔、經卷をおさめ入れたるもの。


[ひやくまんタフ]

(ひやく-まん-べん)[百萬遍](名) ㊀山城國北白河の智恩寺にて修する佛事、衆僧車座をなし、千八十個の大珠數をくりて百萬たび念佛するもの。㊁轉じて、俗間にて數人車座をなし、大珠數をくりて念佛をあまたゝび唱(とな)ふるものゝ稱。

(ひやく-み)[百味](名) 數多の食物、「—の飲食」。

——**だんす**[百味箪笥](名) 漢方醫の藥品を貯ふる箪笥、小さなる引出の多く附きたるもの。

(ひやく-みやく-こん)[百脈根](名)【植】「みやこばな」に同じ。

ひやく-ものがたり[百物語](名) 夜間數人相集まりて種々の怪談をなすこと。

(ひやく-やう)[百樣](名) いろ〳〵のさま。

(ひやく-やく)[百藥](名) おほくのくすり。——**のちやう**[百藥長](名) 酒の異稱。

(びやく-らふ)[白蠟](名)「はくらふ」に同じ。

(びやく-り)[白痢](名) 白色の排泄物ある下痢。

なめ。

(ひやく-りやう-きん)[百兩金](名)【植】「からたちばな」の一名。

(ひやく-れう)[百僚](名) もろ〳〵のつかさ。

(ひやく-れん)[百錬](名) よくきたふこと。きたひにきたふこと。「—の鐵」。

(びやく-れん)[白蓮](名) ㊀白色の蓮花。㊁境遇のためにけがれざるもの。

(びやく-れん)[白斂](名)【植】「やまかがみ」に同じ。

(ひやく-ゑ)[百會](名) 頭の中央。なうてん。

ひや-ざけ[冷酒](名) 燗をせぬ酒。つめたき酒。

ひや-す[冷](他、さ四) ㊀冷ゆるやうにす。㊁刀にて人を斬る。(元祿時代の語)。

(ひやつ-こい)[冷](形) つめたし。ひやし。

(ひやつ-ぱう)[百方](名) ㊀いろ〳〵の方角。方々。㊁いろ〳〵のてだて。

(ひやつ-ぱん)[百般](名、副) いろ〳〵。さま〴〵。

ひ-やとひ[日傭](名) 一日限りやとふこと。

ピヤノ(名)「ピアノ」に同じ。

(ひや-ひや)[冷冷](名、副) ㊀ひやゝかなるさまにいふ語。㊁危き場合にあやぶみおそるゝさまにいふ語。

ヒヤ-ヒヤ[Hear, Hear](副)「ヒヤ」に同じ。

ピヤボン[口琴](名) 北海道舊土人間に行はるゝ一種の樂器、竹又は鐵を薄く四五寸許にし、鐵線にて端を卷き、口に啣(く)み呼吸にて音色を調節しつゝ、手を以て彈(はじ)き鳴らすもの。ピヤボン。くちびは。

ひや-みづ[冷水](名) ㊀つめたき水。㊁老人の「意氣張」。

ひや-むぎ[冷麥](名) きりむぎをゆでゝ、水に冷(ひ)やして食ふもの。

ひや-めし[冷飯](名) ㊀ひやゝかになりたる飯。㊁丁寧にあひしらはざる人に供するもの。——**くひ**[冷飯食](名) ゐさふらふ。かゝりうど。——**ざうり**[冷飯草履](名) 緒をも藁にて組み紙なども卷かず、そのまゝなる藁草履。

ひや-やか[冷](名) ㊀ひえてあること。つめたきこと。㊁人情なきこと。同情なきこと。㊂愛敬なきこと。愛想なきこと。㊃おちつきて動ぜざること。「—に笑ふ」。

ヒヤンチン[香椿](名)【植】(字の唐音)楝科に屬する木、葉は一回羽狀複葉をなし新葉は紅色を呈す、果實の形は連翹に似、圓くして長く、熟すれば裂開す、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に供せらる。たまつばき。

(ひ-ゆ)[譬喩](名) 或物事を說くに、これと相類似し若しくは相對比するものを假りて用ふること。たとへ。(比喩)。

ひゆ[莧](名)【植】莧科に屬する草、葉は大形にして卵圓狀をなし、綠色若しくは赤色を帶ぶ、花は小形黃白色にして秋の頃開く。

ひ-ゆ（ひえ・ひえ・ひゆ・ひゆる・ひゆれ・ひえよ）[冷](自、や下二) ㊀熱さめてつめたくなる。ひやゝかになる。㊁勢衰ふ、心くじく。

ひ-よう[日傭](名) 一日限り雇(やと)はるゝこと。

(ひ-よう)[費用](名) いりめ。つひえ。入費。

ひよう[雹](名) 雷雨の時などに降る霰よりも結晶大形なるもの、多くは三稜なり。ひさめ。

ひよう[莧](名)【植】「ひゆ」に同じ。

(び-よう)[美容](名) うつくしき容貌。

(ひよう-い)[憑依](名) よりすがること。たよること。

(ひよう-が)[氷河](名) ㊀こほりのはりつめたる河。㊁【地】多量の降雪凍結したるとき、其重量のため下層融解して降下するもの、數多の谷より相合して大塊となりて降下す、其狀恰も河流の如し。——**せいそう**[氷河成層](名)【地】氷河に運搬せられたる岩石等の堆積せるもの。

(ひよう-かい)[氷海](名) 一面に氷結したる海、南北極などにあるもの。

(ひよう-かい)[氷解](名) 氷の消(と)けたらんが如く疑念の解くること。判然すること。

ひよう-かせぎ[日傭稼](名)「ひようとり」に同じ。

(ひよう-きよ)[憑據](名) よりどころ。

(ひよう-きん)[剽輕](名) じようだん。こつけい。

(ひよう-くわ)[氷菓](名)「アイスクリーム」。

(ひよう-くわい)[氷塊](名) 氷のかたまり。

(ひよう-けつ)[氷結](名) 寒氣にあひて水の凝結すること。こほること。

(ひよう-ざん)[氷山](名)【地】兩極地方にて海水の凍結が夏季に際し融解し始むるとき、海中に浮べる氷の大塊の稱。又、海中に突出せる氷河より海中に出で浮べる氷の大塊の稱。

(ひよう-しつ)[氷室](名) ひむろ。

(ひよう-しやく)[氷釋](名)「ひようかい」(氷解)に同じ。

(ひよう-せつ)[氷雪](名) こほりとゆきと。

(ひよう-たん)[氷炭](名) こほりとすみと。轉じていちじるしく相違せること。「—相容れず」。

(ひよう-ちゆう)[氷柱](名) 垂氷(たるひ)。つらゝ。

(ひよう-てん)[氷點](名)【理】水の凝結しそめ又は氷の融解しそめんとするときの溫度。「—以下」。

(ひよう-でん)[氷田](名) 土地の一面氷にておほはれたる所。

ひよう-とり[日傭取](名) ひやとひの人足。

(ひよう-や)[氷野](名)【地】雪線以下の堆雪におほはれたる地。

(ひ-よく)[肥沃](名) 地味肥えて作物のよく出來ること。(豐饒)。

(ひ-よく)[比翼](名) ㊀翼をならぶること。「—の鳥」。㊁重着の衣服の裏に其緣のみをつけて仕立てたるもの。——**づか**[比翼塚](名) 情死をとげたる男女を同穴にはうむりたる塚。——**のとり**[比翼鳥](名) ㊀支那の傳說にある鳥、雄雌共に一目一翼にして常に一體となりて飛ぶといふもの。轉じて、男女のいたく相親しみて離れがたなき關係にたとへていふ語。「天にありては—となり」。㊁【動】「ふうてう」(風鳥)の一名。——**もん**[比翼紋](名) 情人の紋所と自己の紋所とを組合せたる紋。——**れんり**[比翼連理](名)(比翼の鳥と連理の枝との義)男女互に相親む心切にしてちぎりのかたきをいふ語。

ひ-よけ[日除](名) 日光をよくるためのもの。ひおほひ。

ひ-よけ[火除](名) ㊀火事の燃(も)え移るを避くること。「—地」。㊁ひぶせ。

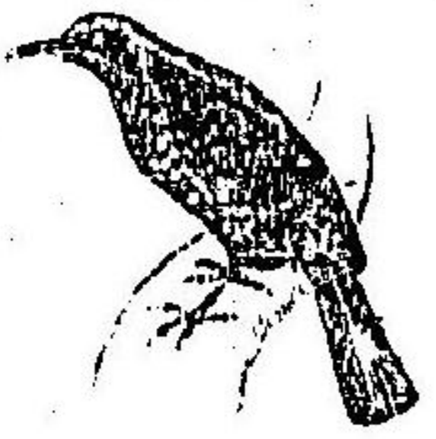
(ひよつくり)(名、副) 不意に出會又は現出するさまにいふ語。

(ひよつこ)[雛](名) ひよこ。

(ひよつと)(副) ㊀不意に。偶然に。㊁もし。萬一。

(ひよつとこ)(名) ㊀片眼小さくして口尖(とが)り出でたる男性の醜き假面。(彥德)。㊁男子をのゝしりていふ語。

ひよ-どり[鵯](名)【動】(「ひえどり」の轉)燕雀類中ひよどり科に屬する鳥、形つぐみに似、尾長く脚細し、背部は蒼灰色、胸腹部は灰褐色にして黑色の斑あり、性機敏にして飛翔巧(こう)なり。(白頭鳥)。——**じやうご**[鵯上戶](名)【植】茄科に屬する草、原野に自生す、蔓莖にして、葉は菊に似る、花は白瓣黃蕊にして葉間に着生す、果實は南天に似て秋より冬にかけて熟す、鵯の好みて啄(つい)むによりて此名あり。(蜀羊泉)。——**ばな**[鵯花](名)【植】菊科に屬する草、葉は長くして對生し、莖と共に粗毛を生ず、花は白色及淡紫色の二種あり。(山蘭)。


[ひよどり]

＋ひ-よみ[日讀](名)「こよみ」(曆)に同じ。——**のとり**(名) 漢字にて酉の字の稱。

ひよめき[顖門](名)(ひよ〳〵と動く義)嬰兒の腦蓋骨の未だかたからざる時、前頂の呼吸する每に動く處。をどり。

ひ-より[日和](名) ㊀空もやう。空あひ。天氣。㊁晴れてほがらかなる空合。晴天。晴和。㊂事のなりゆき。形勢。——**げた**[日和下駄](名) 齒の低き足駄、おもに晴天のとき履(は)くもの。——**み**[日和見](名) ㊀晴雨を豫測すること。㊁形勢を

觀望して心に兩端を抱くと。

ひより［𤸎］（名）蹄の巫中にある薄き皮。

〔ひよろ・つ・く〕（かきくくけけ）（自、か四）足のふみど定まらず。ひよろ〳〵す。（蹣跚、蹌踉）。

〔ひよろ・ひよろ〕（名、副）㊀足のふみどのたしかならざるさまにいふ語。（蹌踉、蹣跚）。㊁勢なげに長く伸びたるさまにいふ語。㊂進行の勢なげなるさまにいふ語。「搦盛が—矢」。

〔ひよろ・まつ〕（名）ひよろ〳〵のび延ゆる松。

〔ひよろ・め・く〕（かきくくけけ）（自、か四）ひよろ〳〵す。

ひ・よわ・し（くしきくけれ）（形、二）もろく弱し。ひわやかなり。かよわし。

ヒヨン・カツ（名）伽羅の類の下品なるもの。

〔ひよん・な〕（形）物事の意外にして好ましからざるにいふ語。「—こと」。

ひよん・の・き（名）【植】「ゆす」（柞）の一名。

ひら［鯿］（名）【動】喉鰓類中にしん科に屬する魚。體軀側扁にして形このしろに似、背部は蒼色にして腹部は銀白色なり。體長二尺餘に達す。我國西南海に多し。

ひら［片］（名）㊀薄くして平らかなるもの、面。㊁あつまり重なりて一物を形成する細片。「花—」。

ひら［平］（名）㊀たひらかなると。ひらたきと。㊁なみ、普通。「—侍」。㊂「ひらわん」の略言。

〔びら〕［片］（名）㊀興行の番附。㊁興行又は開店などの祝儀に送る張紙、面に祝儀の文字又は粗畫などをかきたるもの。「なき下駄。

ひら・あしだ［平足駄］（名）下面の平かにして齒

〔ひら・あやまり〕［平過］（名）たゞ〳〵あやまり入りてあると。ひたあやまり。

（ひ・らい）［比來］（副）このごろ、ちかごろ。

ひら・いと［平絲］（名）よりのすくなき絲。

（ひらい・しん）［避雷針］（名）次條に同じ。

（ひらい・ちゆう）［避雷柱］（名）【理】落雷の害ひを避（サ）くるための裝置。尖端を有する金屬製の柱にして、これを屋上に樹（タ）て、家屋との間を絕緣し、銅線によりて地板に連絡せしむるもの。電氣を有する雲の其柱頭に近づくときは、感應によりて柱頭に異名の電氣生ず。此異名の電氣は尖端より徐々に空氣中に放電して雲中の電氣を漸々中和せしむ。

（ひ・らう） ヒロウ［疲勞］（名）つかるゝと。くたびるゝと。「—を來せり」。

び・らう ビロウ［蒲葵］（名）（檳榔の轉音）【植】棕櫚科に屬する植物、熱帶地方に産す。葉は棕ろに似て大く、笠・扇に製し又は屋根を蔽ふ料に供せらる。

びらう・げ ビロウゲ［檳榔毛］（名）「びらうげのくるま」の略言。——**の・くるま**［檳榔毛車］（名）屋形の箱（ハコ）にびらうの葉を裂（サ）きて垂れたる牛車。

ひら・うち［平打］（名）㊀紐（ヒモ）をひらたく打つと。又、其打方の紐。㊁金屬をひらたく打つと。又、ひらたく打ちたる金屬。「—の銀簪」。——**ひも**［平打紐］（名）打方の平打なる紐。

ひら・おし［平押］（名）一氣に押し進むと。

ひら・おり［平織］（名）綾織などに對して、普通の織方の稱。又、其織方の布帛。「瓶。ほとぎ。

‡ひら・か［平瓫］（名）土器の平形なるもの。淺き

ひら・がな［平假名］（名）いろは四十七文字の稱。

‡ひら・かなへ ‐カナエ［鑊］（名）ものを煮（ニ）る釜。さうがな。なんなて。

ひら・がね［扁鉦］（名）たゝさがね。

ひら・がま［平釜］（名）ひらたくあさき釜。

‡ひらが・る（らりるるれれ）［平］（自、ら四）ひらたく伏す。「虎ひらがりて」。

ひらき［開］（名）㊀ひらくと。あくと。㊁あくると。ひらくると。㊂はじむると。おこすと。㊃つぼみのほころぶると。さくと。「花の—」。㊄さはりのとけ去ると。又、さはりをとき去ると。㊅開拓。開墾。㊆ますと。殖（フ）ゆると。「直段の—」。㊇ひらき戸の入口。㊈婚儀の宴席より散じ去ると。解散。——**ど**［開戸］（名）くゐゝ又は蝶番（テフツガヒ）などの裝置によりて開閉する戸。まひど。

ひらき［柊］（名）【植】「ひひらぎ」の略言。

ひらき・なほ・る ‐ナオル（らりるるれれ）［開直］（自、ら四）ゐずまひを直してきっとなる。又、態度を改めておごそかになる。

ひら・きぬ［平絹］（名）平織の絹布。

ひらき・ばしら［開柱］（名）橋の兩端の柱の上に擬寶珠のあるもの。葱臺。

ひらき・ふう［開封］（名）㊀封をせぬ書狀。㊁封をせぬ郵便物。

ひら・く（かきくくけけ）［開］（自、か四）㊀はなれ明く。あく。「門—」。㊁つぼみ綻（ホコ）ぶ。さく。「花—」。（發）。㊂快くなる。晴る。㊃あふる。みなぎる。「滯—」。

ひら・く（かきくくけけ）［開］（他、か四）㊀はなち明く。あく。「門を—」。㊁ひろぐ。のぶ。「書を—」。（披）。㊂張る。大きくす。「口を—」。㊃解く。排す。「疑を—」。㊄說く。述ぶ。㊅かゝぐ。ためす。㊆はじむ。おこす。㊇知識を啓發す。（啓）。㊈土地を開拓す。（闢）。㊉さかんにす。はえさす。「運を—」。（發）。⑪【數】乘根を求む。

ひら・く（けけくくるくれけよ）［開］（自、か下二）㊀はなれ明く。あく。㊁ひろがる。のぶ。㊂大きくなる。張る。㊃蕾綻（ホコロ）ぶ。さく。㊄きはやかになる。こゝろよくなる。「胸が—」。（豁）。㊅たちのく。退散す。㊆はじまる。おこる。㊇智見生ず。さとりつく。（啓）。㊈宅地又は耕地若しくは通路となる。㊉さかんになる。よくなる。「運が—」。⑪人智進歩す。文物發展す。⑫人情に通ず。粹にてあり。「ひらけた老人」。

ひら・くび［平首］（名）馬の首の側面。

ひら・ぐも［平蜘蛛］（名）【動】㊀蜘蛛の一種。體軀扁平にして、夜間壁上などを徘徊し、よく蟲を捕（ト）ふるもの。（壁錢）。㊁いと平身低頭したると。

ひらけ［開］（名）㊀ひらくると。㊁世上の事物、人民の知識等の進むと。開化。

ひら・ざや［平鞘］（名）鞘の平かなる刀劍。維新前暫時行はれたるもの。

ひら・ざむらひ ‐ザムライ［平侍］（名）たゞのさむらひ。

‡ひら・しき・の・おまし［平敷御座］（名）「ひのおまし」に同じ。

ひら・しま［平島］（名）㊀地形のひらたき島。㊁草木なき島。

‡ひら・しらげ［糲］（名）くろごめ。玄米。

ひら・せ［平瀬］（名）傾斜すくなき早瀬。

ひら・た［平田］（名）「ひらたぶね」の略言。「じ。

ひら・たぐも［平蜘蛛］（名）【動】「ひらぐも」に同

ひら・たけ［平茸］（名）【植】一種の菌、形は松茸に似、菌傘は扁平にして淡黑色なり。

ひら・た・し（くしきくけれ）［平、扁］（形、二）㊀厚さ少なくして横に廣し。たひらなり。㊁圓滑なり。かどだゝず。

ひらた・ぶね［平田船］（名）底の平たくして長き小船。

ひら・ち［平地］（名）平かなる土地。へいち。

〔びら・つ・く〕（かきくくけけ）（自、か四）びら〳〵す。

〔ひらったい〕［平］（形）「ひらたし」の訛。

ひら・づうみ［平包］（名）ふろしき又はふくさなどの稱。

ひら・づめ［平詰］（名）常に當直（トノ）して非番なきと。ながづかへ。

ひら・づら［平面］（名）ひらたき顏。

ひら・て［平手］（名）開きたる掌（テノヒラ）。

ひら・で［枚手］（名）古昔、柏の葉を十枚合はせ、竹釘にて綴（ト）ぢて、盤の如くにしたる食器の稱。後世、其形をなせる器物の稱。

ひら・ど［平戸］（名）金銀の線を編みたる細工物。初め肥前國平戸島にて製せしよりいふ。

ひら・なべ［平鍋］（名）底淺くひらたき鍋。

ひら・に［平］（副）㊀ひらたく たひらに。㊁ひたすらに。なにとぞ。まっぴら。

ひら・ば［平場］（名）ひらち。平地。

ひら・ばかま［平袴］（名）半袴。

ひら・ばり［平張］（名）平かに張りて天井（テンジヤウ）とする日覆の幕。（假屋）。

ひら・ばり［平針］（名）はゞり。

‡ひら・びたひ ‐ビタイ［平額］（名）古昔、女官の使用したるひらたきひたひ。（額の條參照）。

ひら・びと［平人］（名）なみのひと。たゞのひと。

〔ひら・ひら〕［片片］（名、副）紙又は旗などの風に翻（ヒルガヘ）るさまにいふ語。（閃閃、翩々）。

〔びら・びら〕（名、副）物の垂れ翻るさまにいふ語。

〔ぴら・ぴら〕（名、副）「ひらひら」に同じ。

‡ひら・ぶ（ばびぶぶべべ）［平］（自、は四）「ひらむ」に同じ。「じ。

‡ひら・ぶ（ぶるぶれべよ）［平］（他、は下二）「ひらむ」に同

ひら・ぼね［平骨］（名）胸骨。

ひら・む（まみむむめめ）［平］（自、ま四）㊀ひらたくなる。㊁ひれふす。平伏す。

ひら・む（めむむめめよ）［平］（他、ま下二）ひらたくす。

ひら・むし［扁蟲］（名）【動】さなだむし及「ヂストマ」などの稱。其體の扁（ヒラ）さが故にいふ。

ひら・め［平目］（名）【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚。體軀は長楕圓形にして扁平なり、左右相稱ならずして幼時は各側に各一眼を具すると尋常の魚の如くなれど、長じて後兩眼は一側に偏在す。右側は白色にして左側は淡黑色なり。我國東海及北海に多く產す。（比目魚、鮃）。「ひらむ。

ひら・めか・す（さしすすせせ）［平］（他、さ四）ひらたくす。

ひら・めか・す（さしすすせせ）［閃］（他、さ四）㊀ひらめくやうにす。㊁ひら〳〵ものを振りまはす。「白刃を—」。

ひら・め・く（かきくくけけ）［閃］（自、か四）光輝忽ち發し忽ち沒す。ひら〳〵とかゞやく。「電光—」。「ると。

ひら・もとゆひ ‐モトユイ［平元結］（名）丈長（タケナガ）を疊（タヽ）みたる元結。

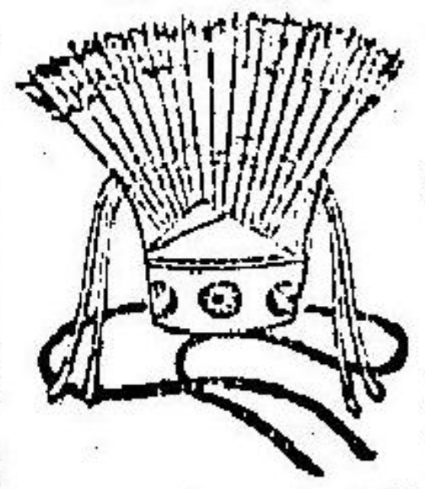
ひら・もり［平盛］（名）椀のふちと同じ高さに盛

ひら・もん［平紋］（名）綵地にゑがきたる模樣。

ひら・もん［平門］（名）家根の平たき門。

ひら・や［平屋］（名）二階のなきたゞの家屋。たかどのを設けざる家屋。——**だて**［平屋建］（名）二階のなき構造。又、其家屋。——**づくり**［平屋作］（名）前條に同じ。

ひら・やなぐひ ‐ヤナグイ［平胡籙］（名）やなぐひの一種。平たく作り、矢を扇子形に插（サ）すもの。

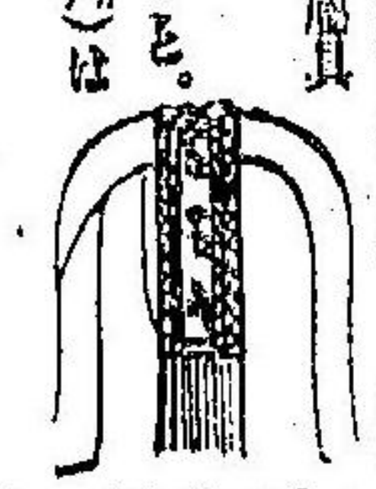


［ひらやなぐひ］

ひらり（名、副）輕く飛びひるがへるさまにいふ語。——**ひらり**（名、副）幾つとなく輕く飛びひるがへるさまにいふ語。

ひら・わん［平椀］（名）底の淺くしてひらたき椀。

ひらを〔平緒〕(名) 昔時、束帶の時、腰より袴の上に垂る、平組の緒、太刀の附屬具なり。


〔ひらを〕

(**ぴ-らん**〔糜爛〕(名) たゞるゝこと。

(**ひ-り**〔非理〕(名) 理に道(カナ)はざること。道にそむけること。

〜**ぴり** (名) ㊀をはり。末り。最下等。㊁劣等なる肉桝に賦(フ)けること。㊂裂けやすき布帛。

(**ひ-りう**〔皮流〕(名)【地】方向の一定せざる表面の流。

ヒリウヅ〔飛龍頭〕(名)(「ホルトガル」語) ㊀一種の食品、粳米(ウルシネ)及糯米(モチゴメ)の粉を等分に混合し、水にてねり、蝶(ユ)で、油に揚げたるもの。㊁豆腐のがんもどきの稱。

(**ぴ-りき**〔微力〕(名)「びりよく」に同じ。

ピリヂン〔Pyridine〕(名)【化】石炭「タール」より得る無色の液體。

〜**ひり-つ-く** (自、か四) ひり〳〵す。

〜**びり-つ-く** (自、か四) びり〳〵す。

〜**ぴり-つ-く** (自、か四) ぴり〳〵す。

(**ひ-りつけん**〔非立憲〕(名) 專制にして立憲の主旨にたがふこと。

〜**ぴりつ-とけ** (名) 末り。すゑ。最下等。

(**ひ-り-は-ふ-けん-てん**〔非理法權天〕(名) 楠正成が其旗に記し、「非は理にかつことあたはず、理は法にかつことあたはず、法は權にかつことあたはず、權は天にかつことあたはず、天は明かにして私なし」の語の義にして、人事幾多の波瀾曲折ありとも、つまりは天を欺くことあたはず、又、天にさかふことあたはずといふこと。

++**ひり-ひり** (名、副) ひらめくさまにいふ語。

〜**ひり-ひり** (名、副) ㊀うづきいたむさまにいふ語。㊁辛き味のもの、強く刺激するさまにいふ語。(疼)。

〜**びり-びり** (名、副) ㊀布帛などのさくる音のさまにいふ語。㊁障子などのひゞきうごくさまにいふ語。

〜**ぴり-ぴり** (名、副)「ひりひり」に同じ。

++**ひり・ふ**〔拾〕(他、は四)「ひろふ」の古言。

(**ひ-りやう**〔悲涼〕(名) あはれなること、又、かなしきこと。

(**び-りやう**〔微涼〕(名) すこしくすゞしきこと。

(**び-りやう**〔鼻梁〕(名) はなすぢ。はなばしら。

(**ひ-りゆう**〔飛龍〕(名) 空にとぶ龍。

(**ひ-りよう**〔飛龍〕(名) 前條に同じ。

(**び-りよく**〔微力〕(名) ㊀力の乏(トボ)しきこと。力の足らぬこと。㊁分際のひくきこと、身分の及ばぬこと。㊂自分の力の謙稱。

〜**ひり-り** (名、副)「ひりひり」に同じ。

〜**びり-り** (名、副)「びりびり」に同じ。

〜**ぴり-り** (名、副)「ぴりぴり」に同じ。

ピリリ (名)(「ラテン」語 Bilsi 膽汁の義) 昔時、「オランダ」人より傳へたる苦味多き一種の藥劑、熊の膽を原料とし製し固めたるもの、霍亂・齒痛・蛇毒・蟲毒などに用ひて効あり。

(**ひ-りん**〔比隣〕(名) すぐのとなり。のきならび。

(**ひ-りん**〔比倫〕(名) たぐひ。ならび。

(**ひ-りん**〔鄙吝〕(名) いやしきこと。やぶさか。

ひる〔晝〕(名) ㊀地球の表面の日光を受くる間。朝より夕までの間。㊁まひる。正午。日中。(午時)。

ひる〔蛭〕(名)【動】環蟲類に屬する蠕形動物、池沼・溪流等に産す、形は蚯蚓に類し體輪百二個を有す、體色種々あり、口腔に鋸齒狀の縁を有する顎板三個を具し、人畜の皮膚に吸着して血を吸ふ、(蛟、蜞)。——に鹽 最も畏れ忌むものに出會して、いと畏縮するにいふ語。

ひる〔蒜〕(名)【植】百合(ユリ)科に屬する草、各地に自生す、臭氣強し、葉は狹長にして淡紫色の花開く、地下莖は白色にして長楕圓形をなし食用に供せらる。(葫荽)。

ひ・る〔放〕(他、ら四) 體外へ放出す、「屁を—」。

++**ひる**〔嚏〕(他、は上一) くさめをす、はなひる。

ひる〔干〕(自、は上一) ㊀水分發散して盡く、かわく、(乾涸)。㊁潮退き海底出づ。㊂つく。はつ、(竭)。

ひる〔簸〕(他、は上一) 箕(ミ)にて穀物をあふり振ひて屑(クヅ)を去る。

ひる-いし〔蛭石〕(名)(鑛)雲母の一種、黑色を呈し多量の水を含有す、これを炭火に投ずれば蛭の體を延ばすが如くに延長す。

++**ひる-いひ**〔晝飯〕(名) ひるげ。

ひる-かぎ〔蛭鉤〕(名) 中ぶとの鉤。

ひる-がへ-す〔飜、翻、飄〕(他、さ四) ㊀反對にす。うらがへす。ひっくりかへす、「前說を—」。㊁などらし飛ばす、「身を—」。㊂揭(カカ)げひらめかす、「旗を—」。

ひる-がへ-る〔飜、翻、飄〕(自、ら四) ㊀裏表になる。うらがへる。ひっくりかへる。㊁などり飛ぶ。㊂ひらめき揚(ア)がる。

ひる-がほ〔晝顏〕(名)【植】旋花科に屬する草、原野に自生す、葉は戟形又は箭形をなす、花は朝顏に似て小さく淡紅色若しくは白色にして、午前開き午後萎(シボ)む、(旋花、鼓子花)。

〜**ひる-きつね**〔晝狐〕(名)(晝間に巣の外へ出でたる狐の義) さよるつきて落着かざるものをのゝしりていふ語。

ひる-げ〔晝食〕(名) ひるめし。ちうじき、ひる。

ひる-こ〔蛭子〕(名) 伊弉諾尊の第一の御子、今いふ恵比須はこれなりともいふ。

ひる-ご〔晝後〕(名) ひるすぎに同じ。

ひる-さがり〔晝下〕(名) 昔時の未の刻、即ち現今の午後二時頃、(下午)。

++**ひる-さき**〔蒜頭〕(名) 蒜の根の玉。

ビルシヤナ〔毘盧遮那〕(名)【佛】(梵語 Vairocana、光明遍照の義) 眞如法身又は大日如來の稱、內證法界を照らし、外身光を以て大機を照曜すといふ。

ひる-すぎ〔晝過〕(名) 正午を過ぎたる頃。午後。

++**ひる-つき** (名) 蒜を搗(ツ)きたるあへもの。

〜**ひる-とび**〔晝鳶〕(名) 次條に同じ。

〜**ひる-とんび**〔晝鳶〕(名) 晝間他人の財物をさらひ行くぬすびと。(東京の方言)。

ひる-なか〔晝中〕(名) ㊀ひるま。㊁まひる。ひざかり。

ひる-ぬすびと〔晝盜〕(名) ひるまに他人の財物をぬすむもの。

ひる-ね〔晝寢〕(名) 晝間寐ること。(午睡、黑甜)。

++**ひる-の-おまし**〔晝御座〕(名) 天皇の晝間の御座所。

ひる-の-こ〔蛭子〕(名)「ひるこ」に同じ。++——がよはひ〔蛭子齡〕(名) 三歲のよはひ。

ビル-ブローカー〔Bill broker〕(名) 手形を割引にて買取りこれを他へ轉賣するを業とするもの、即ち手形の仲買人。

ひる-べんたう〔晝辨當〕(名) 晝食のべんたう。

ひる-ま〔晝間〕(名) 朝より夕までの間。晝の間。

ひる-まき〔蛭卷〕(名) 槍・薙刀の柄若しくは刀の鞘(サヤ)などを籐にて間を隔(ヘダ)てゝ卷きたるもの。

ひるま-す (他、さ四) ひるむやうにす。

〜**ひるま-すぼ**〔胼〕(名) こむら。(中國地方の方言)。

ひる-まへ〔晝前〕(名) 正午に近き正午前の時刻。午前。

ひる-む (自、ま四) ㊀痲痺す。なびる。なゆ。㊁挫けちゞむ。よわる。たわむ。

ひる-むしろ〔蛭床子〕(名)【植】(い) 眼子菜科に屬する草、水中に生ず、水上に浮べる葉は綠色楕圓形にして光澤を有し長き葉柄を具す、水中にある葉は狹披針形をなす。(眼子菜)。(ろ)「はまにんじん」の一名。

ひる-めし〔晝飯〕(名) ひるのおしよく、ひるげ。ちうじき。(晝食、午飯、午餐)。

ひる-も〔蛭藻〕(名)【植】「ひるむしろ」(い)に同じ。

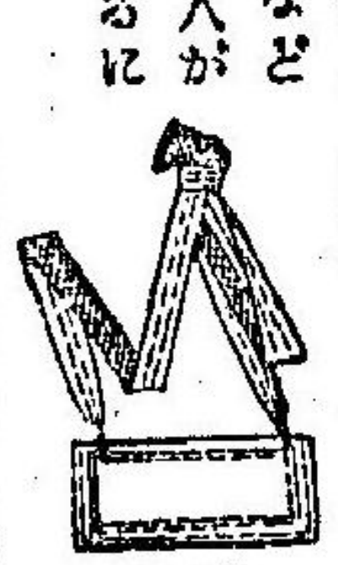
ひる-やすみ〔晝休〕(名) ㊀晝食するときの休憩。㊁ひる眠ること。ひるね。

++**ひる-わりご**〔晝破子〕(名) ひるべんたう。

(**ひ-るゐ**〔比類〕(名) たぐひ。くらべ。

(**ひ-るゐ**〔匪類〕(名) 等類にあらざるもの。

++**ひれ**〔領巾〕(名) 古昔、婦人の頸(ビク)にかけて飾りとなし、布帛。「裙帶—」などの」。——ふる 古昔、婦人が領巾をふりて人を招きたるにいふ語。


〔ひれ〕

ひれ〔鰭〕(名) ㊀魚類の脊・胸・腹・臀・尾にある水中游泳の器官、膜狀をなし鰭骨ありてこれを支ふ。㊁鯨のえら。㊂身體のはし、又身體の品位。

(**ひ-れい**〔非禮〕(名) 禮にあらざること。禮にそむくこと。

(**ひ-れい**〔比例〕(名) ㊀例を取りての比較。てりあひ。㊁〔數〕二つの量の比が他の二つの量の比に等(ヒト)しき關係、これを表すに$a:b=c:d$の式を以てす。——しき〔比例式〕(名) 比例を表はす式、(前條㊁を見よ)。——しやく〔比例尺〕(名)「しゆくしやく」(縮尺)に同じ。——ちうかう〔比例中項〕(名)〔數〕比例の內項の相等しきもの、例へば$a:b=b:c$にてbの稱。——ちうすう〔比例中數〕(名)〔數〕前條に同じ。——はいぶん〔比例配分〕(名)〔數〕與へられたる數を與へられたる割合に比例するやうに配分する算法。——ぶぶん〔比例部分〕(名)〔數〕對數表を用ふるとき、表に揭(カ)げたる數より尙は一桁(ケタ)だけ多き數を求むるため、表の側傍に揭(カ)ぐる順次二個の數の對數の差の十分の一より十分の九までの數の稱、二個の數の差と其對數の差とは殆ど比例すと見做し算出して揭ぐるを以て此名あり。——りやう〔比例量〕(名)〔數〕比例をなす四つの各量の稱。

(**び-れい**〔美麗〕(名) うつくしきこと。うるはしきこと。「—なる花」。(華麗)。

(**ひ-れう**〔肥料〕(名) 土壤中に含有する作物の養分を維持且つ增加するため、土壤中に施用するもの、動植物より得るもの即ち糞・粕などの類を有機肥料といひ、動植物を燒きて有機性を失はしめたるもの若しくは礦物より得るもの即ち灰の類を無機肥料といふ。こやし。

(**ひ-れき**〔披瀝〕(名) 腹藏なくうち明くること。

(**ひ-れつ**〔鄙劣〕(名) 心又は行のいやしくおとりてあること。(卑劣)。

ひれ-なが〔鰭長〕(名)【動】まぐろの一種、胸鰭長く桃色なり、多くは鮪節とす。

ひれ-ふ-す〔平伏〕(自、さ四) ひらたく伏し

かゞむ。ひらたくかゞむ。

ひれ-ゑぼし[平烏帽子]（名） いたゞきを折りてかぶる烏帽子。

(ひ-れん[飛廉]（名） ㊀[植]「おにのまゆはき」に同じ。㊁風の神。

(ひ-れんじやく[緋連雀]（名） [動]連雀の一種、羽毛紅色を帶ぶるもの。

ひろ[尋]（名） 綱の長さ又は水の深さにて、六尺即ち一間の稱、又、八尺ともいふ。

＋ひ-ろ[日]（名） （「ろ」は接尾語）「ひ」に同じ。

＋ひろい[廣]（名） 古昔、官位の大に對して其低き方の稱。（從）。

(ひ-ろう[披露]（名） ㊀文書を披（ヒラ）き露（アラハ）して見すること。㊁公然とひろめ告ぐること。おほやけに發表すること。廣告。——じやう[披露狀]（名） つけじやう。そへじよ。

び-ろう[尾籠]（名） ㊀（「をこ」の宛字の音讀）失禮、無禮、不敬。「—のはなし」。㊁きたなきこと。けがらはしきこと。

ビロウド[天鵞絨]（名） （スペイン語Velluda）もと、西洋より舶來せし絹織物、緯絲に銅線を入れ、これを織り上げて後、其銅線を拔きとる時は經絲わなをなす、其わなを切り放ちて毛を立たしめたるもの。てんがじゆう。——せきしやう[天鵞絨石菖]（名） [植]天南星科に屬する草、岩石に着生す、葉は二三分許、密生して天鵞絨の如し、（雀舌）。

ひろ-が・す（さしすせせ）[廣]（他、さ四） ひろがるやうにす。ひろぐ。（擴）。

ひろ-が・る（らりるれれ）[廣]（自、ら四） ㊀のび敷く。のび張る。ひろくなる。㊁ひろく行はる。あまねく用ひらる。（弘）。㊂多くなる。はびこる。ふゆ。

ピロガロル[Pyrogallol]（名） [化]焦性沒食子酸の稱。

ひろ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[廣]（他、か下二） のべてひろくす。張りて大きくす。（擴）。

⌒ひろ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）（他、か下二） 人を罵るとき、「する」「おこなふ」の義にいふ語、「邪魔—」。

(び-ろく[微祿]（名） ㊀すくなき扶祿。小祿。（薄給、薄祿）。㊁おちぶるゝこと。零落。

⌒ひろげる（他） 「ひろぐ」の訛。

ひろ-こうぢ[廣小路]（名） 幅の廣き街路。ひろきみち。「上野の—」。

＋ひろ-ご・る（らりるれれ）[廣]（自、ら四） 「ひろがる」に同じ。

ひろさ[廣]（名） ひろきこと。ひろき度合。

ひろ・し（くしきけれ）[廣、弘]（形、二） ㊀面積多し、範圍大いなり。㊁空隙多し、あき多し。（曠）。㊂遠く開けてあり。うちひらけてあり。（闊）。㊃行きわたれり。あまねし。（博）。㊄度量大なり。おほやうなり。（寛）。㊅うちくつろげり。きもちよし。

ひろ-しき[廣敷]（名） 大名の邸の臺所向及奥向の稱。

ひろ-そで[廣袖]（名） 袖口の下方を縫合せざる袖。

ひろ-には[廣庭]（名） ひろくかまへたる庭。

ひろ-の[廣野]（名） ひろきのはら。（曠野）。

ひろ-ば[廣場]（名） ひろき場所。

ひろひ[拾]（名） ㊀ひろふこと。㊁あゆむこと。徒歩。「お—で」。——もの[拾物]（名） ㊀ひろひとりたるもの。㊁意外のまうけもの。——よみ[拾讀]（名） 文中の此處彼處の主要なる個所又は讀み得る字のみを拔きて讀むこと。

ひろ-びろ[廣廣]（名、副） いとひろきさまにいふ語。

ひろ・ふ（はひふふへへ）[拾]（他、は四） ㊀落ちてあるものを取上ぐ。㊁選（エラ）してある物を我手に入る。㊂えらび拔く。「字をひろひて讀む」。㊃採（ト）り收む。㊄貴人など徒歩にてあゆむ。

ひろ-ぶた[廣蓋]（名） もと衣服を藏むる匣の蓋の稱にして、賜與の服などこれに載せて授けたりしが、後世は其蓋の形に擬し、これに食物などを盛る。

ひろ-ま[廣間]（名） 廣き座敷。

ひろ-まへ[廣前]（名） 神殿の前庭。

ひろ-ま・る（らりるれれ）[弘、廣]（自、ら四） ㊀ひろくなる。㊁廣く行はる。あまねく用ひらる。

＋ひろみ[廣]（名） ひろき所。「—へ出てゝ」。

ひろ・む（めめむむるむれめよ）[廣、弘]（他、ま下二） ㊀ひろくなす。㊁ひろく行はるゝやうにす。あまねく用ひらるゝやうにす。㊂ひろく告ぐ。あまねく知らす。廣告す。吹聽す。披露す。

ひろめ[廣]（名） あまねく知らすこと。披露。吹聽。廣告。

ひろ-め[廣布]（名） [植]昆布の異稱、御膳中にて、幅廣きものなるが故に祝意を寓していふ語。

＋ひろめか・す（さしすせせ）[閃]（他、さ四） 「ひらめかす」に同じ。

＋ひろ-め・く（かきくくけけ）[廣]（自、か四） 「ひろがる」に同じ。

⌒ひろめる（他） 「ひろむ」の訛。

ひろ-やか[廣]（名） ひろ〴〵してあること。

＋ひろらか[廣]（名） 前條に同じ。

＋ひろろ・ぐ（がぎぐぐげげ）（自、か四） ぐらつく。ひよろつく。

(ひ-ろん[比論]（名） ㊀彼此を比較して論ずること。㊁彼此の類似の點をあげて研究すること。

ひわ[鶸]（名） ㊀[動]燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀より小さく、全身青黄色なり、好みて稗を食ふ。まひわ、かわらひわ、（金雀、金翅雀）。㊁「ひわいろ」の略言。

(ひ-わい[鄙猥]（名） いやしくみだりがましきこと。げびてけがらはしきこと。（卑猥）。

ひわ-いろ[鶸色]（名） ひわちや。

ひ-わたり[火渡]（名） 烈火の上を渡り行くこと。又其術。

ひわ-ちや[鶸茶]（名） もえぎに黄のかゝりたる褐色。

＋ひわ-づ[纖弱]（名） ひはやか。

＋ひわ-ぼそ[纖弱]（名） かよわきこと。ほそくよわきこと。

ひわ-やか[纖弱]（名） たをやかなること。かよなやかなること。

ひ-わり[日割]（名） ㊀給金などを日數に割り當つること。㊁數日間通じて爲ることを日々に割り當つること、「試驗の—」。——かんぢやう[日割勘定]（名） 日割にして勘定すること。

ひ-わりご[檜破子]（名） 檜物作の破子。

ひ-わ・る（るれれるるるれれよ）[干割]（自、ら下二） ㊀干（ヒ）て割（ワ）る、乾きて裂く。㊁きず生ず。缺目立つ。（罅）。

ひ-われ[干割]（名） ひわるゝこと。ひわれたる痕。

⌒——る（自） 「ひわる」の訛。

(ひ-ゐ[非違]（名） 法に違（タガ）ふこと、非法。

ひ-を[緋緒]（名） 緋色の緒。

ひ-を[氷魚]（名） （ひうをの約）琵琶湖又は宇治川に産する小魚、色白くして氷の如く、秋の末より冬にわたりて多く捕はる。

(ひ-をく[比屋]（名） ㊀屋をならぶること。㊁となりのいへ。合壁。

＋ひ-をけ[火桶]（名） 木製の圓き火鉢。

＋ひを-むし[蜉]（名） 朝に生まれ夕に死ぬる蟲。

＋ひ-をり[引折]（名） 「ひをりのひ」の略言。——のひ[引折日]（名） 古昔、大内の馬場にて、五月三日に左近、四日に右近のあらてつがひ終（ヲ）はりて後、まてつがひに列するため、射手が立派に裝ひ、更にあらてつがひを試みて、其儘大内へ乘り入る當日の稱。

(び-をん[微溫]（名） 熱のうすきこと。なまぬるきこと。——たう[微溫湯]（名） なまぬるきゆ。

(ひん[品]（名） たぐひ。くらゐ。すがた。やうす。たち。志な。「—がよい」「—がない」。

(ひん[牝]（名） めす。め。

(ひん[賓]（名） まらうど。きやく。

(ひん[嬪]（名） ㊀官女。宮女。㊁女子の美稱。㊂古昔の女官の號、即ち後世の更衣（カウイ）。

(ひん[貧]（名） ㊀財貨之（ボシ）しきこと。まづしきこと。㊁びんばふなるもの。びんばふ人。「—の盗人」。

(ひん[顰、嚬]（名） かほをしかむること。ひそむること。——にならふ[倣顰] ひそみにならふ。

(びん[敏]（名） ㊀はしこきこと。すばやきこと。するどきこと。㊁かしこきこと。さときこと。さかしきこと。

(びん[鬢]（名） 頭の左右の側面の髮。（髮）。

(びん[便]（名） ㊀たより。たのみ。㊁おとづれ。いんしん。㊂ついで。都合。「其—に持って行く」。

ビン[瓶]（名） ㊀（字の唐音）㊁陶製又は金屬製の器、即ち土瓶、鐵瓶、花瓶の類。㊂硝子の徳利。（壜）。

ピン[Pin]（名） とめばり。

ピン（名） ㊀（「スペイン」語Punta點の義）骨牌などの一の數。㊁轉じて、はじめ、第一。

(ひん-いう[牝遊]（名） 畜類の牝が志きりに牡と交尾せんとすること。さかりのつくこと。

(ひん-か[貧家]（名） まづしきいへ。

(ひん-かう[品行]（名） ㊀みもち。おこなひ。行狀。「—方正」。㊁志んびん。ひんかく。

(ひん-かう[貧巷]（名） 貧乏人のすむ處。

びん-かゞみ[鬢鏡]（名） 手に持ちて鬢を照らし見る小さき鏡。

びん-かき[鬢掻]（名） びんをつくろふ小さき櫛。

(ひん-かく[品格]（名） 志な。ひん。

(ひん-かく[賓客]（名） まらうど。きやく。

＋びん-がし[東]（名） （ひむかしの音便）ひがし。

(ひん-かん[貧寒]（名） まづしくいやしきこと。

＋びん-ぎ[便宜]（名） たよりよきこと。たよりよきをり。

(ひん-ぎう[牝牛]（名） めうし。

(ひん-きやう[貧境]（名） まづしき境遇。

(ひん-きやく[賓客]（名） 「ひんかく」に同じ。

(ひん-きゆう[貧窮]（名） まづしくくるしきこと。貧乏。貧困。貧窶。

(ひん-きゆう[殯宮]（名） 君主等の假葬してある所。

(ひん-きよ[貧居]（名） まづしきすまひ。

(ひん-ぎよ[嬪御]（名） 君王の御寢所にはんべる宮女。

(ひん-く[貧苦]（名） まづしきくるしみ。

＋びん-ぐき[鬢莖]（名） 鬢の毛筋。

びん-ぐし[鬢櫛]（名） 鬢を搔き上ぐるに用ふる櫛。黄楊（ゲツ）又は梅の材などにて作り、横に長くして齒のあらきもの。

(びん-くわい[敏快]（名） すばやきこと。するどきこと。

(びん-くわつ[敏活]（名） 才能のとゞこほりなくよくはたらくこと。

(ひん-けい[牝鷄]（名） めすのにはとり。——あしたをつかさどる[牝鷄司晨] 婦人が勢力をふるひ、萬事にくちばしを入れて支配するをいふ。

(びん-けい[敏慧]（名） さかしきこと。かしこきこと。

(ひん-けつ[貧血]（名） 身體の血液が適度の量よ

り少なきこと。——ぢやう[貧血性](名) 貧血なる體質。

ぴんご[備後](名) 「びんごおもて」の略言。——**おもて**[備後表](名) 備後國より産出する上等の疊表。こひげの莖もて織りたるもの。

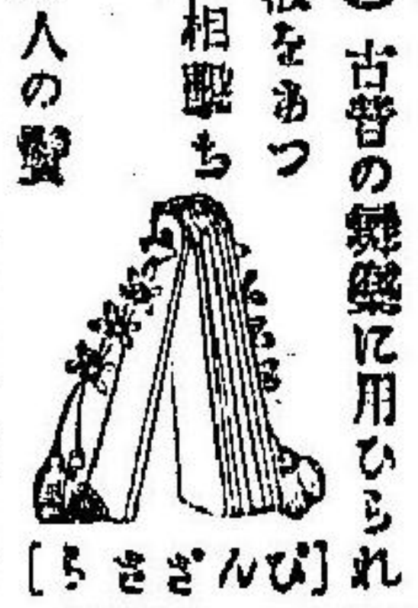
(ひんこう[賓貢](名) 外國人の入朝して貢物をさゝぐること。

(ひんこく[貧國](名) まづしきくに。

(ひんこん[貧困](名) まづしくくるしきこと。ひんきゆう。

(ひんさう[貧相](名) 貧乏らしき相好。貧乏の運命を具する相好。(究相)。

廿びんざさら[拍板](名) 古昔の雜樂に用ひられし一種の樂器。數十枚の板をあつめ其一端をつゞりあはせ、相擊ちて音を發せしむるもの。


[びんざさら]

びんざし[鬢差](名) 婦人の鬢を脹(フク)らするため中に入れ用ふる具、細き鐵などを撓(タ)めて作れるもの。びんはり。

(びんさつ[憫察](名) あはれみておもひやること。

(ひんし[品詞](名) 【文法】單語を其表はせる意義又は形式の種類によりて分類したるもの、名詞・代名詞・形容詞・動詞などの如きこれなり。

(ひんし[貧士](名) まづしき人士。

(ひんじ[貧兒](名) まづしき家のこども。

(ひんじ[賓辭](名) 【文法】「かくご」(客語)に同じ。「主辭の對。

(びんし[鬢絲](名) 鬢の白髮。

(ひんしつ[品質](名) もちまへ。たち。

(ひんしやう[嬪嬙](名) こしもと。そばめ。

(ひんしゆく[顰蹙](名) かほをしかむること。ひそむること。

(びんぢよ[便所](名) ㊀休息する部屋。㊁便宜なる場所。

(ひんしるゐ[貧齒類](名) 【動】脊椎動物の一、熱帶地方に棲息す、齒は極めて不完全なり、體軀は甲鱗を以て被(オホ)はる、趾に鋭爪ありて地を掘り食物を搔(カ)きさがす、昆蟲又は動物を食とす、性遲鈍なり、穿山甲等これに屬す。

(ひんせい[貧生](名) 貧窮なる書生。又、貧乏なる境遇。

(ひんせい[品性](名) 廣義にては、個人の本來具有せる性質の總稱。狹義にては、意志を中心としたる能動的傾向の特稱。

(びんせう[嚬笑](名) しかむるとわらふこと。

(びんせう[憫笑](名) あはれみわらふこと。

(ひんせき[擯斥](名) いやしめしりぞくること。おしのくること。(排斥)。

(ひんせふ[嬪妾](名) そばめ。

廿びんせふ[敏捷](名) すばやきこと。すばしこきこと。

(ひんせん[貧賤](名) まづしくいやしきこと。

(びんせん[便船](名) 幸便の船。

(びんぜん[憫然](名、副) かはゆさうなるさまにいふ語。

廿びんそぎ[鬢除](名) かみそぎの一種、鬢をすこしくそぐこと。

(びんそく[敏速](名) すばやきこと。はやきこと。

〔ピンぞろ[一揃](名) ㊀二つの采の目が共に一の出づること。㊁單物を二枚重ねて着ること。

(ひんだい[品題](名) 品位の論定。しなさだめ。

(びんだい[鬢臺](名) 髮道具をおく臺。

(ひんだう[貧道](代) 僧の自稱の謙稱。

(びんだうぐ[鬢道具](名) かみを結(ユ)ふに必要なる諸種の具。

ぴんだらひ[鬢盥](名) 鬢水を盛る小さき盥。

(ひんち[品致](名) しながら。ひん。

びんちやう[備長](名) 紀伊國より産出する最上の炭、火勢強きもの。

びんつけ[鬢附](名) 「びんつけあぶら」の略言。——**あぶら**[鬢附油](名) 蠟と油とを煉(ネ)り固(カタ)めてつくりたるもの、髮を固むるに用ふ。

ビンづめ[瓶詰](名) 瓶につめたるもの。

びんづら[鬢面](名) 鬢のおもて。

ビンヅル[賓頭盧](名) (梵語 Pindola、不動の義)佛弟子羅漢の一、白頭長眉の相をなすもの。

(びんてん[旻天](名) ㊀秋のそら。㊁そら。あめ。

(ひんど[貧土](名) 財物とぼしき土地。

(ひんとう[品等](名) しな。くらゐ。わかち。

びんなが[鬢長](名) 【動】「ひれなが」に同じ。

〔ひんなぐる(他、ら四) ㊀つよくなぐる。㊁排擠す。しばる。

びんなし[便無](形、二) ㊀たよりなし。こゝろぼそし。㊁都合あし、なりわるし、心のまゝならず。

(ひんば[牝馬](名) めうま。

(びんぱつ[鬢髮](名) びんのかみ。

(びんばふ[貧乏](名) 財物のとぼしきこと、まづしきこと。貧困。貧窮。——**がみ**[貧乏神](名) ㊀人をして貧乏ならしむといふ神。(窮鬼)。㊁相撲(スマフ)にて、番附の第二段目の第一位、即ち幕外のすぐつぎなるもの。——**くじ**[貧乏鬮](名) ㊀最も不利益なるくじ。㊁最も不利益なる運命。——**ばなを**[貧乏鼻緒](名) 庭下駄又は水汲下駄などにすげ用ふる棕櫚又は竹皮の鼻緒。——**ゆすり**[貧乏搖](名) 膝を絶えずぶる〱と

ゆりうごかすこと。——**ゆるぎ**[貧乏搖](名) 前條に同じ。

(ひんぱん[頻繁](名) しきること。しげきこと。

(ひんぴやう[品評](名) 物事の高下・優劣を論定すること、しなさだめ。——**くわい**[品評會](名) 其物の品評をなすための會。

〔ひんぴん(名、副) 馬のなく聲のさまにいふ語。

(ひんぴん[頻頻](名、副) 物事のしげく起るさまにいふ語。

(ぴんぴん[彬彬](名、副) 文物のさかんなるさまにいふ語。

〔ぴんぴん(名、副) ㊀はたらきうごくさまにいふ語。㊁をどりはぬるさまにいふ語。㊂頭痛などの絶えずするさまにいふ語。

(ひんぷ[貧富](名) まづしきこととめること、貧者と富者と。「——の懸隔」。

(ひんぷく[賓服](名) 外國の服從すること。

(びんぷく[鬢服](名) 古昔、官女の髮飾、髮を四尺許、油にて固(カタ)めて頭髮の下に廻し、兩方の前へ下げたるもの。

(びんべん[黽勉](名) 精を出だすこと。つとむること。(出精、勤勉)。

(ひんぼ[牝牡](名) めすとをすと。

びんぼかづら[貧乏葛](名) 【植】「やぶからし」の一名。(烏斂苺)。

びんぼづる(名) 前條に同じ。

ピンポン[Pinpon](名) 一種の室內遊戲、「テニス」の規模を小さくしたる如きもの、臺上にて行ふ。

びんみづ[鬢水](名) 鬢を梳(ケヅ)るに用ふる水。

(ひんみん[貧民](名) 貧乏なる人民。まづしきたみ。「——を救恤す」。——**がくかう**[貧民學校](名) 無月謝にて貧民の子弟を教育する小學校。——**くつ**[貧民窟](名) 貧民の多くあつまりゐる所。——**けいさつ**[貧民警察](名) 貧民を救護するための警察、例へば、貧民を強制して勞役に就かしむる類。

(びんらう[檳榔](名) 【植】「びんらうじ」(一)に同じ。——**じ**[檳榔子](名) ㊀【植】棕櫚科に屬する植物、熱帶地方に産す、高さ五七丈、枝なくして莖は梢頭に生じ、果實は房をなして葉間に叢生す、藥用又は食用に供せらる。㊁暗黑色の染色。

(ひんりよ[貧旅](名) たびのまらうど。

(ひんる[貧窶](名) まづしくしてやつるゝこと。又、まづしくくるしきこと。

(ひんるゐ[品類](名) たぐひ。種類。

(ひんれい[賓禮](名) まらうどとして手厚くもてなすこと。

(びんわん[敏腕](名) 事務の處置のすばやきこと。すばやき手腕。——**か**[敏腕家](名) 敏腕なる人。

(ひんゐ[賓位](名) 賓客の位置。

(ひんゐ[品位](名) ㊀くらゐ。しな。㊁金銀の地金又は金銀貨の中に含有する他の金屬の割合。

(ひんゐ[品彙](名) しな、たぐひ。

ふ　ぶ　ぷ

ふ 喉音H 即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を吐出するとき生ずる音と、母音「ウ」との綴音。

ぶ 「ふ」の濁音、すべて「ぷ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、古來「ふ」の濁音となしゝは誤なり。

ぷ 脣的破裂音P 即ち兩脣を閉ぢて破裂せしむる音と、母音「ウ」との綴音、古來「ふ」の半濁音となしゝは誤なり。

廿ふ[節](名) ふし。むすびめ。あひめ。「十——の菅薦」。

廿ふ[生](名) 草木の多く生ひたる處。「芝——」。

廿ふ[輔、副](名) 古昔、官(ツカサ)の名、すけ。

ふ[斑](名) ぶち。マダラ。「虎——」。

(ふ[麩](名) ㊀小麥の粉のふすま、洗粉に用ふるもの。むぎかす。㊁一種の食品、ふすまと小麥粉とを水に和し、捏(コ)ねて製したるもの、生麩と燒麩とあり、煮(ニ)て食ふ。(麪筋)。㊂燒麩の特稱。

(ふ[府](名) ㊀くら。倉庫。㊁みやこ。都邑。㊂物事の多くあつまる處。「福の——」。㊃つかさ。役所。㊄政務の機關。「議政の——」。㊅縣と共に地方行政區劃の一にして地方自治體の最上級たるもの、郡及市を以て組織せらる、機關は府會及府參事會にして、行政は知事これを掌り、監督は內務大臣これを掌る。㊆支那にて、縣の上に位する行政區劃。

(ふ[譜](名) ㊀一家の系統を志るしたるもの、即ち系圖。「家——」。㊁物事の順序を追ひて簡略に記したるもの、表。㊂音樂の調子を符號にて記したるもの。

(ふ[賦](名) ㊀とりたてもの。みつぎもの。㊁ぶやく。公役。㊂ぶやくの代りに上納する料金。㊃わりつけ。わりあて。㊄支那上代の時の六義の一、心に感じたる所を其まゝのべあらはす體。㊅漢以後に創(ハジ)まりたる文章の一體、多くは句末に韻をふむもの。「赤壁の——」。

(ふ[步](名) 將棋の駒の名、前へ一格づゝ進むもの、なりては金將のはたらきをなす。

(ふ[傅](名) かしづき。もりやく。「太子の——」。

(ふ)[腑](名) はらわた。

(ふ)[符](名) ㊀わりふだ。わりふ。㊁しるし。あかし。㊂まもり札。おふだ。㊃未來記。豫言書。

(ふ)[婦](名) ㊀をんな。「美ー」。㊁つま。㊂よめ。

(ふ)[夫](名) ㊀をとこ。㊁をっと。「ー婦」。

(ふ)[訃](名) 死去の知らせ。

(ふ)[負](名) [數]負號。正の對。

(ふ)[封](名) 「ふう」に同じ。

ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、ふれよ）**[經]**(自、は下二) 過ぎ行く。移り行く。經過す。たつ。

ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、ふれよ）**[綜]**(他、は下二) 經(タテ)絲を機に掛く。

(ふ)—[不](接頭) 或語の上につき、其意義を打消す語。「ー本意」。

(ぶ)[分](名) ㊀一寸の十分の一。㊁一兩の四分の一。㊂一文の十分の一。㊃一の百分の一又は十分の一の稱。㊄扁平なるもの、即ち板の如きもの、厚さ。「ーが厚い」。

(ぶ)[步](名) ㊀地積の單位、即ち六尺四方にして坪に同じ。㊁わりあひ。ぶあひ。

(ぶ)[部](名) ㊀物事の區分。こわけ。㊁物事の一方。かたつら。「上のー」。㊂書物の全體。「ニー百卷」。

(ぶ)[夫](名) 夫役の人夫。役夫。

(ぶ)[武](名) ㊀たけきこと。をゝしきこと。㊁威力をもて、暴を禁じ兵を戢(ヲサ)むること。軍事。兵事。㊂軍事に長じたること。敵を破るに巧(タク)なること。㊃いきほひ。威力。㊄半步の長さ。

ぶ（び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、ぶれよ）**[如]**(自、は上二) めく。其樣にてあり。「田舍ー」。「大人びて」。

(ぶ)—[不](接頭) 「ふ」に同じ。「ー意氣」。

(ぶ)—[無](接頭) 或語に冠して其義を打消す語。「ー用心」。「ー作法」。

フーコーでんりう[ー電流＝Foucault's current](名) [理]導體が磁場にて廻轉するとき導體內に起る電流、發電子の廻轉するとき、其鐵心に「フーコー」電流起りて「コイル」に起る電流を弱めんとするが故に、發電子はなるべく「フーコー」電流を避くる樣に鐵心を組立つるを要す。

フート[呎＝Foot](名) 十二「インチ」の稱、我國の一・〇〇六尺に等(ヒト)し。

フート・ボール[Foot ball](名) 一種の遊戲、兩人又は二組のものが、互に一つの球を蹴りあふもの、規定の線內に蹴りこみたるを勝とす。まりけり。

フート・ポンド[呎磅＝Foot pound](名) [理]仕事の單位、一磅の重さの物體を一呎揚ぐる仕事。

(ぶ・あいきやう)[無愛敬](名) 愛敬なきこと。

(ぶ・あいさう)[無愛想](名) 愛想なきこと。

ぶ・あひ[步合](名) ㊀或量とこれと同種類の他の量との比、割合。㊁手數料。報酬金。——**ざん[步合算]**(名) [數]諸種の步合に關する算法。——**だか[步合高]**(名) [數]步合算にて、元高に對する步合の量、即ち元高と步合との相乘積なり。

ファラーデーのていりつ[ー定律＝Faraday's law] [理]電氣分解に關する定律、電解物の電流により折出せらるゝ物質の量は、これを通過したる電氣の總量に比例すると、及一定の電流によりて折出せらるゝ物質の量は、其物質の化學當量に比例すると。

(ぶ・あん)[撫按](名) ㊀なでおさふること。㊁なでやすんずること。(撫安)。

(ふ・あんしん)[不安心](名) 安心できざること。

(ふ・あんない)[不案內](名) 案內を知らざること。其物事を知らぬこと。

(ふ・い)[不意](名) 思ひまうけざること。思ひよらぬこと。意外。——**をくらふ** 不意に出かけらるゝといふ語。

(ふ・い)[布衣](名) 無官位の人。匹夫。

(ぶ・い)(名) ㊀全くつくること。皆無。㊁なりたゝぬこと。成就せぬこと。

(ぶ・い)[無異](名) 異狀なきこと。かはりなきこと。「ー息災」。(無事、無恙)。

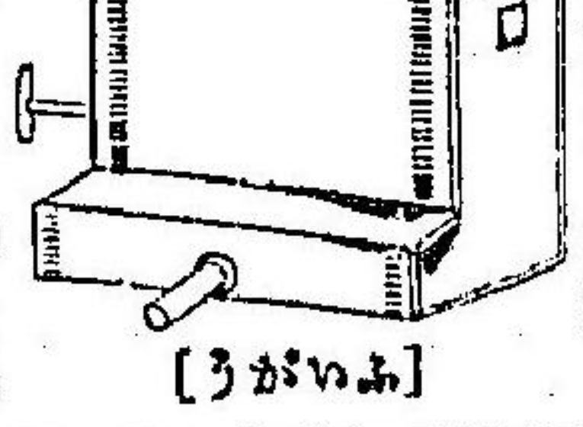
フィート[呎＝Feet](名) 「フート」の複數。

(ふ・いう)[富有](名) 多く資産を有(モ)つこと。かねもち。ものもち。

(ふ・いう)[浮遊](名) ㊀あちらこちらをあそびあるくこと。㊁ふはふはと浮きあるくこと。㊂或範圍の外に超(コ)えてあそぶこと。「心天地の外にーす」。

(ふ・いう)[蜉蝣](名) ㊀朝に生れて夕に死すといふかげろふの稱。㊁身の程のはかなきものにたとへいふ語。

ふい・がう[韛](名) (吹皮の音便)火を熾(オコ)す具、空氣を孕(ハラ)ませ、孔より風を出して火をおこす裝置のもの、もと狸の皮にてつくりたりといふ。


[ふいがう]

(ぶ・いき)[不意氣](名) みやびならざること。いきならざること。

(ふ・いく)[扶育](名) たすけそだつること。やしなひたすくること。——**れう[扶育料]**(名) 扶育するために給與する料金。

(ぶ・いく)[撫育](名) なでそだつること。かはゆがりそだつること。「民をーす」。

ふい・ご[韛](名) 「ふいがう」の約言。——**まつり[韛祭]**(名) 陰曆十一月八日に、鍛冶屋にて行ふ祭事。

ふい・ちやう[吹聽](名) あまねく告げ知らすること。言ひふらすこと。いひひろむること。(披露)。

(ふい・と)(副) ㊀たちまち。急に。㊁ふと。ひよっと。

(ふい・に)[不意](副) だしぬけに。意外に。いきなり。

ふい・の・まじはり[布衣交](名) 貧賤のまじはり。

(ふい・ふい・と)(副) ㊀「ふいと」に同じ。㊁をり〱。ときどき。

フィブリノゲン[Fibrinogen](名) [化]血液中に存在する蛋白質。

ふ・いり[斑入](名) 地(ヂ)の色に他の色のまじり入れること。又、其もの。

(ふ・いん)[封印](名) 「ふういん」に同じ。

(ふ・いん)[訃音](名) 死去の知らせ。

(ぶ・いん)[無音](名) 久しく音信せざること。疎濶に打過ぐること。無沙汰。(疎遠、久濶)。

(ふう)[風](名) ㊀かぜ。㊁ならはし。ならひ。風俗。㊂おもむき。ぐあひ。㊃すがた。なりふり。ふり。㊄體裁。面目。「ーがわるい」。㊅地方のはやりうた。

(ふう)[封](名) ㊀閉ぢたる物又は結びたる物のとぢ目むすび目に、他人にひらかせぬため、つけたるしるし。㊁封じたる所。封目。

(ふう・い)[諷意](名) ほのめかしていふ主意。とほまはしにいふ主意。

(ふう・いく)[覆育](名) おほひそだつること。かばひそだつること。

(ふう・いん)[封印](名) 封目に捺(オ)してある印。(鈐印)。——**つき[封印附]**(名) ㊀封印あるもの。㊁德川時代に、兩替店の封印したる一包の通貨の稱。㊂世間に知れわたりたるよからぬものゝ稱。

(ふう・う)[風雨](名) ㊀かぜとあめと。㊁あらし。——**けい[風雨計]**(名) 「せいうけい」(晴雨計)に同じ。——**しん[風雨針]**(名) 前條に同じ。

(ふう・うん)[風雲](名) ㊀かぜとくもと。㊁英雄豪傑などの世にあらはれ出づる基となる天下の事變。——**じ[風雲兒]**(名) 天下の事變に際會して活動する人士。——**のくわい[風雲會]**(名) ㊀英雄豪傑などの世にあらはれ出づる機會。㊁明主と良臣と相會すること。

(ふう・か)[富家](名) かねもち。ぶげん。

(ふう・が)[風雅](名) ㊀みやびたること。俗ならぬこと。風流。㊁詩歌・俳諧其他すべて俗事ならぬ事の稱。——**じん[風雅人]**(名) ふうりうじん。

(ふう・がい)[風害](名) 風のために受けたる損害。

(ふう・がい)[風概](名) ひとがら。やうす。

(ふう・かう)[風向](名) かぜむき。かざむき。

(ふう・かう)[封港](名) 兵力を以て港灣を封鎖すること。

(ふう・かく)[風格](名) ひとがら。やうす。

ふう・がはり[風變](名) ㊀普通と風(フウ)のことなること。又、其もの。㊁性癖の人なみとことなること。又、其人。變人。

(ふう・かふ)[風蛤](名) [動]「あかがへる」の異稱。

(ふう・かん)[風寒](名) 陰曆十一月の異稱。

(ふう・かん)[諷諫](名) とほまはしに諫(イサ)むること。

(ふう・かん)[封緘](名) 「ふう」に同じ。

(ふう・かん)[風鑑](名) 容貌風采によりて、其人の性質を推しはかること。

(ふう・がん)[風眼](名) 眼の病氣、淋汁の眼中に入るによりて發するもの、眼瞼の內面いたく腫(ハ)れて紅く眼中の灼熱を感ず、後には淋汁をもらし疼痛を覺ゆるに至る。(風熱眼)。

(ふう・き)[風氣](名) ㊀氣候。㊁風邪。㊂風俗。

(ふう・き)[風紀](名) 風習上の規律。

(ふう・き)[富貴](名) 富みて貴きこと。富有にして位高きこと。

(ふう・き)[諷規](名) 「ふうかん」(諷諫)に同じ。

(ふう・ぎ)[風儀](名) ㊀ならひ。ならはし。㊁ぎやうぎ。作法。

(ふう・き・ゑいへい)[風紀衞兵](名) 軍隊の風紀をとりしまるための衞兵。

(ふう・きん)[風琴](名) 「オルガン」に同じ。

(ふう・きん)[風禽](名) いかのぼり。たこ。

(ふう・くわ)[風化](名) ㊀上たるもの、德に下たるもの化せらるゝこと。㊁[化]結晶體が空氣中に於て漸々結晶水を失ひて粉末となること。㊂[地]岩石が空氣中の水分を吸收して次第に崩解すること。

(ふう・くわう)[風光](名) けしき。ながめ。

(ふう・けい)[風景](名) ふうくわう。けしき。

(ふう・けう)[風教](名) ㊀德を以て下のものをみちびきをしふること。㊁風習上のをしへ。

(ふう・げつ)[風月](名) ㊀こゝちよき風とさやけき月と。㊁風に嘯(ウソブ)き月を眺(ナガ)めて樂むこと。

(ふう・げん)[諷言](名) とほまはしのことば。ほのめかすことば。

(ふう・こう)[風候](名) ㊀風の模樣。㊁風の方向を見る具。かざみ。

(ふう・こつ)[風骨](名) すがた。やうす。(風姿)。

(ふう・さ)[封鎖](名) 兵力を以て外部との交通を遮斷すること。

(ふう・さい)[風采](名) ふうつき。みかけ。ひとがら。

(ふう・さい)[風災](名) 風のために生じたる災害。(風害)。

(ふ[腑](名)はらわた。

(ふ[符](名)㊀わりふだ。わりふ。㊁まもり札。おふだ。㊂未來記。豫言書。㊃しるし。あかし。

(ふ[婦](名)㊀をんな。「美—」。㊁つま。㊂よめ。

(ふ[夫](名)㊀をとこ。㊁をっと。「—婦」。

(ふ[訃](名)死去のしらせ。

(ふ[負](名)【數】負號。正の對。

(ふ[封](名)「ふう」に同じ。

ふ（へへふふるふれへよ）[經](自、は下二)過ぎ行く。移り行く。經過す。たつ。

廿ふ（へへふふるふれへよ）[綜](他、は下二)經(テク)絲を機に掛く。

(ふ—[不](接頭)或語の上につき、其意義を打消す語。「—本意」。

(ぶ[分](名)㊀一寸の十分の一。㊁一兩の四分の一。㊂一文の十分の一。㊃一の百分の一又は十分の一の稱。㊄扁平なるもの、即ち板の如きものゝ厚さ。「—が厚い」。

(ぶ[歩](名)㊀地積の單位、即ち六尺四方にして坪に同じ。㊁わりあひ。ぶあひ。

(ぶ[部](名)㊀物事の區分。こわけ。㊁物事の一方。かたつら。「上の—」。㊂書物の全體。「二—百卷」。

(ぶ[夫](名)夫役の人夫。役夫。

(ぶ[武](名)㊀たけきこと。をゝしきこと。㊁威力をもて、暴を禁じ兵を戢(ヲサ)むること。軍事。兵事。㊂軍事に長じたること。敵を破るに巧(タク)なること。㊃いきほひ。威力。㊄半歩の長さ。

ぶ（びびぶぶるぶれびよ）[如](自、は上二)めく。其樣にてあり。「田舍—」。「大人びて」。

(ぶ—[不](接頭)「ふ」に同じ。「—意氣」。

(ぶ—[無](接頭)或語に冠して其義を打消す語。「—用心」。「—作法」。

フーコーでんりう[—電流＝Foucault's current](名)【理】導體が磁場にて廻轉するとき導體内に起る電流、發電子の廻轉するとき、其鐵心に「フーコー」電流起りて「コイル」に起る電流を弱めんとするが故に、發電子はなるべく「フーコー」電流を避くる樣に鐵心を組立つるを要す。

フート[呎＝Foot](名)十二「インチ」の稱、我國の一・〇〇六尺に等(ヒト)し。

フートボール[Foot ball](名)一種の遊戲、兩人又は二組のものが、互に一つの毬を蹴りあふもの、規定の線内に蹴りこみたるを勝とす。まりけり。

フートポンド[呎磅＝Foot pound](名)【理】仕事の單位、一磅の重さの物體を一呎揚ぐる仕事。

(ぶ-あいきやう[無愛敬](名)愛敬なきこと。

(ぶ-あいさう[無愛想](名)愛想なきこと。

ぶ-あひ[歩合](名)㊀或量とこれと同種類の他の量との比、割合。㊁手數料。報酬金。——ざん[歩合算](名)【數】諸種の歩合に關する算法。——だか[歩合高](名)【數】歩合算にて、元高に對する歩合の量、即ち元高と歩合との相乘積なり。

ファラデーのていりつ[—定律＝Faraday's law]【理】電氣分解に關する定律、電解物の電流により折出せらるゝ物質の量は、これを通過したる電氣の總量に比例すること、及一定の電流によりて折出せらるゝ物質の量は、其物質の化學當量に比例すること。

(ぶ-あん[撫按](名)㊀なでさふること。㊁なでやすんずること。(撫安)。

(ふ-あんしん[不安心](名)安心できざること。

(ふ-あんない[不案内](名)案内を知らざること。其物事を知らぬこと。

(ふ-い[不意](名)思ひまうけざること。思ひよらぬこと、意外。——をくらふ　不意に出かけらるゝにいふ語。

(ふ-い[布衣](名)無官位の人。匹夫。

(ふい(名)㊀全くつくること。皆無。㊁なりたゝぬこと。成就せぬこと。

(ぶ-い[無異](名)異狀なきこと。かはりなきこと。「—息災」。(無事。無恙)。

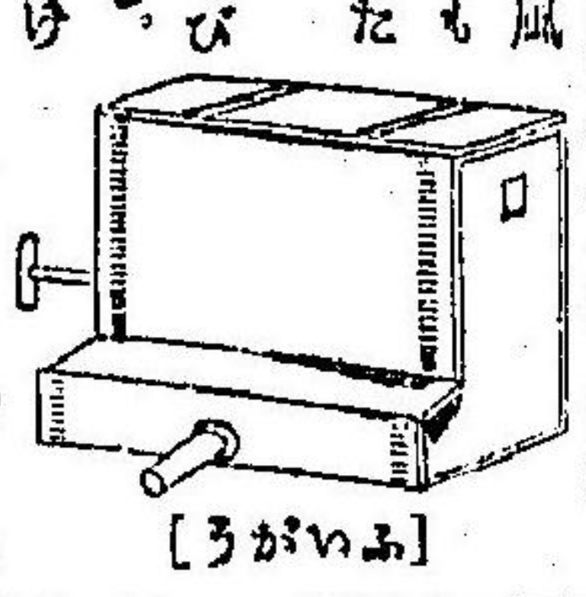
フィート[呎＝Feet](名)「フート」の複數。

(ふ-いう[富有](名)多く資産を有(モ)つこと。かねもち。ものもち。

(ふ-いう[浮遊](名)㊀あちらこちらをあそびあるくこと。㊁ふはふはと浮きあるくこと。㊂或範圍の外に超(コ)えてあそぶこと。「心天地の外に—す」。

(ふ-いう[蜉蝣](名)㊀朝に生れて夕に死すといふかげろふの稱。㊁身の程のはかなきものにたとへいふ語。

ふい-がう[鞴](名)(吹皮の音便)火を熾(オコ)す具、空氣を孕(ハラ)ませ、孔より風を出して火をおこす裝置のもの、もと狸の皮にてつくりたりといふ。



［ふいがう］

(ぶ-いき[不意氣](名)みやびならざること。いきならざること。

(ふ-いく[扶育](名)たすけそだつること。やしなひたすくること。——れう[扶育料](名)扶育するために給與する料金。

(ぶ-いく[撫育](名)なでそだつること。かはゆがりそだつること。「民を—す」。

ふい-ご[鞴](名)「ふいがう」の約言。——まつり[鞴祭](名)陰暦十一月八日に、鍛冶屋にて行ふ祭事。

ふい-ちやう[吹聽](名)あまねく告げ知らすること。言ひふらすこと。いひひろむること。(披露)。

(ふい-と(副)㊀たちまち。忽に。㊁ふと。ひよっと。

(ふい-に[不意](副)だしぬけに。意外に。いきなり。

ふい-のまじはり[布衣交](名)貧賤のまじはり。

(ふい-ふい-と(副)㊀「ふいと」に同じ。㊁なり〳〵。とき〴〵。

フィブリノゲン[Fibrinogen](名)【化】血液中に存在する蛋白質。

ふ-いり[斑入](名)地(ヂ)の色に他の色のまじり入れること。又、其もの。

(ふ-いん[封印](名)「ふういん」に同じ。

(ふ-いん[訃音](名)死去のしらせ。

(ぶ-いん[無音](名)久しく音信せざること。疎濶に打過ぐること。無沙汰。(疎遠、久濶)。

(ふう[風](名)㊀かぜ。㊁ならはし。ならひ。風俗。㊂おもむき。ぐあひ。㊃すがた。なりふり。ふり。㊄體裁。面目。「—がわるい」。㊅地方のはやりうた。

(ふう[封](名)㊀閉ぢたる物又は結びたる物のとぢ目むすび目に、他人にひらかせぬため、つけたるしるし。㊁封じたる所。封目。

(ふう-い[諷意](名)ほのめかしていふ主意。とほまはしにいふ主意。

(ふう-いく[覆育](名)おほひそだつること。かばひそだつること。

(ふう-いん[封印](名)封目に捺(オ)してある印。(鈴印)。——つき[封印附](名)㊀封印あるもの。㊁徳川時代に、兩替店の封印したる一包の通貨の稱。㊂世間に知れわたりたるよからぬものゝ稱。

(ふう-う[風雨](名)㊀かぜとあめと。㊁あらし。——けい[風雨計](名)「せいうけい」(晴雨計)に同じ。——しん[風雨針](名)前條に同じ。

(ふう-うん[風雲](名)㊀かぜとくも。㊁英雄豪傑などの世にあらはれ出づる天下の事變。——じ[風雲兒](名)天下の事變に際會して活動する人士。——のくわい[風雲會](名)㊀英雄豪傑などの世にあらはれ出づる機會。㊁明主と良臣と相會すること。

(ふう-か[富家](名)かねもち。ぶげん。

(ふう-が[風雅](名)㊀みやびたること、俗ならぬこと。風流。㊁詩歌・俳諧其他すべて俗事ならぬ事の稱。——じん[風雅人](名)ふうりうじん。

(ふう-がい[風害](名)風のために受けたる損害。

(ふう-がい[風概](名)ひとがら。やうす。

(ふう-かう[風向](名)かぜむき。かざむき。

(ふう-かう[封港](名)兵力を以て港灣を封鎖すること。

(ふう-かく[風格](名)ひとがら。やうす。

ふう-がはり[風變](名)㊀普通と風(フウ)のことなること。又、其もの。㊁性癖の人なみとことなること。又、其人。變人。㊂從前と風のかはれること。

(ふう-かふ[風蛤](名)【動】「あかがへる」の異稱。

(ふう-かん[風寒](名)陰暦十一月の異稱。

(ふう-かん[諷諫](名)とほまはしに諫むること。

(ふう-かん[封緘](名)「ふう」に同じ。

(ふう-かん[風鑑](名)容貌風采によりて、其人の性質を推しはかること。

(ふう-がん[風眼](名)眼の病氣、濃汁の眼中に入るによりて發するもの、眼瞼の内面いたく腫(ハ)れて紅く眼中の灼熱を感ず、後には濃汁をもらし疼痛を覺ゆるに至る。(風熱眼)。

(ふう-き[風氣](名)㊀氣候。㊁風邪。㊂風俗。

(ふう-き[風紀](名)風習上の規律。

(ふう-き[富貴](名)富みて貴きこと。富有にして位高きこと。

(ふう-き[諷規](名)「ふうかん」(諷諫)に同じ。

(ふう-ぎ[風儀](名)㊀ならひ。ならはし。㊁ぎやうぎ。作法。

(ふうき-ゑいへい[風紀衛兵](名)軍隊の風紀をとりしまるための衛兵。

(ふう-きん[風琴](名)「オルガン」に同じ。

(ふう-きん[風禽](名)いかのぼり。たこ。

(ふう-くわ[風化](名)㊀上たるもの、徳に下たるものゝ化せらるゝこと。㊁【化】結晶體が空氣中に於て漸々結晶水を失ひて粉末となること。㊂【地】岩石が空氣中の水分を吸收して次第に崩解すること。

(ふう-くわう[風光](名)けしき。ながめ。

(ふう-けい[風景](名)ふうくわう。けしき。

(ふう-けう[風敎](名)㊀徳を以て下のものをみちびきをしふること。㊁風習上のをしへ。

(ふう-げつ[風月](名)㊀こゝちよき風とさやけき月と。㊁風に嘯(ウソ)き月を眺(ナガ)めて樂むこと。

(ふう-げん[諷言](名)とほまはしのことば。ほのめかすことば。

(ふう-こう[風候](名)㊀風の模樣。㊁風の方向を見る具。かざみ。

(ふう-こつ[風骨](名)すがた。やうす。(風姿)。

(ふう-さ[封鎖](名)兵力を以て外部との交通を遮斷すること。

(ふう-さい[風采](名)ふうつき。みかけ。ひとがら。

(ふう-さい[風災](名)風のために生じたる災害。(風害)。

(ふうさい[覆載](名) ㊀おほふとのすと。㊁天と地と。 ——かん[覆載間](名) 天地のあひだ間の距離。

(ふうさう[風箏](名) 風(こた)のうなり。

(ふうさう[風騷](名) 風雅。風流。

(ふうさうりう[風霜](名) ㊀かぜと志もと。㊁世間の艱難。

(ふうさんろしゆく[風餐露宿](名) 野外に起臥するを。

(ふうし[夫子](名) ㊀支那にて、大夫以上の稱。㊁長者・賢者又は先生などの尊稱。

(ふうし[風姿](名) なりふり。すがた。みなり。

(ふうし[風師](名) かぜの神。(風伯)。

(ふうし[諷詩](名) あてこすりの詩。

(ふうし[諷刺](名) それとなくそしるを。あてこすると。 ——ぐわ[諷刺畫](名) それとなくそしる意を寓したる畫。

(ふうじ[封事](名) 密封して直に君主にたてまつる意見書。

(ふうしつ[風疾](名)「リウマチス」。つうふう。(風濕)。

(ふうしふ[風習](名) ならはし。ならひ。しきたり。(習慣)。

ふうじぶくろ[封袋](名)「ふうとう」(封筒)に同じ。

ふうじぶみ[封書](名) 封じたる書狀。

ふうじめ[封目](名) 封をなしたる所。

(ふうしや[風車](名) 風の力にて廻轉する裝置の車。かざぐるま。

(ふうじや[風邪](名) かぜひき。かぜ。感冒。

(ふうじやう[風情](名) けしき。ながめ。おもむき。ふぜい。

(ふうじやう[封狀](名) 次條に同じ。

(ふうしゆ[風趣](名) おもむき。

(ふうじゆ[風樹](名)（樹欲靜而風不止、子欲養而親不待の句に出づ）親己に逝去して孝養し得ざるを。「—の悲」。「—の感」。

(ふうしよう[諷誦](名) 聲を立てゝ讀むを。

(ふうしよ[封書](名) 封をしたるてがみ。

(ふうしよう[諷詠](名)「ふうえい」に同じ。

(ふうしよく[風色](名) けしき。ありさま。ながめ。(風景、風光)。

ふうじらふ[封蠟](名) 書狀の封目などに塗る粘氣強き蠟。

(ふうじる[封](他)「ふうず」の訛。

(ふうしん[風神](名) かたち以外にあらはれたるおもむき。

ふうず[諷](他、さ變) ほのめかしいふ。とほまはしにいふ。それとなくいふ。

ふうず[封](他、さ變) ㊀封をなす。㊁神佛の力をもて閉ぢ込む。㊂使用し得ざるやうに堅くとめおく。

(ふうせい[風聲](名) ㊀をしへ。風化。㊁うはさ。評判。㊂かぜのおと。 ——かくれい[風聲鶴唳](名)（かぜのおとゝ鶴のなき聲との義、苻堅の軍が淝水にて敗走せしときの故事に出づ）おぢ氣のつきたる人があらぬ物事にもおぢおそるゝといふ語。

(ふうせつ[風說](名) うはさ。風評。評判。取沙汰。(噂)。

(ふうせつ[風雪](名) ㊀かぜとゆきと。㊁風ありて雪ふりしきるを。ふぶき。

(ふうせん[風船](名)「けいききう」(輕氣球)に同じ。 ——だま[風船玉](名) ㊀一種の玩具、膀胱又は紙を球狀につくり、空氣よりも輕き瓦斯を容れて空中に飛ばしあそぶもの。㊁心のうは〳〵して定まらぬものをあざけりていふ語。

(ふうぜん[風前](名) 風の吹く所。 ——のちり[風前塵](名) はかなき物事にたとへいふ語。 ——のともしび[風前燈](名) 危險の旣に切迫してあるものにたとへいふ語。

(ふうぞく[風俗](名) ㊀ならはし。ならひ。しきたり。㊁よそほひ。みなり。てぶり。 ——うた[風俗歌](名) 諸國のはやりうた、これによりて其風俗の推知せらるゝもの。 ——がかり[風俗掛](名) 專ら風俗警察に關(かか)る者。 ——ぐわ[風俗畫](名) 風俗をゑがきたる畫。 ——けいさつ[風俗警察](名) 風俗を取締るための警察行政、卽ち淫靡の取締の如きこれなり。

(ふうそん[風損](名)「ふうがい」(風害)に同じ。

(ふうたい[風帶](名) ㊀几帳の上に垂るゝ細長き布。㊁掛軸の上の方より垂るゝ二條の切又は紙。(經帶、驚燕)。

(ふうたい[風體](名)「ふうし」(風姿)に同じ。

(ふうたい[風袋](名) ㊀秤(はかり)にて物を量るとき、其物の正味ならざる上包又は箱などの稱。㊁轉じて、正價に對して、外觀の稱。 ——だふし[風袋倒](名) ㊀掛目の多くあるらしく見えて其實いと輕きを。㊁外觀の徒(いたづら)にりつぱにして正實のこれに伴はざるを。

(ふうたう[風濤](名) ㊀かぜとなみと。㊁風あだちてなみあらきを。

(ふうたう[封套](名)「ふうとう」(封筒)に同じ。

(ふうたく[風鐸](名)「ふうりん」(風鈴)に同じ。

(ふうち[風致](名) ありさま。あぢはひ。おもむき。(風趣)。

(ふうちん[風鎭](名) 掛物の軸の兩端に懸けて其風などに飄(ひるが)へるを防ぐ具、玉・石などを紐(ひも)に貫きたるもの。

(ふうぢん[風塵](名) ㊀風に起(た)つ塵。㊁世上の俗事。

(ふうつう[風通](名)「ふうつうおり」の略言。 ——おり[風通織](名) ㊀「モール」の條を見よ。㊁浮織にしたる精好の絹布。

ふうづつ[封筒](名) じやうぶくろ。ふうとう。

(ふうてい[風體](名) なりふり。すがた。

(ふうてう[風鳥](名)【動】燕雀類中風鳥科に屬する鳥、「ニユギニア」に產す、羽毛甚だ麗(うるは)しくして西洋婦人などが帽子を飾るに用ひらる。

(ふうてう[風潮](名) ㊀風に從ふ潮(うしほ)のながれ。㊁世間のなりゆき。時勢のおもむき。

(ふうてん[瘋癲](名) きちがひ。ものぐるひ。(狂氣)。

(ふうど[風土](名) 土地の狀態・氣候・地味。

(ふうど[風度](名) やうす。ひとがら。

(ふうとう[封筒](名) ㊀狀箱。㊁狀袋。

ふうとうかづら[風藤葛](名)【植】胡椒科に屬する草、海濱に生ず、莖は互生し卵形又は心臟狀にして深綠色なり、花は小形白色にして穗狀花序をなす。(土蓽撥)。

(ふうどく[風毒](名)「ふうしつ」(風疾)に同じ。

(ふうどびやう[風土病](名) 土地の氣候・地形等より生ずる病氣、轉地すれば全癒するもの。

(ふうは[風波](名) ㊀かぜとなみと。㊁風たちて波あらきを。㊂あらそひ。もめ。

(ふうばい[風霾](名) 風ふきて土ふるを。

(ふうばいくわ[風媒花](名)【植】雄蕊の花粉が風のために雌蕊の柱頭に送られて生殖作用を營むもの、松杉科に屬する植物の花これなり。

(ふうばいしよくぶつ[風媒植物](名)【植】風媒花を有する植物。

(ふうばぎう[風馬牛](名) 牝牡相誘ふ馬と牛と。 ——もあひおよばず[風馬牛不相及] 互に地の遠く隔りたるにいふ。

(ふうはく[風伯](名) 風の神。「—雨師」。

(ふうはつ[風發](名) ふるひおこるを。はげみたつと。

(ふうはん[風帆](名) 風をはらむ帆。 ——せん[風帆船](名) 西洋形のはまへせん。

(ふうび[風靡](名) なびきしたがふと。又、なびきしたがはするを。

(ふうひ[覆被](名) ㊀おほひかぶせるを。㊁よぎ。ふすま。

(ふうひやう[風評](名) うはさ。取沙汰。(風說)。

(ふうふ[夫婦](名) 結婚したる男女、夫と妻と。めうと。つれあひ。いもせ。 ——ざいさんせい[夫婦財產制](名) 夫婦間に於ける財產上の關係を定むる制度。

ぶうぶう(名、副) ㊀うるさくいひ立つるさまにいふ語。㊁放屁するさまにいふ語。㊂法螺貝などを吹き鳴すさまにいふ語。「—どん〳〵」。

(ふうぶつ[風物](名) ㊀季節のもの。㊁ながめに入るもの。

(ふうぶん[風聞](名) うはさ。とりさた。(風說)。

(ふうへう[風標](名) ひとがら。やうす。

(ふうみ[風味](名) あぢ。あぢはひ。おもむき。

(ふうゆ[諷諭](名) とほまはしにさとすを。

(ふうらい[風來](名) ㊀風に吹き寄せられたる如くいづくよりともなくさまよひ來ると。漂到。㊁おちつかぬを。㊂きまぐれ。㊃役に立たぬを。 ——にん[風來人](名) ㊀おちつくすべのなき人。㊁きまぐれもの。㊂さまよひありくもの。浮浪するもの。㊃役に立たぬもの。 ——もの[風來者](名) 前條に同じ。 ——もの[風來物](名) 役にたゝぬすたれもの。

(ふうらう[風浪](名)「ふうたう」(風濤)に同じ。

(ふうらふ[封蠟](名) ふうじらふ。

(ふうらん[風蘭](名)【植】蘭科に屬する草、深山の樹幹などに生ず、莖はもとに似て長さ二三寸許、花は小形にして黃白色若しくは白色を呈す、軒端などに掛けて賞翫す。

(ふうりう[風流](名) ㊀風度の高雅なると。前代の遺風。㊁おもむき多きを。俗ならぬを。みやびたるを。瀟洒。㊂俗事に關係せざる興味あるを。 ——じん[風流人](名) 風流なる人。又、風流を好む人。

(ふうりう[紙鳶](名) いかのぼり。(西國地方の方言)。

(ふうりん[風鈴](名) 鐘に似て小さく內に舌ある金屬製の具、簷などに懸けおくもの、風に吹かれて鳴る。(鐵馬、風鐸)。

(ふうりんさう[風輪草](名)【植】「さくらさう」の一名。

(ふうろ[風露](名) 風凉しく露おきと。「滿天の—」。 ——さう[風露草](名)【植】げんのしようこの一種、花は赤色又は白色を呈して美し。

(ふうゐん[風韻](名) ㊀雅致あると。おもむきあると。㊁前代の遺風。

(ふうん[不運](名) ふしあはせ。(薄命)。

(ふうん[浮雲](名) ㊀浮きたゞよふ雲。うきぐも。㊁あやふきと。あぶなきと。㊂たしかならざると。とりとめなきを。 ——のこゝろざし[浮雲志](名) 不義の富貴を卑む志。

(ぶうん[武運](名) 武士の運命。又、武事の運命。

ふえ【笛】(名) ㊀吹き鳴らす樂器、竹、木若しくは金屬の管に數個の孔を明け、息を吹き込みて鳴らすもの。㊁横笛の特稱。

ふえ【吭】(名) のどぶえ。

ふえ【鰾】(名)【動】魚の胸部の脊柱の下にありて楕圓狀をなす皮囊、魚はこれを張り又は縮めて水中の浮沈を自由にす。うをのふえ。うきぶくろ。(魚脬)。

(ふ-えい【賦咏】(名) 詩歌などをつくること。又、詩歌、

(ふ-えい【浮影】(名) うかびたる影。

(ふ-えう（ウ—ヨ）【扶搖】(名) あらし、はやて。

(ふ-えき【不易】(名) かはらざること。「萬代—」。

(ぶ-えき【無射】(名) ㊀十二律の一。㊁陰曆九月の異稱。

ふえ-たけ【笛竹】(名) 竹管にて製したる笛。

ふ-えて【不得手】(名) ㊀得意にあらざること。得手にあらざること。㊁たしなまぬこと。このまぬこと。

ふえどり-のゆみ【笛籐弓】(名) 弓を黒く塗りて卷きたる籐を赤く塗りたるもの。

フェノール【Phenol】(名) 石炭酸。

ふえ-ふき【笛吹】(名) ㊀笛を吹く人。㊁【動】「やから」の一名。

++ふえ-まちおとし【笛待落】(名) 笛を吹きて獸をさそひ出し、これを羿（オトシ）にかけて捕ふること。

〔ふえる(自)「ふゆ」の訛。

(ふ-えん【布衍】(名) のべひろぐること。ひきのばすこと。「論旨を—す」。(敷衍)。

(ふ-えん【不緣】(名) ㊀緣のとげ難きこと。「釣合はぬは—のもと」。㊁緣どほきこと。

(ぶ-えん【無鹽】(名) ㊀鹽氣なきこと。㊁魚介などを鹽にせず生（ナマ）にてあること。

ふか【鱶】(名)【動】板鰓類中鮫科に屬する魚、大形にして長紡錘形をなし全身灰黑色なり、性強暴にして貪食し運動迅速なり、多く熱帶の海洋に産す。(鱶鯊)。

(ふ-か【府下】(名) 一府の區域内。

(ふ-か【浮家】(名)（浮きたる家の義）船。

(ふ-か【夫家】(名) をっとのいへ。

(ふ-か【富家】(名) 富みたる家。

(ふ-か【不可】(名) 然るべからざること。可ならざること。よろしからざること。

(ふ-か【附加】(名) つけくはふること。そふること。

(ふ-か【負荷】(名) かつぐこと。になふこと。

ふか—【深】(接頭) 或語に冠して、ふかき意を表する語。「—みどり」。

(ぶ-か【部下】(名) てした。

ふか-あみがさ【深編笠】(名) 深く顔を隠すやうにつくりたる編笠。「—の侍二人」。

(ふかい-かう（ウ—コ）【不開港】(名) 開かせざるみなと。外國との通商を許さざるみなと。

〔ふかい-なか【深中】(名) 男女互になみ〳〵ならざる親密の間柄。

++ふかい-なし（く、し、き、けれ）(形、二) いくぢなし。氣骨なし。

ふか-いり【深入】(名) 過度に入り込むこと。深くはひりこむこと。

(ふ-かう（ウ—コ）【不孝】(名) 親に事（ツカ）ふる道を缺（カ）くこと。孝行ならざること。

(ふ-かう（ウ—コ）【不幸】(名) ㊀ふしあはせ。不運。㊁親しき人の死去。

(ふ-かう（ウ—コ）【扶行】(名) たすけてつれ行くこと。

(ふ-がう（ウ—ゴ）【符號】(名) ㊀あひずるし。あひもん。㊁【數】數の性質を表示し又は演算上便宜のために用ふるしるし、即ち正號・負號・乘號・除號・等號・不等號・根號等これなり。

(ふ-がう（ウ—ゴ）【富豪】(名) 富有の人。ものもち。かねもち。

(ふ-がう（ウ—ゴ）【負號】(名)【數】負數を表示する符號、例へば—b—3の前にある「—」なり。

ふか-うるめ【鱶潤目】(名) 一種の食品、鱶の鰭を乾したるもの對馬國の名産。

(ふ-かかい【不可解】(名) 解釋すべからざること。わからぬこと。

(ふか-かう-りよく（ウ—コ）【不可抗力】(名)【法】自己の力にて抵抗すべからざる自然又は人爲の力。

(ふ-かく【負角】(名)【數】廻轉線が時計の針の廻はりかたと同一に廻轉してなす角。

(ふ-かく【俯角】(名)【數】物體が地平以下にあるとき、地平より其物體までの角距離。

(ふ-かく【不覺】(名)（不覺悟の略言）㊀油斷して失策すること。「—をとる」。㊁根性のあさはかなること。㊂そゞろなること。

++ふ-がく【府學】(名) 古昔、太宰府におかれし學校。

(ふ-がく【不學】(名) 學問上の知識なきこと。無學。

(ぶ-がく【舞樂】(名) 舞のある雅樂。

(ぶ-がく【武學】(名)「へいがく（兵學）」に同じ。

ふか-ぐつ【深靴】(名) 深く足をおほふ革製の靴。

(ふかく-てい【不確定】(名) 未だ定まらぬこと。

(ふかく-にん【不覺人】(名)「ふかくもの」に同じ。

ふかく-の-なみだ【不覺淚】(名) そゞろに催さるゝなみだ。

ふかく-もの【不覺者】(名) 油斷して失策するもの。又、根性のあさはかなるもの。

(ふか-けい【附加刑】(名)【法】主刑に附加して科する刑罰、剥奪公權・停止公權・監視・罰金・沒收とす。—しよぶん【附加刑處分】(名)【法】附加刑を科する處分。

ふか-さ【深】(名) 表面より下底に向って測りたる長さ。深き度合。

ふかし【蒸】(名) ふかすこと。又、ふかしたるもの。

—いも【蒸薯】(名) ふかしたるさつまいも。

—パン【蒸麪包】(名) ふかして製したる手輕の「パン」。

ふか-し（く、し、き、けれ）【深】(形、一) ㊀表より底まで長し。ふかさ多し。㊁外より内まで遠し。おくまりてあり。「片岡のふかき山路」。(幽)。㊂淺薄ならず。あさはかならず。「意味—」。㊃輕率ならず。かろ〴〵しからず。㊄尋常ならず。かりそめならず。㊅たけなはなり。ふけてあり。(闌)。

(ふ-か-しぎ【不可思議】(名) 思ひ議（ハカ）るべからざること。思想の外に超越してあること。(不思議)。

ぶ-がしら【武頭】(名) ものがしら。

ふか-す（さ、し、す、せ）【深】(他、さ四) 夜の深くなるまで起きてゐる。「夜を—」。

ふか-す（さ、し、す、せ）【蒸】(他、さ四) 蒸（ム）して熟せしむ。

(ふか-ぜい【附加税】(名) 他の租税に附加し一定の標準によりて徴收する租税、即ち市町村内にて地租又は營業税等に賦課する税の如きこれなり。

ふか-ぜり【深芹】(名) 根の深き芹。

++ふか-そぎ【深除】(名) 髮除（カミソギ）の別稱、髮の多きを殺ひて呼べる名目なりといふ。

ふか-だ【深田】(名) どろ深き田。

(ふか-ち【不可知】(名) 知識經驗の外に超越して認識すべからざること。

(ぶ-かっかう（ウ—コ）【不恰好】(名) 恰好のわろきこと。

++ふか-つみ【石龍芮】(名)【植】「たがらし」の一名。

〔ふか-づめ【深爪】(名) 皮の際まで爪を取ること。

ふか-で【深手】(名) おもき負傷。重傷。

(ふか-とく【不可得】(名)【佛】言説すべからざること。

(ふかにふ-せい（ウ—ニ）【不可入性】(名)【理】二個の物體は同時に同一の場所を占有し得ざること。

ふか-の【深野】(名) くさぶかきのはら。

(ふ-かのう【不可能】(名) ㊀できうべからざること。あたはざること。㊁思惟上に於て矛盾あること。

ふか-の-ひれ【鱶鰭】(名)「ふかうるめ」に同じ。

ふがひ-なし（く、し、き、けれ）【腑甲斐無】(形、二) いくぢなし。氣概なし。

(ふ-がふ（ウ—ゴ）【符合】(名) ㊀割符のあふこと。㊁割符を合はせたるやうに、ぴったりと合ふこと。

(ふ-がふ（ウ—ゴ）【附合】(名) ㊀つけあはすること。又、くっつくこと。㊁【法】所有者を異にする二個以上の物件が、密着して分離すべからざること。

++ふ-がふ（ウ—ゴ）【不合】(名) 家風にあはぬこと。

(ふ-がふかく（ウ—ゴ）【不合格】(名) 合格せざること。

(ふ-がふり（ウ—ゴ）【不合理】(名) 合理ならざること。理にあはぬこと。

(ふかぶん-さいむ【不可分債務】(名)【法】權利の目的物が分割して履行すべからざる債務、例へば、一個の時計とする債務の如し。

(ふかぶん-ぶつ【不可分物】(名)【法】當事者の意思又は法律の規定によりて、分割し得ざる性質なる權利の目的物。

〔ふかま【深間】(名) ㊀ふかき處。㊁男女の情交のいと親密なること。

ふか-み【深】(名) ㊀ふかきこと。又、ふかき度合。㊁ふかき處。㊂ふち。深淵。㊃物事の深くすゝみ入りて、容易に脱（ヌ）れ出でがたきこと。「—にはまる」。

ふかみ-ぐさ【深見草】(名)【植】(い)牡丹の異稱。(ろ)「やまたちばな」の異稱。

ふか-みどり【深綠】(名) こき綠。

ふか-む（め、む、むる、むれ、めよ）【深】(他、ま下二) ふかくす。

(ふ-かん【不堪】(名) 技藝に堪能ならざること。つたなきこと。

(ふかんせい-ゆ【不乾性油】(名)【化】空氣中に於て、酸素を吸收して乾涸せざる脂油。

++ふかん-でん【不堪田】(名) 損亡して耕作の出來ざる田。—のそう【不堪田奏】(名) 古昔、九月七日に行はれし公事、諸國の不堪田の租税を輕減せられたるもの。

ふき【蕗、欵冬】(名)（「ふふき」の約）【植】菊科に屬する草、匍匐せる地下莖を有す、春の初、蕗薹（フキノタウ）を抽出す、葉は大形にして心臟形をなし長き葉柄を有す、食用に供せらる。(茶)。

ふき【袘】(名) 衣服の裾の裏の布を表へ反して綠としたる所。

(ふ-き【附記】(名) つけくはへてかきそふること。

(ふ-き【不羈】(名) 束縛すべからざること。制御にしたがはざること。「獨立—」。

(ふ-き【不軌】(名) むほん。謀叛。大逆。

(ふ-き【不起】(名) 病氣なほらずして遂に死去すること。

(ふ-ぎ【不義】(名) ㊀義ならざること。義にたがへること。㊁みそかごと。姦通。密通。

(ぶ-き【武器】(名) 戰爭に用ふる器具の總稱。兵器。

(ぶ-ぎ【武技】(名) 武術、武藝。

(ぶ-ぎ【舞技】(名) まひのわざ。

(ぶ-ぎ【舞妓】(名) まひこ。まひひめ。

ふき-あがる（ら、り、る、れ）【吹上】(自、ら四) ㊀水高く涌（ワ）きあがる。(噴上)。㊁吹きて空へあがる。

ふき-あげ【吹上】(名) ㊀吹き上ぐる裝置の水。

（噴泉、噴水）。㊁通風の吹き上ぐる所。——ぎよゑん［吹上御苑］（名）東京の宮城内の御苑。

ふき-あ・る（れれるるるるれれよ）［吹荒］（自、下ら四）風はげしく吹く。

「ふき-あれる（自）前條の訛。

ふき-いた［葺板］（名）家根にふく板。やねいた。

（ふ-きう［不朽］（名）永く朽(ク)ちざること。永世つきざること。「名を—に傳ふ」。

（ふ-きう［腐朽］（名）くされくつること。

＋＋ふき-かたり［吹語］（名）差出で、自分の事を排譯すること。

＋＋ふき-がは（リ—ガ）［鞴］（名）「ふいがう」の原語。

ふき-か・ふ（ウ—カ）（はひふふへへ）［吹交］（自、か四）風あなたへ吹きこなたへ吹く。

ふき-かへ（エ—カ）［吹返］（名）金器をとかして更に鑄(イ)なほすこと。又、其鑄なほしたるもの。

ふき-かへ（エ—カ）［葺替］（名）屋根を葺きかふること。

ふき-かへし（エシ—ガ）［吹返］（名）兜(カブト)のまびさしの左右に、耳の如くに出で、後部へ反(ソ)りたるもの。

ふき-かへ・す（エス—カ）（さしすすせせ）［吹返］（自、さ四）風が逆に吹き來る。

ふき-かへ・す（エス—カ）（さしすすせせ）［吹返］（他、さ四）㊀風が逆に其ものを吹き來たす。㊁金器をとかしてつくりなほす。㊂もみかへす。

ふき-がや［葺萱］（名）家根をふくくさ。

ふき-ぐさ［葺草］（名）家根をふくくさ。

（ふ-きげん［不機嫌］（名）機嫌あしきこと。心のさえざること。

「ふき-さうぢ（ウ—リ）［拭掃除］（名）室内をふき又は掃除すること。

「ふき-さらし［吹曝］（名）何のおほひもなくまるて風にあたること。

ふき-し・く（かきくくけけ）［吹頻］（自、か四）風しきりに吹く。

ふき-そく［不規則］（名）規則立たぬこと。亂雜なること。——どうし［不規則動詞］（名）【文法】語尾の活用が變格なる動詞。變格。

ふき-だけ［吹竹］（名）ひふきだけ。

ふき-だ・す（さしすすせせ）［吹出］（自、さ四）㊀風生ず。㊁水涌(ワ)きあがる。㊂をかしさに堪(タ)へかねて笑ひ出だす。失笑す。（噴飯）。

ふき-だま［吹玉］（名）「ガラス」の玉。

（ふ-きつ［不吉］（名）吉事ならざること。凶事。

ふき-つ・く（けけくくくるくれけよ）［吹付］（他、か下二）風其方へ吹きおくる。

ふき-づくり［吹作］（名）（吹の字のつくりの義）漢字のつくりの名、欲・欸等の左方にある欠の字の稱。

「ふき-つける（他）「ふきつく」の訛。

「ぶきっちょ（名）ぶきよう。（東京地方の方言）。

ふき-で［吹出］（名）「ふきでもの」の略言。——もの［吹出物］（名）小さき瘤の如きできもの。又はれもの。ふきもの。

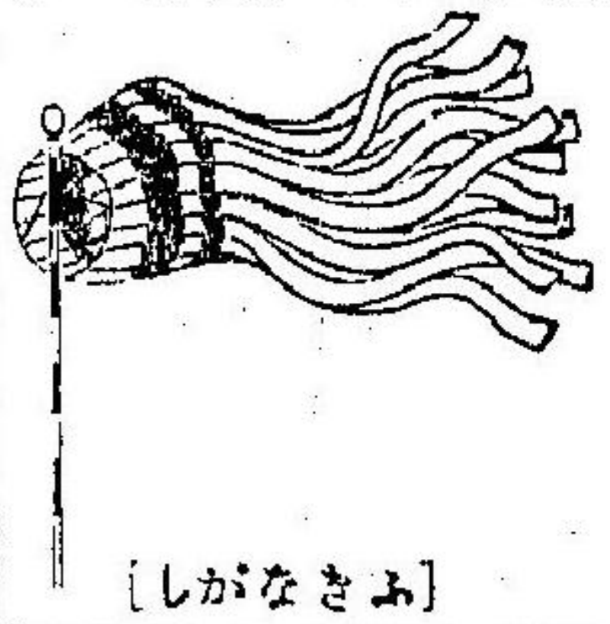
ふき-とほし（オシ—ト）［吹通］（名）風のふきつらぬくこと。又風の吹きつらぬく所。

ふき-どほし（オシ—ド）［吹通］（名）風の絶えず吹くこと。

ふき-とほ・す（オス—ト）（さしすすせせ）［吹通］（他、さ四）㊀こなたよりかなたへ風吹きつらぬく。㊁風絶えず吹く。

ふき-と・る（らりるるれれ）［拭取］（他、ら四）ふきてよごれを去る。

ふき-ながし［吹流］（名）



［ふきながし］

數條の長き布又は紙を輪に附け、長き竿の端末に揭(カカ)げて風になびかすもの。（號旒、號帶）。

ふき-ぬき［吹貫］（名）㊀風の吹き通す處。㊁たゞ一枚着たる着物。「—一枚」。

ふき-の-たう（ウ—ト）［蕗薹］（名）蕗の地下莖より春の初の頃に抽出する花軸。

ふき-はら・ふ（ラウ—ハ）（はひふふへへ）［吹拂］（他、は四）風が吹きてはらひのく。

ふき-は・る（れれるるるるれれよ）［吹晴］（自、ら下二）風生じて空晴る。

「ふき-はれる（自）前條の訛。

（ふ-きふ（ウ—キ）［普及］（名）あまねくゆきわたること。

（ふ-きふ（ウ—キ）［不急］（名）さしいそぐ要なきこと。

ふき-ぶり［吹降］（名）風烈(ハゲ)しく雨降ること。（風雨）。

＋＋ふき-ほ・す（さしすすせせ）［吹乾］（他、さ四）風吹きて乾かす。

ふき-ま・く（かきくくけけ）［吹捲］（他、か四）風吹きてまく。

ふき-まく・る（らりるるれれ）［吹捲］（他、ら四）風吹きてまきあぐ。

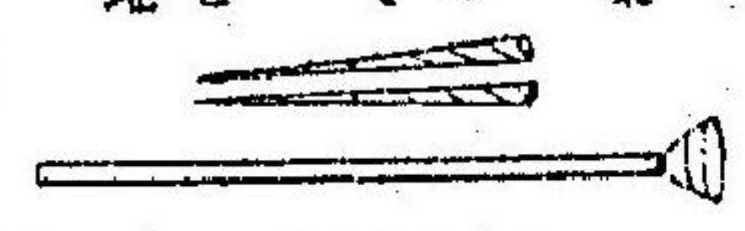
ふき-まよ・ふ（ヨウ—マ）（はひふふへへ）［吹迷］（自、は四）風の方向一定せずにはげしく吹く。

ふき-もの［吹物］（名）吹き鳴らす樂器、笛などの類。（吹器）。

ふき-や［吹矢］（名）木製の吹筒(フキヅツ)の中に紙を羽とせる矢を入れ、息を込めて吹き飛ばすもの。

（ふ-ぎやう（ヨウ—ギ）［俯仰］（名）下へ向くと上へ向くと。ふすとあふぐと。「—天地に愧ぢず」。

（ぶ-ぎやう（ヨウ—ギ）［奉行］（名）㊀上の命令を奉じて行ふこと。㊁昔時、武家にて、種々の職の長の稱。「勘定—」「寺社—」「町—」。



［ふきや］

（ふ-ぎやうぎ（ウ—ギヨ）［不行儀］（名）行儀のよろしからざること。

（ふ-ぎやうじやう（ジヨウ—ギヨウ）［不行狀］（名）㊀前條に同じ。㊁みもちのよろしからざること。

（ふ-ぎやうせき（ウ—ギヨ）［不行跡］（名）前條に同じ。

（ふ-きよ［芙蕖］【植】「はちす」に同じ。

（ふ-ぎよ［傅御］（名）もり。つきそひ。

（ぶ-ぎよ［撫馭］（名）あしらひあつかふこと。

（ふ-きよう［不興］（名）㊀興味の醒(サ)むること。㊁機嫌を損じたること。「君の—を蒙る」。

（ぶ-きよう［不器用］（名）わざのつたなきこと。器用ならざること。てぎはのよからぬこと。（劣手）。

（ぶ-きよく［舞曲］（名）まひと音樂と。

ふき-よ・す（せせすするすれせよ）［吹寄］（他、さ下二）吹きてよせあつむ。

ふき-よせ［吹寄］（名）㊀ふきよすること。㊁物を種々とり集むること。「——る（他）「ふきよす」の訛。

（ふ-ぎり［不義理］（名）㊀義理のかくること。㊁面目を失すること。

（ふ-きりつ［不規律］（名）規律なきこと。

（ふ-きりやう（ヨウ—リ）［不器量］（名）㊀才能なきこと。器量乏しきこと。㊁容貌の醜きこと。みめよからざること。

ふき-わ・く（けけくくくるくれけよ）［吹分］（他、か下二）㊀風吹きて分けちらす。㊁鑛物を鎔解して其中の含有物をそれぞれに分く。

ふき-わけ［吹分］（名）ふきわくること。「——る（他）「ふきわく」の訛。

ふき-ゐど［吹井戸］（名）水のふき出づる井戸。

（ふ-きん［附近］（名）きんじよ。ちかまはり。

（ふ-きん［布巾］（名）食器などを拭ふ布ぎれ。

（ふ-きん［斧斤］（名）をの。まさかり。

（ふ-きん［賦金］（名）わりあての金。

ふく［河豚］（名）【動】「ふぐ」に同じ。

（ふく［福］（名）さいはひ。さきはひ。

（ふく［輻］（名）車のや。

（ふく［複］（名）㊀あはせ。わたいれ。㊁かさなること。單一ならざること。

（ふく［副］（名）㊀そへ。すけ。㊁ひかへ。豫備。㊂うつし。謄本。

（ふく［服］（名）㊀きもの。衣服。㊁洋服。

（ふく［幅］（名）㊀よこはゞ。はゞ。㊁へり。ふち。㊂きれぢ。布帛。㊃ぢく。掛物。

＋＋ふ・く（かきくくけけ）［振］（他、か四）「ふる」に同じ。

ふ・く（かきくくけけ）［吹］（自、か四）㊀風動く。風生ず。㊁水噴出す。わきいづ。（噴）。

ふ・く（かきくくけけ）［吹］（他、か四）㊀風ものを動かす。風ものを飛ばす。㊁水を噴出す。ふきだす。㊂唇をつぼめて息を送り出だす。㊃出す息につれて物を送り出す。㊄息を込めて鳴らす「笛を—」。㊅内より外へあらはし出す。㊆めぐむ。きざす。㊇金屬を鎔(ト)かし分く。「銅を—」。㊈金屬を鑄(イ)て作る。「錢を—」。㊉自慢話をなす。出放題をいふ。

ふ・く（かきくくけけ）［葺］（他、か四）物もて屋根の上を蔽(オホ)ふ。

ふ・く（けけくくくるくれけよ）［拭］（他、か下二）「ぬぐふ」に同じ。

ふ・く（けけくくくるくれけよ）［深］（自、か下二）㊀深くなる。たけなはになる。（更）。㊁年をとる。齡長(タ)く。

ふ・く（けけくくくるくれけよ）［化］（自、か下二）㊀蒸(ム)されて熟す。㊁ふるびて形變ず。「米—」。（陳化）。㊂空氣にさらされて粉になる。「石灰—」。

——ふく［幅］（接尾）軸物を數ふるにいふ語。

——ふく［服］（接尾）㊀粉藥又は煎藥などの包を數ふるにいふ語。㊁煙草又は煎茶などを飲む回數にいふ語。

ふぐ［河豚］（名）【動】固顎類に屬する魚。海に產す。體は長くして稍や側扁なり、頭部廣く、皮膚に鱗なくして顎は嘴狀をなす。空氣を吸入して腹部を膨脹せしむる特性を有す。肉は美味にして食用に供せらるれど、肝臟又は卵巢に劇毒を含有するものあり。ふく。（鯸鮧）。

（ふ-ぐ［不虞］（名）おもひそめざる出來事。思ひはからざる事變。「—に備ふ」。

（ふ-ぐ［不具］（名）㊀そなはらぬこと。たらはぬこと。㊁身體の或部分がそろはぬもの。かたは。㊂（文意の盡きざる義）手紙の末尾に記す語。

（ぶく［服］（名）㊀喪服。㊁喪に籠(コ)もる間。「忌—」。

（ぶ-ぐ［武具］（名）㊀戰爭に用ふる器具の總稱。いくさだうぐ。（武器、兵器、兵仗）。㊁鎧兜の特稱。

（ふく-あん［腹案］（名）心中にかまへもつ考案。

（ふく-いく［復蛸］（名）【動】「にしどち」に同じ。

（ふく-いく［馥郁］（名、副）芳(カン)ばしき香の發するさまにいふ語。

（ふく-いん［福音］（名）吾人に光明幸福を與ふる訓誨。

（ふ-ぐう［不遇］（名）ふしあはせにて、相當の立身出世をなし得ざること。

（ふく-えき［服役］（名）㊀夫役に就くこと。㊁兵役につくこと。

（ふく-えふ（ウ—ヨ）［復葉］（名）【植】一の葉柄より多數の葉を出だす葉、羽狀のものと掌狀のものとあり。

（ふく-かう（コウ—フツ）［腹稿］（名）（唐の王勃の故事に出づ）演(ノ)べ又は詠ぜんとする事柄を腹中に豫めこしらへおくこと。

（ふく-かく［伏角］（名）【理】磁針が水平に對して傾く角。

(ふくがふ[複合](名) 二種以上のものが合して一體を成すこと。——たい[複合體](名) 二種以上のもの、合成したるもの。——どうし[複合動詞](名)【文法】二個の動詞又は名詞と動詞との複合してなりたる動詞、例へば醸(カ)と爲(ス)とより「かもす」、香(カ)と居(ヲ)とより「かをる」のなれるが如し。——めいし[複合名詞](名)【文法】二個以上の名詞の複合してなりたる名詞、例へば松風・春霞などの類。

(ふくがん[複眼](名)【動】昆蟲類などの有する眼にして、單眼の集合せるもの。

(ふくき[復歸](名) かへること。もどること。

(ぶくき[服忌](名) 服と忌と。「—令」。

(ふくきう[復舊](名) もとの如くになること。

(ふくきう[復仇](名) かたきをとること。あだをむくゆること。しかへしすること。

(ふくぎちやう[副議長](名) 議長を補佐し、議長事故あるときはこれが代理をなすもの。

(ふくくつせつ[複屈折](名)【理】光線が二つに屈折すること、方解石・水晶等の結晶は複屈折をなす。

(ふくぐわ[伏臥](名) ふすこと。ねること。

(ふくくわつ[復活](名) ㊀いきかへること。よみがへること。㊁一旦廢したるものをふたゝび用ゐること。「原案の—」。

(ふくくわん[副官](名) 長官に直屬して軍事上の庶務を掌る武官。

(ふくぐわん[伏願](名) ひたすらねがひもとむること。

廿ふくげ[離褷](名) そゝげ立ちたる柔き毛。

(ふくけい[副啓](名) 二伸、追啓。

(ふくけん[復權](名)【法】一旦喪失したる權利を回復すること、剝奪公權の附加刑に處せられたるもの、復權は、主刑を經(フ)へて五年を經過したる後、其情狀によりて將來の公權享有の能力を付與せらるゝをいふ、破產の宣告を受けて法律上の能力を停止せられたるもの、復權は、債務の辨濟を完了せること又は其所在の知れざる債權者には辨濟する準備資力あることを證明して破產裁判所に復權の申請をなし、其決定により將來の法律上の能力を回復するをいふ。

(ふくこ[復故](名) もとにかへすこと。又、もとへかへること。(復古)。

(ふくこう[復興](名) ふたゝびおこること。又、ふたゝびおこすこと。

(ふくこう[腹腔](名) 腹部の空所。

(ふくさ[袱紗](名) ㊀絹布の小さき風呂敷。㊁茶湯にて、茶器の塵を拂ひ又は茶碗を受くる方八寸許の絹切。

(ふくざい[服罪](名) 罪に服すること。罪に落つること。(伏罪)。

(ふくざい[伏在](名) ひそみてあること。

(ふくさいはうどうぶつ[複細胞動物](名)【動】單細胞動物以外の動物の總稱。

(ふくさう[福相](名) 幸福多き人相。福々しき人相。

(ふくさう[服裝](名) みなり。よそほひ。

(ふくざう[伏藏](名) ひそみかくるゝこと。又、かくれひそますこと。

ふくざう-なし[腹藏無]（くしき　けれ）(形、二)腹の底を打明けてつゝむところなし、心中にかくすところなし。

(ふくざうり[福草履](名) 縮にてあみたる草履、緒太くして白紙を卷けるもの。

ふくさばさみ[袱紗挾](名) 茶湯にて、袱紗のあつかひ方。

(ふくざつ[複雜](名) かさなりまじること。いりくむこと。

(ふくさんぶつ[副產物](名) 主たる生產物にそへて生產せらるゝもの、例へば農業者が、農作の傍ら牧畜をなし、其牧畜より生ずる貨物の如きをいふ。

(ふくし[副使](名) 正使に附きそふ使者。

(ふくし[副詞](名)【文法】動詞・形容詞又は他の副詞に添ひて、其意義を修飾する詞、時を表はすものの例へば「速く」・「遲く」の類と、所を表はすもの例へば「遙に」・「遠く」の類と、程度を表はすもの例へば「大に」・「全く」の類と、狀態を表はすもの例へば「白く」・「赤く」の類と、數を表はすもの例へば「一たび」・「ふたゝび」の類との數種あり。

(ふくし[福祉](名) さいはひ。

(ふくじ[服事](名) したがひつかふること。

廿ふぐし[掘刀](名)（掘串の義）土を掘る具、竹をもて作れるもの。(鏟)。

(ふくしう[復讎](名) ㊀かたきうち。あだうち。㊁しかへし。へんぱう。

(ふくしき[複式](名) 簿記にて、收支又は取引毎に、貸借を仕譯けて雙方を記入し、科目を別ちてそれぞれの口座を設くる方法のもの。單式の對。——ぼき[複式簿記](名) 複式によりて記入する簿記。

(ふくしつ[腹疾](名) 腹中のやまひ。

(ふくじつ[伏日](名) 三伏の日。

(ふくしふ[服習](名) したがひならふこと。

(ふくしふ[復習](名) くりかへしてならふこと。さらふこと。

廿ふくしもの[肴](名)（服し物の義）さかな。

(ふくしや[複寫](名) 寫したるものを更にうつすこと。

(ふくしや[福者](名) しあはせよき人。

(ふくしや[副車](名) そへぐるま。

(ふくしや[輻射](名) 車輻の如く一點より其周圍に一直線に射出すること。——しやうよう[輻射相稱](名)【動】棘皮動物の體の各部が其中軸の周圍に射出すること。——せん[輻射線](名)【理】一點より其周圍に一直線に射出する波の方向、即ち光線・熱線の如きこれなり。

(ふくしやう[福祥](名) さいはひ。めでたきこと。

(ふくしやう[副將](名) 主將の副たるもの。

(ふくしやうぐん[副將軍](名) 將軍の副たるもの。

(ふくしやうさうしやうくわ[輻狀相稱花](名)【植】花瓣の各個の狀形大小略ぼ同一にして中心より周圍に出づる花の稱、さくら・うめ等の花はこれに屬す。

(ふくじゆ[福壽](名) さいはひ。ことぶき。

(ふくじゆう[服從](名) 他の意思に從ひて自己の意思を強制せらるゝこと。つきしたがふこと。——くわんけい[服從關係](名) 權力者の意思に服從する關係。

(ふくじゆさう[福壽草](名)【植】毛茛科に屬する草、高さ二三寸、早春、舊根より叢生す、葉は人參に似て小さく、花は普通黃色なり、觀賞用として栽培せられ、又、藥用に供せらる。(元日草、側金盞花、賀正蘭)。

(ふくしよ[副署](名)【法】國務大臣が輔弼の責に任ずることを明かにするため、法律又は命令の御名御璽に副(ソ)へて署名すること。

(ふくしよ[副書](名) 原書のうつし。

(ふくしよく[復職](名) もとの職にかへること。

(ふくしよく[復飾](名) 僧侶の還俗すること。

(ふくしよく[副職](名) そへやく。

(ふくしよく[服飾](名) 衣服とかざりと。

(ふくしよくぶつ[副食物](名) 主たる食物にそへてくらふもの、即ち飯の菜の如きもの。

(ふくしん[覆審](名) ㊀一旦取調の終(ヲ)はりたるものをくりかへして取調ぶること。㊁【法】上訴を審理すること。

(ふくしん[腹心](名) ㊀はらとむねと。㊁心のおく底。㊂いとも大事の輔佐、「股肱—の臣」。——をしく[布腹心] 心中を打明かすにいふ。

(ふくしん[復申](名) ㊀返辭をのぶること。㊁「ふくめい」(復命)に同じ。

(ふくじん[福人](名) 有福なる人。

ふくじん-づけ[福神漬](名) 一種の食品、茄子・大根・なた豆などを細く切りて、味をつけたる醬油に漬けたるもの。

(ふくしん-はふゐん[覆審法院](名) 臺灣總督府法院の一、地方法院の裁判に對する上訴を審理する所、部長一人判官二人を以て部を組織す。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[伏](自、さ變) ㊀屈從す。したがふ。㊁かくる。ひそむ。㊂かゞむ。ふす。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[伏](他、さ變) ㊀屈從せしむ。㊁ひそます。かくす。㊂かゞます。ふさす。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[服](自、さ變) ㊀得心して從ふ。心から從ふ。㊁從事す。つく。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[服](他、さ變) ㊀つき從はしむ、從屬せしむ。㊁飮む。食ふ。「藥を—」。㊂衣を著く。㊃佩ぶ。持つ。㊄履行す。おこなふ。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[復](自、さ變) かへる。もどる。

ふく・す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[復](他、さ變) ㊀かへす。もどす。㊁重ねてなす。くりかへす。㊂補償す。つぐなふ。㊃報酬す。むくゆ。㊄返答す。こたふ。㊅上申す。まうす。

(ふくすう[複數](名) 數の二つ以上なること。

ふくすけ[福助](名) 脊低くして頭の大いなる人形。又、其形したる人。

(ふくすゐ[覆水](名) ㊀くつがへしたる水。㊁（周の呂尙の妻、呂尙が貧賤なりしとき一旦離緣を求めて去り、後其富貴となるに及びて、再び妻とせられんことを求めたるに、呂尙容(ユル)さずして盆の水を地にかへし、これを盆に盛りて故の如くにせば容さんといひし故事に出づ）夫婦の離別。——ぼんにかへらず[覆水不返盆]（前條㊁の故事に出づ）離別となりたる夫妻の再び夫妻となり得ざるにいふ。又、一旦言ひ又はなしたることはとりかへしのつかざるにいふ。

(ふくせい[服制](名) 衣服の規定。

(ふくせい[複製](名) 著作物を其著作權者以外の者が製作すること。「不許—」。

(ふくせい[複成](名) できてある上にできること。又、かさねてつくること。——くわざん[複成火山](名)【地】舊時の火山口に更に數個の噴火口を生じたる火山。

(ふくせいぶん[副成分](名) 主成分以外の成分。

(ふくせき[復籍](名) 婚姻又は緣組によりて他家に入りたるものが、離婚又は離緣によりて實家の戶籍にかへること。

(ふくせん[複線](名) 二つ以上設けたる線路。單線の對。

(ふくせん[伏線](名) ㊀後段にのべいふ事柄の

豫備として、前段に於て暗々裏にのべおくこと。㊁後の豫備として、前に暗々裏に設け置くこと。

(ふくせん〔復選〕(名) 再び當選すること。

(ふくそう〔輻湊〕(名) （輻の轂にあつまるが如き意）寄りあつまること。

(ふくそう〔伏奏〕(名) 天子の御前に伏して奏聞すること。

(ふくそうさい〔副總裁〕(名) 總裁を輔佐し、總裁の事故あるとき其代理をなすもの。

(ふくそくるゐ〔腹足類〕(名)【動】軟體動物の一。概ね螺旋狀をなす單一の介殼を有し、頭部と胴部との區別ありて、胴部の腹面は筋肉質の足をなす。多くは水棲なり。たにし・あはび等これに屬す。

(ふくそすう〔複素數〕(名)【數】a・bを實數とすれば、$a+\sqrt{-b}$なる形を有する數の稱。bを零とすれば實數aを得、aを零とすれば虛數$\sqrt{-b}$を得るなり。

(ふくだいり〔複代理〕(名)【法】代理人が自己の代理すべき事を更に他人に代理せしむること。——にん〔複代理人〕(名)【法】複代理の人。

(ふくだう（ドウ）〔複道〕(名) 道路の上にかけわたしたる往來の路。

卄ふくだけ〔離縱〕(名) むくげ。ふくげ。

(ふくたふ（トウ）〔復答〕(名) こたへ。へんたふ。

ふくだみ〔福多味〕(名) 一種の食品。とこぶしの肉と腸とを刻みて、少しく鹽を加へたるもの。ふくだめ。(鰒鱁)。

卄ふくだ・む（まみむむめめ）(自、ま四) そゝけだつ。けばだつ。けだつ。毳起す。(紕)。

卄ふくだ・む（めめむむるれよ）(他、ま下二) ふくだむやうにす。

ふくだめ〔福多味〕(名)「ふくだみ」に同じ。

(ふくちや〔福茶〕(名) 黑豆・昆布・梅干などを加へたる煎茶、節分又は大晦日などの緣起に飲むもの。

(ふくちう〔腹中〕(名) はらのうち。

(ふくつ〔不屈〕(名) 屈せざること。くじけざること。

(ふくつう〔腹痛〕(名) はらいたみ。

卄ふくつけ・し（くしききけれ）〔貪〕(形、一) 貪る心多し。慾張りてあり。

(ふくで〔福手〕(名) かきもち。(關東の方言)。

(ふくてつ〔覆轍〕(名) 車のくつがへりたるあと。轉じて以前の失敗のあと「―を踏むこと勿れ」。

(ふくでん〔福田〕(名)【佛】無上の功德をうくる物事の稱。三種ありて、三寶の德を敬(ウヤマ)ふを敬田といひ、君父の恩に報(ムク)ゆるを恩田といひ、貧者を憐(アハレ)むを悲田といふ。「―育兒院」。

(ふくと〔腹肚〕(名) はら。

(ふくとく〔福德〕(名) しあはせよきこと。さきはひあること。

(ふくとく〔伏匿〕(名) ひそみかくるゝこと。

(ふくどく〔復讀〕(名) 書物をさらへ讀むこと。

(ふくどく〔服毒〕(名) 毒藥を飲むこと。

(ふくにち〔復日〕(名) 曆にて、旅立に吉なりといふ日。

ふくのかみ〔福神〕(名) 幸福を授くるといふ神。

(ふくはい〔覆敗〕(名) くつがへりやぶるゝこと。

(ふくはい〔腹背〕(名) はらとせと。前面と背面と。「―皆な敵」。

(ふくはう（ホウ）〔復報〕(名) むくい。へんぽう。

(ふくばうぎよ（ボウギョ）〔副防禦〕(名) 敵の攻擊を妨碍するための構設物、即ち鹿砦・鐵條網の類。

(ふくはく〔復白〕(名) へんたふすること。こたへをなすこと。

(ふくひ〔複比〕(名)【數】二つ以上の比の前項の積を前項とし後項の積を後項としたる比の、もとの各比に對しての稱。

(ふくひ〔腹誹〕(名) 口には出さゞれど、心にはそしりてあること。

ふくびき〔福引〕(名) 餘興などに鬮引きなどして物を分かつこと。

(ふくひよう〔復氷〕(名)【理】壓力を加へて融解したる氷が、壓力を減ずるとき再び凍(コホ)ること。

(ふくひれい〔複比例〕(名)【數】比例にて、相等しとせられたる二つの比の一方若しくは雙方の複比なるもの。

(ふくぶ〔腹部〕(名) はらの部分。

(ぶぐぶぎやう（ギヤウ）〔武具奉行〕(名) 德川時代に、武具の事を掌りし職名。

ふくふく(名、副) 福のおほきさまにいふ語。

〜ぶくぶく(名、副) ㊀水中より泡の浮きあがるさまにいふ語。㊁物の水中に沈み入るさまにいふ語。㊂ぬかるみなどに物のはまりこむさまにいふ語。㊃ふくれあがりたるさまにいふ語。

〜ぷくぷく(名、副) 前條(四)に同じ。

卄ふくふくし〔肺〕(名)「はい」の古稱。

ふくぶく・し（しくしききけれ）〔福福〕(形、二) 福のあるが如き狀態にてあり。ゆたかなる容貌にてあり。

ふくぶくと〔福福〕(副) ふくぶくしく。ふくぶくしげに。

(ふくぶん〔福分〕(名) 好運なること。

(ふくぶん〔復文〕(名) 漢文の練習などに、漢文を假名まじり文になほしたるものを、更に漢文になほすこと。

(ふくぶん〔複文〕(名)【文法】其成分中に附屬句のある文。單文の對。

ふくべ〔瓠、匏〕(名)【植】夕顏の一種。實圓くして扁(タヒラ)し、中を空虛にして、炭取・煙草入又は酒器などに用ひ、肉はかんぺうとす

卄ふくべ〔河豚〕(名)【動】「ふぐ」の古稱。

(ふくへい〔伏兵〕(名) ふせぜい。

(ふくへき〔腹壁〕(名) 腹腔の側壁。

(ふくぼつ〔覆沒〕(名) 船などのくつがへりて沈むこと。

(ふくほん〔複本〕(名) 原本のうつし。(副本)。

(ふくぼんし〔覆盆子〕(名)【植】「とっくりいちご」に同じ。

(ふくほんゐ〔複本位〕(名) ㊀二種のものを本位となすこと。單本位の對。㊁【經】二種の貨幣を其國の貨幣の本位となすこと。我國は一時金銀貨複本位なりき。——せい〔複本位制〕(名)【經】貨幣上の制度が複本位なること。

(ふくまく〔腹膜〕(名) 腹腔中にありて、腹腔を充(ミ)たす消化器を支持する膜。——えん〔腹膜炎〕(名) 腹痛いとはげしき病氣。感冒・創傷又は胃腸の病等より發す。腹部腫れ腹壁張り、下痢若しくは便祕して熱度高し。

(ふくまでん〔伏魔殿〕(名) 魔の伏在する殿堂。轉じて、禍亂をひきおこすもの、あつまる處。

ふくま・る（らりるるれれ）〔含〕(自、ら四) 中につゝみもたる。ふゝまる。ほゝまる。

ふくみ〔含〕(名) ふくむこと。又、ふくむもの。

(ふくむ〔服務〕(名) 職務に服すること。

ふく・む（まみむむめめ）〔含〕(自、ま四) ㊀中にひそみて外にあらはれず。㊁花つぼむ。

ふく・む（まみむむめめ）〔含〕(他、ま四) ㊀口中に入れ持つ。㊁內部に包み持つ。㊂心中につゝみ持つ。㊃堪へ忍ぶ。「垢を―」。㊄其樣を帶ぶ。「怒りを―」。

ふく・む（めめむむるれよ）〔含〕(他、ま下二) ㊀含むやうにす。ふくましむ。㊁いひ聞かす。告げさとす。

(ふくむきりつ〔服務規律〕(名) 服務するものの守るべき規則。「官吏―」。

(ふくめい〔復命〕(名) 命を受けたる事ををへて、其始末を上申すること。かへりまうし。「―書」。

(ふくめいすう〔複名數〕(名)【數】「しよとうすう」(諸等數)に同じ。

ふくめだひ（ダイ）(名) 干鯛の肉をいと細くむしりたるもの。

(ふくめつ〔覆滅〕(名) くつがへりほろぶること。又、くつがへしほろぼすこと。

〜ふくめる(他)「ふくむ」の訛。

(ふくめん〔覆面〕(名) ㊀面をおほひつゝむこと。又其おほひつゝむに用ふるもの。㊁神佛の供物を扱ふとき、自己の息のかゝるを防ぐため、紙又は布をもて口と鼻とをおほふもの。——づきん〔覆面頭巾〕(名) 深く顏をおほひて目のみ現はす仕立の頭巾。

(ふくやく〔服藥〕(名) 藥を飲むこと。

(ふくよう〔服用〕(名) ㊀著物を身につくること。㊁藥を飲用すること。㊂身に行ふこと。

(ふくよう〔服膺〕(名) 心にとゞめ持つこと。忘れずによく守ること。

(ふくよう〔副用〕(名) 主たるものにそへて用ふること。——ご〔副用語〕(名)【文法】副詞又は接續詞などの如く他の語にそへて用ふる語。

卄ふくよか〔脹〕(名) ふくれてあること。ふくらか。

ふくよし〔福吉〕(名) ㊀しあはせよきこと。㊁癩病の異稱。ものよし。

卄ふくらいびやう（ヨウ）〔福來病〕(名) 頸部のはれふくるゝやうなる病。

ふくらか・す（さしすすせせ）〔脹〕(他、さ四) ふくるゝやうにす。ふくれしむ。

卄ふくらか〔脹〕(名) ふくよか。

ふくらすずめ〔脹雀〕(名) ㊀脹れたる子雀。㊁紋所の名。脹れたる子雀を正面より見たるさまを描(ヱガ)けるもの。㊂婦人の髮の結方。脹雀の紋所の狀をなす。十七八の少女の結(ユ)ふもの。

ふくらに〔脹煮〕(名) 一種の料理。あはびの肉をやはらかく煮たるもの。

ふくらはぎ〔脹脛〕(名) こむら。(腓)。

ふくらみ〔脹〕(名) ふくるゝこと。又、ふくれたるさま。

ふくら・む（まみむむめめ）〔脹〕(自、ま四) ふくれて太くなる。ふくる。

ふくら・む（めめむむるれよ）〔脹〕(他、ま下二) ふくらかす。

〜ふくらめる(他)「ふくらむ」の訛。

(ふくり〔複利〕(名)【數】預金又は貸借にて、每期の終りに其利息を元金に加へ置き、最後の元利總計より最初の元金を減じたる高。

卄ふぐり〔陰囊〕(名)「いんなう」に同じ。

〜ふくり(名、副) おだやかにふくれてあるさまにいふ語。

〜ぶくり〔木履〕(名) たかあしだ。(中國地方の方言)。

〜ぶくり(名、副)「ぶくぶく」に同じ。

〜ぷくり(名、副)「ぷくぷく」に同じ。

(ぶくりやう（リヨウ）〔茯苓〕(名)【植】菌類の一種。黑松の林中に生ず、拳の如き塊狀をなし、皮は黑くして皺(シワ)あり、藥用に供せらる。まつほど。——さう（ソウ）〔茯苓草〕(名)【植】薔薇科に屬する草、原野に自生す、葉は狹長にして對生し背面に白毛を具す、花は五瓣黃色にして春の頃開く。うらかぜぐさ、かはらさいこ。(翻白兒)。

(ふくりやうじ（リヨウ）〔副領事〕(名) 普通の領事の下位なる領事。

(ふくりん〔覆輪〕(名) 物のへりだけを金銀等にておほひたるもの。「金―の鞍」。

ふく・る（れれるるるれよ）〔脹〕(自、ら下二) ㊀內より外へ